まんじ

No.107

2008.2.1

まんじ第百七号　目次

木更津の月……千坂精一…4
空風（八）……太田精一…14
ダンスにはまった私　三……島津隆子…21
信じて託す　―米山梅吉の一生―……三戸岡道夫…29
化粧のルーツを訪ねて（一）……鈴木守…36
　第一話　お歯黒のルーツ探訪記（1）
短歌　行雲流水（十九）……石黒修身…47
わが愛誦歌（五）―戦後の歌壇逍遥―……曽根竣作…50
南溟の秋（詠草三十首）……曽根竣作…54
俳句　鷹の呟き（一）……大澤鷹雪…58
漢詩潮騒録（五十三）……鯨游海…62
桐の花影（その二）……忠内正之…67
薬草園「天城杏仁の里」（後）……堀内永代…73
司馬遼太郎の東北物語（二）（司馬雑感十四）……山田嘉久…88
狩谷棭斎賛歌（一）……新井宏…97
掌編小説四　論語ドリーム……亜木陽一…104
『ここは文京ではない』……大和禎人…106
青の漂流（三）……宅見勝弘…109
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（九）……松下魏三…116
還暦からの考古学（十二）……中山喬央…122
鏡（その4）……中山喬央…135
れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみ……松下壽男…145
ホメラレモセズ　クニモサレズ（十～十二）……松下壽男…146
編集後記……編集子…158
表紙……田寺怜葦

木更津の月

千坂精一

一

八時すぎに懇親会が終わり、中締めのあと世話役が恒例の『同期の桜』斉唱を促すと、待っていたとばかりに誰からともなく円陣をつくって肩を組み合った。

今回は唄えるかと思ったが、やはりだめだった。

唄いはじめると、六十年まえのあの光景が昨日のことのように瞼に浮んで、涙が滲み、声が掠れた。

出席者は内地勤務が多く、特攻基地を知らなかった。

（六十年経ってもまだ歴史になっていない）

久坂は、今年もまたそう思った。

散会のあと、それぞれにバーやカラオケへ誘い合っていたが、開会時刻ぎりぎりにホテルに着いたのでスーツのまま出席した久坂に誘いはなく、部屋割で同室になったというAが鍵を渡してくれながら、

「フロントへ預けてゆっくり温泉に入りなさいよ」

と言ってくれた。

久坂は、ボストンバックを持って部屋へ行き、浴衣に着替えて一階のフロントに鍵を預けると、あらためてエレベーターに乗って最上階の浴場へ行った。

温泉地での会合は風呂に入ってからはじめるのが順序だから、この時刻に入浴する客はまれで脱衣場にも浴室にも人影はなく、ひっそり静まりかえっていた。

総硝子の浴室から見下ろすと、温泉街だけネオンが蝟集していて、それが周辺の闇をいっそう濃くしていた。

真下を流れる早川が、闇のなかで光っていた。

（そうだ。今日は十三夜だった）

十三夜に曇りなしというが、今日は終日快晴だった。

浴槽に入ると、見上げる位置に月が昇っていた。

左肩のあたりがもう少しと思われる程度でほぼ満月に近いその月は、達成した満足感で吻と安堵しているような十五夜より、もうひと踏ん張りと意気込んでいる生気が判然り輪郭に顕われていて頼もしかった。

久坂は、誰もいない浴槽にとっぷり浸りながら十三夜の美しい月を飽くことなく凝視めつづけていた。

そうしているうちに、いちどだけ月を眺めながら極限状態に立たされた人の懊悩に思いを馳せたことがあったのを思い出した。

あれからもう五十年の歳月が経っていた。

二

終戦の年の一月、久坂は練習生教程を卒えて南九州基地の海軍航空隊に配属された。

前年十月、レイテ沖海戦で航空部隊による起死回生の体当たり攻撃も効を奏さず、空母四隻、戦艦三隻をはじめ多数の艦船と航空機を喪い、海軍の誇る連合艦隊は事実上壊滅状態になってしまっていた。

まもなく久坂たちの実戦訓練が開始されようとしている二月初旬、南九州に点在している航空隊を纏めて航空艦隊が新編制され、戦闘隊、攻撃隊、爆撃隊を問わず全飛行隊に体当たり攻撃が命ぜられた。

久坂の所属飛行隊は五百キロ爆弾を搭載する爆撃機で、地上六百メートルに急降下したところで爆弾を投下して反転する猛訓練に励んでいたのだが、せっかく磨いた伎倆も発揮する場がなくなってしまった。

ところが、江川飛行長は、

（体当たりするなんて愚の骨頂だ。機材も惜しいが、鍛え上げた搭乗員を喪うのはもっと惜しい）

と考えて、特別攻撃隊編成後も、

「とにかくこれまでどおり爆撃でやっつけて帰ってこい。体当たりなどはどうしてもだめなときだけだ」

そう隊員を励ましておいて、命中率を高めるために投下距離六百メートルを四百メートルまで縮める訓練を開始させて、叱咤激励した。

そのため久坂たち雛鳥は飛べず、先輩たちの世話や降爆訓練の伝令など雑用に振り廻されてしまった。

三月十七日に硫黄島守備隊が玉砕すると、敵機動部隊は南九州の特攻基地潰しに鉾先を向けてきた。

急遽まだ隊名もついていない久坂たちの飛行隊に命令が下り、翌朝第一波攻撃隊が慌ただしく出撃した。

そして、十九、二十日の両日第二波、第三波とつづいたが、江川飛行長の希いも虚しく全機還らなかった。

レイテ沖海戦のときは、敵機動部隊の虚を衝いた奇襲だったので成功したのだが、特別のはずが通常になってしまっては防備が固くつけ入る隙がなかった。

飛行隊再建のため、江川飛行長が残存機と搭乗員を率いて山陰地方にある基地に移動してしまったので、残された久坂たちは司令部付となり、偵察員の久坂は電鍵が叩けるのでとりあえず通信科に編入された。

その後まもなくグラマンの空襲が劇甚になり、久坂たちの基地も毎日執拗な攻撃を受けるようになった。故障機までも破壊されて、基地は空き家になった。

三

四月に沖縄防衛の〈菊水作戦〉が発令されると、関東や中部方面から特攻機が頻繁に飛来して燃料補給と爆弾を搭載すると、翌日沖縄目指して出撃した。

そんなある日の宵であった。

久坂は当直を終えて防空電信室を出ると、三日ぶりに顔を出した月に誘われて松林の中を彷徨した。

月光を受けた林の中は森閑としていて、修羅場と化した前線基地にいることをいっとき忘れさせてくれた。

どのくらい歩き廻っただろうか。

前方の草叢あたりで呻き声をきいて歩を止めた。

月明りをたよりに声のしたあたりを探るように見渡すと、一本の松の根方に黒いものが蹲っていた。

久坂は、恐る恐るその黒い塊に近づいて行った。

充分気をつけたつもりであったが、好奇心が注意力を疎かにしてしまったらしく、久坂が近づくと黒い塊はとつぜん呻き声を止めてすっくと立ち上がった。

黒い塊は人であった。呻き声は嗚咽だったのである。

「誰かッ」

月光を浴びて立つその人は、飛行服を着けていた。

久坂は挙手の礼をして所属隊と官氏名を申告した。

「少年兵か」

「そうであります」

「こんなところでなにをしていた」

「はい。月が美しかったので遠廻りしておりました」

その人は、仕種から下士官ではなさそうだった。

「風流な奴だな。俺は木更津空の黒木少尉だ」

やはり士官であったが兵学校出の精悍さはなかった。

「貴様、見たか」

「はい」

久坂は正直に答えた。修正を受けるのは覚悟した。

「出撃をまえにして女々しい奴だと思っただろう」

久坂は図星を指されて、こんどは返事に窮した。

「まあいい。こっちへきて坐れ」

そう言いながら黒木少尉は、その場に腰をおろした。

久坂は命ぜられるまま黒木少尉と肩を並べて坐った。

「俺は未練で泣いていたのではない。こんなかたちで死に追い遣られるのが口惜しくて堪らなかったのだ」

「――」

「貴様たちのように悠久の大義を骨の髄まで叩き込まれた少年には俺の言うことが理解できんだろうなあ」

黒木少尉は顔を上げて月を眺めた。

「仰言ることがよく判りません」

「よし、説明してやろう。俺もこのもやもやした思いを誰かにぶち撒けなければ腹の虫が治まらんのだ」

「うかがいます」

「よし、聴け」

日頃、分隊士や先任下士官から、

「貴様たちは、余計なことを考えずに、ただ命ぜられるまま果敢に行動をすればそれでいいのだ」

と言われ、理屈は一切封じられていたので、久坂は、黒木少尉がなにを話してくれるのか興味を持った。

「俺たち戦闘機乗りは一機でも多くの敵機を屠るために血反吐の出る猛訓練に堪えてきたんだ。そうだろう」

「そうであります」

「艦爆隊の彗星や九九式だってみんなそれぞれに目的をもって製造された飛行機なんだ。それをなんだ。空戦もせずにただ爆弾を抱えて敵艦船に体当たりしろだとよ。それじゃ俺たちはいったいなんのために死ぬ思いまでして今日まで訓練に堪えてきたんだ。このままじゃ俺たち搭乗員も零戦も浮ばれないじゃないか」

「――」

「俺たち搭乗員は自分が未熟で負けたのなら諦めるさ。だけどだ、伎倆を揮う機会も与えられずにただ体当たりして死ねと言われてもそんな惨めな死にかたはどうしてもできないんだ」

「――」

「このままじゃ俺は口惜しくて死に切れんよ」

天を仰いだ黒木少尉の頬に涙が伝っていた。久坂は、そんな黒木少尉を慰める適当な言葉はないものかと急いで探してみたが、思いつかなかった。

「雇い兵と言われている学徒出身の予備士官あたりがいくらほざいたところで豪いさんの決めた体当たり戦法が中止になるわけじゃないからもう止めよう。この期に及んで愚痴を言ってみてもはじまらん」

黒木少尉は言うだけ言ってすっきりしたようだった。

黒い雲が出てきて、折角の月を隠した。

「貴様たち少年兵にこれだけは言っておくが、いくら精神力で頑張ってみてもういけない。負けだよ」

「黒木少尉ッ」

「まあ聴けよ。現にこの基地へ飛んでくる飛行機を見てみろ。性能の悪い旧式物ばかりじゃないか。消耗がはげしくて生産が間に合わないんだ。それに奇襲であるべき特攻が常套手段になってしまったんじゃもう末期的症状だ。俺たちの世代は悪い時期に青年になったと悔やんでみたところで所詮は運命と諦めるより仕方がないが、貴様たちのような年端も行かない少年たちまでがこんな下らない戦争の犠牲になっちゃいけないよ。一時の感情に溺れないで生命を大事にするんだぞ」

久坂は返事に困った。黒木少尉の言葉は軍人としては女々しいが、一般人としてみれば情があった。

「ここはなんとしてでも生き延びて、やがてくるにちが

いない平和な時代を思う存分に生きるんだ。いいな。これは俺の遺言だぞ。判ったな」

久坂はいつか黒木少尉の言葉に首肯いていた。

「俺は文学部の学生だったが、平和な時代がきたら日本文学をやってみろよ。俺は大学で鷗外を研究していたんだが、学業なかばで放り出されたんで未練があるんだ。貴様にやる気があったら俺の遺志を継いでくれ」

せっかくの研究を無理矢理中断させられたのではどんなに心残りだったことだろう、と久坂は同情した。

「自分には、文学などとてもできそうにありません」

時節柄小説の類は一切読ませてもらえなかった。

「小説は人間が書かれているしロマンもあってたのしいぞ。数多く読めば直に馴れるし判るようにもなるさ。そうなれば自然に興味が湧いてくる。とにかく鷗外を全部読んでみろ。俺の最期に出会った貴様に鷗外の蔵書を全部やりたいところだが、生憎このあいだの空襲でみんな灰になってしまったらしい。どうせこっちも明日は木っ端微塵になる身だから別に悔いはないが……」

黒木少尉はそこで絶句して、唇を噛みしめた。

そのとき、とつぜん雨滴が落ちてきた。

黒木少尉が立ち上がったので、久坂も倣った。

黒木少尉は向き合ったまま久坂を見詰めていたが、

「月が貴様を引き合わせてくれた。死に際に胸の閊えを吐き出せてさっぱりしたよ。話を聴いてくれて有難う。俺は明朝〇五〇〇出撃するが貴様は断じて死ぬんじゃないぞ。いいな。それじゃこれで別れだ。さらば」

そう言って久坂の肩を敲くと、足早に去って行った。

久坂は雨に打たれながらその場に立ち尽くしていた。

四

翌朝、久坂は四時に目覚めた。

昨夜はあれから宿舎に帰って直ぐに床に就いたのだが、感情が昂ぶっていていつまでも眠れなかった。それでも明け方近くになって少しのあいだ微睡んだらしく、魘された自分の声で眼が覚めたのである。

昨夜からの雨音はまだつづいていた。

久坂は、今日の出撃は中止だと思ったがそれでも気になって念のため木更津空の仮宿舎へ行ってみた。

宿舎は深閑としていて、人の動く気配はなかった。

久坂は安心して宿舎に戻り、短時間熟睡した。

雨は午後になって上がり、薄陽が射してきた。

久坂は午後非番だったので、黒木少尉を訪ねてみた。

下士官宿舎には搭乗員たちがいたが、隣の士官宿舎はひっそりしていたので、扉を開けて内部を覗くと黒木少尉が独り窓際に立って陽射しを眺めていた。

久坂に気づいた黒木少尉が、笑って手招きした。

久坂は、黒木少尉に近づいて行った。

「よくきたな。まあ坐れ」

久坂は、黒木少尉と向かい合って坐った。

「雨でまた一日生き延びたよ。やっと覚悟を決めたのに出撃中止だ。冥土への旅立ちが延びてまだ生きている有難さよりも、明日まで凝と待つ身のほうが辛いよ。いま頃は沖縄の海深くに沈んでいるはずだと思うと堪らなくて、それでみんな酒を飲んで誤魔化しているんだ」

久坂は、隊員たちの心中を察して胸が詰まった。

「みんな隣りだから、貴様と二人で別盃を交わそう」

久坂は盃を受け取りいっきに飲んだ。涙が溢れてきた。

「泣くな。貴様も帝国海軍軍人じゃないか」

黒木少尉は、穏やかな眼をしていた。

「俺はいま、木更津でのことを思い出していたんだ」

黒木少尉は、瞼に浮べるようにして話しはじめた。

「木更津に太田山という丘陵があってな。日本武尊が妃の弟橘姫を偲んだところだという伝説があるんだが、その太田山に登ると木更津の町が一望できるんだ。木更津港の彼方に東京湾の海が眩しく光っていてな、晴れた日には富士山も見える。平和になったら貴様もいちど行ってみろよ。いいところだぞ。こっちへくるときは恰度桜が満開でな。一枝折って持ってきたんだが見事な桜だった。貴様にも見せてやりたかったな」

久坂は、そんな黒木少尉に好感を持った。

「俺は太田山が好きだった。日本武尊が東夷征討の途次に相模の海で暴風雨に遭遇したとき、海神の怒りを鎮めるために自分の身替りになって海中に身を投じた弟橘姫を偲んだという伝説にはいかにも相応しいところなんだ。俺はその伝説を信じて夜になると太田山へ出掛けて行き、月夜の山道を独りでよく歩いたよ」

「自分も機会があったらきっと訪ねてみます」

そのとき、隣の宿舎から哀調の唄声が漏れてきた。

沖の鷗と飛行機乗りは
どこで散るやらネ果てるやら
ダンチョネ

俺が死ぬときゃハンカチ振って
友よあの娘よネさようなら
ダンチョネ

手拍子も合いの手も入らなかった。

唄が終わると、程なく一人の士官が帰ってきた。

久坂は挙手の礼をして所属隊と官氏名を申告した。

「俺の最期に出会った友達だ。弟のような可愛い奴だ」

「黒木、別れの歌をやっておこう。こいよ。貴様も入れ」

久坂は、黒木少尉に促されてあとについて行った。

「さあ、別れの儀式をはじめよう」

誘いにきた士官がそう言うと、円陣をつくった。

久坂も黒木少尉と並んでその輪に加わった。互いに肩を組み合うと、躰で拍子をとって唄った。

貴様と俺とは同期の桜
おなじ航空隊の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟
みごと散りましょ国のため

貴様と俺とは同期の桜
おなじ航空隊の庭に咲く
血肉分けたる仲ではないが
なぜか気が合うて別れられぬ

貴様と俺とは同期の桜
離れ離れに散ろうとも
花の都の靖国神社
春の梢に咲いて会おう

みんな泣きながら唄った。
久坂も涙が留め処なく流れ、声が掠れた。
紅白の吹き流しが靡く戦闘指揮所のまえに整列した木更津空の零戦隊員たちは、司令の訓示を受けたあと、隊長の指示を聴き、別れの盃を交わし終えると、

「かかれッ」

の号令とともに、一斉に搭乗機目掛けて早駆けした。
久坂は整備員たちと一緒に黒木機の側に立って迎えた。

黒木少尉が早駆けでみるみる近づいてきた。

「おう貴様か。よくきてくれたな」

「ご成功をお祈りいたします」

「うん」

そう言うと、黒木少尉は手を差し出した。
久坂は、その手を確り握って訣れの挨拶をした。

「見送ってくれて嬉しいよ。元気でな。さらばだ」

黒木少尉は慌ただしく翼に上がり操縦席に入った。
プロペラが廻り出すと、久坂は機上の黒木少尉に拳手の礼をしておいてから、滑走路へ向かって急いだ。
一機、また一機と零戦の特攻機は飛び立って行った。
黒木機が翼を震わせながら滑走路に入ってきた。
いったん停止してエンジンを全開にすると、未練を振り払うようにして轟音とともに全速力で発進した。
久坂は黒木機を凝視して懸命に略帽を振りつづけた。
飛び立った黒木機は、白い雲の彼方に消えて行った。

五

それから四箇月後の八月十五日に戦争は終わった。
久坂は、二十二日の司令の解隊宣言で終戦を知った。
いったん家族の疎開先へ復員した久坂は、翌年一月中旬に焼失を免れた東京郊外のわが家へ戻った。
十五年戦争のなかで育った久坂たちを、国家ぐるみの精神統制で国家神道と皇国史観を洗脳し、純粋培養して筋金入りの軍国少年に造り上げておきながら、終戦と同時に国家は骨の髄まで叩き込んだその価値観を全面的に否定して、厄介者扱いして抛り出した。
久坂は国家や教育指導者たちに不信感を抱き、それが嵩じて誰も信用できない人間不信に陥っていった。
二月中旬に通貨改正で新円が発行されてそれまでの預貯金はすべて封鎖されてしまったので無一文同然になり、あらたに収入を得なくてはならなくなった。
久坂は、さいわい偶然知り合った先輩搭乗員の闇物資運搬手伝いをしたり、中央競馬出馬表の筆耕などもあって、物価騰貴の世をどうやら食い繋いでいった。
昭和二十五年に勃発した朝鮮戦争の軍需景気で経済が立ち直り、世の中がようやく落ち着きをとりもどしたころには、久坂もすでに社会人になっていた。
映画や麻雀にも飽きた久坂は小説を読んだ。
野間宏の『真空地帯』や大岡昇平の『俘虜記』などの戦記文学を読むかたわら、太宰治や三島由紀夫にも手を伸ばし、読み了えると神田へ行って新刊本を漁った。
神保町界隈の古書店で鷗外、露伴、藤村なども購入してみたのだが、現代作家に馴染んだ久坂にはたとえ文豪であろうとも古典作品は取っ付きにくかった。
小説は面白ければいいので、学術的に研究する人は余程優れた頭脳の持主なのだろう、と思いをめぐらせているとき、ふと黒木少尉のことが思い出された。
(今年は十三回忌になるな)
そう確認すると、黒木少尉が最期のときに話してくれた木更津の太田山に行ってみようと思いついた。
手帳のカレンダーで確かめると、生きて還れぬ出撃を見送った日が今年は恰度日曜日になっていた。
休日には新宿から内房線直通の快速があった。

六

その頃の木更津はまだ町のたたずまいであった。
例年より早い開花の桜はすでに散りはじめていた。
久坂は、夕刻までの時間潰しに町中を見物することにして、昼食を摂った蕎麦屋できいた見物順序にしたがい、まず駅近くの光明寺からまわりはじめた。
ここには歌舞伎狂言の『与話情浮名横櫛』で有名になった与三郎の墓があり、相棒の蝙蝠安こと山口滝蔵の墓は近くの撰択寺にあった。
そのあと、狸ばやしで知られた証誠寺へ廻り、童謡が

野口雨情作詞、中山晋平作曲であることを知った。
矢那川沿いに海岸へ出たところに、南町の紺屋島屋の型付職人与三郎が網主源次の愛妾お富と出会い、逢瀬を重ねるようになったという見染(みそめ)の松があった。
木更津港へでた久坂は、対岸に航空自衛隊基地の滑走路が眼に入った途端思わずその場に佇立した。
黒木少尉が飛び立った旧海軍木更津基地である。
今日は休日なのでひっそり静まりかえっていた。
凝っと見詰めつづける久坂の眼に、いつか幻覚が現れ、つぎつぎに出撃して行く零戦の勇姿が浮んだ。
どのくらい立ち尽くしていただろう。気がつくと東京湾を隔てた三浦半島の山脈に西陽がかかっていた。
久坂は踵を返すと、目的の太田山へ向かった。
日本武尊のころは太田山の下まで海だったというから、いま久坂は海の底を歩いていることになる。
駅近くの酒店で酒を一本買い、口金をコルク栓に替えてもらうと、念のため太田山への近道を尋ねた。
店主は、これから花見かと訝しんだようだったが、訊きもせず黙って道順をおしえてくれた。
一升壜を抱えて太田山への道を歩いて行くと、花見を終えて上機嫌の酔客たちが三々五々下ってきた。
麓の薄ら寒さも山頂に着いたときは汗ばんでいた。
眼下の町に灯がともると、山頂に人影はなくなった。
昏くなると、月が皓々と照った。木更津の月である。
黒木少尉は出撃前夜山道を登ってここに立ち、あの月を眺めながらなにを考えなにを思ったであろうか。
人は誰も誕生と終焉のときを自覚してはいない。
『論語』でも「死生命あり、富貴天に在り」といっている。
人の生き死には天命で決まっており、人力ではどうすることもできない、というのだ。
死期が判らぬからあっけらかんと過ごせるのであって、頭脳も五体も至極満足でいるところへ、とつぜん、「明日死ね」
と宣告されたらそれまで平常心でいられるだろうか。
〈特攻〉は天命ではない。人為的な仕業なのである。
黒木少尉は、ここからあの月を見て、
(生きていたい)
と懊悩したであろう。
人の生死が天命ならだいたい数十年の寿命は与えられるから、そのあいだにやりたいことは充分できる。
また与えられた寿命が短かくても、体力が衰えれば自覚するから、それなりの予定は立てられる。
だがとつぜん下命によって天命を作為的に縮められたら、人生設計が狂ってしまい無念で諦めきれない。
たとえ強制的に徴集されたとはいえ、軍人になったからには命懸けの戦闘要員にかわりはない。
ましてや飛行機乗りは艦船勤務より出撃回数が圧倒的に多いし、死ぬまで出撃を繰り返すことになる。
だが、それでも死はあらかじめ決まってはいない。
それが特攻となると予告によって死を自覚させられる。
つまり出撃日が命日で、こんな酷い仕打ちはない。
黒木少尉にかぎらず、特攻出撃した人たちはみな戸惑い気が狂うほど悩んだことだろう、と察せられる。
黒木少尉はここでどんなにか懊悩したに違いないが、果たして諦めの境地にまでいたったであろうか。
それは、黒木少尉を見詰めていた月しか知らない。
木更津から南九州基地へ飛来してその日のうちに整備、燃料補給、爆弾搭載を了えて待機したが、夜半から降り出した雨が止まず翌朝の出撃は中止になった。
そして、雨つづきで中止また中止が繰り返された。
葛藤のすえ漸く諦めの境地に達したのにはぐらかされ、苦悩を繰り返してふたたび覚悟を決め直したのにまたはぐらかされる、という残酷な三日間を堪え抜いた黒木少尉の強靭な精神力に、久坂は深く感銘した。
無人の山頂に風が吹きはじめて肌寒くなってきた。
久坂は、花見客が坐った縁台の上に供えておいた一升壜のコルク栓を抜くと、あたりに酒を撒いて黒木少尉鎮魂の儀式を執り行った。
そのあと久坂は桜の枝を手折り、花片(はなびら)を一枚ずつ撒きながら黒木少尉が歩いた月夜の太田山道を下った。
黒木少尉の浴びた花吹雪が、久坂にも降りかかった。
(了)

空風（からっかぜ）（八）

太田精一

言っても過言ではない。

本田宗一郎が本田技研工業株式会社を設立し、自転車に小型エンジンを取り付けた「ポンポン」と言われるバイクモーターを製造した。

すべてはそこから始まったのである。

その後、鈴木式織機株式会社がパワーフリー号、日本楽器製造株式会社が二サイクルエンジンの「赤トンボ」を発売した。日本楽器は、すぐにオートバイ部門を切り離し、ヤマハ発動機株式会社を設立して本格的なオートバイ生産に乗り出した。浜松には、多い時には五十社以上のバイクメーカーが乱立していたのだ。だが、昭和三四年の暮れには、数社の有力メーカーに淘汰されていた。

その頃、鈴木式織機株式会社は、鈴木自動車工業株式会社と社名を改め、軽自動車スズライトを発売、浜松市中でよく見かけるようになっていた。

伸一は、目まぐるしく変貌する町の様子に戸惑いながら、鍛冶町通りの商店街のアーケードの下を通って、鴨江観音通りに入った。大工町は、その通りの両脇にあり、商店が立ち並んでいて、活気に溢れていた。

だが、恋沢橋に向かう狭い道の家並みは、それほど変わっていない。大通りから少し入っただけで、ひっそりとしている。

伸一は家の玄関の引戸に手をかけた。戸は、ガタガタと音を立ててなかなか開かない。正月の小さな松飾りがポツンと軒下にかかっている。力任せに戸を引いて中に入り、破れた障子を開けた。すると擦り切れた畳が波を打っているのが目に留まった。構わず部屋の中に入った。歩くたびに床がギシギシと音をたて今にも抜けそうである。

家族は、隣の間に居た。小さな火鉢を囲んで烏賊を炙っている。

「ただいま」

伸一は、つとめて明るく声をかけた。

「お帰り。明日は大晦日だね。汽車は混んでいたかい。寒かっただろう。まあ火鉢にでもあたってスルメでも食べたらどう」

さきは、久し振りで見る息子の顔を眩しげに見上げた。

「浜松の街も少し見ない間にずいぶん変わったね。商店街も綺麗になった。でもこの近所はそれほど変わっていないね」

（三十四）

暮れも迫った。伸一は、昭和三五年の正月を故郷で迎えるために帰省した。

浜松は、岩戸景気に沸いていた。昭和二八年に施行された町村合併促進法により笠井町、中野町村、三方原村、都田村、入野村、など近隣市町村が合併され、市域は戦前の四倍にも広がっている。

また、人口も戦前のピーク時十八万人をはるかに上回る三十万都市になっていた。

浜松城址には、コンクリート建てではあったが、天守閣が建ち、周辺地域は公園として整備されている。

ＮＨＫの浜松放送局も開局した。カラーテレビの本放送が始まり一般家庭にテレビが普及し始めていた。

街は、乗用車こそまだ少ないが、バス、オート三輪、オートバイで溢れている。

戦後のオートバイ工業の発達は、浜松から始まったと

「そうだな、鴨江通りから少し入っただけで町の様子が違う。ところで、我が家もいよいよ引っ越すことにした。引越し先は船越町だ。馬込川の富士見橋の手前になる。来年は、長年住んだ大工町ともお別れだ」

吉雄は、火鉢に目を落とし呟いた。

「今度借りる家はどの位の広さがあるの」

「六畳と四畳半に台所が付いた長屋だ。雨露がやっと凌げる程度の家で、家賃は三千円」

吉雄の節くれ立った手が震えている。スルメを噛む顎の回りの不精髭は、白いものが目立ち、丸めた背中にはプレーボーイで鳴らしたかつての面影が消えていた。

「お父さん。家がこんな状態なのに、ぼくがまだ大学を続ける気かと思っているんじゃないの。でも、卒業したら仕送りはきちっとするからそれまで待ってよ。今年はアルバイトで予想以上の収入があったから、三千円ほどの余裕が出来た。家賃の足しにでもして」

「すまんなあ。カッティングの針も、もう終わりだ。東京の問屋への支払いが滞ってしまったので材料も手に入らない。それに注文もほとんどない。完全に倒産だな。俺もこれから何処かに働きに出るつもりだ。だが、五十近くなると、まともに使ってくれるところなんぞありゃしない。まあ、せいぜい日雇い仕事をする位だ」

吉雄は、自嘲気味に言った。

強司は、浜松商業高等学校を中退し新聞配達をしなが

ら鍛冶屋で働き家計を助けていた。だが、十六歳の彼には、家族を養って行けるだけの力はなかった。

「俺は、自衛隊に入ることにした。兄貴は、反対していたけれど、三食付きで月給まで貰えるのだからこんないい所はない」

以前から強司は、自衛隊に入ると言って、兄の伸一と対立していた。伸一は、終戦間際、強司の手を引いて空襲で炎上する浜松の街の中を逃げ回っていたことがトラウマとなっている。そのため日本が再軍備することに対し、生理的な嫌悪感を持っていた。

「三食付いて月給を貰えるのであれば、住込み店員だって同じだろう」

「住込み店員になっても将来が保障されているわけではない。製氷店や新聞店で働いてみてそう思った」

「自衛隊は、学校を出ていなければ昇進は難しい。それし、俺は自衛隊そのものの存在を認めたくないのだ」

「兄貴がどう考えようと自衛隊はなくならないと思う。戦争がすぐあるわけではないが、日本は、将来軍備が必要になる。また、軍事以外でも治安の維持とか災害救助とか社会に役立つ時があるだろう。俺が自衛隊を志願するのはそれだけじゃない。自衛隊に入れば大型トラックの運転や自動車の整備などの技能を身につけることが出来るからだ。退職してもその技能を生かして民間の会社に就職出来るからな」

「あくまでも反対だが、今の俺には、お前を学校に行かせる金がない。お前の人生だ。お前が自分でそう決めたのなら仕方がない」

伸一は、家の中を見回した。六畳と四畳半の家に親子五人がひしめき合って暮らすのは、無理かもしれないと思った。それだけではない。強司は、口には出さなかったが、吉雄の女性問題から経済的に困窮してしまった木本家の家庭が、崩壊寸前にまで追い込まれていることを敏感に感じ取っていたのである。

伸一は、強司が父と母の諍いを見るのに耐えられず、自衛隊に逃避するのだと思った。

木本家には、まだ食べ盛りの恒三と美子がいる。恒三は中学二年生、美子は小学六年生である。

さきは、佐藤町の石塚商事の経営する織布工場で働き始めた。長年の過労によって免疫力が衰え、膠原病に罹ってしまった。が、仕事を休むことは出来なかった。

「恒三はどうするんだ。来年は、中学三年生になるだろう。進学か就職か決めなければならないな」

伸一は、恒三に働きながらでも進学の道を選んで欲しかった。

「ぼくは就職するよ。家もこんな事情だし、勉強もそんな好きじゃないから。少しでも口減らしできれば家も助かるだろう」

そう言って炙ったイカを火鉢から取り出し細かく裂いて家族全員に配った。

空風が、玄関の戸や障子の隙間から流れ込んで来る。

伸一は家の中を改めて眺め渡した。半ば朽ちかけてはいたが小、中、高と戦後の苦しい時期に少年時代を過ごした大工町の家は忘れ難い思い出に満ちている。柱の傷、剥がれ落ちた壁、雨漏りの跡が残る天井、破れた障子、その一つ一つが家族の生活の苦闘の跡を物語っていた。

正月が過ぎ、いよいよ仙台に戻る日が来た。家を出て玄関の前に立った。夕陽が家に当たり、長い影を落としている。

(もはやこの町で暮らすことはないであろう)

伸一は、戦中、戦後と二十年間過ごした想い出の数々が刻み込まれた町に別れを告げるのであった。

(二十五)

稲が整然と並び、緑の葉が日増しに濃くなって行く季節を迎えた。

仙台近郊の上田子の集落の周りはまるで緑の絨毯を敷き詰めたようである。爽やかな風が七北川の川面に吹き、さざ波を立てている。その波は、初夏の日を浴び、キラキラと光っていた。

伸一は、大学での授業がある時と塩釜へ家庭教師のアルバイトに出る時以外は、上田子の下宿で勉強していた。

紫陽花の咲く六月のことである。

日米新安全保障条約の承認を巡って衆議院が大混乱し、全学連のデモ隊が国会に乱入。東大の女子学生が、死亡するという大事件が起きた。

この事件に触発されて首都の東京だけでなく、全国各地で学生デモが繰り広げられた。それに呼応するかのように、民主主義を守る全国学者研究者の会が結成され、各地で抗議運動が始まった。

東北大学でも、学生集会が頻繁に開かれ、安保反対の大規模なデモが組織された。不慮の死を遂げた樺美智子さんの兄が東北大学理学部に在籍していたことから、普段政治に無関心な一般学生も安保問題への関心を高め、デモ参加者は、膨れ上がった。

妹の遺影を胸にかけ、デモ隊の先頭に立って行進する兄の姿は、痛々しく市民の共感を呼んでいた。

伸一もデモに加わった。

社会主義社会の実現こそが、社会的不平等をなくす道だと考えていた伸一は、安保反対のデモによって進歩的勢力の結集を促し、政治体制の社会主義化を実現出来るかもしれないと思っていたのである。

だが、日本の資本主義は、大きな政治的試練を受けたにもかかわらず揺らぐことはなかった。

伸一は、デモ隊の中でシュプレヒコールを叫びながらただ傍観している大衆を見て、無力感に襲われた。

（高度経済成長によって中間層が増大している。この人たちは、心情的には学生や労働者の率いる安保反対闘争に賛同しても、積極的に行動を起こすことはないのだ）

では、どうしたら社会を変えることが出来るのか、伸一は、デモへの参加の後、これからの自分の進むべき道と併せて思い悩んでいた。

社会の底辺で生きる人々の中に活動家として身を投じ自分の信ずる正義を貫くか、ジャーナリストとなってペンにより社会の矛盾と闘うか、あるいは、大学院に進み、学者となって世論の形成に寄与するか。選択を迫られていたのである。

将来についてのヴィジョンを描けないまま、大学生活最後の夏休みに入った。伸一は、大学院で社会学の勉強を続けたいと考え、新開教授に相談した。

「大学院に進み、社会学の研究者になることを考えていますが、今の実力で進学が可能でしょうか」

「君が希望すれば受け入れは可能だ。卒業論文が良く書けているかどうかが重要となるがね」

新開教授は、明言を避けた。が、伸一には大学院への道が開けたように思えた。

その時、一日も早い卒業を願って送金を期待している両親や弟妹の顔が浮かんで来た。これ以上家計を助けることなく自分の幸せだけを考えていることへの自責の念に駆られたのである。

（長男でありながら家族のことをかえりみずわがままを通してきた。強司も浜商を中退して働いているのだから少しでも家計の役に立たなくてはいけない）

伸一は大学院への進学を断念し、ジャーナリストへの道を選択した。だが、その道は狭く、通り抜けることは出来なかった。

昭和三十五年は、消費ブーム、レジャーブームが起こり、春から夏にかけては岩戸景気の残照が、まだ残っていた。そのため、製造業、金融業、流通業への就職は、比較的容易であった。だが、新聞、テレビなどのマスコミ関係は人気が高く、就職は困難を極めていたのだ。

十月末、多くの学生はすでに就職が決まっていた。就職案内板には、有名企業の募集案内が次第に減っている。

（何としても収入を得て家族への送金をしなければならない。製造業でも、流通業でも入れる所を探そう）

伸一は、名の通った大企業でなくとも働き甲斐のありそうな企業を探した。すると、名古屋の中堅鉄鋼会社、中部鋼鈑株式会社の募集案内が目に付いた。ホンダ、ソニーのような新興企業で成長率も高く将来性が見込める。何よりも若い社員の活力を期待しているところが魅力的であった。

受験の二日後に採用通知を受け取った。試験の面接に当たった幹部の経営感覚と人事担当係長の富塚氏の誠意

ある対応に感激した伸一は、翌年四月の入社を心から待ち望むようになっていたのである。

就職も決まり、伸一は、大学四年の集大成ともいうべき卒業論文の作成に取りかかった。一月の提出期限に間に合わせなければならない。

テーマは、「現代都市下層青年における価値意識の諸問題」とした。

岩戸景気にもやや陰りが見え、高度成長の反動が出始めた晩秋の頃である。

（貧困な生活にあえいでいる都市下層社会の青年が、自己の存在をどのように考え、どんな政治意識を持っているのか。それが果たして組織的な社会改革のエネルギーになり得るのか）

こうした問題意識にもとづいて伸一は、論文作成の作業に取り掛かったのだ。

（三十六）

霜が下りた。冷たい風が枯枝に残った最後の葉を振り落している。

上田子の集落も冬支度を始めた。農家の薪や炭がうず高く積まれている。水のない田圃には、稲の切り株だけが木枯しにじっと耐えているようであった。

近藤家には、社会学の学友が他にも下宿していた。群馬県出身の前島恒夫はその一人である。伸一が社会学の勉強会に出席し、知り合って以来、親友となった。一年前から伸一と同じ近藤家に下宿している。

テレビ朝日への就職が決まった前島は、ゆとりのある時間を過ごしていた。実家は、利根川の畔にあり、八百年も続いた真言宗の古刹である。だが、寺は、小さく檀家の数も少ない。住職と教員を兼ねた厳格な父親に育てられたにしては、世俗的で、豊かな感性の持ち主である。彼は、卒論のテーマの設定にあれこれ迷っていた。だが、テーマを「土地所有規模による階層別農民意識論」に決めるとすぐに、書きながらデータを整理し、骨子を組み立て、優れた表現力で、論文に纏めて行った。

伸一の隣の部屋には、岩手県一関市出身の安藤司がいた。安藤は、一関近郊の農家の出身で、真面目で実直な性格である。都会での生活に期待を抱いて、証券会社への就職を決めていた。彼の卒論のテーマは「政治的無関心層について」で、すでに下書きした卒論の清書に取り掛かっていた。

卒論の取り纏めに疲れた時には三人でよくカードをした。勝負に熱中し、夜遅くまで続けることも少なくない。

「もう十二時過ぎだ。眠くなった。止めにしよう」

朝型の安藤は、夜に弱い。睡魔に勝てず、ついうとうとしてしまう。伸一は、夜型で夜更けになると元気が出るタイプだ。とくに負けている時など目が冴えなかなか眠れないのである

「安藤君。君の番だ。もっと真剣にやれよ。勝負事は真剣にやらなければ面白くない」

金を賭けているわけでもないのに、三人はカードに青春のエネルギーを発散し、互いの絆を深めて行った。

卒論の提出期限が迫った。伸一は、論文の構成に悩み、書き始めることが出来ない。早くから準備に取りかかったのに考えがまとまらない。集めたデータをすべて取り込もうとするところに無理があったのだ。余分なデータを切り落とすことにして、やっと見通しを立てた。

伸一は、正月を下宿で過ごすことにした。除夜の鐘を聞きながら昭和三十六年の新春を迎えたのである。

上田子の正月は、餅尽くしである。切餅の他に納豆餅、づんだ餅、黄粉餅、あんこ餅、磯辺餅など、さまざまな餅が食卓に並んだ。食べ盛りの学生にとっては有り難い限りだ。

提出日の前日に徹夜してやっと伸一は、卒論を書き上げた。大学の事務局に提出し、朦朧とする頭を冷たい風に晒しながら校門を出た。

(満足の行く卒論ではなかった。が、これで学生生活を締め括ることが出来る。後は、論文についての口頭試問を残すだけだ)

開放感を味わいながら電気店の前を通った。するとテレビの画面にペギー葉山の顔が大写しになっている。スピーカーから流れる「南国土佐を後にして」の歌詞が、故郷の浜松と重なって伸一は、立ち止まり、曲の終わるまで聞き入っていた。

青葉通りを抜け、仙台駅前の喫茶店「稲門」に入った。

(ずいぶんこの店にも迷惑をかけた)

伸一は、椅子に座ると改めて店内を眺め渡した。たった一杯のコーヒーで二~三時間腰を据え、友人たちと大声で語り合った。にもかかわらず、いつもにこやかに接遇してくれたマスターと美人のママに一言お礼を言いたかったのだ。

店にはママだけがいた。

「ママさん。今年の三月で、いよいよぼくたちも卒業です。この店をセミナーの教室みたいに使って、すみませんでした。お世話になりました」

「そうなの。賑やかな皆さんが来なくなって淋しくなるわね。こちらこそ長い間有難うございました」

レジにいたママは、微笑みながら席を立ち、空になったカップにそっとコーヒーを注いだ。

その馥郁たる香りは、こぢんまりした店内を柔らかく包んで、伸一を去り難くさせていた。

(つづく)

ダンスにはまった私

三

島津隆子

ある約束

私たちがダンスのレッスンに励んでいた頃、画伯から陶・水彩画展案内の葉書が舞い込んだ。三~四年毎に催される画伯の個展を、私たちは心待ちにしているのだ。

世話役氏の仕切りに従い、私たちは揃って会場のある兜町の画廊に行った。

画廊には画伯が世界を旅して描きあげた何点もの水彩画が架けられ、その下の台には、韓国で二百年しか作られなかったという、粉青沙器の意匠を用いた陶器の力作が並んでいた。

小さなものから、大きな皿や花瓶などの作品は、画伯の個性である巧緻な繊細と力強さを観る者に訴えかけてくる。

私はそれらの作品群の中から細首一輪指しを求めた。細い首からつづいて下の方はどっしりと丸い。途中の菱形の切り込みに、一輪の茶色の罌粟(けし)の花が彫刻され、下方に延びた茎に、もう一つの花が線描されているものだ。友人たちもそれぞれ気に入った絵画を求めた。

それから画伯の案内で画廊近くの店で昼食を共にした。その時交わされた世話役氏と画伯の会話から、この個展の後、すぐに画伯が入院し、手術を受けることを知った。

それは男性特有の病気だが、すでに受けている検査で、悪性でないことを、画伯は単々と告白したのだ。

私たちは内心の驚きを隠し、ひたすら平静を装ったようだ。だが、できることなら私は画伯に一言励ましの言葉をかけたいと思った。

昼食が終り、画伯は画廊へ戻ってゆく。
私は急ぎ足の画伯に追いつき、声をかける。
「画伯ときちんと踊れるようになりたい、というのがダンスを始めた動機の一つですから、絶対によくなって下さいね」
「それを楽しみに、僕も頑張りますよ」
そう言うと画伯は、笑顔を残してドアの向うに消えた。
私が画伯を元気づけたいと思ったわけは、画伯に借りがあったからである。

ダンスを始める五年ほど前、私は史遊会から〝はみ出し〟た山好きな人々の〝峠道を歩く会〟に誘われた。そこが今に親交のつづいている友人たちとの、出会いの場になったのだ。
一九九八年十一月、忘れもしない私の峠越えの初体験は、小仏峠であった。
峠は山の鞍部に当る地形のことだと知ったのもこの時である。
話としては以前から聞いている武田氏の武将小山田信茂と、滝山城主北条氏照の軍勢が激突したという十十里も、この小仏峠から近いようだ。
たしか、北の尾根につづく陣馬山も武田軍と北条軍が対陣した故の名称と聞いている、など思いを巡らしているうちに、やがて、歩き馴れない山道に私の呼吸は乱れていった。
汗がとめどなく流れ、私は予想以上に困憊したが、やっと山が開ける峠に出たという声にほっとした。
それも束の間、次はお弁当を食べる見晴し台に出る小道に難儀をする羽目になった。
片側に急斜面が拡がる幅四～五十センチほどの道を一列で歩くのだが、崩れかけている路肩に足を滑らせそうだ。私は思わず山側の木の枝につかまったが、細い枝は簡単に折れてしまった。
その時、私の屁っぴり腰はすぐ後にいた画伯に支えられて、そこはどうにか切り抜けることができた。
辿り着いた見晴し台はさすがの眺望で、山々が幾重にも重なり、その上に富士山がぽっかり浮かんだように見える。
だが、昼食が終わるのを待っていたかのように、薄絹にも似た白い雲に、富士山はその姿を隠してしまった。
そしてまた、さっき通った小道に引き返した所で、先に行く画伯が、さっと私の手を取り引っぱってくれて、ここは難なくクリアーできた。
「こういう時しか、女性の手は握れないもんな」
無邪気な悪童にかえって、銀行の元支店長だったという男性(ひと)の揶揄が飛んだ。
(まあ、何ていうことを！それにしても、握った手が、こんなお婆さんの手じゃあね)

私は照れかくしに呟いたが、声にならない。
しかし、私にすれば男性に手を取られて峠道を辿るなど、立派な冥土の土産というものだ。
それから性懲りもなく、二～三度は峠越えに参加したろうか。画伯が加わった時は、急な山道の登り下りで、ごく自然に手を取ってエスコートをしてもらった。
私の画伯への励ましの声掛けは、その時々に助けられた、いわばお礼のつもりなのである。

そんなよいつき合いをしていた仲間たちだが、三年前〝はみ出し〟のダンディなカリスマ会長が逝って、今は会も小休止である。
困難の多かった山道での、あの場面もこの場面も、思い出となればみんな一睡の夢の中の光景だ。

二人の友人の脱落

流れてゆく時の中で、いくらこの平穏な日々を持続したいと切望したところで、いつまでも同じ状態を保つことは不可能であった。
私たちダンスの友人の中でも、世話役氏が仕事のためにダンスを止めた。生涯現役を標榜するある人物のすすめで、高令をおして仕事に就くというのだ。
私たちは毎週ランチをしたホテル2階のフレンチレストランで、世話役氏送別の宴を張った。一抹の淋しさはあっても、体力気力の充実した仲間の仕事復帰は祝い事として、喜びのうちに世話役氏を送別したのだった。

それから間もなく、女友だちの一人が体の不調を訴え、休養に入ってしまった。
残ったもう一人の友人も個人レッスンに切り換え、またたく間にグループは解散に追いこまれた。
そして、会えなくなった友人からの電話で、私は彼女が腎臓を患っていたことを知らされた。入院をして行われた精密検査の結果、透析の治療を余儀なくされたと聞かされ、私は愕然とするのだ。
「透析をするのに、腕に手術をするの。明日からそのための再入院です」
私は言葉を失った。自分より十歳も年下の彼女が、そんな重大な局面に立たされたことに、胸がつぶれる思いがする。
うろたえながら病院の所在を聞くのがやっとだった。
心根が優しく、一緒にいるだけで癒しさえ感じさせてくれる彼女が、そんな病気になるなど、何故か理不尽な気持に襲われ、私は独り涙を流した。
病院に彼女を見舞うと、少し顔色は悪いが、にこにこと私を待っていてくれた。
これから治療が始まるのだから、元気になってくれるにちがいない、と私は彼女に会って安堵した。

レッスンにのめり込む

それからの私はひたすら週に二日、一時間のダンスレッスンに通った。

「目標のある方が、ダンスは上達します」

と先生に云われ、検定を受けるため、イベント参加のために練習に励んだ。

こうして検定を受験し、何度かの合格を果たした。

「八月に新横浜ホテルで催す、このスクールのダンスパーティに出て下さい」

と先生から言われたのは教室に通い始めて一年経った一月のことであった。

とても無理と躊躇する私に、

「きれいに化粧をして、美しいドレスを身にまとって踊ることは、女性にとって、きっとすばらしい経験になると思いますよ。やってみましょう」

(文字で自己表現をしてきた私だけど、体を使ってダンスで自己表現する、そんな夢をみるのも、面白いかもしれないな)

それでも私の気持は揺れていた。だが、有無を言わせずに、踊る曲目はワルツと決められ、ピアノ曲が選ばれ、さっそく先生の振り付けが始まった。

私は否応なく

(とにかくやってみよう)

と心を決めた。

レッスンにも熱が入り、私は必死にダンスをマスターしたつもりであった。

一方、まだ日時があるうちに、ジョーゼットの襞やフレアーが幾重にも重なり、沢山の光る石が重いほどに縫いつけられた、白とブルー色のドレスを求めた。

(若い女性が着たら、西洋人形のように美しいだろうが、私が着たら、衣装を間違えたピエロではないか。今からでもどうかして逃げ出せないものか)

ドレスを前に、途方に暮れる私がいた。

とにかく何もかも初めてのことに戸惑いながらも、グループの友人四人と娘を招待客として、パーティ会場のホテルに招くことにした。

当日は新米の私が一番最初の出番である。

あれだけ完璧に覚えたはずだったが、三分余りの曲の途中、頭の中が眞白になり、どこを踊っているのか不明になった処が、二ヶ所もあった。

だが、そこはプロの先生の上手なカヴーに助けられ、あっという間に一曲を踊り終えたのである。

生徒の出番、つまりアマチュアデモストレーションの後の、プロによるデモストレーションの華麗さは圧観で、観る人々を酔わせるに充分であった。この頃になると私

も自分の不消化な出来具合を忘れて、美の世界に耽溺した。

そして、私は夏に引き続き、クリスマスパーティにも出ることになり、赤いドレスでタンゴを踊ることになった。

(夏より少しはマシに踊れるかもしれない。前より上達しているはずだもの……)

不覚にも私は内心そう思ったのだ。

それに加えて前回のパーティの中で、三十分ずつ二〜三回、自由に友人とダンスの交流ができる〝フリーダンスタイム〟がもうけられていることを知った私は、画伯と交わしたあの約束を果たす機会(チャンス)にしようと考えた。

こうしてクリスマスには、いつもの友人たちと、久しぶりに画伯も交えて、楽しくパーティ会場のテーブルを囲んだのだった。

私の踊るタンゴで先生は前回より大人びた振付けをしてくれた。だが、踊りはタンゴ独特の切れも出せずに、とてもタンゴといえる代物でないことは自分が一番わかっている。

最初のイントロでは先生に体ごと持ち上げられるリフトの場面がある。エンディングは、先生の肩に寄りそうハグの型で終わる。

「それでは子供をお腹(なか)で抱くママスタイルです。男女の場合は男が下で、女が上になるのがハグの形です」

「なるほど、私のハグはママが〝どっこいしょ〟と子供をお腹の上に抱き上げるスタイルなのね。お恥かしいかぎりです……」

いい歳をして、愛の仕草もきめられない私は、先生に言葉で翻弄されっぱなしだ。

「ダンスは独りで踊るものではないでしょう。パートナーのリードもなんのその。独りで次のステップに移ろうとしていますよ」

私は先生のサインを待たずに、体の向きも、首の動きも、体重移動もおかまいなく、次に移ろうとあせっているらしい。

「すみません。女らしくない性格(ところ)が、もろに出てしまっていますね」

私は先生に「ごめんなさい」の連発だ。

「いいんですよ。これはあなたに限ったことではありません。特に日本女性は、男性から何かをしてもらうより、して上げることが多いので、どうしても先に先に動いてしまうらしいですね」

かつては気働きのよいことが、女性の美徳ともいえたこの国の女性の習性が、ダンスでは逆に作用するというのだ。

そういえば、西洋の女性たちは車に乗る時も椅子に坐る時も、男性の手際よいリードに身を任せる習慣が身に

ついているというものだ。さすがソシァルダンスがイギリスで発祥し、ヨーロッパで流行っただけのことはあると、妙な処で感心してしまう。

この日のパーティでも私のタンゴがトップであった。前より場慣れはしたものの、どこを踊っているのか、一瞬、頭の中が白くなったことは確かだ。小心者の悲しさである。

そして、フリーダンスタイムになった。

世話役氏と久しぶりにワルツを踊った。

画伯とはブルースの曲でフロアーに出た。韓国以来のダンスのお手合わせである

「踊れるようになりましたね」

と画伯。

「これでいつぞやの約束が果たせて、よかった。もう少し上手に踊れたらもっとよかったのに」

私は内心、画伯との約束が果たせたことに満足した。

人は年を重ねると、いつ何が起こっても不思議のない仕儀となる。だから、なるべく心身の負担になる約束はしない方がいいにきまっている。

しかし私は知らない間に、画伯との約束に叱咤激励されて、ダンスのレッスンに励んでいたのかもしれなかった。

夏の挫折

夏とクリスマスの年に二回、ホテルで催されるパーティが、スクールの年中行事である。つまりスクールの営業方針といえる。そこに組み込まれた私の週二日のレッスンは無謀にも三日に増えた。

「下を向いてはいませんが、視線が落ちています。遠くを見るようにして踊りましょう。その方が堂々と見えますからね」

先生に毎回くり返される注意事項である。

何でもないことのようだが、思えば私は目の前のことばかりに没頭して、顎を上げ、遠くに視線を向けるなど、めったになかった。それが、ダンスの姿勢に如実に現れているのだろうか。

先生の注意を意識している間はよいのだが、気がつくと私の視線は落ちている。それは観る人に、自信がなく、ひ弱な姿に映るらしいのだ。

「遠くを見るようにすると、しぜんに胸が開いて、優雅な姿になりますから、遠くを見て！　パーティで大勢の人の前で踊るためには、人に見てもらうのではなく、見せてあげるわよ、というぐらいの気持ちになることが必要です」

先生の強気の言葉に、私は思わず退いた。

そして次第に違和感を感じていった。

パーティの度にグループの友人を招待しながら、私はいつも自分の道楽の押しつけを、友人たちに謝りつづけていた。

(みせてあげる、などと、不遜きわまりないことは思いもよらないし、ましてそんな大それたことは口が裂けても言えない)

私は今さら取り消せないパーティ参加に、苦痛を感じながら、

(もうこれで、自分にそぐわないデモのダンスは終わりにしよう)

と心に決めた。

あれから三回目のダンスパーティは暑い夏の八月、いつも通り新横浜のホテルで行われた。

私はその日、美容師が上げてくれたアップの髪形が気に入らず、いらいらしていた。その憂鬱な気分を持ち越したまま、どうしてもスロー・フォクストロットの曲に乗ることができず、不様な出来のまま、私の出番は終わってしまったのだ。

書きものと違い、消しゴムも修正液も使えず、しかも三分間という短い勝負は、余りにもあっけなくついた。

自分の出来ない事実を知った残酷な瞬間であった。

趣味の世界とはいえ、私を支えていた〝やる気〟が、木端微塵に砕けたのだ。

落ち込んでいる私を世話役氏が慰めてくれた。

「それはあなたの目が肥えたり、力がついてきた証拠ですよ。私たち仲間の目には、前より進歩して映りましたよ」

しかし、夏の日の華やかな祭りのあとの虚しさに、私は疲れ果て、行き暮れてしまったような心境に陥ったままだった。

二、三日後、久しぶりに画伯から電話があった。

「デモはどうでしたか？」

「みごとに失敗しました」

沈んだ私の言葉に、画伯は救いの手ならぬ助けの言葉を投げ返してくれた。

「そんなこと言わないで。楽しみに始めたダンスですから、楽しく踊ればいいのですよ」

私はそれから何日かかけて、自分の内面で方向転換を計った。

「一寸ドレッシィなワンピースで、音楽に乗り、心地よくダンスが踊れたら、どんなにいいかしら」

グループの友人たちと語り合って、ダンスを始めた原点に戻ろうと考えたのだ。

いい年令をして、プロが着るようなダンスドレスを身にまとい、ライトを浴びてフロアーに踊り出たところで、

私は哀しいピエロでしかなかった。それも時が経ってみれば〝いとおかしな〟体験だったと笑い話になるだろう。
私は今までに一区切りをつけるべきだと考えた。

ダンスから程遠い処にいた私の手をとり、足をとって、とにかく踊れるまでに仕込んでくれた先生の存在は大きい。
すでに老境にいた不器用な私に、いろいろと説得を重ねながら、あの大舞台で踊らせたことは驚異的な出来事にちがいない。
しかし、その季節は終ったのである。
自分の本意でもないデモのダンスに浸ってゆくことへの決別は、先生からの卒業を意味する。名残り惜しいが、持ち時間が少なくなってゆく今、私は行き暮れたまま立ち止まるわけにはゆかないのだ。
好きな音楽を感じながら踊る快い時を、少しでも長く保つために、滑稽でもいい、ダンスを止めることはできない。
私は今、ほんの少しだが軌道修正を試みたところである。

了

信じて託す（その二）

―米山梅吉の一生―

三戸岡道夫

第三章　東京での苦学時代

青雲の志が潮のように盛り上ってきた梅吉は、ついに明治十六年（一八八三）十二月、沼津中学校を中途退学し、無断で家を出て、東京へと勉強のために出奔したのであった。十六歳のときである。十四歳で沼津中学校に入学したのであるから、沼津中学校で勉強したのは二年弱ということになる。
その頃の汽車の開通はまだ東京と横浜の間だけであったから、現在の東海道はまだ無く、三島から東京へは徒歩であった。男の足で二日かかった。朝早く出発すれば、日のあるうちに箱根の山を越えて、夕方に湯本か小田原へ着くことができた。次の日は藤沢泊りであり、翌日の日暮れに梅吉は東京へ着いた。

東京へ家出をする当って、梅吉は次のような漢詩を作っている。

書剣郷を辞して意気豪なり
何ぞ曾って前路逢遭を念わん
秋風十里函関の険
遙かに望む皇都天色の高きを

箱根山を越えるのはきびしいが、東京へ行くのだ、前途の艱難何かあらんと、自らを鼓舞激励する、元気旺盛な姿が眼に浮かぶようである。

明治十六年十二月十三日に東京へ着いた梅吉が最初に身を寄せたのは、銀座二丁目にあった江南学校という学舎であった。それは沼津中学校の先輩であった三島出身

者の、医科大学別科生の波多野弥五郎があらかじめ紹介してくれていて、学僕として受け入れてもらったのであった。松浦という学僕が迎えてくれて、親切に扱ってくれた。しかし夜具が一組しかないので、一緒に寝なくてはならないという有様であった。

東京には誰も知人はいなかった。ただ一人、長兄栄次郎の妻の兄に当る、望月功が神田に下宿して、済生学舎に通学していた。

梅吉は翌日、義兄に当る望月功を訪ねて、江南学校に入学する保証人を頼んだ。家族の誰にも相談しないで家出した梅吉が現われたのだから望月は驚いたが、

（自分もいま勉強している身だから、梅吉の気持はよくわかる）

と保証人になることは了承してくれた。しかし、

（お母さんも兄さんも心配しているだろう）

と、長兄の栄次郎のところへ、梅吉の上京の旨を手紙で連絡した。

二、三日すると、望月から呼び出しの葉書がきたので、行ってみると、

（兄の栄次郎が梅吉を連れ戻しに上京する）

という手紙が来ているということだった。

梅吉は驚いて、

「どうかそのような事のないように、望月さんから兄に頼んでください。とにかく僕は東京で勉強がしたいのです。どうか東京で勉強できるようにしてください」

梅吉は必死になって平身低頭した。望月にも梅吉のその気持は痛いようにわかるので、

（梅吉の家出はただの家出ではない。だからしばらく穏便に扱ってやった方がいい）

と、兄栄次郎に説得するように約束してくれた。

一方、長泉村上土狩の米山家では、梅吉が学校へ行ったきり帰ってこない。

「どうしたのか？」

と大騒ぎになっていた。

ただし梅吉がこのように無断で家出するまでには、養父の米山藤三郎と梅吉の間で、

（沼津中学校を卒業したらもう一段上の学校に進みたい、そのために東京へ出たい）

という梅吉の将来について、かなりの意見のやりとりがあったものと想定される。それなのに梅吉の意見がまったく容れられないので家出という行動に出たのであるから、米山家の方としてもある程度の見当はついていたといえよう。

幸い梅吉の兄の栄次郎が長泉村の小学校に勤めている。そこで米山藤三郎は栄次郎のところへ問い合せた。しかし栄次郎の方も梅吉からは何の相談も受けていないので驚いた。

（誰に聞いたらわかるだろう？）

わかるとすれば梅吉の親友の稲村真里しかいない。そう思った栄次郎は稲村真里のところに聞きにいった。しかし稲村も、

「僕もまったく知りません。」

というばかりで、埒が明かなかった。

しかし稲村はそうは答えたものの、実は知っていたのであった。稲村は親友として当然事前に梅吉から相談を受けていたし、すでに梅吉が上京した翌日（明治十六年十二月十四日）付で、梅吉から手紙をもらっていたからであった。だから、どこに居るかも知っていた。稲村もいずれは上京して勉強したいと、青雲の志を持っていた。そしてその通り、翌年に稲村も梅吉の後を追って上京し、大学予備門の入学試験を受けている。だから、事前に梅吉と申し合せておいたように、

「まったく知りません」

で押し通したのだった。

そのようなところへ、東京の望月功（栄次郎の妻の兄）のところから、梅吉家出を知らせる手紙が届いたというわけであった。そこで栄次郎はとりあえず、

「すぐ連れ戻しに行く」

と返事を出した。

養父の米山藤三郎は、当然、

（梅吉が沼津中学校を卒業した後は、米山家の住所である長泉村上土狩に腰を落着けて、ゆくゆくは一人娘の春子の婿として米山家を継いでもらいたい）

と考えていた。だから梅吉の入籍手続が遅れているのも、それ程心配してはいなかった。梅吉は十二歳のとき米山家へ養子に入り、米山家での生活が始ったのだが、籍はそのうち入れればいいということで、そのままになっていた。事実、梅吉が東京から稲村真里に出した家出の手紙の名前は「和田梅吉」と旧姓になっていた。

だから梅吉の家出は、米山家、和田両家にとっては大きなショックであった。とくに養父の米山藤三郎は、

（はやく入籍の手続をしておけばよかった）

と、にわかに心配になってきた。

そこで栄次郎と望月功とが間に立っていろいろと調整に当ったのであるが、

（ここで事を荒立ててはかえって梅吉の気持がエスカレートして、納まるものも納まらなくなってしまうだろう。梅吉もなにも米山家を継ぐのを嫌だといっているわけではない。今はただ、もっと勉強したいと言っているだけである。ここはしばらく本人の希望に沿って、少し様子を見ることにした方が賢明ではないか）

という結論に達して、米山家も和田家もそれに従うことにしたのである。

このように梅吉の家出という非常手段に訴えての上京

進学は、一応成功したのであった。

しかし世の中は十六歳の少年が考えるほど甘いものではなかった。

このように大騒動を起して入学した江南学校も、梅吉の期待に反し、沼津中学校以下のレベルの学校だということがわかった。その上、家出をしてきたのだから、金がない。生活費を稼がなくてはならない。だから学僕の手伝をしているのであるが、そのために勉強する時間が足らない。

（なんとかしなくてはならない）

梅吉は親友の稲村真里へ、

（早くここを抜け出して、次の学校を探すつもりである）

という手紙を出している。

梅吉が江南学校の次に選んだのは、芝にある土居光華塾であった。

これは土井光華（一八四七～一九一八）が開いている塾で、明治十七年、十七歳の梅吉は懇願してここへ書生として置いてもらったのである。

土居光華は明治維新のとき岩倉具視のもとで働き、当時有名な漢学者で、後に民権家衆議院議員となった。梅吉は沼津中学校にいた頃、新聞で土居光華の論説を読み、その政談演説を聞いたことがあった。そんなことから梅吉はとくに紹介者もなく、かなり強行に頼みこんで、書生として置いてもらったのであった。

しかし土居光華は漢学者である。梅吉の勉強したいのは、漢学ではなく、もっと新しい学問、洋学だった。だから大学予備門にあこがれる梅吉は、土居光華塾では次第に飽きたらないものを感じはじめてきた。

その上、学資のないのが梅吉の悩みの種であった。梅吉は当面どこかに就職して金を稼ぎ、経済面を安定させた上で、自分が望む方面の学問を自由に選んで勉強した方がいいのではないかと思った。

梅吉が勉強したいのは洋学である。梅吉は、

（アメリカへ行けば、スクール・ボーイをしながら大学へ通える）

ということを聞いたのである。

（そうだ、アメリカへ行こう）

だが、それにしても先立つものは金である。渡米するには旅費と、それに見せ金と称して『一文なしでないこと』を証明する金と、まず、あわせて百円くらいが必要である。百円ぐらいを貯金しなくてはならない。それには、

（月給取りになって　その金を作ろう）

と思った。

そこで梅吉は東京府の吏員採用試験を受けた。そして

合格たので、東京府の下級役人となった。

したがって梅吉が土居光華塾で世話になったのは、一年足らずだったのである。

そしてこの土居光華で梅吉が得た最大のものは、藤田四郎という学友を得たことであった。そして後日のことであるが、藤田四郎はその後、井上馨侯の女婿となり、その藤田四郎の紹介によって梅吉は後に三井銀行に入ることができたのである。梅吉は井上馨の女婿の紹介で三井銀行に入ったために、三井銀行で力量を十分に発揮できたということが出来ようか。

こうして明治十八年、十八歳になった梅吉は東京府へ就職した。これまでは他人の家に居候していたのだが、やっと芝の愛宕町に家を借りて、一軒を構えることが出来た。

そして三島から実母のうたを呼び寄せて、一緒に暮した。

長く別れていた実母と一緒の生活は、梅吉にとって非常にうれしいものだった。しかし考えてみると、梅吉はすでに米山家へ養子に入っている人間である。籍こそまだ米山家へ入れていないといっても、すでに生家の和田家から離れた人間である。それが家出という事情はあるにせよ、生家の実母を呼び寄せて一緒に暮すなどということは、ちょっと常識では考えられないことである。それは米山家との関係が冷却してしまっていることを示すものといってよかった。

事実、この頃が梅吉と米山家との関係が一番気まずくなっていた時期であった。梅吉が東京で経済的に困っていても、養父の米山藤三郎は学費の援助をしなかった。それは梅吉が憎いからではなくて、経済的に困れば梅吉は進学をあきらめて帰ってくるのでなかろうかと、それを願ってのことだった。それなのに梅吉は東京府へ就職して独立の生計を立て、あまつさえ面当てのように生母のうたを呼んで一緒に暮しはじめたのだから、米山藤三郎の不満と落胆は非常に大きいものがあった。

しかし梅吉の青雲の志は、そうしたものをはね返すほど強かった。とにかく自力で自分の将来を切り開いていきたい。雲の彼方へ登っていきたい。その雲の峯がどういうものなのか、それは具体的にはわかっていないのであるが、とにかく未来に輝く雲の峯に向って突進していきたい、その思いに十八歳の梅吉は若い人生を賭けているのだった。

芝の愛宕町は、梅吉が生れた芝田村町と近くであり、梅吉も生母のうたにもなつかしい場所だった。それだけでも、生母への孝養になるといってよかった。

また友人関係にも梅吉は恵まれた。その頃新聞記者として頭をもたげ始めていた遅塚麗水が同じ町内に住んでいたので、文学好きの梅吉との交流が始まり、そしてそ

の交際は一生つづいた。

また沼津中学校時代の親友の稲村真里も上京して、神田で英学校に通っていた。

また長兄の栄次郎もその頃になると東京へ出てきて、本郷森川町の教会を預っていた。もっとも預っていたといっても栄次郎は牧師ではなく、教会の一隅を借りて夫婦で住み、教師を勤めていた信者であった。

また梅吉も東京府へ勤めながら、銀座の福音英語学校の夜学へ通って、アメリカへ渡る準備を怠りなく行っていた。

このようにして梅吉はいったん就職への道を選んだのであるが、しかし東京府の役人のままで人生を送るつもりはなかった。しかし東京府では満足に勉強ができない。それなのに梅吉のアメリカ行きの夢はますますふくらんでいく。

そこで翌年、すなわち明治十九年に梅吉は、東京府を退職して、青山にある東京英和学校（現在の青山学院）へ入学した。梅吉が十九歳のときである。そして同時にアメリカ人のニコールバクについて英会話を勉強しはじめた。

この時梅吉が東京英和学校に入学したことは、梅吉にとって重大な選択であった。というのは東京英和学校はアメリカのメソジスト監督教会の宣教師たちによって創られたものだったので、東京英和学校の紹介があれば、アメリカへ渡って日本人経営の同派福音会を拠点に、独力で勉強できる方法があるのだった。だから梅吉は今後アメリカへ留学する場合でも、米山家からの学費の援助を受けなくても、勉強する方法があるということであった。

だが、一方、この梅吉の東京英和学校への入学は、養家の米山藤三郎にとっては相当強いショックであった。米山家としては、梅吉が東京府へ勤務するようになってから、とくに梅吉の行動には強い関心を持って見守っていたから、梅吉がミッション系の英和学校へ入学したことによって、

（梅吉の並々ならぬ渡米留学の決意）

を知ったからであった。

米山家と梅吉との交渉は、梅吉が東京へ出て以来途絶えていて、ほぼ四年になっていた。しかし両方とも無関心でいたわけではない。養家の藤三郎としては梅吉を将来を見込んで養子にしたのだから、機会を見て復旧の機会を狙っていたのだし、梅吉の方も強気でいながらも、内心は申し訳ないと思っているのだった。

するとそんな所へ、ある一つの偶然な出来事が起きたのである。

米山藤三郎は株式取引の用事で、時々東京へくることがあった。当時の地方の資産家は山林田畑のほかに、株式で財産を運用するのが通例であったが、藤三郎もその例に洩れず、株式投資をしていた。そのため時々東京の兜町へやってくる。その泊るのは、兜町の岡倉旅館が定宿であった。

ある時、藤三郎はその上京のとき、娘の春子を長唄の稽古のために、一緒につれてきていたのだった。すると春子が神田で梅吉にばったり会ったのである。明治二十年、梅吉が二十歳、春子が十四歳のときであった。

そんな偶然の出会いがあって、梅吉も、

（アメリカへ行く前に一度養父に会ってお詫びを言ってから出発したい）

と思っていた時だったので、ちょうどいいチャンスだと思い、梅吉は岡倉旅館を訪れた。

もちろん藤三郎もこれをよろこび、両家の関係は元の鞘に納った。しかし梅吉にはアメリカへの青雲の志があるので、春子との結婚の話は、梅吉がアメリカへ勉強に行って帰ってきてからの事ということにして、これまで問題が保留になっていた梅吉の米山家への入籍の問題がここで解決されたのである。そしてこのことは、

（明治二十年十月六日、梅吉、和田家より養嗣子として入籍）

と、後日の梅吉の自筆で覚え帳に記入されている。

（つづく）

祝上梓

行雲流水

石黒修身著

栄光出版社

跋文　三戸岡　道夫・曽根　竣作

中野　熙　・　鯨　游海

化粧のルーツを訪ねて（一）

第一話　お歯黒のルーツ探訪記（1）

鈴木守

定年後の暇潰しと呆け防止のために、化粧のルーツを探訪するタイム・トリップを思いついた。その一環として今回はお歯黒の起源訪問の旅にでかけよう。この旅では、縄文時代に盛行した抜歯習俗も訪れてみたい。化粧というと、メークアップや基礎化粧と思いがちであるが、散髪とか入浴も入るし、広義にみると、纏足や意図的に行われる抜歯は化粧の一つに挙げられている。

お歯黒は、すでに幻の化粧である。平成の現在、わが国では街を歩いていてもお歯黒の女性に出会うことはない。

真っ白な歯がもてはやされ、歯の化粧といえば歯磨きである。白い歯については、旧約聖書にミルクより白い歯とあり、唐の詩人・杜甫は澄んだ眼と白い歯を明眸皓歯と歯といって美人の形容として彼の詩のなかに詠んだ。わが国でも杜甫の四字熟語がしばしば美人の形容に使われてきた。

子供のころのことである、わが家のアルバムの第一頁に祖母の写真が貼ってあつたような記憶である。たしか、祖母は微笑みかけるような笑顔を浮かべ、心持ち開いた口から真っ黒に染めた歯がのぞいていた。

祖母は幼児の時に他界したので、生の印象は薄い。祖母といえば、アルバムの笑顔である。そのアルバムも行方不明で今では確かめようもないが、子供のころのイメージがお歯黒の歴史に誘っているような気もする。

それはそれとして、古今東西、白い歯を美と感じてきたにもかかわらず、歯を黒くする化粧風習が何故成立したのかに格別の興味を覚えた。抜歯風習についても同様である。

第1節　現・近代のお歯黒

1．平成と昭和のお歯黒事情

祖母のお歯黒については、すでに触れた。子供のころの古い記憶だから思い違いがあるといけないので、姉と兄に尋ねた。二人とも「お祖母ちゃんはお歯黒をしていた」という。兄は「お歯黒の壺を嗅いだらものすごく臭かった」というから、祖母のお歯黒は私の幻想でなかったことが確認できた。

小学校の同期会の時、皆に聞くと、二・三の友達が祖母はお歯黒だったという。

宮崎県椎葉地方出身の看護婦から、曾祖母は死ぬ間際近くまで歯を染めていたという話を聞いた。かように、昭和の代になっても、私の田舎や九州山地椎葉近くに、お歯黒風習が残っていた。

昭和末期になってもお歯黒が実在した。村沢博人氏は昭和54年に、お歯黒をしている秋田在住の老女を取材した。氏は、「老女は、結婚の前夜初めて歯を染め、96歳の今日まで、お歯黒を保ってきた。彼女に歯染めを実演して貰うと、お歯黒壺を温め、楽罐にすくいとり、妻楊子の先に脱脂綿を丸めて浸し、薬局で買ったタンニンをつけて染めた。恐らく、お歯黒をしている最後の人であろう」と述べていた。平成に入ってからは日常生活の中で行われる生のお歯黒についての情報は、今のところ聞いていないので、村沢氏がいうように、秋田の老女が最後だったかもしれない。いずれにせよ、生のお歯黒は昭和末期まで残存していたことは確かである。

生のお歯黒ではないが、現在でも芸能の世界にはお歯黒が残っていた。かって、映画・忠臣蔵で山田五十鈴が扮した“りく”の歯は黒く染められていた。その後も忠臣蔵は繰り返し繰り返し制作されているがなぜか、りく女の歯は白いままだった。最近の時代劇では、本来、歯を染めているはずの武家の妻女や長屋のお内儀さんたちの歯も真っ白である。虚像で構成される映画界でも、黒歯は過去のものになりつつある。

大学の同窓会だったと思うが、歌舞伎の中村芝雀丈を紹介された。聞くと「必要があれば染めます。小道具さんが舞台化粧専門店で買ってくるそうです」とのことだった。

テレビでみる時代劇でも、今川義元や公家役の男優たちは歯を染める人が多い。どうも女優たちが嫌うようである。やはり、時代考証と銘打った作品では、史実に忠

実であって欲しいと思うのは私だけだろうか？

芸能の世界とは別に、民俗風習としてお歯黒が残されている。南西諸島トカラ列島の平島では、成女式にカネツケ祝いをし、松本市界隈などでハネツケの制度が結婚式のとき行われている。カネは鉄漿で、歯を染めるときの媒染剤であるが、お歯黒の意味にも使われる。ハネはカネが訛った言葉である。

舞台や民俗的なお歯黒は仮の姿である。生のお歯黒について、歯を毎日のように観察している歯医者に聞いても「お歯黒の患者は診たことがない」という返事だから平成になると、実生活におけるお歯黒は幻の化粧になってしまった。芸能の世界でも、お歯黒が忌避されている。現在、先に述べた民俗行事でも廃れてしまった地方もあろう。

2．大正、明治のお歯黒

大正時代にも、お歯黒はあった。とくに、外人が綴った書が目につく。東京・大森貝塚を発見したモースは、彼の使用人が歯を染めていたので、染めている姿を写生し、フシノコやカネ水などについて記録していた。そのほか、大阪の芸妓のお歯黒に驚いている様子も記されていた。これら外人が残したお歯黒は、私の田舎とは違って先進地の東京、大阪である。大正時代には、大都会にもお歯黒風習が残っていたことが示されていた。

明治時代には、日本以外のお歯黒風習を示した著書が認められた。

民俗学の大家・南方熊楠は、お歯黒が東南アジアのビンロウジを噛む風習に起因するという説を取りあげ、「パキスタンやカンボジャには初潮をみると歯を染める風習があり、ビンロウジを噛む風習のないウズベキスタン人やロシア人の妻女が歯を黒く染め、南米の原始人は歯の健康のために、マダガスカル島のある種族は装飾のために歯を染める」と記述していた。

以上の資料は、お歯黒は日本で発生した独自の風習でないことを示しており、黒歯の目的は地域によって異なり、成女、既婚女性、種族の表示、歯の保健などであった。

海外のお歯黒はさておいて、日本に戻る。明治元年に太政官の名のもと、公家に対し、お歯黒と眉作りの禁止令が交付された。禁止の理由は「上古にはなく、諸外国にもない野蛮な風習」であった。文明開化を標榜した明治政府らしいが、化粧史からみると、政治圧力が化粧風習を左右した典型例といえる。

他方、女性のお歯黒について「昭憲皇后みずから、お歯黒や眉作りを止めたので、おいおい人民もこれにならい、今日では都下では見られなくなった」と女性のお歯黒風習が廃れていった様子を紹介した記録もあった。

このような明治時代の流れが、お歯黒を衰退の方向に導き、日常的な生のお歯黒は昭和末期にほぼ終焉し、近代以降は黒歯風俗の挽歌の歴史となった。

第2節．近世のお歯黒

江戸時代にお歯黒風習があったかどうかは今更にいうまでもないが、明治初頭にお歯黒禁止令が交付されたことは、その前に黒歯風習が存在していたことを示すよい証拠である。事実、浮世絵や川柳もお歯黒風習が盛んだったことを教えてくれる。

1．フシとカネ

江戸時代の資料には、お歯黒を表わす言葉がいろいろと登場した。

その一つ、「お歯黒は公家言葉であり、堂上方はフシ水あるいはヌキの水と呼び、下々の人たちはカネツケと呼んでいた」とあり、その他の書も含めて漢字表記では、カネは鉄漿、鉄、金があり、フシには五倍子や倍子、お歯黒は黒歯、鉄黒、金黒であった。

フシは白蓼（メルデ）の葉にヌルデノミミフシが寄生してできた耳朶状の瘤から採れ、タンニンを含み、黒色染料として使用される。

十返舎一九の東海道中膝栗毛に、「川端のふしのこは雪を欺き…」とフシノコを雪に喩えていた。フシは黒色染料だが精製した現物は白い。タンニンは酸化され、黒い色素となり、これがお歯黒の本体である。

「奥州白河の村人はフシノコの代わりに槲（カシワ）の新芽をカネとともに使い、これを早鉄（はやがね）と称していた」という。確か那須地方だったと思うが、夜叉五倍子（やしゃぶし）の実をお歯黒に使っていたという話を聞いたことがある。

カネ水・鉄漿は文字どおり、鉄の水溶液である。「鉄漿をつくるには、屑鉄や古釘などをとり、少しばかりの米屑あるいは米のとぎ汁、かゆ、強飯を蒸した汁などと混ぜ、容器の中で水に浸す、汁が黄赤色で微かな甘味があれば使用できる」そうである。川柳の「仲直りお歯黒壺へ拾いこみ」は、夫婦喧嘩で投げつけた鉄屑を拾い込んだのだろう。

カネづくりの原理は、酵母菌によってデンプンを酢酸

発酵させ、酸により金属鉄を溶解させる。タンニンを自然酸化させただけだと、黒褐色どまりで真っ黒にはならない。そのうえ、色がつくのに時間がかかる。タンニンに鉄イオンを触媒として加えると反応が促進され、速やかに真っ黒な色素ができる。これが鉄媒染である。

歌舞伎役者は次ぎの演目に出る場合、お歯黒を簡単に取り除く方法が必要である。太田蜀山人は「歌舞伎役者は次の演目に出演するため、早くカネを落とす必要から松脂をつけ、これを"早鉄漿"と呼んでいた」と述べていた。

2・歯染めの七つ道具

歌川国貞の化粧三美人をみると、歯を染めようとしている美人が描かれ、彼女の脇に歯染めの七つ道具が置いてあった。

歯染めの作業を掻い摘まんで述べておく。渡し金を乗せた耳だらいを置き、渡し金の上に漿子（杯）、右に嗽い茶碗と歯黒筆、フシ箱を置く。カネ水をカネ壺からカネ続へ移し、さらに漿子にカネ水を注いでおく。面倒なようだが、酒を一升ビンから徳利へ移し盃につぐのと同じである。次いで、指でフシの粉を歯に擦りつけ、手鏡を見ながらカネ水を含ませた歯黒筆で塗る。嗽い水で口をすすぎ、耳盥の中に吐き出す。この一連の作業を数回繰り返して完了する。口すすぎを十分に行うのは、口の中が黒くなり、タンニンの渋みやカネ水の酸味を除くほかに、カネツケでかぶれることがあるので、その予防のためもある。

3・歯染めのときの注意事項

歯染めの注意事項を記す。

佐山半七丸の都風俗化粧伝に「カネをつけるときは、消し炭で歯を擦り、よく磨いて下地のお歯黒や歯の間の滓を取り除いた後にカネをつければ、よくついて光沢が出る。さらに、お歯黒の上に紅を塗れば色艶がよくなる。歯を染めるとき、唇がしみる場合は髪油をつけておけばよい」と記してあった。

そのほかの心得を拾うと「歯を染める日にホウレン草を食べてはいけない」があり、川柳にも「七軒でホウレンソウのことをいい」と詠まれている。結婚の前日、隣近所七軒を回ってカネ水を貰うしきたりだった。

「殿方の前で歯磨きやカネツケなどをしてはいけない。歯の養生は夜暗くて恐ろしげな場所を選びなさい。鬼神も恐れてしまうだろう」とカネツケの百面相を利用した歯染めの場所まで指導していた。カネツケの顔を見れば百年の恋も冷めるに違いない。川柳には、「お歯黒は食

いつくように鏡を見」や「カネつける顔を眺めて叱られる」がある。

4・江戸庶民のお歯黒

江戸時代のお歯黒風習の中心は、庶民の内儀さんたちだった。ここでは、彼女たちの歯染めに対する拘泥ぶりを眺めたい。

都風俗化粧伝に、お歯黒を綺麗に染める、呪いのような方法がいくつか紹介されていた。例を挙げると、煙草の吸い殻とか、かん冷ましの酒などをカネ壺に入れるのである。そんな様子を詠んだ川柳に、「女房は一口吸ってカネへ入れ」や「これほどに飲んだら酔うとカネに入れ」と詠まれていた。

極めつきの呪いは褌なしの殿方にカネ壺を跨いで貰う方法である。川柳には「酒、塩や飴でいけぬとへのこ出し」や「こうかえと、お歯黒壺にぶらり出し」があった。これらの例をみると、江戸の女性たちは歯を綺麗に染めるのに多大な努力をしていたので、お歯黒も美の演出だったとの思いを強くした。

初カネは結婚の前日、当人が自ら隣近所を回って分けてもらうのが慣習だったことは、すでに述べた。川柳の「お歯黒をくんなと顔隠し」は娘心を見事に現わしてお

り、目に見えるような句である。また、「カネの礼さしうつむいて言葉なし」の川柳はカネのお礼まわりも仕来たりだったことを示している。

初々しい新妻姿をみて「よき娘惜しいことには歯は黒し」や「お歯黒をつけて娘は野暮になり」と男どもがやっかみ半分の負け惜しみを川柳にしたと思われる。

「七軒のほかは下沙汰なその当座」は髪床談義か井戸端会議で猥談のヒロインにされている図が目に浮かぶ。

5・お歯黒風習の普及範囲

既婚女性以外の黒歯風俗に触れておく。

堂上人は地下人と区別するため黒歯にしたので、公家の黒歯は階層表示の化粧であり、公家たちは13歳で初染めした。

『守貞漫稿』には、「民間人の場合、京阪では20歳のとき、江戸では20歳未満で、嫁ぐ以前に歯を染めることが多い」と成女表示の風習に触れており、「京阪の未婚の女性は21歳から22歳になると歯を黒くした」とあるから、恐らく、売れ残りのオールドミスと言われたくなかったのであろう。

遊里では、京阪の遊女や芸者は歯を染めていた。江戸では吉原の傾城、遊女も染めたが、芸者は年をとっても

以上、江戸時代のお歯黒風習は、身分の上下なく既婚女性を主体として、未婚でも20歳以下の成女、オールドミス、遊里の一部女性、再婚の意思のない寡婦などに及び、男性では、公家衆を始め、身分ある男性、神官、山伏にまで普及していたと推察される。

6・お歯黒風習雑記

徳川光圀は西山公随筆で、「歯を染める事は、いかなる故とも弁えがたし。貴賤を分かたんためか、婦女を分かたんためか」と悲憤慷慨していた。貴賤差別の語は、光圀のころには、お歯黒風習が庶民階級にそれほど普及していなかったことを窺わせる。

一方、「黒色は他の色で染め変えられないの意であり、夫婦の不変の誓いを示すものとされ、とくに妻の操の証である」との記述もあり、操の証、いわゆる"嫁しては二夫に目見えず"の思想が、男尊女卑の江戸時代には迎合され、黒歯風習の繁栄に繋がなったのだろう。

お歯黒を述べた江戸時代で最も古い文献は、一六二四年のきのふはけふの物語であった。お歯黒は江戸初頭には存在していた証拠である。黒歯用染料については、一六六〇年の女諸礼集のフシが初出であった。ところが、宮本武蔵が対決した吉岡道場の始祖・吉岡憲法が考案した吉岡染めでは、ビンロウジで鉄媒染していた。しかし、鎖国令によってビンロウジが入手難になり、ヤマモモの樹皮から得たタンニンを使うようになったという。したがって、江戸初期にはビンロウジで歯染めした可能性も考えられる。だが、そのような資料はなかった。

憶測だが、一六三三年の鎖国令によりビンロウジが入手できなくなると、それに換えてフシが使われるようになったのではないか。フシを記した女諸礼集は、鎖国令後だから年代的に符合する。

さらに深読みすると、ビンロウジは輸入品で高価であったから、お歯黒は上流階層の化粧であった。ビンロウジに変えてフシを使うようになると、国産で安価なフシならば、庶民にも手が届くようになったため、庶民も上流社会の真似をしてフシで歯を染めるようになったのではないか。文化はしばしば上層から下層へ伝播するから、フシの使用が庶民にも波及し、お歯黒風習の繁栄を導いたとも考えられる。

染めなかった。深川、品川などの岡場所の遊女、芸者は年長者でも白歯だったそうである。

遊女たちが一斉に歯を染めたため、色里の下水は真っ黒になったという。歌川豊国の浮世絵に妓楼の内湯と厠の図が描かれていた。それをみて、下水が真っ黒になったのも、もっともな話だと納得できた。

後家や尼になると、カネを落として白歯に戻るが、再婚の意思のない女性はカネをつけていた。

武家社会では、侍たちの歯の記述はみられなかったが、上級武家の家庭では、普通、娘が9歳になるとカネつけ初めの儀式を行い、成女の印に歯を染める風習があった。

武家の妻はお歯黒をし、武家の侍女たちは、夫がなくても十六七になると歯を染めたようである。

公家以外の男性のお歯黒については、井原西鶴が「俺が男じゃと言いざま、カネつけたる口をあいて女に食らいつきし」とか「歯黒つけたる口（山伏）」と好色一代女に書いていた。俺様は身分ある男性であった。

そのほか、神道家は「歯は骨の集まりであり、汚れたものを露わにしたままで神前に出るのは非礼であるから歯を染めるのである」と黒歯理由を説明していたから、神主たちも歯を染めていたのであろう。

第3節　中世のお歯黒

わが国の中世は、源氏と北条氏が実権を握っていた鎌倉時代、足利氏が治めた室町時代、続いて織田信長と豊臣秀吉が支配した安土桃山時代である。

1・安土桃山時代

安土桃山時代に著わされた書には、化粧の記載は少なく、お歯黒の資料に出会うことはなかったが、江戸時代の幾つかの書に、この時代の武家の歯染めについて触れてあった。

これらの書によると、信長公の時節から国中が多事になったため、武家の黒歯風習が下火になったことを示唆されていたが、「信長公と昵懇の武士が歯にカネをつけていた」とか「関ヶ原の合戦のとき、若武者が鉄漿黒だった」と武家の黒歯の残映も記載されていた。

これらの資料は、安土桃山時代以前の室町における武士の黒歯風習を示していた。

なお、お市の方や寧々、淀君は歯を染めていたように思うが、目を通した資料には、女性や公家のお歯黒はみられなかった。

2・室町時代

江戸時代の著書を含めると、いくつかの書に室町時代のお歯黒が記されていた。その多くは男性の黒歯であった。

北条早雲の縁者といわれている伊勢貞丈は、「上方武士が黒歯であったのに対し関東武士は白歯であった。し

かし、関東に勢力を伸ばした早雲は京の出だったので、京風を維持し歯を染めていたため、その風が後北条に残り、北条の家臣たちは〝忠臣二君に仕えず〟といってお歯黒にした」と述べていた。後北条は、鎌倉の北条と区別するための呼称であり、小田原北条ともいう。

この貞丈の言は、室町時代の東西の相違を示していたが、安土桃山時代の武家の黒歯は後北条に遺されてたことを暗示していた。また、江戸時代の〝貞女二夫に目見えず〟は言葉の綾として後北条の亜流であるから、この謂は、武家社会から生れた思想の延長線上にある。

そのほか、室町時代前後には、下級武士は歯を染めなかったが、中級以上の武士は染めていたので、戦国騒乱の時代、お歯黒首をとったものは恩賞に預かった。山田去暦女も、「白歯の首に鉄漿をつけるように頼まれたものじゃ」と述べていた。したがって、室町末期の武家の黒歯風習は、侍大将くらいまでに波及し、武士社会における身分表示となっていたことが窺われる。

公家社会のお歯黒風習については、「公家のお歯黒は二百余年前後のことと思われる」という示唆があり、室町中期の公家の日記に、「娘九歳の祝事で父親が娘の歯を染め、母親が眉落としした」ことが記されていた、この祝事は娘の成人式と思われるので、室町中期の公家社会では、黒歯と眉作りが成女表示だったことが知れる。

女性のお歯黒については、室町中期にはお歯黒箱や歯黒女壺、歯黒女筆、歯黒女盤があった。歯黒女はハグロメと読み、お歯黒である。これらのことから、公家本人はともかく、室町中期には、娘の成人や既婚女性を表示する黒歯風習があったのである。

3・鎌倉時代

鎌倉時代の代表的戦記文学・太平記は、小島法師の作といわれている。この書には、太眉でカネをつけた女の首（顔のことか）を初め、殿上人、稚児、田楽法師のお歯黒が著わされていた。新古今和歌集の選者・藤原定家の明月記に、関白や大臣が初めて直衣（のうし）を着る儀式で鉄漿をつけたと書き置いてあった。

14世紀初期の画集・天皇摂関御影は、天皇や法皇ならびに摂政関白の人たちの肖像画集である。画集の中で心持ち開いている人物の口の間が白か黒かをつぶさに観察した。黒かった人物は、鎌倉時代初期の後深草天皇、九条兼実、同道家、近衛兼経などであった。

男性黒歯の始まりについて、いずれも江戸時代の著書

であるが、雨月物語の著者・上田秋成の膽大小心録などに、「男子お歯黒は後鳥羽天皇以降に始まった」と記されていたので、先述の後深草天皇の口の間の黒は、黒歯を表現したに相違ない。

4・中世のまとめ

中世の資料は近世に比べ極めて少ない。ここでは、想像を交えながら復習（さら）っておく。

中世の女性風俗に関する資料は、男性社会の記録より少なかった。その初期には北条政子、終末期には淀君といった女性権力者はいたが、概して男尊女卑の世であり、歴史書の中世は〇〇の乱、△△の変、××の合戦の羅列である。戦乱は男性社会のことである。

文化的な面では、室町時代に能楽や狂言などの古典芸能の創始があり、金閣や銀閣などの美術的に価値の高い建造物も造られたが、これらも男社会の文化である。

こうした時代背景を察すると、女性の化粧風俗に関する資料が少ないのも、無理からぬことと思えた。以上、中世社会全体の流れについて触れた。以下、女性の黒歯風俗からまとめる。

鎌倉時代の女性黒歯については、北条政子や静御前も歯を染めていたであろうが、資料はみられなかった。かろうじて、太平記にカネをつけた女の首があったので、黒歯風習の片鱗を垣間見ることができた。

室町時代には、女性用具に歯黒女箱などがあったので、この時期の女性黒歯風習は確かに存在した。また、公家社会では、成女祝いにカネのつけ初めを行っていた。

安土桃山時代に入ると、女性のお歯黒についての資料は見当たらなかった。しかし、その前後の室町と江戸の両時代に、女性の黒歯風習が存在したのだから、当然、その風習があったと考えるのが妥当であろう。

男性の黒歯風俗に入る。

鎌倉時代初期には、すでに堂上人や公家社会では、黒歯風習が始まっていたが、その後の資料は少ない。鎌倉末期ごろは、田楽法師のレベルまで普及していたことが窺われ、同時期の稚児のお歯黒は、成人表示の黒歯があったことを思わせる。

室町時代、上方の上級武士が歯を染めていたが、関東の侍まで普及していなかった。室町末期、応仁の乱以降は戦国時代であり、武士たちもお歯黒どころではなかったかも知れないので、黒歯風習に陰りが生じたであろうが、後北条の侍は歯を染めていた。公家風好みの今川義元のお歯黒はよく知られている。

安土桃山時代になると、合理主義の信長が頂点に立ち、その後を秀吉が継いだため、武士の黒歯風習は衰退の道

をたどり、ついには関ヶ原の戦いのとき、その残影がみられたが、その後、江戸時代に入ると、姿を消した。

お歯黒の材料のことである。

中世では、黒歯にフシを使ったか、ビンロウジだったのか、それともまた別の染料を使用したのか、歯染め染料の資料はなかった。

だが、お歯黒を"カネ"ともいい、鉄漿入れの容器・歯黒女壺があったので、この時代の歯染めには、すでに鉄媒染の技術を取り入れていたことは確実である。

［参考文献］

渋井清監、浮世絵シリーズ・歌麿、平凡社、一九七五

村沢博人、津田紀代、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九

村沢博人、美人進化論、東京書院出版、一九八八

橋本澄子、高橋雅夫編、浮世絵に見る江戸の暮らし、河出書房新書、一九八八

渡辺信一郎、江戸の化粧・川柳で知る女の文化、平凡社新書、二〇〇二

天皇摂関御影、絵巻、徳川美術館、一九九三

（第4節に続く）

まんじ110号特集号発行についてのお知らせ

先日のまんじ104号合評会にて、掲題の件につきまして参加されました同人各位のご賛同をいただきましたので、下記明細の通り計画を進めたいと思いますので御連絡申し上げます。

記

1. 発行日は平成20年11月1日です。
2. 原稿〆切は平成20年6月末です。従って本年の6月末には『まんじ』109号と、110号の、二つの寄稿をお願いすることになります。
3. 特集号ですから、読み切り物で四百字詰原稿用紙30枚（12,000字）程度のものをお願いします。新作でも既発表の物でも結構です。
4. 製作会社は栄光出版社です。

以上

発行人　三戸岡道夫

編集担当　中山　喬史

短歌

行雲流水（十九）

石黒修身

近詠二十首

歌藻（うたぐさ）の枯れたるときは旅に出て鮮しき息を吸わんと思う

未知の国、鮮しき事象（こと）に接せんと老いの身駆りて旅に出でんか

頂に白き球添う霊（くし）びあり乗鞍岳のコロナ観測所

今様のトロッコ電車で走り見る峡谷の美と水の威力を

空港の売場から消え久しかり「白い恋人」放免は何時

「〇〇よお前もか」とてお土産に曲ごと多く旅行者迷う

友の訃は深夜届けり給油艦インド洋より撤収の日の

五十年誼を持ちし隣人の葬りの朝はうっすらと霜

がん末期須臾の命をその女は誼の謝辞で妻に告げしと

玻璃ごしに七里の浜の渚みて名曲を聴くチャリティの演

チャリティを宰する友は不随にて機能の哀微を吾に語れり

一様に携帯を押す乗客らその異様さに疑念持たずや

たまさかに怯懦に抗うときもあり反骨の気など既に萎えしに

「サブプライム」魔物の如く駆け巡り世界不況の予兆と怖る

この国の防衛担う官庁のあまりに著るき不正を危惧す

拉致の娘をひたすら待ちて三十年温容の父老いて退きたり

「後の月」今宵朧に耀えりやゝいびつなる貌を愛でたり

外国のようだと妻云うこの街の銀杏並木はそれなりに美し

六本木この瀟洒なる空間に美術館建ちて「日展」を観き

パリに寓居て「マルモッタン」までそぞろ行き「モネ」を観し日を懐かしみおり

わが愛誦歌（五）

――戦後の歌壇逍遥

曽根竣作

や、能をテーマとした主題制作に挑む。写実の技法を生かしつつ主情的な世界を展開し戦後女性短歌の典型となり、幅広い活躍と旺盛な創作意欲によって、近代から現代へと女性歌人が歌壇に出てゆく時代への橋渡しの役割を果した功績は大きい。

「木を噛る音ききし夜も雪ふれり欠けし紋章も濡れつつあらむ」、この紋章は旧家のそれを意味する。平成十二年没。

○肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんとしつつたわむ言葉は　岡井　隆

『朝狩』（昭39）所収。作者は、現代の歌壇をいい意味で刺激しつづける鬼才と言われ、一応歌壇の大御所と言っても差支えなかろう。掲出歌は、医師である自分が患者の胸部レントゲン写真をかざしながら、肺尖部にある空

○北を指すものらよなべてかなしきにわれは狂はぬ磁石をもてり　生方たつゑ

『北を指す』（昭41）所収、巻初の小題「北を指す」の中にはなく「きしきしとあばらが鳴る夜わが飢ゑの蒼き氷河に似て北を指す」と共に次の「蒼き氷河」の章に収められている。歌意は、北を指す磁石のように、むなしくなった過去を脱ぎながら、私は私のゆく手をさして飽くことのない日をもちたいという思いである。

作者が、嫁いできた群馬県沼田の生方家は山国の厳格な因習を残す旧家であった。そこでの厳しい旧家の因習の中で、それに対する抵抗と心の渇きを癒すべく短歌に救いを求めたのであった。緻密で透明感のある写実詠に佳作を残したが、一時作歌を中断、のちに松村英一に師事し、自虐的とさえ呼ばれた詠風で内面を見つめた作品

洞の所在を告げようとして、思わず言葉が「撓んだ」というのである。現実の厳しさにたじろいで、昼顔の花を比喩として巧みに歌に生かしている。作者はあの少しさびしい花が好きだったのかも知れない。

岡井隆の歌の世界は、これ迄大きく変貌してきた。アララギ的リアリズムによる青春歌の時代、前衛短歌運動を牽引した時代、一時歌作中断をはさんで歌そのものの美しさを出した時代、その後もポスト・モダンの時代を背景に、様々な新しい試みを続け現代短歌を推進してきている。

ときにして、その作品は難解の感無きにしも非ずだが、著名歌の中に「蒼穹は蜜かたむけてゐたりけり時こそはわがしづけき伴侶」と、「歳月はさぶしき乳を頒てども復た春は来ぬ花をかかげて」は、蜜と乳、やってくる〈時〉と見送る〈時〉において対をなしており、時の流れに対する深い洞察が見られる。

○雁来紅燃えのきはまり地殻よりわななく声のまっぴるまなり　加藤　克己

『宇宙塵』（昭31）の「雁来紅」の中の一首。たしか昭28～昭30頃の作品。「雁来紅」（がんらいこう又はかまつか）は葉鶏頭の漢名で、秋、雁のくる頃紅色にいろづくからこの名がある。

時はまっぴるまで、しんかんとしている。その中で葉鶏頭の花がくれないに燃えきわまるかのように咲き盛っている。それをじっと見つめていると、地殻からふるえるような声がきこえてくる―と言うのである。声は現実の声というよりも、地表が戦慄しているような、不気味な幻聴であろうか。地殻という自然科学的な表現や、まっぴるまという俗語的な口語を用いて、新しい感覚を出そうとする言語的実験をしており、物象の中に抽象の世界をもちこみ、感情移入して心象風景を表現しようとするこの作者らしい冒険であろう。

加藤克己は、昭和二十二年近藤芳美や宮柊二らと「新歌人集団」を結成し、戦後の歌壇の振興を担った。特に、昭和四十四年に出た第四歌集『球体』は、シュールリアリズムの精神を復活させた口語自由律の詩精神として注目された。「みんな逃げてみんなすっとんですっからかんふぬけた胴体が丘の上にある」は、くだけた俗語を繰り出し、或る空虚なイメージ（敗戦後の）の中にひとつの解放感を訴えていると読みたい。

○土偶にも卑弥呼にも通いだくだくとわれの日本の女の血めぐる　河野　裕子

『森のやうに獣のやうに』（昭47）所収、その中の「青林檎」中の一首。私の母から受け継いだこの女の血は遠い土偶の女にも、そして日本の女の始祖とも呼ばれている卑弥呼にも通じ、今もだくだくと私のなかで駆けめぐっているという歌意である。作者の歌には、いくつかのキー・ワードがある。「血」「耳」「胸」「唇」や「樹」「薔薇」

の糧とする企業で働いてきたことの万斛の思いがある。

近藤芳美は、戦時中船舶工兵として中国戦線に参戦しており、病を得て一時帰国したがその当時の経験から徹底した反戦思想に傾き、戦後から平成十八年に没するまで歌壇の一方のリーダーとして反戦思想を核とする歌を作りつづけてきた。上屋文明の冷静な生活リアリズムを発展させ、もう一つ新しい思想と感情を短歌に取り込んでいこうとした。そのため、苛立つような字余りで破調な作品も堂々と発表して私達を驚かした。

しかし、戦後直ぐ発表した『早春歌』『埃吹く街』は、戦後の新しい時代の短歌を切り拓いた歌集として今も記憶に新しい。「たちまちに君の姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき」のロマン溢るる相聞詠、「いつの間に夜の省線に貼られたる軍のガリ版を青年が剥ぐ」「夕ぐれは焼けたる階に人ありて硝子の屑を捨て落とすかな」のような荒い粒子として描かれた戦後風景は、みずみずしくも、堅固で新しい短歌空間を展開してみせたのである。

○つゆしぐれ信濃は秋の姥捨のわれを置きさり過ぎしものたち　齋藤　史

『ひたくれなゐ』（昭52）所収、初出は「短歌」（昭51・2）である。「つゆしぐれ」は露がいっぱいに降りて時雨が降ったような状態をいう。「姥捨」は、棄老伝説で名高い、長野善光寺平の南にある姥捨山を指すが、作者はその姥捨山に捨てられた老女として自分自身の姿を自

「坂」「鳥」「鏡」などの語彙は作者の歌集にくまなく表れ、それぞれ重要なモチーフのひとつをなしている。掲出歌は、「血」のモチーフを通して土偶や卑弥呼の時代にまで通底するパースペクティブを獲得しているのである。

昭和四十五年に角川短歌賞を受賞したとき河野裕子は二十三歳であった。以後、現在に至るまで戦後生まれの女性歌人のトップランナーとして活躍を続けている。鋭い感覚と肉体を総動員して生の実感を表す作者の歌は、これまでの歌人に見られなかった豊かさと濃密な個性を備えている。好きな歌はいくつもあるが、その中より四首を抄してみよう。「たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらって行ってはくれぬか」「たっぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり」「今死ねば今が晩年　あごの無き鴨のよこがほ西日に並ぶ」「さびしさよこの世のほかの世を知らず夜の駅舎に雪を見てをり」。

○森くらくからまる網を逃れのがれひとつまぼろしの吾の黒豹　近藤　芳美

『黒豹』（昭43）所収、初出は「未来」（昭40・5）である。暗い密林の中、幾重にも張られた罠を逃がれのがれてゆく黒豹の幻がある。その黒豹はいつのまにか作者自身である。ここには若かった日の作者を圧迫しつづけた「治安維持法」があり、朝鮮戦争・ベトナム戦争を発展

虐的に描き出した。しかし、露の深い姥捨に捨てられた「われ」は、捨てていったものに憐れみなど乞うているのではない。「置きさり過ぎしものたち」の後姿に目を注ぎ、その卑怯と我執のエゴイズムを鋭く見据えているのである。

齋藤史は、二・二六事件に連座した陸軍の齋藤瀏少将を父に持つ。その当時、二・二六事件を主謀した下級将校の何人かは史の家に出入りしていたようである。

昭和初年頃のモダニズムの影響を受けた、作者の第一歌集『魚歌』（昭和15）は、比喩表現を柔らかく取り入れたモダニズム短歌の秀眉といわれた。やがて、直截に歌に表すことのできない二・二六事件という悲劇にまつぶさに遭遇し、その比喩表現がいっそう磨かれて行ったと思われる。

晩年は、モダンで浪漫的でありながら、老いを凝視する秀歌を多く残して私達を楽しませてくれた。「死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも」「すでにしておのれ黄昏うすら氷の透けるいのちに差すや月光」。平成十四年没。

参考文献

現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
菱川善夫著作集Ⅰ歌の海（沖積舎）

南溟の秋

曽根竣作

吹く風のじっとり湿(しと)る夕つかた翅あたらしき赤あきつとぶ
鵠沼とふ名残りもあらで蓮池に鵠(くぐひ)の見えず葭(よし)しげるのみ
嫋嫋と柳枝さやげる夕映えの淡水渓にまほろばを逐ふ
麻酔より醒めがてに見し果敢(はか)無ごと亜熱さやけくわが頭上なり
校庭のガジュマル太きに凭(よ)りてゐし幼き我に熱帯陽光(て)る
緋に映えて鳳凰木は傘ひろげ秋ぞらの下小世界なす

なだらかに秋日を受けて風紋の高低ありて午後(ひる)更けんとす
竣べーと呼びくれし悪童(わる)も遂に絶え目映ゆきばかりの星月夜なり
枕辺にやうやく繙く歌書積めばわれの維新に邯鄲の啼く
うれひなく同方向に面(おも)上げてひまはりは浴ぶ天つ光を
うす汚れしユリカモメ四、五羽掠めゆく古き漁船の艫(とも)の幟を
眉高き友らいくたり死なしめしわが敗戦忌雲湧きやまず
指をもてなぞりてみたり地球儀のわがタイワンよ、南溟の秋
油蝉鳴けば思ほゆ砲身担(ほうにな)ひ駆けし戦野のあかねさす空
瑠璃濃ゆきあをすぢ揚羽わが回りつかず離れぬ盆会(ぼんゑ)の日暮れ
くちはなの滑りゆきたる葭(よし)の面(も)に鋭く堕ちる行行子(よしきり)のこゑ

玉砕とふ美辞にかくされ死にゆきし幾百万の有為ぞあはれ

秋の夜を一心に見き“水木しげる”の「鬼太郎の見た玉砕」のドラマ

砕け散る玉(ぎょく)はたまゆら煌たれば人をあざむく魔術なすなり

日照雨(そばえ)降る朝のいしみちあざやかに落椿光(て)る生あるごとく

純白のさるすべりいつ花重々と喪の家の門飾りてゐたり

春(うすづ)けるすすきが原の泰然と秋冷の気を抱きて眠る

浜木綿の低く這ひゐる砂山に秋去りがてのサンダル並ぶ

もの思ふ、赤信号の交叉点永久に青にぞ変らぬもよし

葉表に光りまぶしもえごの木の数花ひらきて秋去りぬべし

百舌啼きて秋天高しひとひらの雲山巓(さんてん)をゆるく流れつ

明日のオペ夕刻よりと知らせあり待ちの時間の遅々たるに耐ふ

またひとつ人生の影濃くなせりわれが腹部に鋭(と)きメスの入る

濃厚なる粒子を舌に遊ばせて烏魚子(からすみた)食うぶわが生れし地の

黄色(わうじき)の果実(みのり)いくつかちりばめて木瓜(ぼけ)の木は立つ初冬の庭に

俳句

鷹の呟(つぶや)き（一）

大澤鷹雪

不景気もどこ吹く風と初高座

まゆ玉を飾る女将の笑顔かな

しみじみと吾が子を見つめ成人祭

花房の音色聞きたき馬酔木(あしび)かな

貝寄風や控訴趣意書を脱稿す

雪解光入口暗き裁判所

鞦韆(しゅうせん)や漕ぎて越えたき一線も

べったりと仲の良きかな花蘇枋(すおう)

手入れ良き農地は黒し草青む

わが巣箱思わぬ鳥が愛しけり

秘してなほ悟られし恋藍微塵(あいみじん)

寝乱れし遊女のごとく花疲れ

軽鳧(かるがも)の子の泳ぎて水の重さかな

悪童の剣豪遊び草を刈る

色恋は不老の秘薬業平忌

講釈の付いて男のなすび漬

焼酎に御三家もあるはやりぶり

焼肉に焼酎を飲む深い仲

サングラスかけてアクセル深く踏む

汗疹(あせも)の子抱えて途方にくれし日も

夏霧の密かに恋を包みけり

秋の蟬草を抱きて鳴きにけり

気の急(せ)きて効かぬ手足や運動会

コンビニは未だ備へず草の市

潮騒録（五十三）

鯨游海

干支＝えと。十干、即ち甲乙丙丁戊己庚辛壬癸と十二支、即ち子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥を各一字づつ組合せて年や日に宛てはめる。六十種の組合せが出来る。六十一回目は元に戻るので還暦と呼ぶ。なお兄弟を指す「え（兄）と（弟）」は国字で漢字の読みではない。

〔口語訳〕

（威張っている）竜や虎よりも（人類にとっては）尊重すべき鼠の可愛い姿よ。
牛や羊にも似て、優しく忠実で孝行な小動物よ。
自からの遺体を率先して提供し、医学の発展の為に命を捧げてくれたのだ。
天は慈しみ、その為に干支の首位に位置づけてこれを称賛したのだ。

☆身を捧げ人類に尽くしぬ可憐の鼠
　天慈しみ干支の首と為す

賀戊子春　　戊子　元旦

尊於龍虎可憐姿
優似牛羊忠考兒
獻體率先捧醫學
天慈使鼠首干支

押韻姿兒支

〈戊子の春を賀す〉

竜虎より尊き　可憐の姿
牛羊の似く優しき　忠孝の児
献体　率先して医学に捧ぐ
天慈しみ鼠をして　干支の首たらしむ

〔注　解〕

於＝対象を示す助詞。…よりも。…について。…に対して。時や所を示す助詞。…において。感嘆詞。ああ。
獻體＝医学研究用に遺体を提供すること。

祝森實與子女史上梓童話二宮金次郎之一生　　平成十九年七月

泥田格闘救民行
紙價忽騰金次郎
塗炭生涯誰活寫
深窗華麗一紅粧

押韻・行　郎　粧

〈森実与子女史が「童話　二宮金次郎の一生」を上梓されたるを祝す〉

泥田に格闘して　民を救いし行
紙価たちまち騰る　「金次郎」
塗炭の生涯　誰か活写したるや
深窓の華麗　一紅粧

〔注　解〕

行＝歌。紙價＝ベストセラーの寓意。晋書「洛陽の左思が『三都の賦』を出版した所、多くの人が争って紙を買いその文章を写したので洛陽の紙価が騰った」故事。
塗炭＝泥に塗れ火に焼かれるような苦しい境遇。
深窗の華麗＝奥まった部屋に育ち、世の汚れに染まらない教養豊かな女性。華麗は佳麗に通じる。
紅粧＝紅妝＝紅の化粧。転じて「化粧した美人」。

☆武士の道にあらねど益荒男の
　雄々しき道ぞ妾うたわん

漢詩報徳訓　　平成十九年十月

黑船飢饉風雲急
天遺吾人相模鄉
曉學暮修經世志
春耕秋織濟民糧
時懷曖曖子孫譽
每畏累累父祖光
勤勞讀書君勿倦
年年歲歲不能忘

押韻・鄉糧光忘

〈漢詩報徳訓〉

黒船飢饉　風雲急にして
天は吾人を　相模の郷に遣わせり
暁に学び暮に修む　経世の志
春に耕し秋に織る　済民の糧
時に懐う曖々たる　子孫の誉
毎に畏る累々たる　父祖の光
勤労読書　君倦むこと勿れ
年々歳々　忘る能わず

〔注　解〕

二宮金次郎が自ら詠んだ文語の報徳訓（後掲）を参考にして詠んだ七言律詩。三～四句、五～六区は対句となっている。

漢譯報徳訓・其一

平成十九年十月

父母根元天地精
吾身骨肉孰丹誠
遙懐累累祖靈影
舊德奇緣不可輕

押韻・精誠輕

漢訳「報徳訓」〈その一〉

父母の根元は　天地の精
吾身の骨肉　孰か丹誠す
遥かに懐う　累々たる祖霊の影
旧徳奇縁　軽んず可からず

☆天地の精より成れる吾が血肉
赤赤とまた凛凛として

又・其二

平成十九年十月

勤勞精華分度功
子孫富貴有其中
率先積小勵爲大
不可時時刻刻空

押韻・功中空

〈又その二〉

勤労の精華　分度の功
子孫の富貴は　其の中に有り
率先して小を積み　励みて大と為せ
時々刻々　空しくす可からず

☆いざ征かん千里の道を先ず一歩
ちりも積もれば山となるなり

又・其三

平成十九年十月

身命安寧食住衣
山林田地綠愈肥
春耕秋織汝毋飽
子子孫孫不得饑

押韻・衣肥饑

〈又その三〉

身命の安寧は　食住衣
山林田地　緑いよいよ肥ゆ
春耕秋織　汝飽むこと毋くんば
子々孫々　饑うるを得ず

☆倦む勿れ春耕秋織倦む勿れ
天地の巡り絶ゆることなし

又・其四

平成十九年十月

本年有食過年償
來月住衣今日行
積善至誠推讓念
年年歲歲不能忘

押韻・償行忘

〈又その四〉

本年の食有るは　過年の償
来月の住衣は　今日の行
積善の至誠　推譲の念い
年々歳々　忘る能わず

☆こぞの衣も食も住まいも過ぎし日の
汗と脂の果実なるらむ

報徳訓（原文）

父母の根元は天地の令命にあり
身体の根元は父母の生育にあり
子孫の相続は夫婦の丹精にあり

父母の富貴は祖先の勤功にあり
吾身の富貴は父母の積善にあり
子孫の富貴は自己の勤労にあり

身命の長養は衣食住の三にあり
衣食住の三は田畑山林にあり
田畑山林は人民の勤耕にあり

今年の衣食は昨年の産業にあり
来年の衣食は今年の艱難にあり
年々歳々報徳を忘るべからず

《漢詩の流れ42》宋代の詞①李清照その二

夏日絶句　（夏日絶句）

生當作人傑　生きては当に人傑となり
死亦爲鬼雄　死しては亦鬼雄と為るべし
至今思項羽　今に至るも項羽を思ふ
不肯過江東　江東に過るを肯んぜざりしを

蝶恋花（蝶花を恋ふ）

永夜厭厭歡意少　永夜　厭々として歓意少く
空夢長安　空しく長安を夢み
認取長安道　長安への道を認め取りたり
爲報今年春色好　今年の春色の好しきを報ぜんが為に
花光月影宜相照　花光月影　宜しく相照らすべし
随意杯盤雖草草　随意の杯盤　草々たりと雖も
酒美梅酸　酒は美くして梅は酸く
恰稱人懐抱　恰に人の懐抱に称ふ
醉莫揷花花莫笑　酔ふて花を揷す莫れ　花も笑ふ莫れ
可憐春似人將老　憐む可し春も人に似て将に老いんとするを

南歌子（南歌子）

天上星河轉　天上　星河転じ
人間簾幕垂　人間簾幕垂る
涼生枕簟淚痕滋　涼は枕簟に生じて涙痕滋く
起解羅衣　起きて羅衣を解き
聊問夜何其　聊か問ふ「夜何其や」と
翠貼蓮蓬小　翠に貼りし蓮蓬は小さく
金銷藕花稀　金銷の藕花は稀なり
舊時天氣舊時衣　旧時の天気　旧時の衣
只有情懷　只情懐有りて
不似舊家時　旧家の時に似ず

聲聲慢（声々慢）

尋尋覓覓　尋ね尋ね覓め覓め
冷冷清清　冷々清々
凄凄慘慘戚戚　凄々惨々戚々
乍暖還寒時候　たちまち暖く還た寒き時候
最難將息　最も将息に難し
三杯兩盞淡酒　三杯両盞の淡き酒
怎敵他　怎でか他に敵せんや
晚來風急　晩来風の急なるに
雁過也　雁は過ぎゆけり
正傷心　正に心を傷ましむ
却是舊時相識　却って是れ旧時の相識なり

滿地黃花堆積　地に満ちて黄花堆積し
憔悴損　憔悴して損はるるを
如今有誰堪摘　如今誰か有りて摘むに堪へん
守着窗兒　窓児に守着をりて
獨自怎生得黑　独り自ずから怎生か黒きを得ん
梧桐更兼細雨　梧桐さらに細雨を兼ね
到黃昏　黄昏に到るも
點點滴滴　点々滴々たり
這次第　這の次第
怎一個　怎でか一個の
愁字了得　愁の字もて了得せん

桐の花影（その二）

忠内正之

義央の御役御免申出

義央は三月二十六日に自ら高家筆頭職の御役御免を願い出て許され、代って養子義周が非役の表高家に登用された。

八月十九日呉服橋の邸を返上して本所へ替地を命ぜられ移住した。赤穂浪人達が吉良邸を襲撃するという噂は益々高まり、隣接した蜂須賀家の難を懼れての運動が功を奏したのと城近くでの不祥時発生を避ける様に考えた幕府の方針だったと言われている。

政治の裏も表も見つくして来た義央にはこの度の屋敷替が何を意味するのかおゝよその見当はついた。厄介な荷物は出来るだけ遠ざけたいのだ。三年前に上杉家の援助を受けて火災後新築した家をとりあげられ不便な古屋敷へ移されるのだから富子夫人は大いに不満だった。妻に優しかった義央は「上杉の白金屋敷に暮すが良い」と以後、富子と七姫（島津家へ嫁入後戻って来た長女）は上杉邸で富子の生母生善院と暮すことゝなる。義央と富子は不仲になったのではない。この後義央はしばしば上杉邸を訪ね宿泊したりしている。

討ち入りと吉良家断絶

本所への屋敷替えは、浅野家への同情の世論が高まり、幕府としても吉良家に対し、何等かの減点措置を取らねばならなかったのである。

郊外への屋敷替えによって結果的に浅野浪士の討入を容易にした点は事実である。しかし幕府が双方のバックである、浅野総本家、上杉家両者の勢力を削ぐため紛争

をより助長しようとした意図があったか、真意の程は不明である。

刃傷事件の翌年の十二月十四日、吉良邸で年納めの茶会が催された。義央は千宗旦について茶道の奥義を極め、自ら卜一と名乗る茶人であった。（上野介の上を分解して卜一とした）

千宗旦の高弟で、宗徧流茶道を興した山田宗徧とは同門である。宗徧は吉田（今の豊橋）藩主であった小笠原家の茶道師範として江戸で名声があり、多くの弟子を擁していた。屋敷も本所にあって移転後の吉良家と近かった。吉良家は小笠原家とも昵懇の間柄にあり、その茶頭である宗徧とは親交を重ねていたのである。

この納め茶会に宗徧も招かれていた。その夜半、突然襲われた。赤穂浪士の討ち入りである。吉良邸では茶会の片付けも終わり、疲れて床につき、安らかな眠りについた。

大石内蔵助以下の浪士は水も洩らさぬ布陣。吉良邸の人々は手も足も出ぬ状態であった。元来、吉良家は刀や槍で奉公する家ではない。いわば幕府における公家的な存在である。仕える家臣たちは、武士としての一応の剣術の心得はあったとしても、平和な世に義央の護衛のための腕の立つ武士は多くは必要としなかった。

上杉家から大勢の付人が派遣されていたようにいわれているが俗説にすぎない。剣客だった新見弥七郎や山吉新八にしても義周の付人であり、義央を防衛するための付人ではなかった。

義央は討たれ、家臣十七人も討死し、重傷を負って後日死んだ者が九人、重傷者十五人を出したのである。

後に吉良の家臣は腰抜け武士ばかりで、まともに刀を合わせることも出来ず討ちとられたと酷評されたが、彼等も主家を思う忠節心をもって全力で応戦したのである。

吉良屋敷の面積は二千五百五十坪、本屋の建坪は三百八十八坪、長屋の建坪は四百二十六坪である。長屋には百人あまりの侍、中間、足軽などがいたが、入口をふさがれたため手も足も出なかった。各長屋から本屋までは数十歩の距離があり、はだしで雪をけってかけつけるあいだにも立ちはだかる浪人どもを斬り払って進むしかない。下に胴着をつけて、膕当、籠手にも鎖を入れ、頭巾にも網鎖をかけた完全武装の浪人が三・四人がかりで斬りかかってくるのだから、寝巻きのまま飛び出した吉良家の侍たちはひとたまりもなかった。

本屋に寝ていたのは十五人ほどの当番の侍と、お茶坊主数人、それに表座敷の居間に寝ていた、当主の義周、奥の隠居部屋に寝ていた義央だけである。これだけの人数でともかくも義央と義周をまもり、みな必死に応戦した。（富子夫人や姫たちは前述の通り上杉の下屋敷に難

を避けていた。もし彼女等が吉良屋敷に居住し実害を受けていたら、幕府の対応はまた変っていたかも知れない。）

浪士の襲撃に備えて、吉良邸には落し穴や抜け道など仕掛けがあり、上杉家から大勢の付人が派遣されていたかのようにいわれているのは俗説にすぎずまったくの無防備だったのである。

上野介は用人の須藤専右衛門と鳥居理右衛門にまもられて台所口にある物置に身を潜めていた。居所がわからず、あせった浪人どもの必死の家捜しでついに発見され、須藤も鳥居も刀がささらのようになるまで奮戦したが相手は多勢、鳥居は首を二つに割られ、須藤も斬り伏せられた。上野介は槍で突かれながらも脇差をふるって戦い台所で討ちとられた。

当主義周も逃げる途中で浪士と出合い、小長刀をふるって戦ったものの、顔や背中に深手を負って人事不省となった。

義周が戦った相手は、不破数右衛門とも武林唯七ともいわれている。二人とも浪士のなかでは屈指の武芸者だから十八才の吉良家当主としてはけなげによく戦った。義周の小長刀には、刃にも柄にも太刀あとがあり、切っ先が折れていたという。

かくして上野介の首は取られ、当主義周は重傷を負った。吉良家の惨状は目を覆う程であった。

赤穂浪士が勝ったのは武力による討入だけでは無かった。戦略にも勝っていたのである。現場に浪士たちはおびただしい武器を捨てていった他に「浅野内匠家来口上」を置いていった。幕府検使目付衆が之を受け取った。

家来口上には時節・場所をわきまえず不調法を働いたために切腹仰せつけられ、領地・城の召上の処断にたいして、まったく異存はなく全面承服していることを強調したうえで「右喧嘩の節」、上野介を討ちとめえなかった主君の末期心底忍びがたく、「君父の讐は共に天を戴くべからず」の名分に従って、「偏に亡主の意趣を継ぎ候志までに御座候」とありあくまでも討入りを正当化しようとしていた。

幕府への反抗という根元にひそむ真意を隠して「君父の讐」とすり替えた内蔵介の戦略の勝利であった。内蔵助の意図はあくまで主家の再興にあり、お家再興が認められていれば、討入りも無かったのだ。この内容に見るかぎり、主君の恩に報いるために命まで捨てようとした、崇高な義士の印象だけが強くのこり、徒党を組んで私宅に乱入し殺人を犯した犯罪者一味が義人視され、刃傷事件が浅野と吉良の「喧嘩」に修正されつつあった。

情報の操作があったとは言えないが赤穂方への世論の傾きが激しくなり幕府も世論に同調をせざるを得なくなった。

桐の花影

当主義周は傷を負ったものの危うく難は免がれたが、義央は浪士に首級を上げられ、泉岳寺の浅野長矩の墓前に供えられた。

後に泉岳寺の寺僧がこれを吉良邸に持参したが、その首級を引き取ったのは左右田孫兵衛と斉藤宮内の二人である。泉岳寺にその首級の受け取り証文が残されている。

義央の遺骸と首は名外科医栗崎道有によって縫合され、その他の傷口も丁寧に手当された上、牛込にある江戸表の菩題寺万昌院に手厚く葬られた。

法名を「霊性院殿実山相公大居士」という。

その万昌院も大正七年、中野区上高田の功運寺に合併され、万昌院功運寺になった。合併により吉良家の墓地も移転、現在の功運寺の墓域に改葬された。移転の時、義央の遺骸を納めた瓶棺も無傷のまま発掘され、これに立合われた当時の功運寺住持が棺の蓋を開けたところ、首も縫合されたままちゃんとしていたという。

この首を縫合した栗崎道有は義周のかなりの深傷をも治療しているが道有の墓と吉良家の墓とは二百歩と離れぬ墓域にある。栗崎家の墓は初めから功運寺にあり、両寺の合併で二百年後同じ墓地に葬られることになったのである。また内匠頭長矩の母方の叔父内藤忠勝により増上寺法要の際斬殺された永井尚長の墓も功運寺墓地に現存する。誠に奇しき因縁である。

蛇足ながら旗本奴(やっこ)の「水野十郎左」と近代作家「林芙美子」の墓も同寺にある。

元禄十六年二月四日幕府の裁決が下った。四大名家にお預かりとなっていた四十六士には死罪切腹が申し渡された。それと同時に吉良左兵衛義周も評定所によび出され判決が下された。

「浅野内匠頭家来どもが上野介を討候節、その方の仕方は不届きである。よって領地召し上げられ、諏訪安芸守忠虎へお預け仰せつける」

義周にはいったいなにが不届きで、島流しの様な処分を受けねばならないのか理解に苦しんだが従わざるを得ない。

義周は左右田孫兵衛、山吉新八郎の二人が付き添い、二月十一日江戸を発ち、十六日諏訪高島に着いた。

蟄居生活は厳しいもので、自殺の道具になるような剃刀などは与えられず、火鉢もなく着のみ着のままで寝間着もなかったといわれる。

宝永元年六月、義周の実父上杉綱憲が亡くなり、續いて八月養母で祖母の富子が亡くなった。

他国でのいわれなき幽閉生活、身内の重なる訃報で絶

望的な日々を送らざるを得なかった義周は宝永三年一月二十日、春を待たず二十二歳の生涯を閉じたのである。ここに名門吉良の名跡は絶えた。

法名を室灯院殿傾巌徹宗大居士といい、上諏訪の法華寺に葬られた。付人の左右田孫兵衛と山吉新八郎が懐金三両を工面して葬ったという。

誠に哀れな生涯といえよう。後年領地吉良の華蔵寺にも墓が建てられたが、この墓は祖父であり、養父でもある義央の墓石と同じ石を二つに割って造られ、胴の中央部分のほぼ同じ位置に斜めにひび割れが走っている。

歴代の墓石が立派な宝篋印塔(ほうきょういんとう)であるのに、この二つの墓は板碑(いたび)で極めて質素なもの、吉良家の栄枯を無言のうちに語りかけているようである。そして二つの墓石のほぼ同じ位置に走るひび割れの線が二人の悲劇と無念さを象徴しているかに見える。

館山市に住む女医さんは、上州吉良家の家来筋の子孫で、義周の厳しく哀れな最期に涙し、諏訪法華寺の墓所に慰霊碑を地元有志の協力を得て昭和四十四年建立した。その碑に

「公よ忍べ　ただひたすらに忍べよかし
公の陰忍は知る人のみの知る　眞の
強さなればなり」　とある。

結び

殿中で刃傷に及べば、身は切腹、家は断絶、領地と居城は没収、家中は離散が決まりであった時代に、浅野内匠頭は何故に敢えて刀を抜いたのであろうか？

その理由は今もって明白では無いし、多分今後も判明しないであろう。これが多くの俗説が面白、おかしく伝えられる所以となったのだ。

この事件から五十年後の宝延元年（一七五一年）に竹田出雲が浄瑠璃に作った仮名手本忠臣蔵では、殿中で刀を抜く程の恨みを持つに至った理由を色々と創作した結果、いまだに絶大な人気をもつ物語りとなった。

この物語りがそのまま事実とは言えないので作者も実名を避けてフイクションとして書いたのである。

しかし、明治時代になって忠臣蔵の物語りは実名になり、この物語りが事実であると思われてしまった。

加うるに戦時に至る軍国主義の増幅期では忠君愛国のモデルの一つとして大いに喧伝された。　このため吉良上野介は悪者の代表にされてしまったのである。

刃傷の原因がはっきりしていないのであるから上野介を極悪人と定めつけるのは理不尽に違いないが流れとしては抗(あらが)い難いものである。

旧吉良領の人々は私も含めて長年肩身の狭い思いをして来た。

戦後から近年に至って歴史が見直され、吉良領に関係する偉人、「足利尊氏」、「徳川家康」と共に「上野介」もまた公平な評価を受ける機運に恵まれて来た。

吉良家の家臣の忠節ぶりは浅野家浪人の死者ゼロに対し吉良家の死者二十六名重傷者十五名を出したことにより、充分認められるべきである。

近年元禄事件の普遍的な評価、検証がなされつつあり、東京中野にある万昌院功運寺、吉良にある華蔵寺の上野介の墓を参詣する人達が徐々に増えつつあるという。

また諏訪高島にある吉良義周の見すぼらしい墓の傍らに立派な慰霊碑が建てられ人々の同情を更に集めていると言う。

前述の万昌院功運寺の住職佐々氏は次の様に言っている。

"お釈迦さまの最後の説法をまとめた「遺教経」というお経の中に「瞋意は猛火よりも甚だし常にまさに防護して入ることを得せしむること勿るべし」と示されている。これは瞋心つまり怒りの心は燃え盛る炎よりも恐ろしいものだから、怒りの心を起こさぬよう、十分に気をつけるべきことを諭された言葉である。

近頃怒りを爆発させて「キレる」ことによって引き起こされる事件が多発している」怒りの心は、命に関わる恐ろしいものだ。内匠頭がどうして刃傷に及んだか、謎は深まるばかりだ。しかしどの様な理由があったにせよ、怒りの心を起こして「キレた」がために、結果として、一体何人の人が命を落とし、また苦しまなければならなかったか。この物語を通じて怒りの心が暴走する恐ろしさをよくよく肝に銘じたいものである。"

吉良家の五三の桐の家紋は高家となってより朝廷から授かったものである。従前は足利一族系の丸に二引きであった。

昭和五十一年吉良町の有志により吉良公家臣供養塔が華蔵寺吉良家墓所の一角に建てられた。併せて「吉良公家臣　桐の花影」なる追悼誌が刊行された。その中に次の一節がある。

「この事変で吉良公家臣の多数が斃れ傷つき、生き残った者も赤穂浪士の名声の陰に世間から冷眼視され寂しく死んでいった。

主君を守って奮戦して忠死し、負傷した吉良忠臣は、赤穂浪士に劣らぬ忠臣義士である。」

以上長々と述べたが「桐の花影」の表題はこの本から引用した。まだ言い足りない諸々の点はいずれ稿を改めたい。

薬草園「天城杏仁の里」（後）

堀内永代

（七）

老中水野忠邦の命令で始まった洋学弾圧事件蛮社の獄の影響が、洋学推進論者江川太郎左衛門の身辺に及ぶ懸念が濃くなってきた。そんな逼迫した状況下であったにも拘わらず、蛮社の獄の総指揮官鳥居耀蔵が、太郎左衛門の危機を救うという事件が起こった。

それが二宮金次郎の報徳仕法史で名高い「韮山仕法物語」である。

韮山代官所からほど遠からぬ韮山多田村に多田弥治右衛門なる豪商がおり、伊豆・駿東地方に手広く商いをしていた。弥治右衛門は、幕府から委託を受けて管理していた幕府御用金一四〇〇両を、放漫経営のため返納できなくなってしまった。

弥治右衛門は当地の名主を勤め、かつ、幕府や小田原藩を始め各地の大名から御用を承る大商人で、永年の地方行政や経済振興に功績があったとして、伊豆、駿河、相模、武蔵の四か国の幕府直轄領における「御吹直し金銀引替御用」を併せ仰せつかっていた。そのため弥治右衛門は役料として幕府より四十五人扶持を賜っており、多田家の破綻は韮山代官として放置できなかった。

御吹直し金銀引替御用とは、幕府財政難改善策として良質小判を改鋳して、金含有量の少ない小判を流通させる金融政策に伴なう新旧金銀貨幣の交換業務である。今日の日本銀行の本支店が行なう新旧銀行券の両替業務と同じような重要な仕事であった。

御吹直し金銀引替御用の商人には、大きなメリットがあった。即ち御用商人は、両替金の古い小判をある一定期間運用する内々の利権があった。多田家もこれにより相当の収益を上げることができたのであった。

しかし、「好事魔多し」の譬えのように、御用商人としての権益が仇となって奢侈放楽を招き、破綻の危機に

晒される結果となったのである。

江川太郎左衛門は、お膝元から発生した幕府の御用商人破綻の不祥事に、代官として責任を問われる事態となり、この一大ピンチを脱するために、当時関東各地で財政復興に非凡な力を発揮していた二宮金次郎にその救済を依頼することになったのであった。

しかし、太郎左衛門には、関東各地の報徳仕法に多忙な二宮金次郎を、伊豆の韮山に招く口実がなかった。太郎左衛門は、善後策を相談するために弥治右衛門を代官所に呼んで、

「弥治右衛門殿、先般より小田原藩を通じて二宮先生に御仕法の指導をお願いしているが、先生は野州桜町領の御用繁多ということで、どうしてもお引受けいただけない。どうしたものだろうか・・・」

太郎左衛門は、太い眉毛の間にたて皺を寄せ、腕組みをして弥治右衛門の顔をじっと見た。

「お殿様、わたくしの不心得で大変なご心労をお掛けして申し訳ありません・・・」

弥治右衛門は、敷居際に平伏してくどくどと詫び言を言うばかりであった。

しばし瞑想していた太郎左衛門は、

「うーん、なんとかよい手立てを考えねばな・・・この際私のメンツなど言ってはいられない。思い切ってあの方にお頼みしてみるか・・・」

「えッ、どなた様で・・・」

藁をも掴む思いで弥治右衛門は、恐る恐る顔を上げて太郎左衛門の様子をそっと窺った。

「うん、その方は御老中水野様にご信任が篤い鳥居耀蔵殿だ。先の江戸湾沿岸調査の折には、私と少々意見の食い違いもあったが、今はそのようなことを言っている場合ではない。鳥居殿と二宮先生とは、利根川分水路工事のことで度々お会いされている様子である。鳥居殿にお願いして、側面から二宮先生にお願いしてもらうのもひとつの方法であると思うが如何なものか・・・」

幕政に通じている太郎左衛門は、その辺りの事情に詳しかった。

「鳥居さまは、水野ご老中さまの懐刀とのお噂でございますれば、ご老中さまのご内意を受けて鳥居さまは、二宮先生と関係がおありということでございますか。さすがお殿様のご眼力でございます」

弥治右衛門は、感服しきりであった。

老中首座の水野忠邦は、二宮金次郎の報徳仕法を高く評価し、特に土木工事の測量に非凡な才能を顕していたので、金次郎を幕臣に登用したいと考えていた。

忠邦の構想を知っていた太郎左衛門は、忠邦の信頼が厚い鳥居耀蔵を頼って、金次郎に接点を求めようとしたのであった。

その頃、鳥居耀蔵は配下の役人から、太郎左衛門が二宮金次郎に韮山仕法を懇請しているが、なかなか進展していないという噂を聞き、用人跡部吉蔵を書院に呼んだ。

「江川殿が、支配地内の金銀引替御用商人の不手際で、大変困っている様子である。なんとか支援してやりたい。江川殿は、野州桜町にいる相州出身の二宮金次郎殿の指導を受けるべく接触しているが、思うように進展していないようであるが・・・」

「はあ・・・」

「ここに二宮殿宛てに『江川殿の話を是非とも聞いてやっていただけないか』という内容の書面をしたためてある。この書面を大至急、桜町陣屋の二宮殿に届けてくれ」

鳥居耀蔵は、用人跡部に手紙を渡して頼んだ。

「かしこまりました」

用人跡部は、かつて江川太郎左衛門に鳥居家の窮地を救ってもらったことをよく承知していた。

「のお跡部、江川殿にはいろいろと借りがある。今度は当方がお役にたって差し上げねばと思うがどうかな」

「仰せの通りでございます」

こうして鳥居耀蔵は、江川太郎左衛門のために一肌脱ぐことになったのである。

鳥居耀蔵からの紹介と太郎左衛門の切なる懇請に心動かされた金次郎は、野州桜町領より相模に出張った機会を利用して、天保十一年（1840）六月八日、韮山に出向き、以後二週間多田家に滞在して韮山仕法を指導したのである。

太郎左衛門は、金次郎が韮山滞在中に、たびたび金次郎を代官屋敷に招いて報徳仕法の詳細について教えを講うたのだった。

「二宮先生は野州桜町において、十年にして今までの悪しき風習を直し、農民は勤勉となり、また荒れ田は見事に美田に変わり、ご領主宇津様の財政も再建されと伺っております。この改善に、二宮先生には何か特別な術を行なったのでありましょうか。是非とも教えていただきたいものです」

太郎左衛門は、領内における飢饉後の復興に苦慮していることを説明し、復興の秘策を金次郎に尋ねたのだった。

「いやいや、わたしが如き者にそのような術はありません。お殿様はお代官としての御威光とお力がお有りで御座いますので、何ごともお進め易いことで御座いましょう。しかし、お上の御威光でもお説教でも、茄子をならせたり、大根を太らせることはできません。わたしは無能無策ではありますが、茄子や大根をならせたり、太らせる仕事を心得ております。この仕事を日々怠らずに務めたに過ぎません。雑草の生えた荒れ田も、草を取って耕し、肥料を入れて耕作すれば、荒れ田も美田になって

米が獲れます。その米を炊けば飯となり、人の言葉を理解しない犬でも、米の飯を食べたいばかりに、尻尾を振り、ワンと啼いて芸をします。これは自然の道理で御座います。わたしはこの自然の道理を住民たちに諭し、『怠けるな、真面目に働きなさい』と教え、住民たちと一緒になって働いただけで御座います。お殿様、わたしには特別な術があったのではありません」

二宮金次郎の道理を究めた天道人道の話に、

「二宮先生のお話に感服いたしました。我が身の至らなさを痛感いたします」

五か国八万石の天領を支配する太郎左衛門は、ただただ金次郎の、私利私欲を離れた真摯な報徳実践活動に感服するばかりであった。

（政治をつかさどる身は、かくあらねばならない）

江川太郎左衛門は、これを機会にさらに善政を施し、領民から『世直し江川大明神』と敬われ、慕われるようになったのであった。

こうして、韮山の多田家は、大商人から一転して貧困の生活に陥ったのであったが、勤労倹約に努めた甲斐があって、父子四代三十五年余を経過して昔日の多田家に再建できたのであった。

このことは、その後の多田家の繁栄と歴代多田家当主の活躍ぶりが証明している。

蛮社の獄で、鳥居耀蔵が洋学を押さえ込もうと必死になっている時においても、二宮金次郎の報徳仕法を太郎左衛門に仲介する労を惜しまなかったように、太郎左衛門と耀蔵との間には、眼に見えない糸のような離れがたい友情の絆があったのである。

（八）

蛮社の獄が始まって二年目の天保十二年（１８４１）五月、老中首座水野忠邦は天保の改革を実施した。鳥居耀蔵は忠邦の推薦により、江戸南町奉行に昇進し、甲斐守忠耀と名乗った。

町奉行になった耀蔵は、さらに洋学弾圧を強め、また、天保の改革に辣腕を振るったので、「耀蔵の甲斐守」を略して「妖怪」と仇名されて世間から恐れられた。

しかし耀蔵は、妖怪の仇名もそんなに気にならなかった。むしろ、

（妖怪には人知では解明できない神通力がある。その神通力を使って政敵を倒すのも、それも人生か）

耀蔵は、開き直ったように苦笑いしていた。

一方、蛮社の獄で処罰を受け、国許の三河に蟄居していた渡辺崋山は、生活費を稼ぐために絵を画いていたが、蟄居中に絵を画いて売るとは不届きだと幕府に睨まれた。

崋山はこれを苦にして、天保十二年（１８４１）十月、

田原の自宅で自殺した。

高野長英も一旦は脱獄して逃亡生活を送ったが、厳しい追及に逃げ切れず、江戸青山の潜伏先で自殺した。

蛮社の獄から三年目の天保十三年（１８４２）五月、鳥居耀蔵は渡辺崋山らの次に、長崎奉行所の町年寄兼鉄砲方の高島秋帆に目を付けた。

そもそも秋帆は、長崎の地役人として金を儲け、洋書や洋式武器を購入し、砲術を学んでいた。

耀蔵は、秋帆のように、地位や権力を利用して金儲けをする人間が大嫌いであった。

秋帆は江川太郎左衛門の砲術教授でもあったが、秋帆が持っている大砲は強烈な破壊力があり、これが倒幕に使われることを恐れた耀蔵は、秋帆を罪に落とすべく罪状を探した。

その結果、秋帆は、佐賀の鍋島、長州の毛利、薩摩の島津などと大砲鋳造について情報の交換をしたり、また大砲を試射したり、あるいは、幕府の許しを得る前から、洋式砲術を太郎左衛門やその家臣、江川塾生らに教えていることが判明し、それらを理由に秋帆を投獄した。

鳥居耀蔵は儒家のエリートで、儒学思想に基づく正義の血が漲っていたので、江川太郎左衛門のように、洋学がいいからといって、直ぐにはそれを学ぶ気にはなれなかった。

だからといって、何がなんでも洋学を反対するということではなく、洋学を学ぶ奴らは、新式武器で軍備を整え、いつ幕府に噛み付くか判らない。それが危険で許せなかったのである。

天保の改革と並行して洋学を弾圧する水野忠邦の命令で、いつかは太郎左衛門を罪に問う時が来るだろう。そんなことを考えていた耀蔵は、ふっと忠邦の鷲のように鋭い眼をした馬面を思い出して身震いした。

こうした中で妖怪こと鳥居耀蔵の黒い手は、次第に洋学推進論者の江川太郎左衛門の方にも伸びている気配が濃厚となってきた。

一方、洋学推進論者である太郎左衛門は、

（何を小癪な鳥居の妖怪、今に見ておれ・・・　近い将来必ず洋学の時代がやってくる。鎖国政策をやめて開国しなければ、やがて日本は外国に侵略されてしまう。中国の阿片戦争が良い例だ。耀蔵も馬鹿ではない。そのことは絶対に判っている筈だ）

そう確信して、鳥居耀蔵の先見性に期待を賭けていたが、独りになるとたまらなく不安になった。

（巨大な幕府の権力には抗しきれないか・・・）

（オレも「妖怪」のために閉門蟄居になるのか・・・）

（鳥居耀蔵は、友情を仇で返すつもりか・・・）

目を閉じて、夜が更けるまであれやこれや考え、悩むのだった。

その時、一瞬睡魔に襲われてうとうとした。すると、「オイ、太郎左衛門の意気地なし。いい年をして何を迷うのだ。情けないと思わないか。カーッ！」

夢枕に現れた父の英毅が、太郎左衛門にカツを入れたのだった。

ハッと我に返った太郎左衛門は、自らの頬を叩いて気合を入れた。

「オォ、父上が夢枕に立たれた。きっと父上も心配しておられるのだ。オレも弱気になったものだ。こんなことではいかん。負けてはいかん」

丹田に力を入れ、大きな目玉をぎょろりと剥いて星空を仰ぐのだった。

韮山代官所の総面積は、三五〇年前に北条早雲が築いた韮山城祉などを含めて五万坪。邸内には三百坪の茅葺きの母屋と茶室、離れ座敷、武器弾薬庫、米蔵、役宅など三十数棟の建物が建ち並び、屋敷の周りには濠が巡らせてあって、城郭のような構えであった。

やがて、その大きな江川家では、誰が唱え出したともなく、

「鳥居の妖怪早く死ね・・」

「とりいのようかいはやくしね・・」

「トリイノヨウカイハヤクシネ・・」

と恨みの言葉が呪文となって、家のあちこちから聞こえてくるようになった。

さらに、『世直し江川大明神』と呼んで、代官江川太郎左衛門を敬い慕う領民たちも、太郎左衛門の身の安全を一緒になって祈っていた。

豪放磊落な江川太郎左衛門も、鳥居耀蔵が指揮する南町奉行所の動向に、ピリピリと神経を尖らせるのだった。

（正しい者が必ず勝つ）

太郎左衛門は、そう信じて洋学弾圧に耐えた。太郎左衛門の妻やすも必死に夫を支えていた。

韮山代官は、韮山と江戸の両方の代官役所を交互に執務することになっていた。その年の十一月、太郎左衛門は月番で江戸役所へ出発した。今度も三ヶ月は江戸滞在となる。

太郎左衛門を見送った妻のやすは、代官所の茅葺き長屋門の前で、下田街道を江戸に向かって進む夫の姿が点のように小さくなるまで、じっと見送っていた。

江戸本所の代官役所に到着した太郎左衛門は、天保の大飢饉の後遺症に苦しむ武蔵・甲斐の治世に精力を傾けつつも、鳥居耀蔵の動向に細心の注意を払っていた。

一方、韮山で留守を護る妻のやすは、蛮社の獄があった後は、一刻とて気の休まる日はなく、特に夫の太郎左衛門を江戸に送ったこの日は、何か異変が起こりそうな予感がしてならなかった。

江川家は、三百坪の母屋の真中に、ふた抱えほどもある生きた欅の木をそのまま用いた大黒柱がある。家人は、この大黒柱を『生き柱』と呼んで神聖視していた。

留守を預る太郎左衛門の妻やすは、その夜半、ふと目が覚め、寝返りを打って廊下を見ると、生き柱へ通ずる廊下の暗闇から一人の男が現れた。

総髪ざんばら髪のその男は、左手首を右手で押さえながら、くずれるように斜めに座わった。見ればその男の右手の指の間から、ポタリポタリと血がしたたり落ちている。

「あれ、血が・・・・・」

あまりの不気味さに、やすの声はかすれていた。その男は無言のまま、やおら右手を懐に入れ、書物のような物を取り出して、やすに差し出した。見ると黒い革表紙の洋書であった。

「その本をどうするのですか？」

やすは、それを受取ろうとしたが、恐怖のあまり指が硬直して、その洋書を掴むことができなかった。

その男の唇がわずかに動き、

「ワタシは、オゼキサンエイ・・・・・」

聞きなれない名前を耳にしたやすは、

「おぜきさま？わが夫、江川に何かご用が・・」

やすの問いかけに、その男は安心したようにわずかにうなずいて、暗闇の中にすうっーと消えていった。

やすはハッと我に返り、

（おぅー恐ろしい・・・今のは夢か幻か・・・きっと妖怪のたたりに違いない）

やすは、直ぐに家人を呼んで、今の恐ろしい幻影を話して聞かせた。用人の前田良己は、

「そのお方は、先般、蛮社の獄で責めを負われ、左手首の動脈を切って自殺した小関三英先生に違いありません。殿様に何かを伝えたかったのでは・・」と推理するのだつた。

「あれは小関先生の亡霊でしたか。もしかしたら韮山にも妖怪の手の者がやってくるという知らせでなければよいが・・」

やすは、今の恐ろしい幻影が、単なる夢であってくれるようにと願わずにはいられなかった。

翌朝、やすは代官所の全員を広間に集めて、不審な者に十分注意するように話した。

それからというものは、江川邸の周辺で、見知らぬ男の姿を見ては妖怪の手の者が来たか、明日は来るのかと恐怖の日々が続き、昼も夜も一刻とて心休まる時がなかった。やすは日に日に追い詰められていった。

代官所の役人も家人と共に、来る日もその次の日も緊

張の連続で憔悴していた。

その頃、南町奉行鳥居耀蔵は、原因不明の高熱を出し、四肢疼痛に冒されて病の床で苦しんでいた。そして必死の看病も効き目がなく、高熱が下がらなかった。現代のインフルエンザであろうか。まさに鬼のかく乱である。

天保の改革や蛮社の獄の激務で、さすがの耀蔵もダウンしたのであろう。

「妖怪が『妖怪』に取り憑かれた。ざまを見ろ」

耀蔵の病気を知った江戸の町民は、白い眼を向けて嘲笑い、さらに、

「妖怪も神通力を失って　熱に浮かされ元の耀甲斐」

などという狂歌まで、巷で流行り出していた。

耀蔵が、原因不明の高熱で苦しんでいることを知った太郎左衛門は、かつて浦賀で風邪をひき、耀蔵から、風邪薬を見舞いに貰ったことを思い出し、

（やはり、お礼のお返しをしなくてはならないな・・・）

そう思って、新種の『三島サイコ』と西洋医薬のしびれ薬（コカイン）を、見舞状と共に家来に持たせて耀蔵を見舞った。

この新種の三島サイコは、太郎左衛門が韮山の温泉薬草園で、従来のサイコと葛根を交配させて品種改良した薬草で、それを韮山から早馬で取り寄せたものである。

しびれ薬については、洋学を忌避する耀蔵に西洋医薬であることを内密にした。太郎左衛門は、見舞状に、

「同封の薬のうち、白い薬包紙の散薬は、最近韮山の温泉薬草園で品種改良した新種の三島サイコで、最高の解熱剤である。もうひとつの赤い薬包紙の散薬三包は、無臭で舌にピリリと刺激があるが、痛覚を一時的に抑制し、痛みをやわらげる効能がある。風邪の症状が治まっても、四肢の痛みが取れない時は、騙されたと思って赤い薬包紙の散薬を服用されたい。ただし一日一包に限る」

と書き添えた。

半信半疑で、三島サイコと赤い薬包紙の頓服薬を飲んだ耀蔵は、薬効の速さに驚いた。看病のために付き添っていた用人の跡部吉蔵に、

「跡部、江川殿からお見舞いにもらった新薬で熱も痛みもとれた。それに赤い薬包紙の頓服は何という名の薬か知らないが、実に良く効く。西洋医学も満更ではないな・・・」

と、あごを突き出して、真面目な顔で眩いた。

用人の跡部は、

「いかにも、症状に合せる経験医療の漢方医学もよろしいが、病原を診断して治療する西洋医学も、これから流行りましょう」

と耀蔵の心底に少し探りを入れるのだった。

「そうだな、おれも少しは西洋医学を学ばねばなるまいかな・・・　それにしても江川殿は義理堅いお人だ。彼の友情に感謝しよう」

表面では洋学を弾圧しながらも、心の中では太郎左衛門を信じ、西洋医学を容認している耀蔵の横顔を見て、

（やはり殿様は、何もかも承知していなさるわい・・・）

跡部は、独り頷いていた。

（九）

その翌年の天保十四年（1843）九月、衆望を担って天保の改革を断行した老中首座の水野忠邦は、改革案の目玉として、江戸、大阪周辺にある大名旗本の知行地を返上させる「上知令」を公布した。

しかし、この上知令は、大名や旗本の大反対に遭って挫折してしまった。

さらに、強引な「贅沢禁止令」はささやかな庶民の楽しみを奪う結果となり、町民の反感を買ってわずか三年足らずで改革は失敗し、水野忠邦は老中を退いた。

そして、天保の改革推進に辣腕を振るった鳥居耀蔵も、水野忠邦の失脚に連座して、その翌年の弘化元年（1844）九月、南町奉行を罷免された。

妖怪と仇名され、江戸町民の心胆をも寒からしめた凄腕の耀蔵も、弘化二年（1845）十月、二五〇〇石の家禄は没収され、四国の丸亀藩京極家へ永預け（終身禁固刑）となり、四国へ護送されることになった。

耀蔵は、一種の政争の犠牲者であったのである。

耀蔵の身柄を預る丸亀藩は、総数五十人の大護送団を編成して四国へ向かった。

耀蔵を護送する乗り物は、罪人用の唐丸籠ではなく、質素ではあるが士分用の駕籠を用意し、一日七里から八里の行程で進んだ。耀蔵は、道中駕籠に揺られて身体の節々が痛み難渋したが、これも運命かと思って耐えていた。

駕籠は箱根峠を越えて、四日目の夜には三島の宿に到着した。

この地は、旧友江川太郎左衛門に度々助けられた土地である。

（江川殿、貴殿には大変お世話になった。これからは貴殿の時代がやって来るだろう。存分に活躍されることを祈っている）

江川太郎左衛門の友情に感謝し、彼の将来に期待を賭けるのだった。この感謝と期待の気持が、失意の耀蔵をかろうじて支えていたのである。

翌朝は晴れていたが、富士山は笠雲をかぶっていた。笠雲は雨の予兆である。明日は、耀蔵の都落ちを哀れんで雨が降るだろうか。

三島方面から見る富士山は、どっしりと構えて雄大であるが、囚人として護送される耀蔵には、霊峰を賞美す

る心の余裕はなかった。

水野忠邦が失脚した後、開国派である備後福山城主の阿部正弘が老中首座に就任した。遂に洋学派江川太郎左衛門の活躍する舞台の幕が揚がった。そして韮山の江川邸にも明るい陽光が射してきた。

(これからは思う存分に洋学の勉強ができるぞ)

庭先に出た太郎左衛門は、両手の拳を大空に向かって突き上げ、

「よーし、がんばろう！　日本のために頑張ろう！　あの大空を新しい風になって吹き渡ろう」

開放感を全身に表わして、思いっきり大声で叫んだ。

ところで、熾烈を極めた「蛮社の獄」で、多くの犠牲者が出たにも拘わらず、なぜ江川太郎左衛門は難を逃れたのだろうか。それは、

(太郎左衛門と耀蔵との、二人の間の友情だったのだろうか？)

(高熱の耀蔵に薬をやって、命を救ったからなのか？)

勿論、そうした事情もあつたであろうが、

(近い将来、日本にも必ず西洋文明が入ってくる。その時には、太郎左衛門のような近代的知識人が必要だ)

耀蔵は、内心では西洋学問の必要性を認めていたからであった。だから太郎左衛門を洋学弾圧の魔手から守ったのである。

太郎左衛門は、耀蔵の友情と先見性にいたく感銘を受けて、

(鳥居殿の友情に報いるためにも、欧米列強の侵略から必ず日本を守るのだ。そのために全力を尽くそう)

遥かなる西の空に向って固く誓った。

空を見上げた太郎左衛門の目は微かに潤み、四国の丸亀へ去った耀蔵の友情が、何時までもいつまでも胸の中から消えなかった。

一方の鳥居耀蔵は、四国の丸亀で失意の幽閉生活を送っていたが、幸い丸亀藩京極家は耀蔵の姪の嫁ぎ先であり、特に藩主京極高朗の意を汲んだ家老の佐脇大善が、何くれと無く気配りしてくれたので、耀蔵は不自由な生活を強いられることはなかった。

その後、安政元年（1854）の暮、佐脇大善が江戸から帰り、

(旧友の江川太郎左衛門が、老中首座の阿部正弘に命ぜられて、アメリカ大統領の特使ペリー提督との和親条約の締結に尽力し、さらに江戸湾お台場（五基）の建設、伊豆韮山反射炉の建造、ロシヤ海軍プチャーチン提督の乗艦ディアナ号座礁事件の解決などで大活躍している)

などと最新情報をもたらした。この朗報を聞いて、

(よかった。蛮社の獄の時に、彼を罪に陥れなくてよかった。おれが思っていたとおり、彼は新しい時代に必要な人物であったのだ。おれの判断は間違っていなかった)

耀蔵は遥か東国の空を仰ぎ見て、太郎左衛門の太い眉、大きな目玉、厚い唇の男らしい顔を思い出して、十余年前を懐かしんだ。

その翌年の二月、家老の佐脇大善が病に臥し、大善に替わって、耀蔵にあまり好意を持たない横目付の土岐軍蔵が監視役になった。

監視役が替わってから、今までは、折に触れて伝わってきた江戸の情報がピタリと止まり、江川太郎左衛門のことは勿論、鳥居家や実家の林家のことも皆目判らなくなってしまった。

耀蔵は、丸亀に幽閉されて十年経った六十歳頃から、風邪をこじらせて、呼吸器系統の病気に悩まされるようになった。

藩主も姪の夫京極高朗から養子の京極高徹に代替わりして、耀蔵の病気を治す薬までが、極端に制限されるようになった。

やむを得ず耀蔵は、幽居の空き地に薬草を栽培して、自ら薬を調達することにした。

薬草園とは名ばかりの空き地を耕す耀蔵は、

(江川殿は今頃どうしているかな。伊豆の薬草園『天城杏仁の里』はどうなったかな。三島サイコは栽培されているかな・・・)

鍬を持つ手を止めて、遠い昔のことに想いを馳せるのだった。

耀蔵は、幼い時より幕府学問所で人の何倍も勉学し、また、父林述斎の教えで本草学や漢方医学も学んだので、儒学と共に医薬の知識も豊富であった。そのため、丸亀藩士が交替で教えを受けに来たり、経済的に困窮している町人や農民も大勢診察や投薬を受けに来た。

古稀を過ぎた耀蔵が、庭で栽培した薬草を薬研で擂って薬を調合する様子や、柔和な眼差しで患者を診察する姿を見た町の人々は、この人がかつて、江戸の町民から『妖怪』と恐れられた鬼目付・鬼奉行であったとは、誰一人気付かなかつた。

囚われ人の耀蔵は、治療代や薬代は一切受取らなかったので、

「先生さま、おありがとうございます・・・」

丸亀の人々は、伏し拝んで耀蔵の仁術に感謝した。

この頃、江川太郎左衛門は病に倒れ、安政二年（1855）一月、多くの人たちに惜しまれながら、五十五歳でこの世を去った。

しかし、緘口令を敷かれた丸亀藩内からは、誰一人として太郎左衛門の死を耀蔵に伝える者はいなかった。

（十）

耀蔵が丸亀に幽閉されてから二十二年後の慶応三年（1867）十月、十五代将軍徳川慶喜は大政を奉還し、二百七十年続いた徳川幕府は遂に終焉した。その翌年六月、年号は明治となり、耀蔵は晴れて自由の身となり、江戸に帰ることになったのである。

大政奉還が行なわれ、徳川幕府がなくなったことで、耀蔵に対する処罰は、自然消滅的になくなった。

そのため、京極家の家臣が、耀蔵に自由の身となったことを伝えたところ、

「私は徳川将軍から命ぜられて四国に来た。だから、将軍の赦免状がなければ、この座敷牢から出ることはできない」

耀蔵は頑なに出獄を拒み、世話をする丸亀藩士をてこずらせた。義を重んずる儒家のエリート耀蔵ならではの話である。この頑固さが、違う立場にある太郎左衛門との友情を守り通したのかも知れない。

明治元年（1868）十月十六日、耀蔵は丸亀を出発して、江戸に向かった。

それから二十日後の早朝、駿府を立って薩埵峠の見晴台に立った。

真正面に、真っ白な綿帽子をかぶった富士山が見えた。

富士山は耀蔵の帰還を祝福するかのように、やわらかな綿雲に包まれて、優しく雲の上から見下ろしていた。

眼下には、朝日をうけてキラキラと輝く紺碧の駿河湾が見えた。

その向こうには、伊豆半島が靄の中に横たわっていた。

二十三年前、囚人として西国に護送された時とは違って今は自由だ。自由とはなんて素晴らしいことだろう。

耀蔵は、青空に向かって思いっきりあごを突き出し、両手の拳を突き上げて叫んだ。

「アイ・アム・フリー！　フリー！　フリー！」

耀蔵は、港町の丸亀で習い覚えた英語で、

（オレは自由だ！　自由だ！　自由だ！・・・）

と快哉を叫んだのだった。

（そうだ、正面に見えるあの箱根峠を越えれば、江戸まで三日である。伊豆の韮山には、旧友江川太郎左衛門の代官屋敷がある。日本の鎖国政策も終り、太郎左衛門が熱っぽく語っていた新しい時代がやってきたのだ。遂に洋学の時代が来たのだ。おれもよくぞここまで生き延びたものだ）

耀蔵は、文明開化に遭遇できた幸運を天に感謝し、在りし日の太郎左衛門との交友を懐かしく思い出した。

喜色満面の耀蔵を見て、

「お殿様、長い年月をよくぞご辛抱なされました。まだまだご武運は尽きませぬ。私たちもお供した甲斐がありました」

付き添いの鳥居本家の家臣たちは、口々に耀蔵に祝詞を述べるのだった。

「ありがとう・・そなた達のお蔭で、今日まで無事に永らえました。おおきにお礼を申します」

祝いの言葉を聞いた耀蔵は、年老いて丸くなった背をさらに丸くして、深々とお辞儀をし、心から感謝の気持を表わした。

その日の夕刻、耀蔵一行は三島宿に到着し、明日は箱根越えである。東海道随一の難所を前にして耀蔵は、三島神社の大鳥居をくぐり、神殿に額ずいて平安を祈願し、三十年前を回想した。

その日は三島神社前の旅籠大平屋へ一泊した。

その夜耀蔵は、宿の主人植田芳太郎から、

「江川家は太郎左衛門様が亡くなり、次男英武様が家督を相続されました」

と聞かされた。

「えっ！　江川殿が死んだと・・・」

耀蔵は、あごを突き出して一瞬絶句した。固く握った拳がぶるぶると震えた。

「それは本当か・・・　おれより五つ年下で、あの頑健な江川殿が死んだのか・・・」

耀蔵は大きなショックを受け、悲しみで胸が締め付けられた。

（残念だ！　今日のおれがあるのは、彼との交友があったからだ。そうだ、明日は江川殿のお墓にお線香を上げさせてもらおう）

七十二歳になった耀蔵は、宿の主人に気付かれないように、そっと目頭を押さえた。

翌早朝、耀蔵は、宿の主人に教えられた近道を通り、太郎左衛門が葬られている江川家の菩提寺、韮山村の日蓮宗本立寺へ向かった。

耀蔵一行は、江川邸の前を通って本立寺に着いた。

太郎左衛門の墓は、百基ほどある江川家歴代の墓石の中で、一段と高い場所に立てられてあった。持参した花を手向け、香を焚いて太郎左衛門の冥福を祈った。

「江川殿、もう一度、貴殿の文明論を聞きたかった。残念でならない」

耀蔵は墓石に向かって、生きている人に話し掛けるように語りかけたのだった。

墓参を終えた耀蔵は、本立寺の山門を出て、太郎左衛門が心血を注いで建造した韮山反射炉を見学した。

その時ふと、かつて自分が情熱をこめて造園した伊豆大平柿木村の薬草園「天城杏仁の里」を訪ねてみたくなった。

韮山から大平柿木村までは往復十里の距離である。
付き添いの鳥居本家の家臣三人と共に、大仁の温泉場を通り、狩野川に沿って一路天城を目指して歩を進めた。
耀蔵は、自由の身になった開放感から血色も良くなり、付き添いの若い家臣に負けないくらい軽快な足取りであった。
途中、狩野川の上流に架かる『松ヶ瀬吊り橋』で一休みした。夏場なら鮎やヤマメが豊富に捕れる処である。
大きく揺れる吊り橋の上から、音を立てて流れる狩野川の清流を見下ろしていると、波紋が広がって、太郎左衛門の顔のように見えて、眼を閉じた耀蔵の瞼に青年時代の情景があざやかに蘇えるのだった。

小休止の後、吊り橋を渡り、さらに、狩野川の支流柿木川に沿って一段と険しい山道を登って行った。薬草園はもう直ぐだ。
耀蔵の感情は次第に高潮してきた。やがて切通しを抜けると、視野が開けて大平柿木村の棚田が一望に見渡せた。
眼下に広がる薬草園が、千メートル級の達磨山山系に連なる斜面に、幾段にも幾段にもなって、天まで届きそうに造られてあった。
「やや、あるある、薬草園がある。これは見事な薬草園だ」
耀蔵は、あごを突き出し、坂道を転がるように駆け下りて薬草園の真中に立った。耀蔵の老顔が紅潮し、息づかいが弾んでいる。
二十三年前に転作された筈の薬草園が、江川家の指示によってしっかりと管理されていたのである。
これも「友情の賜物」であった。
いま眼の前に拡がる薬草園には、天城蹯躅がある。楠木、規那の木、石楠花がある。甘茶、山椒、赤目柏もある。向こうには枸杞もある。葛根、万年青、十薬、千振、蓬、山芍薬がある。やや、芥子もあるぞ。薄荷、唐胡麻、ジギタリス、萇茗もある・・・ あるある色々ある。新しい薬草もいっぱいあって、三十年前よりさらに充実している。
「おーぅ『三島サイコ』がある・・・ おれが夢にまで見た三島サイコが立派に育っている」
耀蔵は、薬草園の真中に座り込み、三島サイコをいとおしむように、老いて痩せた両手で包み込んだ。
耀蔵は、万感胸に迫り、目頭がじんと熱くなってきた。うれし涙が零れ落ちた。

やがて知らせを受けて村名主の山田安蔵が駆けつけて来た。
「お殿様、お懐かしゅうございます。安蔵でございます。ご壮健で何よりでございます・・・ オォォ・・・」
安蔵は耀蔵の前に膝を付き、大きな身体を震わせてあた

り構わず号泣した。耀蔵は、安蔵の手を取って、
「おう、安蔵殿か・・・ 覚えていてくれたか。父御の大造殿は息災か・・・ そうか七年前に亡くなったのか、それは気の毒なことであったな。それにしてもよくぞ薬草園をここまで管理してくれた。改めて礼を申す」
「いえいえ、お情け深いお殿様が大事になされました薬草園でございます。それを管理するのは私の務めでございます」
名主の安蔵にとって薬草園の管理は、徳政を施したかつての領主鳥居耀蔵への恩返しであったのだ。
「それほどまでに思っていてくれたか・・・ 済まなかったのぉ」
「お殿様が四国に行かれました後、この薬草園は、韮山のお代官江川太郎左衛門様の支配地になりました。その折にお代官様は、『鳥居様は何時の日か必ずこの地に戻られる。その日まで、今まで以上に薬草園をしっかり管理せよ』と仰せられました」
安蔵は、旧友を気遣う温情あふれる代官江川太郎左衛門のことを、懐かしく思い出した。
「それは知らなかった。江川殿がのぉ・・・ そのように気を使って下さったのか。江川殿は何もかもお判りだったのだ・・・」
耀蔵は、故人となった太郎左衛門の友情に、改めて感謝するのだった。
「江川太郎左衛門様は、不幸にして十二年前に亡くなられましたが、私ども村の者はお代官様のお言葉を遺言とお受けして、今日まで薬草園をお守りして参りました。お殿様がお代官様と保護栽培をお約束なされました三島サイコも、今が丁度収穫によい頃です。この根がサイコでございます」
涙を拭った安蔵は、懐から紙包みを取り出した。
「安蔵殿、ありがとう・・・ それでサイコの出来はどんなかな・・・」
耀蔵は、安蔵が差し出した三島サイコの根を口に含んだ。サイコの根は、ほろ苦い味がした。この味が、
(武士の友情の味なのだ・・・)
耀蔵はそう思った。思ったとたん、眼から涙が一すじ流れた。
見上げると、澄み切った青空に白い雲が一片浮かんでいた。その雲が、太い眉、大きな目玉、大きな口をした太郎左衛門の顔のように見えた。
(この雲が『友情の雲』だ)
と耀蔵は思った。
耀蔵は、いつまでも、いつまでも、雲の形が変るまで、伊豆の青空を見上げていた。

(終)

（司馬雑感　十四）

司馬遼太郎の東北物語（二）

山田嘉久

「四千五百年前の巨木木柱出土」との新聞の見出しに多分、司馬は（これは私の想像だが）膝を叩いて喝采を叫んだであろう。想像したとおり「北のまほろば」は事実だったと。

そして早速、この年の夏に再びこの地を訪れるのである。

（一）三内丸山遺跡

平成一九年秋の我々の津軽旅行の目玉もやはり三内丸山遺跡だった。

広大な土地に縄文前期から中期（約五千年前―四千年前）の大小の竪穴住居や高床建物などが十数棟も復元されていた。

従来の縄文時代への考え方―縄文人は一家族か数家族が移動して暮らしていたので、ムラを作らないーと全く違って此処ではムラ（大集落）を持っていたのである。

また高床式の掘立柱建物は食糧の貯蔵倉庫と考えられ、縄文人は採り歩き食べ歩いたという古い縄文観は完全に覆った。

大人の墓、子供の墓も出てきた。ある場所に「骨を埋める」という意識は定住を決めた縄文人の証だろう。

さらに驚くことには六個の巨大な柱穴が出てきたことから、此処に一大楼閣が聳えていたことまで分かった。

同じ望楼の柱穴は弥生時代の佐賀県吉野ヶ里遺跡からも出てきたが、それよりも三千年も古いのである。

柱穴は二、二㍍の深さに掘られており、底にはクリの柱根も残存していた。大きいものは直径一㍍に及ぶ。柱の間隔はほぼ正確に四、二㍍だという。

クリの木の丸太を組んだ高さ十四、七㍍の楼閣も復元されているが、現地ガイドの説明だと現在、クリの木は日本では入手できないので、ロシアから運んだという。

遺跡から出土したクリのDNAを調べると、野性のものを拾い集めてきたとは思えないので、クリを栽培していたのではないかの推論も成り立つとの説明だった。

望楼跡に立った司馬は一つの想像をしている。

人々は丸木舟に乗って海で漁をする。終わるとこの高楼を目指して帰ってくる。もし海から帰らない者がいる時には首長があかあかと望楼に火を焚かせ、戻るまで首長は待っていたであろう。

その首長の首には、その当時権威の象徴だった翡翠がぶら下げられていたのではないかと。

その翡翠製品は他の土器、石器と共に広大な遺跡ゾーンの片隅にある資料室内に展示されていた。驚くことに翡翠は、遠く離れた越後の糸魚川の産だという。縄文の時代、遠隔地との交易も盛んだったことを示している。

司馬はその翡翠を実際に掌にとって観察している。

「野球ボールほどのもので、二つとも紐通しの孔が、きれいに貫通されている。掌にのせると、ばかに重かった。資料室にはこの地で出土された様々な大きさや形状の石鏃（矢の先につける）が陳列されていた。旧石器時代の石ヤリ主体から弓矢主体に変化したことがわかる。また獲物に応じて使い分けたのであろう。

司馬は彼と親しい考古学者の森浩一教授の話を紹介している。

「縄文時代にどうしてこんなに東北が栄えていたのか。近畿全部の縄文土器よりも、此処のほうがはるかに多い。力の差、量の差がある。」

同じ縄文遺跡でも、遮光器土偶で知られる亀ヶ岡縄文遺跡は縄文後期（または晩期）に属するらしい。

その中心地木造町は三内丸山より遥か西方、日本海側にある。

この町を訪れた司馬の動機が面白い。

相撲好きな司馬は特に「津軽風の憂いと羞らいを含んだ」元横綱旭富士の贔屓だったが、その旭富士が土俵に

3「北のまほろば」を歩く

司馬遼太郎が若い頃から好きだった作家太宰治は、故郷青森県（津軽、南部、下北）を「悲しい国」と嘆いたが、司馬はこの地方を、逆に「北のまほろば」と讃えた。「山や野に木の実がゆたかで、三方の海での渚では魚介がとれる。走獣も多く、また季節になると、川を食べもののほうから、身をよじるようにして―サケ、マスのことだが―やってくる。そんな土地は、地球上にざらにはない。」

なお「まほろば」とは「古事記」や「日本書紀」に出てくる古語だそうで、伝説の日本武尊が異郷にあって望郷の念をこめて大和のことをそう呼んだという。

司馬がこの地方を旅したのは平成六年一月のことだが、偶然にもその旅を終えた直後に、この地で三内丸山の縄文遺跡が発見された。

あがると「青森県西津軽郡木造町」の場内アナウンスが響き渡る。その地名のなつかしさにひかれてこの町を訪れたくなったというのである。

そして実際訪れて、初めてこの地が世界的に有名な「亀ヶ岡遺跡のある町」であることを思い出した。

古代人は人体の好きな（あるいは神秘的な）部分を思いきって誇張したが、この土偶では目がこれに当たり、両眼が顔からはみでるほど大きく、しかも瞳はない。逆に鼻孔と口はごく小さく付け足されているだけである。

また胸の乳房は強調され、四肢が極端に短い。

強調された両眼がエスキモーが晴れた雪原でつかう遮光器に似ていることから考古学では遮光器土偶と呼ばれた。大きさは二十センチ弱だそうだが、JR木造駅舎に聳える土偶は巨大である。

「駅舎をみて、仰天する思いがした。遮光器土偶が、映画の怪獣のように駅舎正面いっぱいにたちはだかっている」と司馬は書いている。

私は始めてこれを見たとき、岡本太郎の「芸術は、爆発だ」を思い出したが、我々が見ても多少グロテスクではある。だが、司馬は「気弱とされる津軽人も、時には床を蹴破って起つあがるときもある。それがこの巨像かもしれない」とかなり好意的である。

（二）十三湖と鰺ヶ沢

木造町を北上すると日本海側に中世、日本海海運の拠点として栄えた十三湖（じゅうさんこ）（十三湊（とさみなと））がある。その先が津軽半島突端の竜飛岬である。

十四世紀の室町時代、海運で栄えたこの地方を本格的都市としたのが、豪族安藤（安東）氏だった。十三の砂洲の上に安藤氏居館、家臣団屋敷群、寺社群、港湾施設などが集中していた。同時に大土塁と塀が建設され防衛施設とした。港湾都市でありかつ政治都市の「中世都市十三湊」の完成である。

この当時、十三湊安藤氏は「日の本将軍」といわれた。まさに此処は中世の「まほろば」だった訳である。

しかし室町末期に成長してきた南部氏によってあっけなく亡ぼされた。と同時に十三湊の繁栄も終わった。

追われた安東氏は北海道に渡ったとされているが記録が乏しいらしい。忽然と歴史上から姿を消した安東氏の謎めいたところが歴史愛好者にとってのたまらない魅力なのであろう。

その幻に近かった中世十三湊の実像は近年、国立歴史民俗博物館などによって発掘調査が行われているようで、我々が訪れたときにも地元の人たちが発掘していた。

すべては土の中だが安東氏ゆかりの景観として福島城址や山王坊、日吉神社などが僅かに残っている。前者は安東氏居城跡だが、後者の鳥居のてっぺんに更に小さなそれを載せた「二重鳥居」が珍しかった。

案内してくれた男性は十三湖内の小島（中の島）にある「市浦歴史民俗資料館」の職員らしかったが、館内にある食堂の主人も兼ねているようで見学が終わってからこの食堂にも案内された。

しかし此処で食べた名物の蜆汁は旨かった。

司馬も此処で同じように蜆汁を吸っている。

日本海側を逆に南下すると鰺ヶ沢に出る。

時代はずっと下がって江戸時代に北前船で栄えた港町である。鰺ヶ沢は津軽藩の商品経済（流通経済）の中心であった。

津軽の廻米は鰺ヶ沢に集められ、上方に送られて換金された。上方から戻ってきた船には津軽ではできない木綿が積まれていた。その他、古着、塩、雑貨など。

我々は鰺ヶ沢港近くのホテルに泊まったが、翌早朝、港付近を散歩した。近くにある小学校の名が「舞戸小学校」とあったので、始めてこの地が技能力士だった舞の海の出身地であることを思い出した。通りすがりの地元の人に聞くとやはりそうで、校庭には立派な土俵まであった。

津軽地方は名力士を産出することで知られ、旭富士、舞の海のほか、この近くの浪岡町出身に五十九代横綱隆の里、大関貴ノ浪がいる。

司馬はこれら津軽出身の力士がすべて温和で整った容貌の持ち主であることに着目して、あるいは彼らは北海道から渡ってきたオホーツク人の末裔ではないかと別の随筆で話を飛躍させている。

オホーツク人といえば前記三内丸山遺跡も環オホーツク文化圏内の一拠点（ユジノサハリンクスなどと共に）と考えられる説があるそうだ。また、三内丸山で出土した土器と中国赤峰から出た土器の形状が酷似していることから共に環日本海文化圏の一環とみる考え方もあるそうだが、考古学の知識に乏しい私など頭が混乱するばかりである。

（三）石場家

現在の青森県は西半分が旧津軽藩領、東半分が旧南部藩領の一部、さらに下北半島が旧斗南藩領からなっている。

司馬もこの本で「津軽衆と南部衆」という章を設けて「三者それぞれ歴史と風土、習慣を異にする地域でいわば寄せ集めであった」と書き、

「江戸時代、南部と津軽は犬猿の仲であることも、よく知っていたはずである。津軽の殿様が参勤交代で江戸へ往還するときも、南部領も一度も通らなかったことでも分かる。南部藩のほうも通さなかった。」ことを披露している。

そして「北のまほろば」では、共に案内役であった南部衆の鈴木氏と津軽衆の菊池氏が同席した酒場で悪口を言い合うのを楽しげに観察している。

尤も攻勢は鈴木氏の方で「津軽特有の含羞の持ち主である」菊池氏は専ら受身に回っている。

鈴木氏の言い分では、ことの起こりは津軽藩初代の為信が南部領を掠め取ったことによるという。中央に豊臣政権が出現すると、為信はいち早く秀吉に接近して、津軽三郡の安堵を得た。

「南部はいつもわりを食ってきた」というのが鈴木氏の言い分であるが、その喧嘩相手の津軽衆である菊池氏が案内役として、我々の弘前見学に参加した。

たまたま今回のリーダーであるK先生のNHK時代の部下だった関係からK先生が口を掛けたらしい。

案内役といっても寡黙な菊池氏は長身をまげて我々の後に付いてくるだけだったが、夜のホテルでの宴会時には珍しく熱弁を吐いた。司馬を案内したときの思い出話だったが、その中で司馬が「例え志賀直哉がいなくとも日本文学は成り立つが、太宰治がいなかったならば日本文学は成り立たない」と語っていたとは印象的だった。

席上、菊池氏は「三内丸山縄文会」という月刊のパンフレットを皆に配ったが、最新号に「夢追う平成の縄文人司馬遼太郎さん」と題したエッセイを載せていた。

それには平成十三年、司馬遼太郎賞が三内丸山発掘チームに贈られたことにも触れていた。

我々は弘前城見学の前に、亀甲門前にある重要文化財の「石場家住宅」を見学した。

同家は津軽藩の初代藩主時代から御用商人として、雑貨荒物を手広く扱っていた豪商で二百年後の現在でも酒、塩の販売を営んでいる。

住宅内は大きな梁や指物を使用した豪壮な構えとなっているが、通常の観光客には部屋の内部までは見せてくれない。しかし今回は菊池氏と旧知の現在の当主が自分の部屋を含めて各部屋を特別に案内してくれた。彼は片手に「北のまほろば」一冊を抱えながら説明してくれた。

また住宅内の土間には司馬が当家の家刀自と語り合っている写真が数枚貼ってあった。

この刀自は弘前高女時代、石坂洋次郎の教え子だったようで、司馬との話の内容はこの本の一章「石坂の洋さん」に詳しい。

それによると石坂は女学校で問題を起こし（友人の作家葛西善蔵の借金の肩代わりで）隣の秋田県の女学校に転勤する羽目になる。ところで私の大学時代の恩師H教授からは秋田県立横手中学で石坂洋次郎の教えを受けたと聞いていたが、石坂は秋田県内では女学校と中学を転々としたのかこのあたりはよく分からない。

その石坂の碑文を、この日最後に回ったリンゴ園の片隅で見つけた。

「物は乏しいが空は青く、女たちは美しい国、それが津軽だ。私の日はそこで過ごされ、私の夢はそこで育まれた」

（四）弘前城ほか

日本七名城の一つといわれる弘前城は、津軽統一を成し遂げた津軽為信によって慶長八年に着手され、二代藩主信枚のときに完成した。

当初は五層の天守閣が聳えていたが、江戸初期に焼失した。従がって現在のものは小ぶりだが、それが却って落ち着いた城郭を作っている。東北地方に現存する唯一のものである。

為信がこの城を作ったときの石高は、関が原による加増を含めても四万七千石に過ぎなかった。（のちに十万石）

それが三十万石以上の規模にしたのは、津軽氏の独立を憎んでいた南部氏への対抗心ではなかったかと司馬は推論している。

本丸から望む岩木山（標高一六二五㍍）が美しかった。この名山は津軽の何処からも見ることが出来る。

弘前城の見学を終わった頃、同行の誰かが「養生幼稚園」を見に行こうと言い出した。皆、「北のまほろば」を読んで、此処が吉田松陰が東北遊歴中に同志宮部鼎蔵と一緒に滞在した場所であることを知っていたので、ぞろぞろ出かけた。

松蔭と鼎蔵は共に山鹿素水（素行の子孫）のもとで兵学を学んだ仲だが、肝胆相照らすようになり東北旅行を約束した。しかし藩からの過書（通行手形）がなかなか下りない。友との約束を破ることができないと松蔭は脱藩を決意する。そして弘前の憂国家梅軒伊東広之進を訪ねることになる。このあたりについては司馬の長編「世に棲む日日」に詳しい。

我々はすぐに「養生幼稚園」を見つけることができたが、それに隣接する「松蔭室」（松陰たちが滞在した部屋）は予約が必要ということで入室は出来なかった。

司馬によれば津軽人陸褐南も此処を訪れ、即興の詩を揮毫したという。しかしこの部屋が「松蔭室」であって「褐南室」でないのは、津軽人の過度の含羞のせいだろうと書いている。

褐南については正岡子規との関係で「坂の上の雲」ほかに多く登場する。特に子規が親友夏目漱石宛ての手紙の中で恩人褐南を評して、

「徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」

と記したことを再三書いている。

明治時代に、この「養生幼稚園」を作った伊東家（梅軒の家系とは異なる）は代々医者のようで、作家今東光、日出海兄弟の母堂の実家でもあるそうだ。

太宰治の生家「斜陽館」は津軽半島のなかほど「金木町」（現つがる市）にある。隣町は前述の遮光器土偶で

有名な木造町（現五所川原市）である。

当然、太宰ファンである司馬は太宰について多くを語っているが

「彼の大望は一日本の私小説の伝統に自分を接木させて、ロマネスクという、この国にかってなかった花を咲かせたい。」ことだったと結論ずけている。

その彼の生家は明治時代、津軽地方の大地主で多額納税者でもあった太宰の父津島源右衛門が建てたものだが、二階建て十九部屋もある豪壮な建物である。

今年が丁度、築後百年ということだった。

ただ司馬は広壮な建物だが、「大正時代の温泉場の大きな宿屋のように、ただ大きい」だけで雅趣がないと書いている。

入り口で渡されたパンフレットにも太宰自身の文章が載っていた。「この父はひどく大きい家を建てたものだ。風情も何もないただ大きいのである」

迂闊にも私は太宰の生家が旅館業と勘違いしていたが、旅館となったのは戦後、津島家が手放してからのことであり、その頃（昭和二十五年）には既に太宰は亡くなっている。

平成八年に旅館「斜陽館」は四十六年の歴史に幕を下ろし、現在は旧金木町の所有となっている。重要文化財でもある。

我々は初日「三内丸山遺跡」を見た後、八甲田に直行して奥入瀬から十和田湖まで足を延ばしたが、司馬も八甲田に出かけている。

当然、明治三十五年に起きた「八甲田遭難事件」を取り上げているが、面白いことに彼が力点を置いているのは、事件そのものよりも、この遭難事件を起した弘前第八師団の日露戦争での活躍のことであるのは興味深い。

日露戦争を克明に描いた大作「坂の上の雲」の著者であれば当然かもしれない。

（五）「わてはゴッホになる」

実は今回の旅行で最初に訪れたのは、青森市郊外の市営霊園にある棟方志功の墓だった。ガイドの話によると棟方は青森名誉市民の第一号なのだそうな。

墓碑には「静眠碑」とあった。静眠とは造語で、碑にいたっては辞書にもない造字であり、司馬によれば志功にのみ許される「棟方語」だとしている。

例えば彼の傑作「湧然する女者達々」など。湧然するなどという動詞は漢語にも日本語にもなく、女者も棟方の造語である。因みには志功は「版画」といわず「板画」といった。

旅行の最後に訪れたのも青森市内にある「棟方志功記念館」だった。志功の文化勲章受賞を記念して昭和五十年に建てられたそうで、此処では代表作「釈迦十大弟子」も見ることが出来た。

「北のまほろば」でも数十ページにわたって「棟方志功論」を展開している。丁度「オランダ紀行」において展開した「ゴッホ論」と双璧をなしている。奇しくも棟方は若い頃からゴッホを目指して「わてはゴッホになる」と云ったというのはつとに有名である。

司馬の文章も「極東の一角から棟方志功（一九〇三―七五）が湧くようにあらわれた」から始っている。

そして棟方の登場を、あたかも縄文人が突然、現代に現れたように表現する。

「棟方志功の自己は、まことに大きい。いつも朝の野のように初々しく露で濡れていて、その初々しさは縄文時代から迷わずにこの世にきた人ではないかと思えるほどである。」

なお、司馬は彼のライフワークとなる「街道をゆく」の連載をしたとき、タイトルの題字を棟方に依頼している。（かって谷崎潤一郎がその著「鍵」の挿絵を棟方に依頼したように）

旅行中の車中で行われたK先生の現地講座も「棟方志功さんの思い出」だった。NHK時代、先生は専ら奇人志功の担当を任せられたらしく、彼との裏話まで披露してくれた。例えば歴史番組「日本史探訪」で葛飾北斎を取り上げたとき、共に奇人である志功を起用したが、彼が予想外に迫真の演技？をしてくれたことなど。この番組を見た司馬からお褒めの言葉をいただいたそうだ。

（六）リンゴの涙―北の悲しみ

「北のまほろば」の最終章は「リンゴの涙」となっている。平成三年の台風一九号によって県下のリンゴ園が壊滅したときの子供たちに書かせた文集を取り上げている。

「いよいよ、台風がくるばな」

と（祖父）がいいました。そしておじいちゃんは、おこったように

「台風くれば、りんご、おじでまるばな」

などの「小さな津軽詩人」の詩を並べて「北のまほろば」を終えている。

ここまで読んでくると司馬が津軽地方を「まほろば」といったのは何か逆説的に聞こえてくる気さえする。

そういえば、この本の冒頭で古代の津軽は「北のまほろば」であったに違いないと書いた後で、こうも書いている。

「古代の青森県は稲作へ転換する必要がないほど縄文的に豊饒の地であった。」

「「けかち」はなかった。当然なことで、この地方の苦の種であった水田がはじまっていなかったのである。」

古代の「北のまほろば」がどうして近世「けかちの国」になってしまったのか。

司馬はこの地方が世間の習いにしたがって一幕藩体制の原理どおりに一コメのみに頼ってしまった結果だと捉

えている。

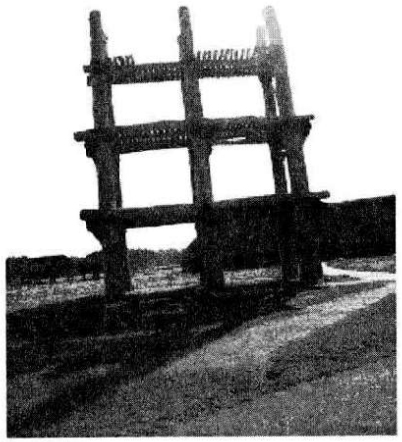
もし津軽藩が創設早々、幕府に次のように申し出ていたらどうだったであろうと。

「わが津軽は、均して五年に一度、やませという悪風が吹いて稲が枯れます。そのときは藩も農民も立ちゆきません。によって、藩のみ自由な経済のたては許されないものでしょうか。」

この地方が決定的に苦しくなったのは津軽氏の統治（一五九〇年）以降だという。津軽氏はコメに執着して新田開発に無理を重ね、最終的には十万石に格上げされたが、皮肉にもそれが津軽の苦しみを招いてしまったというのである。

司馬はこの本を書いた翌々年には亡くなっている。

司馬後半生の二十五年にわたって書かれた、原稿二万枚、七十二街道に及ぶ「街道をゆく」は終わりを告げる訳だが、この「北のまほろば」は司馬紀行文の集大成、最高傑作といっていいだろう。



三内丸山遺跡



遮光器石偶（亀ヶ岡遺跡）

狩谷棭斎讃歌（一）

新井　宏

（一）序

狩谷棭斎。森鷗外が評伝を志して書けなかった江戸末期の大学者である。

その棭斎の評伝を書こうと思いたったのは、もう十五年も前の平成四年である。なにしろ計量史の研究を通して棭斎に惚れ込んでいた。坂本守正さん(註1)から「新井さんが書かなくて誰が書きますか」と煽てられ、すっかりその気になって、国会図書館に通っては棭斎の交友関係図や年譜をせっせと作っていた。

しかし、まもなく現実を知る。

さほど有名とは思えなかった「私だけの棭斎」が、調べれば調べるほど巨大に聳えてくるではないか。実証的な学者としては、伊藤仁斎、荻生徂徠、賀茂真淵、本居宣長などの思想家たちをはるかに越え、比肩できるのは新井白石くらいで、清末考証学者の兪曲園が日東第一の学者と称賛していたなどと知るとシュンとなってしまった。

その追打ちとも言うべきものが、平成六年に出された梅谷文夫の『狩谷棭斎』である。生涯を棭斎の研究に捧げた梅谷文夫の学問的な態度は、まさに棭斎そのものであった。「信憑すべき証拠が得られない場合は、判断を留保し、私見をもって真偽を論じない」と言う棭斎の信条そのままに、極めて抑制した記述で、見事に棭斎を描ききっている。

その上更に、梅谷文夫は平成十六年から十八年にかけて、『狩谷棭斎年譜・上下』を出す。九百字詰めで九百ページにも及ぶ詳細極まる年譜。日記を残さなかった棭斎である。私は、世界中で、これほど詳細な個人年譜を

書いた例を知らない。すさまじいエネルギーだ。もう私の出番はない。

楡斎に導かれて成し遂げた私の「古韓尺研究」であった。まだ完成したわけではないが、幾多の幸運に支えられ、基幹的な研究論文を平成十七年までに書き終えた。その上、一般向けの読み物としても、平成十九年の夏『理系の視点からみた考古学の論争点』の一章として紹介することができた。

結局、古代計量史における大問題は楡斎の考証が正しかった。後世、現代の学者達が多くの資料を楡斎に仰ぎながら、「高麗尺」と言う誤りを肥大させてしまったこととの差は何であったのか。それは実証的、合理的な研究過程、すなわち史料批判が最も重要な学問(歴史学)にあって、楡斎から大きく後退してしまったことに他ならない。この現象は現代の考古学にもあてはまるのではないか。楡斎から学ばねばならない。

もちろん楡斎は計量史などというニッチな世界の学者ではない。研究分野は和漢の古典から、制度、博物、計量、銭貨まできわめて幅広い。名書家としても有数である。しかし楡斎の凄さは、何といっても考証、すなわち史料批判という研究態度にあった。

学問とか研究は、得られた結果を言うのではなく、結果を得るプロセスを言う。現代の歴史学が史料批判を最重要視するのはそのためである。いわば日本における真の歴史学の誕生は楡斎と共にあった。それは本居宣長と対極をなす業績であったと言えよう。だから私は、学者としては楡斎を無条件で買うのである。

そうだ。楡斎にもう一度チャレンジしよう。巨大な学者、楡斎の新側面を発掘するなどと、大それたことを考えるのではなく、我が心象に捉えた楡斎なら書けるかも知れない。「まんじ」の同人となったのはそのためだったのではないか。

事実関係の紹介は、梅谷文夫の『狩谷楡斎』と『狩谷楡斎年譜』の丸写しで行こう。素晴らしい表現があれば、それをなまじ自己流に直して改悪する愚は犯すまい。

しかし、待てよ。それでは剽窃どころの話ではないでないか。

かくして、「梅谷文夫の研究を下敷きにして」という副題をつけることを前提に、主題を『狩谷楡斎讃歌』とすることにした。いずれにせよ、梅谷文夫の『狩谷楡斎』へ案内する前座として、まずは書き始める。

(二) 豪商津軽屋

狩谷楡斎は天保六年(一八三五)閏七月四日、浅草伝法院前の津軽屋新宅で永眠した。

前月の十日以来、食事が採れなかった。死の前日に楡斎を見舞った松崎慊堂は「万無一生、而精神如平日、言石経校文、淳化帖事数語、亦如平日、向晩握手而別、暗泣三声、余亦腸断」と『慊堂日暦』に記す。簡潔な漢文は、男の悲悼を適く表現する。六十一歳であった。

そして、その一ヶ月後の八月、米問屋津軽屋の嗣子狩谷懐之は、津軽藩に対して金十二万七五六九両の巨額債権を放棄し、その功により三百石加増され千石となる。天保大飢饉の最中であった。いずこの大名も財政難に苦しんでいた時代ではあったが、町人学者と言われた楡斎が並の財産家ではなかったことが、この一事によってもわかるであろう。

楡斎が学問上の偉業を成し遂げたのは、純粋に真実を求め続けた楡斎の考証精神と共に、当代一流学者のほとんどを友とした楡斎の人間的な魅力、そして津軽屋の財力にも大きな恩恵を受けていた。だから私は、この讃歌を、楡斎の親友の松崎慊堂と津軽屋の経済力の紹介から始めたのである。

しかし、楡斎は津軽屋に生れたのではない。養子であった。

津軽屋は八代目三右衛門保古が寛政元年(一七八三)に四十四歳で亡くなってからずっと後継者問題で悩んでいた。保古には男子なく、正妻満寿の長女多仁に本両替屋三谷勘四郎の二男麻五郎成美を迎え、保邦を名乗らせたが、病弱でわずか一年余り後の寛政三年に亡くなってしまった。

子が無かったので、多仁に再び婿を迎えることになったが、人選に難航し、寛政四年になってやっと京都の呉服問屋槌屋四郎左衛門の二男勝三郎を迎えた。しかし、今度は養母満寿との折り合いが甚だ悪く、数年間にわたって内紛が続き、結局は寛政十年(一七九八)に至って勝三郎を離縁してしまう。子は得たがいずれも夭折している。

多仁が三度目の養子を迎えたのは翌十一年三月のことである。板倉助次という名は分っているが、出身は詳まびやかでない。江戸屈指の札差坂倉屋に助次の名があるので関係があるかも知れない。

ここで不審なのは、板倉助次が家名を正式に相続した前日に多仁が病死してしまったことである。通常ならここで婿入りはなかったことになるが、どうやら多仁の死を承知で入籍したのではないかと思われる。それには八代目保古の妾つねの三女善(よし)を後添えとする約束があったのではなかろうか。後に楡斎の妻となる善はこの時十四歳であった。

しかし善は助次との婚約をどうしても承知しなかった。まだ幼さを残す一途な娘の説得に後見人達は手を焼

いた。その真の理由はまわりでもうすうす気がついていた。

楡斎のことを津軽屋の娘の恋婿と伝える口碑がある。今に残る肖像を見ても楡斎は容貌がととのっていて、柳橋の芸妓に惚れられたとの伝承も十分にうなずける。善にとっては十一歳年上の分家筋に当る楡斎に嫁ぐことが少女の夢だった。

跡取りの多仁が生きていれば、それは祝福された縁組であった。楡斎の高橋家と本家筋の津軽屋は、この頃、またいとこの代であったが、高橋家の神田明神石坂下と津軽屋の湯島一丁目は、目と鼻の距離であり、近い親戚同様であった。

学問好きの善が楡斎にあこがれを抱いたとしても何の不思議もない。だから嫁入りならまったく問題なかった。しかし、婿取りとなると話は異なった。

その時すでに楡斎は書肆高橋青裳堂の当主であり、姉は嫁いでおり、高橋家には実母佐藤氏の他、跡継ぎがいなかった。婿にと望まれても簡単にイエスと言える状況ではなかった。

一方の善も妾腹の三女で、正腹の多仁とは立場が異なっていた。既に嫁いでいたとは言え、別の妾腹の二女なみもいた。相続を安定させるためには、多仁の婿すなわち板倉助次の後添いとなることが要求されていた。

しかし、善はどうしても承知しなかった。そうなると周りも知恵を出さざるを得なくなる。善の意向にそった形で、分家筋の楡斎を養子で迎えて、善に配する案が急遽浮かんできたのである。

単なる婿と養子では権限が大きく異なる。楡斎の実母佐藤氏もそれならということになった。書肆の高橋青裳堂の跡継ぎは楡斎と善の第二子を当てれば良い。

それよりも何よりも、楡斎は善の一途さをいとおしく思った。器量よしで利発な点は、二人の間に生れた二女で後に今少納言と称された多加とそっくりであった。善のひたむきさも、多加が伊澤蘭軒の三男柏軒に惚れて押し掛け女房になったのと良く似ていた。

ここに至りようやく話はまとまり、板倉助次は正式に離縁される。もっとも、中途半端な状況に置かれた板倉助次は元後見人をかく首する事件を起こし、実質的には実家に帰っていた。

かくして善は遂に粘り勝った。そのことが、当主に人を得なかった津軽屋を救ったばかりでなく、楡斎が学者として大成するための道を開き、もって津軽屋の名を不滅のものにした。私が楡斎の恩恵を受けたのも、元をただせば善のお陰だったとも言えるのである。楡斎は幸せであった。私も幸せである。

しかし、善は三子目の二女の多加を生むと二十五歳の若さで亡くなる。楡斎はその後多くの勧めにもかかわら

ず、後添えを貰わず、妾も持たなかった。まさに、津軽屋の善の恋婿であった。

(三) 師事

楡斎は安永四年(一七七五)十二月二十三日に江戸の神田明神石坂下で生れている。津軽屋のあった湯島一丁目の台地下の横町である。

生家の高橋家は代々与惣治を称する書物問屋であった。屋号は青裳堂、姉にとまがいた。

初めの名は真末(まさやす)で、楡斎の号は二十歳頃から使っている。楡の字は国字で音はないので、最初は国学風に「ねむのや」と読ませたのかも知れないが、今ではエキサイと読むのが定説である。屋号の青裳は合歓木(ねむのき)の異名である。

楡斎は、書肆の生まれなので幼い時から読書好学の風があり、寛政と年号が改まる十五歳頃から、古書の書写を精力的に進め、寛政二年(一七八〇)には書を求めて、第一回目の上方旅行を行っている。その頃、家督を相続した模様で、翌三年には父高敏が亡くなっている。

最初は、伊澤蘭軒と共に儒学を泉豊州に学んだ。森鴎外によれば、楡斎が十三歳、蘭軒が十一歳の頃と言う。この時からの終生にわたる蘭軒との交友、いやふたりが亡くなってからも続く狩谷・伊澤両家間の交流は、鴎外の『伊澤蘭軒』に詳しい。私が冒頭で、森鴎外は狩谷楡斎の評伝をこころざしながら書けなかったといったが、正確に言えば、『伊澤蘭軒』に、あまりにも詳しく楡斎を書いてしまったからかも知れない。

泉豊州は細井平洲の女婿である。講義はうまかったようであるが、その学風は学問というよりも応用に重点を置くタイプで、鴎外は、楡斎や蘭軒が「能く拘儒たることを免れしめた」と既成学派の学説に毒されなかったことを喜んでいる。楡斎にとって最大の収穫は終生の友、伊澤蘭軒を得たことであった。

その後、液斎は国学者の村田春海や屋代弘賢に学ぶ。楡の字を「ねむのき」と知ったのはその頃であろう。書家として有名な屋代弘賢からは書も学んだ。

村田春海に師事したのは親友清水濱臣の紹介である。濱臣は楡斎より一歳下であるが、寛政五年に池之端の西隣、茅町で医者を開業している。その頃、楡斎の青裳堂も神田明神石坂下から池之端に移っているので、春海への師事は十九歳の時であろう。

楡斎が清水濱臣らと共に、『続日本紀』や『文徳実録』などの六国史校読をほぼ終えたのが寛政七年(一七八五)二十一歳の頃である。楡斎は『本朝度量権衡攷』付録の冒頭に「予、弱冠の頃より、皇国の制度を知らんと思ひて、国史、律令・格式など、くり返し読むに、知り難き事の多かる中に、度量権衡は……」と述べている。弱冠

は二十歳であるから、この頃、六国史の他に『延喜式』などの校読も終えている。

楢斎の学問的な興味は、儒学から始まったものではない。自身で述べているように、「皇国の制度を知らんと思ひて」日本の古典を読む内に生じた学問的な好奇心がその始まりにある。幸いだったのは、師の村田春海が、賀茂真淵に付いた国学者でありながら、本居宣長などの古道説や漢学排斥に対しては反対を唱えていて、儒学に対しても偏見を持っていなかったことである。これが、楢斎の学風を広く公正なものとした。

翌、寛政八年(一七九八)には、藤貞幹の『衝口発』を校読している。古代日本について中国や朝鮮などと比較文化史的な視点から考証した書で、日本文化固有説に疑問を呈すなど、現在の史観にも通ずる内容が多くあり、楢斎にとっては学ぶ点が多かった。しかし貞幹は、『衝口発』の一部に、自分が捏造した偽書を証拠として採用して、完全なルール違反を犯している。それを暴いたのが本居宣長である。

宣長は、藤貞幹の『衝口発』を「みだりに大御国のいにしへをいやしめおとして、かけまくもいともかしこき皇統をさえに、はばかりもなくあらぬすぢに論じ奉れるなど、ひとへに狂人の言也」と『鉗狂人』を書いて激しく論難したのである。

楢斎が校読した頃には両書とも未刊ながら、『衝口発』が問題の書であることは良く知られていたらしい。『衝口発』と同じ装丁の『鉗狂人』が楢斎の手元に残っていたからである。それなのに、なぜわざわざ校読したのであろうか。本居宣長の『鉗狂人』と比較して読むことが目的だったのであろうか。楢斎と貞幹の関係については後述するが、学風として、楢斎が宣長よりも貞幹に興味を持っていたのは間違いない。貞幹の発想に学び、それを実証的に越えたところで楢斎は成長した。

(四) 第二回上方旅行

楢斎が古書を求めて第二回目の上方旅行をしたのは寛政九年(一七八七)、二十三歳の時である。この時、『文館詞林』の第六百六十八巻ほか一巻を得ている。唐の許敬宗が編集した詩文集で千巻あったというが、中国では散逸して、日本にのみ二十余巻残ったものである。価格は三十両を越えたらしい。青裳堂の経営規模も決して小さくはなかった。

また、この時の上方旅行の逸話として、楢斎はある町屋で、『妙法蓮華経』を反古にして籠を張っているのを見つけた。それは江戸前期の貞門派俳諧の祖、松永貞徳が千部発行して東山の庵室柿園に納めた法華経の刊本であった。残部が十部ほどあり、全てを買い求めた他に、京都の本屋にも手を廻して集めたことを、楢斎の弟子、岡本況斎が『況斎雑話』に伝えている。本屋としても目利きであったと言うことであろう。

京都では竹苞楼を訪ねたはずである。二年前に『好古小録』、その年に『好古日録』と言う藤貞幹の本を出した老舗である。

貞幹については、『衝口発』の項でふれたが、古書や古器類の贋作を作る癖があり、学者というよりは物マニアックな人物であった。しかし古代史の見方や鑑識眼には優れたものがあり、彼が取り上げた古書画の多くが、現在、国宝や重要文化財になっている。竹苞楼に世話を受けていたと言うが、楢斎の訪れた前年の寛政九年に亡くなっている。

ちなみに貞幹は尺や斗など古い計量器を集めたり複製したり偽造したりしていて、楢斎もしばしば『本朝度量権衡攷』で取り上げている。学問への態度は異なるが、興味対象は実によく似ていたのである。

余談ではあるが、三浦佑之が『金印偽造事件』という文庫本を書いて、『金印』すなわち「漢委奴國王印」は偽造だと改めて提示している。その中にも藤貞幹が登場している。彼が絡むとにわかに偽造説が信憑性をもってせまってくる。そういう人物であった。

楢斎も『本朝度量権衡攷』の中で、藤貞幹が璽印を偽造したことを「彼の勅書は、張台が言によりて曲尺七寸六分の度を起し、其の尺にて璽印を作り、贋造せしものなるべし」と述べている。金印も疑わしい。

楢斎は上方旅行の帰路、松阪鈴屋に本居宣長を訪ねている。この時、宣長は六十八歳、『古事記伝』の完成目前であった。しかし、この鈴屋訪問は、賀茂真淵と宣長の「松阪の一夜」のようにはならなかった。宣長の行く道と楢斎が求め道は、あまりにも異なっていた。

(註1)坂本守正氏は長編『七星旗の征くところ・庄内藩戊辰の役』を荘内日報に三五七回にわたり連載。商社マンを経て、漢詩漢文を味読し、雑誌「冬青」を主催。平成七年五月永眠。享年七十五であった。

掌編小説4

論語ドリーム

亜木陽一

十二月に入り、寒さが増して来た。
私立中学に通う次男の孫が国語の漢文の勉強を見てほしい。
言っている。
英語と社会科は何とかなるが、国語は文学や古典に疎いわしには難題だ。
孫に教えるよりもまず自分が興味を持たなければならない。

漢文と言えば論語だ。
駅前の本屋に行き、わしの気に入った論語の本を選んで二冊買って来た。
声に出して論語の本を読んでみた。

毎日読んでいると、知らず知らずに論語を口に出す時の口調が染み込んで、口唇をとがらせたり、大きく横に開いたりしている。
何となく口の動きがよくなる様だ。
論語の本で口の運動ができるとは。
早速婆さんにも読ませよう。

婆さんが論語の本を口に出して読み始めた。
ほっぺたがしぼんで口先だけがとんがる。
わしの口の五倍も十倍もとんがっている。
わしが見ていると、今にも歌い出しそう。
まるでひょっとこ歌姫だ。
大きな声で読んでいる。

婆さんは論語の本を一冊読み上げた。
そのあと続いていろいろな童謡を歌っている。
年だからと言って歌の稽古をやめていた婆さんが、
「よく声が出る様になったわ。又、童謡のお稽古に通いましょう」
張り切っている。

わしは歌は音痴で全くダメ。
カラオケも行かない。
婆さんは、
「おじいさんも論語を読んでいると、カラオケに行ってもきっと歌えるようになるんじゃないの。私がひょっとこみたいに口をとがらせて歌っているんなら、おじいさんは“おかめ・オペラ”でも作ったら」
わしも少しは歌が歌えるようになって、カラオケに行けるかもしれない。
論語の夢は無限。

『ここは文京ではない』

大和禎人

昭和二十二年三月十五日　東京都三十五区制を二十二区制に統合、麹町・芝・本郷・小石川各区が消滅。但し本郷、小石川を統合して文京とし、加えて八月一日練馬区新設（二十三区制）が発足。

三月三十一日教育基本法・学校教育法公布（六・三・三・四制男女共学を規定）四月一日　新学制による小学校・中学校発足。戦後社会一つの変革の揺れ動きが年表では何気なく右のような文字に凝縮される。（但し中学校の発足は一切白紙からとあり、自治体事情により遅滞の区々を免れなかった。）

東京都の中学校の場合、一月遅れの五月一日の開校がやっとであった。

四月一日の発令は校長と用務員の一名のみ。教職員の構成は校長の東奔西走、口説きの行脚のあげくにようやく開校にとりつけたのであった。生徒達は小学校卒業の日から一ヶ月の自宅待機を余儀なくされたのだった。

地方自治体の吏員たちは行政手腕が問われる大事、東奔西走の一ヵ月があった。小学校高等科のおかれていた場合はそのままの移行で済んだ、青年学校は廃校の上、校舎の転用という方針で事足りたが、他の大方は小学校の教室間借り転用、他の新設は建設地の確保、校舎建設の必要があり、吏員は東奔西走、周辺区では農地の青田刈りの補償問題まで処理しなければならなかった。

教職員の構成では、

旧制中等学校から、小学校から、青年学校から、その他の免許状有資格者からと、説得、奪い合いの乱世模様を呈した。この際本府（青山、豊島、大泉）の三師範の盛威を争う水面下の競り合いもあった。

本府ならざる他師範出身者はお上りさん扱いを受けたものです。まれに東京、広島、豊橋の高等師範出身者少数も加わりました。給与格差が問題になりました。給与改革の手段として年齢給実施など愚挙も行われました。

出向辞令扱いがなくなり、一旦退職し、退職金をもらった上で、他府県の採用試験をうけなければならないことになりました。教育制度の地方分権の確立でした。

都下の新しい中学校発足はもっとも困難を極め、発足に一ヵ月を要し、五月一日を開校記念日とする成り行きが大方でした。私立中へ進んだ児童を例外として、大方の児童は自宅待機を余儀なくされたのです。小学校に高等科が置かれていた校はそのまま移行できましたが、その他はとりあえず小学校の間借り教室に甘んじ始まらねばならなかったのでした。時間割りの都合では青空教室にも甘じました。占領下不穏の文字は墨塗られました。

男女共学も生徒の方で苦手とし、二人がけのところクロスワード配列の苦労をしたものです。仕方なく男女並びますと男の子が女子に遠慮するヘッピリ腰という光景を見たものです。米軍の不時の監察に備えたうえの事でした。

校長の権限は昔日ならば生殺与脱の権は大きく、昇給具申権をもって、三円、五円、十円の差を認定し、年末賞与の配分もその手中にあったものでした。威令を恐れ鼻息をうかがい、屈従する教員が生まれました。

ところが、今日の校長は補職の立場は変わらずとも何の権限も与えられてはおりません。重責のみ、押しつぶされかねない苦渋の暦に生きていると申せましょう。

「わたしは文京では切れると言われた男ですよ」

なに思ってか、儀礼の出迎えの作法上、役所を出て二人連れ立つ私に新任のAはこう囁きました。

学校まで案内するのが作法でした。新任のAは文京の教頭からの新任でした。虚勢であったと思いますが、少しく大人気ないフシの言葉です。

「槍は袋に、刀は鞘にと言います、ご自重をお願いします。」ことさら（文京では）という強調の囁きが私の胸に残った。

新聞に学校人事の報道があると職員間に（揣摩臆測）他愛ないゴシップが大方でもトップとなれば免れない。。

（用務員室に見慣れぬ婦人が尋ねてきた、小母さんが名前を尋ねたら、Aということだったそうだ、ことによると新しい校長の細君じゃないのか）

（夫君に代わる偵察は事実で、困った奴とあった）

文京区と言い、文教地区とも呼ばれる、意識の違いもあったようだ。埼玉師範のおのぼりさんの過剰自意識でもあったようだ。「文京区では」とぽろりと口に上った。着任第二週目の職員会議の冒頭だった。

「校長、ここは文京区ではない」

すくっと立ち上がって、それを言ったのは美術の鶴田教諭だった。

（H十九・一一・二三）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

青の漂流（三）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）五月、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。

三　『赤い葵（あおい）』

支倉は、碧眼の幼児を何とかアイヌに返そうと試みた。しかし、和人によって同胞を殺されたアイヌと直接の交渉ができる余地は無かった。

アイヌは文字を持たない文化のため、直接の話し合いでなければ、説得もできなかった。

支倉自身が択捉島でアイヌと接していた経験が有るといっても、アイヌ語を充分に話せなかった。

幼児をどうするか、支倉は苦悩していたが、仙台藩に戻らなければいかなくなった。

幼児の碧眼を見ていると、不憫で耐えられなくなり、仙台に残してきた妻と自分で育てるため、仙台に連れて行くことにした。

支倉夫婦の間には子供が居なかった。支倉の妻も自分の実の娘の様に可愛がって育てた。

幼児の名前は瞳の色から『あおい』という名前はすぐに決めた。漢字としては『蒼』の文字を充てることにした。

深い青を表す『蒼』の字を選んだのは、両親を殺され

て、悲しみを含んだ瞳が深く沈んで見えたからであった。
支倉は蒼が幼児だったことで、当時の惨事の記憶が残っていないことを願っていた。
支倉は、蒼の掌に握られていた赤い花弁を大事に保管していた。既に朽ちかけていたので、丁寧に写生して残していた。
この花の出所を調べることで、事件の真相に繋がる様な気がしていた。
仙台に戻った支倉が、妻に花弁を見せた。
「伯父がアメリカで記録した花と同じだわ」
支倉の妻は、仙台藩の玉蟲左太夫（誼茂）の姪であった。玉蟲は蝦夷地を調査し『入北記』を記し、仙台藩の蝦夷地管理に大きく貢献をしていた。支倉も『入北記』を読んで、択捉島での統治の参考としていた。
玉蟲は戊辰戦争で奥羽越列藩同盟をまとめる等、仙台藩で江戸幕府軍側としての中心的な役割を果たした。そのため仙台藩の敗戦の責任を取らされ、一八六九年（明治二年）四月に切腹させられた。
玉蟲左太夫は日米修好通商条約の批准書を交換する際には、遣米使節としてアメリカのワシントンに勝海舟や福沢諭吉らと共に派遣された。玉蟲ら遣米使節一行はハワイ・西海岸を経てワシントンに着いた。批准書交換後は、大西洋からインド洋を経て世界一周をし、日本に帰国した。
玉蟲は世界一周の過程を『航米日録』として詳細な記録を残していた。
支倉の妻の話としては、玉蟲が『航米日録』と別に描いていた花と同一であるというのであった。
戊辰戦争の混乱から、玉蟲の持ち帰った物は散逸していた。
支倉兵衛は先祖の支倉常長と同じ様に世界一周の経験を持つ玉蟲を信頼していた。
「この花はアメリカと関係があるのか」
幕末は箱館が開港していたから、アメリカ船も来航していたし、箱館にもアメリカ人が在留したことがあった。
しかし、アメリカでは一八六一年に南北戦争が勃発していて、それ以来、アメリカ船の来航は途絶えていた。
「フランスかイギリスの花か特定できれば、犯人の手掛りになるかもしれない」
戊辰戦争では、江戸幕府軍にフランスが、明治政府軍にイギリスが軍事顧問として参戦していた。もし、フランスの花であれば幕府軍の藩、イギリスの花であれば政府軍の藩と思ったのである。
実際には、五稜郭の戦いで、幕府側の多くの敗残兵がアイヌの集落に逃げ込んでいた。国包の存在からも仙台藩士の関与を疑わせるものであった。
もともと支倉は、事件の犯人として仙台藩を含めた幕府軍側の人間を疑っていたのであった。

敗走した残兵がアイヌの村を襲うことが会っても、勝って追い詰めている明治政府軍の人間がアイヌを襲う理由は考えられなかった。
「花弁がフランスに由来するものであれば、幕府軍の犯行を裏付けるものに過ぎない。しかし、イギリスに由来するものであれば、明治政府軍の関与している可能性がある」
アメリカに対してはフランスよりもイギリスの方が関係が深いのではないか、と支倉は考えたのである。
一方で、一枚の花弁から国際関係まで考えて、犯人を特定するのは、困難であることも自覚していた。
「遣米使節団の帰路は大西洋からアフリカの南を経由したので、ヨーロッパには渡らなかったわ」
妻の説明によれば、玉蟲はイギリスにもフランスにも寄港していないので、ヨーロッパで記録した訳ではない。
何故この花弁が幼児の掌に握られていたのか、かえって分からなくなった。
支倉が仙台に戻ってから、二年が経過した。
支倉は武士を棄て、事業を始めた。明治維新後、仙台藩は賊軍として石高を三分の一にまで減らされたため、多くの仙台藩士が生活できないで、北海道に入植した。
支倉自身は、移住することなく、北海道の入植者を相手に物品を販売する商売を始めた。
賊軍のため、明治政府の仕事は請負できなかったが、支倉の仕事は順調に拡大していった。
蒼は正確な年齢が分からなかったので、生育の様子から判断して、明治の元号に合わせて年齢を数えるようにした。
蒼が支倉に育てられてから、八年が経過した。
ある日、近くに住む医者が花に詳しいということを蒼は知った。
自分が掌に包んでいた花は大事に保存されていたが、押花とはいえ、既に朽ちていた。しかし、支倉が忠実に写生していた画は残っていた。
その花は『アメリカの花』として、蒼は義母から伝えられていたが、日本に咲いていないか、気になっていた。
蒼は、義父の写生した花弁を見せて、医者に何の花か質問した。
「日本本来の花ではないね」
親から伝えられていた通りの答えであったので、蒼は特に失望しなかった。
「これは『あおい』の花の一種だ」
蒼は自分の名前を言われたようで戸惑った。
医者は『あおい』といっても『蒼』でないと説明し、『葵』という漢字を書いて見せた。
「葵は青色ではないの」
『赤い葵』と聞いて、蒼は不思議な思いがした。
「勿論、青色が代表的なのだけど、葵の仲間は沢山あっ

て、青色以外にも様々な種類の色が在るよ」
葵色は青色を指すが、葵そのものは、青とは限らないということであった。
蒼は北海道に咲くのかも質問してみた。
「北海道では育たないね」
赤い葵は温暖な地方に咲くというのであった。
北海道だけでなく、仙台でも見ることができないと知って、蒼は少し失望した。
医者は正確な花の名前まで思い出そうとしていたが、蒼は敢えて無理をして聞きだそうとしなかった。両親の惨殺の真相に近づくのが怖かったのかもしれなかった。
蒼が『赤い葵』の話を聞いてから、さらに三年が経った。
支倉の仕事の取引先から様々な美術品を見せられる機会があった。
ある時、木製の団扇が展示されていた。
「赤い葵…」
団扇には赤く大きく開いた花と、蕾とが一輪ずつ描かれていた。
花弁よりも、雄しべが特徴的で黄色く、花弁より大きく突き出しており、先端に豆のようなものが付いていた。
蒼は、この花が特徴的な雄しべを持つことを初めて知った。今までは、雄しべについて聞かされていなかった。
「これは尾形光琳の作品だよ」
支倉の商売の相手の人が蒼に説明した。
その木の団扇は『仏桑華図』という作品であった。
尾形光琳は江戸時代を代表する絵師である。尾形光琳の作品に描かれているということは、既に江戸時代には日本に持ち込まれていた花であることが分かった。
本物の花を見ることはできなかったが、尾形光琳の団扇から『仏桑華』という花の名前を知ることができた。
しかし、仏桑華が自分の掌に握られていた理由は分からなかった。
それから数年後、この花の由来を知ることができた。
「仏桑華が日本本土に入ったのは、徳川家康に献上されたのが最初だ。家康は花好きであったが、特に仏桑華を気に入っていたそうだ」
(徳川将軍家つまり幕府軍側の縁のある花だろうか)
蒼は推理を働かせたが、家康が好きな花だからといって幕府軍とは関係がないと思い直した。
(赤い葵…、仏桑華…、アメリカ…、徳川家康…)
蒼は花について調べるほど、混乱してきたのであった。ここで相手にもう少し質問を重ねていれば、真相に近づいたのであるが、躊躇いがあり、質問できなかった。
誰が家康に仏桑華を献上したのか、知っていれば事件の解決が早くなったかもしれなかった。

四　鹿鳴館と生麦事件

支倉は北海道や東北での事業が順調に行ったことから大きく拡大し、東京にも事業を広げていった。数年後には、支倉は蒼たち家族を連れて東京へ移り住んだ。
支倉は、渋沢栄一・岩崎弥太郎たち政商と競争しながら、政府や官僚との取引を増やしていった。
仙台藩は賊軍と呼ばれていたため、明治政府との取引を成立させるのに苦心した。
支倉兵衛の親戚に養子として迎えた高橋是清がいた。高橋は当時の明治政府の中では唯一と言って良いほどの仙台藩出身の人物であった。
後に大蔵大臣・総理大臣となり、二・二六事件で暗殺される高橋是清は、この時、農商務省特許局局長であった。
是清は戊辰戦争当時、未だ少年で仙台藩からアメリカ留学に派遣されていたのであった。日本に戻ってきたのは明治維新後であったため、賊軍と呼ばれること無く、明治政府で活躍していたのであった。
支倉兵衛は是清との親戚関係を利用するつもりではなかったが、是清の影響もあって、役所に取り込み、着実に実績を挙げていった。
また、東京に進出した際に、陸奥政春という紀州藩の元藩士と支倉は共同で事業をすることにした。
紀州藩は徳川御三家で、十四代将軍家茂を出した藩であるから、当然として幕府側であった。
支倉と同世代である陸奥も戊辰戦争では幕府側として従軍していた。
陸奥正春は後に外務大臣となる陸奥宗光の親戚ということであった。
当時、陸奥宗光は駐米公使であったが、陸奥正春は外務省の仕事を請け負っていた。
経済界の実力をつけていた支倉と陸奥は、一八八九年(明治二二年)一月には鹿鳴館に招かれることになった。
鹿鳴館はこの六年前に完成していたが、この時代は連日のように夜会が開催されていた。
支倉は、大人になった蒼も鹿鳴館に連れてきた。蒼は黒髪だが碧眼なので、碧眼の多い欧米人からも注目されていた。
碧眼は父母両方からの遺伝が無いと生まれないことを経験的に知っている欧米人にとって、蒼の碧眼は興味深く感じていた。
当時は大山巌の婦人捨松(咲子)が「鹿鳴館の華」と呼ばれていたが、この時の蒼は碧眼と美しい容姿で鹿鳴館に華を添えていた。
一八八九年二月十一日、大日本帝国憲法が公布された。
憲法公布の翌日に鹿鳴館において、黒田首相は演説をしていた。「政府は政党を超然する」という超然主義演説である。

その数日を経た日の鹿鳴館の夜会は、ヨーロッパ諸国に対して、日本が憲法を公布したことを宣伝する目的で開催されたものであった。

「わが日本国も欧米と同じく、憲法を持つことになりました。日本の歴史にとって、記念すべき年になりそうです」

黒田清隆がイギリス外交官と談笑していた。黒田は伊藤博文に次ぐ第二代目の内閣総理大臣である。

その黒田総理大臣に対して、支倉と陸奥が憎悪の視線を向けていた。

「北海道を私物化した泥棒野郎」

支倉は、黒田に向かって吐き棄てる様に呟いた。

八年前の一八八一年（明治十四年）には黒田は開拓史官有物払下事件という汚職事件を起していた。

当時開拓使長官であった黒田清隆が、北海道の政府資産を格安で同郷の政商・五代友厚に売却しようとして失敗した汚職事件であった。

「妻殺しが総理大臣とは、日本の恥だ」

支倉と共同経営している陸奥も毒づいた。

十一年前に、黒田清隆は酔っ払って、最初の妻・清を日本刀で斬り殺したと言われていた。

妻殺しの噂が広まっていたため、大警視・川路利良が妻の遺体を墓場から掘り起こして、検分した。川路利良が薩摩閥だったので、揉み消し工作を行ったものと見られていたのである。

真偽は支倉達が知ることは無かったが、二人とも妻殺しは真実だと確信していたのだった。

「五稜郭の恨みをここで晴らしてやろうか」

支倉は手にしていた万年筆を逆手に強く握り締めていた。

五稜郭の戦いから二十年が経過していたが、明治政府軍を陸軍参謀として指揮していたのが黒田清隆であった。

賊軍として辛酸を舐めていた元仙台藩士にとって、薩摩藩の人間は憎んでも憎みきれないものであった。

陸奥は紀伊藩の出身であったが、薩摩に対する憎悪を露骨に現していた。

「西瓜売りが総理大臣とは随分と出世したものだな」

黒田に対する支倉達の恨みから、黒田の過去にさかのぼって嘲笑した。

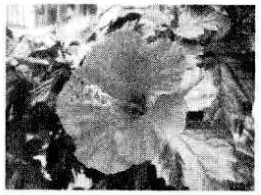
二十六年前の一八六三年、薩摩藩とイギリスとの間で薩英戦争が勃発した。

『西瓜売り』とは、薩英戦争の際に西瓜売りに変装してイギリス人艦隊に斬り込もうとした決死隊のことであった。この西瓜売り決死隊になったのが、黒田・大山巌大臣・西郷従道大臣・海江田信義貴族院議員たちであった。

「生麦事件でイギリス人を殺した奴がいるぞ」

<関連する人物>

大黒屋光太夫（1751-1828） ロシア漂流民
エカチェリーナ２世（1729-1796） ロシア帝国女帝
榎本武揚（1836-1908） 蝦夷共和国総裁
支倉常長（1571-1622） 慶長遣欧使節団
玉蟲左太夫（1823-1869） 仙台藩佐幕派 遣米使節団
黒田清隆（1840-1900） 第２代内閣総理大臣
大山巌（1842-1916） 黒田内閣陸軍大臣
松方正義（1835-1924） 黒田内閣海軍大臣 第４、６代内閣総理大臣
海江田信義（1832-1906） 生麦事件の犯人 貴族院議員
東郷平八郎（1848-1934） 海江田の娘婿 海軍大将
高橋是清（1854-1936） 第２０代内閣総理大臣
陸奥宗光（1844-1897） 日露戦争時の外務大臣
津田三蔵（1855-1891） 大津事件の犯人
ニコライ２世（1868-1918） ロシア帝国最後の皇帝





<参考年表>

1792年（寛政４年）	ラクスマン・大黒屋光太夫根室来航
1854年（安政元年）	日露和親条約 箱館開港
1858年（安政３年）	仙台藩白老元陣屋建設
1862年９月（文久２年８月）	生麦事件
1863年８月（文久３年７月）	薩英戦争
1867年11月（慶應３年12月）	大政奉還
1868年１月（慶應３年12月）	王政復古の大号令
1868年１月（慶應４年１月）	鳥羽・伏見の戦い
1868年７月（慶應４年７月）	仙台藩白老元陣屋撤収
1868年９月（明治元年９月）	明治改元
1869年１月（明治元年12月）	蝦夷共和国成立
1869年５月（明治２年５月）	五稜郭の戦い（箱館戦争）旧幕府軍降伏
1869年８月（明治２年８月）	蝦夷地を北海道と改称
1881年７月（明治14年７月）	開拓使官有物払下事件
1883年７月（明治16年７月）	鹿鳴館完成
1888年４月（明治21年４月）	黒田清隆内閣成立
1889年２月（明治22年２月）	大日本帝国憲法（明治憲法）公布
1891年５月（明治24年５月）	大津事件

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（九）

松下魏三

十一　単身・欧州へ留学

新婚早々の赤堀博士のお宅では長男が誕生し、翌年の昭和七年（一九三二年）には、創立予定の大阪帝国大学の教官要員に指名され、三年間の海外留学を命ぜられた。

昭和七年は上海事変が起った年で、同じ年代の若者の多くは赤紙の召集令状[註]を受けて、中国大陸に転戦し、戦火は次第に拡大していった。

赤堀博士が欧州に向けて出発する直前の二月には、上海戦で戦死した「爆弾三勇士」の記事が新聞に大きく連載されていた。

その後この戦争はさらに大きく広がり、昭和二十年（一九四五年）の八月の終戦まで続き、約五百万人ともいわれる日本人が尊い命を失っているので、赤堀博士はこの非常時に若干三十二歳の学徒が官費で海外に留学させていただくことは大変恵まれたことで、心から感謝したと回想している。

そしてこの年の桜の花も散り葉桜に変わる頃、単身で箱根丸に乗船し、ヨーロッパに向けて出航した。途中香港・シンガポールを経て、スエズ運河を経由し、三十五日間の長い航海の後に、マルセーユの港に着いた。マルセーユで下船してからは汽車でパリーに向った。そしてパリーを経由してドイツの首都ベルリンに到着した。

ベルリンでは、外国人向けの「ベルリッツ・スクール」で短期間のドイツ語会話の個人レッスンを受けた後、ベルリン大学の「外国人のためのドイツ語学校」の中級クラスで会話を学んだ。

この会話を学んでいる間はヘーゲル・ハウスという留学生のための寮に入って生活した。この寮ではドイツ人の寮長の奥さんからドイツで生活するために必要な暮らしの慣習やマナーをうるさいほど厳しく教えられた。その効果は後々まで役に立ったので、後日何時も煩わしいと思っていた過去のことを大変申し訳ないと痛切に感謝した。

また、キリスト教の信仰が徹底しているドイツでは日曜日は家族が揃って神に祈って暮らす安息日であるのに、赤堀博士は日曜日には“一日も早くドイツ語に習熟し、有機化学を研究したい”と思い、寮の一室で勉強していたところ、彼女は「シュレックリッヒ」とつぶやいた。この言葉の意味は「あきれた人」ぐらいの意味で、その時赤堀博士はなぜそう言われるのかわからなかった。

キリスト教の信仰がならわしとなっているこの国では日曜日は普段の仕事や勉強から離れて、教会の礼拝に出席し、心静かに神に祈って生活する日であるから、この日に働いたり、勉強したりするのは異教徒か神を信じない者であり、まともな人間としてあつかわれなかった。

また、クリスマスに酒に酔って騒ぐような者は狂人扱いで警察署に留置されるのである。

このように日曜日やクリスマスは聖なる安息日であるのに寮の一室で勉強している人は「あきれた人」になるのである。

このことに赤堀博士が気がついたのはしばらくしてからで、ちょっとしたカルチャーショックであったと語っている。

（註）召集令状
在郷軍人を召集する命令書。充員召集・臨時召集・国民兵召集には淡赤色の紙を用いたので、俗に赤紙という。（広辞苑による）

十二　言葉の壁と美しいプラハ

秋になって十月の末にはベルリンからチェコスロバキヤの首都であるプラハに移った。

プラハはドイツ語ではプラークと言うが、プラハにはドイツ語のドイツ大学とチェコ語のチェコ大学の二つの大学が棟続きであり、古い伝統と歴史のある大学で元は一つの大学であったが、原住民である西スラブ系のチェコ人とドイツから移住してきたゲルマン人とドイツ生れのユダヤ人との間で人種的な対立が激しくなって、一八八二年に大学はチェコ大学とドイツ大学に分裂したのである。

したがってチェコ大学ではチェコ語で授業が行われ、

ドイツ大学ではドイツ語で授業が行われていた。

このような言葉の壁の厚さと民族や宗教の違いが深刻な問題になっていることは日本人である赤堀博士には大きなショックであった。

しかし新しい生活の場となったプラハは、百塔の町とも呼ばれる古風で美しい建物が残り、中世の面影を色濃く残している町で、交響詩のスメタナやドヴォルジャークが生れたところであり、また美術工芸では食卓の食器や天井のシャンデリアなどはボヘミアングラスが美しく輝く魅力的な町であった。

また、プラハは東欧の自由化の始まりとなった「プラハの春」で有名になったところで、文化・交通・工業等の中心地でもあった。そして〝バロックの宝庫〟とも言われる美しい街並みがある由緒ある都市で、この地の劇場は世界の音楽家の檜舞台であったのでヨーロッパ中でも一流の歌劇場として公演が行われていた。

当時、隣村（朝比奈村（現御前崎市朝比奈））出身の三浦環（たまき）が世界のプリ・マドンナ三浦環としてオペラ「マダム・バタフライ」をプラハで公演することになり、赤堀博士は同胞であり、しかも同郷の人でもあるという懐かしさと素晴しい舞台を一目見たいという思いで、官費留学生であったのでささやかな小遣いを工面して、何回かこの歌劇を見たと語っている。

十四　酵素化学の研究

プラハのドイツ大学では、ワールドシュミット・ライツ教授の指導によって酵素化学の研究に取り組んだ。

当時ドイツは有機化学の研究では世界の先進国で、ビタミンB1の抽出に世界にさきがけて成功した鈴木梅太郎博士を指導したエミール・フィシャーやホフマイスター・ヴィルシュテッターなどのタンパク質やアミノ酸の世界最高の学者がいた。

赤堀博士を指導したワールドシュミット・ライツ教授はヴィルシュテッターの弟子であったから鈴木梅太郎博士と同じ研究系列であった。このワールドシュミット・ライツ教授は酵素はタンパク質に似ているがタンパク質ではないと主張していた。

しかしアメリカではすでに赤堀博士が大学を卒業した翌年の大正十五年（一九二五年）にコーネル大学の医化学者であるサムナー博士は尿素を分解するウレアーゼという酵素の結晶化に成功し、昭和五年（一九三〇年）には、やはりアメリカのプリンストン大学のロックフェラー研究所のノースロップ博士がトリプシンというタンパク質消化酵素の結晶化に成功していた。

このサムナーとノースロップの両博士は後にノーベル賞を受賞している。

しかしドイツではアメリカで酵素の結晶化に成功したことを認めず、タンパク素の結晶の上に別の物質がついたものが酵素であって、結晶全体は酵素ではないと主張していた。また結晶したということで酵素と断定することはできない。酵素の働きを詳細に測定して比較する試験を繰り返して決定するので、この論争は容易に決着がつかなかったのであった。日本の学会は伝統的にドイツ系でドイツの学説に支配されていたので、赤堀博士はアメリカの学者の研究論文を読んで、この異なった論争を確かめることも留学の目的であった。

ワールドシュミット・ライツ教授の研究室では最初すい臓の酵素について一年間研究し、その後教授の指導でニシン（鰊）の白子の中のタンパク質にプロリンというアミノ酸がどれくらいあるか定量する実験をしていた時、ドイツの有名な製薬会社「カールバウム」の製品に不純物が混じっていることを発見した。

この研究はプロリンというアミノ酸がエールリッヒ試薬で赤い色が出るので、その色の濃淡の色合いをはかってプロリンの量を決めるのであるが、白子のなかのクルペィンに含まれているプロリンには赤い色が出ない。そこでおかしいと思ってプロリンを含むはずのゼラチンを使ってエールリッヒ試薬を入れてみると色が出る。そして世界的に有名なドイツの製薬会社「カールバウム」の製品のプロリンも色が出た。しかし完全に純粋にしたプロリンで同様の実験をすると色が出なかった。

不思議に思い何回か試験した結果、赤色に反応するのはプロリンそのものではなく「オキシプロリン」であることを証明した。オキシプロリンはコラーゲン特有のタンパク質で酸化されると赤色のピロールという物質になる。ピロールは火の意味でもある。

したがってプロリンでは色が出ないことがわかった。つまり、カールバウム社製のプロリンには不純物のオキシプロリンが混じっていたことがわかった。

この発見は肝硬変と深いかかわりがあり、「赤堀の反応」として肝臓病の診断に利用されるようになった。

その後この発見はヨーロッパやアメリカでも評判が大きくなり「ワールドシュミット・ライツ・アカホリの反応」として知られるようになり、現在も標準の試験方法になっている。

当時鈴木梅太郎博士がドイツ留学中に指導を受けた有名なエミール・フィシャーの論文にはタンパク質にはオキシプロリンが含まれていると報告されていたが、赤堀博士の研究によって、これはゼラチンのコラーゲンにしか含まれていない特殊なアミノ酸であることがわかり訂正された。

エミール・フィシャーの論文は学会で高く評価されていたが、このオキシプロリンだけは間違っていたことがわかり、高名なフィシャーの研究を訂正したことで赤堀

博士は欧米や日本の学者から注目され、自身も鼻が高くなった気分だったと回想している。

この研究発見は大学院時代の醤油の香気成分の研究と同じように赤堀博士が化学研究者としての天分を見事に示したものである。

凡俗の研究者であれば赤い色が現われなければ世界的に定評のあるカールバウム社の製品であるから、その純度を疑わないし、また実験が下手であったから失敗したと思い、追試さえ怠るようであれば、この発見はなかったのである。

すべての実験の結果に疑問をもって、その理由を検証していく化学研究者としての姿勢態度は優れた天分をもっている者でなければ出来ないのである。

(註) コラーゲン

動物の皮革・腱・軟骨などを構成する硬蛋白質の一種。温水で処理すると溶けゼラチンとなる。(広辞苑による)

十五　アメリカで生化学の研究

プラハでの研究生活は一九三四年(昭和九年)の夏に切り上げ、夏休みにはオーストリアのグラーツ大学で有機化合物の微量分析について研究に専念していた。この分析技術は後の研究で大変役に立ったと語っている。(赤堀四郎「わが青春」による)

その後ドイツ大学では「ハイル・ヒットラー」と叫ぶ学生が次第に増えていたので、ナチス支配のドイツから逃れて、新しい生化学の研究をするためにアメリカに渡った。

アメリカではプリンストン大学のロックフェラー研究所の支所でノーベル賞を受賞したノースロップ博士について四か月ほどタンパク質消化酵素のトリプシンとキモトリプシンの結晶化の方法について指導してもらった。この時赤堀博士は「酵素があたかも生き物のように物を分解したり、合成したりする"力"をもっていることに強い感銘を受けた。しかし、それが無生物として結晶化することも驚きで、以後、赤堀博士の研究の重要な目標となった。」(吉原賢二「化学者たちのセレンディピリティー」による)

この研究に使用した原料は巨大な牛のすい臓で、インシュリン・トリプシン・キモトリプシン・リボヌクレアーゼなどの酵素が一杯つまっている宝庫で、その血生臭い臓物を処理してできた結晶した酵素がたしかにタンパク質であることを確認したのは感慨深い尊い経験であった。

当時のプリンストン大学のロックフェラー研究所はナチスの迫害を逃れてきたアインシュタインなどの亡命者を迎え入れて、多くのノーベル賞の受賞者があつまった学者集団となり、アメリカの科学を飛躍的に発展させたのである。

後に赤堀博士は学者たちの組織化を図り、科学行政にも敏腕を振い、柔軟で自由な発想で優れた研究業績をあげたので、ドイツ的というよりもむしろアメリカ的な学者の風格が強かったとも言われている。

(つづく)

「まんじ」季刊発行内規

(発行日)　(原稿締切日〔注〕)

春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

還暦からの考古学（十二）

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）に対する考え方の変化（その6）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

この文章を書くにあたって、私は自分の七三年間の体験から考えた「鉛同位体比法」と関係する、三角縁神獣鏡研究について述べようと試みました。

書きながら意識上の自分がコントロールできないDNAが心の奥底で動き、私があらためて見ている樋口・馬渕・平尾等による鉛同位体比分析法による三角縁神獣鏡研究と相互作用をしながら、自分の意識と言うべきことを決め、それが文面に表れたのだと強く感じております。

粉飾決算だった残留脂肪酸分析

二〇〇一年五月二十日、日本考古学協会第六七回総会の研究発表会第三会場は、「考古学的脂肪酸分析の問題点」という発表題目において難波がどのように、中野の馬場壇A遺跡で藤村が発掘した二十万年前の旧石器から、ナウマン象の脂肪酸が検出されたという一九八九年の学会発表につき、見解を述べるだろうかと参加者の注目を集めていました。

結果は簡単でした。中野が発表した論文、学会抄録並びに彼が引用した文献全部を収集、先行研究の実情、行われた実験の前提、実験方法、得られたデータの整合性、結果の解釈について検討したが、次の問題点がでたので当該動物の脂肪酸とは認められないということです。

先ず中野が先行研究として引用している「二十五万年前の脂肪の残存が報告された」という例は無く、これは「いかにしたら脂肪の特異構造が二十五万年も残ることがあるか？」を誤訳したものであり、旧石器から脂肪酸を検出したものは前例が無かった事が明らかにされました。

しかもこの証明に不可欠な対照実験である「エゾシカの脛骨」を土中に埋めた残留脂肪酸分析は、埋蔵後十四ヶ月と二十三ヶ月の二回だけ脂肪酸の成分分析を行い新

鮮骨と比較しているに過ぎず、デザインにおいても測定回数においても対照実験の役割を果たしてはいないとしました。

そして石器表面の残存脂肪を論ずるのは、石器の表面に脂肪を付着させ、これを土中に埋めて持続的に脂肪の減少量と脂肪酸組成の変化を測定する対照実験が不可欠であると述べ、この論文の成果を全面的に否定しました。

最後に難波がはき捨てるように言った言葉が印象的です。

「中野は旧石器捏造者、藤村の手の油でも検出したのではないか？」

これを聞いて理化学的分析に関するそれまでの私の考えを修正させる何かが働きました。

この発表の考察一、原著論文がない奇妙さ：の中で難波は科学的事実は論文の公表により、その内容が科学者の世論により承認されて初めて確定するものであり、この手続きを怠ることは間違いであるとして、田中・佐原等による日本考古学会の動きを批判していますが、そのような学者に昭和四五年日本脂質生化学研究会は千田賞という名誉ある賞を与えていたのであります。

こうなりますと理化学的研究成果も自分の判断で、採択するかどうか決めないといけないと思いました。

幸いにも企業財務諸表の分析は仕事を通じて永年の経験がありました。その結果、真正のバランスか、粉飾されたバランスかという見極めには勘が働きますので、今後何かあった時には、これを生かそうと思い立ちました。

以下この考えに基づきながら、こういった見方も成り立つのではないかという、自説を述べさせていただきますが、先学諸氏並びに同人各位のご叱責をいただくことが出来ればと思っております。

粉飾の疑い濃厚な我国鉛同位体比研究

何故このようなショッキングなタイトルを掲げたのか説明します。

この考えは馬渕・平尾発表論文（一九八七年、八〇頁）の第5図（第一図参照）と第6図（第二図参照）を見ているときに起りました。

その図については次の様に説明がなされていました。

4）神岡鉱山と三角縁神獣鏡

すでに述べたように、神岡鉱山の鉛は「船載」三角縁神獣鏡の鉛同位体比に近い値をとる。これは三角縁神獣鏡の船載説と国産説に重大な影響を与えると思われるので、ここで明確にしておきたい。

第5図（A式図・第一図参照）と第6図（B式図・第二図参照）には神岡鉱山の諸鉱区（栃洞、円山、茂住、持壁）の鉛同位体比（白丸）と船載三角縁神獣鏡一一四

面の鉛同位体比（黒丸）をプロットした。神岡鉱山は鉱区によって鉱床生成年代に違いがあるので、鉛同位体比は若干変動する。三角縁神獣鏡の資料名と測定値は後日報告する予定なので、本稿では省略する。

白丸と黒丸は第5図ではおおむね重なって見えるが、第6図では明らかに別のグループになる。筆者はこれで三角縁神獣鏡には神岡鉱山の鉛が使われていないことの十分な証明になると考えるが、なおも近接する資料があることを気にする方々のために、それらの資料に記号（神岡）と番号（三角縁神獣鏡）を付けておいた。第5図で完全に三角縁神獣鏡の中に入るE（栃洞）およびG（円山）は、第6図で明らかに三角縁神獣鏡から離れている。第6図で近接する1とA・B（茂住）、および2・3・4とC（持壁）・D（茂住）は、測定精度の高い第5図で見るとわずかにずれている。このように、研究の初期段階で識別しがたいように見えた両者は、測定精度の向上とデータの蓄積によって全く異なることがわかった。

そしてまとめとして

中国・朝鮮半島・日本に産する鉱石一三八試料の鉛同位体比測定により、東アジア青銅器の原料産地について次の知見が得られた。

1、中国の北部・南部、朝鮮半島の北部・南部の四者は多くの場合識別できる。

2、日本と大陸は、高い確率で識別できる。

3、弥生時代の華北産原料の産地は陝西省の可能性が高い。

4、弥生時代に将来された朝鮮半島製青銅器の原料は現地産で、忠清道の可能性が高い。

5、「舶載」三角縁神獣鏡に含まれる鉛は、研究の初期段階では神岡鉱山の鉛と識別し難いように見えたが、精密な測定によって異なることがわかった。中国産である。ただし、これは必ずしも「舶載」三角縁神獣鏡の製作地が中国であることを意味するものではない。

ここで先に三角縁神獣鏡と神岡鉱山の鉛同位対比がA式図は相似するが、B式図では相違がみられるので、これは中国産の鉛を使用したのだと断定していた件につき、三角縁神獣鏡と中国産鉛との対比が全く説明されておりませんでしたので、不審を感じ、何れも樋口・馬渕・平尾等が発表した手許資料で比較検討してみました。

結果は次の通りです。

A式図（第三図参照）

舶載といわれている三角縁神獣鏡四七面は、神岡鉱山

産十五点の鉛のうち栃洞を除く円山、茂住、漆山坑、持壁の鉛鉱石八点と相関関係が密である。

一方中国産鉛は三六点中、三角縁神獣鏡のプロットされた集団からやや離れた所に存在する椿井大塚山十七号鏡と十八号鏡が、広東省・凡口鉱山の鉛鉱石一点と近接している。

B式図（第四図参照）

これは神岡鉱山産鉛の測定された十五点の鉛鉱石全部と中国華北鉱山産鉛十七点中四点、中国華南鉱山産鉛十九点中十五点に、かなりの相関関係が認められる。しかしA式図で近接した数値を示した広東省・凡口鉱山と椿井大塚山十七号鏡とは、二〇七Pb／二〇四Pbの値が遠く離れ、椿井大塚山十八号鏡とも若干の相違がある。

従って之で見る限り三角縁神獣鏡に使用された鉛は中国産のものよりは、神岡鉱山の鉛の方がはるかに関係が深いということになる。

この結果を見て樋口・馬渕・平尾等による鉛同位体比による三角縁神獣鏡研究に粉飾があると考えました。

一般企業が見せかけの収益を計上するときに様々な手法がとられますが、同じように樋口の三角縁神獣鏡魏鏡説を補強するためにあらゆる粉飾手段を使って不正な理論が使われているという勘が働いたのです。以下この考えに基づき、先ず馬渕・平尾が述べた一九八七年論文の粉飾について考えます。

最初の傍線の部分で、馬渕・平尾は「三角縁神獣鏡には神岡鉱山の鉛が使われていないことの十分な証明になる」とか「研究の初期段階で識別しがたいように見えた両者は、測定精度の向上とデータの蓄積によって全く異なることがわかった。」と述べていますが、これは彼等による一九八二年一月発表論文五頁上段の「同位体比は容易には変らない。～値が変るのは他の鉛の汚染を受けたときである。青銅器が再鋳造された場合、異なる原料の混合が考えられるが、その中の鉛同位体比は合成された比になる。しかし溶融液がよく攪拌されていれば、製品中の同位体比は一定である。」とも矛盾しますし、更に一九八七年発表論文（馬渕・平尾、七九頁）「人為的に鉛が加えられた場合、その鉛は銅や錫に微量に含まれる異なった同位体比を持つ鉛との混合によって若干同位体比が動かされる可能性があることである。従って、鉱石の鉛と青銅器中の鉛は、たとえ同一鉱山の鉛であっても完全には一致しないと考えられる。」とは完全に相反するものとなります。

これは彼等が粉飾した事実を彼等自身が白状しているようなものだと考えました。

次に知見が得られたとした五つの項目につき考えますと、現状で2・4・5の項目が粉飾または粉飾に関係しているものと判断されました。

先ず2、「日本と大陸は、高い確率で識別できる。」は、B式図（第四図）で明らかなように、中国華北産鉛と華南産鉛の中間に神岡鉱山産鉛が入る事からも、完全な粉飾である。

次に4、「弥生時代に将来された朝鮮半島製青銅器の原料は現地産で、忠清道の可能性が高い。」は、方雄正、（韓国国立中央博物館・一九九八年・四七頁）の「青銅器は～いまだ鉱山の採掘や精練と関連した資料は発見されておらず、ただ青銅器の成分と製作技術、および補修についての資料が知られるのみである。～現在まで先史時代の鉱山遺跡の発見例はなく、採鉱技術についての内容は明確でない。」から考えると、馬渕・平尾が、日本列島での日本産鉛の使用認定に、後述のような様々な理由をつけて大幅な制限をしているのに対し、朝鮮列島ではそれを全て認めるということになり、これも粉飾の意志が働いた結果と考えました。

5、「「舶載」三角縁神獣鏡に含まれる鉛は、研究の初期段階では神岡鉱山の鉛と識別し難いように見えたが、精密な測定によって異なることがわかった。中国産である。ただし、これは必ずしも「舶載」三角縁神獣鏡の製作地が中国であることを意味するものではない。」の内中国産とした根拠は、ただ神岡鉱山産でないことを強調するための何ら裏付けの無い空論であることは、第三図、第四図から見ても明らかであり、尚且つ、馬渕・平尾が述べた精密測定によって神岡鉱山と三角縁神獣鏡の鉛が異なるという点は、今述べたように、彼等自身が説明している「鉱石の鉛と青銅器の鉛はたとえ同一鉱山の鉛であっても完全には一致しない」と完全に矛盾し、成立しない事は明白であると判断しました。

鉛同位体比法とは

ここで次へ進む前に鉛同位体比分析法について若干の説明をします。

鉛同位体比法の原理とは、鉛にある質量数の異なる四種類の安定同位体の比率によって出土鉛鉱石の鉱山を特定しようとする研究です。

二〇四Ｐｂは地球が四六億年前に出来た時から変らないのですが、他の三種類の鉛同位体を生む親の放射性核種が天然にあり、それらの同位体は変化します。そのうち二種類がウランの同位体で、二三八Ｕと核分裂を引き起こす二三五Ｕです。もう一つがトリウムの同位体である二三二Ｔｈです。

その中で、二三八Ｕは半減期四五億年で二〇六Ｐｂに、二三五Ｕは七億年の半減期で二〇七Ｐｂに、二三二Ｔｈは一四〇億年の半減期で二〇八Ｐｂとなります。

一方地球が出来た時の鉛の同位体比を隕石を使って測定しますと、二〇四Ｐｂ一に対し、二〇六Ｐｂ九・三〇七、二〇七Ｐｂ一〇・二九四、二〇八Ｐｂ二九・四七六でした。其の後鉱山が形成される時までに重いほうの三種類の鉛が前述の法則に従って増えますが、鉱山が形成され鉛鉱石が固定される時期は、ばらばらですから、鉱山毎に鉛鉱石の鉛同位体組成に違いができます。

しかし鉛はいったん鉛鉱石になりますと其の後、製品になっても同位体が変りませんので、それを測定することによって、製品と関係する鉱山を見つけることができます。

そして今までＡ式図として述べてきたものは二〇六Ｐｂで、二〇八Ｐｂと二〇七Ｐｂを除したそれぞれの指数が交差した点をプロットしたもので、鉛鉱石の性質を最も良く表わすものとして、同位体分析の基本となっているものです。

一方Ｂ式図は全く変化しない二〇四Ｐｂで二〇六Ｐｂと二〇七Ｐｂを除した指数の交差したところをプロットした表で、鉛鉱石の生成年代を反映するといわれています。ただこの表のウイークポイントは、二〇四Ｐｂの量が少ないので、若干の誤差でも指数に大きな違いが出てしまうことです。

日本産鉛に対する不当と思われる見解

馬渕・平尾は、一九八二年一月から一九八七年にかけ、日本列島鉱山産鉛鉱石七四点、中国大陸鉱山産鉛鉱石三六点、朝鮮半島鉱山産鉛鉱石三〇点の鉛同位体比を発表しました。

しかし日本列島鉱山産鉛鉱石のみ、二〇点を次に述べるような理由で当時は使用されていなかったものとして削除します。

先ず一九八二年一月発表論文八頁から九頁にかけ掲載されたものについて述べます。

第二の神岡鉱山の問題は産地推定によくある特殊例である。この鉱山は大陸性の古い地層の中にあり、図1，3，4のいずれでも中国の鉛に属する。対馬の対州鉱山も類似の傾向にある。このような場合には考古学的考察を加味して考える必要がある。例えば、仿製鏡について考えてみると、次のような解釈が成り立つであろう。

「図1，3，4で見ると、仿製鏡はすべて船載鏡と同じ範囲に入る。仿製鏡の中には神岡鉱山に近い値をとるものもあるが、一般的な日本の鉛グループに入るものはない。古代に神岡鉱山のみが開発されていたとは考え難いので、それに該当する獣形鏡も中国産の原料とするのが

妥当である。」

二番目が同じく馬渕・平尾による一九八二年六月発表論文です。その五一頁から五二頁かけ

日本の中で対馬の対州鉱山、石川県の倉谷鉱山と尾小屋鉱山といった朝鮮半島に近い地域の方鉛鉱が日本の大部分の鉛とかけ離れて"朝鮮系遺物ライン"の近くに位置するのが注目される。～それでは対馬や石川県の鉱石が使われていたという可能性はないかという問題である～筆者らは日本鉛の領域として日本各地の方鉛鉱が密集する部分を画き、例外的な値をとる神岡鉱山や上記三鉱山には目をつぶってきた。その理由は前報（一九八二年一月）にも述べたように、鉛同位体比が例外的な値をとる鉱山のみが開発されていたとは考え難いので、話を複雑にしないためであった。

更に一九八七年論文七六～七七頁では次の様に述べ、日本産鉛から都合の悪い資料を外しています。

既に報告したように、日本の鉛鉱石は神岡鉱山を除くと極めて狭い範囲に収まる。～初期の論文で筆者らは北海道広尾および秋田県太良について異常な値を表に載せた。このとき報告した二〇余の試料は山崎一雄氏が入手し、室蘭工業大学の測定と比較するために測ったものである。同大学の測定値も上記2試料については異常だったので当時はよしとしたが、研究が進むにつれて疑問を抱くようになり、太良については別途新たな二点の試料を入手して測定した。～これらは典型的な日本の鉛同位体比を示している。従って、初期に測定した太良の試料は恐らく日本の鉱石ではなく、なんらかの理由で誤って山崎氏に渡されたものと推定される。広尾については再測定を行っていないが、他の北海道の鉱石からみるとやはり疑問のある試料である。

いずれにしても、これらの2試料は地域的にみて、古墳時代までの青銅器を論ずる場合には問題にならないであろう。

このように述べ、結局日本産の鉛として認めるのは、当初図2（第五図参照）であらわした区間Pに入るもののみとしました。

しかしこの一九八二年一月発表からの一連の流れを断ち切る発表が一九九五年馬渕によって行われます。

別子型鉱床産製の漏刻大銅管の鉛同位体比です。

馬渕は該当論稿二六一頁で次のように述べます。

一九七〇年代後半、東京大学地震研究所の佐藤和郎氏と地質調査研究所の佐々木昭氏は、鉱床研究のために鉛

同位体比を測定していた。彼らが測定した鉛同位体比の中に、日本でも非常に特殊な鉱床である別子型鉱床があった。それらの鉱床は、四国から和歌山、静岡にまで抜けるベルトに入る（第六図参照）。～これは特異な同位体比であるため同定できた例である。

そして飛鳥の水落遺跡の水時計に使用されていた銅管が、日本産鉛を使用した最古のものであると発表しました。

これは日本書紀斉明天皇六年（六六〇年）五月条「又、皇太子（ひつぎのみこ）、初めて漏剋（ろうこく）を造る。民（おほみたから）をして時を知らしむ。」の通り、中大兄皇子がつくらせた漏剋と考えられますので、七世紀の半ば過ぎまでは、日本産の鉛は使われなかったという考えです。

この別子銅山系の従来発表とは全く異なるラインのものが使われていた事実を認めたのは、三角縁神獣鏡魏鏡説に抵触しなかったためであると考えております。

一般企業の粉飾は、収益のあがっていない企業が、見せ掛けの収益を計上するために粉飾を行うのですが、これをやりますと必ず資金繰りが行き詰まります。儲かってもいないのに、税金を納めたり、役員賞与とか配当を行うからです。そして取引金融機関に借り入れを申し込んでくるわけですが、その際提出されたバランスとか資金繰り表を点検しますと、必ず粉飾場所が見つかります。

これと同じように馬渕・平尾による鉛同位体比法の解釈には、樋口の三角縁神獣鏡魏鏡説を裏付ける為の、数々の粉飾があり、結果として非常に整合性とか複眼視に欠けたものが現れます。

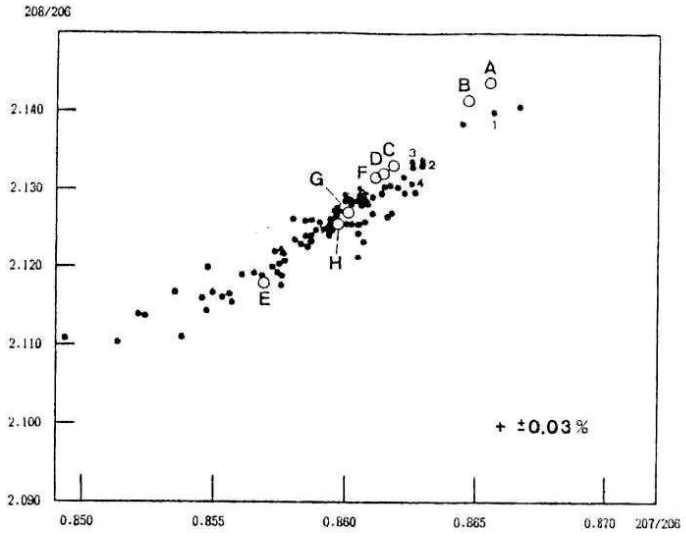
次号では、列島の地質構造、鉱物、岩石、銅と鉄の違い等の観点から、馬渕等の根拠としている理論が、いかに不自然なものであるかに迫ります。

参考文献

新井宏「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐって」『考古学雑誌』八五―二日本考古学会、二〇〇〇年。
石興邦「青銅時代」『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社、一九八六年。
春日市「春日市の鉄の歴史」『春日市史上巻』、一九九五年。
中国歴史博物館「夏・商・西周・春秋」『中国通史陳列』朝華出版社、一九九八年。
張之恒「青銅時代」『中国考古学通論』南京大学出版社、一九九一年。
中野益男「残留脂肪酸による古代復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、一九九五年。

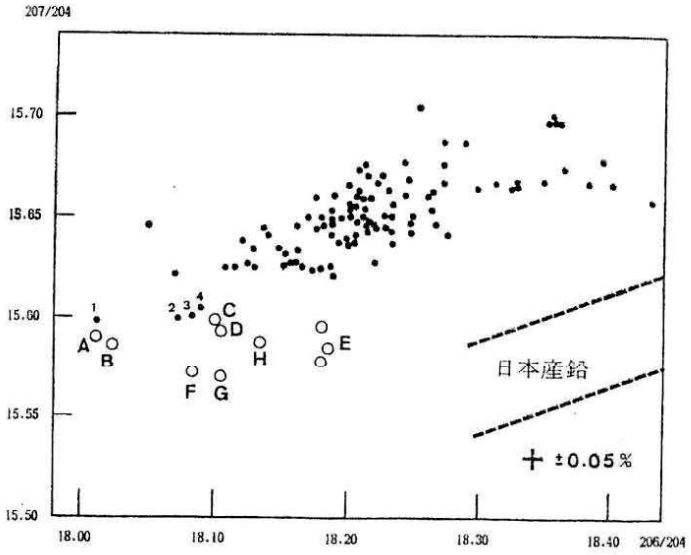
難波紘二他「考古学的脂肪酸分析の問題点」『日本考古学協会第六七回総会研究発表要旨』日本考古学協会、二〇〇一年。
樋口隆康他「日本および中国出土の青銅器の鉛同位体比による研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版、一九八四年。
方雄正「青銅器製作」『国立中央博物館』通川出版社、一九九八年。
馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡研究への期待と雑感」『MUSEUM』三七〇東京国立博物館、一九八二年一月。
馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』六八―一日本考古学会、一九八二年六月。
馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)」『MUSEUM』三八二東京国立博物館、一九八三年。
馬渕久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』七三―二日本考古学会、一九八七年。
馬渕久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』七五―四日本考古学会、一九九〇年。
馬渕久夫「鉛同位体比による青銅器原料産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、一九九五年。
山崎一雄他「日本および中国出土青銅器中の鉛の同位体比」『考古学と自然科学』十二東京大学理学部人類学教室、一九八〇年。

第一図



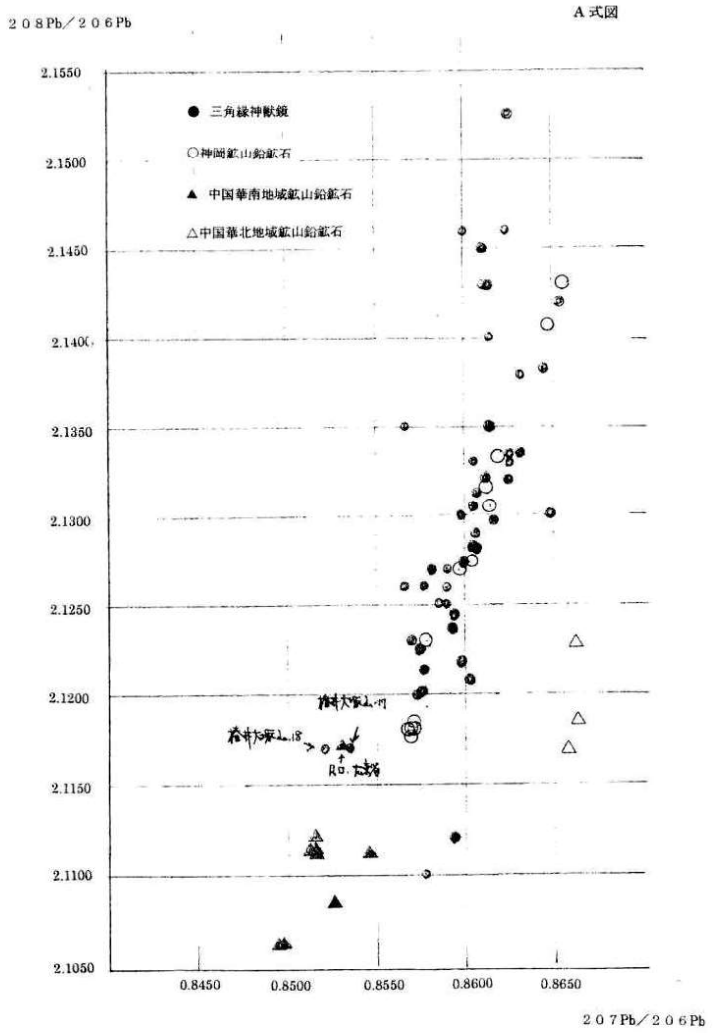
第５図　三角縁神獣鏡と神岡鉱山の鉛同位体比（A 式図）
●：「舶載」三角縁神獣鏡　○：神岡鉱山の鉛

第二図

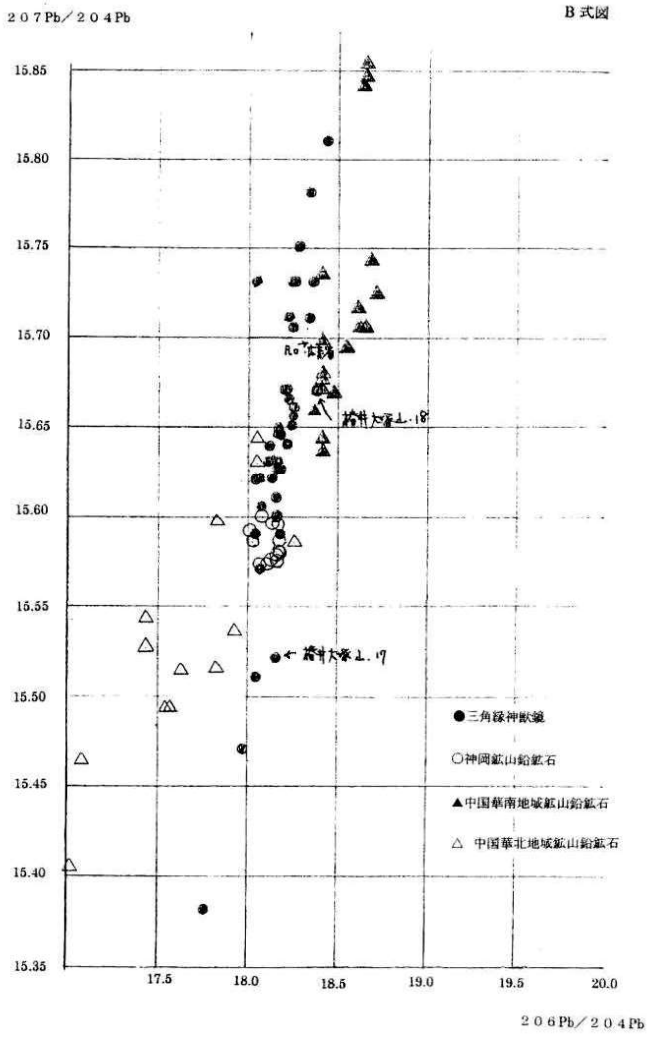


第６図　三角縁神獣鏡と神岡鉱山の鉛同位体比（B 式図）
記号は第５図と同じ

第三図


A 式図
２０８Pb／２０６Pb
２０７Pb／２０６Pb
● 三角縁神獣鏡
○神岡鉱山鉛鉱石
▲ 中国華南地域鉱山鉛鉱石
△中国華北地域鉱山鉛鉱石
2.1550
2.1500
2.1450
2.1400
2.1350
2.1300
2.1250
2.1200
2.1150
2.1100
2.1050
0.8450
0.8500
0.8550
0.8600
0.8650

第四図


B 式図
２０７Pb／２０４Pb
２０６Pb／２０４Pb
● 三角縁神獣鏡
○神岡鉱山鉛鉱石
▲中国華南地域鉱山鉛鉱石
△ 中国華北地域鉱山鉛鉱石
15.85
15.80
15.75
15.70
15.65
15.60
15.55
15.50
15.45
15.40
15.35
17.5
18.0
18.5
19.0
19.5
20.0

第五図

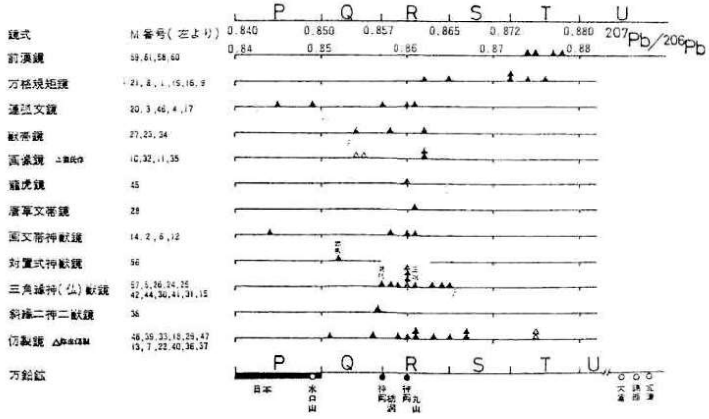


図2 $^{207}Pb/^{206}Pb$による鏡式別の表示

第六図

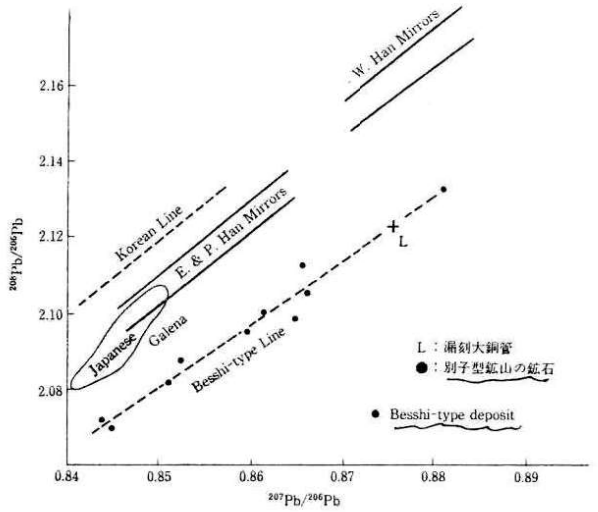


図8 漏刻大銅管の鉛同位体比 L：漏刻大銅管 ●：別子型鉱山の鉱石

鏡（その4）

中山喬央（たかひろ）

遊仙窟

唐時代に入って中国小説史上で、特定の作者が虚構を構えて自ら述べようとしているテーマを物語として展開する、創作作品が現れます。それを伝奇小説といいますが、この作品は神仙境に迷い込んだ作者自身と神女との、一夜の交歓を描いた夢幻的な物語です。

ただ中国では早くから散逸し、日本にだけ伝えられ人口に膾炙されておりました。角川の『新字源』では「唐の張鷟（ちょうさく）（字は文成）の著。張鷟が黄河のみなもとに使いに行き、ふたりの仙女に会ったという小説。奈良時代に日本に伝わり、日本の文学に影響を与えた。」と書かれ、一方岩波の『広辞苑』では「唐代の小説。張文成の作。文成が命を奉じて黄河の河源（青海地方）に至る途中、路に迷って神仙の窟に入り、崔十娘とその嫂の両女仙の歓待を受けた艶事を叙したもの。奈良時代に日本に伝来。中国では早く散逸。万葉集以降の文学に影響を与え、またその古訓は国語学の重要資料。」と書かれています。

たしかに唐代伝奇小説のうち古来、日本文学に影響を与えたと言う点では、陳鴻の『長恨歌伝』と共に最高の書であるという事ができます。

中国でこの書の文学史的意義を評価し、あわせて唐代風俗史、また唐代俗語研究の重要な資料と認めた魯迅は次の様に述べています。

「『唐書』では、張鷟は、筆を下せばたちどころに文章が出来上がり、当時、大変流行して、後進の人々は誰もが彼の文章を伝え記し、日本や新羅の使者がくると、必ず莫大な金品を出して彼の作品を購入したと賞賛している一方、浮華で論理性が乏しいと非難し、論著も大体、蕪雑（ぶざつ）だとそしっている。～

『遊仙窟』は、伝奇小説であるが、ふざけたところが多いので、正史の書籍目録には、どれにも掲載されていない。清の楊守敬が『日本訪書志』を作り、初めて記載したが、この作品を過小評価した。

日本では、最初から相当貴重に扱い、異書（優れた書）とみなしていた。注があるが、唐代の人がつけたものらしい。市河世寧は、『遊仙窟』から詩十余首を取って『全唐詩逸』に収めた。～この本で当時の習俗・俗語を知ることは、見識を広めるのに役立つばかりではない。陳球の『燕山外史』より千年も前に、初めて駢儷文（主として四字および六字の対句を用いる文体。）で伝奇小説を作っていることは、やはり文学史を研究する者にとっては、なおざりにできない。一九二七年七月七日」

あらすじ

主人公である張文成が公務で旅行をしている途中、深山の仙境に入り崔十娘という絶世の美女と歓楽の一夜を過ごし、その別れに血涙を流す物語です。

張文成が一人称で語る幻のような桃源郷は、妓楼の模倣であり、古代中国のポルノグラフィーです。

辺境の山中深く迷い込んだ彼が、断崖絶壁の彼方に神仙が住むと聞き、危険を冒して山を登り川を遡ります。そして桃の花の咲き乱れる水辺で、洗濯をしている若い娘と会い、彼女の女主人崔十娘の屋敷に案内されます。

そこで宿泊を拒む崔十娘との間で詩や文のやりとりをし、何とか説き伏せて客になるのに成功します。

この中で、彼女の美しさに見劣りする伝説上の美女が鏡を叩き割るという事や、彼女が彼を自邸に迎え入れる時に、鏡の箱から鏡を取り出しそれを見ながら念入りに化粧する場面が出てまいります。

名門の出である彼女は十七歳の時に夫に戦場で先立たれ、同じく戦場に夫を亡くした兄嫁の五嫂と侍女達に囲まれて暮らしていましたが、彼は彼女達と双六、碁等で遊び、歌舞音曲を楽しみ、折に触れ二人と才気溢れる恋の詩の交換をしながら、宴を日が暮れるまで存分に楽しみます。最後に飛んできた雉を自分で射落とし、さらに乞われるままに科挙のテストでもある遠矢を三本とも命中させて、十娘を完全にとりこにします。

日が暮れた後、兄嫁五嫂の粋な計らいで十娘の寝室に案内されることになるのですが、そこでもなお彼女がなかなか現れず、彼はやきもきします。そしてやっとあらわれた十娘を五嫂の助け舟もあって、抱きしめることができます。そこでお互いに荒れ狂って詠じあい、五嫂は自分の部屋に戻って、ようやく二人はクライマックスを迎える事となります。

あっという間に夜が明け別れの時を迎えることとなりますが、先ず彼が相思の枕を送り、彼女から履物をお返しにもらいます。次に彼は楊州の青銅鏡を送り詩を添えますが、この詩の内容は全篇が鏡の伝承に基づいています。十娘からのお返しは手のなかの扇です。

そして彼は思い出の場所を去っていきます。

日本とのつながり

大伴家持の歌「夢の逢は苦しかりけり覚きてかき探れども手にも触れねば」は、『遊仙窟』の「驚覚攪之、忽然空手（驚き覚めて之を攪むるも、忽然として手に空し）」に基づき、更に山上憶良が「沈痾自哀文」（天平五年、七三三年作）に「遊仙窟曰九泉下人、一銭不直（遊仙窟に曰く、九泉下の人、一銭にも直ひせず）―つまらない自分は、何の値打ちも無い―と引用しています。

又慶安五年（一六五二年）刊本『遊仙窟』跋文では、嵯峨天皇、書巻の中より撰ばれて『遊仙窟』を得、紀伝の儒者を召されて伝受せられんと欲せらるるも諸家みな伝うることなし。学士伊時深く愁い歎く。～時に木島の社頭、材木鬱々たるところに、木を焼き草を結びて、老翁あり。～翁これをそらんじ読む。伊時、仮名をつけて一帙を読み畢んぬ。

と『遊仙窟』神授伝説が、嵯峨天皇の世に始まる形をとっています。

その他日本文学に与えた影響としては、先に述べた万葉歌人の大伴家持、山上憶良の他に大伴旅人、空海、紫式部、近松、西鶴、山東京伝、馬琴、浅井了意、『佳人之奇遇』『太平記』等枚挙に暇が無いほどです。

次は本文の紹介です。

沈吟不睡（思い悩んで眠れない）の巻

積石山という山が金城（蘭州）の西南にあり黄河がそこを流れていた。『書経』にある「河を積石より導き竜門に至る」という、その山である。

私は甘粛省の隴州から河源軍（唐代初期の吐蕃の入寇に対する防衛拠点）を目指し、大変な難路を進んでいた。昔、張騫の通った道が山々の彼方に果てしなく続き、禹の歩いた跡は、二千年経っても相変わらず険しい坂道であった。

日は暮れたが、前途はまだ遠く、人馬共に疲れ果てていた。きわめて険阻なところに通りかかったが、万尋の青い岩壁のもと、古老の言い伝えによる神仙の棲む、千仞の紺碧の淵があった。そこは匂いのいい果実や美しい玉のついた枝、神仙の錫杖、鉢などが、どこからくるのか分らないまま、自然に浮かび出てくるところだという事である。

私は三日間斎戒沐浴して休養をとり、細い蔦蔓にすがり、軽舟で渓流をさかのぼった。体は空を飛び、魂は夢をみているようだったが、突然、松や柏の茂る巌がある、桃の花が咲いている谷川に着いた。あたりはいい匂いの

する風が吹き、空一面、光り輝いていた。

若い女が川のそばで洗濯をしていたので、私は訊ねた。
「ここには神仙のお住まいがあると聞きましたのでお伺いしました。道中、山や川の難所のため、大変疲れておりますので、奥様（女のご主人様）のところに宿を借り、しばらく休息したいと思います。どうかお許しください。」
若い女は
「私どもは、むさくるしい住いで、粗末なおもてなしもできず、とても満足していただけるとは思いませんが、無下にお断りすることもいたしかねます。」と答え、私を門の傍らにある茅葺の亭に待たせたまま、かなり長い間邸に入ったまゝ出てこなかった。
やっと出てきたその女に、私は主人の身許を尋ねた。
彼女は次の様に話してくれた。
「博陵王の子孫で、清河公の由緒ある家柄です。ご器量は舅さまゆずりです。潘安仁の外甥なんですもの。気品はお兄様そっくりですわ。崔季珪の末の妹でいらっしゃるから。」

藤原公任『倭漢朗詠集』下巻「妓女」にこのくだりが引用されています。
容貌似舅、藩安仁之甥、気調如兄、崔季珪之小妹。

「顔立ちが美しくふくよかで、天上界ではならぶ者がおりません。物腰もたおやかで、人の世に稀な方です。つややかなお顔は、指ではじけば穴があくかもしれないと思うほど柔らかですし、ほっそりとした腰つきは、つかんだら切れてしまいそうです。」

『倭名鈔』二「形体部・身体部」にこの傍線の箇所を引いています。
「細々腰支。師説、古支波勢」

「韓娥や宋玉がお嬢様を見たら、恋患いをし、絳樹や青琴がお嬢様と向かい合ったら恥ずかしくてたまらないでしょう。あでやかさと魅惑は譬えようが無く、優雅な身のこなしは、語り尽くすことができません。」

まもなく奥から箏をかなでる音が聞こえた。
私は早速詩を歌った。

自隠多姿則　いくらお奇麗だと思ったにしても
欺他獨自眠　よくも人がひとりで眠っているのを
故故将纖手　しきりに、きれいな白い手を伸ばして
時時弄小弦　たえず、弦をかきならしている
耳聞猶気絶　弦の音がするだけで息がつまるのです
眼見若為憐　この目で見たらどんなにいとおしいことか
従渠痛不肯　たとい憎まれふられようとも
人更別就天　まさか天上に行って代わりが探せるもんですか

しばらくして女奴隷の桂心が、奥にいる女主人の答を伝えに来た。

面非他舎面　顔はほかの人の顔ではないのよ
心是自家心　心だってわたしの心です
何処関天事　どこが天上にかかわりがあるのかしら
辛苦漫追尋　苦労してさがしても空しいことだわ

わたしが詩を読み終わって頭をあげると、十娘（この小説の女主人。唐代、男女にかかわらず、名・字の代わりに祖父を共通に持つ従兄弟の間で年齢順に配列した排行でもって呼んだ。）の顔が門内にちらりと見えた。早速一首作った。

斂笑偸残靨　すました顔に笑窪のあとがちらりと見えて
含羞露半脣　はじらいながら朱い唇を半ばひらいている
一眉猶叵耐　片方の眉でさえやるせないのに
双眼定傷人　両の眼なら、きっとうれしくて気が動顛するだろう

すると又、女奴隷の桂心をよこし、わたしの詩に答えてきた。

好是他家好　好きというのは、ほかの方が好きなのね
人非着意人　わたしが意中の人ではないのに
何須漫相弄　どうしてつまらぬからかいをなさるの
幾許費精神　なんという無駄な気苦労ですこと

このとき夜はふけ時がたち、思い悩んで眠れないまま、煩悶したが、心の中を打ち明ける術がなかった。
ついに思いを込めた書状をしたため贈った。

私は、年少の頃から歌や女に心を惹かれ、美女との逢瀬にあこがれて、歓楽の場所を次々に訪ね、天下を遍歴しました。蜀郡では「別鶴操」（夫婦別離の情を表現したもの）を琴で弾いて文君（卓文君。漢代、蜀郡臨邛の人。父の卓王孫は名高い大富豪。美女の代名詞としても

使われている）のもとにも通いつめ、秦楼で鳳管（笙のこと）を吹いて、弄玉（秦の穆公の娘）の顔もあきるほど眺めました。蘭を贈られ、瑚玉を解してくれましたが、印象には残っておりません。契りを結び、共寝しましたが、なんとあじけなかったことか。

昔は二人で見る夢に、夜の短さを嫌ったものでしたが、今宵は、一人旅の床に臥して、長い夜をかこっております。お天道様に変わりはありませんが、時節は様変わりしました。遠くから香の匂いをかぎ、ただ一人韓寿（晋代、南陽の賂陽の人、美男として知られる）の心境にひたり、間近な琴の音に聞き惚れて、文君の顔を見ているのだと、思いまぎらわしております。

つい先ほど、桂心が十娘様は天上界でも並ぶ者が無く、この世の中でただ一人の方だと教えてくれました。なよなよとしたやわらかな柳の小枝をたばねたような細い腰、ゆらゆらとゆれる漣の逆巻いた形の眦、両の頬をほころばすと、地上の花がすべて色あせて見え、双の眉を見ると、空に月が無くなったとしみじみ感じさせられます。

正施（春秋時代、越の美女）でさえ顔をおおって何度も身の飾りを焼き捨てるでしょうし、南国（魏の陳思王曹植の「雑詩」（『文選』二九）に出てくる江南の美女を指すと思われる）も悲しみのあまり何回も叩いて、鏡を壊してしまうでしょう。

雪が風に舞うように踊る洛水の女神も、せいぜい衣裳をたたむ役が似つかわしく、雲になって現れた巫山の神女も、履物を捧げ持つことすら、さしひかえるでしょう。

秋胡が目がきかなくて、あたら黄金を無駄使いした事が腹立たしく（春秋時代、魯の人。結婚五日目に陳に赴いて任官し、五年後、帰宅の途中、桑を取る美しい婦人を見て心が動き、金を贈ったが断られた。家に帰ってみたら、その女が自分の妻であったと知った。）鄭交甫が常軌を逸して、白玉をあてにした空しさを思っています。

私は、形勝の地を旅行して、閑静な亭に宿泊し、はからずも神女に遭って困っております。芙蓉は谷川の底から生えていて蓮子が誠に深く（蓮子は、はすの実。蓮は憐すなわち恋する、いとしがるという意味となる）木栖は山のいただきに出ていて、相思は日毎に遠くなります。

炭火を飲んでいないのに、腸が焼けるように熱く、刀を呑んでいないのに腹が割かれるように痛みます。

大伴家持が坂上大嬢に贈った歌が『万葉集』に掲載されていますが、そのなかの「夜のほどろ出でつつ来らく遍多数くなれば吾が胸截ち焼く如し」は、この傍線部分の表現から着想を得たものとされています。

つれなくも明るい月がしきりに窓に臨み、苦々しくも春風がたえず帳を動かしております。この光景を目の当

たりにして、寂しさを抱える者は、どうして堪えられましょうか。消え入るばかりの思いをやっとつないでおり、どうか絶えようとする命をお救いください。

もとよりお会いしなければ、何事もなかった。はかなくもめぐり合ったので、煩悩が起こりました。かざらぬ心の内を申し述べます。どうか前向きに考えてください。もしお姿を拝見できるなら、それだけで結構です。

書状が届いてから十娘は桂心に向かって次のように言った。

「さっきは悪ふざけしてからかったのに、本当に言い寄ってきたわ。」

傾城復傾国の巻

しばらくして、うとうとしていると、夢のなかに十娘が現れた。手をとって引き寄せたが、手ごたえがなかった。悲しくて言いようもなく、そこで一首作った。

夢中疑是實　夢のなかはうつつらしいけど
覚後忽非眞　さめてみれば、まぼろしのごとく
誠知腸欲断　げに、腸のちぎれるばかりの悲しさに
窮鬼故調人　貧乏神のことさらにたわぶれなり

十娘は詩を見たが、読むのをいやがって、すぐさま焼き捨てようとした。私は直ぐ一首追加した。

未必由詩得　詩によっては言い尽くせないかも知れないけれど
将詩故表憐　詩でもって、それでも愛を表わしたいのです。
聞渠擲入火　あの人は火の中に投げ入れたそうですね
定是欲相燃　きっと互いに燃えたいのでしょう

十娘は詩を読んでおびえて立ち上がった。鏡匣から鏡を取り、衣裳箱から衣を出し、念入りに化粧して、美しく装い、階段のところで履をなおした。わたしはさらに詩を作った。

薫香四面合　薫きしめた香の匂いが四方をおおい
光色両邊披　あざやかな光が両側にひろがって
錦障劃然巻　錦の歩障（幕）をさっと巻き上げ
羅帷垂半欹　羅の帷を半ばひきあげている
紅顔雑緑黛　つややかな顔に黛の黒がまじって
無処不相宜　どこを見ても調和がとれている
艶色浮粧粉　あでやかさに粧粉が浮いてしまい
含香乱口脂　口の香が脂の匂いとまぎらわしい

まんじ

No.108

2008.5.1

まんじ第百八号　目次

狩野川のトド……堀内永代……4
青春彷徨（一）……伊治哲……9
狩谷棭斎讃歌（二）……新井宏……14
信じて託す（その三）……三戸岡道夫……20
今川風雲録（一）……千坂精一……26
廣瀬川（一）……鍋屋次郎……31
余映を保て　短歌四十首……曽根竣作……42
短歌　行雲流水（二十）……石黒修身……47
俳句　鷹の呟き（二）……大澤鷹雪……52
野梅……勝山道子……56
歌詞　千年先の未来まで……亜木陽一……61
漢詩　潮騒録（五十四）……鯨游海……62
後深草院二条の別離譚……島津隆子……66
空風（九）……太田精一……76
五十年間の一人言……平山恵敏……83
化粧のルーツを訪ねて（二）……鈴木守……87
化粧のルーツを訪ねて（三）……鈴木守……98
骨董趣味から茶会まで……忠内正之……108
（司馬雑感十五）「赤坂散歩」と「本所深川散歩」……山田嘉久……115
れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより……松下壽男……124
ホメラレモセズ　クニモサレズ（十三～十五）……松下壽男……125
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十）……松下魏三……138
還暦からの考古学（十三）……中山喬央……142
鏡（その5）……中山喬央……151
青の漂流（四）……宅見勝弘……160
編集後記……編集子……165
表紙……田寺怜葦……

狩野川のトド

堀内永代

この物語の主人公佐藤雪子が、漁師の藤吉（三一歳）とみ（二七歳）夫婦の長女として我入道に生まれたのは、芹沢光治良が少年時代を過ごした頃から二〇年ほど経った、昭和五年の夏の昼下がりであった。

信心深い藤吉とみ夫婦は、色白の可愛い娘に育って欲しいと願って「雪子」と名を付けたのである。

雪子の生まれた家は、狩野川河口の堤防の近くにあり、その家から南の方角に松林を抜けると広々とした砂浜があって、夏季には海水浴客で賑わった。また、近くには沼津御用邸もあって、時には御皇室の殿下たちがお忍びで海水浴をされるお姿も見られた。

我入道と沼津市街地の間を流れる狩野川は、静岡県内では天竜川、大井川、富士川に次ぐ大河である。

この川は、伊豆の天城山中に源を発して富士山に向かって流れ、大見川、船原川、桂川、来光川、柿田川、黄瀬川などの支流を集めて沼津で駿河湾に注いでいた。

（一）

「文学は
　物言わぬ　神の意思に
　言葉を　与えることである―」

作家芹沢光治良の随筆『神の微笑』の巻頭言である。

芹沢光治良は、明治二九年に静岡県で生まれた。

彼が育った沼津市我入道は、狩野川河口の左岸にあり、今から七三〇年前、日蓮上人が鎌倉から舟で逃れてこの地に辿り着き、

「この地こそ『我が入る道』なり」

と唱えて身延山に向かったことから付いた地名だと伝えられている。そのような故事もあってか、我入道の人たちは皆信仰心が篤かった。

山深い天城連峰の湧水が流れる狩野川は、水量も豊かで、ことに河口付近は川幅も広く、ゆったりと水が流れていた。

漁師町我入道では、男の子は、小学校高学年になると朝早くから漁船に乗って父親の漁業を手伝い、女の子は、母親の干物つくりや塩辛つくりを手伝った。

雪子も小学校三年生の頃から、母親の仕事を手伝わされたが、他所の子供と違って、少しでも暇があれば教科書を開き、声を出して読んでいた。

こんな雪子を見て母親のとみは、

「漁師の子には珍しく、なんて本の好きな子だろう・・」

半ば呆れ顔で、半ば得意気に漁師仲間のおかみさんたちに吹聴していた。

雪子が小学校四年の春に、日頃、可愛がってくれた祖母のおかねが、長い闘病生活を続けた末に、七二歳で亡くなった。雪子は、その時の悲しい想いを作文にして担任の教師に提出したところ、それが沼津市教育課主催の小学校作文コンクールで優秀賞に選ばれ、『沼津文苑』に掲載されて、クラスの皆から羨ましがられた。

その作文には、数年前に死んだ祖父の松吉が、小さな船で沿岸漁業を続けた様子が書かれてあり、さらに、おかねの話として西風が強い日は、冷たい海水が駿河湾に流れ込むためか不漁が続き、その日に食べるコメを買うこともできないほど困窮したことなどが書かれてあった。

偶然か否か、雪子の作文が沼津文苑に載ったその年は、海の荒れる日が幾日も続いたため、漁師たちの水揚げ量が激減し、さらに日中戦争の長期化で、若者を始め働き手の多くが軍隊や軍需工場に取られて、我入道の町もすっかり寂れていた。

（二）

不漁の日が続いたある秋日のことである。雪子はしきりと耳鳴りがするといってむずかったが、昼の間、夢中になって遊んだその疲れからか、夕飯を食べると直ぐ布団にもぐりこんだ。

その夜、ぐっすり眠っていた雪子が、夜半を過ぎた頃にむっくり起き上がった。暗闇の中で布団の上に正座して、耳の穴をほじったり、両手を合わせたり、なにやらブツブツ呟いていたが、しばらくすると、すっくと立ち上がり、両親が寝ている隣の部屋に向って、

「おとうちゃん！大変だよ。おばぁちゃんが夢の中で、魚がいっぱい川に来るってわたしに教えてくれたよ・・本当だよ」

と大声で叫び、再び布団の中にもぐりこみ、スヤスヤと寝入ってしまった。雪子の声を夢現で聞いていた父親の藤吉は、不機嫌さを露わにして、

「なにを馬鹿なことを言うんだ・・・　今頃、川に魚がたくさんいる訳がない。そんなことはいいから早く寝なさい」

そうたしなめてから目を閉じた、がもう一度雪子の言葉を反芻してみた。いままでも、雪子が耳鳴りを訴えたときは、何か異変が起こることが多かった。

「そうか、神様は物を言わないけれど、死んだ婆さんを通して雪子に何かを伝えたのかも知れんな・・・そうだ、きっとそうだ。婆さんは人一倍信心が強かったから、その信心が神様に通じて、川に魚がくることを雪子に告げたんだ。雪子は巫女みたいになったんだ・・・」

藤吉の呟く声を聞いた女房のとみも、

「ほんにあんたの言う通りかも知れないね。神さまがあの子に取憑いて、文章を書かせたり、言わせたりしているのかも知れないね。そうよ、きっとそうよ」

「そうだ！　神様のお告げだ！　雪子が神憑って言った魚の話も、案外本当かも知れんぞ・・・」

それから藤吉ととみは、雪子の神憑りについてあれこれ話合っているうちに、いつしか寝入ってしまった。

その翌朝、藤吉・とみの夫婦は、

「昨夜、雪子が神憑りに遭って、神様からのお告げを聞いた・・・」

と狩野川に魚が来るという神の啓示を、我入道の漁師たちに、触れて歩いた。

しかし、漁師たちは一様に、

「そりゃぁ雪ちゃんが寝ぼけたんだ」

そう言って誰一人として、藤吉夫婦の話に耳を傾ける者はいなかった。

それから一週間後、晩秋の冷気が身に沁みる夜明け前、若い漁師が、出魚の準備をするため狩野川河口の船着き場に向かって堤防の下を歩いていた。その時、若者の足が"ぎくっ"と止まった。

暗闇の中から異様な物音が聞こえてきたのだ。

（バシャ、バシャ・・・　ザワ、ザワ・・・）

（ばしゃばしゃ・・・　ざわざわ・・・）

「何の音だろう・・・」

いぶかしく思った若者は、用心しながら堤防の上に登り、朝靄がたちこめる薄闇の中を、すかし見るように辺りを見廻した。付近には人影はまったくない。動物のいる気配もない。じっと耳を澄ましていると、異様な音は川の方向から聞こえてくるのだった。

恐る恐る足元を確かめながら土手を下り、船着き場の先っぽに立って川面を見渡した。薄暗い川にさざ波が立ち、水面が盛り上がるように渦巻いて、ゆっくり駿河湾の方向に移動しているのではないか。

（ばしゃ、ばしゃ・・・）

川のあちこちに、大きな魚が白い魚腹を星明かりに閃

かして、水面に飛び跳ねている。

（やや、魚だ・・・　でっかい魚が仰山いる、物凄い数だ。何百、何千、いやいや何万匹か・・・）

薄闇の中をじっと透かし見ると、魚の大群は、川上にある我入道の渡し場辺りから、もみ合いながら海の方へ下っているのではないか。

驚いた若者は、慌てふためき土手を駆け上がり、

「わーい！　大変だ、大変だぁ―　狩野川が魚の大群で真っ黒になっているぞ―」

堤防の上から大声で叫んだ。そう叫びながら我入道の中央に建っている火見櫓目がけて転がるように走った。この大珍事を一刻も早く仲間の漁師たちに知らせなければいけない。若者は、無我夢中で火見櫓に攀じ登り、腕も折れよとばかりに、半鐘を乱打した。

（じゃーん、じゃんじゃんじゃんじゃん・・・）

（じゃーん、じゃんじゃんじゃんじゃん・・・）

夜明け前の我入道に擂半鐘が鳴り渡った。半鐘の音に叩き起こされた町民は、

「なんだ、なんだ・・・　火事か・・・」

「火事はどこだ・・・」

早朝の擂半鐘に我入道の町民はびっくり仰天、寝間着のまま家を飛び出して来た漁師やら、火事装束を抱えた消防団員やら、それぞれ思いおもいの服装で、火の見櫓の下に集まって来た。

「おーい、火事はどこだぁ、火事はどこだぁー」

「火事はどっちの方角だぁー」

町民は、櫓の上で半鐘を打ち鳴らしている若者に向かって、怒鳴った。

「火事じゃあないぞ―　魚の大群が押し寄せてきたんだぞ―」

半鐘を打つ手を止めて、若者は櫓の上から大声で怒鳴り返した。

「なに、魚の大群だと・・・　魚はどこにいるんだ・・・」

「狩野川の河口だ！　船着き場の辺り一面は、魚でいっぱいだぞ！　何の魚が知らんが物凄い数だ、みんな網を持って船着き場へ行くんだぁ―」

火の見櫓の上からの怒鳴り声を聞いて、我入道の漁師町は蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。火の見櫓の下から真っすぐ船着き場へすっ飛んで行く漁師、大慌てで網など漁具を取りに家に引き返す若者などなど、小さな町はてんやわんやの大騒ぎとなった。

男も女も、老人も子供も、てんでに魚具を持って、われ先にと狩野川の船着き場に駆け付けた。

我入道の漁師たちは、二〇隻ばかりの小型漁船に飛び乗るや否や、フルスピードで魚の群の中に船を突っ込んだ。素早く網を川に投げ入れて魚を獲ろうとした、がどうした訳か思うように網が拡がらない。こっちの船も、向こうの漁師も焦っているばかりで、魚を獲ることがで

きない。

毎日沖合いに出て魚を獲ることに習熟しているはずの漁師が、あまりにも魚が多過ぎて気が動顛し、思うように船や網を操ることができないのである。

魚の大群と格闘すること三〇分、漁師たちはようやく落ち着きを取り戻し、日頃の手さばきで魚を獲り始めた。網を川に投げ込めば、魚の方から網の中に飛び込んでくるという調子だ。瞬く間に船は魚で一杯になった。

漁師たちは魚で船がいっぱいになると、我入道の船着き場か、その対岸にある沼津魚市場に船を着けて魚を下ろしたが、一瞬とて休む暇がなかった。

向こうの漁船は川の中と魚市場の間を、こちらの船は船着き場と川の中を、何十回往復したか判らない。魚市場も船着き場も魚の山である。踏みつけられた魚の腹から血が流れ出て、血のりで足が滑って思うように歩けないほどである。まるで火事場のような喧騒さであった。

魚を獲ること五時間。朝日が頭上に昇ってくる頃には、ほぼ全容が判ってきた。

時ならぬ魚の大群はボラであった。我入道の古老たちも、未だかつて経験したことのない大量の水揚げである。

そもそもボラは、ブリとともに出世魚といわれ、稚魚をハク、幼魚をオボコ、中型魚をイナ、成魚をボラ、と成長するに伴って呼び名が変わっていく。成魚の体長は八〇センチぐらいで、日本全域に分布し、内湾や河口に多く棲息する。

冬期が最も美味で、江戸時代から刺身・鍋ものとして珍重されている。ボラの卵巣を塩漬けにしたものが、長崎の珍味「からすみ」で、天下の三大珍味の一つに数えられている。

幼魚は淡水域にも遡上し、成魚は一〇月から一月にかけて、産卵のために熱帯域の海を回遊するといわれているが、産卵場など詳細は不明である。晩秋から冬にかけて、巨大な群れをつくり、水深五メートルから二〇メートルくらいまでビッシリと層をなして回遊し、その群れの巨大さは半端ではないといわれている。

狩野川の河口を回遊してきたボラも、丁度このような状態のものであった。

大量のボラの水揚げが一段落すると、誰が言うともなく、一週間前に藤吉夫婦が言った雪子の神憑り的なお告げのことが評判となった。

「雪子は幸運の女神だ。『ボラの精』が雪子に乗り移った」

噂は噂を呼び、狩野川に架かる御成橋を渡って、沼津の町の中にまで広まっていった。

雪子の評判が広まる中で、小学四年生の当の本人は、神憑りのことなど一向に関心がなく、相変わらず大好きな本を、四人の小さな妹たちに読んで聞かせていた。

つづく

青春彷徨（一）

突然の電話

伊治哲

「モシモシ、舘さんですか？　舘修平さんでしょうか？　突然の電話で申しわけありません。わたし、『ナガタ』といいます」

ようやく秋の気配が深まりはじめた十月の半ば、ある日の夕暮間じかだった。突然の電話、しかも女の声である。

「ハイ、舘ですが・・・」

「わたし、昭和三十年頃、共栄銀行にいた旧姓『カトウ』といいます。『加藤レイコ』です。覚えていらっしゃいませんでしょうか？」

読書の手を休めて、舘修平がとりあげた受話器の向こうから、遠慮がちに囁くような声が流れてきた。修平は、なにかの間違い電話ではないかと一瞬耳を疑った。

「『加藤さん』とおっしゃいましたか？　共栄銀行ですか？　ウーン・・・、突然のことで思い出せませんが・・・。共栄銀行のどこかでご一緒したでしょうか？」

「共栄銀行の昔の名古屋支店です。診療所の薬剤師をしていました。その頃は『加藤』と言いました」

修平の脳裏に、はるか昔、名古屋の栄町に近い赤門通りの角に、いかにも威容を誇るようにガッシリと建った厳めしい銀行の建物が目によみがえってきた。しかしその後、取り壊されて瀟洒な建物に建て替えられ、銀行も支店の名前も変ったはずである。

「たしかに、あの古い時代の名古屋支店は覚えています。私も三、四年くらいそこに勤めていました。診療所があったことも覚えています。そこにあなたはいらっしゃったのですか？」

「エエ、そうなんです。診療所ですから、仕事では直

接舘さんと接触があったわけではありませんが・・・。
ホラ、あの頃、コーラスをやっていましたでしょう。行員の方に交じって舘さんにコーラスの指導をしていただいたことを覚えています」
「エエッ！コーラス・・・？」
「そうなんです。わたし、あのコーラスグループの一員だったのです。仕事が終ってから屋上や会議室に集まって、昔の童謡や小学唱歌を歌いました。みんなで声を合わせて歌うだけで、それがとても楽しくって・・・。今でも忘れられません」
修平の頭の中が、グルグルと過去に向かって一目散に回転し始めた。おぼろげながら、自分の過去の姿が他人の像のように浮かんでくる。
若い頃とはいえ、今から思うとそんなたわいもないことを本気でやっていたんだろうか・・・。自分が自分でないような気がした。
しかし、彼女が「忘れられません」と言うのだから、事実であることには違いない。修平は、一生懸命過去への糸を手繰り寄せようとした。そして、ハッと昔の記憶が戻ってきた。
「そう、コーラス・・・。『ドングリコロコロ』でしたか？　『ドングリ』だったらやっと思い出しましたよ。あの頃、そんなことをやっていたのですねえ。まるで他人ごとのように思えます」

女の声は弾けるように明るくなった。
「そうです、そうです。その『ドングリ合唱団』です。わたし、そのメンバーだったんです」
“合唱団”といっても、わずか十五、六人くらいだったはずだ。その中に「ナガタさん」いや、「加藤さん」という人がいただろうか？
「しかし、悪いけど名前や顔は思い出せないなあ。あれは昭和三十二、三年頃、もう五十年も経っているんですよ」
「わたし、舘さんのお顔ははっきり覚えています。コーラス・グループでハイキングに行った時の写真を大事にもっていますもの・・・」
彼女はちょっと不満げな、しかし思い切ったような口ぶりで続けた。
「最近あの頃のことが無性に懐かしくなって・・・。久しぶりにお声を聞きたいし、できれば一度お会いしたいなあと思ったりして・・・。それで突然失礼なお電話を差し上げたんです。びっくりなさったでしょう。ご免なさい」
突然の電話の主の素性や意図がようやく分ってきた。しかし、いってみれば遠い過去のいっとき、袖擦りあわせただけのことではないか。半世紀も昔にふれあった人と今さら顔を合わせてみて、いったい何をどうしようというのだろうか。修平は、話のスジを逸らそうと思った。

「それはそれは、そんな昔のことを思い出してもらって恐縮です。私は、もうかれこれ四十年近くこの横浜に住んでいます。それにしても、よく私の電話が分りましたねえ」
「電話が長くなってご免なさい。もう少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか」
とことわって、話を続けた。
「それが不思議なご縁なんですよ。実はね、先日女学校時代の友達とご一緒する機会がありましたの。わたしの銀行勤務の頃の思い出話をしている中で、たまたま舘さんの名前を出したんです。そうしたらその方が『舘さん・・？　舘さんという方なら、うちの主人の親友ですよ。珍しい名前で、しかも共栄銀行だから、きっとそうに違いない』と言うじゃありませんか。
神戸にお住まいの花岡さんとおっしゃるんですけど、ご存知ですわね。金沢の学生時代、クラスも学生寮も下宿もご一緒で、一番親しい学友だったとお聞きしました。その方から舘さんの電話番号を聞いて、懐かしさのあまり矢も盾もたまらずお電話をしたのです」
修平は心底驚いてしまった。
「エーッ？　あなたが花岡の奥さんと同級生ですって？　驚いたなあ！　花岡なら、学生時代からの無二の親友です。卒業後の進路は違ったけど、今でも年に一、二度は会っています」

「そうでしたの。世の中って不思議ですわねえ。そんなご縁で繋がっているのでしたら、余計にお会いしてお話を伺いたいわ。機会をつくっていただけませんか？」
修平は、初対面にも近い電話でちょっと唐突ではないか、と思ったが、うまく退路を断たれて一瞬怯まざるをえなかった。
「花岡のてまえ、会わないわけにはいかんなあ」
と呟くように口から洩らした。
「アラッ、失礼ねえ。わたしがお会いしたいと言っているんですヨッ！」
「アッ、失礼！　これはとんだ失言だった。ご免なさい」
修平は追い詰められた。
「それで、いつ、どこでお会いしますか？」
「わたし、今金沢に住んでいるんです。舘さん、近く金沢にいらっしゃるんじゃありません？　わたしにはよく分りませんが、昔の高校のお祭が金沢であるとか聞いていますけど・・・その折にでも、と思いましたの」
「ああ、よく気がつきましたねえ。高校の開学記念祭です。私も二十一日に出かけるつもりです。もちろん花岡も来ます」
彼女、前もって見込みをたてて、この時期に電話をしてきたのだ。修平は脱帽した。
「だけど・・・同窓会のほかに、寮歌の演奏会だの、クラス会だの・・・世話になった先生の墓参りもしたい

し・・・予定がぎっしり詰まっていて、ゆっくりお話をする時間がとれないなあ・・・」

修平は、やや言い訳がましいと思ったが、事実そんな時間の余裕はとれそうになかった。

彼女は思惑が外れてちょっとがっかりしたのか、話題をそらした。

「それにしても、もう今から金沢の街はお祭りムードですよ。金沢って変な街ですねえ。とっくに無くなった昔の学校の記念祭に盛り上がるなんて・・・」

「それが金沢のいいところですよ。昔の〝青春〟が周年ごとに全国から金沢へ帰ってくるんです。それを街を挙げて歓迎してくれるんです。金沢は僕らの青春です。心の故郷です。悪く言わないでほしいなあ」

修平はちょっとムキになって答えた。彼女は慌てたように言った。

「ご免なさい、よく解りました」

しばらく考え込んでいるようであったが、思い切るように再び言葉を続けた。

「・・・それじゃあ、こうしていただけませんか？来月十一月の六日、月曜日ですけど、その日の夕方、時間を空けていただけませんか？

折りよく、その日小学校の同級会が横浜であるんですよ。桜木町駅前のワシントンホテルに泊りますから、午後六時に来ていただけないでしょうか。ロビーでお待ちしますわ。お呼び立てしてご免なさいね」

修平はやっとこちらの土俵に引っ張り込んだと思ったのに、次の手を用意している彼女の周到さに驚かされた。万事休す、である。

「分りました。じゃあ、そうしましょう」

「大丈夫ですね？　きっとですよ」

「大丈夫・・・。しかし顔が分かるかなあ・・・？」

「思い出してください。加藤レイコですよ。・・・わたしが舘さんのお顔、覚えていますから、わたしの方から声をかけますわ」

「お願いします。それじゃあ、その日を楽しみに待っています」

「ぶしつけに突然押し付けがましいお電話をして申しわけありません。それではきっとですよ」

――念を押すように言って、やっと長電話が切れた。

実をいうと、二、三日前に、例の花岡から「舘！〝昔の佳人〟がお前を探しているぞ」という電話があった。例によって、またからかってきたなと思い、別に気にもとめず、半ば忘れかけていたところであった。それが今しがたの電話だったのだ。

それにしてもこれは困ったことになった。修平は困惑した。電話の声からでも想像できないかと頭を巡らせてみたが、彼女の姿形が全く思い浮かんでこない。

急いで昔のアルバムをひっくり返してみた。黄ばんだ古い写真の中から、コーラス仲間とハイキングに出かけた折の写真らしいものが見つかった。たしかにその折に撮った写真である。

二十人くらいのグループだ。当然のことだがみんな若い。もちろん修平もだ。〈我ながら若かったのだなあ〉と思わず溜め息をついた。

この中に「加藤レイコ」なる人がいるはずだ。修平はルーペを持ち出して、丹念に一人ひとりの顔を映し出してみる。その中にそれと思われる女性が目にとまった。きっとこの女性に違いないと思うけど・・・？　写真に写ったこの女性が先の電話の主だとすれば、花岡の言ったとおり結構〝佳人〟なのかもしれない。修平は他の顔と見比べながら、願わくばこの人であってほしいと思っている自分がおかしかった。

しかし、考えてみれば、この時からもう五十年も経っている。修平もすっかり歳をとったが、彼女だって同じだ。数えてみれば七十歳のいいオバアサンだ。この写真からは五十年後の顔はどうしても想像がつかない。

〈それはそれでいいではないか。約束の十一月六日になれば、お互いに本当の姿が分る。五十年の歳月の皺からにじみ出る話に耳を傾けよう〉

修平はアルバムのページを閉じた。

――「夕ご飯ですよー」という妻の声に、修平はハッと我にかえった。なんとなく甘酸っぱいような、後ろめたいような思いを胸にしまって、なにくわぬ顔で夕食のテーブルについた。

――つづく

狩谷棭斎讃歌（二）

新井宏

（五）本居宣長（一）

本居宣長と言えば、江戸時代に狩谷棭斎の対極にあった学者で、何よりも明治維新のひとつの思想的なバックボーンとなった神がかり的な天皇制教学、すなわち『古事記伝』を挙げなければならない。それとともに、宣長が没入した古事記には、賀茂真淵から現代に至るまでくり返し提出され続けている偽書説があることも想起しておかなければならない。

もし、本居宣長が『古事記伝』によって「心地よい国学」を提示することが無かったとしたなら、古事記はいまごろ弘仁年間に多朝臣人長が書いた偽書と決まっていたかも知れない。すくなくとも古事記の序文が後世に書かれたことなど、史料批判をすれば簡単にわかる話だからである。そうなっていないのは、ひたすらに宣長が古事記を日本の思想書に高めてしまったからである。

宣長の古事記研究には、ふたつの側面がある。ひとつは日本の古語読法の実証的な研究であり、もうひとつは、古事記が日本書紀よりも価値が高いと主張し、ナショナリズムを高揚した思想である。周知のように後者の立場が平田篤胤に引継がれ、明治維新以降の天皇制理念のバックボーンとなった。

すなわち、古事記は、拙劣な文章に見えても、中国風にアレンジされた日本書紀には失われた古代日本人のままことの言葉と心があり、古事記から「漢意」や仏教や儒教との「習合」を徹底して取り去って、再構成したところに「大和魂」があると宣長は主張したのである。それは、和語に内在している「もののあわれ」の実証的な研究とは離れた観念的な世界であった。

「美しい理論」すなわち「心地よい理論」は、それが

豊富な事例によって検証され、飾られた時には、熱烈に受け入れられる。

島国の日本は、奔流のごとく外国文化を受け入れた時期と、内にこもって熟成させ文化的なナショナリズムを高揚させた時期が交互にやってきている。平安時代と江戸時代は文化的なナショナリズムを高揚させた代表的な時期であった。

だから古事記の内容は、唐の文化が盛行していた和銅四年(七一一)の太安万侶の作とするよりも、律令制の変質が始まった百年後の弘仁年間の多朝臣人長の作とする方がはるかに理解しやすい。平安期の思想であったからこそ、江戸の文化ナショナリズム、すなわち本居宣長の国学がはげしく共鳴したのである。

そもそも古事記は、賀茂真淵でさえ、その序文は偽作だと弟子の本居宣長に伝えていた。沼田順義も文政十二年(一八二九)刊行の『級長戸風』で数多くの理由をあげて偽書としている。史料批判と言う歴史学の基本にのっとれば、偽書の疑いが濃厚なのは、誰にでもわかることであった。

勅撰の古事記が『続日本紀』にまったく記載されていないばかりでなく、聡明さが激賞されている稗田阿礼の「稗田」姓が史書のどこにも見当たらなかった。その矛盾を「秘伝」だからだとかわす論理は、中国から一面も出ない三角縁神獣鏡を、卑弥呼への「特鋳品」としてかわす論理と良く似ていた。

しかし『古事記』の聖典化が進行して、東京帝大などのアカデミズムにとっても、古事記が偽書であってはならない存在となってしまった。そのような中にあっても、中沢見明は序文が明らかに偽作であり、稗田阿礼の実在を疑い、神統譜に日枝、賀茂、松尾神社などが登場することから、本文も平安初期の偽作とする意見を唱えて、非国民として弾圧された。この他にも、あからさまに偽書とは言わないまでも、折口信夫や原田敏明も古事記の神統譜の新しさを指摘していた。

戦後になって、天皇制の呪縛から解放されると偽書説が続出する。筏勲、松本雅明、鳥越憲三郎、薮田嘉一郎そして大和岩雄である。

このような状況に対して、流石に古事記学会も無視ばかりはしていられなかった。

しかし、古事記学会はなんと言っても古事記を正書として研究する立場の団体であり、偽書となっては一大事である。逆に言えば、古事記学会は偽書と断定さえされなければ良かった。だから、偽書説に対する全面的な反論と言うよりは、偽書説に対する「反証」を提示し、証明責任を偽書説側に投げかける方式を採っている。

これがいったん定説化した側の強みであり常套手段である。ご破算で願いましてはと行かないのが専門家集団なのである。もし偽書と決まれば、職を失いかねない。

古事記を正書とする側の偽書説に対する最大の「反証」は、古事記が「上代特殊仮名遣い」、すなわち、イ行、エ行、オ行が甲類と乙類の発音によって正確に書き分けていて、平安期に偽作するなどできないと言うことである。とりわけ、『日本書紀』や『万葉集』でも書き分けていない甲類と乙類のモ音を正確に書き分けていることが最大の反証であった。定説というのは、たったひとつでも重みのある反証を示せば、その地位に安住できる。

ところが、最近ではその「反証」も強力とは言えなくなってきた。例えば、奈良末から平安初期に書かれた仏教書『新訳華厳経音義私記』と『守護国界章』でもト音を除き、概ね甲類、乙類を正確に書き分けていることが解ったのである。

そうではなくとも、古事記の偽作者として有力視されている多朝臣人長は、古典を扱う職掌柄、甲乙の区分ができたはずである。事実、多人長が古事記について、史書に知られているかぎり初めて紹介した『弘仁私記』では、上代特殊仮名遣が完璧に再現されていると言う。多人長は太安万侶の子孫である。

『日本書紀』『万葉集』の時代でも、甲乙の区分はかなり乱れていた。ところが『古事記』には乱れがないと言う。それが『古事記』の古さの証拠であり偽書説を拒んできた。しかし、考えてみれば、完璧すぎるのがむしろおかしい。完璧さが偽書の証明なのではないか。

『古事記』の完璧さは、清音・濁音の完全な書き分けにも見られる。もっとも、この場合は、清濁の区分が不完全だったのは、むしろ奈良時代であり平安時代になると区分が完全になっている。逆に偽書説の根拠にされている。

韓国では八母音を完全に使い分けている。甲乙の発音は時代差ばかりでなく、地域差でもあったかも知れない。今でもイをウに近く発音する人はたくさんいるし、イとエの区分ができない人も多い。不完全で良ければ、何百年も前の旧仮名遣いができる人だって少なくない。

しかも、最近になって、肝心の「上代特殊仮名遣い」はなかったとする説が藤井游惟によって提示された。そもそも「上代特殊仮名遣い」は当初八母音とされていたが、今では六母音説や五母音説の方がはるかに優勢であり、出るべくして出たのが藤井説なのである。

藤井游惟によれば、現代日本語でさえ、「条件異音」と言って、母音を前後の音との関係で微妙に変えて甲類風あるいは乙類風に発音しているというのである。しかし、日本人はそれを全て同じ母音と聞き取って区別していない。ところが、八母音を区別する韓国人が聞くとこれを別の音と聴き分けるのである。すなわち、万葉の時代には、多くの文章が百済系の亡命者によって筆録されたために、日本語にも八母音あったかのようになってしまったというのである。

そこにきて、古事記の専門家である三浦佑之まで、序文だけは偽作であろうと言い出した。三浦佑之は最近「金印偽造説」を書いて話題になった人物であるが、金印を疑る目をもってすれば、序文を偽作とするのが論理の必然である。ただし、もちろん三浦は古事記本体が、日本書紀より古い内容を伝えていて、古事記そのものの価値を貶めるものではないとしている。

いずれにせよ、古事記学会としては決着をつけなければならないのであるが、ここでも「旧石器捏造」と同じ構造がある。「埋めるはずがない」「専門家が見抜けぬはずがない」と言っている内に、ついに自浄の機会を逸してしまったのが考古学界である。「偽造などするはずがない」と言うのは論理ではない。

(八)本居宣長(二)

平成十六年版の岩波文庫の『魏志倭人伝』では「邪馬臺国」の表記が原典通り「邪馬壱国」に変った。親鸞研究で実績を上げた古田武彦が、中国の『魏志』のすべてに当たって見て、臺を壱と間違えたところなどないとして、安易に原典を修正する風潮を批判し、『邪馬台国はなかった』を出してから三十三年目のことである。

実は、『魏志倭人伝』の「邪馬壱国」を「邪馬臺国」と校訂したのは本居宣長である。それは宋代に書かれた『後漢書』以降の書物に基づく校訂であろうが、確かに新しい文献で古い文献を訂正するのはおかしい。したがって古田武彦の指摘はアマチュアばかりでなく、専門家にもある程度の評価は受けた。筱斎もおそらく古田武彦の指摘を評価したに違いない。

しかし、その後がいけなかった。

失われた九州王朝説や魏短里説などで、強引な自説を主張するのはまだ良いとしても、自説への反論に対して、部分否定をしてはそれを全体否定のように見せかけたり、反証責任を相手側に押し付けたりなど、論争を仕掛けては相手を辟易させている。学問的な議論を装ってはいるが、いわばルールを逸脱した喧嘩である。

結局、古田武彦は、自論補強のために飛びついた『東日流外三郡誌』という偽書により我田引水の論文を書き、かっての輝きを完全に失ってしまった。それにもかかわらず、いまだアマチュアの間では「古田史学」などと称して、人気があるようで、見かけだけはあいかわらず闘争的である。

程度の差はあるものの、本居宣長も自説に反する主張に対して、徹底的に攻撃的であった。上田秋成が、荒唐無稽な神話を無批判に受け入れる宣長に対して、筋を通して批判した時など、『呵刈葭(あしかりよし)』という凄まじい副題をつけて攻撃している。「鉗狂人」と言うのは、藤貞幹に対し

ても使った言葉で、宣長の常套的な表現であるが、その中で展開された、古語に「ん」という音があったか無かったかを巡る論争は、今では上田秋成の主張に歩がある。

また既に書いたが、藤貞幹の「衝口発」に対して、「ひとりのたぶれありて」で始まる「鉗狂人」を書いて罵倒している。藤貞幹はたしかに、自ら作った偽書を証拠として「衝口発」を書くような学者にあるまじき人物ではあるが、須佐之男命が新羅の主であるという説や、神武紀元を六百年下げる説など、現在の歴史観を先取りする視点をもっていた。それが、日本固有文化を信じる宣長にとっては、気違いに映ったのであろうが、それにしても攻撃的である。

椛斎が鈴屋で宣長に会った時に、その一年前に読んだ「衝口発」と「鉗狂人」について、話題にした可能性が高いと思うが、宣長も椛斎もそのことには触れていない。

古事記の偽書問題に触れて、必要以上に深入りしてしまった。古事記はたとえ偽書であったとしても、先代旧事本記のように相手にされなくなる書物とは限らない。また、本居宣長が古事記を発掘した偉大な学者であることに対しては、私も何の異論がない。しかし、それは偉大な思想家あるいは宗教家としての側面である。

学者の本分である研究者としては、宣長は椛斎に比すべき人物ではなかつた。椛斎が、もし古事記について書いていたなら、もっとシャープに問題点を抉っており、皇国史観の歴史に歯止めを掛けていたのではあるまいか。そんなことを思っている内に、わき道に逸れてしまった。

(七)津軽屋相続

津軽屋は、地廻米穀問屋一番組と脇店八ケ所組米屋湯島組に所属する米問屋で、津軽藩の江戸御蔵元を勤めていた。したがって、津軽屋の相続は津軽藩の公式な許可を必要としていた。

その申請書類の中にも「高橋与惣司儀、重縁の者にて、同家相続人にはござ候へども、押して所望仕り、双方熟談の上、娘方へ婿養子に貰い請け候」と、善との結婚に至る過程を正直に語っている。これが津軽屋側の経済的な理由でなかったことは明白である。やはり、善の強い意志が働いた結果であった。

この頃、津軽藩の藩主は九代目の津軽寧親で表高は四万六千石にすぎなかったが、実高は三十万石程度の大藩であった。未開の津軽平野を擁していたために新田開発に取り組んだ結果であるが、天明の大飢饉の後であり、藩の財政はいずこの大名も同じく慢性的に窮乏していた。

地廻米穀問屋というのは、関東・奥州の諸国から、江戸に廻漕されてくる米の委託販売を引き受けていた組合のことである。小売ができなかったが、脇店八ケ所組は

市中にも売りさばくことができた。ふたつの組合に属する津軽屋は、量販店のような性格を持っていた。

善との祝言が行われたのは、寛政十一年(一七九九)十二月二十一日である。椛斎が満二十四歳の誕生日を迎える二日前であった。

祝言の前日の十二月二十日に、知友吉田篁墩の遺稿『活版経籍考』の書写を終えている。この本は中国と日本の活字版に関する沿革などについて述べた未定稿であるが、出版事業の文化史的な意義を指摘し、清朝の考証学に注目した内容で、後に椛斎が清朝の考証学に惹かれ、清朝でも大きく評価されるようになる端緒になった書である。書肆青裳堂を去る感慨でもあったのであろうか、結婚の前日に書写を終えているのが印象的である。

津軽藩の江戸廻米を取扱う御蔵元は、おおむね二人の町人が勤めていたが、津軽屋は常にそのメインであった。米問屋としての独立性を維持しながらも、御蔵元として、藩の機構、すなわち勘定奉行支配に属し、廻米の運送、保管、売却やそれに伴う全ての実務を担当していた。したがって、藩からの給与があった。

椛斎の相続時には二百俵十五人扶持で、これは手数料とは別であった。石高で言えば、二百五十石相当でお目見え以上であったが、実質収入に占める割合は微々たる額であった。通称で狩谷氏を名乗るが、藩では津軽屋であり、当初は士分ではなかったようである。しかし、帯刀姿の椛斎像が伝わっている。家督相続と同時に、名を望之、字を卿雲と改めた。

津軽藩から江戸への廻船は、三陸沖まわりで海難事故が多かった。そのためであろうか、北前船による大阪廻船に比べ距離は短いが、運賃が割高であった。藩では、五万石ほどを江戸に廻していたが、米一石を一両として、五万両ほどの売上げに対して、一万両ほどの廻船料を支払っていた。

御蔵元としての取扱い手数料は、一俵につき一升すなわち二・五パーセント程度であり、これは年千両程度に過ぎない。しかし、この他にも藩へ用立てた利息収入や売買差益などがあったはずで、こちらの収入の方がはるかに大きかった。さもなければ、天保六年(一八三五)に、津軽藩の年収にも匹敵する十二万七五六九両もの債権を放棄する状況が生まれるはずがない。

大名の債務と言えば、表高七十七万石の薩摩藩の例で見ると、年収二十万両程度の財政規模でありながら、文化四年(一八〇七)には百二十六万八千両、天保六年(一八三五)には五百万両に至っている。諸大名の年収の七割以上が金利として大阪商人の手に渡ったとする説があるが誇張ではない。津軽藩も江戸藩庁だけで、いつも数万両の債務を抱えていた。米問屋は金融業も兼ねていて踏み倒されない限り豊かであった。

信じて託す（その三）

―米山梅吉の一生―

三戸岡道夫

第四章　滞米八年

こうして梅吉は明治二十一年（一八八八）に、二十一歳のとき、念願のアメリカ留学のため、アメリカへ向って出発したのである。

そして八年にわたる留学生活を送るわけであるが、それは働きながらの苦学生としてであり、米山家からの学費援助によっての留学ではなかった。もちろん出発前に梅吉は米山家への入籍手続をすませて完全に米山家の人間になっていたのであったから、米山家からの学費援助は当然と養父の藤三郎は考えていたことであろう。

しかし梅吉はそれを断ったのであろう。それは梅吉が入籍の手続に応じたのは学資援助目当てのことだと思われては梅吉の面目が立たないし、また学資援助を受けることによって、アメリカでの留学の内容や期限に干渉されては困ると、その辺への警戒もあったのであろう。梅吉は誰にも制約されずに、自分の思ったように、思いきり羽を伸して自由に勉強したいという、青雲の志一筋に燃えていたのであった。

その結果、梅吉は八年もの長きにわたるアメリカ留学を送ったわけである。しかし苦学のためにかえってアメリカの庶民生活にいろいろな面で触れることが出来、帰国後、梅吉が実業家としてまた社会奉仕人として活動するのに、大きな力となったのである。

その頃アメリカへ留学する日本の青年の多くは、あらかじめ日本人が経営するキリスト教会へ紹介してもらって、そこへまず辿り着くのが常であった。金もなく、身寄りもない青年がアメリカへ行くとすれば、それ以外にすがる途はなかったのである。

梅吉もサンフランシスコへ着くと、すぐ日本人が経営する福音会に身を寄せた。

福音会はメソジスト派の伝道機関であった。教会の隣に二階建ての別館があった。下が講堂になっており、上は部屋の多い宿舎になっていて、一部屋に数名、全部で四、五十人の青年が入っていた。梅吉もその中に入れてもらったのである。

部屋には火鉢があって、鉄瓶をかけ、お茶を入れて飲めるような日本的な道具も置いてあった。異郷にいる日本青年の心を少しでもなぐさめようとする、経営者の配慮であった。

また、ここには小規模ながら日本の出店があった。昼間働いて帰ってきた日本の青年たちの、ホームシックをなぐさめるものだった。

もちろん、ここへの入居は無料ではない。賄料は一日、二十五セントである。

福音会はただ日本の青年を下宿させるだけではなく、就職の斡旋をしたり、同時に宗教的指導をするのも目的としていた。そのため一般の下宿屋とはちがって、人格の高い、教養のある漢学者の幹事が監督に当っていた。

それに加えて、その後青山学院に関係を持つ、メリマン・コルバート・ハリス監督が巡廻中に泊る部屋もそこにあった。

なお福音会は主任の美山貫一が責任者であった。美山貫一は弘化四年（一八四七）生まれの漢学者であったが、メソジスト派最古老の日本人牧師として名高い人であった。

福音会に泊っている人は、一人一人多様であった。仕事をして働きに来ているもの、アメリカで商売を始めようと思っている者、またアメリカの大学に入る準備をしているものなど様々であったが、そのような雑多な人々が福音会を頼り、足場にしているのであった。

そのような人々の間にあって、梅吉は生活が慣れるにしたがって、仲間と相談して『蒸汽船』という謄写版刷りの週刊雑誌の発行を始めた。沼津中学校時代の梅吉は一人で雑誌をやっていたくらいであったから、この蒸汽船の発行は、梅吉の発案だったと思われる。そして梅吉は親友である日本の稲村真里へ、手紙と一緒にこの雑誌を送っている。

ちょうどそんな頃、東京英和学校の教授である本多庸一が渡米していて、しばらくサンフランシスコに逗留した。本多庸一は福音会主任の美山貫一より一つ年令が若く、嘉永元年（一八四八）生れであるから、梅吉より二十歳の先輩であった。

本多庸一は嘉永元年（一八四八）に津軽藩士の子として生まれた。戊辰戦争では庄内藩とともに薩長軍と戦い、明治三年に津軽藩に帰藩後、選ばれてアメリカに渡り、その間にキリスト教の洗礼を受けた。明治七年に帰国し

てからは、藩校の後身である東奥義塾の塾長となり、さらに青森県会議長などをつとめた。

明治十九年からキリスト教伝道の道に入り、東京英和学校の教授に迎えられたのである。そして明治二十一年に再びアメリカに渡ったが、米山梅吉がサンフランシスコで会ったのはこの時であった。その風貌は将軍の相をしていて、梅吉は初対面から本多庸一に魅きつけられた。

日本で東京英和学校で学んだことのある梅吉は、さっそく本多庸一に会い、将来の抱負などを熱心に語り、聞いてもらった。

そんなことが続いたある日のことだった。

ある夜、ハリス博士のところで食事の後の話もつき、本多庸一は机の上の紙にいたずら書きなどをしていたが、庸一は梅吉の注意をひくかのように、しきりにある文字を書いているのだった。何だろうと思って梅吉がそれを見ると「巧遅」と「拙速」という文字で、その四文字を二度も三度も、書いているのだった。それは、

(巧なれども遅し、拙なれども速し)

という意味であった。すなわち本多庸一は梅吉という青年の話を聞いて、

(功を急がないように)

と、それとなく戒めたのであった。燃ゆるような青雲の志を持ち、米山家との軋轢をかいくぐってアメリカへやってきたのである。梅吉の気持は、あれも勉強したい、これもやりたい、あのようになりたいと、先へ先へと心が暴走していた。梅吉の直情径行・性急の癖を本多庸一は見抜いて、巧遅拙速という忠告をそれとなくしたのである。梅吉もすぐそれに勘づき、この言葉はその後梅吉が一生座右の銘とした言葉となった。

当時日本からアメリカへ渡って勉強する青年は、苦学生が多かった。そのような青年を受け入れるために、スクールボーイという制度が作られていた。すなわち学僕として部屋を与えられて、一週一ドルで働き、仕事の暇に通学して勉強するのである。皿洗いと呼ばれる労働専門の仕事をやれば、一週三ドルもらえた。

このスクールボーイは日本人だけでなく、アメリカの青年も仲間に入ってきていた。ここで働いて金を溜めて学校に入るのである。金がなくなると、また一年間働く。だから普通の学生の二倍の時間がかかるわけであった。こうして労働をする学生のことを、日本人の間では「権蔵」と呼んでいた。日本でも下僕のことを権助と言っていたからであろう。梅吉もこの権蔵を勤めての、苦学生だったのである。

梅吉はカリフォルニア州のベルモント・アカデミーへまず入学した。これは大学へ入る準備のための高等学校である。二十歳をすぎた日本の青年が、アメリカの少年たちに混って勉強したのである。でも、それは仕方のな

いことだった。

その高等学校を卒業すると、梅吉はオハイオ州のウエスレアン大学に進学した。

これは福音会のメリマン・コルバート・ハリス監督の推薦によるものだった。ウエスレアン大学はメソジスト派の学校である。神学部もあるから、それに入るようにとハリス監督が勧めたのである。

ハリス監督は一九四六(弘化三年)生まれであるから、美山貫一よりも一歳の年上、本多庸一より二歳の年上であり、十七歳のころ南北戦争に一兵卒として参加した人間であった。そのためハリスに対する梅吉の尊敬は一生つづいた。それは後になって建設した青山学院の中のハリス館によってもそれがわかる。

そしてこの時、梅吉はハリス監督から洗礼を受けたものと思われる。

なお梅吉はウエスレアン大学が終ると、ニューヨーク州のローチェスター大学でも勉強した。

学問は主として政治学を中心に勉強したものと思われる。梅吉にはたえず「治国平天下」のことが頭にあった。これは沼津中学校からの梅吉の志であり、梅吉の頭の中にはたえず国家のことがあった。だからアメリカでの留学も、

(アメリカで勉強して立身出世したい)

というよりも、

(アメリカで勉強して、国のため、世の中のために役立ちたい)

という気持が強かった。「私」よりも「公」志向である。この梅吉の私益優先よりも公益優先の思想が、後年、梅吉の「信託銀行創立」や「日本ロータリークラブの創立」という、公益事業への発展となって花咲くのである。

梅吉は後日アメリカ時代の思い出話しとして、

(アメリカでは方々の学校を歩いたが、これといった専門の勉強もせず、選んで採った科目は政治学を学び、また文学を味い、日本へ帰ったら新聞の仕事に従事しようと思った)

と語っている。したがってアメリカに滞在中も、しばしば日本の新聞や雑誌に投稿をしていた。

梅吉は友情に厚い人間であった。その頃になると、沼津中学校時代からの親友の稲村真里も東京へ出てきて勉強していたが、稲村とは引続き親密な交際をつづけ、アメリカからもいろいろと手紙を出し、稲村の方からも返事の手紙が来ていた。そして、その稲村との手紙のやりとりが、梅吉と米山家との関係を救う役目になったのである。

というのは、梅吉が東京へ家出した件はアメリカへ渡る前に無事納って、梅吉の入籍手続は終わり、米山家ではほっとした。しかし入籍するとすぐ梅吉はアメリカに留学してしまったのである。養父の藤三郎としてはせい

ぜい一、二年ぐらいのアメリカ行きかと思っていたのに、すでに四、五年がすぎてしまった（結果的に八年間梅吉は留学するのである）。しかしその間に、それほど頻繁に便りがあるわけではなかった。藤三郎にしてみれば、

（梅吉は、伊豆の旧家である米山家を継ぐ養子である。梅吉の重要な仕事は、はやく家を継ぐことである。アメリカへの留学など、どうでもいいことである。それなのに大切な家を捨てて、遠いアメリカへ行ってしまって、いつ帰ってくるともわからない。）

と、心もとなく、心配なのであった。

それに対して梅吉の方も、米山家との関係は修復し、籍まできちんと入れたけれども、なんとなく養父藤三郎との間には距離があり、なんとなく引け目があり、そして少し煙ったいのは、仕方のないことだった。

だから藤三郎への手紙には、親友の稲村真里へ書くようなアメリカで体験していることを、思い切り書くことが出来ないのだった。アメリカのいろいろな事情を書いても、藤三郎はアメリカなどに興味を持っていないのだと思うと、書くのにも張り合いがなかった。だからどうしても形式的なものになってしまう。だから勉強と仕事に忙しい梅吉には、米山家との間が御無沙汰がちになってしまうのであった。

親友の稲村真里はその辺への察しがよかった。梅吉と手紙をやりとりしているうちに、梅吉と米山家の間のその辺の雰囲気を、稲村は敏感に感じ取った。

そこで心配になった稲村は、明治二十五年の夏、東京から沼津へ帰ったとき、様子を見に米山家を訪れたのである。稲村真里が藤三郎に会うのは初めてであったが、藤三郎は稲村真里の父を知っているという関係もあって、面会はスムーズに進んだ。

よく話してみると、梅吉と藤三郎の間に特にわだかまりがあるわけではなかった。お互いの無沙汰が重なって、ただなんとなく疎遠感が出ているのであった。

夏であったので、娘の春子が裏庭から梨を取ってきて、出してくれた。そして

「春子を青山の英和女学院へ入学させたい」

というような話も出た。

稲村真里はすっかり安心して、米山家の有様を梅吉へ手紙で報告した。

すると梅吉も大よろこびで、次のような手紙を稲村のところへ出した。

貴兄（稲村真里）がお会い下さったおかげでいろいろのことがわかり、ありがとうございました。貴兄がお訪ね下さったことは、まるで自分が帰宅したのと同じぐらいに感じております。これまでにない感動におそわれました。

さっそく養父へも手紙を出すことにいたします。

これまでのことや将来のこともあるので、明年（明治二十六年）にはひとまず帰国すると言っておきましたから、養父もたぶん安心すると思います。帰国したならば行き違いのないように誠意をもって対処いたしますから、なにとぞ御安心下さるようお願いいたします。

これ以後は、梅吉はつとめて米山家と文通するようになった。米山家の方でも手紙がたびたび来れば、安心して待っていられるわけである。梅吉と米山家の関係は円満に戻った。稲村真里の友情が、その危機を救ったのである。

なお、この年、明治二十五年に、藤三郎の娘の春子は青山女学院へ入学した。春子は十九歳になっていた。アメリカ帰りの梅吉にふさわしい教育を受けさせようという、両親の心遣いであった。

梅吉は明治二十六年にいったん帰国すると手紙で知らせたけれども、しかし、いったん帰国してしまうと再度の渡米は無理であろう、それにまだ学ばなければならない事がいろいろ残っていた。それに明治二十六年の五月から十月まで、シカゴで開かれる世界大博覧会で、日本出品の説明を引き受けていた。

あれやこれやで帰国は一日のばしに伸びてしまい、梅吉が日本へ帰国したのは明治二十八年（一八九五）、梅吉が二十八歳のときであった。

アメリカへ渡ったのが明治二十一年、二十一歳のときであったから、ちょうど八年間という長い間、アメリカで学んで帰ったのである。

こうして梅吉は約八年間アメリカで勉強したのであるが、在学期間として長かったのは、オハイオ州のウエスレアン大学だったと思われる。それは後になって、大正八年（一九一九）に、ウエスレアン大学から、マスター・オブ・アーツの学位を贈られたことによっても想像される。

八年間という留学期間はかなり長く、普通の倍の時間がかかったわけであるが、それは学資を稼ぎながらの苦学生の勉強だったことや、言葉のハンディキャップがあったことからであろうが、同時に、

（どこまでも徹底的に勉強してやろう）

という、梅吉の徹底主義があったからだと考えられる。

日本へ帰ってみると、日本もだいぶ変っていた。梅吉が渡米した翌年の明治二十二年には、東海道線が開通していた。そのため今度の帰国では、梅吉は沼津へ帰るのに徒歩での箱根越えの苦労もなく、新橋から沼津までをわずか五時間で行くことができた。

（つづく）

今川風雲録（一）

千坂精一

黒潮沿岸の温暖な国

静岡県は広い。東西一五三キロメートルと横長で、総面積は七、三二四平方キロメートルもあるという。

私が取材に出向くのは、関東一円、新潟県上・中越地方、福島県会津地方、それに山形県米澤市周辺が多いが、関連で山梨、長野、静岡県あたりも訪ねることがある。

なかでも静岡県は、取材のほかにも峠路を歩こうという仲間たちと、あちこち歩いているので馴染みが深い。

県内を初めて歩いたのは薩埵峠で、このときは一人で由比の町から興津大橋を渡って峠に上り、北條と武田の合戦場を調査して興津の町（静岡市清水区）へ下りた。

清水で一泊、翌日は日本平から久能山東照宮に詣でた。

仲間と最初に歩いたのは静岡から焼津へかけての一周で、市内から安倍川橋を渡って東海道本線、新幹線、東名高速道路の大動脈が潜る日本坂トンネルの上の日本武尊伝説にある峠道を越えて焼津で一泊し、翌日は北へ向かう峠道を辿って満観峰にいたり、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のなかで夫婦喧嘩の舞台になったとろろ汁の丁字屋のある鞠子（丸子）に下りた。

麦とろを食べたかったが誰も足を止めないので、やむなく横目で通り過ぎた無念さがいまだに忘れられない。

吐月峰柴奥寺に詣でて、観昌院坂を越え藁科川に出た。

そこは安倍川に合流する二キロほど上流にある産女橋の近くで、『枕草子』に出てくる〈木枯らしの森〉がある。

それは中洲にあって渡河できるということであったが、その日はあいにく水量が多くて渡れなかつた。

帰路の車中で麦とろがわりに安倍川餅を頬張つた。

つぎは、『太平記』の哀話〈俊基朝臣再び関東下向の事〉のなかに書かれている〈小夜の中山〉で、

「落下の雪に踏み迷う、片野の春の桜がり」

ではじまる一節、

「旅館の燈幽かにして、鶏鳴暁を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打ち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み来て、そことも知らぬ夕暮れに、家郷の天を望みても、昔西行法師が〈命也けり〉と詠じつつ、二度越えし跡までも浦山敷ぞ思われける」

の西行法師が詠んだという『新古今集』にある、

年たけてまた越ゆべしと思いきや
命なりけりさ夜の中山

に魅せられて行ってみようということになったのだ。

〈小夜の中山〉は、狭い谷がある長い山道ということだそうで、〈狭谷の長山〉が転じたのだという。

東海道金谷―日坂間のうち菊川から日坂までが〈小夜の中山〉であるが、私たちはJR金谷駅から歩いた。

菊川の手前にある諏訪原城跡を案内したかったからだ。

武田信玄の遺志を継いだ勝頼が、遠江侵攻にあたって田中城（藤枝市）との連絡と、高天神城（掛川市）攻めの拠点になる金谷砦を重視し、ここに城を築いたのだ。

小夜の中山に入って青木坂を上ると、久延寺に出る。

当時の掛川城主山内一豊が、関ケ原へ向かう家康の接待に境内に茶室を設けたと伝えられている寺である。

寺の左隣りに一軒だけ残っている茶店扇屋があって、子育て飴を売っていた。向かいは小夜の中山公園である。

ここからが語源になった左右に深い谷（狭谷）のある長い山道（長山）で、右も左もみごとな茶畑である。

静岡の峠歩きで難儀したのは〈姫街道〉だった。

この道は、東海道舞坂（浜松市）から荒井（浜名郡新居町）までの海上五キロの今切の渡しを嫌った女人たちが、見付（磐田市）で東海道から逸れて天龍川を渡り、市野（浜松市）を経て三方ケ原を横切り、浜名湖北方の気賀（浜松市細江町）から三ケ日（浜松市）を経て本坂峠（愛知県境）を越え、御油（豊川市）の近くで東海道に出る全長一五里一四町（約六一キロ）の道程である。

この〈姫街道〉は、以前三方ケ原取材のときに見付から気賀まで歩いたことがあるので、今回は新幹線で豊橋まで行って嵩山町（豊橋市）の先にある坊ケ峰（四四六メートル）の本坂峠から入って浜松へ戻ることにした。

当日は朝から曇天で、本坂峠越えが気遣われたが、果たして豊橋に着いたときにはすでに雨になっていた。

山中に入ったころから本降りになり、道は川になった。

そのうちに稲妻が奔って雷鳴が轟き、強風で杉の大木が根元から揺れ騒いで、どうなることかと心細かった。

十人ほどの仲間たちと一緒だったから耐えられたが、一人だったら足が竦んで立往生していたかも知れない。

ようやく、峠を越えて夕刻三ケ日に入り、吻とした。

「豊橋から本坂峠越えの姫街道を歩いて三ケ日に入る」

といって予約しておいたので、夕食は宿の好意で八代将軍吉宗の生母に出したという料理を再現してくれた。

翌日も雨はやまず、引佐峠の頂上近くの象鳴坂という八代将軍吉宗に献上のため江戸へ向かう輸入象も鳴いたという難所を越えて細江に下り、浜名湖を周って浜松へ辿り着き、名物の鰻重で困憊した疲労を癒した。

そのほか、一人歩きであったが、三島から黄瀬川を渡って駿東郡長泉町の長久保城跡を見て回り、沼津に一泊してJR原駅近くの根古屋にある伊勢新九郎長氏（早雲）が初めて城主になった愛鷹山麓の興国寺城跡まで足を延ばしたこともあって、なぜか静岡県は一泊の旅が多い。

こうして振り返ってみると、私は東西一五三キロメートルといわれる県内をほとんど歩いたことになる。

静岡県は、背後を深い山地で塞がれているが、南に開けた平坦地は暖流（黒潮）の太平洋に面しているので温暖な気候に恵まれ、どこを歩いても明るく開放的である。

伊豆や、東部の静岡、清水を中心とした丘陵地帯と、浜名湖の北岸三ケ日あたりの蜜柑畑、薩埵峠の枇杷、久能山の石垣苺、西部海岸の温室メロンなど果物の宝庫であるとともに、東部の清水、静岡付近、西部の牧の原や小夜の中山から掛川にかけての台地傾斜地のいたるところで見られる茶畑は、戦前国民的人気の高かった浪曲師廣澤虎造が得意としていた『次郎長外伝』のはじめに、

「旅行けば、駿河の国に茶のかおり――」

と名調子で語っていたし、芭蕉もまた、

駿河路や花たちばなも茶の匂い

と詠んでいたが、歩いてみてなるほどと納得できた。

誰しも、駿河路を歩いてその温暖な大気に包まれれば、茶と密柑の生産適地であることがわかるはずである。

この風光明媚の地静岡県はとにかく広いので、近世までの行政区画は伊豆、駿河、遠江の三国に分かれていた。隣りの愛知県も大きいが、それでも三河と尾張である。

現在の静岡県は、太平洋側の平坦地を東海道本線、新幹線、国道一号線、東名高速道路の大動脈が通っているが、それはいまにはじまったことではなく、ここはむかしから京と江戸を結ぶ幹線道路の東海道が通っていた。

東海道五十三次のうち、駿河が三島から島田までの十三駅、遠江が金谷から白須賀までの九駅、愛知県の三河が二川から池鯉鮒（知立）までの七駅、尾張が鳴海と宮の二駅で合計三十一駅あるのだから、じつに全体の五十八・五パーセント、つまり半分以上を占めている。

現在なら幹線交通機関や道路が通っていると自慢してみてもただ通過するだけのことでなんの恩恵もないが、当時は両県で三十一もある宿場は旅人がそれぞれ草鞋を脱いで宿泊したであろうから、静岡、愛知の両県は全国から往来する旅人たちで大いに賑わったにちがいない。

東西の接点に位置する両県の人たちは、地の利を得て

教養、文明、文化を逸早く享受できたことであろう。

平安時代、地方豪族の寄進によって荘園が拡大してゆくと、静岡県も遠江に二十二、駿河に十五、伊豆に十一、ほかに伊勢神宮御厨が二十二箇所に増えていった。

伊豆は奈良時代から〈配流の国〉とされていて、頼朝が永暦元年（一一六〇）三月蛭ケ小島へ流されている。

文治元年（一一八五）十二月、頼朝は全国に守護、地頭をおいて、叔父行家と弟義経捕縛の網を張った。

このとき、駿河守護に補任されたのは武田の始祖武田太郎信義で、遠江守護は弟の安田三郎義定であった。

源氏が滅び、執権北條義時が政権を握ったころに起こって永禄十二年（一五六九）までおよそ三百五十年のあいだ、この東西文化の交流地風光明媚な駿河、遠江、三河の三国を支配したのは、守護大名今川氏であった。

今川というと義元が広く知られているが、義元は鉄漿、殿上眉の公家風を好み、大軍を率いて上洛の途次に尾張田楽狭間で織田信長の急襲で斃されているので極めて印象が悪いが、しかし、家臣団を二分した二度の相続争いや、近隣諸将の武力侵略に堪え抜いた三百五十年は、代々の当主が一廉の武人であったことを証明している。

では、その今川氏の歴史を辿ってみることにしよう。

三河生まれの貴種

源氏の頭領八幡太郎義家の二男義國に二人の子があり、長男義重は上野国新田荘を与えられて新田氏を、二男義康は下野国足利荘を与えられて足利氏を名乗った。

その足利義康の子義兼は、頼朝の挙兵以来数々の軍功を立てて、鎌倉幕府有力御家人の一人になっていった。

義兼の二男義氏は、鎌倉幕府から九條家が領有する三河国幡豆郡吉良荘の地頭職に任じられて赴任した。

九條家は、近衛、三條、一條、鷹司家とならぶ五摂家の一家で、のちに執権北條氏から傀儡ながらも四代、五代将軍に据えられた頼經、頼嗣父子の生家であった。

その後義氏は、承久三年（一二二一）五月に起こった〈承久の乱〉の戦功により、三河国守護職に任ぜられ、西尾、幡豆、碧海一帯の吉良荘を領有した。

このころから足利氏は、北條執権家に重用されるようになってゆき、幕府の命で鎌倉へ帰国することになった義氏は、分国三河領の経営を二人の息子に任せた。

長男長氏は西條（西尾市）に住んで西條吉良、二男義繼は東條（幡豆郡吉良町）に住んで東條吉良となり、三男泰氏は父義氏と足利荘へ帰国して名跡を継いだ。

泰氏の生母が正室三代執権北條泰時の女だったのに対し、長氏と義繼はともに庶子だったからである。

この時代は、生母の出自がその子の格付けになった。

足利氏は、新田氏とおなじ源氏の分かれであるが、初代義康の正室熱田大宮司藤原範忠の女が頼朝の生母（熱田大宮司藤原季範の女）の姪になるところから、義康は頼朝の母方の従妹婿ということで、幕府の重鎮になった。

この足利氏の存在が気懸かりになった執権北條氏は、義康の子二代義兼に北條時政の女時子を娶せて一族に取り込んだ。時子は頼朝の正室政子の妹であるから、義兼は将軍頼朝と二代執権北條義時二人の義弟になった。

そして、三代義氏も、三代執権北條泰時の女を娶らされたことはすでに触れた。

ついでながら、四代泰氏も北條義時の二男名越朝時の女桔梗を娶らされたが、のちに五代執権北條時頼によって離別させられ、あらためて時頼の姉を押し付けられた。

五代頼氏もまた義時の弟時房の女を娶らされて、足利氏は執権北條氏に確り取り込まれていったのである。

それはさておき—。

東條吉良義継の系は、のちに奥州探題になって陸奥四本松に移ってしまうが、西條吉良長氏の系は土着した。

吉良長氏は、二男國氏に幡豆郡のうちから今川荘三箇村（西尾市今川町）を分け与えて独立させた。

吉良町岡山にある吉良家菩提寺片岡山華蔵寺付近の矢作古川を挟んだ対岸が西尾市今川町で、隣接している。

國氏は、荘名をとって今川氏を名乗った。

この國氏が今川氏の始祖である。

西尾市今川町に『今川氏発祥の地』の碑が建っている。名鉄西尾駅の近くで、駅の反対側に西尾城跡がある。

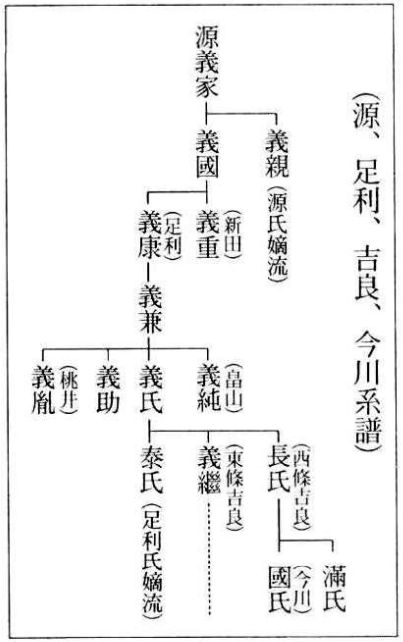
この吉良と今川の両氏は、のちに、

「公方絶ゆなば吉良が継ぎ、吉良絶ゆれば今川が継ぐ」

といわれるまでの名家になってゆく。

余談だが、十年あまり今川義元の人質になって駿府に抑留されていた徳川家康が、天下人になると家系を整えて将軍家（宗家）のほかに尾張、紀伊、水戸をご三家としたのも、この足利、吉良、今川に倣ったのであろう。

（つづく）



廣瀬川（一）

鍋屋次郎

元和十年（一六二四）、キリシタン弾圧は益々苛烈さを加えていた。

遡れば、慶長十七年（一六一二）、江戸幕府お膝元で、地方大名の所領拡大を画策した贈収賄事件が発生して、その首謀者がキリシタンであったことから大騒ぎになった。更に江戸城内にもキリシタンがいることが発覚し、奥女中が伊豆大島に流された。

その翌年、慶長十八年（一六一三）には家康は全国諸大名にキリシタン禁令を発し、九州・大阪・京都などではキリシタン天主堂を破壊した。

そして元和八年（一六二二）には、長崎でキリシタン五十五人が処刑され、翌元和九年（一六二三）七月に家光が三代将軍に就任した直後の同年十月に、江戸でキリシタン五十人が火刑に処せられた。

仙台藩伊達政宗は、家康がキリシタン禁令を発した慶長十七年（一六一二）に、仙台藩の財政建て直しを目的とした交易使節として、支倉常長をローマに派遣していた。伊達政宗は、交易使節の成功を期するために、仙台藩内ではキリシタンを容認していたので、九州はじめ西国のキリシタンは、キリシタン信仰を守ることができる仙台藩に逃げ込んでいた。

そのような状況は、躍起になってキリシタン弾圧を行っている幕府の感情を逆撫でることとなり、元和八年（一六二二）に老中青山伯耆守は、伊達政宗に対して「キリシタン禁令に従っていない」ことの詰問状を送った。

江戸幕府は開府後十九年を経過し、関ヶ原以来の「幕府のためにならない」外様大名の殆どを改易し、益々中

央集権の度を高めていた。そのような状況から、東北の大大名である伊達政宗もこの詰問状に逆らうことはできない。

時勢やむなく政宗は領内にキリシタン禁令を布告し、見つけ次第棄教を命じ、棄教しない者は処刑していたが、捕縛した人数が少なかったことから、元和九年秋には老中永井信濃守から、キリシタン弾圧の手ぬるさを厳しく詰問した書状が届いた。

場合によれば、伊達政宗自身を江戸に呼びつけかねない文面になっていた。

ところが、キリシタン達は昨年来仙台城下から逃げ去り、何処にいるのか分からない。探索方役人を増員して徹底した聞き込みを行って、何人かは捕らえて処刑したが、江戸が満足できる人数ではない。

最悪は改易もあり得る状況に追い込まれていた。

元和十年（一六二四）一月、城から十里程北の山中で四人のキリシタンを捕らえた。四人は神父一人とキリシタン信徒三人であった。

谷川に面したところに、隠れているかのように建てられている掘建て小屋があるのを見つけ、役人が覗いたところ三人がいた。ロザリオなどの持ち物からキリシタンであることが分かって、三人を捕らえたところへ、山中から神父がやってきて

「自分は神父のカルヴァリヨである。自分が捕らえられるからその三人を釈放して欲しい」

と言った。

役人達はそれに答えることなく、神父と三人のキリシタンの両手を後ろ手に縛り、腰に縄を付けて城に連行した。勿論、小屋の中の物は全てを押収した。

城に着いて四人を牢に入れたあと、城内では、家老斉藤康興を中心に

「捕らえた四人から、山中に隠れているキリシタンの所在を、どのようにして聞き出すか」

について協議が続けられた。キリシタンを一網打尽に捕らえないことには、伊達家の安泰はない。

四人が入れられた牢は、土間に藁が一面薄く敷いてあるのみで、奥の片隅に用便をするための穴が掘ってあった。飢えと渇きと寒さのため四人は一箇所に固まったように寄り合ってふるえていた。

そこへ役人がやってきて、牢内の土間に藁を厚く敷き始めた。敷き終わると、薄い煎餅布団八枚を投げ込み

「殿様からの格別のご慈悲である」

と言って立ち去った。

飢えと渇きは癒されないが、何とか寒さだけは凌ぐことができた。夜になり、牢内には灯りはなく真っ暗。カルヴァリヨ神父の短い祈りにあわせて他の三人も祈って、布団の中に横になった。

翌朝出された食事は粟飯に温かい汁がついている。直ちに処刑されることを覚悟していた四人であったが、藁床の上に、煎餅布団とはいえ布団を敷いて横たわったので疲労感は薄らいでいた。

役人は、朝食前の祈りをしている四人を何も言わずに眺めていた。

朝食が終わって暫くすると、三人の役人がやってきた。そのうちの二人が牢内に入り、一人ずつ氏名を確認した上で

「そなた達に聞きたいことがある。名前を呼ばれた者から一緒に来るように」

と、穏やかな口調で指示をした。

「安間村孫兵衛」

と呼んで牢から連れ出し、腰縄も付けず、手も縛らず、前後を警護する形で別室へ連れて行った。

そこには、囲炉裏があり、火は燃え、吊してある鉄瓶からは湯気が上がっている。部屋は暖かい。孫兵衛を炉辺に座らせ、温かい白湯を与えた。

孫兵衛は最初のうちは正座してうつむき、聞かれることに対してのみ頷いたり、頭を横に振ったりするだけであった。

役人の質問が、「生い立ち」や「パテレンとの出会い」「何故故郷を捨てたか」などになってくると、思い出しながら訥々と語り出した。語らざるを得なかった。

白州での尋問を覚悟していた孫兵衛は、役人の優しい問いかけと、自分の答えに大きく頷く姿を見て、思っても見なかった状況に「死」への緊張感が薄れてゆく自分を感じていた。

そんな状態が一刻も続いたであろうか、囲炉裏部屋から出て連れて行かれた先は独房であった。四畳位の土間の上に藁を敷き、奥には用便用の穴が掘ってあり、入り口には昨夜使っていたと同じ煎餅布団が用意されていた。

役人は

「四人一緒ではゆっくり眠れないであろう」

とだけ言って、施錠して立ち去った。

孫兵衛は、この世でキリシタン信仰を全うして、天にいるデウスの御許に凱旋する自分を確信して、死を恐ろしいと思っていなかった。

しかし今日、自分の心の中に封印をして、絶対に思っ

てはならないと誓っていた故郷の話をさせられたことから、懐かしい故郷への思いが、「天に凱旋する」信仰的確信を覆っている自分を感じていた。

夕食の時に、牢内に蝋燭が灯された。役人は
「蝋燭が燃え尽きるまで灯して宜しい」
と言った。

闇を照らす灯が、「死」に向かって頑なになっている自分を映し出しているように感じた。この何年というもの、夜は闇の中にいた。と言うよりも、警戒感から夜間は一切灯りをつけなかった。

この明るさと、飢えと寒さからの解放が、孫兵衛に故郷の懐かしい風景を思い描かせた。

翌日も、朝食の後、昨日と同じように呼び出され、囲炉裏を囲んで尋問ではない「質問」が行われた。
「幼いときのそなたの家族について、祖父母とか両親とかについて話しなさい」
から始まって
「少年の頃の思い出と、寺子屋で学んだこと」
など、十六才頃までの思いで話をさせられ、彼自身も時の経つのを忘れて質問に答えていた。

数え年三歳の時亡くなったといわれる母の顔は覚えていない。それからは祖母「まつ」の手で育てられた。三～四才の頃であろうか、夜、祖母の膝の中に抱かれて聞いた、「テンツクテンテン」という太鼓の音がだんだんと近づいてきて、やがて遠ざかって行った記憶があった。それは、念仏をとなえ、団扇太鼓を叩きながら歩く寒行の人達が表通りを通り過ぎて行ったのだろう。ただそれだけのことであるが、それが自分の人生の最初の記憶のような気がしていた。

屋敷は、入り口左側に一間程度の土間が裏庭まで続き、土間の右側には十畳くらいの座敷が土間に面して三つ、その後ろに三つと合計六つの部屋が並び、その奥は中庭になっていた。

奥の真ん中の、いつでも薄暗い部屋は仏間になっていて、朝夕、祖母は位牌の数だけ御飯とお茶を手向けていた。

孫兵衛の故郷は天竜川の西岸、安間村。昔荘園で「安間の庄」と言われて安間村になったと聞かされている。天竜川に沿った北側に隣接して中の町村があり、ここは、江戸と京都の丁度中央に位置することからこの名前が付いたという。

祖母は、天竜川の対岸で海寄りにある掛塚村から嫁いで来た。実家は「川屋」という屋号で、天竜川を上り下りする船で運ばれてくる商品の荷受け保管を業としていた。また、遠州灘を行き来する船が、天竜川の河口から上ってきて荷物の積み降ろしもした。

祖母に連れられて幼い頃よく行った。荷揚げしている人から、名前も知らない美味しいお菓子を貰ったこともあった。

天竜川、それは住民にとって生活上貴重な川である。子どもにとっても川原での遊びの想い出は尽きない。

浅瀬で小魚を採って遊んだ。最も得意とした魚採りは、浅瀬を選んで岸から流れの中央に向かって長さ一間くらい、幅一尺くらいに小石を積み上げて、その中央に、流れの下の方に入り口を向けた「うげ」を埋めておく。

《「うげ」とは、竹で編んだ筒状のもので、片方を太くして、内側に竹を折り込み、その奥に魚が入るくらいの穴を開けておくとそこから魚が入る。筒の最後尾は、入った魚が逃げないように結わえた一種の漁具である》

それを夕方、小石で積み上げた堰堤の中央あたりに下流を向けて埋めておくと、夜間に流れを登って行く川海老が、水の流れはそこしかないので、「うげ」の中に入って行く。翌朝早くそれを揚げに行った。それを何カ所も仕掛けておくと、結構な数の川海老が捕れた。

夏前にはイナゴを沢山獲ると、祖母が佃煮にしてくれた。美味しかった。

大きな秋の夕日。西の山に沈む前の、今にも崩れてしたたりそうな太陽は赤く大きかった。

冬に吹き荒れる遠州の空っ風。家の雨戸はがたがたと鳴り、時には家がきしむ音がして怖かった。

子どもの頃を思い出していた孫兵衛は、牢内が明るくなったり暗くなったりするのに気がつき、我に返った。蝋燭は炎が大きく揺らいで、やがて燃え尽きた。

後は暗闇ばかり。どこからも物音一つしない。静かさを通り越して、不気味でさえある。神父や仲間はどうしているだろうか。

翌朝差し入れられた朝食は、粟飯でなく、なんと白い米飯だ。もう何年も口にしたことはない。

一人で朝の祈りを捧げて、箸に手を付けたが思わず食べるのに躊躇した。城側では、何か魂胆があるのであろうか、と、ふと思ったが、「負けなければいいんだ」と自分に言い聞かせて口にした。美味しかった。

朝食を済ませて暫くすると、いつもの役人が
「安間村孫兵衛、吟味を致す。参れ」
といって独房の門を外した。

吟味、と聞いてやや緊張してついてゆくと、なんと昨日と同じ囲炉裏部屋。昨日と同じように炉辺に座った。白湯が出された。一口啜ると、それを見ていた役人が
「今日は、そなたの手習い所での修行と、十七～十八くらいまでのことを聞きたい」
と、切り出した。

彼自身、思い出しながら話した。手習い所は、安間村から二里くらい浜松城下よりの大きな天神様の別棟であった。そこの神官は決まった謝礼をとることはなく、百姓の子は野菜を少々持って行けばそれで良し、金持ちの子は相応に礼をする、ということになっていた。そこで論語など読み書きを習ったことを話していると、暫くして別の役人がやってきた。他の役人の態度かみると、かなり上席の役人らしい。上座に座ると、平伏している孫兵衛に
「孫兵衛、そちに尋ねるが、どうしてキリシタン信仰で死ななければならないのか。処刑は覚悟しているのであろう。キリシタンに関係なくても、死にたいのなら別でるが。その辺りのことを身どもに話してくれないか」
孫兵衛の顔を見つめている。決して怖くにらみつけているのではない。むしろ、真剣な中に優しさを含んでいる。自分には理解できないから聞いているのだ、という真剣な気持ちが伝わってくるような気がする。

孫兵衛は一瞬答えに窮した。
「何故かといわれましても・・・」
「孫兵衛、そちにも親や兄弟がいるであろう。そちのこのままの死に、意味があるのであろうか。武士が領主と領民のために戦って死ぬ、また、家族を守るために死ぬ、これらは立派に意味を持つ。そちがキリシタンの信仰を守り通して死ぬ。それが、現世に残されているキリシタン達の何のためになるのか。キリシタン達は、そちの死に、どのような意味を感ずるのか。そちの死はキリシタンの誰にも分からないまま、知らされもせず、ただ消え果てるのみ」
ここまで言って茶を口にして、続けた。
「良いか、孫兵衛。生きるにしても、死ぬにしても、意味を持て。昨日来、聞けば、そちにも遠江の国に温かい家族や友もいる。万一、そこに帰りたくなければ、この地で余生を送っても良い。面倒は見よう。命は大切に致せ」
といって立ち上がり去っていった。
しばし沈黙が続いた。役人の一人が
「孫兵衛、今の方はどなたか分かるか。ご家老の斉藤様である。本当に優しいお方だ。我々にも優しい。しかし、筋が通らないことに対しては、誰がなんと言っても、絶対に譲らないお方だ。そなたがキリシタンを捨てる、と一言いえば、何処までも力になってくださるであろう。

生きることに意味を見いだしてくれ。無駄に死ぬな。身供からも忠告しよう」
といって、孫兵衛の目を直視した。

その後、孫兵衛の家の佇まいや屋敷の様子などを尋ねられ、藏の中に保存していた大凧の話から遠州の大凧合戦の話になって、その場の雰囲気は、天下の大罪人キリシタンと役人の会話ではなかった。

一方城内では斉藤家老が中心になって、議論が続いていた。
四人への今後の対応として
一、キリシタンを棄教させよ。神父に棄教させることも諦めるな。
二、郷愁に駆られるように、故郷の話、親や家族の話に時間をかけよ。
三、全員を独房に入れ、横の連絡を断て。温かい食事と布団を与えよ。
四、生きることに未練を持たせよ。
との指示が出された。

役人が夕食を運んできた。蝋燭も灯してくれた。白米に温かい味噌汁。焼いた川魚が一匹ついている。

役人は
「天竜川でもこんな川魚は獲れたであろう」
と言った。
短い祈りを捧げて、孫兵衛は箸を付けた。

食後、横になって目を閉じると、安間村で祖母が作ってくれた夕飯の膳を家族で囲み、一段下がったところに女中が二人食事をとっている温かな故郷の昔を思い出した。

独房では何もすることはない。書物もなければ何もない。神父から、そのようなときは、神の言葉を頭に置いて「瞑想」しなさい、と教えられていた。
しかし、聖句を頭に思い描こうとするのだけれども、昼の炉辺で話した故郷のことが思い出されて、今まで心の中で封印していたことが走馬燈のようにあれこれと浮かんでくる。
役人の
「天竜川でもこんな魚が獲れたであろう」
の一言が、孫兵衛の郷愁の念をかき立てていた。
突然、彼の頭に、女中の「おのぶ」の姿が浮かんできた。

おのぶは、祖母の実家掛塚村の農家の娘で、十二才になったばかりで「行儀見習」を兼ねてやってきた色白の

女中だった。来たばかりの時はほんの子どもであったが、十五才になった頃は、着物の袖をたくし上げて働いているとき見える手首と腕が白くふくよかで、十七才になった孫兵衛の目にはまぶしく写った。

六月の末頃のこと、曇っていて真っ暗な闇の中を、屋敷の外側を流れる小さな堀に蛍が沢山群れているのを見た帰り、裏木戸から庭を通って、母屋から離れている湯殿にさしかかった。湯殿は灯火で明るくなっている。誰かが湯浴みをしていた。

湯殿は、庭の奥に面したところに格子戸がはまっていて、格子戸の内側についている薄い引き戸を引くと、そこから換気できるようになっている。格子戸の前には裏木戸から入って廻りこまなければ行くことは出来ない。孫兵衛はよく知っている裏庭であり、たまたまそこにさしかかった。外は暗い。湯殿の灯火もそうは明るくないので、孫兵衛のいるところまでは光は届かない。しかし、暗いところからは明るいところはよく見える。格子戸までは一間もない距離だった。

十五才になった「おのぶ」の裸身が目に飛び込んだ。程良くふくらんだ白い乳房と、腰のまわりの肉付きが、着物を着た姿からは想像できない豊かな裸身だった。

一瞬、息を飲み込み、棒立ちになった。咄嗟に頭に浮かんだことは「動いて見つかってはいけない」ということだった。音を立てることもできない。

「おのぶ」が裸身を足の先まで拭き終わって、着物を着て湯殿から出て行くまで棒立ちのままだった。それも息を潜めて、と言うよりも、息を飲み込んだまま呼吸が止まっていた、と言う方が正しかったかもしれない。着物を着終わる迄の一部始終を見た。早鐘のような動悸が続き苦しかった。

おのぶが湯殿を出てから暫くして母屋に行くと、祖母と女中二人が雑談をしていた。おのぶが

「お茶を」

と言って孫兵衛のところに湯飲みを持ってきたとき、内心の動揺を隠すのが精一杯で、どうやって湯飲みを受け取ったか覚えていなかった。

その夜、孫兵衛は夢精をした。目覚めると下帯が気持ち悪く、手を伸ばすと濡れていた。黙って下帯を替えて、汚れたのは、洗濯をする「おのぶ」に見つからないように捨てに行った。

「あのころは楽しかったなー」

と独り言を呟いた。仰向けに転がっている彼には、蝋燭の灯に、壁のシミが動物に見えたり、得体の知れない模様に見えたりしている。

「そうだ。そういえばこんなこともあった」

と目を閉じた。

祖母の実家の川屋は、荷揚げする商品の保管管理を行いながら、船頭や人足達の宿泊する宿もやっていた。

そこには、飯盛女と言われている、宿泊客へ食事を出しながら、泊まりの船頭達の夜の相手もする女達がいた。

雨と風が強くて船の出入りが何もなく、孫兵衛は安間村に帰りたくても帰れず、仕方なく雨を眺めていると

「おきみさん」と呼ばれている女が

「孫坊ちゃん、お酒飲まない？　いらっしゃい」

と言って、部屋に誘いこまれた。

二人は差し向かって座り、天竜川で獲れた小魚を肴に飲み始めた。二合徳利が空になったとき、「おきみさん」は腰を上げ、立て膝になってにじり寄ってきた。

何をするのかな　と思う間もなく。アッという間に首に両腕を回して来て口を吸われた。息ができなかった。

「おきみさん」の舌が入ってきて動いている。そのままの状態で「おきみさん」は俺の片手を握って、自分の胸元に差し込んだ。手のひらに柔らかな乳房が触れた。自分が支えきれなくなったのか、「おきみさん」に押し倒されたのか、それからのことは、夢の中の出来事のようだった。

帰るときに、「おきみさん」は

「孫坊ちゃん、今日だけのことですよ。男と女のことが分かったでしょ。誰にも内緒ですからね」

と言って送り出してくれた。

それから一ヶ月くらい後に、密かに期待しながら川屋に行ったが、「おきみさん」は既に川屋を辞めていなかった。何処に行ったのかを聴くわけにもいかないので今もって知らない。

ふと、我に返ると、もう蝋燭は消えそうになっている。どうして今夜はこのような、人には言えないようなことばかり思い出すのだろうか。

自分自身が不安になってきた。

毎日、朝夕、贅沢な食事を与えられ、温かな布団に寝かされて、昼の半日は、尋問ではなくむしろ炉辺談義のような話をしている。

夜は話し相手もなければ、読む書物もない。何もない。しばしの蝋燭の灯りと、長い闇だけだ。

人間、死の直前には、今までの生き様が走馬燈のように浮かんでくる、と言われているが、今の自分は、ただ、昔を思い出さされて、死に立ち向かう気力を弱められているだけではなかろうか。

いつの間にか眠っていた。

慌ただしい物音に目覚めた。辺りはまだ闇の中。時刻は分からない。

耳を澄ますと、数人の足音と、金属が触れ合う音がす

る。
それがだんだん近づいてきて
「安間村孫兵衛」
と声がした

牢から一歩出ると、腰に縄を付けられ、両手は後ろ手に縛られ、前後左右を役人が物々しく囲み、文字通り引っ立てられた。
これから何が起きるのか、恐怖を感じた。山中で捕らえられ、仙台まで連行されて牢に入れられるまで、恐怖は感じたことはなかった。その連行中は素足で歩かされていたが、石に躓いた痛みや、霜焼けた足指が崩れて出血していても、痛みは感じなかった。
しかし、今は違う。死に向かって歩く信念を持った自分ではない感じがした。

十畳くらいの土間に入った。正面と左右の壁に灯がともされ、正面の床几に男が座っている。その左の男は書き役であろうか、筆と墨をもっている。
縛られたまま、冷たい土間に座らされた。
「先ず確認をする。汝は安間村孫兵衛に相違ないか」
の声は、なんと斉藤家老自身であった。続いて
「この数日間は、お殿様の格別の計らいをもって大罪人である汝を客人として扱ってきた。これも、汝がキリシタンを捨てて、真っ当な人間に立ち帰ることを期待してのことだ。汝はこのままだと死罪は免れない。キリシタンを捨てれば、この土地で暮らしが成り立つよう、田畑も与えようと殿様は仰せである。有難いご慈悲ではないか」
と諭すように言い出した。沈黙している孫兵衛に向かって更に
「聞けば、十年以上も家族も故郷も何もかも捨てて、命がけでキリシタン信仰を続けてきた汝のことだ。今は即答をしかねることであろう。朝食が終わるまで回答を待とう」
そして、声を落とし、優しく
「孫兵衛、バテレンに初めて合ったのは、天竜川の渡し場にある鄙びた旅籠だったそうだな。幾日も雨が降り続き、バテレンの足も、旅籠に釘付けになっていた。そこでどのような教えや話があったのかは知らないが、バテレンにたぶらかされているのだ。汝は、キリシタン信仰さえ捨てれば幸せに過ごせるはずだ。お上のご慈悲だ。心して考えよ」
と諭した。

独房への帰りは、縄は何処にもついていない。左右に警護の役人がいるだけ。数歩歩くと
「孫兵衛、待て」

と声がかかり、立ち止まった。斉藤家老がこちらを向いて立っていた。
「安間村孫兵衛、ぼちぼち朝だ、大分白んできた。これから廣瀬川に案内させよう。行けば分かるが、そこには流れの中に水牢が設けてある。何れの日か、水牢の中で汝の死への思いが勝つか、または、浮き世に生き続けて、楽しく、世のため、家族のために生きてゆきたいという思いが勝つか試練の時を迎えるであろう。その前に、水牢をよく見ておくことだ。これも余の情けである。とくと見て参れ」

牢外へ出るからであろう。腰縄を付けられ三人の役人に囲まれて廣瀬川に向かった。外に出ると凍り付くような寒気が全身を覆った。粉雪が舞っている。
やがて廣瀬川が目に入った。寒中の未明、辺り一面は凍えているような冷たさを感じさせていた。

斉藤家老は、残った役人達に対して
「家屋敷を捨て、城下から山中へ逃げ去ったキリシタンの居所を突き止めなければならない。そして、せめて五十人位を捕縛して、棄教を促しても言うことを聞かなければ処刑はやむを得ない。そのくらいの探索成果を上げないと、江戸からお咎めを受ける。場合に寄ればお家も安泰でなくなる危険性もある。
あの四人から、逃げ去ったキリシタンの居所を白状させることだ。死を覚悟しているキリシタンどもは、拷問のみでは白状はしない。死を見せて、そして正反対な温かな暮らしを与え、家や家族のことを思い出させ、これを繰り返して、生きることへの魅力を覚えさせなければならない。四人を一緒にしてはならない。何処までも一人にしておくことだ。一人で迷い、悩ませることだ。厄介な、忍耐のいる仕事であるが、お家のため、と頑張ってくれ」
と言って城に戻っていった。

廣瀬川の土手の上で立ち止まった。流れの中程に、丸太を組み合わせた、幅も奥行きも一間くらいの大きさの檻が置かれ、それを挟むように流れの両側に竹矢来が組まれていた。
役人に促されて、孫兵衛はそれを見た。
役人は土手を下り、竹矢来の傍まで孫兵衛を引っ張ってきた。
未明の廣瀬川の流れは黒色がかって、全てを飲み尽くすような勢いで川中の檻にぶつかっていた。

余映を保て

曽根竣作

衰へし詩魂をかへすすべなきや相模の湾の没りつ陽に対く
緩慢に人波つづく駅まへの噴上げはららぐ輪廻のさまに
冬天をぽつたり厚き雪雲は光り散らしてビルの背に立つ
あぶな坂照らす夕つ日耀ひて影さへ立たず吾の予後の身
峡のなぞへひとつ灯ともす烏瓜つやめきてわが無頼を誘ふ
紗のカーテン透して朝日条なせり昨夜読みさしの推理暴きて

風さぶき汽水の辺り一尾二尾跳ねたる鰡が夕日をこぼす
うす緑の円き眼を見聞きて木菟はニッポンの闇を見透す
侃侃と論たたかはせやうやくにテロ特措法時を限りつ
いづくにも潜み息するテロの影インド洋上波荒きかな
こんもりと森の量感夜をくだち凶のしるしか繊月の光る
背を越すすすき尾花の波打ちて一所静寂の空気ゆるがす
雲うすく氷雨のきざす朝まだき群鴉の嬌声街わたりゆく
風冷ゆる川面を低く鶺鴒の水搏ちてとぶ立冬のあさ
父母を越えしよはひを手さぐりに渡る日常吊り橋に似る
ほつれ毛を額に垂らして美人女医わが傷痕を優しく拭ふ

けふ少し多忙の朝か色白の女医の手順のてきぱきとして

年齢(とし)のころ三十半ばと覚えたり女医のおん手の蒼き静脈

二週間たちまちに過ぎ小春日のけふ診察日楽しからずや

やうやくに腹部の傷も癒えにつつ大股にゆく病院の廊

くきやかに水面にゆるる櫨(はぜ)もみぢいましばらくの余映を保て

おばしまをひるがへりとぶ秋燕のみなみへ急ぐ胴白く光(て)る

風のごと舟虫はしる廃船の板子いちまい黒ずみしうへ

塞翁が馬の果てかや日溜りの蓑虫に告ぐ輪廻の寒さ

藍くらき冬の海面に満点の星数へつつ明日を恃まむ

鞍上のをとこ壮年冬近み右手(めて)に目陰す大陸の陽(ひ)を

コーナーを曲りて馬群怒涛なり重(おも)馬場に蹄の音ひびかせて

栗毛なる馬体湯気立てジョッキーはウイニングランす帽を掲げて

儲からぬ仕組みなれども場外の馬券あがなふ背もうそ寒く

気が付けば幾多有為を死なしめし不条理の世ぞ、けふ開戦日

銀箔を流すごとくにかがよひて一湾は新春(はる)の黎明むかふ

東入る西入る京都の友の賀状触るれば冷たく雪の香ぞする

うす暗き寮に論理は捨てたりきいま飄へうと流離の峠

蒼穹を仰ぐまなこに詩神来ず冬のベンチに石となりゐつ

東海の蟹も泣くべししら砂にももとせ経(ふ)りし夭折のひと

時化の来し海面(うなも)に延縄手繰る男(を)の一切衆生の姿うつくし

春雨に濡れし街かど颯颯と黒きブーツの羚羊が往く

民進党敗北のニュース読みつげり霰のしまく休日の朝（台湾の立法院選挙）

中国寄りの朝日新聞でかでかと国民党の勝利を報ず

戦中とふ言葉も杳（とほ）くなりゆかむ果敢無く散りし友を語るに

短歌

行雲流水（二十）

石黒修身

〔二〕近詠二十首

姫やどる「かぐや」の撮りしわが地球（ほし）が月から昇るこの神秘はや

温暖化やがて地球は滅びるかＣＯ２なる科学の塵（ちり）で

のどかなる郵便局は忙（せわ）しなし「ゆうちょバンク」と変りし後は

全線をカードで乗れる便利さに「電車賃」とう距離感なくす

良き事のなき世情にてＷ杯サッカー予選に勝ちたるを祝（ほ）ぐ

異邦なる横綱同士のせめぎ合いやはり虚しい日本人出でよ

世界的不況と聞けば海外を旅する心とみに萎えゆく

戦場の兵らの情熱(なさけ)かりきアーカイブスは「ビルマの竪琴」

螳螂の斧にも似たり独立のコソボの民の雄叫び哀し

吾に倣い短歌(うた)詠みはじむと文ありし年下の友がんに臥せしと

いくつかと問えば片掌をかざしつつ「いつつ」と応(いら)う言葉可憐に

窓ごしに赤く昏れゆく山なみに歌心湧くひと時となる

「天からの手紙」と言いし学者(ひと)偲ぶ立春の雪霏々と降りつぎ

流氷はどうかと問えば「もう来てる暫く居るよ」と紋別の友

流氷は居るかと問えば「もう去(い)った今年は早い」と紋別の友

「厳しくも優しかりし」と弔辞あり感懐(おもい)交々偲ぶ会辞す

隠蔽と告発行き交いとどまらず不信いや増す世情危ぶむ

署名入り限定千部の宮柊二歌集色褪せ書架に眠れり

山羊革で濃紫(こ)なる夫婦函柊二歌集買いしは不惑

埋もれし短歌の断片紡がれて「月蝕書簡」出づ「修司」晩年

〔二〕戦歿学生と森鷗外
―「阿部一族」を巡り

(1) 一句との出会い

「遺品あり岩波文庫阿部一族」

短歌には日常的に馴染んでいる筆者であるが、俳句については時折興味をひかれるまゝ目に止める程度で、これと言った見識はない。

然し、この一句を目にした時は、何か漫然と読み過すことの出来ない重い印象を受けた。

この句は俳人として著名な鈴木六林男（一九一八～二〇〇四）の作品で、無季俳句として代表的な傑作と評されている。

「阿部一族」は、言うまでもなく森鷗外の短篇歴史小説である。

主君に忠誠を盡くし乍ら、心ならずも滅亡する一族の悲劇を描写した筋書である。

この一篇が收まった岩波文庫が、戦歿兵士の遺品であったと云う悲愴な情景が想起される一句である。

(2) 一句の背景

この句の背景については、資料として一研究者の以下のような記述がある。

「事実は戦死か戦病死かは知らず、一旦仆れて立たぬ戦友の遺品に一冊の岩波文庫があった。しかもそれが鷗外の阿部一族であったことを詠んでいる。

大きさ軽さが丁度良い当時の岩波文庫が死者の所持品にあったことを鈴木六林男は鋭く捉えたのである。

この文庫本は、厳密には阿部一族他二篇となっており、昭和十三年に印刷され、斉藤茂吉の解説が付されている」

以上、新潟大学教育人間科学部紀要第七巻第二号における三橋敏雄の記述。

(3) 筆者の感懐

出陣しやがて歿してゆく学徒兵たちは、戦場にどんな本を携えて行ったか。勿論学半ばにして出陣した彼等は、文学そして文字への渇望は強いものがあったと思料される。

外地、艦船、内地の実戦部隊となれば、当然荷物は制限されたであろう。また書物の保管を禁じられた場合も多かったと推測される。

彼らは、自から選りに選った一、二冊の愛読書だけを持って任地に赴いたのであろう。

海軍の学徒兵であった、吉田満（戦艦大和の著者）は、この意味における必携書の双璧は、「万葉集」と「歎異抄」ではないかと、その著書「戦中派の死生観」の中で記している。

筆者は、この記述に敢えて逆う意図はない。

然し、彼ら学徒兵は、自からを抑えて、戦争の中で不本意な兵士として、諦観をもって死を受容するためには、夫々が極限状態において保持する本は、さまざまなものがあったのではないか。

その中で鷗外があり、「阿部一族」があったと強弁するつもりは毛頭ないが、ひとつの傾向として、学生が手軽に入手出来、かつ戦場で保持し得るハンディな本と云えば、当時は岩波文庫であったことは想像に難くない。

(4) 本稿の動機

本稿は、俳人鈴木六林男の句論でもなければ、まして森鷗外の書評でもない。

まんじ一〇六号所収の先輩同人千坂精一氏の自伝的小説「同胞の御楯となりてわれら逝く」に次の件がある。

「上官である篠田分隊士が出陣に際し、ポケットから文庫本を取り出し、鷗外の歴史小説だ、俺の遺品と思って読め」と。

その本は早くから紛れ千坂氏の手許にはなく、それが「阿部一族」であったかどうかも氏の記憶にはないと云う。

同じく一〇七号所収の「木更津の月」に於て、「〇〇基地を飛び立った特攻の黒木少尉が、自から大学の文学部で鷗外の研究をしていた旨と、自分の遺志を継ぎ鷗外を全部読めと言い遺した」と言う主旨の記述がある。

何れも死に直面する出陣の極限状態での対話で、読む者の胸を搏つ。

筆者は、定例の合評会に於て、この二篇につき冒頭の一句を話題として出した経緯がある。

千坂氏の小説の筋書きにこの一句を重ねることにより、その存在をより際立ったものにしたかったのかも知れない。

そして、身近かな氏の作品の中にひとつの「証言」を見い出したような満足感を覚えたものである。

(5) 結び

筆者は、戦歿学生とは年代も体験も共有しない。従って本稿を書き進め乍ら聊か実感の希薄さを自覚しつつも尤もらしく記述する僭越さを痛感し忸怩たるものがある。ここに本論に因む短歌一首を添えて結びとする。

〇戦友の遺品にありし文庫本「阿部一族」と詠みし句に遇う」

俳句

鷹の呟き（つぶや）（二）

大澤鷹雪

町営の温泉白し蕎麦の花

裏返し土下座も強ひて芋嵐

砲身の向きし彼方の海霧深し

盗人も出でて荒れたる刈田かな

小走りに向かふ駅の灯初時雨

男帯文士気取りて懐手

根深汁昨夜の酒の過ぎしかな

「ひかりあれ」神もとなえし初茜

腕折れし女将の焙る干鱈かな

初蝶や行きつ戻りつ我が門に

如月に感染症の恐怖かな

尻尾振る犬と目が会ひ春障子

勇退に縺れし事情菊根分

出獄の報聞く机上黄水仙

春愁や遂げし思ひのその果に

燕飛び花嫁の父立ちつくす

棚下はさながら聖地藤の花

袋掛淡き思ひも封印す

空堀を埋め尽しけり雪の下

岩清水ゆらりと泳ぐ五円玉

つきまとふ雲のがれえず梅雨の月

天国も地獄も知らず芥子の花

好奇心多き螢に好かれけり

野梅

勝山道子

あせりもて数えなほしぬ春の句を
野梅咲き夫の年忌や旅仕度
改築のとなりで「ひな」はひそやかに
さるすべり新芽の赤きときなりし
年長の園児となりて孫気取り
留守の間にチュリップ咲きわれをまつ

水道も若水なれば邪気払ひ
年賀状添えがきばかり心打ち
操りごとの多き人つれ桜みる
桜散る山門仁王は稚子の顔
盆景のごとき松島春の風
つき出しに梅一りんの里の宿
ひそやかに茶わんふきつつ春を知る
延暦寺ぼたん桜や景あらた
京の春舞娘に浪速(なにわ)ことばあり
練炭に手あぶりて待つ山の駅

子の悩み母も心の痛む春

春一番お堀りの水を波立(なみ)たせ

なか〳〵に心通せず春寒し

群がりて自由に泳ぐ春の鴨

もらい湯に肌やわやわと月冴えぬ

寒ぶりの煮汁のこさを一気のみ

「ひな」向ひ一人和みて髪(ビン)なほし

下からと順に箱づめ「ひな」伏目

桜咲く甲斐路で武者の列にあい

よもぎありアシタバ揚げた寺料理

早咲きの桜もまたで友凶報

もてなしのタクワン丈のにごり酒

上に咲くサラそのままに地にも咲き

暗がりにおぼろげ白きサラの花

パン屑にカワゼミ胸をふくらませ

入院の荷にそっと春句集

古木ゆえつぼみの桜うつりよし

この雨が桜早むとしのびまつ

寺まいり白粧束に桜散る

南北の傾斜に映える山つつじ

つつじよけ車椅子押す白衣かな

夫植えしつつじ赤々大玉と

ヨメナ和え姑の味がそのままに

歌詩

千年先の未来まで

亜木陽一

二人でドキドキしたあの日
君と出逢って　僕は変わった
どこかがやさしくなった
何かが強くなった
それはすべて君がいるおかげだよ
オギャーと生まれ
恋して愛した
この一瞬がもっともっと色づいてほしい
季節が移り変わるように
懐かしいものは　いつの日にか消えて行く
But　But
君と僕はいつでも一緒
千年先の未来まで

二人でラヴラヴしたあの日
君に出逢って　僕は変わった
どこかが明るくなった
何かが輝いている
それはすべて君がいるおかげだよ
よいしょと生きて
泣いて笑った
この瞬間がもっともっと花開いてほしい
時間が流れて行くように
見慣れたものは　いつの間にか消えて行く
But　But
君と僕はいつでも一緒
千年先の未来まで

（平成18年度岐阜市文芸祭・佳作）

漢詩

潮騒録（五十四）

鯨游海

祝石黒修身大兄上梓歌集行雲流水寄跋以酬
平成十九年黄鐘

席捲詩壇恣榮譽
玩鳥賞花稀覯書
何故汝歌無一濁
擧杯邀月鹿門居

押韻・譽書居

〈石黒修身大兄が歌集「行雲流水」を上梓さるるを祝い跋に寄せて以って酬ゆ〉

詩壇を席捲し　栄誉を恣まままにし
鳥と玩れ花を賞ずる　稀覯の書
何故ぞ汝が歌に　一濁なきは
杯を挙げ月を邀え　鹿門に居えばなり

〔注　解〕

跋＝書物の後につける文。後書。奥書。前文は序。
席捲＝席を捲く強風のような凄い勢で攻め取ること。
稀覯＝めったに見られない。珍らしい。価値の有る。
無一濁＝論語「詩三百　一言以蔽之　思無邪」を聯想。
擧杯邀月＝李白・月下獨酌「擧杯邀明月」より。
鹿門＝鹿門山。隠士の棲を寓意する。盛唐の孟浩然や漢末の龐徳公が隠棲した山。吉川幸次郎「鹿門蔵伉儷家法自清操」＝伉儷とはつれあい。伴侶。夫婦が仲良く静かに暮らしているさま。ここでは石黒氏の賢夫人を指す。

〔口語訳〕

貴兄は歌を詠み秀歌と思えば各紙誌に投稿され、次から次へと入賞入選を繰り返して歌壇を席捲されました。
その万葉調の声律は、喩えば花鳥風月を詠んでも対象をあるがままに熟視し、ストレートに力強く歌い上げます。技巧に走らない所が却って選者や読者の胸を搏つのでしょう。然も景と情が自ずから溶け合って、素晴らしい歌に昇華しています。今回上梓される「行雲流水」は優れた歌論や作家論と併せ、ユニークな価値ある書で、正に稀覯本であります。
孔子は「詩経に載る詩は、全て思いが邪なものは無い」と論語で述べていますが、これに慣って私は「貴兄の歌は、全て一点の濁りも無い」と敢えて申しましょう。
この濁世の中で、何故にかく純真無垢の歌を生み出せるのでしょうか。恐らくそれは、貴兄の該博な教養と優しい精神にあると思うのです。
李白が「月下獨酌」（注）で詠んだ如く「杯を挙げて明月を邀う」の境地に居られるからであります。
更には盛唐の孟浩然や、漢末の龐徳公が隠れ棲んだ鹿門山の清澄の中で、「鹿門に伉儷蔵れ　家法自ずから清操」と吉川幸次郎も謡った如く、清操な晩年を最愛の賢夫人とお二人で、ひっそりと心豊かにお過ごしになっておられるからに違い有りません。

〔注〕月下獨酌・李白

花間一壺酒　独酌無相親
擧杯邀明月　対影成三人
月既不解飲　影徒隨我身
暫伴月將影　行樂須及春
我歌月裴回　我舞影零亂
醒時同交歓　醉後各分散
永結無情遊　相期邈雲漢

（五言古詩）

憶中華産餃子中毒事件
平成二十年二月

餃子誰包毒結晶
割烹背信衆人驚
勿忘曾受食恩徳
賭命鑑眞齎醤噌

押韻・晶驚噌

〈中華産餃子の中毒事件に憶う〉

餃子誰か包む　毒の結晶
割烹への背信　衆人を驚ろかす
忘るる勿れ曾って受けし　食の恩徳
命を賭けし鑑眞が　醤噌を齎したるを

〔注　解〕

中毒＝毒に中る。中は動詞であり「中の毒」ではない。
割烹＝庖丁で割き、烹る意から併せて料理のこと。
鑑眞＝奈良朝廷や仏教界の要請により、遣唐大使藤原清河、阿部仲麻呂、吉備眞備らの強い説得で来日した名僧。第十次帰国船団四隻の内、清河と仲麻呂は遭難。眞備と鑑眞ら弟子二四名は無事渡航出来た。律宗を伝え、のち唐招提寺を創建。味噌や醤油の製法を伝授した。近年、米国産牛肉を始め輸入食材への不安は尽きない。

☆味噌醤油荒海越へて伝へ来し
鑑眞和尚何思ふらむ

題桂林山水圖・三首連作其一

平成二十年二月

碧星忽沒赤陽煌
天宇愈紅水更蒼
四海無聲魚影動
娑婆萬里桂林鄉

押韻・煌蒼郷

〈桂林の山水図に題す・三首連作その一〉

碧星たちまち没し　赤陽煌めき
天宇いよいよ紅に　水さらに蒼し
四海声なく　魚影動き
娑婆より万里　桂林の郷

〔注　解〕

天宇＝天界。宇は空間の広がりを宙は時間のそれを云う。

四海＝全世界。四方の外国。四方の海。孟子・公孫丑「苟能充之　足以保四海」

娑婆＝仏教用語。人間世界。この世。娑羅雙樹の娑羅は梵語の音訳で木の名前。この二本の樹の下で釈迦は亡くなった。桂林＝中国広西省の名勝地。

☆星没し四海声なく明け初めぬ
娑婆は何処ぞ桂林の朝

又・三首連作其二

平成二十年二月

水吞山塊筏操人
鳥獸猶睡龜缺伸
漁父未知桃里外
桑田碧海已三巡

押韻・人伸巡

〈又・三首連作その二〉

水は山塊を呑み　筏は人を操る
鳥獣はなお睡り　亀は欠伸す
漁父いまだ知らず　桃里の外
桑田碧海　已に三び巡るを

〔注　解〕

塊＝かたまり、土くれ、大地。

起句は顚倒した表現。本来は「山が水を呑み、人が筏を操る」のであるが、幻想の世界を擬す為あえて逆さまにした。

缺伸＝欠伸。欠の正字は缺。和語ではなく漢語で、腰を伸ばすという意も含む。この場合に限り欠と音読する。

桃里は陶渕明の桃花源記にいう仙境。桑田碧海は盧照鄰の長安古意より。桑田変じ三び海となる＝時勢の推移。

☆桃花源すなどる翁夢知らず
桑田みたび海と為れるを

又・三首連作其三

平成二十年二月

鞭撻老軀豊釣嘉
人生七十漸知涯
蒼天染茜陽將暮
歸去來兮渡水家

押韻・嘉涯家

〈又・三首連作その三〉

老躯を鞭撻して　豊釣を嘉せしが
人生七十　ようやく涯を知んぬ
蒼天茜に染まり　陽まさに暮れんとす
帰りなんいざ　水を渡る家に

〔注　解〕

鞭撻＝鞭でむちうつ。転じて励ます。ここでは後者。

豊釣＝豊かな釣果のこと。嘉す＝よろこぶ。褒める。

歸去來兮＝帰りなん、いざ。來は呼びかけの助辞で「いざ」と訓読するのが慣例。兮は無意味な間投詞で、訓読しない。屈原の楚辞の常套句。口語訳では「さあ、帰ろうよ」「いざ、帰りなさいよ」。陶渕明・歸去來辞「歸去來兮　田園將蕪　胡不歸」。

渡水家＝高啓・尋胡隠君「渡水復渡水…到君家」より。

☆花を賞で水を渡りて帰りなん
三尺の鱸魚すでに獲たれば

《漢詩の流れ43》遼・金・元の詩(一)遼・逍延壽

逍延壽（？～九四八）、恒山の人。五代の後唐に仕え枢密使となり、のち契丹に降った。

遼の詩で現存するものは稀少。素朴ながら契丹族の遊牧生活を活写している。

遼は契丹族の耶津阿保機（太祖）が蒙古、満州及び華北の一部に建てた征服王朝で、二百年の歴史があるが、大半を北宋と対峙し、軍事的には優位にあったものの、経済的、文化的には漢民族に大きく立ち遅れ、詩文にも見るべきものは少ない。

失　題

（しつだい）

黃沙風卷半空抛
雲重陰山雪滿郊
探水人回移帳就
射雕箭落著弓抄
鳥逢霜果飢還啄
馬渡冰河渴自跑
占得高原肥草地
夜深生火折林梢

黄沙風巻いて半空に抛ち
雲は陰山に重なり雪は郊に満つ
水を探す人回れば帳を移して就き
雕を射し箭落つれば弓を著けて抄る
鳥は霜果に逢えば飢えて還た啄み
馬は冰河を渡って渇して自から跑る
高原の肥草の地を占め得て
夜深うして火を生ぜんとて林梢を折る

（注）帳とはパオのこと。霜果とは霜に打たれた凍った果物の実。林梢とは林の中の木の枝。

失題＝無題に等しい。

後深草院二条の別離譚

島津隆子

忘れ形見

ある日、後深草上皇の前に、数人の宮廷女官たちに抱きかかえられるにしてやってきた一人の童女があった。

「さあ、お上手なご挨拶は……」

女房の一人に言われた童女は、不意の催促にむずかり顔になると、なにも答えようとしない。ただ上皇を凝視しているばかりである。少々慌てた女房たちは、

「まあまあ、姫は言葉を忘れたとみえまするな……」

「さっき、あれほどお習いしましたのに」

などと口々に言って、その場をとりつくろおうとした。その様子を察した上皇は「よしよし」と微笑を浮かべ、

「さてさて、どちらからのカグヤ姫かな」

と優しく童女を手招きされた。

童女は御前に出るために着せられた重い衣装を、さも邪魔げにして二三歩進んだ。だが、長い裾に小さな足をとられそうになり、前のめりに上皇にすがりついた。

上皇は思わず興じて抱きとめると、

「この世の面倒なしきたりは、嫌々じゃのう」

と満面に笑みを浮かべて言った。

女房たちもほっと胸を撫でおろして、笑い声の洩れる口元に手を当てる。

それから上皇の膝にちょこんと収まった童女をはさんでの会話に興じた。

上皇は童女に頬を寄せて、何度も同じ問いを繰り返す。

「どちらのカグヤ姫よ」

はじめ女房たちは上皇をじらすように、なかなか答えようとしなかったが、

「帝、カグヤ姫の母上でいらっしゃる月宮様は、ようくご存知のはずでございましょう」

「どうぞ、姫の母上をお当てなさいませよ」

と揶揄されると、上皇は改めて童女の顔を念入りに眺めるのだった。そして、

「おお、姫は後嵯峨院大納言典侍（すけ）の忘れ形見であったか……」

とさも、

「よき見つけものをしたぞ」

と言わぬばかりに、童女を両腕にしっかりと抱き直された。

上皇の膝に抱かれているその童女こそ、後に上皇の寵愛を一身に受けた後深草院二条と呼ばれた女性である。

二条は〝人も問わぬのに物語るひとりごと〟として『とはずがたり』という不朽の名作を残した。

文学史的には小野小町、和泉式部、清少納言の系列に属するとされる。特に小野小町のような女性ではなかったかと言われるが、それら平安朝の女性たちとは一味ちがう異色な存在でもある。

二条は平安期の恋愛至上主義的な自由な時代と違い、厳しい倫理観に貫かれた鎌倉時代の女（ひと）である。貴族の家柄に生まれながら、社会の掟に抗して波乱の生涯を生きた。運命に弄ばれる女の悲しみを背後に色濃く漂わせているのが特徴でもあろうか。

二条は四歳の年、成人に達した若き上皇後深草院に引きとられて〝吾子（あご）〟と呼ばれながら大切に養育されるようになった。

長ずるにつれ物事を素直に見、はっきりとした表現をする怜悧な二条を、上皇は限りなく愛しみながら、その成長を見守った。

やがて、あどけない童女からすくすくと背丈ものびめっきり少女らしさを増して、二条は十四歳になった。

文永八年（一二七一）、正月元旦のことである。

初詣をすませ局に帰ってきた二条を待っていたのは、すでに帝位を譲られた上皇からの意外な御文使いであった。

濃い牡丹色の単衣（ひとえ）、萌黄の上着、朱色の唐衣、袴、三つ小袖、二つ小袖など、平包みされた数々の衣装の上に御文がのせてあった。紅の翼様八つも添えられている。

「昨日の雪も、今日よりはあとをふみつけん行末……」

という文の後に一首の和歌が書かれていた。

翼こそかさねることのかなはずば
着だてに馴（な）れよ鶴の羽ごろも

二条は心のときめきを覚えた。そして、心のこもる贈り物をお返しするのはやるせない思いがしたが、

おとそながら馴れてはよしや小夜衣
いとど袂もくちもこそすれ

と詠み、

「思う心の行末むなしからずば……」と書き添え、使いの者に託してその品々を返した。

ところがその夜半、再び使者がきて、そっと贈り物の包みと和歌を二条に届けたのである。

ちぎりおきし心の末のかはらずば
ひとり片けし夜半のさごろも

二条は和歌の内容をはっきりと理解することができなかった。そして、再び届けられた品々を、どうしたものか考えあぐねて、そのままにしてしまった。

正月十五日の夕方、里方から二条に迎えが来た。

言われるままに家に帰ってみて二条は驚いた。見慣れた家中の調度品があとかたもなく、みな新しくなっていたのだ。妙なことがあるものだと思っていると、翌日には母方の祖母がやってきた。

なにやら家の中が賑々しく華やいでみえる。父は笑顔で黙っているばかりなので、たまりかねて二条が尋ねた。

「上皇さまの行幸ですよ」

やっと祖母がそれだけ答えてくれた。

「どうして？　いまごろ……？」

この状況をつかみきれずに、もの問いたげな二条に、

「まだまだ赤ちゃんなのねぇ」

と言ったきり、祖母は取り合ってくれようとしない。

その間にも二条の部屋や居間の屏風も几帳も、次々と晴れ晴れしく立て替えられてゆく。

「あら、私のお部屋へもお通しするのですか」

二条の言葉に誰もが笑って沈黙のままである。

部屋に灯がつくと、二条は美しい小袖に着替えさせられた。父がそばにきて、そっと諭すように言った。

「女人は、人に逆らわないのがよいのですぞ」

短いが因果を含めるような言い方である。

それからみなが部屋を退き、急に家中が静かになった。

独り取り残された二条は退屈して、火桶に寄り添ってまどろんでしまった。

……童歌が聞こえている。歌声の主はみたこともない母の面影のようである……

ふと二条が目覚めると、夜のとばりが深くたれこめた幽かな燈火の傍らに、高貴な衣装に身を飾った貴人が坐っている。

驚いた二条が思わず夢のつづきか幻かと、目を凝らしてよく見ると、その方は後深草上皇であった。

「そなたが十四歳になるまでの長い月日、どれほど待ったことか、可愛らしいカグヤ姫よ」

その夜は火桶に温まりながら、とりとめのないことを語るだけで、上皇はお帰りになった。

そして次の夜、上皇はまた二条の許を訪ねられた。

こんどは少々お手荒く扱われて、苦しさが度々二条の全身を襲い、明け方までに、ふくらみ初めた蕾はあとかたもなく散らされた。

なにがどうしたのかわからないまま、二条はまるで夢をみているような心地を漂っていた。

それから月に五六度、二条の里へ上皇の行幸はつづいた。

初恋の告白

ある夜のことである。

いつもの通り、愛を交わした後、二条ははだけた単衣の胸を合わせ、床の中で上皇の胸に指で悪戯書きをしていた。

上皇は二条にされるがままに、じっと天井の一角をみつめながら言葉した。

「そなたの父雅忠殿は、源久我大納言であるよの」

「はい、さようでございます」

「母は、この私の父後嵯峨院に仕えた大納言典侍の局であることは知っていようか」

「そのように伝え聞いておりまするが……」

それから上皇はしばらく間をおいて言った。

「そなたの母は、私の初恋の女であった……」

二条の指先がぴたりと止まった。

「その初恋の女は、そなたを産むと、間もなく亡くなられたのだ」

二条は言葉を失っていた。

「そちの母、大納言典侍の胸元は、私にとって忘れようにも忘れることのできない、若鳥の巣箱のようなものであった。私が四歳のそちを引き取ってこの膝に抱いたのと同じ様に、私の幼い日々……」

上皇は天井を仰いだまま、遠い日を夢みるように言葉を継ぐ。

「幼少から少年にかけての頃、私をあやしたり物語りなど聞かせてくれた多くの上臈がいた。その中でいちばん心地よかったのは誰よりも大納言典侍の懐の温もりであった。添い寝をされながら生暖かい肌の感触が、衣服を透していてもじかに伝わるような快さだった。

あれは私がまだ東宮であった十五歳の冬、大納言典侍と一夜の契りを約束した。だが、その夜、いくら待っても姿をみせないのだ。どうしたのかと案じていると大納言典侍が産気づいたという報せが届いた。

その後の調べで相手は同じ宮廷仕えのそちの父源雅忠であることがわかった。

私は狂うばかりに嘆き悲しみ、雅忠殿を憤った。

宮廷の局に手をつけたということで宮中審査にかけられ、当然東国への流罪は免れ難かった。だが、私は翌年十六歳の即位を待って、宴の席上雅忠殿の罪を許し、二人を正式な夫婦とするべく仲介の労を執ることを宣言した。

そして、産み月の近い大納言典侍のためお祝いの言上や儀式の準備を命じたものだった。

しかし、そちを産んで間もなく、産後の弱りから儚くも逝ってしまったのだ。なんとも慌しくあっけない初恋の終末であった。

だが、私の大納言典侍への未練は断ち切れなかった。

そちの幼い顔の中に、まだあどけない胸元にさえ、亡き大納言典侍の面影が偲ばれて、どうしてもそちを手放す気になれなかったのだ。これからも……生涯かけて、そちを離しとうはない……」

そこの処を『とはずがたり』には「姫の母御のふところの香もぬくもりも汲みためた、このふところに居よ」と書いている。

二条は広くて厚い上皇の胸に顔を押し当てて、目に涙を浮かべながら、深い感動に浸り、今さらながら見たことのない亡き母の上に想いを巡らせるのだった。

そして、この母との死別が、これから二条の身の上に重ねて起る別離の初めとは知る由もなかった。

二条は明け方近くに上皇のお帰りを見送った。

西の空に立待月が白く浮び、東の空は仄かに赤みを帯びた夜明けの風景の中を、上皇の牛車が遠ざかってゆく。そのくっきりとした影絵のような映像は二条の目に焼きついて残った。

ついに二条はもの思う多感な女になった。

そして、この十四歳の正月、京郊外の阿加の里で上皇の寵愛を受けたところから『とはずがたり』の物語は始まるのである。

策謀と暗闘

ここのところ、二条の里方に上皇が行幸される回数はめっきり少なくなった。

これには複雑怪奇な朝廷内部の暗闘にも原因がある。

当時、鉄の団結を誇っていた「鎌倉幕府」にもようやく衰退の兆しが見え始めた。幕府が衰退に向うと必然的に力を増してくるのは京の皇族や貴族の公家側である。

幕府は公家政権の回復を何よりも恐れていたので、密かに対策を講じていた。

まず手始めに貴族階級の切り崩しを開始したのだ。衰

えたりとはいえ奈良平安の昔から、名門としての伝統を誇る藤原摂関家は、鎌倉期に入っても近衛家と九条家に分かれたに過ぎなかった。

後鳥羽上皇の起した承久の乱以後、幕府はどちらかといえば近衛家に比して凡庸な人間の多い九条家に目をつけた。関係を深めてゆく中で九条家内の藤原教実、良実、実経の兄弟間に紛争を起させたのである。

そして、いかにも平等に仲介の労を執ったように見せて、九条家を九条(教実)、二条(良実)、一条(実経)の三家に分立させてしまったのだ。

一門の中に内紛が起れば、それがさらに紛争を呼ぶ。手ごわいと見えた近衛家の内部にも亀裂を見つけると、幕府はこれを利用して、近衛家を近衛、鷹司の二家に分断することに成功するのだ。

これを歴史上「五摂家の分立」というが、これは公家の勢力の中に分裂と対立を作り出し、その弱体化を計るためにとられた幕府の深謀策略の一環であった。

このような政変の渦の中で誕生した二条家からの出身が「後深草院二条」なのである。

さて、貴族の力をそいだ幕府は最終目標である朝廷—皇族の弱体化を策謀することとなる。

この頃になると畿内をはじめとして、次第に地方に反乱の兆しが濃くなってきた。京都にあっても後嵯峨天皇のあとが二つの系統に分かれたため、皇族の内部も二派に分かれて紛争をはじめた。これも陰で幕府の策謀するところであった。

承久三年の承久の乱(一二二一)後、幕府はこの乱とは関係のなかった後堀河天皇を立てた。続くその子四条天皇が幼少で亡くなったのと、もちろん子が無かったために、朝廷側は順徳上皇の子忠成親王を擁立しようとした。

しかし、幕府は順徳上皇が乱に深く関係して佐渡に配流となった重罪人であることからこれを嫌った。そして、比較的罪が軽く四国の土佐に流罪となった土御門上皇の子邦仁親王を推して、後嵯峨天皇としたのである。

つまり、この天皇は幕府のさしがねによって即位したようなものであった。

後嵯峨天皇には後深草と亀山の二人の子があった。

天皇は慣例どおり第一皇子である後深草に天皇の位を譲り、自らは上皇となって以後二十六年間にわたって院政を布いた。

ところが兄の後深草がどちらかといえば漢詩や和歌をたしなむロマンチックな文人肌であるのに対し、弟の亀山は乗馬や剣術を好む、きびきびとした武人型の気性の持主であった。

父の上皇は弟君の方を頼もしく思い愛していた。そこでとうとう後深草を口説いて天皇の位を亀山に譲らせて

しまった。

万事において穏やかな性質の後深草上皇をよいことに、さらにその子をさしおいて、父上皇は亀山天皇の子を皇太子に立ててしまった。このような朝廷内部の暗闘の最中に、後深草上皇と二条は結ばれたのであった。

二条が身重の体になったのは十六歳の夏である。

しかし、二条を掌中の珠のように大切にしていた父雅忠は、孫の顔を見ることもなくこの世を去った。

母も知らず、また父をも喪い、後深草上皇の足も遠のいて、何かと頼りない日々を送ることが多くなった二条である。

それに身重になってからは、上皇の正室である東二条院の妬みが激しく、上皇に愛されれば愛されるほどいっそう辛い立場に立たされる二条であった。

東二条院からは上皇との別れの勧告がしきりである。それは年齢とともに容色の美しさが増してゆく二条への嫉妬からである。

「花、香蜜あでやかなれば、虫ひとりでに誘はる」『とはずがたり』が語るように、上皇の二条への思いは一通りではない。

また、身重の体には煩わしいことではあるが、二条の魅力ある性格と容貌に、言い寄らずにはいられない殿上人も多くいる。

この年の冬、二条は上皇の皇子を出産するのである。

背信

父雅忠の忌中の折、悲嘆にくれる二条に優しい労わりの言葉をかけて、何かと慰めの態度を示す一人の紳士があった。『とはずがたり』に「雪の曙」として登場する西園寺実兼である。

その後も実兼は傷心の二条を励ましたり、時には高価な贈り物を届けたりもした。嫉妬に燃える東二条からの文使いを待ち伏せて追い帰したり、嫌がらせの文を破り捨てたりなどして、実兼の剛毅な性格は盾となって二条をかばい続けた。

無事出産した皇子のヨチヨチ歩きの姿も、意味の通じない片言も、あどけなく可愛いさかりである。

だが、菊の季節。

意外なことに二条がまた産気づいたのである。

次は、早くても十二月出産のはずでなければならない。

上皇は心の片隅で一寸不思議に思われたが、政争の渦中にある身ゆえ、深く気に留める暇も心のゆとりもなかったのだ。

二条は実兼と浅からぬ契りを結んでいたのである。

「新枕ともいいぬべく、かたみに浅からざりし志の人」と書きとめられている実兼と二条の秘めた関係は、意外な事実を展開してゆくことになる。

二人は二条家の中でも遠縁に当る間柄であった。

上皇と結ばれる以前から二人は好意を寄せ合っている仲だった。二条にとって実兼はいわば初恋の人ともいえる。

後に政治家として大成する実兼はその後もずっと二条の隠れた恋人であった。十余歳年上の彼は兄のようにこまやかな心遣いを二条に示し続けたのである。

実兼は密かに忍んで二条の里に通った。

そして、重なる妊娠と、上皇に対する背信の心苦しさに身悶える痛ましい二条を見守った。

めっきりせり出した腹を抱え、肩で息をする姿に、

「痛ましいことだ、こうしてごらん」

床に伏す二条の手をとって静かに起すと、長い間、背中をさすって苦痛を和らげてくれるのだった。

こうして文永十一年(一二七四)九月、二条はこの「雪の曙」の女児を密かに産んだ。

生き別れ

だが、ここから血を吐くような二条の悲しみが始まる。

枕辺の灯を灯して、産まれたばかりの赤子を見ると、頭の髪も濃く、まるで母である二条の顔が、みえるかのように見開く双眸が、いかにも賢そうだ。二条は先刻までの産みの苦しみも忘れて、じっとわが子に見入った。

だが、次の瞬間、実兼は二条の手から赤子を奪って抱かかえると、夜陰にまぎれて連れ去ってしまったのだ。

同じ頃、死産していた正妻との間の実子として育てるため、実兼は赤子掠奪という卑怯な手段にでたのである。

理由もわからないまま、生木が裂かれるようにいなくなった赤子が不憫だと二条はただ泣き崩れるばかりだった。わが子に吸わせることもかなわない乳房が張り、痛みに耐えかねて眠れない夜がつづく。二条は口のきけない子が自分に与える責め苦だと、わが身を責めては哭いた。

だが、上皇には、

「流産いたしました」

と告げ、事なくすませる理性も失ってはいなかった。

実兼が引き取っていった女の子は、後に宮中に入った。永福門院か照訓門院のいずれかであろうと推測されているが『とはずがたり』の中で、生まれた子に敬語が使われ「天子に心をかけ、かしづき候」と書かれている点などから、永福門院であろうという説が強い。

皇子の死

さて、生まれたばかりの子と心ならずも生き別れにな

った二条を、第二の悲しみが襲った。

産後三十七日の浄めもすまないうちに、可愛いさかりの皇子が風邪のため、急にこの世を去ってしまったのである。御年二歳であった。

二条は二重の別離の苦しみの中で、わが身を責めた。後深草院への背信に、実兼から裏切りの報復を受けたのだ。そして血を分けた二児の死という重い罰が科せられた。この受刑にどんな言い訳も通用するはずがない。二条は懺悔に身を削る思いでいた。

しかし、皇子が亡くなると、あれほど熾烈だった皇妃東二条院からの嫌がらせは嘘のようにぴたりと止まった。

「この悲哀、因果応報というもの、たんと苦しむがよい」

皇妃の勝ち誇った冷笑が二条の目に浮かぶ。

その頃、ご深草上皇は女同士の葛藤どころではない、すさまじい政争の渦に巻き込まれていた。

先に後嵯峨上皇は第二皇子を寵愛し、皇位にあった後深草天皇を譲位させ、亀山天皇が誕生したことを記した。だが、後嵯峨上皇が崩御すると事態はいっそう複雑極まりない様相を呈してきた。

ちなみに、文永五年(一二六八)、亀山天皇は皇子世仁親王を皇太子(後宇多天皇)とし、皇位を譲った。そして亀山の院政は十三年間もつづいたのだ。しかし、後深草上皇方の巻き返しに遭い、亀山は出家するのである。

その後深草の熙仁親王(伏見天皇)が皇子となり、亀山と後深草の立場は逆転。伏見の胤仁親王(後伏見天皇)が皇太子になるのだ。

旅路の訃報

ところで、ここで二条は追われるように宮中を退出するのである。

そして、比丘尼となった傷心の二条は諸国遍歴の旅に出る。

二条が西国から関東に下向し、鎌倉に入ったのは正応二年(一二八九)三月のことであった。

宮中を退出してから、はや五年の歳月が経っていた。

鎌倉の二条の耳に、後嵯峨院の孫である将軍惟康親王が上京するという噂が入った。もしやと急かれるように京に上った二条は、嘉元二年(一三〇四)七月十六日、後深草崩御を知る。

やるかたない思いで御所へ行ってみたものの、そこは寂しい気配に満ち、南殿の燈籠さえも消されていた。

しだいに更けてゆく夜、虚しい御所の庭にただ独りいる二条は昔を偲びつづけた。あのあどけなかった四歳の頃から、宮中を去るまでの歳月の折々に見せた、情深い

後深草の言葉や仕草の数々が、二条の脳裏を去来する。

ふと見上げた空の月にさえ、二条は嘆きを訴える。

隈もなき月さへつらき今宵かな
曇らばいかに嬉しからまし

平中納言のゆかりある人が御葬送奉行と聞いた二条は、ゆかりあるさる女房を尋ねた。そして、

「せめて遠くからでも御棺を見せて下さい」

と頼んだが、それも叶わないことであった。だが、諦めきれない二条の姿は日暮し御所に佇んでいた。

眠ることもなく、喪った後深草を思いつめる憔悴の二条。その後深草を載せた御車の後を追いかけるはずみに、履き物が脱げて失くなってしまった。それでも二条は裸足で五条京極を西へと走るのだ。

「もうここで止めよう。ここまでにしよう」

と思いながら、二条はどこへ帰る気にもなれずに、御車を追って走る。だが、人々に追いつかれ、追い越され、独りぼっちになってしまった。

二条はいつか深草の南、伏見の藤の森にきていた。

夜はまた明け方になっていた。二条は幾つも味わってきたつらい別離の道を、また彷徨っている。

空風（九）

太田精一

（三十七）

卒論を書き終えた伸一には、もう一つの大きな仕事が残っていた。それは、塩釜の女子中学生安藤恵子を志望校に入学させることである。

恵子は、仙台の名門女子高、仙台第二女子高等学校に入学を希望していた。だが、担任の先生からは、志望校のレベルを下げるよう言われていたのだ。

塩釜で電気店を営む父親の安藤幸雄は、何とか娘の希望をかなえさせようとして、家庭教師を付けることにした。そこで、近くに住む伸一の学友大宮に、教師の紹介を依頼した。その大宮の紹介を受け、伸一は、夏休みの始まる頃から週三回、主に数学、英語、国語を恵子に教えることになったのである。

当初、恵子は、それほど勉強に熱心ではなかった。だが、二学期の半ば頃から目の色が変わって来た。

授業時間は、午後五時から七時までの二時間となっている。ところが、教える側も教わる側も、夢中になると、時間の経つのを忘れ、八時過ぎになることもあった。

節分が過ぎ、仙台平野に雪の激しく降った日のことである。恵子の受験勉強も大詰めを迎えている。伸一は、家庭教師を終え、仙石線に乗った。夜も九時を過ぎていた。沿線に広がる田圃は、一面の雪に覆われ、月の光を受けて、キラキラ光っている。福田町で下りて上田子の下宿に向かった。

二十センチ以上も積った雪を踏んで伸一は、畦道を歩いていた。水原弘の「黒い花びら」を大声で歌い、月を眺めながら高揚した気分で歩を進めている。すると、突然片足が深みにはまった。前日に吹いた風が、雪を運んで地面が平らになっているために、畦道を踏み外し、肥溜めに片足を突っ込んでしまったのだ。

（しまった。月が余りにも綺麗なので、つい見とれて足元の注意を怠った）

伸一は、そっと足を抜いた。糞尿にまみれた片足を引き摺りながら下宿に帰り、庭先の水場で足を洗おうとした。だが、凍りついて水が出ない。靴下を脱ぎ、悪臭を消すために足の上に雪をかけては、手拭で何度も何度も擦った。刺すような冷たさが、足の感覚を麻痺させる。冴え渡った月の光が伸一には、雪女の視線のように感じられた。

口頭試問も終わった。伸一の卒論は、新開教授からも評価され、無事通過した。

安藤恵子は、仙台二女高へ合格した。

「志望校を変えるように担任の先生から勧められたが、変えなくて良かった。これも木本先生のお陰です」

厳格な父親の安藤幸雄も、この時ばかりは喜びを隠そうとせず、伸一に礼を言った。母親が、その脇で満面の笑みを浮かべて、伸一に深々と頭を下げた。

「いや、ぼくのお陰というより、恵子ちゃんの頑張りですよ。おめでとうございます。恵子ちゃんには、ずいぶん厳しいことを言いましたが、よくそれに耐えてくれました」

「木本先生、有難うございました。二学期の初めには二女高を諦めようと思いましたが、半年間先生が夜遅くまで熱心に教えてくれたお陰です」

恵子は、頬を赤く染め、畳に手を突いて、丁寧にお辞儀をした。

「今日は、松島湾で採れたアイナメや蛎を入れた鍋料理を用意しましたのでどうぞゆっくり召し上がってください」

母親のよし子の用意した鍋が出た。家族全員が、心から恵子の合格を祝っている。伸一は、その喜びを分かち合える幸せをしみじみと感じるのであった。

（良かった。これで心置きなく仙台を発てる）

伸一は、満足感に浸り、安藤家を辞した。早春の風が頬を撫でるように心地よく吹き抜けて行く。

卒業式までの数日間、伸一は、四年間の学生生活の思い出を訪ねて、関わりの深かった各所を散策した。有朋寮と長町周辺、富沢分校のある三神峰の丘、教養部移転後学んだ川内分校、青葉城址、広瀬川の畔、片平町の大学構内、その一つ一つが、伸一の記憶に火を点している。

有朋寮で共に過ごした学友、売店の売り子のお敬ちゃんの明るい顔、佐伯久美子との甘く切ない恋、再試験によって救われたフランス語の授業、新開教授の温かい言葉などが、訪ねた先々で蘇って来た。

伸一は、青春の一時期をこの街で、過ごすことが出来たことを改めて感謝し、新たな旅立ちを誓うのであった。

仙台を離れる時が来た。早朝出発の東北本線を走る普通列車に乗った。荷物を背負った乗客で込み合っている。

（有難う。東北大学と仙台の街。知識と希望を与えてくれた教授や学友たち、さようなら）

車窓から眺める仙台の街は、靄がかかってかすんで見える。たなびく汽笛の音が、春の訪れを告げていた。

（三十八）

名古屋の鉄鋼会社中部鋼鈑に入社の決まった伸一は、出社日まで、浜松の実家で過ごすことにした。

だが、すでに家族は、大工町にはいない。船越町に越してしまったのだ。吉雄、さきの両親と弟の恒三、妹の美子の四人は、そこで借家住まいをしている。次男の強司は、家族を離れ、自衛隊に入隊していた。

船越町の家は、六畳と四畳半に台所の付いただけの小さな家である。大工町にあった家財道具は、ほとんど廃棄し、大きな仏壇だけが運び込まれていた。日当たりが悪く、部屋の中が薄暗い。畳も障子も汚れていたが、雨漏りのないのがせめてもの救いである。

「ただいま、とうとう家を明け渡しちゃったね。大工町の家に比べて小さくなったけど住み心地はどう」

伸一は、つとめて明るく両親に声をかけた。

「長年住み慣れた処を離れるのは、そりゃあ辛かったに。でも、少しずつ慣れて来た。隣近所の人たちも親切にしてくれるしね」

さきは、何とか新しい生活に適応しようとしている。

「お父さんはどう。ずっとここで暮らして行くつもりなの」

「そんなつもりはない。だが、当面は仕方がない。強司には悪かったが、浜商を退学させてしまった」

「せめてぼくの卒業まで持ちこたえて欲しかった。でも、今更言っても仕方がない。ぼくも何とか就職が決まった。だから、これからは、月々決まった金を送ることが出来ると思う」

伸一は、狭い家に、不釣合いな大きな仏壇に灯明をともし、厳次郎の位牌の前の線香に火をつけた。

「おじいちゃ、ごめんね。強司をあんなに可愛がっていたのに、何もしてやれなかった。僕が大学を辞めなかったために、強司が犠牲になってしまった」

伸一は、手を合わせ、呟いた。それから、くるりと体を回し、仏壇を背にして、恒三に聞いた。

「恒三、四月から中学三年生だな。これから進学か就職かを決めなければならないが、どうするのだ」

「今の家の状況じゃあ進学は無理だよ。強ちゃあは、勉強ができたのに浜商を中退してしまったじゃん。僕は、勉強が苦手だ。だから中学を卒業したら東京に出て、住み込みの店員で働いて、年季が明けたら店を持つ」

「それもいいが、やっぱり勉強は必要だぞ。東京に出たら夜間の高校に行ったらどうだ。その学費ぐらいは出してやってもいいぞ」

伸一は、せめて夜間の高校だけでも、恒三に行ってもらいたかった。だが、彼は、勉強には興味がない。スポーツは得意で、三段跳びでは、浜松の中学体育大会で三位入賞を果たしているほどであった。

伸一の思いは、恒三には通じなかった。

（勉強だけがすべてではない。恒三には、恒三の人生があるのだ。人は、生き方が違って当たり前なのだ。兄弟といえどもそれぞれの生き方に容喙すべきではない）

そう思った伸一は、口を噤んだ。

小学校を卒業し、四月から中学に入学する美子は、伸一と恒三の会話をじっと聞いていた。美子にとっても三年後には、就職か進学かを選択しなければならない。

吉雄は、家族の会話をただ黙って聞いている。木本家が倒産に追い込まれ、すべての財産を失った責任を感じてか終始下を向いていた。

寺島町の川村睦子とは別れて、船越町に越して来てからは、日雇い仕事で糊口を凌いでいる。だが、家族を養うほどの稼ぎはなかった。四十八歳で、まだ老け込む年齢ではなかったが、白髪が増え、伸一には、急に年を取ったように感じられた。

カッティングの針を製造していた頃には、得意先から、吉雄と伸一は、兄弟だとよく間違えられた。吉雄は、実年齢よりずっと若くみられていたのだ。だが、すでにその面影はなかった。

さきは、膠原病で、左手の指が白く縮んで感覚がなくなっている。年を取るにつれ方言が目立つようになった。

「血が通っていないだに。熱いお湯に指を入れても熱く感じないだに。医者にも見せたけどこれは難しい病気で、一生直らないって言われたに。どうしてこんな病気になってしまっただらか。前世に何か悪いことでもしたずらか」

そう言いつつも、さきは、佐藤町の冨塚織布工場で、忍び寄る病魔に怯えながら、一日も休まず働いている。

翌日、菅原町の藤木建材店を訪れた。卒業の報告と四年間学費を援助してくれたお礼を述べるためである。

店主の藤木利右衛門は、伸一の母さきの妹みずえの主人で伸一には、叔父に当たる。

「叔父さん、四年間本当に有難うございました。お陰様で無事、大学を卒業することが出来ました。借りた十万円のお金は、三年を目途に完済するつもりです」

「役に立ててよかった。返済については、無理をしなくてもいいに。もともと“ある時払いの催促なし”で貸した金だ。当てにしている金じゃあない。呉れてやると言ってもいいくらいだが、それでは伸ちゃんのためにならない“借りた金は必ず返す”そういう習慣をつける意味でも返してもらうことにするよ。わしは、お金を貸すのも借りるのも大嫌いだ。だから他人にお金を貸したこ

とはない。貸したお金は、くれてやったものと思うことにしている。そう思えば、返してもらわなくても、腹は立たないからな」

（金の貸し借りを嫌う利右衛門が、その信条を曲げてまで貸してくれた好意を無にすることは出来ない。困った時に手を差し伸べてくれた人の善意を、裏切る行為は、絶対にしてはならない）

伸一は、三年以内に必ず完済しようと心に誓った。

「人間は〝義理と人情〟を失くしてはいかん」

祖父の厳次郎の言葉が、聞こえて来たような気がした。

店先に出た。店の前の東海道が伸一には、狭くなったように思えた。車の交通量が増えたのだ。

「道路の向こうの倉庫に荷物を取りに行きにくくなった。車が多くなったので危なくてしょうがない。商売もずいぶんやりにくくなったに」

伸一を見送るため、店先に立った利右衛門が呟いた。

新しくバイパスを造るという計画が発表されている。そうなれば、東海道沿いの国道一号線も新ルートを通ることになり、藤木建材店の前を通る道路も幹線ではなくなる。

「この騒音と混雑も今がピークなのかもしれないよ」

慰めともつかぬ言葉を残し、伸一は、一年近く働いていた藤木建材店を後にした。

夕闇が迫っている。和らいできた春の日差しが、割烹旅館呉竹荘の二階の窓を照らしていた。

船越町に越した家族のもとで二週間ほど過ごした伸一は、中部鋼鈑への入社の前日、浜松を発って、名古屋に向かった。彼岸も過ぎ、車窓から眺める沿線には、桜が咲いている。昭和三十六年三月三十一日、伸一の社会人となる新たな旅立ちを祝うかのようであった。

（三十九）

中部鋼鈑に四年間在職した。その間、敗血症に罹り、三ヶ月入院している。入院当初の一ヶ月間は、午後になると決まって四十度以上の高熱が出た。敗血症は、戦前までは、死亡率の高い恐ろしい病気であるとされて来た。だが、戦後は、抗生物質が開発されたお陰で、完治の可能性が高まり、伸一も命を取りとめることが出来たのである。

退院後暫く経ってから、東京へ転勤になった。入社一年先輩の森郁夫氏と東京営業所を開設するためである。

そこで輸出を担当するうちに、伸一は、活躍の場を海外に求めたいとの希望を強く持つようになった。

それは、少年の頃の夢でもあった。母さきの実家白羽町の大庭家は、遠州灘の海岸に近い。伸一は、伯父の大庭定吉が、中田島海岸で投網漁をする時には、よくついて行った。外洋に面した遠州灘の海は、波が荒く、水平線が遠くに広がっている。その荒海と波の音は、伸一の

好奇心と冒険心を駆り立て、海外渡航への夢を膨らませて来た。

昭和四十年当時は、外貨持ち出し制限があって、海外出張もままならない時代であった。まして駐在員として、海外で活躍する場は限られている。

そこで伸一は、海外に関連の深い機関への転職を図ることを決意し、ジェトロ（現日本貿易振興機構）の中途採用試験を受けた。大学卒業後すでに四年が過ぎていた。

伸一は、昭和三十八年十月に結婚した。したがってジェトロに入った時は、すでに結婚していたことになる。相手は浜松出身の東京在住の女性で、華奢で一見優しそうであるが芯は強い。好奇心に溢れ、旅行が好きで、世界中どこにでも出掛けて行きたいとしていた。

「伸ばせ輸出、豊かな暮らし」

国を挙げて、輸出の振興が叫ばれていた時代であった。

ジェトロに入った伸一は、名古屋、東京、長崎、大阪、の国内各地と海外は、カメルーンのドアラ、旧ユーゴスラヴィアのベオグラード、チリのサンチャゴと転勤を重ね、定年間際に東京に戻った。

伸一の海外での生活は、これら三箇所の各地を合わせると通算三十年になる。その間、南極大陸を除く、五大陸、五十ヵ国以上の国々を訪れている。特に、日本人にとって、なじみの薄い未知の国での仕事に携わる機会が多かった。

伸一の人生は、少年時代の夢をほぼかなえることが出来たのである。

強司は、航空自衛隊に入った。管制官となり、北は、北海道、南は沖縄と各地を転勤し、定年を浜松で迎えている。その間、天竜川東岸の豊岡村生まれの女性と結婚し、一男、一女を設けた。

恒三は、東京の繊維問屋に勤めたが、長時間労働に疲れ、望郷の念耐えがたく、商人として生きる道を諦め、浜松に帰った。帰郷後すぐ鈴木自動車に勤めたが、数年して大阪への転勤の内示があり、それを嫌って退職してしまった。その後、日本楽器、地元の金属加工メーカーに勤めたが、長続きせず職を変え、共済組合の保養施設の夜勤要員の職を得て、落ち着いた。その間、浜松近郊農家の女性と結婚し、息子がいる。

美子は、高校を出ると浜松の衣料品メーカーに勤め、地元で結婚した。二人の子供に恵まれ、幸せに暮らしている。

吉雄とさきの夫婦は、その後数年して生活を立て直すことが出来た。そこで、さきの実家、白羽町の大庭定吉から土地を借り、家を建てた。昭和四十五年、大阪万博のあった年である。

吉雄は、昭和五十四年、さきは、五十六年に他界した。

夫婦とも六十七歳の生涯であった。二人は、西鴨江の西見寺にある木本家の墓の中に葬られている。その墓には、厳次郎とその妻みちがすでに眠っていて、恒三夫妻が、その墓を守っている。

（四十）

強司の一周忌もことのほか寒い日であった。

遠州鉄道西鹿島駅から車で五～六分の距離にある天竜寺で平成十八年一月、法要が営まれた。強司の自宅は、その近くの豊岡村上野部にある。町村合併で現在は、磐田市に編入されている。

墓は、自宅の近くの小高い山懐にある。その日は、空風が吹き、マッチの火が、墓前に供える線香につく前に消えてしまう。かじかんだ手で、何度も何度もマッチを擦った。近親者が手をかざして、やっと線香に火を移すことが出来た。火のついた線香を近親者の一人一人が一本ずつ持って墓前に供えた。

伸一は、線香を供え、じっと手を合わせた。すると、強司の好きだった林伊佐緒の歌う「ダンスパーティの夜」が、耳元に流れ、それにつれて強司の呼ぶ声が風に乗って聞こえて来たような気がした。

「兄貴、俺の人生は、兄貴の思っているほど、苦しいものでも、悲しいものでもなかった。ただ、あるがままに生きた。だから、浜商を中退したことなど今ではなんとも思っちゃいないさ。気にしないでくれ」

伸一は、弟が高等学校を中退し、自分だけが大学に行ったことに対する負い目をつねに感じていたのだ。

一周忌を終え、伸一は、恒三の車に乗って、天竜川を渡り、浜松の中心部に出た。道路は拡張され、伸一のいた頃とは、様変わりしている。周辺の市町村を合併し、都市の規模も拡大している。政令指定都市として、大都市の仲間入りする準備を進めているのだ。

確かに、街は大きくなり、車も増えた。だが、浜松駅から鍛治町、千歳町、連尺町、田町などの繁華街の人の賑わいに、伸一の過ごした昭和三十年代のような活気が見られない。雑踏の中に、熱気と欲望がひしめいていた若さと人間臭さが、失われている。

伸一は、恒三と共に大工町に行ってみた。鴨江観音通りから左に入る恋沢橋にかけての狭い道は、昔どおりである。だが、その両脇の家々からは、子供の声も、賑やかな話し声も聞こえて来ない。

木本家のあった土地には、洋品店もすでにない。空き地となっていた。その空き地は、空風に吹かれ、砂埃を上げていた。

（完）

五十年間の一人言

平山恵敏（ひらやまけいびん）

五十年前、一九五八年（昭和三十三年）私は高校生であった。男女平等と言いつつも未だ男尊女卑の名残があり、男女共学といえども女生徒と会話が弾む華やかな雰囲気はなかった。

太平洋戦争に負けて十三年が経ちアメリカの核の傘の下で、貧しさから抜け出す為にひたすら経済復興に立ち向かっている最中であった。

祖父から、「スターリンは『働かざる者食うべからず』と言っている。ぼやぼやするなよ」と、喝を入れられた言葉を想いだす。東西冷戦時代で米ソ二大超大国の緊張関係のときであった。

姫路市郊外の田舎道を自転車通学していた。道路は舗装されておらず自動車はまばらでマイカーを持っている者は一部に限られ、高速道路は皆無であった。国鉄は蒸気機関車から電化に切り替える途上にあった。

一

昭和中期から平成に架けては洋の東西を問わず、過去の歴史変遷に照らしても異常な勢いの変革だったが、二十一世紀に入りめまぐるしい変動に一層加速が付いてきたように思える。

人間の本能としていたしかたないことだが、富を求め、競い合う趨勢が果たして真の人間の幸福をもたらしているであろうか？

特に近年のカネ至上主義による社会秩序の崩壊と人間関係の荒廃、また日本が抱える諸問題の資源エネルギーや食の確保、地球温暖化の環境保全、憲法九条に絡む国防策、停滞する経済等々、現役時代には気にしなかった事柄が今日の傍観者的身分になってこそ気になるのかも知れない。

借家住まいの冬は隙間風が吹きぬけるのを目張りで防ぎ、火鉢に練炭で熾し暖を取っていた。

便所は足元がガタビシ軋む音がして、異臭に閉口するばかりか糞尿溜りに落ちはしないか不気味で怖かった。

情報は新聞とラジオだけであった。気短な親父の叱責にいつもびくびくしながら暮していたが、家族が一緒に食卓を囲む夕食時には、家族の会話はしょっちゅうあって、団欒の世間話の中に躾や常識が培われる楽しい時間帯でもあった。

外食する余裕はなかったが母は家計を遣り繰りして手作り料理をあてがってくれ、魚寿司や煮物の食感は舌に残っている。

高校時代の三年間は大学よりも、ひたすらちゃんとした会社に就職して親に楽をさせてやりたい、貧しさから脱出したいの一心であった。

二

念願適い一九六〇年（昭和三十五年）、世間に信用があり、そこに勤めていれば堅くて品行方性といわれる銀行に就職した。給料で買ったテレビ映像から安保条約改定をめぐる岸内閣への猛烈な反対運動を観る。国会を包囲したデモ隊が騒ぎ、独立国として自立を志してもアメリカの保護なくして国防は成り立たないのを思い知った。

この新安保条約成立がアメリカの同盟国として今日でも厳然と現存する。憲法九条で戦争放棄しているのに自衛隊を持っている我が国の矛盾が、世界の紛争への参加に際し、あたかもアメリカの属国かの如く見られ、国内外で論議を呼んでおり歯痒い。

新安保が成立した年に私は社会人の仲間入りをしたが、当時の銀行業務は預貸金が中心、給与振込みや公共料金等自動引き落としは少々、作業方法は至って原始的であった。計算には算盤を使い筆記はペン先にインクを浸ける手作業で非効率そのもの、厭がおうでも熟練しなければ仲間に迷惑が掛かり、錬度を高めざるを得なかった。

この頃の雇用形態は正社員ばかりでパートは一人もいなかった。数年後になると機械化が急速に進み、コンピュータ導入によって業務内容の多様性や事務量の急増処理が可能になった。

雇用形態もパート化や契約社員に業務委託化へ傾斜して行くことになるのだが、まさか急速に何もかもが様変わりするとは夢想だにしなかった。

就職四年後に東京オリンピックがアジアで初めて開催され、これを契機にして経済成長に拍車が掛かり日本全土に活気が付く。高速道を含む道路整備、箱物といわれる建造物の公共工事が国内に猛烈な勢いで林立して行った。

国力は敗戦後二十年を経ずして驚異の復興を成し遂げ、日本に世界中が目を見張る。

「いけいけどんどん」とは当にこの頃の状況にあり、今年の中国は八月北京オリンピック開催を控えて同様の体に写る。滅私奉公国のため、会社のため男たちは家庭をほったらかし、寝ても覚めても仕事一途というのが当り前の時代であった。

三

一九四五年（昭和二十年）敗戦からアメリカ占領下の六年後にサンフラシスコ条約を経て国際社会に復帰した。アメリカの手厚い保護にあって経済成長に邁進し、急展開していった。

アメリカ様々である。

しかし、アメリカナイズされた日本の民主主義は戦前までの思想・文化・教育が一挙に何もかも変わってしまった訳ではない。明治・大正・昭和初期を歩んだ大人の教育を受け私たちは一人前になった。

戦前と戦後分岐点の挟間にもの心付いた因縁からか戦後生まれの言い分も理解でき、双方ごっちゃまぜになった思考から解釈する習癖が私の年代の人たちにはあるように思う。

要するに変に物分りが良いのだ。

就職後七年目に結婚、二男一女をもうけ、曲がりなりにも神戸に一軒家とマイカーを持つ身分になった。貧乏からの脱出は成った。

右肩上がりの経済成長は所得上昇をもたらし、物質面は確かに充たされていったが、精神面は仕事の充実感とともに焦燥感も付いて廻った。

朝早く家を出、夜遅く寝に帰るだけ、女房・子供との会話は申し訳程度で、休日は休息時間に充て、子供の躾や情操教育に当てる時間は少なかった。

活力は仕事に割き、家庭を守るのは妻の役割に当て込んだ。

事を成すには選択の優劣、関係周辺とのバランス、将来展望の見込・影響度合いの配慮が必要である。

経済最優先は、物質文明を豊かにしてくれ、速い、快適、便利になることが幸せであり、これを是とした。女性の社会進出は結婚・子育てよりも才能を活かして自立し、価値観を選択する女性が増えた。

豊かさや価値観の享受は、いろんな立場にある者の思惑とは裏腹に、少々の犠牲は目を瞑り見過ごして猪突猛進した。

好事魔多し、一九九一年（平成三年）から地価暴騰バブルの崩壊が始まり、一九九五年（平成七年）全く予期しなかった阪神淡路大震災に驚天動地する。

二年後には銀行、証券業界の相次ぐ不祥事に不良債権が増加して公的資金を導入せざるを得なくなり、世間からの信用も地に落ちる憂き目に遭ってしまう。

四

バランスを欠く行動は何処かに歪が発生し弊害を引き起こす。

過度な森林伐採や化石燃料消費による地球温暖化しかり、物の豊かさ優先による心のケア軽視しかり、仕事優先による家庭軽視しかり、経済優先による公害被害しかり、数えれば切りがない。

好むと好まざるに関わらず、個人、会社、国ごとの競争原理は避けられそうにない。

共存共栄、弱者救済、格差是正と奇麗事を並べても現実は貧富の差が拡大する一方である。

交通網が格段に発達し、情報はリアルタイムで世界中を駆け巡り、五十年前とは比較にならないくらい快適な生活が実現した。暖かい便器に座りウオッシュレットで洗浄してくれるトイレは快感でさえある。金さえ出せば世界中の衣食や各種文明の利器が手に入り、外国へ行って楽しむこともできる。

欲を言えば切りがない。

が、「しばし、待て！」と何処からともなく天の声が自分に呟く。

（お前たち中高年は、なるほどそれなりに努力し脇目も振らずよく働いた。敗戦後の日本を見事復興させ、世界に伍して豊な国に押し上げていったが、課題を結構子孫に押し付けているではないか。

このまま行けば数十年後には国の借金が一千兆円になろうとするのに、いつまで多額な赤字を垂れ流すつもりか。教育を軽視してきた責任をどのようにこれから建て直しするつもりか。諸外国から真の信頼を得る国になる為に現行憲法をこのまま放置するつもりか。

いい加減に目を覚ませ。お前一人ではどうしょうもないが、民の声を結集し、常識を働かして立ち上がれ。それには先ず、血税を食い者にする役人を暴いて叩き出し、悪質な輩を即刻刑務所に放り込め。

利権で私腹を肥やし党利党略にうつつを抜かす国益に役にも立たない政治家どもを退散させろ。

税金の無駄遣いをきれいに掃除・洗濯し、それでも財源が足りないのであれば消費税を上げ、国民全体が応分の負担を分かち合うことによってわが国の再建を図るべきである。

そんなことも出来ずに、自分個人の安寧・安穏を貪り生きようとする政治家や役人や道徳心のかけらもない企業経営者は無責任を通り越して、国賊であり善良な国民の寄生虫の存在である）と。

終り

化粧のルーツを訪ねて（二）

第一話　お歯黒のルーツ探訪記（2）

鈴木　守

第4節　古代のお歯黒

日本の古代は、奈良、平安両時代といわれているが、化粧史の立場からみると平安時代以降に比べ奈良時代以前の資料は乏しく、先史時代の趣さえ感じるので、古代を平安時代、奈良時代以前を上代とする。

1・お歯黒の資料

平安末期・一二世紀の書は、お歯黒をハクロメツクや黒歯（はくろめ）と記載していた。この期は源平抗争の世であり、中世に書かかれた義経記、源平盛衰記、平家物語に源平の武将たちの黒歯が記されてた。

これらの戦記文学でお歯黒を施していたのは、成人になった際の義経、伊豆配流時の頼朝、一の谷の戦いで討たれた敦盛と壇ノ浦合戦で討死にした忠度であった。忠度最後の場面には「味方の武士でお歯黒をしている者はいない。平家の武将だと思って追いかかる」と書かれ、関東武士は白歯、京の武将たちは黒歯であったことが示されていた。

一二世紀末の絵巻物・病草子には大きく口を開けて歯を染めている女性が描かれており、前出の天皇摂関御影に描かれている藤原忠通の口の間は黒く観察された。

平安中期一〇～一一世紀は、女流作家による古典文学の最盛期だった。彼女たちの作品に、しばしば、お歯黒が登場した。

紫式部は源氏物語に「古體の御祖母君の御名残にて、

歯黒めも、まだしかるけるを…」と記し、紫式部日記では「追儺は疾くはてぬれば、鉄つけなど、はかなきつくろひどもして…」と呟いていた。

清少納言は枕草子の中で「聞きにくきものは、歯黒めつけてものいふ声」と嘲けり、堤中納言物語の蟲めづる姫は「人はすべて繕ふところあるは悪しとて、眉さらに抜き給はず、歯ぐろめさらにうるさし汚なし」とけなし、栄花物語や宇津保物語にも、歯ぐろめがあった。

女性黒歯の初めは一条天皇のころと記した後世の書もあったが、一条天皇より昔の和名類聚抄（倭名抄）に「黒歯、俗に波久路女という」と書かれていたから一条説は成立しない。

平安時代のお歯黒の呼び方であるが、表記は様々だったが、ハグロメとカネが代表的な呼称であった。お歯黒が女性風俗だったためにハクロメの〝メ〟に女を当てたように思われ、カネの表記は平安末期の戦記記事に多くみられたので、男性黒歯をカネと呼んでいたように感じた。また、カネは鉄媒染の意味だから、一一世紀初めごろにはすでに鉄媒染法が採用されていたことになる。

2・男性黒歯の発祥

男性黒歯の創始説として、後鳥羽説を前節で紹介した。

しかし、後鳥羽天皇の在位は一一八三～九八年で、それ以前、平安末には源平の武将たちが歯を染めていたので、後鳥羽説を否定できる。

男性黒歯の始まりについて、江戸時代の著書に醍醐、白河、鳥羽、後白河説があった。醍醐説は「天皇は生来、歯が黒く気にしていたため、廷臣らが自分たちの歯を黒く染めた。それが男性黒歯の初めである」というのである。「白河天皇は衆道趣味で、公家たちの子供が出仕するとき歯を染めさせた」というのが白河説である。

鳥羽説は「鳥羽院は男色を好まれたため、派手好きな花園左大臣が帝と謀しあわせ、公家衆の子供たちが参内するとき、女性のように歯を染めて出仕せよと仰せられたため、後々は成人しても歯を染めるようになった」と本居宣長らが説いていた。後白河説の内容は白河説、鳥羽説と同様、男色説であった。

これらの諸説のうち、どれが妥当であろうか？

醍醐帝の在位は八九七～九三〇年で、倭名抄以前である。これが創始となって後の男性黒歯が行われたとすると、倭名抄では波久路女の字を当てなかっただろうし、また、「今の婦人は黒歯具を持っている」と述べている。さらに、口うるさい清少納言などがこれを見逃すはずがないと思う。そのうえ、後世の男性黒歯との間に資料的な断絶があるので、これらの理由から、醍醐説通りだったとしても一過性の現象であり、後世の男性黒歯創始説としては、否定的な立場を選びたい。

白河、鳥羽、後白河の三説は同工異曲であり、しかも、三帝が天皇あるいは上皇として君臨した時期は重なりあっていた。したがって、三帝が在位した一二世紀ごろに男性黒歯が始まったことは確かだろうが、どの帝の時期に始まったかに拘泥する。

三帝の履歴をみると、白河院は一〇七二年に即位、譲位直後に上皇、一一二九年に没。鳥羽院は〇七年から二三年まで在位、二九年に上皇、五六年没。後白河院の在位は五五から五八年、続いて上皇、九二年没だった。

別の資料に移る。「保元平治以来の合戦に公家より向かわるる大将は皆歯を染め紅白粉なりし故、武士にもその風移りて京家の武士は皆鉄漿付くる事にて在りしなるべし」という記載があった。

保元の乱は、一一五六年に鳥羽上皇の死を契機に、後白河院・藤原忠通派と崇徳院・藤原頼長勢力が衝突した争いである。忠通は前出の天皇摂関御影で、口の間が黒くみえた一人である。したがって、男性黒歯は一一五六年まで遡る可能性が出てきた。

忠通が黒歯だったことを前提にした話を続ける。要するに、彼がいつから歯染めしたかに焦点を当てる。先に、白河説、鳥羽説では、子供が初出仕のとき歯を染めたことを述べた。初出仕は成人として認められた年齢であろう。その年齢だが、頼朝は一一六〇年、13歳の時、伊豆に流され、この時、歯を染めていた。前述のように、江戸時代の公家の初カネが13歳だったことを併せると、平安末期の初カネも13歳だっただろう。

忠通に戻ると、一〇九七年生れの彼は一一一〇年に初めて歯染めしたことになる。かように、男性黒歯創始の時期を一一一〇年まで遡行できた。この時代は鳥羽天皇、白河上皇の時代である。鳥羽説か白河説かについては、白河説よりも鳥羽説には具体的な内容が説明されており、しかも、この説を記載している文献が多いので、鳥羽説の肩を持つことにする。

明治初頭の禁止令まで続いた男性黒歯発祥を私なりに結論すると「鳥羽帝即位の一一〇七年から一一一〇年の間に男性黒歯が始まり、公家社会ではその後、中世を経て近世まで、その風を維持し、その間に上級武士の黒歯風俗が分化した」ということである。

第5節　上代のお歯黒

奈良時代には、古事記（記）、風土記、日本書紀（紀）が撰上され、漢詩や歌集の懐風藻と万葉集が完成した。これらの歴史書や詩歌集には、奈良時代の黒歯に関係す

る記載はなかったし、正倉院の御物にも黒歯道具が残されているという話も聞いていないので、この時代の黒歯を論じる術はなかった。ところが、「古墳時代の人骨にお歯黒に類した染め方があった」ことを知った。

1・上代のお歯黒資料

飛鳥時代の黒歯風習は、江戸時代の二・三の書の中にみられた。一つは「近江朝のとき、お歯黒の禁止令が出されたが、それ以後になると、男女とも歯を染めるようになった」とあり、また「鉄漿付けは聖徳太子より始まる」ならびに「風土記に、民間人と区別するため、仕官している本人、彼の宗族、子姪、家来の棟領、党目が皆、烏梅子を鉄漿水に浸して歯を染めた。女子は良賤の区別なく嫁になると歯を黒めた」という記載があった。

大和時代の黒歯について、記・応神の条に、木幡の道で出会った乙女の歯並みを「志比比斯那須（椎菱如す）」と記されており、志比比斯が白歯か黒歯かが論議の対象になっている。

2・椎菱はお歯黒か

記の志比比斯那須の一文は、一般的には「歯並びは椎や菱の実のように真っ白で」と理解されているが、江戸時代、岩瀬百樹が「歯は椎菱の如き光沢なりとて、黒歯したる艶やかな歯を椎菱に例えて賞美給ひたるにあらざるや」と主張した。それ以降、椎や菱の実にタンニンが含まれていることを理由に、岩瀬説を支持する現代版の著書も見受けられる。

以下、『志比比斯那須』について私見を述べる。

志比比斯那須は“椎菱如す”のほかに、“椎菱為す”や“椎菱成す”と解釈することができる。如すは“…のようである”と解釈され、為すは“…のようにする”、成すは“…のように成る”の意味である。

角度を変えて椎菱の色について述べる。

われわれ現代人は、リンゴは赤、ブドウは紫のように、果実や木の実の色を果肉の色ではなく外皮の色で現わす事が多い。したがって、“如す”であっても、「椎菱の外皮のように黒い」と受けとることができる。

上代の人たちでも、白い歯を黒い染料で覆った状態が、椎菱の白い果肉を黒い外皮が覆っているのに共通すると思ったのではないか。この場合には、“椎菱成す”と現わすのが妥当である。また、白い歯を黒く染めるのであるならば、“椎菱為す”と表現するのが適切であろう。

このように、椎菱の色が果肉か外皮か、“那須”が如す、成す、為すのいずれであるかを決定できる資料はないが、那須の解釈がどれであっても、外皮説で説明できるので、

タンニン含有説や岩瀬説とは異なった立場から、「記の椎菱は黒歯である」と主張する次第である。

3・日向人と大和王朝

記の椎菱は、五世紀初頭の応神天皇の時である。その後の黒歯の資料は、飛鳥時代初めの聖徳太子に至る二〇〇年間は不在だったので、状況証拠を探すことにする。状況証拠を求めるうえの指針として仮説をたてる。

「文化は過去から未来へ向けて遺伝するから、次節で述べる黒歯国の風が南九州へ伝播し、応神期の椎菱のように大和王朝初期のころまでに広まり、飛鳥時代まで伝承された」と。

この仮説に従って、隼人についての情報を記紀から拾ってみる。ここでいう日向は“ひむか”と呼ばれたころを指す。当時、大隅、薩摩は日向から分国されておらず、南九州一帯が日に向かうところ、日向であった。

先述の椎菱の乙女は応神妃の矢河枝媛であり、彼女は未婚のとき歯を染めていたので、当時は成人表示に歯染めしたことが窺える。彼女とは別に帝は日向の泉長媛を妃としていた。媛は薩摩の出水が出自とされている。

仁徳天皇もまた、日向の諸県一族の娘・髪長媛を妃とした。諸県は現在も宮崎県南部に所在する。仁徳帝と髪長妃の息女・若日下部王が雄略大皇の后になった。

中村明蔵は「五世紀ごろから、日向諸県君の仲介によって大隅隼人の畿内移住が始まり、大和王朝との政治同盟を結んだとみられる」と述べている。

したがって、南九州勢力は大和朝に大きな影響力をもっていたことが窺われるので、日向の習俗が伝播した可能性を考える必要があろう。その一つに、黒歯風習があったのではなかろうか。女王、王妃の化粧を侍女や庶民が模倣することは、しばしば、みられる現象である。

五世紀から七世紀にかけて、紀の履中、清寧、敏達の条に隼人の名が登場した。飛鳥時代にも紀・持統の条に、「隼人の首領が部下を引き率れて、天武天皇の喪に伏した」ことが記されていた。

これまでに述べた事柄は、大和朝から飛鳥朝にかけて隼人が朝廷の側近くに仕えていたことを示しているので、お歯黒も含めた南方文化の伝播・踏襲が想定され、前述した飛鳥時代の黒歯に連動した可能性が窺える。

4・黒歯禁止令と烏梅子

前述の資料では、黒歯は飛鳥時代初頭の聖徳太子より始まるとされ、六七〇年ごろに黒歯禁止令が出された。

聖徳太子のころに黒歯風習がなければ、禁令を発する必要はないから、この二つは相関し、禁令が出るということは、黒歯がかなり流行していたとも考えられる。

近江朝以降に黒歯が復活したと資料はいう。黒歯が隼人の風習だったことを前提にすると、壬申の乱は近江朝と大海人皇子の争いで、隼人は大海人方だった。禁令の裏には隼人が敵方だったことが反映したのかも知れない。だから、天武の時代に黒歯が復活したのではないか。

烏梅子で歯染めした一統のことである。

この一統は、先に触れた天武天皇の喪に伏した隼人ではないかと、ふと思った。この一統の長は仕官しており、民間人と区別して歯を染めたとされているので、特殊な役割をもった集団、例えば、隼人は宮門の守備や行幸の護衛の役割をもった部族だった。したがって、この黒歯は部族あるいは職種の表示を目的にしたものであろう。この部族内では、子族、棟梁、頭目が歯を染めていたのは身分標識といえるし、女子は嫁ぐと歯を染めたのは既婚女性表示を意味する。

また、彼らは鉄漿に浸し烏梅子で染めたという。これまで中世、平安と溯ってきた途上には、黒歯用色素は出てこなかった。やっと、色素名に行き当たった。烏梅子はウバイシと読むのだろう。"ウ"は五の読みだから、五倍子に違いない。梅の字は漢和大辞典にさえない。その傍(つくり)の音は本来「ふっくらと膨らんだ蕾」の意味があり、ヌルデの葉の耳朶様の瘤に由来して梅を当てたのだろう。フシの表記としては、五倍子より烏梅子の方が似つかわしい。また、鉄媒染もすでに利用されていたことも示されていた。

第5節では、五世紀初頭のころの椎菱から始めて飛鳥朝までの黒歯の歴史を考察してきたが、奈良時代を経て、醍醐天皇あるいは倭名抄に至る間は、黒歯風習の資料はまったく見当たらなかった。しかし、倭名抄にハクロメが記載されていたので、奈良時代には下火になったかもしれないが、飛鳥時代以降も命脈をつなぎ、平安中期ごろまでに復活したのではなかろうか。

奈良時代の事情について当て推量する。

この時代は藤原氏台頭の時代であった。鎌足の子は右大臣不比等、その娘・宮子は聖武天皇の母であり、宮子の異母妹・光明子は聖武帝の后となった。また、鎌足は近江律令制定の中心人物であり、近江朝は黒歯禁止令を公布した。この後は妄想である。鎌足の孫である宮子や光明皇后は祖父の意志を体して白歯を通したであろう。その結果、側近の女官や上層階級の子女も歯染めを控えたのではなかろうか。

第6節　黒歯国

前節で述べたように、わが国本土の黒歯風習は五世紀初頭まで溯る可能性が生れた。五世紀以前については、魏志倭人伝（倭人伝）に三世紀中ごろの邪馬台国とともに黒歯国が記載されている。他方、化粧史を記した現代の成書にも、お歯黒の項に黒歯国が紹介されている。

1・黒歯とお歯黒

黒歯国は倭人伝に「去女王四千餘里、又有裸国黒歯国、復在其東南船行一年可至」と記述されている。倭人伝以外にも、呂氏春秋、山海経(せんがいきょう)、後漢書ならびに文選に黒歯国が記載されていた。

山海経には「海外東北有黒歯国其俗婦人歯悉黒」、文選では「黒歯国在東海中其俗以草染歯」と記していた。後漢書と呂氏春秋の記載は東方に黒歯国があるという簡潔な内容であった。

以上のような中国文書に記載された黒歯国の黒歯が、お歯黒だったかどうかについて考察する。

江戸時代の書の一つに、黒歯の文字だけで判断することを戒めていた。確かに「黒歯国の黒歯はお歯黒である」と短絡した解釈は問題がある。黒歯だけでは意図的に染めたものか、自然に染まったものかは不明である。

これについては、文選に以草染歯と記載されている。"以"には用いるの意味があるから草を用いて意図的に歯を染めたと推察され、山海経には其俗とある。風俗は意図的な行為であるから、両資料を併せると「黒歯国の女性は意図的に歯を黒く染めた」と解釈できる。

2・黒歯国の比定

邪馬台国の比定に当たって、九州説と畿内説など諸説紛々である。黒歯国については、倭人伝の記述を素直にみれば、徳川時代に発見された小笠原諸島へ行ってしまうから、到底、成立する話ではない。

前節でも触れたが、上代では南九州一帯が日向、ひむかの地だった。東は"ひむかし"であり、女王国を訪問していない魏使は北九州の倭人から、その先の話を聞いただけであるから、倭人が"ひむか"といったのを"ひむかし"と受けとってしまったのではないか。そのことはさておいて、山海経、文選の記述を併せると、黒歯国は東シナ海の洋上に所在する南西諸島の島ということになる。

幸い、一書に黒歯国所在を示す地図があった。明代の広輿図に所載されている東南海夷図に黒歯の文字が認められた。この地図では、福建北東の東海洋上に琉球があ

り、朝鮮半島の南東洋上に四つの島が連なっていた。一番西側に肥前に該当する島、次いで肥前以外の九州と思われる島があった。琉球と肥前相当の島の中間に黒歯と書かれていたので、黒歯国は現在の大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島のいずれかに当る。

角度を変えて、黒歯国の所在を確かめたい。

文選に黒歯国の女性は草で黒く染めるとある。この草は、植物全般を指しているから、フシやビンロウも草の一種である。また次節で述べるが、東南アジアには、ビンロウジを咀嚼する風習があるので、この草はビンロウ樹と思われる。自生ビンロウの北限は奄美である。先に比定した黒歯国の所在地のうち、トカラ列島や大隅諸島は消去できるので、黒歯国を奄美諸島と比定できる。

次にお歯黒の歴史が、どこまで遡れるのだろうか。

黒歯国の歴史は倭人伝より古い書にもみられた。後漢書、呂氏春秋、さらに古い前四世紀に編まれた山海経にも認められたので、黒歯国は遅くても前四世紀ごろには中国に知られていたことになる。だから、お歯黒風習の歴史は前四世紀ごろには始まっていたと推察される。

3・お歯黒風習の日本本土上陸

前項にて黒歯国の所在地を比定し、その国の風習がお歯黒であることを推定できたので、わが国におけるお歯黒風習は日本本土で自生したものではなく、黒歯国の風習が南九州を経て日本本土に渡来したと憶測した。

しかし、南九州には、お歯黒の証拠は残っていない。例えば、四～六世紀の薩摩半島南部にある成川遺跡から、埋葬された二五〇の遺体が出土したが、黒歯の報告はない。したがって、証拠不在の理由を考えたい。

成川の遺体は四～六世紀、すなわち古墳時代のものである。前節で古墳時代の遺体に、お歯黒様の塗り方が見られたことを述べた。この報告者は黒歯の心証があったから黒歯様と表現したはずでり、古墳時代の黒歯風習を暗示したのであろう。

歯に塗るタンニンは、長い年月の間に退色する宿命にある。前出の黒歯様の塗り方が観察されたのは、古墳時代のもので、色が消える寸前の状態だったと推察される。したがって、成川遺跡の遺体に黒歯が観察されなかったが、南九州に黒歯風習がなかったとはいえない。

このことに関して、証拠物件が消滅している現状では、状況証拠から推論するしかない。状況証拠として、奄美地方も含めた南西諸島（南島）と南九州の交流に焦点を当てる。

倭人伝の黒歯国記載は魏使が北九州の倭人に聞いた話だから、三世紀ごろの九州と黒歯国との間で交流があった証拠である。また、中村明蔵は隋書を引用して、「沖縄の婦人が入墨をしていることと、倭人伝の黥面文身の北九州習俗と相似する」と指摘している。さらに、コノハナサクヤ媛は産屋に火を放って出産したという。南島にも、出産のとき産屋を暖める風習があり、両者の風俗の類似が認められる。

風俗、風習とは別に中村は「南九州と南島で出土した縄文から弥生時代にかけての土器の様式が類似し、弥生時代の鹿児島県高橋貝塚から南島産の貝殻で作った装身用の貝輪が多量に出土している」ことから両者の文化交流を示唆している。

これらのことは、縄文から三世紀に至る時代に、九州本土と南島間で文化的な交流があったことを示している。かような文化交流の証拠は、お歯黒風習の伝播の可能性を思わせるので、南九州における黒歯風習の有無については、前述の“文化は遺伝する”という視点から有の肩を持ちたい。

南九州にお歯黒風習が存在していたことを前提にして、日本本土への波及について話を進める。

この時期は弥生から古墳時代前期のことと思われるから、記紀神話に頼らざるを得ない。だが、この神話を鵜呑みにするつもりはない。

日向三代から神武東征に続く話は、半島から渡来した弥生人一派（天孫族）が九州で縄文人（大山祇系）や海人族（綿津見系）と相争ったり婚姻を結んだりした歴史が日向三代に綴られ、神武東征は、農耕可能な地（瑞穂国）を求めて東漸した弥生人が大和王朝を樹立したことを物語ったのだろう。

日向三代のニニギはコノハナサクヤを娶って、薩摩半島西部東シナ海に面した阿多で、狩猟部族と手を握って勢力を培った弥生人一派の話であろうと推量した。

次いで、海幸山幸で知られるホデリとホオリの争いの物語は、阿多隼人と抗争があったことを示唆している。このときホオリに味方した綿津見神は大隅隼人の長であろう。阿多隼人の祖とされている海幸は漁労部族、山幸は狩猟部族を代表するような名前である。

ホオリは綿津見神の娘トヨタマ、ウガヤフキアエズも彼女の妹・タマヨリを妻とした。この段は、大和朝の祖たちが漁撈部族と同盟し、彼らと血縁関係を結んだ話である。

記紀では、コノハナサクヤは産屋に火を放って出産し、トヨタマは出産に及んで鰐に化したという。これらの話は南方系の物語であるから、当時の南九州の習俗、文化は南方由来の色彩が強いように窺われるので、黒歯風習

も到来していた可能性が高い。

話はとぶが、「かっては、九州山地に水銀の鉱床があった」ことを週刊誌でみた。また、紀にも日向国は朱砂を献上したと記されていたので、日向は当時の貴重品・朱の産地だったと思われる。

日向が水銀の産地だったとすると、海幸山幸の争いの元は鈎ではなく、水銀の利権争いではなかったかと思えてくる。朱の交易権を握っていた海幸が採掘権も欲しくなり争いとなった。戦いに敗れた海幸は顔や掌に赭土を塗って恭順を誓ったとされている。

赭土は廉価な赤色顔料だから、海幸が朱に変えて赭土を用いたのは、朱の交易権を譲ったことを意味しないかと考えたのである。このように設定すると、稲作不適な日向へ進出したニニギが、採掘権をもっている大山祇部族と同盟した意味が理解できる。

記紀の神武東征の話に移る。ウガヤフキアエズの息・カムヤマトイワレヒコは、豊葦原瑞穂国を目指し、大和橿原で即位し神武天皇となった。彼が日向在住のころアヒラ媛と結ばれた。アヒラは現在も鹿児島県に姶良や吾平の名で残っている。

神武東征の表の理由は瑞穂国の平定とされているが、意外と水銀鉱床が痩せ、風水害や火山の噴火があったりして、生活基盤が揺らぎ始めたため、シラス台地の多い日向から稲作可能な瑞穂国へ脱出を計ったのではなかろうか。日向を出るとき、婦女子も一緒に船出したはずである。

同行した婦女たちの歯は黒かっただろう。そして、彼女たちの風習もまた畿内に持ち込まれ、やがて、椎菱の乙女が記・応神の条に登場することになる。日向出自の泉長媛や髪長媛も歯を染めていたに相違ない。

なお、神武天皇は記紀の歴年だと縄文人になるので、神武東征は史実ではない。後の王朝が祖先の東漸物語を神武神話に脚色したのだろう。

[参考文献]

村沢博人、津田紀代、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九

天皇摂関御影、絵巻、徳川美術館、一九九三

病草子、世界美術全集、平凡社、一九五七

津田紀代、化粧の文化史、日本化学会編、お化粧と科学、大日本図書、一九八八

倉野憲司校注、古事記、岩波文庫、一九九五

岩瀬百樹、歴世女装考、一八四七

坂本太郎ら校注、日本書紀一～五、岩波文庫、一九九四～九五

中村明蔵、隼人の古代史、平凡社新書、二〇〇一

千田稔、邪馬台国と近代日本、NHKブック、二〇〇〇

小倉謙監、植物の事典、東京出版、一九九七

司馬遼太郎、街道をゆく40、台湾紀行、朝日新聞社、一九七五

水銀鉱脈が明かす邪馬国のありか、週刊朝日、一九九一、三月八日版

化粧のルーツを訪ねて（三）

第一話　お歯黒のルーツ探訪記（3）

鈴木　守

第7節　ビンロウジ咀嚼風習

お歯黒の起源しとて、ビンロウジを咀嚼する風習（咀嚼風習）とする文献があり、この節では、咀嚼風習について考えたい。

1・ビンロウ（檳榔）とビロウ（蒲葵）

ビンロウをビロウと記した書がみられたので、その違いについて記しておく。

ビロウ樹は四国南部から台湾にかけて南アジアの亜熱帯に分布し、葉は屋根を葺いたり、団扇（うちわ）や編み物に利用する。宮崎県青島はビロウの大自然林で有名である。

ビンロウ樹は、東インド諸島を中心に南アジアや太平洋の島々に分布し、北限は奄美地方、小笠原諸島である。高さ4～10mの常緑樹で、果実はビンロウジという。成分はタンニンが多く、数種のアルカロイドを含む。

ビロウとビンロウは植物学的には亜種であり、名前や形も似ているから混同するのも無理がない。

枕草子などに檳榔毛（びろうげ）の車があり、記紀を繰っていくと、檳榔やビロウの別称・阿遅摩佐（アジマサ）がみられた。ビンロウの音と蒲葵の文字はみつからなかった。

2・ビンロウジ咀嚼体験とその実態

台湾へ行ったとき、烏来（ウーライ）を訪れた。烏来はかって高砂族と呼ばれていたタイヤル族の集落である。途上、檳榔と書いた紙を貼った店があったので、咀嚼風習に挑戦した。ビンロウジに白い粉がまぶしてあり、葉でくるんであった。早速、噛む。とにかく渋い。子供のころ齧ったドングリよりはるかに渋かった。我慢して噛んでいると、口の中が泡立ち涼しいような痺れるような感じがしてきた。噛み終わって吐き出すと、唾が赤く染まっていた。

司馬遼太郎は「熟していない檳榔子を二片に割り、練石灰に混ぜてキンマの葉に包んで噛み、その汁を唾液とともに吐き出す風習であり、軽い陶酔感、もしくは覚醒感が得られるといわれ、一種のドラッグともいえる」と記し、「台湾では、今の女性は嗜まないが、肉体労働者は普通に用いるし、ヤクザ社会では一種のシンボルになっているが、インテリ階級の人たちは嫌悪しているようである」ともいう。

バリ島へ行ったとき、リゾート・ホテルのフロント・ボーイに咀嚼風習のことを尋ねた。彼はいやな顔をしたが、バリにはビンロウ樹は少なく、ビンロウジはジャワから持ってくるといっていた。ここでも若い人はおぞましい風習であると思っているに違いない。

旅行ガイドブックに「ビンロウジを噛むと、麻酔的な効果で爽快な気分になる。キンマをバリ語でバセ、インドネシア語でシリーという。お婆ちゃんたちは盛んにバセを噛む。昔は来客のときにはビンロウジセットを出してもてなした。若い人は歯を平らに削るポトン・ギギの成人式で、形式的だがビンロウジを噛む習慣がある」とあり、咀嚼行為自体もバセというようである。

バリ島では、今でも咀嚼用材料のセットを供え物にし、セット全体で一つの世界を表現し、キンマは山、ビンロウジは水田、石灰は海を意味しているという。

自宅近くにベトナム料理の店がある。店長はサイゴンの出身である。話を聞くと、咀嚼風習をブア・ガンビールといい、ベトナム南部には歯の黒くなった老婆が大勢いるという。

3・ビンロウジ咀嚼の科学

ビンロウジの渋み成分はタンニンで、ポリフェノールにカルボン酸が結合した物質群の総称である。タンニンが酸化されるとき、初めは赤色を呈し、この色素が幾つか結合して黒褐色になる。赤い色素が生じるまでの反応は速やかだが、黒くなる反応は緩やかなため、子供のころに咀嚼を始めると年頃になって黒さが目立つようになる。この反応は鉄を触媒にすると速やかに黒くなる。

咀嚼風習では、ビンロウジに次いで大切なのが石灰である。石灰はタンニン酸カルシウムを作り、渋みを緩和する。また、石灰は酸と反応して二酸化炭素を放出し、清涼感を与える。

ビンロウジ咀嚼によって陶酔感や覚醒感、爽快感が得

られ一種のドラッグ効果をもたらす。この作用はビンロウジに含まれるアルカロイドによる。さらにアルカロイドには嗜癖性もあるので慣習化を導いたのだろう。

4・お歯黒と風習の起源仮説

咀嚼風習成立の過程について考えてみよう。

ビンロウ樹が自生する東南アジアに、人類が始めて進出したころ、彼らは食料確保の一環として落下したビンロウジを拾って食べたであろう。渋柿同様、熟果は渋くなかった。ビンロウジを食餌としているうちに、陶酔感や爽快感に気づき、渋いがより効果の高い青果を咀嚼するようになった。やがて、石灰が渋みを緩和させることを知り、石灰を併用する咀嚼行為が成立した。石灰を併用すると、清涼感を与えるので慣習化の一助となった。以上が、咀嚼風習成立の仮説である。

咀嚼風習からお歯黒が分化する過程について、樋口説がある。彼の説の要点を述べると、「子供のころから噛み始めると、適齢期になると歯が黒くなってくる。ところが裕福な人ほど経済的、時間的な余裕があるため、噛む機会が増えて早く歯が黒くなる。やがて、これが歯の黒い人ほど身分が高いことになって黒歯が上流階級の象徴になった。そこに美意識を見出した部族はさらに黒く美しい歯にするために、ヤシの実の汁と鉄分で黒い染料をつくって歯を染めた」というのである。

私見を差し挟むと、部族民たちに敬われていた長老も真っ黒な歯の持ち主だったであろう。かように長老や上流階級の人たちは部族民にとって尊崇や羨望あるいは憧憬する人たちである。このような情念はしばしば、美意識を誘導するので、早く歯を黒くしたいと願望する人たちが現われ、おりしも、鉄媒染の方法が工案されたため、意図的に速やかに歯を染める行為、お歯黒が始まったと考えたのである。

お歯黒風習成立の時期を解明することは、この節の主題である。咀嚼だけならば単なる嗜好風習に過ぎない。意図的に歯を染める行為ならばお歯黒ということができる。したがって、鉄媒染によって染めた黒歯は明らかにお歯黒である。では、鉄媒染を初めた時代を検討してみよう。鉄使用の古い証拠としては、殷のとき、隕石の鉄で武器を作り、春秋時代に鉄製の農機具が作られていたことが知られている。これらの証拠から鉄媒染による歯染め発祥年代を、一般人が鉄を使った春秋時代、前5～前4世紀ごろに始まったと考えた。この時期は山海経の黒歯国の直前であり、一応の辻褄が合う推察であると思っている。

第8節　抜歯習俗

お歯黒とは別に歯の化粧として、抜歯、削歯あるいは研歯する風俗がある。化粧史を扱かった書には、古代ローマの貴婦人は抜歯して装飾的な入歯を使用したと記され、わが国では縄文人に抜歯風習があったことが記載されている。現在でも、アフリカ、南アジア、オセアニアの各地に広く分布し、古くは中国でも盛んに行われていたという。この抜歯風習は、成人や既婚女性の標識とされていたといわれているから、お歯黒との関連を考え、この節で取り挙げることにした。

1・抜歯習俗の実態

わが国の抜歯は、縄文（一万年前～二千年前）から弥生時代（紀元前後三百年）にかけての風俗である。縄文人たちはなぜ抜歯したか、その理由について触れる。

現在の抜歯でも、その目的はいろいろあり、成人、婚姻ならびに服喪の通過儀礼に際して行う民族が多いといわれている。

縄文人が抜歯した目的は、成人の資格を得るために肉体的な試練として行われたとする成人抜歯説を支持する人が多い。しかし、出土した人骨の抜歯が1、2本の例は少なく、普通は4、5本、多いものは14本という例もあるため、一度に抜くのではなく、成人になった時に上顎犬歯、婚姻に際して下顎犬歯と切歯、喪に服す時に第一小臼歯を除去したといわれている。

抜歯習俗創始の時期は不明だが、後期旧石器時代の沖縄港川遺跡から出土した一万八千年前の人骨に下顎中切歯が抜かれ、これが現在、最古の抜歯例である。

わが国本土の抜歯では、縄文前期の熊本轟貝塚などで発掘された人骨にみられるものが最も古く、次いで縄文中期の岡山県や仙台湾周辺の貝塚で発見されている。

抜歯の形跡は沿岸部の貝塚跡に多くみられ、内陸部の洞穴から発見された人骨には抜歯の形跡がないので、抜歯習俗は海岸部で始まったとみられている。

わが国の抜歯習慣については、南方の風習が伝播したとする渡来説と日本本土にて独自に発生したという自生説があり、自生説よりも渡来説の方が優勢である。

縄文時代の抜歯では、対象となる歯は中・側切歯、犬歯および第一小臼歯である。

縄文抜歯様式を大別すると、切歯だけを抜くⅠ群、犬歯だけのⅡ群、切歯と犬歯を抜去するⅢ群、犬歯と第一小臼歯のⅣ群、ならびに切歯、犬歯、第一小臼歯を除去するⅤ群である。

沖縄港川人や西日本の前・中期の貝塚の人骨はⅠ群である。したがって、西日本における縄文前・中期の抜歯は港川人の抜歯様式を踏襲している可能性があるので、南方渡来説の一つの証拠とされている。ところが、縄文晩期になると、西日本の抜歯様式はⅢ、Ⅳ、Ⅴ型となったが、同時代の東日本ではⅡ型であった。かように、抜歯様式には、時代的変遷と地域差が認められた。

弥生時代に入ると、弥生前期の山口県土井ヶ浜遺跡から90体の人骨が出土し、それらの七割以上に抜歯が認められた。弥生人渡来初期の集団は男性が主体で、移住先の縄文女性を娶ったので、女性文化である抜歯風習が弥生時代まで連続したと考えられている。

また、縄文人と渡来人の混血集団が支配するようになった北九州、山口地方および熊本平野では、弥生前期の終りごろまでに抜歯風習は姿を消したが、長崎の沿岸部と離島では、弥生前期末に始まり、後期まで存続していた。この時期まで抜歯習慣が存続したのは、西北九州、南関東、東北地方であった。

弥生末期の松浦半島大友遺跡で出土した人骨に抜歯の跡がみられ、この遺跡の住民は漁労生活者だった。

その後の抜歯風習を証拠立てる遺跡は発見されていないが、長崎、大分両県の閉鎖的な水上生活者の間では成女式の一環として抜歯風習が近代まで残されていた。

以上の証拠から、抜歯風習は混血弥生人とは別に、西日本に定住した海洋系の縄文人、すなわち漁労生活者との結びつきが考えられている。抜歯風習最盛期には、非漁労生活集団にも普及したが、最後までこれを守ったのは、縄文的体質を維持し続けた水上生活者だった。

2・縄文抜歯の成立を考える

すでに述べたように、縄文抜歯の目的は成人の資格を得るための肉体的試練とされているが、効果的な局所麻酔剤がなかった石器時代に激しい痛苦を我慢してまで何故抜歯したのかというのが率直な疑問である。

縄文抜歯成立について、西日本や東日本で独自に発生したとする自生説もあるが、縄文前期の轟遺跡の遺体は港川人と同じ抜歯様式であるなどの理由で渡来説の方が有力であるといわれているので、渡来説支持の立場で考察する。

抜歯習俗自体が南方海洋民族の風習であるから、抜歯行為は南方海洋部族の間で発生したと考えるのが妥当であろう。したがって、「南方海洋部族で発祥した抜歯習俗が沖縄に伝播し、南島を経て南九州に上陸し、さらに西日本、東日本へと波及して行った」という仮説を立てた。ところが、奄美から南九州の地域には抜歯の証拠が発見されていないので、抜歯の証拠が消滅した理由を論

じて、渡来説のサポートを試みることにしたい。

証拠消滅の条件を挙げると、南九州は火山地帯だから、酸性土壌が多く骨や歯も溶けて証拠が残りにくいこともあるが、火山噴火が証拠を消滅させたのではなかろうか。また、台風銀座の地方であるから風水害による紛失もあっただろう。噴火の歴史だが、六四五〇年前のころに鬼界カルデラ、四六五〇年前ごろに薩摩半島南端の池田カルデラと開聞岳が噴火している。これらの噴火はそれぞれ縄文早期と前期に相当する。

最も古い縄文抜歯例は前期の轟貝塚だから、鬼界カルデラ噴火は無関係にみえるが、縄文早期に抜歯が行われていれば、その当時の証拠は消えてしまったはずである。この噴火は海底火山だったから、奄美諸島、大隅諸島、薩摩半島の東シナ海に面する海岸地帯の住民に多大の被害を与えただろう。ましてや、縄文抜歯は海岸近くに生活基盤をおいた海洋生活者の風俗だったことを思えば、津波によって彼らの生活の場は完全に侵され、さらに先祖の遺跡も海中に流されてしまったであろうことを考慮しなければならない。だとすると、港川人と同様、後期旧石器時代末に、奄美から薩摩にかけての地域に抜歯習俗が存在していた可能性さえ浮かんでくる。

いずれにせよ、南九州や南島の抜歯の証拠は火山噴火や風水害で多くが消滅し、その災を免れた証拠も酸性土壌の中に溶け去ったことを強調したい。証拠消滅を前提にすると、間接的な状況証拠から立論するしかない。

間接的な証拠としては、轟貝塚などで出土した土器の形式は、同時代の南島のものと類似していることから南島と南九州間の文化交流を言及している論文もあるので、文化交流の存在は、抜歯風習の伝播を暗示させる傍証といえよう。

3・弥生抜歯とお歯黒

抜歯習俗は縄文晩期に最盛期を迎えたが、弥生時代に入ると衰退の道を歩み始め、玄海灘に面した福岡・山口地方では弥生前期末までに消滅したが、長崎地方では弥生前期から始まり、後期まで行われていたことはすでに述べた。

我々一般人は、弥生時代に生活した人たちを一括して弥生人と認識しているが、我々のいう弥生人も地域によって骨格が相違していた。

九州周辺に居住した弥生人の範囲でも、地域ごとに骨格の特徴がみられた。骨格の特徴を分類すると、長身、高額のA型、低身、低額のB型、低身、短頭のC型があり、A型は福岡、佐賀、熊本平野部、響灘沿岸、B型は

長崎半島と離島、天草、松浦半島、C型は薩摩半島、種子島、屋久島に分布した。

ここでは、骨格の分類に基づいて論を進めたいと思う。

A型の弥生人は長身の渡来民と縄文人の混血であり、BとC型は縄文人の形質を受け継いでいるとみられている。渡来人について、縄文後期から弥生前期の時代は気候の寒冷化に伴って朝鮮半島の人たちが、ある程度の規模で集団的に数回にわたって移住してきた。その最もピークだったのが、ほぼ前4～前3世紀前後のころといわれている。

記紀神話に登場する主人公たちは、弥生時代に渡ってきた渡来民であり、A型弥生人の祖であろう。したがって、弥生時代の情況は記紀神話に頼ることにする。

スサノオのヤマタノオロチ退治の神話は、製鉄技術をもった渡来人が土着部族から食料と女を強奪する話であろうから、クシナダ媛は出雲地方のB型骨格人であり、抜歯していたのではないか。一方、南九州のコノハナサクヤ媛をはじめ、日向三代の后たちは南方系の資質をもったC型骨格人で歯を黒く染めていたのではないかなどと空想した。

記紀神話で浮かんだ空想を別の角度からみて、歯の化粧文化へつなげたいと思う。

先述したように、朝鮮半島からの渡来民には抜歯風習がなかったという。この渡来民と原住民で混血したのがA型骨格の弥生人に相当し、弥生中期ごろには抜歯しなくなった。弥生時代を通じて抜歯習俗を維持したのは長崎のB型弥生人たちだったとみられている。C型の弥生人は、薩摩や大隅諸島の住民である。これらの地から弥生人の遺骨は出土しているが、抜歯の記載はない。縄文時代の証拠は自然災害で消滅したと先に考察した。では、C型弥生人には抜歯習俗がなかったのだろうか。

南島の歯の化粧風習を振り返ると、沖縄には後期旧石器時代の抜歯遺体があった。前四世紀、縄文晩期ごろには山海経に黒歯国があり、倭人伝の黒歯国は弥生後期、3世紀の話である。したがって、縄文晩期ごろの南島では、痛苦を伴う既婚者表示の抜歯から痛みのない黒歯に置き変わっていた可能性がある。

婚姻抜歯については、抜歯による口中の空洞化が既婚女性を演出したという説もある。事実、先述したⅢ群とV群の抜歯様式では、口腔内は空洞化してトンネルのように見える。同様に、黒歯でも視覚的に口腔内の空洞化を演出できるので、既婚女性標識が抜歯から黒歯へ転化するのに貢献したかもしれない。おそらく、空洞化と無痛の両方が共同して、抜歯習俗を黒歯風俗に置換させた

と考えるのが妥当であるように思える。

南島と日本本土交流の接点にある薩摩半島は、南島の血を引く縄文的な特質をもったC型弥生人の生活圏だったから、A型弥生人より先に、縄文晩期ごろから抜歯に変えて南島文化の黒歯風習を受入れ始めたのではなかろうか。前節でも南島との文化交流の傍証を取上げたが、このことは抜歯も南方から伝播した傍証になろう。

弥生時代の南九州には、抜歯や黒歯を実証する資料はなかった。このことは抜歯風習がなかったことの証拠になるが、黒歯風習がなかったことにはならない。というのは、抜歯の形跡は後々まで残るが、黒歯の染料は化学的に退色する。したがって、証拠となる黒色染料は分解してしまった確率が高い。よほどの僥倖がない限り、弥生時代の証拠は残っていないだろう。

黒歯の証拠を探すこと自体が非論理的に近いと判断したので、弥生時代の南九州では黒歯風習が始まっていたことを前提にすると、コノハナサクヤ媛はお歯黒をしていたことになる。地位ある女性が歯を染めていたから、大和王朝の祖となる一族の既婚女性の間に黒歯風習が広がり、抜歯から黒歯に移行したという道筋が想像される。何しろ、黒歯は無痛で既婚女性を演出できるため、その転化は速やかに進行しただろう。

抜歯習俗衰退の理由を弥生時代の渡来民による影響とする説は既述した。この説を否定するつもりはないが、歯の化粧文化が女性習俗だったことを加味すると、半島渡来民説に加えて、先に論じたように抜歯から黒歯へ移行したことが抜歯風習の衰退を促し、弥生時代中期には、抜歯に変わって黒歯風習が盛んになり始めたのではないかと考えたのである。

あとがき

現在でも、バリ島では成人式にお歯黒のルーツとされるビンロウジ咀嚼と研歯を行うという。これは成人表示を介して抜歯とお歯黒が関連していることを示唆しているので、抜歯とお歯黒を絡めて歯の化粧文化史を遡行することとした。

この探訪記を歴史として捉えると、ビンロウジ咀嚼の前身であるビンロウジ摂取と抜歯は初期ホモ・サピエンスの後期旧石器時代から始まったと想定し、ビンロウジ摂取から咀嚼風習が生じ、鉄媒染によるお歯黒風習が分化したのは、前5～前4世紀ごろと推定した。この風習は奄美に比定した黒歯国を経て、弥生時代に南九州に波及したと考察した。

他方、抜歯習俗は現在、最古の抜歯例が出土した沖縄から南島を経て、おそらく縄文早期に南九州へ伝播し、抜歯習俗の最盛期を迎えたが、弥生時代に入ると衰退し始めた。既婚女性表示目的の抜歯習俗が廃れたのは、同じ目的のお歯黒が伝播してきたため、痛苦を伴わない黒歯に転化したと考えた。記紀神話に相当する弥生時代は抜歯習俗衰亡と黒歯風習台頭の時代であった。

史料不在の4世紀を経て、大和王朝期に入ると、記・応神の項に、椎菱を如した矢河枝媛のほかに日向出自の泉長媛や髪長媛が登場した。日向は黒歯風習の先進地であるから、彼女たちも歯を染めていたと思われる。矢河枝媛のお歯黒は成人表示の化粧を示唆していた。

その後も黒歯風習は大和王朝と同盟を結んだ隼人族などによって飛鳥時代に引き継がれたが、近江朝のとき、黒歯禁止令が出されたが、天武、持統帝のころには復活し、風土記に黒歯の一統が記載されていた。

奈良時代の黒歯に関する史料はまったく見当たらなかったが、この時代、藤原氏が台頭した時代であり、光明皇后などが近江令の中心人物・祖父鎌足の意思を継いで白歯を通したのではなかろうか。そのため、この時代の黒歯風習が低調になったのかもしれない。しかし、平安時代に至ると、ハグロメと呼ばれる女性風習となり、その末期には男性社会にもカネツケが波及した。

古代から中世に移っても男女のお歯黒風俗は維持され、江戸時代には武家の黒歯は滅亡したが、公家社会に残された。女性のお歯黒は庶民層にまで普及し、江戸中期から後期にかけてお歯黒風俗の最盛期であった。

しかし、明治初頭に黒歯禁止令が交付されて以来、この風習は衰亡の道を歩き、昭和末期まで残存した。平成の今日、日常的なお歯黒風習は終焉し、生のお歯黒ではないが、民俗行事と芸能社会に黒歯が維持されるのみとなった。以上が歯の化粧文化の歴史である。

［参考文献］

樋口清之、化粧の文化史、国際商業、一九八二
牧野富太郎、原色牧野和漢薬大図鑑、北隆館、一九八八
司馬遼太郎、街道をゆく・台湾紀行、朝日新聞社、一九九四
佐藤明美、アジア・カルチャー・ガイド③バリ島、トラベルジャーナル、一九九四
村沢博人、顔の文化史、東西書房、一九九二
馬場悠男、人類の起源、集英社、一九九七
新倉健訳、絵で見る中国の歴史、原書房、一九九五
貝塚茂樹、伊藤道弘、古代中国、講談社学術文庫、二〇〇〇
池田次郎、日本の起源、講談社現代新書、一九八二
渡辺誠、縄文文化における抜歯風習の研究、古代学12巻、一九六六
埴原和郎編、日本の起源、小学館創造選書、一九八六
中村明蔵、隼人の古代史、平凡社新書、二〇〇一

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

骨董趣味から茶会まで

忠内正之

はじめに

私共夫婦は結婚五十年になる。いま時金婚だと言っても決して誇らしい事では無いが節目である事は確かである。また自分達なりの苦労を重ねて来た。加えて私の喜寿とも重なった。そこで記念に夫婦で茶会を催すことにした。二〇〇七年秋のことである。

夫婦での茶会は今回で三度目である。前二回の茶会の様子は夫々投稿させて戴いている。

この年の秋は寒さが一時に重なって訪れたため、紅葉が一段と鮮やかであった。おこがましくも金風茶会と勝手に名付けさせてもらった。

顧り見ると無類の骨董好きから茶道具収集に転換した。その間よく妻との調和に努力して今日まで来たものである。これまでの経緯を反芻して見たい。

骨董狂いとなる

「古い物を大切にする」と言う心得は生来の性であったが、後になってこれ程の骨董狂となるとは想像しなかった。

微禄ながら徳川の直参旗本であった我家には日本刀、掛軸、茶道具等、江戸時代の品が少し残っていた。（屋敷は奇しくも"入谷乾山"の窯跡に所在した。）少しと言うのは維新のドサクサ、震災、戦災で大半を失ったからである。残った物は優品とは言えないが家の歴史が刻まれていると考え大いに関心を持って大切にして来た。

長じて会社勤めとなり、数年間地方都市勤務となった。この間取引先経営者との交際から骨董品に目を注ぐ様になり、骨董道楽を開眼させてしまったのである。

東京へ勤務替えとなっていよいよ本格的な骨董狂になってしまった。何と言っても東京には品物も情報も豊富にある。

「古くて、美しくて、見所のある物」、この三点を満足させる物が私の求める骨董の真髄であり目標である。この気持は当時も今も変らない。

だがそうは言ってもそんなに簡単なものではないのだ。第一物を見分ける眼力が乏しい。第二に眼力があっても物が少ない。良い物はそこいらにそう簡単に転がってはいない。第三にここが一番大事なのだが、資金繰りが難かしい。優品になればなるほど高価なのである。安い値段で掘出物を求めてもそれは暁天の星の類である。

当時は未だ物によっては値上り前であったのが多少救いであったが給料も安かった。

それでも夢中だった時期は、街から街へと美術骨董店のはしご歩きをしていたのである。

秦秀雄氏のアドバイス

秦氏が「骨董玉手箱」の著書を出された前後であったからそれは昭和五十三年頃の事である。

かねて親しい間柄となっていた「K美術店」をのぞくと先客が居た。痩せて小柄だが眼光の鋭い老人であった。睨みの凄いこの老人は唯者では無いと直感した。その後K店で数回逢う内にその人は美術界で著名な秦氏と知った。

氏は私に色々話をしてくれた。アドバイスも受けた。私に対し「君は初心者の様だが、今から骨董集めを始めるのは大変だよ。値段が高くなり過ぎている。焼物を主体に集めるにしても分野が広すぎる。酒を呑むかな？酒好きならば酒器、つまり"徳利とぐい呑"集めからスタートしなさい。酒器は探せばまだ安い物がある」と教えてくれた。

奇貨居くべし、それからは酒器集めに熱中した。教わった通り当時酒器はまだ品数も多く今よりずっと値頃であった。後述するが、この時集めた酒器があとで役に立つ事になった。

かくして骨董漁りは益々佳境に入ったが、一介のサラリーマンの身とて、熱中と集中の度合が過ぎて家計を益々圧迫した。また骨董品はお茶に適さないと言う理由もあって妻は冷ややかな目で眺めていた。

色々悶着があってその後妻と話し合い、お茶道具を中心に集める方向に大転換して漸やく和解した。結果として茶道具に見立てられる物も買ったが、妻は黙認した。しかし茶道具の筋の通った物は新旧共に一段と値が張るので資金繰りは一層苦しくなった。

秦氏はそれから数年後他界された。氏については色々批判がある事はよく承知しているつもりだが、美術品に対する秀れた観賞眼と執着心は異常とも言える程徹底し

ていたと思う。逝去される少し前見舞に行った美術商「K店」の主人に向って「その後唐津のぐい呑の出物は無いかね？」と病床から質問があった由。あくなきその執念深さは鬼気迫るものがあったと、後にK店主は述懐している。

茶道具への指向

二十数年前から骨董品集めから茶道具に重点を置く様になり、妻との不和も解消する事が出来た。

先づ妻の趣味である茶道に親しむことから始めたが茶道のもつ奥深い伝統文化に魅了された。親しむ茶道の大筋は妻の属する流派に従うとしても、私は自分のオレ流による茶であり、茶道具類もわび数寄で通すことに定めた。この点妻も快く応じた。侘び茶では見立ての道具が使用可能である。見立ての道具なら堂々と骨董品から探す事が出来る。そこが付け目でもあった。

茶道具も「古くて、美しくて、見所のある物（又は伝来のある物）」を目標としたが、何分良い物は高くて手に入れ難い。眼が利かないので失敗買いがある。しかも茶道具は必要とする種類と数が驚く程多い。その様な理由から永年かかって数だけは集まったが、正に玉石混交、自分では良しと信ずる物、見たての物、ガラクタに近い物、現代物までが加わって所蔵場所に困る程になった。

茶道具の世界は骨董品の場合より更に具体的に史実を連想させるので面白かった。今度は妻を味方にしたので加速がついた。

茶道具集めでは「K美術店」の協力が大きかった。K店主は元来観賞美術が専門であった。時として然るべき茶道具が入ると、先づ私方に案内を呉れた。そして買い易い様に便宜を図ってくれた。つけ買いはもとより、（美術品の借金を残すは名誉の一つだとは言うが）、分割払い、下取り等快く応じてくれた。

この人は誠実な人柄で眼力もあって信頼が置けた、後に斯界で重きをなす人物になった。

下取りと言えば、前述の秦氏のアドバイスで求めていた〝徳利とぐい呑〟の優品を下取りしてもらって茶道具の資金繰りを賄った。値上りしていたので大いに助かった。

主な下取り分は次の通り

絵志野ぐい呑み、絵唐津筒型ぐい呑み
黄瀬戸胴紐小服茶碗、まだら唐津酒盃
古伊万里辰砂徳利、朝鮮唐津徳利

右の様な希品、珍品は今では殆んど出廻らない。また出ても頗る高価な品になっている。手離すことは辛かったが、然るべき茶道具に入れ替った訳で自身を納得させている。

かくして私と妻の茶道具集めては、二十数年の長さに亘っている。質的には必ずしも満足出来ないものの量だけは充足して来た。

妻は永年茶道を一途の趣味として取り組んで来た甲斐あってか、十数人の弟子達に囲まれる身となり、時々茶会を開くまでに至った。

金風茶会の開催

平成十九年十一月六日、紅葉のさかりの中予定通り茶会を開く事が出来た。

茶会とは抹茶をたててもてなす会である。一口で言うとこうなるが、少しでも喜んでもらえるおいしい点心（食事）を差し上げたい。七十人程度の人々を招くので機能的な設備のある場所が求められる。そこで事前に探した結果、新宿の「柿伝」にお願いする事にした。ここは立地条件はベスト。使い勝手の良い茶室と水屋がある。何と言っても料理が特別においしい。下見をして試食済である。

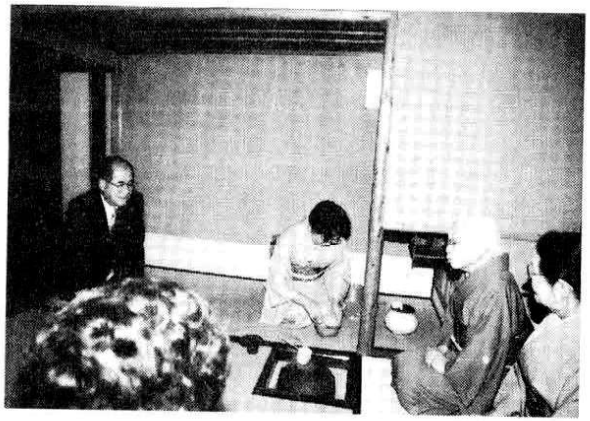
妻のお弟子さん達は私共の趣旨に賛同して、日頃の研鑽の成果を試めす良いチャンスとばかり、皆熱心に働いてくれた。

招待客は妻のお師匠さんをはじめ茶友中心で五十名、私の友人が二十名合計七十余名であった。

お陰様で好天に恵まれて茶会はスムーズに運んだ。九時に開始して三時迄に点心も終了した。会場側の手慣れた対応の良さが際立って感ぜられた。

私は濃茶席の亭主を担った。例によってお点前はベテランのお弟子さん方にお願いして、挨拶と説明に終始した。

妻は薄茶席の亭主を勤めた。



茶会の風景

茶会記

茶会の主な道具組みは次の通りである。

濃茶席　　主　忠内正之

寄付

床　小堀宗明筆「孤蓬」

本席

床　小堀遠州筆　消息

花入　須恵器

香合　藁つづみ　仁清造

釜　京釜　桐地紋　長野　裕極

水指　李朝白磁

茶入　瀬戸「よろず代」紅心宗慶銘

茶杓　船越伊予守作

茶碗　古萩

替　黒　仁土斉造

替　御本半使銘「慶雲」休々斉箱

薄茶席　　主　忠内宗正

床　鵬雲斉大宗匠筆「松寿生五彩」

脇　時代蒔絵硯箱

花入　算木手　鍋島青磁

香合　釉裏金彩　吉田美統造

釜　芦屋写亀甲紋忠三郎造

炉縁　菊桐蒔絵　近左造

水指　古伊万里　祥瑞写

薄器　玉の絵蒔絵　近左造

替　絵志野

茶杓　覚々斉作　共筒銘「紅葉狩」　不白箱

茶碗　斑唐津　紅心宗慶箱

替　古清水　松竹梅

茶会の感想

妻の茶道の先輩であるA先生から茶会の感想を寄せて下さった。

A先生の手紙より

「金風の候」とご挨拶がありました。金婚式に掛けてあると思わず、私は"体露金風"と言う禅語が大好きでしたので唯の季節のご挨拶と思っておりました。目玉は覚々斉の茶杓と斑唐津の茶碗と知らされていましたが、本当の目玉は紅心宗慶銘「万代」の茶入で"素性法師"の古今集賀歌の「万代を松にぞ君に祝いつる千戈のかげにすまんと思えば」より、金婚式を祝っての歌銘だったのですね。「金婚式茶会」おめでとうございます。

この茶入は古瀬戸の出来と言っても過言ではないでしょう。口の小さなひねり返しも美しい正にきれいさびの逸品が御家宝の裂地でこさえた仕覆に着せられ、端正な李朝初期白磁のお水指の前に置かれていました。細身でありながら折だめのしっかりした船越伊予守のお茶杓を乗せての点前座。ゆったりとした古萩の井戸型茶碗、どっしりとした仁土斉の黒楽、今日を寿ぐかの"慶雲"の御本半使、愛弟子さん方のおいしいお茶でした。

お床は思いがけなく形の整った長頸瓶の須恵器の見立て花入。同席の「還暦からの考古学者、中山先生」のご鑑定では西暦五・六百年頃朝鮮より渡来した物の由。須恵器（行基焼）は利休の頃、茶会に使用された記録が残っているとのことでした。

掛物は開炉にふさわしい上林の茶云々とある遠州の消息。遠江守任官四百年に因んでふさわしい。もう一度ゆっくりお目に掛りたいと思いました。

薄茶席では、唐津特有の土味の上に長石釉とは異った藁灰釉のしっかりかかった斑唐津の茶碗が出色でした。三ヵ月高台も約束通り、岸岳皿屋窯で一番上に置かれて焼かれたのでしょうか？目跡がありません。古くてきれいなお茶碗、本当にすごいお茶碗、ご主人様の満足そうなお顔が目に浮びます。原叟の紅葉狩のお茶杓も手にとってしっかり拝見させていただきました。曲げの凸面に削りの濃淡がありました。お謡いの紅葉狩の一節に「庭の白菊・・・・」があります。薄茶席で紅葉狩をさせていただきました。

柿伝のお点心も本当に結構でした。（後略）

以上の様な過褒を受けて感激した次第である。多分におまけを下さったものと思われるので自戒を忘れない様にしたい。

結びとして

今回の茶会の道具を補充するため、最後迄愛蔵して来た朝鮮唐津の中徳利（お預け徳利）を手離した。

この徳利との別れは今もって未練があって辛い。だが替りに入手した斑唐津の茶碗の魅力はそれを補ってあまりある程美しい。

この時点で骨董収集にピリオッドを打って完全に茶道具へ転換したのである。

骨董狂いは"死に病"とか"地獄"だとか世間でよく言われる。私の友人で何度か大病を克服してなお美術品探求に執念を燃やしている人物が居る。いや寧ろ執念で病を追佛ったと言う方が正しいかも知れない。

茶道具集めも骨董と同様であろうか？私は彼ほどの資力もまた眼力も無いが彼の気迫の一部でも貰って頑張りたいと思う。

今迄数年おきに茶会を開いて来た。次は何時、何の名目で開く事が出来るであろうか？またインパクトを与えてくれる楽しい道具に巡り会えるであろうか？夫婦揃った趣味の喜びを分かちあいながら一層精進したい。

（司馬雑感　十五）

「赤坂散歩」と「本所深川散歩」

山田嘉久

（一）「赤坂散歩」

1　紀尾井坂

紀尾井町の由来は、維新前このあたりに紀州徳川家と尾張徳川家と彦根の井伊家の屋敷があったためとはよく知られているが、今改めて「江戸切絵図」を眺めると、紀州家の跡には現在、赤坂プリンスホテルが、井伊家の跡にはホテルニューオータニが建っている。また尾張家の跡には上智大学がある。

司馬遼太郎が「街道をゆく三十三」（赤坂散歩）でこのあたりを訪ねたのは昭和六十三年秋だが、東京人というのは町名をつけるのに、しゃれた感覚を持っているのに感心している。それに反して大阪の町名にはしゃれっ気がないと柴田錬三郎に指摘されたという。

その「しゃれた」町名の紀尾井町のなかほどに都心には珍しく樹陰の多い清水谷公園がある。公園に入ると、まず「贈右大臣大久保利通公哀悼碑」と書かれた大きな碑が否応なしに目に付く。

明治十一年五月十四日朝、時の最高権力者大久保利通が石川県士族島田一郎らによって、この辺りで襲われ命を落とした。

今では信じられないことだが、この当時、政府高官に護衛をつけるという習慣がなかったという。維新までは武士であった者がボディガードに護られて、出勤するなど武士の沽券にかかわるという風潮があったのであろう。

現に四年前の明治七年には同じ場所で岩倉具視が凶漢に襲われ、岩倉は夜の壕に飛び込み危うく命拾いをしていることから、すでに大久保も狙われているという噂は内務省に入っていた。そこで大警視である川路利良に内務卿に護衛をつけよとの声があったが、川路は黙殺し

た。

川路も大久保と同じ戊辰戦争から西南の役に従軍した薩摩隼人であったからである。

ただ一人、大久保の無防備を心配したのが内務太丞千坂高雅だった。

彼は米沢藩の国家老だったが、薩長の倒幕方針に反対し佐幕論をもって藩を統一したものの、のち新政府軍に降伏。やがて大久保に見出された。彼の国家老を務めたという前歴からして、大久保や川路などのような平士とは違い「護衛」の必要性を誰よりも知っていた。

「ご注意しますように」と千坂がいうと、大久保は礼をいうように、わずかに頭を下げただけだったという。前記、川路大警視を警視庁に訪ね大久保の護衛を依頼したのも千坂である。それだけに千坂の心配したとおり大久保が非命に斃れた時には

「内務卿を殺害したのは川路の責任だ」と川路を罵った。

このあたりの模様は、司馬が西南の役を壮大に描いた長編小説「翔ぶが如く」の最終章「紀尾井坂」に詳しい。

大久保の死を知った政府の「だれもが血が凍ったように動かなくなった。前島密などは目の前が昏くなり、太政官も明治国家も泥で作った建物のように崩れてゆくのを感じた」と司馬は書いている。

清水谷公園にある大久保の「哀悼碑」の近くに江戸の地下を通っていた上水道の石枡と木管が保存されている。これを見学した司馬は、この当時、世界一の人口を抱えた江戸の水道事情について、ロンドン、パリのそれと比較して蓄を傾けている。相変わらず彼の博識ぶりに驚く。

2　日枝神社と氷川神社、豊川稲荷

清水谷公園から弁慶橋を渡って、赤坂見附の繁華街に入ると大通りの左手に「日枝神社」がある。江戸時代には「山王様」と呼ばれた。

明治元年の神仏分離によって日枝神社という名前に変わったが、司馬によると日枝（または日吉）とは京都の比叡山のことだという。叡山延暦寺と山王権現（近江坂本にある）は王城守護の両輪とされたが、家康の江戸入府以降、上野の寛永寺と赤坂の日枝神社がその「両輪」となった。

それを考え出したのが家康に取り入った怪僧天海だったという。この百八歳まで生きたと伝えられる謎の人物について司馬は数ページを割いて語っている。

川越の喜多院を根城にした天海は絶大な権力をふるい、病床の家康の遺言にも立ち会った。家康の神名を東照宮大権現とつけたのも天海である。

司馬は「坂を登って境内に入ると、都心ながら山中の嵐気を感じる」と書いているが、私が訪れた九月中旬は丁度、「山王祭」の最中だった。

氷川神社

赤坂氷川神社はその名が示すとおり、旧分国が同じである武蔵野国（埼玉県）大宮にある氷川神社から出ている。享保十五年（一七三〇）、八代将軍吉宗によって鎮座されたが、その数年前までは此処は浅野内匠頭（一六六七―一七〇一）の正室瑤泉院の実家で、内匠頭切腹の後、彼女は此処で余生を送った。

なお芝居などでは（「南部坂雪の別れ」）大石内蔵助が討ち入りの前に此処に彼女に会いに来ることになっているが、万事、用心深い内蔵助は、彼女の身に災禍が及ぶことを恐れて、そんな軽率な行動はしなかったであろうと司馬は書いている。

この神社の例大祭も有名だが、私が訪れたときは前日に終わったばかりで、関係者が跡片付けに忙しそうだった。

なお、この明神のそばに「勝海舟旧宅跡」の表示板があった。海舟は明治以降、亡くなる同三十二年までこの屋敷に住んだ。

司馬の好きな海舟については「本所深川散歩」に詳しく登場する。海舟が本所生まれであるからである。翌週に訪れた本所の両国公園内に「勝海舟生誕之地」の碑が建っていた。碑に「法務大臣西郷吉之助書」とあったから最近のものだろう。

豊川稲荷

赤坂の豊川稲荷もその名が示すとおり、三河国の豊川市にある豊川稲荷の江戸別院である。江戸時代から俗に「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と言われたように、一説では全国神社の四割がお稲荷さんだといわれるが、此処も変哲もないお稲荷さんである。

しかしこのお稲荷さんを有名にしたのが、後世「大岡裁き」で知られる大岡越前守忠相（一六七七―一七五一）だった。忠相は自宅内に屋敷神として豊川稲荷を祭ったが、彼の出世振り（お目付―普請奉行―町奉行を経て、七十二歳にして一万石の大名となる）を見た庶民は「豊川稲荷のおかげ」と信じたという。

豊川稲荷の前の青山通りを西に少し歩くと「高橋是清翁記念公園」がある。この地は江戸時代、青山丹後守の屋敷だったが、明治後半から「だるま宰相」高橋是清（一八五四―一九三六）の邸宅となった。彼が昭和十一年に二、二六事件で凶弾に倒れたのもこの地である。

公園の一番奥にお馴染みの丸顔をした是清の銅像が建っていた。

司馬は是清が若い頃、奴隷として米国人に売られたなどの数奇な運命を克明に記している。そして司馬の大好きな正岡子規が松山中学を中退して上京、「共立学校」で英語の授業を受けたのが、米国から帰朝したばかりの是清だったことまで披露している。

是清の自伝を読んだ司馬は是清自身は勿論、彼を取り巻く身辺がすべて楽天家で好人物ぞろいなのは、さながら「寅さん」映画とそっくりではないかと記しているのは、いかにも寅さんファンだった司馬らしい。

3　霊南坂から溜池へ

ホテルオークラとアメリカ大使館の間の坂が霊南坂だが、司馬はこの坂の散歩が好きだと「赤坂散歩」に書いている。ホテルオークラは司馬の東京での定宿とされていたので、よくこの坂を上下したのであろう。

私もこの坂の上にある「大倉集古館」を探しに、アメリカ大使館の前をうろうろしたら、警備の警官に不審の目で見られた。

ところで司馬によると、アメリカ大使館のある場所は江戸時代には定火消の御役屋敷であったという。火事は江戸の華といわれたが、江戸の消防には三つの組織があって、まず町奉行が監督する四十八組の「町火消」（町鳶）。ついで十一名の大名が抱える「大名火消」（加賀百万石が抱える加賀鳶が有名）。それに幕府直属の「定火消」。

「定火消」は府内で十組があり、責任者は十人の有力旗本。その下に与力六騎、同心三十人、歩卒（人足）約百名の陣容で、歩卒は一般には「ガエン」（臥煙）と呼ばれた。文字通り煙を掻い潜って火事の現場に飛ぶこむ役である。

（なお町火消については「本所深川散歩」に詳しい。ここでは司馬は町火消しの組頭とも面談している。）

霊南坂を下ると「溜池」に出る。

台地に囲まれた低地で、かっては池があったことからその名がついたが、江戸時代は重要な飲料水源だったという。たしかに「江戸切絵図」を見ると池となっている。明治になってから埋め立てられた。

大切な水源地だから、ほっておくと泥が溜まって浅くなる。そのため時々浚渫する必要があったので、幕府は大名を指名して浚渫させた。その責任も費用も大名持ちである。享保年間の伊達村年（伊予宇和島藩主）の工事が有名だと言う。

ここで突然、司馬は江戸弁の話に移る。

母音が短く子音を強く発する江戸弁は、時には景気づけのために形容詞や動詞のあたまに「掻つ」という言葉をつけたがる。「耳を掻つぽじいて聞きやがれ」の類である。

そこで池を浚うときの言葉も「さあ掘れ、掘れ」ではなく、「掻つぼれ、掻つぼれ」となる。

溜池を掘る土工たちは、そのつど「カッポレ、カッポレ、甘茶でカッポレ」と云ったであろうというのである。この囃子言葉が後に芸能化されて、文政年間に「カッポレ踊り」となったというのが司馬説だが、果たしてどうであろうか。

4　乃木神社

長い間、都心に勤めていた私だが前記日枝神社、氷川神社、豊川稲荷いずれも同じ都心にありながら全く訪ねたことはなかった。しかし最後に訪れた乃木神社とそれに隣接する旧乃木邸は例外で、この近くに、勤めていた銀行の集会場があった関係で何回か訪れている。

そのため今回は参拝だけで済まそうと、入り口の社務所の前を通り過ごそうとすると、そこに乃木関係の書籍に交じって「名将乃木希典―司馬遼太郎の誤りを正す」なる小冊子が目に入った。早速、「初穂料五〇〇円」を払って手に入れ、境内の緑陰で読み始めた。

著者は旧軍人で現在は「中央乃木会」理事の桑原嶽という人。先ず「はしがき」に「司馬氏の著述が如何に事実を誤解し、偏見独断に満ちたものであるか」と過激な言葉が並ぶ。しかし本文に入ると乃木大将の業績を縷々述べながらも、具体的に何処が司馬の誤解なのか全く書いていない。

おまけに最後の文章は「司馬遼太郎氏を偲ぶ」と題した追悼文となっている。なんとも不可思議な本だった。

一方、「赤坂散歩」では司馬は「乃木坂」「赤坂の閑寂」など数十ページに亘って乃木大将について語っている。しかしかって「殉死」で彼が展開した独自の乃木批判の話は一切載っていなのは全く予想外だった。

まずこの章では、日本では外国のように都市の名や街路の名、駅名、空港名に歴史上の人物名（例えばベトナムのホーチミン市、フランスのド、ゴール空港など）をつける習慣も思想も全くない。どうも明治初期に「人名はつけるな」といった政令か、閣議決定がなされた（たしかに旧国鉄ではこのような法規があったようだ）のではないかと司馬は考えている。

ただその一つの例外が赤坂の「乃木坂」だという。この名称は乃木神社の祭神である乃木希典（一八四九―一九一二）からとられたことに間違いないが、考えようによっては「乃木」の名は「人名」ではなく「神名」ではないかと皮肉一杯に書いている。

その「神様」乃木を容赦なく引き摺り下ろして、独自の乃木批判を加えたのが昭和四十年代初めに書かれた「殉死」（初出「要塞」「腹を切ること」）だった。

「乃木の半生をながめるに、乃木ほどその性格が軍人らしい男はなく、同時に乃木ほど軍人の才能に乏しい男も珍しい。乃木希典はたしかに純真きわまりない人間だが、軍人としての才能は全く乏しく」、単なる精神主義者に過ぎないとの論調は、「軍神乃木大将」で育った我々世代に少なからずの衝撃を与えた。

不幸なことに乃木自身がそれに気がつかず、たとえ気づいていたとしても、悲劇を「自分の美的世界に組み入れ」、その憂鬱の中に安らぐ乃木のセンスは理解できないとの司馬の論法は容赦ない。

確かに乃木の殉死に関しては、大正の知識人の間にも賛否両論があった。その死を賛美して書かれたという鴎外（乃木と個人的交流があった）の小説「阿部一族」「興津弥五右衛門の遺書」は別としても、漱石は小説「こころ」で、芥川龍之介は小説「将軍」でこれを批判した。（特に芥川は乃木が死の直前にわざわざ写真を撮らせた行為に反感を持ったと大宅壮一はその著「炎は流れる」で書いている）

また乃木のお膝元である学習院出の白樺派の連中（武者小路実篤や志賀直哉など）も否定的だったといわれる。

しかしこれらはすべて小説や日記の形を借りた間接的または消極的批判であるに対して、司馬は敢然と真正面から取り組んでいるのである。「殉死」の冒頭で司馬は、この作品を「小説」としてでなく「自分自身の思考」の過程の記録として書くと宣言している。

（もっとも「小説を書くつもりではない」というのは、この作者の口癖ではあるが。例えば、この後に書いた代表作「坂の上の雲」でも「小説でも史伝でもなく、単なる書きもの」と言っている。「歴史の中の日本」）

そのために、この作品は「反小説（アンチロマン）」となっている強みがある。

司馬自身にとっても今までの単なる売れっ子の人気作家から、世の知識層からも注目される本格的な歴史作家に脱皮したターニングポイントとなった問題作となった。

（なお、私は好きな司馬作品を一つ挙げろと云われたら、躊躇なくこの「殉死」を挙げる。）

ところが、その強烈な乃木批判が、この「赤坂散歩」では全く影を潜めているのである。思えば司馬が「殉死」を書いたのは彼にとっては四〇歳台の作家として最も油の乗りきったとき、それから二十年以上経っての「赤坂散歩」である。

老成した作家の心境と考えるべきだろうか。それとも「赤坂散歩」を単なる旅行記と見るべきであろうか。私は戸惑った。

（二）「本所深川散歩」

司馬は「赤坂散歩」から一年半後の平成二年春、今度は本所深川界隈を歩いている。

「江戸っ子の産地」を訪ね歩くのだが、司馬も書いているように厳密に言えば「本所深川」は江戸ではない。

旧分国でいえば赤坂が武蔵国であるに対して、本所深川は下総国（葛飾郡）である。私の住んでいる千葉と同じ領国に属する。

この地方が江戸と一つの地域になったのは、寛文元年（一六六一）両国橋が架けられてからであるという。因みに、この橋の由来は武蔵、下総の両国を繋いでいるからということはよく知られている。これなども前記「しゃれ気」のある江戸の地名の一つであろう。

1　深川江戸資料館

都営地下鉄（大江戸線）清澄白河駅を降りると、目の前に清澄公園が広がるが、その反対側に「深川江戸資料館」がある。江戸時代の深川の町並みを再現した施設で、此処では落語や芝居にそのまま出てきそうな路地ごとの棟割長屋を原寸大で見ることができる。

三階分の吹き抜けに聳える火の見やぐらを見上げていたら、女子大生風のガイドが遠慮がちに寄ってきて案内してくれた。このあたりいかにも下町らしい。

大川端には船宿もあり、猪牙舟も浮かんでいる。

照明の調節ひとつで、江戸下町の夜明けから暮れ六つまでを実感できる。興味があったのは長屋の路地の入口（出口）に置かれた町木戸。そこには自身番という町方自身の経費による番小屋が置かれて、夜は猪の刻（午後十時）には閉められることになっていた。司馬によれば、町木戸は京、大阪にはない江戸独自のものだという。

この小ぶりな地味な資料館の近くに、全く対照的な東京都近代美術館がある。バブル時代に立てられた代表的なハコもの。豪壮で現代風だが、資料館を見たあとだけに興ざめする思いだった。

この美術館は勿論、両国駅近くにある江戸東京博物館も司馬は訪れていない。まだ開業前の時期なので当然だが、たとえ出来ていたとしても、司馬はこれらのバブル期の遺物を訪れることはなかったであろう。

資料館の手前に古刹の霊巌寺がある。

江戸切絵図をみると膨大な敷地を占めているが、現在の境内はその半分ほど。たまたま学友の墓があるので詣でたが、境内には松平定信（一七五八―一八二九）の大きな墓もある。「松平楽翁公霊域」とあった。定信は八代将軍吉宗の孫、田安宗武の子として生まれ、陸奥白河藩主となり白河楽翁と号した。天明の飢饉後に老中となり「寛政の改革」で知られている。

いまでもこのあたりは白河町と名づけられている。

なお定信については「街道をゆく（白河会津のみち）」に詳しい。私も数年前、白河城を訪れた。定信は地元では名君といわれたが、中央で実施した改革は成功したとは云いがたい。特に朱子学以外の学問を禁じた「寛政異学の禁」はいただけない。これによって明治維新は数十年遅れたといわれる。

2　富岡八幡宮

「深川」という地名の由来は、隅田川の河口にできた洲の開拓者である摂津の人深川八郎右衛門であるという。近くの「佃島」がやはり大阪湾沿岸の漁民によって開拓されたのと同様である。

その深川が市街化されるのは三代将軍家光の寛永年

間。その頃、長盛という法印によって富岡八幡宮が建てられたことにより門前町が出来上がり色町が繁盛した。

そのうち日本橋から木場が引っ越してきてから深川の中心地となった。さらに、この神社を有名にしたものが勧進相撲と富くじ。

司馬によれば木戸銭をとっての興行相撲は京、大阪が江戸に先行していた。江戸初期は京、大阪での興行が終わると江戸に下って興行したという。その後、江戸中期になると此処富岡八幡宮の勧進相撲によって江戸相撲が実力を発揮するようになる。

勧進相撲がこの八幡宮にのみ許されたのは幕府の庇護の大きさを物語っているが、富くじ（富突）もそうだった。

相撲も富くじも利益の三分の一は主催者である神社側に入るが、監督官庁はいずれも寺社奉行であった。神社と幕府の密接な関係を見ることが出来る。

此処での祭礼も江戸時代から有名で、神社の境内には日本一大きいという巨大な神輿が飾ってあった。また、たまたま横綱白鵬の刻名式も行われており、境内は大勢の人出で埋まっていた。

司馬はこれらの「深川風情」を彼が大好きな江戸落語を引用しながら話を進めている。一寸、拾ってみただけでも円朝の「文七元結」を初めとして「大山詣り」「永代橋」「富久」などの噺を紹介している。

3　吉良邸跡

元禄時代以降、本所には二百四十家ほどの旗本、御家人といった直参の屋敷があったが、司馬はその中の有名人として吉良上野介義央（一六四一―一七〇二）を取り上げている。

元禄一五年（一七〇二）に赤穂浪士が討ち入りした吉良邸は現在は墨田区立松阪公園内にあるが、コンクリート建物ばかりで「忠臣蔵」の面影は全くない。ただ高家の格式を表す「なまこ壁」と黒塗りの門が僅かに当時の模様を偲ばせている。

吉良邸は二千五百坪以上あったそうだが、現在の邸跡はその八十六の一。その狭い邸内に「首洗い井戸」や吉良邸で闘死した清水一学や小林平八郎などの名を刻んだ碑が建っていた。

「本所松阪町」といえば、忠臣蔵で有名だが、これは間違いで、松阪町と呼ばれるようになったのは討ち入りの後、吉良邸が廃されてからの町名で事件当時は「本所一つ目」が正しいと司馬は書いている。

今では両国一丁目―四丁目となっている。

吉良家は高家筆頭（儀典長）という職掌柄、もとは江戸城の大手御門近くにあったが、松ノ廊下事件後に新開地の本所に移されたのは、幕府としてはその後に予想される討ち入りに関わりたくなかったのではなかろうか。さらには義央を打たれやすくしたのではないか。

また不思議なことに当時、お上や町方の監視が他所者の出入りに極めて厳しかった江戸市中に、あれだけ多数の浪士たちが潜入できたのは幕府やその周辺の人たちに浪士たちを暗黙裡に支援する気分があったに違いないと司馬は考えている。

（しかし一方で司馬自身は「赤穂浪士」を全く評価しない。単なるテロ集団と見る彼は他の作家にとって最も魅力的なこの事件を一度も題材とすることはなかった）

ただ、前記「殉死」では赤穂浪士の一人武林唯七について触れている。唯七が切腹した場所が後の乃木神社附近だったためだが、彼は帰化人の孫だそうだ。

「その祖父は中国杭州府武林の人で、秀吉の朝鮮ノ役で捕虜になり、日本に移住した。その子は浅野家の医官になり、唯七を生む」（殉死）

4　千住大橋

「本所深川散歩」では司馬は隅田川を舟で遡って千住大橋まで足を延ばしている。寛文元年（一六六一）に前記両国橋が作られるまで隅田川には千住大橋しかなかった。

家康の方針として城下町の防衛上、河川に橋を架けることは禁じていたが、百万都市江戸のみは防衛よりも都市機能を優先させざるを得なかった。

そこで家康入府の天正一八年（一五九〇）の四年後には既に千住大橋が作られている。伊達政宗が用立てたという橋杭の用材は房総産の犬槙だった。犬槙は木目が美しく、なによりも水腐れがすくないため、千住大橋は江戸時代を通じて洪水で流失するということは一度もなかったという。

私にとっても若い頃、この橋の麓にある支店に数年勤めたこともあるので懐かしい橋である。この橋を眺めながら、まず思い出したのが真山青果の戯曲「将軍江戸を去る」だった。

最後の将軍慶喜が夢破れて退隠の地である水戸に向かう途中、この橋上から振り返って江戸に別れを告げるシーンは芝居の名場面となっている。

司馬もこのことに触れ、家康によって作られたこの橋も二百七十四年後の慶喜によって江戸時代の終焉となった運命的な橋だったと書いている。最後の将軍慶喜が「この橋をわたったときに、江戸が終わった」

そして江戸時代をずっと見てきたこの橋も、明治十八年七月の洪水で流失したが、「いかにも、江戸の橋らしい最期だった」と締めくくっている。

れんししゅう(恋詩集)しさくのかなしみより その三

松下壽男

逃げ水

かがやく雲に
あなたの姿をみつけていたら
あさぎの空の真上から
ばかやろうと怒鳴られた

陽射しの窓にとびだした
あなたを掠めた
地煙りが
サイドミラーに消えてゆく

ばかとはなんだそっちこそ
遅れて私も
怒鳴り散らして

ただ逃げ水を追いかけて
このまま走り続ければ
あなたの街に着くだろう

ホメラレモセズ クニモサレズ(十三~十五)

松下壽男

十三 報徳社の常会

常会には、得次が真っ先に来て待っていた。嬉しそうに巾着を持って、早く返済金を納めたいと言い出した。陸一は、昨夜目を擦りながら書き上げた貸付帳を広げた。差し出された金額と帳面の額とを確かめて判を押すと、得次はほっとした表情を見せた。それから、そそくさと机や腰掛を並べる手伝いをするのだった。それを見て、陸一も、ほっと一安心したのであった。

報徳社が得次の借金の肩代わりをしたと言う話は、すでに村中に知れ渡っていた。酒屋の女将と、どうやら兵造が言いふらしているようだった。それが得次一家にもよい支えになっているようであった。

得次は人から聞かれる度に、

「金次郎さんが身を捨てて助けてくれた金だべ。返さずに済むわけがなかろうべ」

と答えているという。

陸一にはそれがとても嬉しかった。そして実現しなかった金次郎の銅像が、今、村人の心の中にむくりむくりと立ち上がっていく姿を確かに思い描くことができるのだった。しかも、得次一家の一変した勤行ぶりが、村人に勤倹譲の報徳生活の清々しさを無言で教えているのであった。

無利息で金を借りたいという資金貸付の依頼は、後を絶たなかった。しかし村の報徳社にはそのための準備が整っていなかった。それに、依頼の多くは、勤労分度の報徳生活を積むことによって金を借りずに済む話だったし、貸さぬに越したことはないと思われた。むしろ得次の場合は、娘を売ろうというほどの緊急事態だったのであった。

そこで陸一らは、土台金の額を示した上で、どのような

方法で金を貸したらよいかを常会で話し合うことにした。
回収は何年か先になるのだから、資金を小出しにして貸し付けていくしかないだろう。無利子とはいえ、返せない者に貸してしまっては元も子もない。貸すことばかりでなく土台金を増やすことも考えていかなければなるまい。今でも報徳社を頼母子講と取り違える向きがあるが、得次の例のように生き方を変えるものでなければ報徳の貸付とは言えない等々、意見が出尽くして、やっぱり金次郎さんの取った方法に倣うのがいいだろうということになった。

少額でも日掛けや月掛けを欠かさず、常会にもきちんと出席する社員の中から、年に一度正月に投票をして、一位の者に前年の社の収益の半分を超えない額を貸し付け、一位の者が辞退すれば二位の者へと順に譲ることになった。

これまで通り毎月二七日の午後七時から学校の教室を借りて開く常会も、その趣は大きく変わってきた。

報徳訓唱和の後、陸一の担当していた会務報告は、雑誌を購入したとか、誰それの葬式に報徳社として香典を出したとかいう些細なものばかりから、社員何名の増、現社員何名、月掛け金幾ら、返済金幾ら、土台金幾らという組織立った内容のものになってきた。陸一はそろそろ法人にしなければ荷が重いと感じ始めていた。

会務報告の後、講師を招いて話を聞くのが報徳社の習わしであったが、講師の依頼がまた陸一らの悩みであった。

村長、村役人、駐在、郵便局長、寺の住職、神主・・・。およそ話のできそうな人物には日頃から頭を下げておくのだった。

とはいえ、大日本報徳社の社長であった岡田良平が文部大臣を務め、昭和四年に枢密顧問に任ぜられたこともあって、報徳社の常会の講師は、村の役職者にも多少の名誉を感じさせるものになってきた。

中には些少の謝礼を辞退して、それを上回る寄付を納める講師もいた。一升ぶら下げて来て、報徳人は酒は飲まぬと教えられ恥じ入った退役軍人は、翌月の常会に大福餅の詰まった折り箱を差し入れた。その餅は、講演の後の講師も交えた「いもこじ」で、皆に振る舞われたのだった。

講師の当てが付かない月には、陸一らは小学校の校長に話を頼んだ。校長は子供だましの話でよかったらと言いながら、いつも快く引き受けてくれるのだった。

湯茶の準備に使ってやってくれと、得次が娘のさとを常会に連れてきた。五作らが慣れない手つきで茶を入れるのを見かねたのだろう。しかも娘さんが入れた茶は旨いべと評判がよかった。友一は次の常会で妹に声を掛けてみた。おさとさんが来るならと快く付いて来た。

娘衆は若衆のように集会場が与えられているわけではなかったが、団結力は固かった。若衆も多く集まる席に二人を出入りさせているくせに前もって相談がなかったと、娘衆の年長者が、若衆宿の陸一に詰め寄ってきた。

報徳社は村の集まりでもなければ女人禁制でもない。男女問わず自分の意志で入る結社であり、常会は広く万人に開かれているのだと陸一は話した。その年増の娘は、

「ふうん」

と、思案気に頷いて帰って行った。

次の常会の日、陸一が準備のために五作らと早めに会場に向かうと、その娘が仲間を連れて、

「あたいらもお手伝いいたします」

と、校門の前で待ち構えていた。

襷掛けになった娘らは、宿直室のかまどを借りて湯を沸かし、さと等年少者を指図して手際よく湯茶の準備をした。

儀礼、報徳訓唱和が始まると、彼女らは、宿直室で校長の妻女と何やら楽しげに時間を潰していたが、講演が終了し、閉会の儀礼も終わると、後段の「いもこじ」の準備のために、またひとしきり茶碗を集めて洗ったり、机を車座に並べ直したりして働くのだった。

報徳社では自由な話し合いのことを「いもこじ」と呼んでいた。水を張った桶に有りったけの芋を入れ、棒で掻き混ぜるうちに、どの芋も互いに擦れ合って自ずときれいに洗われていく。そのように村人の気の置けない触れ合いが互いの心をきれいに洗い清めることを願って、金次郎さんの時代からいもこじと呼び慣わしているのだった。そして若衆宿さながらの雰囲気で談笑できるいもこじは、常会に集う若者や、かつての若者たちにとって、何より楽しみな時間であった。

その日は、いもこじの途中で、年長の娘が、半紙を敷いたお盆に、きつね色の菓子を山のように盛ってやってきた。まったりとした香ばしい香りが、いもこじの会場に漂った。

その「たか」という娘は、

「これはドーナツという西洋のお菓子でございます。奥様に教わって作ったんでございます」

と口上を述べると、兵造の間近に盆を置いた。陸一は、娘のねらいが判ったような気がして、にんまりとした。

兵造は、盆を講師の郵便局長の前に指し出し、彼が一つ摘むと、

「回してくんせ」

と、盆をその左隣に手渡すのだった。

いもこじは、まず講師の労を労いつつ、気軽な質疑応答が交わされた。その後、皆が起立して講師を礼で見送ると、年配者の多くも付き添うように退席して行った。

その後は青年社員を中心とした時間だった。話し合いの中心は、今後の社の組織作りだった。

まだ社長も立てず、陸一ら銅像建設の発起人五名が役員を名乗ってはいたが、明確な役付けがあるわけでもなかった。しかしいずれ法人としての認可を受け、大日本報徳社に加わるためには、組織固めが必要なことは明らかだっ

た。

また、村の報徳社であるからには、村の若衆、中老、年寄といった世代ごとの組織や、年番といった村役との繋がりも考えなければならなかった。

ひとしきり話が弾んだ後で、陰で働いてくれた娘衆を労ってやろうということになった。陸一らは、いもこじの席に娘衆を呼び出して、茶菓子を勧めた。娘らはいつになくしおらしく談笑に加わった。

思えば若衆と娘衆が気軽に会話を交わす機会は、酒に酔っぱらった祭りのときを除けば、小学校時代以来のことであった。日頃は、からかい合ったり喧嘩腰だったりする青年男女が、いつになく素直に会話を交わすのであった。教室という誰にも懐かしい場所のせいかもしれなかった。

時計は十時を回っていた。娘らが奥様と呼んでいた校長の妻女が、教室の扉越しに、もう遅いからと声を掛けた。そして娘さん達を送っておあげなさいと諭すのだった。

青年男女が協力して教室を片付けた後、陸一は宿直室に出向いて、予定外に娘らが世話になり、ドーナツまでご馳走になって申し訳ありませんべと礼を述べた。妻女は、

「いいえ、みんないい娘たちね。これからは礼儀作法でもお教えしましょうか」

と、笑顔で語るのだった。若者たちは、それぞれ近回りの娘を伴って学校を後にした。

常会への娘たちの参加も増えていった。いもこじでは、報徳社の組織に婦人部もつくったらどうかという話が、娘衆も加わるなかで盛り上がった。奥様のお仕込みで随分淑やかになったものだとからかったりもした。

やがて、たかが常会に姿を見せなくなった。いぶかっていると、兵造が嫁を娶るという噂が陸一の耳に入って来た。案の定、相手はたかだった。しかも、たかの腹が膨らんできているという。

翌月の常会のいもこじは、その話で持ちきりだった。たじたじの兵造は、

「天地の令命だべ」

と、答えた。友一が、

「いつどこで天地の令命があったんだべ」

と、突っ込んだ。

「んだば話すども、祝儀は弾めや」

と、兵造も開き直るのだった。

それ以来、常会の報徳訓唱和では、

「父母の根源は天地の令命に在り」

という最初のくだりから、若者たちの力の込め様が違うのだった。

その頃には、村人の会話の中に、報徳訓の一節が語られるのを耳にするようになっていた。村に報徳が根付いてきていることを実感する陸一であった。

報徳社が村に根付いていくと、村長や役場の役人や地主連中も放っておけなくなってきた。権蔵が匙を投げてからは、村では労農党の影はめっきり薄くなっていた。

報徳社員は五作や得次のような小作や、陸一や機一、熊蔵や友一のような自作農が主体で、地主といえば貞三のような新興地主か、兵造のように自作もする中小地主の倅であった。

村の田畑の半分近くを所有し、江戸時代まで代々肝煎や組頭、百姓代といった村役人も務めてきた五軒の大地主は、金次郎の銅像建設が挫折して以来、社とはかかわりを持とうとしなかった。が、中には再び報徳人を標榜する者も現れた。村長もその一人であった。

村長は、村に活力を付け、豊かにするためには報徳が持って来いだと考えるようになっていた。その陰には、甥の兵造の熱心な勧めがあった。書物を取り寄せて調べてみると、関東や遠州には、村ごと報徳に取り組んで、見事な成果をあげている例が多数あることを知った。

昭和四年春、村長は祝言前の兵造を、最後の修業だぞと念押しして、大日本報徳社主催の研修会に出したのだった。

兵造は、そこで、全国各地から集まった報徳社の社長や幹部、村長や役人等と寝食を共にし、講話を聞いたり、討論を交わしたり、いもこじをしたりする中で、報徳が村を変える力をありありと感じたのだった。

なかでも多忙を押して東京から駆けつけた社長の岡田良平翁の講話は、世界情勢を踏まえた鋭い洞察であると感服したのであった。

「道徳と経済の調和を図る改革は、イタリアの黒シャツ党のクーデターに学ぶべきものがある。一挙して政治組織社会組織を改めることによって道徳と経済とが両端に片寄らず調和していく最良の道が開かれよう。このことは共産国になったロシアの内部でも叫ばれておることである」

東京帝国大学の総長を務め、現職の枢密顧問官である翁の、世界情勢を見据えた力のこもった言葉によって、村ぐるみの一村報徳への確信を深めた兵造であった。

また兵造は、大日本報徳社の事務方から、社団法人の設立方法について詳しく説明してもらった。

彼は、半月にも及んだ研修会での利発で活力溢れる言動によって、「岩手に兵造あり」という印象を与えたのであった。

村に帰った兵造は、早速伯父の村長に、一村報徳の可能性を熱く語るのだった。また、常会では講師を買って出て、大日本報徳社の大講堂の威容を語り、門柱の向かって右が道徳門、左が経済門と彫られている通り、報徳は道徳と経済の調和を目指さなくてはならない、そのためには、村の政治も、我々村民の生活も、一挙して報徳の色に染められることが望ましいと、雄弁に語るのだった。

その夜のいもこじは、社団法人の設立方法について議論が交わされた。法人には定款が必要であるが、雛形は大日本報徳社が示してくれる。組織も社長以下副社長、理事等申請書類に明記しなければならない。そして何より、設立や運営のための土台となる資産や資金を明示しなければならないといった兵造の話は、陸一も取り寄せた資料によって十分に承知をしていた。しかしながら認可を受けるのに必要な資産が足りなかった。貧しい村の貧しい報徳社の宿命であった。

それに対して兵造は、村の資金や大地主の寄付を得さえすれば一気に解決するだろうと語るのだった。

一座は色めきだった。

村の小学校に二宮金次郎の銅像を建てようという運動を始めて五年の歳月が過ぎていた。一村報徳によってその歳月の努力が一気に報われよう。その日も目の前のように思われた。

とはいえ陸一の心の中は釈然としなかった。何か、心にわだかまるものがあった。しかし、それが報徳社の表舞台に一気に躍り出た兵造に対する僻みのようにも思われて、口に出すのは憚れた。

「一村報徳となると社長はやっぱり村長だべか」

「いや村一番の地主だべ。寄付を一番出すだべのう」

と、話が弾む一座から、一人の青年が立ち上がった。

「兵造、温故知新ちう言葉は知らんべな。昔はえがったのう」

そう言い捨てると、

「子供が待っとるで、おら帰るべ」

と、出て行った。

それはかつて陸一を夜這いに誘った作衛門だった。一座は、

「おやすみなんせ」

と、作衛門を見送って、また、ひとしきりいもこじに興じるのだった。そして娘衆も話に加わって、その夜も十時に解散したのであった。

陸一は釈然としないまま夜道を歩いた。後ろを、たみという娘がついてきた。彼は方角の同じたみを家まで送ることにしていたのであった。

七つ年下のたみは、いつも嬉しそうについてきた。何を尋ねてもコロコロと鈴が鳴るように笑い、朗らかによどみなく話す娘だった。

陸一には、たみが自分を好いていることがわかっていた。しかし自分のような口下手な男を朗らかな娘が好くわけがわからなかった。

今夜も、たみが陸一に話しかけた。

「陸一さんは、兵造さんの考えが納得いかないんだべ。ならば、何が納得いかないか、はっきりするまで考えるといいべ。陸一さんのじっくり考えることに間違いはないべ。あたいも安心して付いて行けるべ」

陸一は、

「そうか」

としか答えられなかったが、兵造の考えに釈然としないのは、僻みの所為ではないという自信が湧いてきた。たみの言うように、じっくりと考えてみようと思った。

「ありがとよ」

陸一が礼を言うと、たみはコロコロと笑った。

十四　草の根の思想

兵造の考えは一村報徳であった。それに対して釈然としない陸一は、村から独立した結社として報徳社をつくる結社報徳を考えていたのだった。

荒地に草が育つように、まず一人一人が村に根を下ろして自立をめざし、その自立を助け合うために、繁みのような報徳社を作るのだ。繁みを見れば草の根は隠れて見えないが、繁みを支えているのは一本一本の草の根の自生なのである。その草の根の思想は、陸一が貞三と開墾をしながら学んできた生き方でもあった。

それに対して一村報徳とは、植え付けられ水や肥料で育てられた、一面に青々と広がる苗代のような報徳社であった。どこを見ても報徳一色だし、どこを見ても豊かに茂っている。しかしもし肥料が切れたらどうなるだろう。水が撒けなくなったらどうだろう。その一本一本が大地に根付いているとは限らないのだ。

では、どうして一本一本が根付かないうちに村全体を茂らせようとするのだろうか。それは、草丈を揃えたり、後で植え替えたりするためだろうと思った。

一本一本の草の根は大事ではなく、むしろ草の根の自生が邪魔になるからだろう。

一村報徳では、一人一人が、自分の力と人の支えで生きているという喜びよりも、村に生かされているという思いの方が強くなるのではないかと陸一は思った。村に生かされているという思いが喜びになるためには、人は村のために村は人のためにという繋がりが生まれなければならない。

そこには人が人のためにという、いわば雑草同士の自立をめざす草の根の思想は消えうせるだろうと考えた。

そして徳を以て徳に報いるという報徳が、徳を以て村に報いる、さらには国に報いる報国になってしまうのではなかろうか。

陸一の心には、一面の茂みが一斉に風に靡く苗代の姿が浮かんできた。

陸一には一見報徳の繁栄の様に思われる一村報徳が、報徳の根幹を揺るがすもののように思えてきたのであった。

しかし陸一は、必ずそうなるものとも断言はできなかった。なぜなら一村報徳は、金次郎さんも、その娘婿の富田高慶も北関東で実践し、大きな成果をあげていたのであっ

た。

金次郎さんの一村報徳と、兵造の考えている一村報徳とは何処かが違うのかも知れない。その違いを明らかにする鍵は、金次郎さんの教えを受け継いでいる大日本報徳社の考え、とりわけその講話を聞いて兵造が一村報徳を確信したという、岡田良平社長の考えを読み解くことによって見つかるだろう。

奥座敷に寝転がって天井の節穴を眺めながら考えを詰めていた陸一は、縁側に面した文机の横に積み上げられた書類の中から、「大日本報徳」という機関誌を手当たり次第に引き抜いた。そして、社長の講話や、執筆記事に、片っ端から目を通していった。

するとその年の昭和四年二月号の新年常会講話の中に「国民挙って同一の考えを持って進んだならば、我が文明が高尚なる位置に達すると思います」というくだりを見出した。

つい三ヶ月前に目を通したはずの記事だった。陸一は自らの読書力を覚束なく感じた。しかし、忘れても忘れても、読み返して、思い出しながら深めて行くのが読書というものだろうと陸一は思った。金次郎さんの読書もそうだったことだろう。

その年頭所感は、兵造が研修会で心を固めたという四月の講演の下敷きになっていたに違いない。そこに鍵を探すのだと考えると、陸一は身も心も引き締まる思いがした。

その鍵とは、兵造の考えている一村報徳と、金次郎さんのおこなった一村報徳との違いを明らかにする鍵であった。そして引いては報徳と報国の違いを明らかにする鍵であった。

しかも夢にまで見た村の報徳社の認可の好機を前にして、意固地なまでに草の根の結社報徳にこだわる自分の報徳の正否を裁く鍵でもあった。

陸一は文机の上を片付けると、腰から手ぬぐいを引きぬいて、埃を清めた。正座をしてその「大日本報徳」の頁を開いた。顔を上げて深呼吸をした。盛りをすぎた庭の菜種畑にシトシトと雨が降り注いでいた。

講話を繰り返し読む陸一の胸には、岡田良平社長の思いがひしひしと伝わってきた。

道徳と経済の一致とは予めその道が組織されているのではない。その間を通る人によって初めて実現するものなのだ。だからこそ人道なのだ。かかる人道の在りようについて国民挙って同一の認識を持って歩まなければならない。岡田翁は、病身に鞭打ってそう訴えていたのであった。

陸一は、道徳と経済の調和に手が届く局面に立ったとき、夢に目覚め、それまで考えもしなかった新しい生活を自ら歩み出した得次の姿を思い返していた。

岡田社長のいわゆる一つの考えとは、報徳という一つの生き方があるというだけのことなのであった。しかも報徳とは、二つの門の間を両端に片寄らず常に調和して歩む生き方にほかならなかった。

それは翁が同じ講話述べている和魂と洋才、欧と亜の一致も同様だろうと思われた。

陸一は、二宮尊徳の晩年の教えである一元融合の意味がようやく判ったような気がした。それは、世の中の仕組みの問題なのではなく、人の生き方の問題だったのだ。だから、報徳とはどう生きるかなのであった。

報徳という一つの考えを持って村が進んで行くということは、道徳と経済、和魂と洋才、義務と権利といった違ったものを、その間を人として生きぬくことで一つのものにして行く、そういう生き方を村民一人一人がして行くことだと思った。そのようにして二つの門の間を片寄ることなく歩む生き方を続けていくことだと思った。

ならば、そういう生き方をせよと、村長や役場がこぞって指図して行けばその実が上がるのではないか。金次郎さんもそうやって一村報徳を押し進めたのだろうとも思われた。

陸一は、人の話も聞いてみようと思った。上がり框の下から使い古した下駄を引きずり出して、番傘を差して、雨の中を外に出た。

陸一は、作衛門の家へ向かった。

十五　温故知新

作衛門の家は決して大きくはなかったが、太く丈夫な部材で組まれ、どっしりとしていた。その構えは、村でも草分けの自作農という伝統と誇りを示していた。

その家の当主は代々作衛門を名乗っていた。作衛門は、村の小字にもなり、堤や新田に名を残していた。自らも作衛門を名乗った曽孫爺さんは、天保の飢饉を生き残っただけあって、強靱な生命力をもっていた。彼は、子より孫より長く生きて昨年天寿を全うしたが、死ぬまで記憶ははっきりしていて、村の歴史の生き証人であった。作衛門は、その曽孫爺さんから村の歴史やしきたりを聞かされて育ったのであった。

作衛門は、気さくな青年だった。しかし時として気難しい一面をのぞかせるのだった。そんな時は、ぷいと姿をくらますことが多かったが、後に残す寸鉄は、聞く者の胸にぐさりと効いてくるのだった。

自ずと村人から一目置かれていた作衛門であったが、威張る訳でもなく、人の噂や愚痴やぼやきに耳を傾けながら、時代より少し遅れがちに、悠然として生きているのであった。

奥座敷で鼻毛を抜いていた作衛門は、庭先に陸一の姿を見かけると、寝そべったまま、上がれやと声を掛けた。背中に、二人の娘がまとわりついていた。

「おおい、茶だ」
と、主人が身を起こしながら叫ぶと、奥から赤子をおぶったおかみさんがにこにこしながら出てきた。陸一は、夜這いに付き合わされた夜を懐かしく思い出した。
「賑やかでいいべ。兄ちゃは」
陸一が尋ねると、リンゴのような頬っぺたをした童女が、
「がっこ」
と、答えた。
陸一は、まず毎回常会に出席している作衛門に礼を言った。作衛門は、
「いもこじはいいべ」
と、語り出した。
村には、昔から、子供衆、若衆、中老、年寄、あるいは、娘衆、嫁衆といった世代の輪切りの繋がりがあった。また一家、親類、分家、本家といった家の血縁の繋がりがあった。さらに家には、五人組や隣組といった地縁の繋がりもあり、誰もが世代と家との両方に関わりを持って生きていた。
だから自分の考えと世代の考えを一致させて家や地域で生きていき、また自分の考えと家の考えを一致させて村で生きていたのであった。だから家では世代の代表であり、外では家の代表なのであった。
それゆえ家でも村でも一人一人を疎かにできない訳であるから自然とよく話し合った。しかし、今では、世代や家の繋がりよりも、どちらが偉いかという序列の中で生きるようになってしまったと作衛門は嘆くのだった。
「昔は子供衆の決め事にゃ、親でも口出しできんかったもんだべ」
作衛門によれば、夜這いも同様であった。村では、若衆と娘衆の間の決め事だったから、親は口出しができなかった。若者にとっても、日頃は親しく話もできない若い男女の連れ添い探しの場でもあったのだ。
それが、娘を出世や利権の道具に考え始めた地主連中が、娘を傷物にされてはたまらないと考えて、公序良俗を押し付けてきたのだ。そして若衆の性欲のはけ口として、町に女郎屋を建てて一儲けし、年貢の払えない小作の娘を救済事業と称して送り込むのだった。そのくせ地主は遊廓で放蕩の限りを尽くし、郊外に妾を囲い、一方その娘は寄宿や下宿をさせて遠い町の女学校に入れるのだった。
「おっといけね、話が横道にそれちまったべ。事程左様に、近ごろは何事も軍隊式で偉いさんの言う通り。昔のように何事も皆で話し合うということが無くなってしまったべ。だから、いもこじはいいべ。それに、この頃はよ、娘衆もやってきて、素直に若衆と話をしちょるべ。兵造みたいによ、気心が知れてから夜這いをかけるちうのもよかろうべ。もっとも兵造はよ、夜這いをかけらちまった方かもしれねえが」

と語ると、へっへと笑う作衛門であった。
陸一は、不思議に思った。
「作衛門さん、昔はよ、武士が百姓を支配していて、言いたいことも言えなかったんじゃなかんべか」
「いいや、武士はよ、こんな痩せた村にゃ居付きもしねえべ。年貢さえ取れりゃ、あとは肝煎や村役に任せっ放しだべな。武士は武士、百姓は百姓。身分は違っても、お互いの分は大事にしたべな。だども、今じゃ役場が指図のし通しだべ。役場の連中も、上を見りゃ恐れ多くも今上陛下の御威光が眩しくて、下へ下へと指図を受ける身だべな。それゆえ少しでも上に上れば御威光のおこぼれにあやかれると思ってか、みな威張ること威張ること」若衆宿でも、作衛門は決して威張ろうとしなかったことを陸一は思い出していた。「上から下への仕組みに慣れっこになると、徴兵帰りの連中のように、のべつ下へ下へと指図をしたがるべ。役場の役人なんぞより貞三さんの方がどんだけ村のためになっているかわかりゃせんのに、威光に目のくらんだ連中だから、威張らねえ人物にゃ目も止めんようだべな」
なるほど、陸一の知らない昔に比べれば、村は大きく変わってきているのだ。報徳とは陸一にとって未来を開く指針であったが、過去には村にも報徳が育まれる豊かな土壌があったように思われた。陸一のとるべき未来の道とは、確かに過去から現在を結ぶ延長線上にあったのだ。
過去、現在、未来の時の流れは余りにも明らかで、誰もがたやすく口にする。しかし一瞬一瞬忘れ去られて行く過去を本気で未来と結び続けることは、道徳と経済を一つにすること以上に大変な仕事のように思われた。しかもその仕事もまた、生き方に関わるのだと陸一には思われた。そしてあらためて作衛門の泰然とした生き方に敬意を抱く陸一だった。
「作衛門さん、兵造の一村報徳をどう思うべか」
陸一は、率直に尋ねてみることにした。
作衛門は、腕を組んでしばらく考えていたが、また悠然と話し始めた。
「陸一、あの川の土手を作衛門堤というわけを知ってるべか」
「昔、作衛門さんが川に落ちて溺れ死んだげな」
「その作衛門は、おらの先祖だがの・・・」
北上川の支流の支流にあたるその川は、村になだらかな扇状地をもたらしていたが、緩やかに蛇行するその流れは豪雨によって容易に氾濫するのであった。とはいえ田んぼに水を行き渡らせるためには、蛇行はなくてはならないものであり、堤防が切れる度に元のまま復旧させるほかはなかったのだった。そして堤は復旧しても、洪水によって疲弊し小作に転落する農民が、後を絶たなかった。
先祖の作衛門は、川幅や曲がりを所々変えて堤防を補強すれば、川筋を大きく変えなくても、洪水は防げるだろう

と考えた。そして家の裏庭に土を山と盛って扇状地の雛形を作り、川筋を穿って樋で水を流しては実験を重ねた。そうして描いた絵図を携えて肝煎に工事を願い出たが、話が進展する様子は見えなかった。問えば、御用金の下賜の沙汰は未だない、しばし待てと言う。業を煮やした作衛門は、ならば手前らが勝手に進めるがよろしいか問うと、構わんが、もしもかえって災害を招くようなことがれば厳しく罰せられることになるだろうと言う。作衛門は覚悟の上じゃと言い残して肝煎の館を出たという。

それからは、作衛門は、部分工事の積み重ねで工事が進められはしないかと毎日川を見て歩いた。実験を繰り返し、計画を練り直した。工事か所の優先順位を違えれば、かえって下流で洪水を引き起こしかねなかったのだ。

作衛門は札所巡りにかこつけて、土木技術の見聞を広めた。蛇籠の編み方や土嚢の積み方などの技法を学んだ。そして既存の堤防に手を加えず内外を補強するという方工法を雛形を見せて説明し、周囲の耕作者の力を集めて工事を進めて行ったのだった。

彼の工事は、図らずも五年目の出水で試されることになった。作衛門は大雨の中を蓑笠を付けて工事か所を見回った。何とか持ちこたえ、流れが衰えると、川筋は作衛門の描いた絵図の通りの姿を描いていた。作衛門の計画の正しさが証明されたのであった。しかも自分の土地は自分で守る、村は村人が作るという気概が一気に高まったのであった。

こうした村人の動きに、肝煎も水を差す訳にはいかなかった。大地主でもあった肝煎は、繁く領主に掛け合うと共に御用金を当てにせず私財を投入する決心をしたのだった。こうして作衛門の計画に則った川の改修は、肝煎の差配で一気に押し進められることになった。

それから三年後、前回を上回る出水があった時、もはや責任は肝煎に移っていた。にもかかわらず、作衛門は堤の上に立っていた。そして突風に煽られた拍子に足を滑らせ濁流に呑み込まれてしまったのだった。

しかし堤は何事もなく残った。その堤は肝煎の名を付けて呼ばれることになっていたのだが、村人は作衛門堤と呼び習わすようになったのだそうだ。

やがて面白可笑しい言い伝えが、村の功労者作衛門を、川で溺れたまぬけな作衛門に変えていったが、堤は作衛門の名で呼ばれ続けた。とはいえそれも、家にとってはどうでもよいことであった。「名を残すべからず、実を残すべし」というのが、作衛門の家の家訓の一つだった。ほかにも、「田畑は開くべし、贖うべからず」とか「上から褒められるべからず、下から苦にされるべからず」といった面白いくだりもあるのだそうだ。

陸一は、村に堤という実を残した作衛門と、金次郎さんとを重ね合わせて聞いている自分に気が付いた。この村にも金次郎さんがいたのだと思った。

滔々と情け容赦なく流れる川があった。誰もが自分のことで精いっぱいの、石ころのような人々がいた。その中で敢えて流れの際に身を置いて川と村とを折り合わせようと力を尽くす生き方があった。天道に身を晒しながら一歩一歩人道を開いていく生き方があった。いつでもどこでも村はそのような生き方に支えられてきたのだと陸一は思った。

すると井戸に落とした石のように、自分の存在がすうっと小さくなっていき悠久を感じさせる響きに身を任す思いがするのであった。

「年々歳々報徳を忘るべからず」

と、陸一は呟いた。若い当主の作衛門が頷いた。

「お上が動こうと動くまいと、村人はやらまいかと踏み出すことで道をつけてきたんだべ。人の道は踏み出さにゃ付かんもんだべ。馬を川につれて行くことはできても水を飲ますことはできないという通り、お上が道をつけても人が自分から踏みだすとは限らんべ。そればかりか、馬なら横を向いてりゃ構わんが、お上が付けた道が人の道と違った時に、その一本道しか通っちゃなんめえとなったら、人はそれでも辛抱して歩かにゃならん。それでもいいというのなら、兵造の言う一村報徳は、近道にゃちげえねえべ。だども、おらあ願い下げだべ」

「だば、村長や村役場の力を借りずに報徳社を独り立ちさせたらどうだべか」

と、陸一は聞いてみた。

「そりゃあいい考えだべ。その上でなら一村報徳も悪かなかんべ。村役場にさきがけたことでも、村役場とは違ったことでも、始めることができるだべ」

しかし今は、独自に結社の認可に漕ぎ着けるだけの資産がなかった。独り立ちは五年も十年も先のことになるかもしれないと思われた。それは、今のこの盛り上がりに水を注すことになりかねなかった。しかし村の歴史から見れば五年や十年は大したことはないようにも感じられた。

「作衛門さんと話して、地に足がついたような気がするべ」

と、陸一は立ち上がった。

「そうか、そうか、陸一よ、また来てけろ」

と、作衛門も、よっこらしょと立ち上がった。背中の娘は眠ってしまった。作衛門の脇では、ほっぺたの赤い童女が、

「またきてけろ」

とささやいた。

外は、相変わらず雨がシトシトと降り続いていた。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十）

松下魏三

十六　タンパク質消化酵素の研究と帰国

海外留学の最後の国はアメリカで、当時、酵素のタンパク質を結晶化することに成功し、世界の学会で注目されていたプリンストン大学のロックフェラー医学研究所のJ・H・ノースロップ博士（一九四六年・ノーベル化学賞受賞）について昭和九年（一九三四年）の秋からタンパク質の消化酵素の分離精製と酵素の結晶化のための方法について研究を続けた。

この時特に感銘したのは、酵素が物を分解したり、合成する力をもっていることや無生物であるが結晶化することが大きな驚きであった。また酵素はタンパク質であっても、ただのタンパク質ではなく、生き物のように、ちょうど微生物が栄養をとって増殖するのと同じような現象を見せるので大変面白いと思った。

ここで研究したことはその後の赤堀博士の重要な研究の目標となり、多大な業績をあげることになったのである。

そして翌年の昭和十年（一九三五年）の一月早々にはアメリカから秩父丸に乗船し、三年間の海外留学を終えて帰国することができた。

横浜港では久し振りに出迎えた笑顔の和子夫人と満三歳になった長男の弘道さんが「お父さま、お帰りなさい」と可愛い声で繰り返す言葉には感動の余りまぶたの裏が熱くなった。と語っている。

十七　大阪帝国大学助教授に就任

帰国してから兵庫県の芦屋市に住むことになり、芦屋市から当時大阪市の中之島にあった大阪帝国大学理学部の助教授に任命され、有機化学の講座を担当することになった。

この大学は江戸後期の蘭学者である緒方洪庵が大阪に開いた蘭学の適塾の伝統を継いでいた大阪医科大学が昭和六年（一九三一年）に国立に移管され、同時に工学部と理学部を増設し、総合大学として大阪帝国大学が開学したのである。

大学は大阪の中心となっていた中之島にあって、関西の財界が協力して創立した帝国大学であったので官学的な雰囲気は余り感じられなかった。

そして初代の総長は土星型の原子模型で世界的に知られた原子物理学者の長岡半太郎博士であり、初代の理学部長は赤堀博士が東北帝大理学部時代の恩師であった眞島利行博士で、実父は京都の医者で大阪の有名な緒方洪庵の塾に学んだ蘭学者である。

赤堀博士が大阪帝国大学に着任して最初に取り組んだのは高峰譲吉博士が発見した消化酵素のタカジアスターゼの中のでんぷんの消化酵素のタカアミラーゼの精製であった。

赤堀博士がこの酵素を研究しようと考えた理由は二つで、一つはこの酵素は日本人が発見したものであることもう一つは原料が得やすいかったことである。

当初は微生物を培養し、そのなかから酵素を抽出しようと考えたが、その設備はなかったので手に入りやすい三共製薬のタカジアスターゼを利用することになった。

そして次の研究段階では消化酵素のタカジアスターゼの結晶化とその構造を決定することであった。（この研究は戦後に再開始し、昭和二十七年（一九五二年）には結晶化に成功し、タカアミラーゼAと名づけられた。）

その後この研究は約三十年間にもおよぶ生涯をかけた研究になった。試料のタカジアスターゼは三共製薬から大量を買いとり試験を続けたが、なかなか思うように進展しないうちに戦争は激しくなり、三共製薬ではタカジアスターゼの製造を中止してしまったので、やむなく研究を中断しなければならなかった。

十八　戦争が続くなかで

戦局は年ごとに悪化し、昭和十一年（一九三六年）二月二十六日には青年将校が決起し、政府の要人を殺害したいわゆる二・二六事件が起り、翌年の昭和十二年（一九三七年）には日中戦争が勃発し、戦時体制になっていった。

このような状況のなかで赤堀博士は昭和十四年（一九三九年）大阪帝国大学教授に昇格し、理学部化学科の第一講座を担当することになった。

大学の研究室では日増しに資材が不足し、研究活動は思うように進まず、日常生活も次第に戦時色に変わっていった。

このような情勢に対応するため、研究に関するすべてのことを再検討し、いろいろ工夫をしたが、やむをえず戦争に直接関係する研究をしなければならなかった。

まず最初に手掛けたのは毒ガスの一つである青酸[註1]を防御する青酸吸収剤をつくるため銅と生糸を原料にして、これらを軽石の小さな粒に混ぜてガスマスクに詰め、青酸の吸収効果を測定する研究であった。

測定するのは赤堀博士自ら試験してみなければならないので非常に危険であり、怖い研究であった。

ガスマスクに吸収させるものは猛毒の青酸ガスであるから試験をする赤堀博士は命懸けで怖くて怖くて仕方がなかった。と回想している。（赤堀四郎「わが青春」による）

また夜間でも青酸ガスが発見できる方法を研究し、青酸に反応して発光する物質を考えた。これは警察が血液の鑑識に使っているルミノール[註2]という色素と水酸化第二鉄と水酸化バリウムを混ぜたものが青酸と反応し発光するので、この発光現象を利用したものである。

このように本来の研究とは根本的に違い希望のもてない研究をしなければならない状況のなかで、日常生活は食糧も衣料もすべて不足し、連日のように空襲[註3]があり暗い時代であった。

戦時中の厳しい状況の昭和十九年（一九四四年）の九月には博士が海外留学から帰国した年に生れた二男の弘次さんがジフテリアで亡くなった。

現在では予防接種が普及しているのでジフテリアにかかることはほとんどない。当時でもジフテリア血清があれば回復できたはずであるが、戦時中で医者の手元には抗血清[註4]がなく、取り返しのつかない誠に残念な結果となったのである。博士ご夫妻の落胆は察するに余りあるものがあった。

（註1）青酸
シアン化水素水溶液の俗称（広辞苑）

（註2）ルミノール
有機化合物の一つ。白色の固体。これを水に溶かした液を過酸化水素で酸化させると、青白く発光する。血痕の検出に利用する。（新選国語辞典）

（註3）空襲
航空機から機関砲・爆弾・焼夷弾・ミサイルなどで地上目標を襲撃すること（広辞苑）

（註4）抗血清
抗原を動物に注射して得られる抗体を含む血清。実験または治療に用いる。（広辞苑）

（つづく）

還暦からの考古学（十三）

三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その7）

中山喬央

日本列島の地質構造について

馬渕久夫・平尾良光は一九八七年発表論文八〇頁3、日本産鉛と大陸産鉛の識別の項で

「漢式鏡に関する初期の研究で、中国製の鏡と日本産鉛を識別するためにはB式図にプロットするとよいことを報告した。～今回報告する鉛鉱石の測定でも、第2図（第一図参照）に示すように中国産と朝鮮半島産はB式図によって日本産鉛と区別できる事は明らかである。これはB式図が鉛鉱床の生成年代を反映するプロット方式であることに起因している。

理論的な説明は専門書に譲るが、第2図（第一図参照）の中の中国鏡の範囲を表す2本の平行線のように斜めに走る直線はアイソクロン（等時線）、つまりB式図では、その直線上の鉛鉱床の年代が等しいものに相当すると考えられる。アイソクロンは下方に位置するほど若い年代になる。新生代（六千四百万年以内）の鉱山が圧倒的に多い日本と、新生代より古い（六千四百万年以上）鉱山が大半の中国・朝鮮半島が図で区別されるのはこのためである。日本の中で古い部類に属する神岡鉱山（第2図の楕円形の点線）や対州鉱山が大陸寄りの値になるのもこれによって説明される」

と述べて新生代に大陸と分離した日本列島は一部の例外を除いて、鉱山の地質の大半が六千四百万年以降のものであるから、大陸・朝鮮半島とは区別できるとしております。

実情はどうでしょうか。まず第二図日本列島の地質構造図をご覧下さい。全く違う事にお気づきと思います。

日本列島は、中生代白亜紀（一億三千五百万年前～六千五百万年前）以前の地質が大半を占めているのです。

日本列島における鉱山地質についての検証

栃木県立博物館展示資料（二〇〇七年十一月十七日現

在）によりますと同県の地質構造及び鉱物に関係する部分について次の様に説明されております。

石の年齢

現在知られている世界で最も古い岩石はカナダ北西部で産したアカスタ片麻岩で、ジルコン結晶のU—pb放射年代を測定した結果、およそ三十九億六千万年前の測定値が得られています。

日本の最古の岩石とされるもののひとつに飛騨の片麻岩があり、十一億年より古いと推測されています。また岐阜県の上麻生礫岩に含まれる片麻岩の礫は、約二十億年前のものとされています。日本列島が大陸から離れたとされるのは新生代（六千五百万年前以降）ですから、これらの片麻岩類は大陸縁辺部で形成された変成岩と考えられます。

栃木県で最も古い石

栃木県内の最古の岩石は、足尾山地に分布する石灰岩および輝緑凝灰岩です。示準化石（時代を示す化石）であるバラフズリナを産出することからペルム紀（二・五～二・九億年前）に形成されたと推定されています。

足尾鉱山の鉱物

足尾鉱山は、開山以来七十～八十万トンの銅を生産したといわれる日本でも有数の銅鉱山でした。鉱床は、新生代第三紀中新世（二三五〇万年前～五三〇万年前）の流紋岩からなる備前楯山と、周辺に分布する中生代（二億四千五百万年前～六千五百万年前）の粘板岩、砂岩、チャートなどの堆積岩中にありました。鉱床には、鉱脈と河鹿鉱床と呼ばれる交代鉱床の二種類があり、主に黄銅鉱（銅と鉄と硫黄から成り、銅の重要な鉱石。時に金銀を含有する）を鉱石として採掘しました。産出した鉱物には斑銅鉱（銅・鉄の硫化物—硫化物とは硫黄と陽性元素：種々の元素と良く化合し、常温で水を分解して水素を発生させるアルカリ金属など、原子がたやすく電子を失って陽イオンとなりやすい元素：との化合物—から成る赤褐色の鉱物）、黄鉄鉱（硫黄・硫酸の製造などに使用する、二硫化鉄からなる鉱物）、硫砒鉄鉱（砒素の原料鉱石。鉄と砒素を含む硫化鉱物—硫黄と陽性元素との化合した鉱石）、閃亜鉛鉱（硫化亜鉛—硫黄と亜鉛との化合物—を主成分とする鉱物）、方鉛鉱（硫化鉛を主成分とする鉱物。鉛の重要な原料鉱石。また硫化銀をも含むため銀の原料ともなる）、自然蒼鉛（蒼鉛はビスマス—鉛・錫・カドミウムと可融合金を造り、また薬用・顔料・陶器上絵用とする—の別称）、黄錫鉱、藍銅鉱（孔雀石に伴って産し、銅または顔料を製する炭酸銅を主成分とする鉱物）、孔雀石（炭酸銅・水酸化銅から成る鉱物。装飾石として用い、また銅鉱石・顔料用などに供する）、自然銅（天然

に単体の状態で産する銅）などがありました。

栃木県の地下資源

栃木県内には、一九六〇年代まで多数の鉱山が操業していました。しかし、金や銅といった金属を対象とした鉱山は、鉱脈の枯渇や経済的な問題から全て操業を停止しています。現在操業しているのは、葛生町を中心としたドロマイトや今市市から上河内町のカオリン、蛍石といった粘土及び粟野町付近の珪石を採掘する鉱山だけです。石材としては、宇都宮市の大谷石、那須町の芦野石などがあり、県南部を中心に建設用の砕石として石灰岩、砂岩、層状チャートなどが盛んに採掘されています。

一方西隣の群馬県の様子については、群馬県立歴史博物館総合案内十一頁「群馬の土地の生い立ち」で次の様に説明されています。

古生代（約五億九千万年前～約二億五千万年前まで）の群馬県は、浅い海の底になっていた。この海の堆積物からは、三葉虫やヘリコプリオンなどの化石が発見されている。中生代（約二億五千万年前～六千五百万年前まで）には徐々に陸地になり恐竜（山中竜）・シダ植物・裸子植物の陸上生物が生息していた。海中にはサメ・アンモナイト・エビ・ウニ・貝類などが生息していたことが確かめられている。

新生代なかごろ（約二千万年前）には、群馬県の大部分が再び海になってしまった。しかし、この海底は激しい火山活動と共に隆起し、五百万年前には、ほぼ陸地となった。この火山活動によって、荒船山、妙義山などの山体を形成している岩石や、緑色凝灰岩などが噴出した。新生代第四紀（約二百万年前～現在）にも、火山活動は活発であった。

地下資源については次の様に触れております。

褐鉄鉱鉱石

群馬鉄山といわれた吾妻郡六合村にある褐鉄鉱の鉱床は、地表に湧き出した温泉水中に含まれていた鉄分が水底に沈みできたもので、しばしば植物化石が含まれている。現ＪＲ吾妻線は、この鉱石を輸送するため建設された。群馬鉄山の最盛期には、釜石鉄山に次ぎ日本第二位の鉄の生産量があった。

更に千葉県の大地の歴史につき、千葉県立中央博物館総合案内より話をします。

銚子地域・嶺岡山地の地質

房総半島の大地の歴史は、銚子地域にみられる中生代

の地層の形成から始まる。それらは三畳紀～ジュラ紀（二億四千五百万年前～一億三千五百万年前）の地層と、白亜紀（一億三千五百万年前～六千五百万年前）の地層に分かれる。

前者はプレートの沈み込みにより海溝でつくられた地層で、日本列島の土台をつくる地層の一部である。後者は、対照的に非常に浅い海でできた地層で、アンモナイトやトリゴニアなど、化石を豊富に産する。

房総半島南部の嶺岡山地を作る地層は、新生代古第三紀（六千五百万年前～二千三百五十万年前）の海底を作っていたもので、海底の表層から地下にわたる一連の地層や岩石がみられる。これらの地層が、新生代の新第三紀（二千三百五十万年前～一六五万年前）に海底に突出し、高まりを作った。この突出は其の後の房総半島の地層をためるためのダムの役割を果たすこととなる。

房総丘陵・安房丘陵の地質

房総半島中部の房総丘陵、南部の安房丘陵は、二千万年前から数十万年前に堆積した地層群からできている。この地域の地層には、火山灰など火山性物質が多く、活発な火山活動があったことを示している。また褶曲や断層など、地層の変形が著しく、激しい力が働いたことを思わせる。化石や堆積相の研究から、これらの地層は、深海で堆積した事がわかっており、この地域の急激な上昇を物語っている。

この地域には化石産地がところどころに見られる。なかでも鋸山周辺の千畑層は、多様な化石群が知られており、新第三紀中新世（二千万年前～五百万年前）後期から、鮮新世（五百万年前～二百万年前）前期の生物地理を考えるうえで貴重な資料を提供している。

上総丘陵の地質

房総半島中部にひろがる上総丘陵は、上総層群と呼ばれる約三百万年前～五十万年前の地層からできている。上総層群は、厚さ三千米以上あり、泥と砂からなる。下部は泥の層が厚く、上部は砂の層が厚い。

下部の泥の層には深海の生物の化石が含まれ、また海底の土石流によって浅いところから深海底に繰り返し運び込まれた砂や泥の層も見られる。一方上部の砂の層には、浅い海の生物の化石を含み、潮流や海流、台風時の流れや波などによって溜まったと考えられる地層の縞模様が見られる。これらの地層の様子から、二千米～三千米級の深い海が次第に埋められて浅くなっていった事が分る。

下総台地の地質

房総半島北部の下総台地は、主に下総層群と呼ばれる約五十万年前～八万年前の地層から出来ている。

下総層群は砂の厚い層と礫や泥の薄い層が交互に積もって出来、砂の層には、浅い海に棲む貝の化石がたくさん含まれる。下総層群がたまった海は、古東京湾と呼ばれる入海で、現在の関東平野一面に広がっていた。

また下総層群は浅い海で出来た地層と、川や沼など陸に堆積した地層の繰り返し（堆積サイクル）がみられる。これは古東京湾の海面が高くなったり低くなったりすることが繰り返し起こったためである。すなわち海面が高い時には浅い海の堆積物が溜まり、海面の低い時期には陸化して、川や沼などの堆積物が溜まったのである。

沖積平野の地質

約二万年前ごろ最後の氷河期が訪れ、海面が現在の海面より百メートルほども低下した。其の後氷河期も終り、完新世の中期、約六千年前～五千年前ごろまで、縄文海進と呼ばれる海面上昇が起こり、逆に海面は現在よりやや高い所まで上昇した。

海面上昇によって、以前の谷に沿って海が入り込み入海が作られたが、この入海は海進が終わると沖積層と呼ばれる砂や泥の地層によって埋め立てられ、沖積平野が作られた。

縄文海進の最高海面期ごろは、海水温も現在より高く、房総南部の古館山湾などには礁珊瑚が各所に生育し、現在その化石層は、沼珊瑚層と呼ばれている。

日本の地下資源と鉱山

ここで日本の地下資源と鉱山はどうなっているのかにつき、『学習百科大事典3日本の自然と産業』のなかの「日本の鉱業」から説明します。

日本は鉱物の博物館といわれるほど、非常に多くの種類の鉱物がとれますが、どれも埋蔵量はあまり多くなく、質も劣るものが多いのです。資源として割合多いのは、銅・鉛・亜鉛や、石炭・石灰石などの一部の鉱物に限られています。

銅　鉱

銅は、鉱物資源の少ない日本としては割合恵まれている方です。銅鉱には、製錬する必要の無い自然銅のほか、主に硫黄と一緒になっている斑銅鉱・黄銅鉱などをはじめ、酸素のまじっている赤銅鉱（酸化第一銅から成る鉱物。塊状・粒状・土状・時に毛髪状をなすことがある。質脆く、紅黒色で光沢がある）・黒銅鉱・藍銅鉱・孔雀石などがあります。このうち最も代表的な銅鉱は黄銅鉱です。

銅も鉄鉱と同じように、東日本に多く分布しています。おもな銅山は、秋田県の花岡・小坂・釈迦内、岩手県の釜石、北海道の下川などです。昔から有名だった栃木県の足尾や愛媛県の別子は一九七三年に閉山し、茨城県の日立も生産高が少なくなっています。

鉛鉱と亜鉛鉱

鉛は普通、亜鉛や銅・銀などと一緒にとれます。鉛の主な鉱石は方鉛鉱です。

鉛鉱は、地下資源の乏しい日本としては割合恵まれているほうです。主な鉱山は、北海道の豊羽、宮城県の細倉、岐阜県の神岡、秋田県の小坂・花岡、福井県の中竜などがあります。長崎県対馬の対州鉱山は、一九七三年に閉山しました。

亜鉛の主な鉱石は、亜鉛鉱です。亜鉛鉱は、日本では銅鉱と共に恵まれている資源です。

一番大きい亜鉛鉱山は、岐阜県の神岡鉱山で、全国の生産高の約三割が、この鉱山で産出されています。そのほか、北海道の豊羽、宮城県の細倉、福井県の中竜、秋田県の小坂などが主な鉱山です。

錫　石

シャクセキあるいはスズイシと呼びます。錫のほとんど唯一の鉱石で、花崗岩質の火成岩と成因的に関係のある高温鉱床に限って産出します。

京都府亀岡市の花崗岩中の石英脈に錫石の結晶が点々と入っているものが知られていますが、文献でも『続日本紀』文武天皇二年（六九八年）七月十七日、伊予国が白鉛（錫と鉛の混合物）を献じた記載が見られます。

結　び

このように日本列島は約六千五百万年に大陸から分離しましたが、それは決して六千五百万年以降の地質のみで形成されていることを意味するものではなく、鉱山についても、日本の脊梁山脈を越えて太平洋側となる足尾銅山でも、鉱床には日本列島が大陸から分離する以前の中生代のものがあり、又同一鉱山でも様々な年代の鉱床があることがお分かりと思います。

これらの事は、馬渕・平尾による一九八二年一月論文、北海道・広尾と北海道・余市の違いとか、一九八二年一月論文、秋田県・太良と一九八七年論文、秋田県・太良の違いに現れていると共に、一九八七年論文における中国大陸・雲南省・会沢と金頂の違い、同論文における朝鮮半島・慶尚北道・第一蓮花の四一八と四一四～四一七の鉛同位体比の違いにも明確に現れております。

要は鉛鉱床は、同一鉱山、同一地方であっても、構成比とか生成年代が大きく異なるものがあるのだと云う事です。

さらに第二図、日本列島の地質構造図からも明らかなように、日本列島の地質は、六千五百万年前、大陸から分離する以前の地質構造帯のみの地域が大半を占めているだけでなく、各県別の検証によっても明らかなように、当該構造図よりも更に古い岩石が点在しており、加えて

銅鉱石、鉛鉱石については相対的に豊富な埋蔵がみられた訳です。

ここで銅と人間との関係について考えてみますと、銅は人類が最も早く認識して使用した金属の一つで、メソポタミアでは、約一万年前の、自然銅の飾り物が発見されていますが、BC四千年前後にトルコ・イラクで銅製錬技術が開発されますと、中国大陸には、新石器時代の馬家窯文化・大汶口文化・龍山文化等で銅器が検出されるようになり、朝鮮半島でも遼寧地方経由で三千年前には青銅器文化が発生します。その何れもが地元の鉱山を開発して製錬を行ったものと考えられています。この文化の伝播の延長線上にある日本列島でも同様な事が発生したと考えるのは当然の事と思います。

その一方で、其の後、測定された別子銅山系のA式図アイソクロンが別のラインを示したこともあり、著名鉱山で現在鉛同位体比未測定の栃木県・足尾、秋田県・花岡、岩手県・釜石、北海道・下川、茨城県・日立、福井県・中竜等の地層別鉛同位体比測定を実施すれば、従来とは異なる日本列島の鉛鉱石分布の状態が浮かび上がってくるのではないかと考えます。以上述べた事柄を配慮して、馬渕・平尾が様々な理由をつけて削除した神岡鉱山は勿論の事、北海道・広尾、秋田県・太良、石川県・倉谷・尾小屋等二十点の日本列島産方鉛鉱の鉛同位体比は極めて貴重な資料として、全て復活させて考える事としました。

話は変りますが、銅のインゴットの大陸・半島よりの遠距離搬送につきましては、まず同じ列島内にある鉱山の鉱石によるインゴット使用を考えた方が、平和の時代が短かく、且つ陸上搬送・海上輸送の危険度が非常に高かった当時の社会情勢を考えれば、よりベターであるとも思考しております。

これらを総合して考えれば、馬渕久夫による一九九五年「鉛同位体比による青銅器原料産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』の二六〇頁、「日本産原料の出現」のなかの

「～結果として日本の鉛の鉱床は若く、中国北部や朝鮮半島北部の鉱床は古く、韓国の鉱床のなかには弥生時代のラインのように日本と中国の中間にくるものがあることを理解していただければ当面は十分である」とか、本項の冒頭で述べた彼等の理論とは全く相反するのが本文の論説大綱であることが、お分かりと思います。

次号では現在提示されている鉛同位体比資料全てを包含して判断した、「弥生時代日本列島産青銅器原料の調達」につき、論じます。

参考文献

志村隆『鉱物・岩石』学習研究社、二〇〇五年。
鈴木泰二「日本の鉱業」『学研学習大事典第三巻日本の自然と産業』学習研究社、一九七八年。
沼田眞『千葉県立中央博物館・総合案内』一九九八年。
方雄正『国立中央博物館』通川文化社、一九九八年。
馬渕久夫「鉛同位体比による青銅器原料産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、一九九五年。
馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』三七〇東京国立博物館、一九八二年一月。
馬渕久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』七三―一日本考古学会、一九八七年。
女屋正斌『群馬県立歴史博物館・総合案内』一九九三年。
李学勤「銅器」『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社、一九八六年。

まんじ110号特集号発行についてのお知らせ

先日のまんじ104号合評会にて、掲題の件につきまして参加されました同人各位のご賛同をいただきましたので、下記明細の通り計画を進めたいと思いますので御連絡申し上げます。

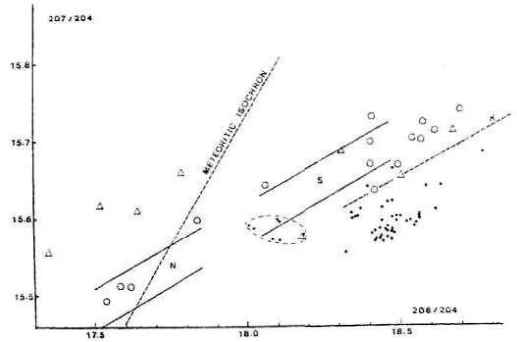
記

1. 発行日は平成20年11月1日です。
2. 原稿〆切は平成20年6月25日です。従って来る6月25日には『まんじ』109号と、110号の、二つの寄稿をお願いすることになります。
3. 特集号ですから、読み切り物で四百字詰原稿用紙30枚（12,000字）程度のものをお願いします。新作でも既発表の物でも結構です。
4. 製作会社は栄光出版社です。

以上

発行人　三戸岡道夫
編集担当　中山　喬央

第一図



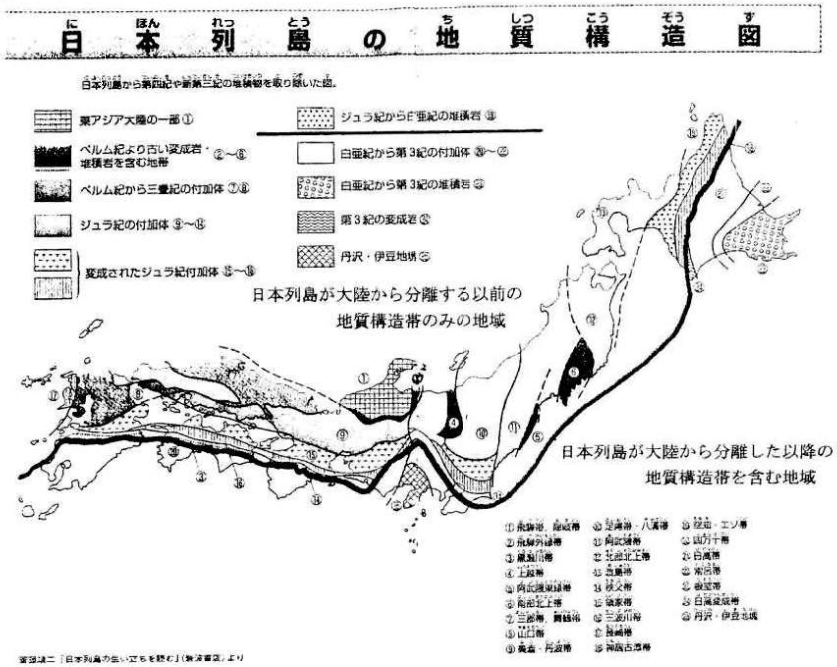
第２図青銅器と鉛鉱石の鉛同位体比分布（Ｂ式図）

Ｎ：前漢鏡の範囲　　Ｓ：後漢・三国鏡の範囲

Ｋ：朝鮮系遺物ライン　○：中国産鉛鉱石

△：朝鮮半島産鉛鉱石　●：日本産鉛鉱石

第二図



鏡（その５）

中山喬央

五嫂対面の巻

まもなく五嫂がきた。
私は直ぐに次の詩を作った。

奇異妍雅　あやしくもあでやかな姿の
貌特驚新　はっとするほど派手な顔立ちの人よ
眉間月出疑争夜　眉のところは月が出て、夜を争うかのようだ
頬上華開似闘春　頬には花が開いて、春をかちとったらしい
細腰偏愛転　ほっそりとした腰は、しなしなと動きやすく
笑瞼特宜嚬　笑顔は微笑がことさらによく似合う
眞成物外奇稀物　ほんとうになみはずれた珍しい物で
實是人間断絶人　確かに人の世に稀にしかいない人だ
自然能挙止　無理の無いたちいふるまいの
可念無比方　愛らしさは並ぶものが無い
能令公子百重生　そのよさに公達は百回生き返り
巧使王孫千遍死　たくみさが王子を千回も殺す
黒雲裁両鬢　黒い霞を二つに裁ったような鬢
白雪分双鬌　白い雪を二つに分けたような鬌並び
織成錦袖麒麟児　錦の袖に麒麟の児を織り上げて
刺繍裙腰鸚鵡子　裙の腰に鸚鵡の子を刺繍している
触処尽関懐　どこもかしこも心にかない
何曾有不佳　悪いところなどどこにあろう
機関太雅妙　ものの言いようがあまりにもみやびやかで
行歩絶媚態　歩き方は素晴らしく魅惑的であった
傍人一一丹羅韈　かたわらの人は一人一人が赤い薄絹の靴下をはき
侍婢三三緑線鞋　側に仕える女は二、三人が緑の線鞋をはいている

黄龍透入黄金釧　黄龍がはねて黄金の釧に入り
白燕飛来白玉釵　白燕が飛んで白玉の簪にきている

挨拶がすんでから、五嫂が言った。

「少府さまは、山を越え、川を渡り、長い旅でさぞお疲れのことでしょう。当地にお着きになって、ご気分が悪いことはありませんか」

わたしは答えた。

「みかどのおおせをかしこみ奮闘しておりますので苦労をいとうものですか」

五嫂が、振り向いて笑いながら十娘に言った。

「今朝、カササギがさえずりあっていましたが、本当にいいお客様がお出でになったわね」

古来カササギが鳴くと吉祥の前兆だと信じられ、喜鵲ともいいました。また乾鵲ともいいました。漢代の『西京雑記』三に、「乾鵲がさわぐと旅人が来、くもがすくうと万事めでたい」とあります。

わたしは、それを受けて

「昨夜、目のふちがぴくぴく動きました。今朝良い人に会ったわけです」

というなり、案内に従って広間にあがった。

目のふちがぴくぴく動く事は、耳たぶがほてると共に、唐代何か物事の起こる前兆として信じられていました。本文の場合は吉兆ですが、凶兆の場合もあります。

原文の「眼皮」は『倭名抄』「形体部・耳目類」の「眼」に本文をひいています。『遊仙窟』にいう、眼皮。師説によれば万比岐。一説によれば「万奈古井」。

狩谷棭斎の『箋注』では、万奈古井（マナコイ）は、『枕草子』や『源氏物語』に見え、これは俗にいう「米都岐」（メツキ）であり、「眼皮」は「眼瞼」（マナブタ）であるから「眼皮」の訓としては妥当ではないとしています。

宴席の巻

十娘が言った。

「緑竹に琵琶を弾かせましょう。わたしは少府さまのためお酒をさしあげます」

琵琶を弾く前にわたしは一首、作った。

心虚不可測　うつろな心は測りしれないが
眼細強関情　細い眼がしょうこともなく気をひく
廻身已入抱　くるりと身体をまわして抱かれているのに
不見有嬌声　まだ甘えた声が聞こえない

十娘は、うてばひびくように、すぐさま歌った。

憐腸忽欲断　せつないほどいとしいのに
憶眼已先開　思いをこめて眼がもう開いている
渠未相撩撥　まだ、かきたてていないもの
嬌従何処来　甘えた声はどこから出てきましょう

わたしは、この詩を聞くなり、驚きのあまり、床から立ち上がってお辞儀をした。

「これまでは、お顔を拝見しただけでした。いまやっとお心がわかりました。班婕妤（約前四八～前六年。前漢の女性学者。婕妤は倢伃とかく。女偏がついても同じ。倢伃は皇帝の寵愛を受けたという意味。班倢伃は、班固の祖姑。成帝のとき後宮に入った）ですら車を押す役がいいところです。曹大家（約四九～約一二〇年。後漢の女性文学者、歴史家。班彪の娘で、班固の妹であった。曹世叔に嫁いだが若くして夫に先立たれた。博学で才能すぐれ班固が『漢書』を著し、八「表」、「天文志」未完のまま死んだあと、馬続と共にこれを完成した。宮廷に出入し、皇后妃嬪が師事し曹大家と呼ばれた）だって筆をおきます。とても年を同じくして語り、時代を共にして論ぜられるものではありません」

そこで筆と硯を持ってきてもらい、書写して袖にしまった。書写が終わると、十娘が、からかった。

「少府様は、詩句がずば抜けて上手なばかりでなく、書もお見事ね。筆づかいは青鸞（伝説中の神鳥）に似ているし、人柄は白鶴（『世説新語』「賞誉」篇、いわゆる雲のなかの白鶴で、燕や雀などの網にはとてもかかるものではない）と同じだわ」

わたしは十娘に言った。

「才智や感情がゆたかなばかりでなく、吟詠が実にお上手です。ご器量がよくて、しかも鈴を転がすようなお声とは意外でした」

十娘、

「わたしは、このごろ、咳がひどくて、声がとおらないのよ」

わたしは答えた。

「わたしも、このごろ、手が震えて、筆の運び具合が悪いのです」

五嫂が笑い出した。

まもなく桂心が酒の肴を運んできた。東海の鰬魚の条（『倭名抄』四「飲食部・魚鳥類」の魚条に本文を引く）、西山の鳳の肉の丸干し、鹿の尾と鹿の舌、干魚と焼肉、雁の肉のししびしおに、荇菜（野菜の一種、あさざ）の漬物をそえたもの、鶉の吸い物と桂を加え米であえた肉汁（原文・桂糝。「糝」は、牛・羊・豚の肉を小さく切り、

米を二、肉を一の割合で一緒にいためたもの)、熊の掌と兎の股、雉の尾の肉(原文「雉臄」『倭名抄』七「羽族部・鳥体」の「臄」に、本文を引く)、豺(狼の類)の唇など、山海の珍味が語り尽くせず、言い尽くせぬほど並べられた。

十娘が、
「少府さまもたいへんお腹がおすきになったでしょう」
と言って、桂心を呼んで飯をよそわせた。
わたしは遠慮していった。
「いましがた、たっぷり眼の保養をしたので、ひもじい感じがありません」
十娘が、笑顔を見せながら、たしなめた。
「おふざけにならないで!双六盤を持ってきて。少府さまとお酒を賭けます」
わたしは答えた。
「酒を賭けるのは駄目です。奥様と寝る事を賭けます」
「寝ることを賭けるって、どんなことなの?」
と十娘が訊ねたので、わたしは答えた。
「十娘が負けたら、わたしと一夜共に寝ます。わたしが負けたら、十娘と一夜、一緒に寝ます」
十娘は笑い出した。
「漢人がろばに乗るなら、胡人は徒歩、胡人が徒歩なら、漢人はろばに乗るのね。どちらにしても、負ければあちらが得をするのでしょう。私に、つらい事ばかり繰り返させるなんて、少府さまはひどすぎるわ」
五嫂が、口を出した。
「奥様に申し上げます。賭けをやりとりする必要はないわ。今夜きっと奥様はのがれられません」
十娘、
「お嫂さんはしょっちゅうふざけたことを言って、少府様に無駄な合図を送っているのね」
わたしは立ち上がって失礼をわびた。
「はじめから冗談だと知っております。ぶしつけなことは希望してはおりません」
双六盤が来た。十娘はそちらへ手をのばした。眼を細めて笑い、手の先がやわらかく、ふっくらとして、双の腕は、わたしの腸を断ち、十の指先は、人の心の髄に突き刺さった。
わたしはそこで双六盤を詠じた。

眼似星初転　眼は星がめぐるようだ
眉如月欲消　眉は月が隠れかかった時に似ている
先須捺後脚　まず後ろの脚をおさえよう
然使勒前腰　そうすれば前の腰は抱きしめられる

十娘の方はこういう詩を作った。

勒腰須巧快　腰を抱くのは手際よく
捺脚更風流　脚をおさえれば、なお粋なもの
但令細眼合　細い眼が合いさえすれば
人自分輸籌　人は負けたとあきらめる

しばらくして、飲物、食物がすべてきた。いい香りが部屋に満ち、赤や白、色とりどりの品がずらりと並んだ。
わたしは立ち上がって礼を述べた。
「わたしは、お二人をもともと存じ上げておりません。たまたま公用で派遣されて、はからずもお会いしました。世にも稀な珍しいご馳走をいただき、手厚いおもてなしを受けました。身を粉にし、骨を灰にしても、お返しできません」
五嫂が言った。
「親しい間柄は礼は言わぬもの、礼をいうのは親しくないのです。どうぞ張さまは遠慮なさらないで下さい」
わたしは答えた。
「せっかくのお言葉ですから辞退致しません」
このとき、わたしは気をうしないそうになって、思わず眼をめぐらして十娘を盗み見した。
十娘が言った。
「少府さま、わたしを見ないで」
五嫂が
「まだふざけるのね」
わたしは詩を一首作った。

忽然心裏愛　ふと、いとしさ胸にせまり
不覚眼中憐　いつしか恋が眼にのぞく
未関双眼曲　眼の曲のせいではないけれど
直是寸心偏　小さき胸のかたよりぬ

十娘

眼心非一処　眼と胸は同じところにおらぬもの
心眼旧分離　胸と眼はもとから離れているゆえに
直令渠眼見　その眼に見えたところとて
誰遣報心知　胸には誰が告げ知らすやら

わたし

旧来心使眼　もともと胸の思いは眼の主人
心思眼即伝　胸の思いは眼がすぐ伝える
由心使眼見　胸が眼に見させるものゆえに
眼亦共心憐　眼もやはり胸と一緒に恋いしたう

十娘

眼心俱憶念　眼も胸も思いしのぶものゆえに

心眼共追尋　胸と眼はそろってあとを追いたずねる
誰家解事眼　ほんに誰やら、わけ知りの
副著可憐心　その眼が可愛い胸と組んだとは

それから、五嫂は、果物を題にして洒落を言った。

但問意如何　お気持はどうかと聞かれたら
相知不在棗　そう、早くデーツしなかったことね

「棗」を同音の「早」にかけている。亦date palmのdateをdateにかけた。

十娘

兒今正意密　わたし、いま、胸が一杯なの
不忍即分梨　情け有りの実、こころなしの別れよ

わたし

忽遇深恩　はからずも格別のおもてなし
一生有杏　人生あんずるどころか幸

五嫂

当此之時　こうなってはとても抑えられはせぬ
誰能忍捺　たといかたなしと言われようとも

十娘が話題をかえた。

「少府さま、ちょっと小刀を貸してください。梨をむきます」

そこでわたしは、小刀を歌に詠んだ。

自憐膠漆重　塗りかためし固き縁のいとしさに
相思意不窮　恋い慕う心の緒は絶えぬなり
可惜尖頭物　あたら、さきのとがりし得手物こそ
終日在皮中　ひねもす皮をかむりしままなれ

すると、十娘が、鞘を歌った。

数捺皮応緩　おしつけるほど皮ゆるみ
頻磨快転多　とぐほどに滑りよく
渠今抜出後　そをいま抜いてしまいし空の鞘
空鞘欲如何　あとはいかになりぬらん

これを聞いて、五嫂がひやかした。

「いまのは、益々おやすくなくなったわね」

そう言うなり、碁盤を持ってこさせた。少府さまと酒を賭けたのである。

わたしが賭けに勝った。

五嫂

「囲碁は智恵から生まれたものだけど、張さまも強すぎるわ」

わたし

「賢者でも千慮の一失（『史記』「淮陰侯列伝」に、韓信が、広武軍李左車の意見を求めた時、李左車の答えた言葉として出ている）を免れないように、愚者でも千慮の一得はよくあることです。まあやめましょう」

十娘は、香児を呼んで少府さまをもてなすため音楽の支度をさせた。青銅や石の楽器の音に、笙や管の響きが加わって、かの蘇合が琵琶を弾き、緑竹が篳篥を吹き、仙人が瑟をかなで、玉女が笙を吹き、黒き鶴でさえ（春秋時代、晋の師曠が琴を弾くと、多くの黒い鶴が呼び寄せられたという『類聚』四一に引く『韓子』）臥して琴の音に聞き入り、白き魚まで（古代、瓠巴が琴を弾じたとき、鳥や魚が節にあわせて舞い踊ったという『列子』「湯問」篇）水の上に踊って拍子に合わせたとは、このことであろうか。

澄んだ楽の音に、梁の塵もたちまち飛び、鳴り響く妙なる調べに、突如天から雪が降り落ちてきた（鄭国の楽師、鄭師文の話『列子』「湯問」篇に、夏、琴を弾いたところ、霜と雪がこもごも降ったという）。しばし食物の味を忘れるほど孔丘（丘は孔子の名。『論語』「述而」篇に、孔子が、斉で韶楽を聴き、楽しさのあまり三ヶ月も肉の味に気がつかなかったという話による。孔丘と書き、神格化しておらず、教学の権威として見ていない点が注目される）が茫然としたのも、根拠のない話ではなく、韓娥（戦国時代の韓の、歌の名人。斉に行き、食料が乏しく、雍門で歌を売って食料を手に入れていた。その去ったあと、余韻が三日間、梁や棟にただよったという『列子』「湯問」篇）の歌声も事実であったに違いない。

十娘が言った。

「少府さまは、滅多にお出でになりません。思いっきり楽しみましょう。お嫂さんは、たいへん舞が上手です。さあ一曲、踊ってくださいな」

辞退もせずに、そのまま身体をくねらせながら立ち上がり、あでやかに、しずしずと歩をはこんだ。

うすぎぬの衣はあざやかで、翠の鳳鳥が、雲を翔けるよう、錦の袖はひらめいて、青の鸞鳥が水に映るようであった。

さまざまな魅惑にとむ眼に、天上ではその流れる星を見失い、ほっそりとした腰つきは、洛水のほとりに舞いめぐる雪も恥じるであろう。

前に光り輝き、後ろに色美しく映えるさまは、まこと

にめずらしい情景であり、進み出て、引き下がる仕草は、またと見られぬ姿であった。
二人は、揃って立ち上がって舞いながら、わたしに舞をすすめた。
わたしは身をおこして

「滄海之中難為水　大海原のなかでは水も成りたたず
霹靂之後難為雷　霹靂（へきれき）のあとでは雷もとどろかず

といいますが、辞退するのも失礼と存じ、つたない舞をご覧にいれます」
と断って、そのまま立って舞い始めた。
その時、硯が床のはしにあった。そこで、わたしは筆と硯をさして、詩を一首作った。

摧毛任便点　毛をぬいて使いよくさせる
愛色転須磨　色をめでて、かえってすらなきゃならない
所以研難竟　だから、すりおわるのが難しい
良由水太多　まったく水気が多すぎるせいだ

十娘は、ふと鴨の頭の形をした鐪子（かんなべ）（「鐪」は釜のたぐい。ただ、耳と足がある。伊藤東涯『名物六帖』では、ナベという訓をつけている。『倭名類聚抄』四「器目部・金器」では、鐪と同じと記してアシナベという訓をあてている）を見て、それを題にして一首作った。

觜長非為吸　口が長いのは、吸われたためでなく
項曲不由攀　うなじが曲がっているのは、手をかけられたからでもない
但令脚直上　脚を真直ぐに上げさえしたら
他自眼双翻　あれは目の玉がひっくりかえる

五嫂が、これを聞いて口をはさんだ。
「いまのは、ものすごく手厳しいわね。段々と深みにはまるわ」
その時、二羽の燕が、梁の間を、互いに追いながら飛びまわった。
わたしはそこで一首作った。

双燕子　二羽の燕よ
聯翩幾万廻　それぞれ孤独に何万回もめぐる
強知人是客　やっとのことで人が客だと知って
方便悩他来　わざとからかいに来たのか

十娘は、次の詩を作った。

双燕子　二羽の燕よ
可可事風流　ちょっと浮気をしているのね
即令人得伴　人がつれを得ようと
更亦不相求　ねだりもしない

酒が十娘に回ってきた。わたしは酒をくむ柄杓を指して一首作った。

尾動惟須急　柄を動かすのは手早くする事が大切です
頭低即不平　頭が下がると、おだやかではなくなる
渠今合把爵　さあ、杯を手にとって
深浅任君情　深かろうと、浅かろうと、君の情まかせなのですよ

十娘は小さな杯を歌にした。

発初先向口　はじめは、まず口にあてて
欲竟漸昇頭　おわりは、次第に頭にのぼる
従君中道歇　途中で休もうとも
到底即須休　底についたら、おしまいなの

わたしは、急いで立ち上がり賞讃した。
「入神のお作です。天成の境地で、人間が稽古して得られるものではありません」

五嫂が言った。
「張様は、お着きになったばかりで、気晴らしができませんわね。ちょっと裏の花園に行き、しばらくお楽になさったら」

参考文献
今村与志雄『遊仙窟』岩波書店、一九九〇年。
成瀬哲生「遊仙窟」『中国古典小説選4』明治書院、二〇〇五年。

青の漂流（四）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

一八六九年（明治二年）五月、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り事業を興し、東京に移り住んだ。明治憲法公布後間もなく、鹿鳴館に支倉と蒼が招かれた。鹿鳴館で、蒼たちは黒田首相・海江田議員たちに目を向けていた。

四　鹿鳴館と生麦事件〈続き〉

生麦事件でイギリス人を殺したと言って、支倉が視線を向けた相手は、貴族院議員の海江田信義であった。

海江田は黒田総理大臣・大山巌陸軍大臣・西郷従道海軍大臣・松方正義内務大臣と談笑していた。

薩英戦争の原因となったのが、生麦事件である。

生麦事件とは、一八六二年に生麦村（現横浜市鶴見区生麦）で、薩摩藩の大名行列の武士がイギリス人商人を殺傷した事件である。

イギリス人の内、一名が斬殺され、二名が斬り付けられ重傷を負った。女性一人も発狂し間もなく死亡したという。

生麦事件での犯人引渡しと賠償金を求めて、イギリスが薩摩藩と戦争をしたのであった。

この生麦事件でイギリス人を刺し殺した当の本人が、海江田信義であった。

生麦事件には、総理大臣・黒田清隆が『駕籠廻り』、内務大臣・松方正義が『大番頭座書役』として居合わせ

ていた。

海江田は黒田と松方と話をしていたが、娘婿である東郷平八郎の方に近寄った。後に日露戦争を勝利に導く東郷であるが、この時は海軍大佐であった。

海江田は明治維新後、奈良県知事を経て、貴族院議員となっていた。そして、半年間ウィーン留学で憲法を学び、一年前に帰国していた。今回の大日本帝国憲法制定にも関係の有る人物である。

陸奥正春は、海江田から目を離すと、支倉と蒼に向かって話しかけた

「生麦村で海江田らがイギリス人を殺した理由は、大名行列を前でイギリス人が馬から下りなかったからだ」

陸奥は、生麦事件について説明を始めた。

イギリス人は日本人よりも背が高い。乗っていた馬は日本産でなく、外国から連れて来た脚の長い品種のアラブ産の馬であったという。

なぜ陸奥がその話を始めたか、蒼は理解できなかった。

「どのようにして斬り殺したか、分かるか」

蒼は質問されて初めて不思議なことに気付いた。確かに普通に斬ろうとしても届かない筈であった。

陸奥は紀伊藩出身であるが、他藩で起きた事件のことを詳しく知っていた。幕末の蝦夷地や箱館戦争のことも非常に良く知っていたので、驚いたこともあった。

外国人嫌いを公言している海江田が、早々に立ち去ろうとして、階段を昇りかけた。鹿鳴館は玄関から見てホールの奥右側に二階に通じる階段がある。

海江田が階段を五段ほど昇ったところで、陸奥が歩み寄って、呼びかけた。

「イギリス人殺し」

近くに居た欧米人が振り向いて、陸奥と海江田を見つめた。陸奥は海江田を指差して続けた。

「彼は、大名行列の前で土下座しなかったイギリス商人を日本刀で斬り殺したのだ」

陸奥は日本語で叫ぶと、英語を交えて外国人に向かって話しかけた。陸奥は、親戚の陸奥宗光が駐米大使の影響もあり、英語には堪能であった。

海江田は黙ったままであった。海江田自身はウィーンで憲法を学んでいたが、通訳を介してであり、外国語を一言も発しないで有名であった。

陸奥は海江田を見詰めながら、日本語に替えて話した。

支倉が制止しようとしたが、陸奥は構わず続けた。

「背の高い外国の馬の上の背の高いイギリス人を、奈良原がどうやって斬り殺したのか、当ててやろうか」

海江田の娘婿の東郷平八郎も割って入った。七年間のイギリス留学経験の有る東郷は流暢な英語で周りのイギリス人婦人を落ち着かせた。

「斬り下ろしたのではなく、抜刀と同時に下から斬り上げたのだろう」

陸奥は、刀を持って斬り上げる様な格好をした。
周りに居たイギリス人女性が小さく悲鳴を上げて、後ずさりした。
「斬られた相手は蹲るから、後は斬り下ろすこともできる」
「確かに、奈良原が斬った通りだ。儂は武士の情けで楽にしてやった。介錯代りに心臓を刺したのだ」
海江田は憤然とした様子で陸奥を見下ろして言った。
生麦事件では、奈良原喜左衛門がイギリス人に致命傷を負わせて、海江田は止めを刺したのであった。
支倉は、これ以上続けると乱闘になりそうなので、後ろから陸奥を抱えるようにした。
東郷平八郎と共に、高山左京という薩摩出身者も仲裁するように間に入った。
(抜刀術…)
陸奥が鐘捲流抜刀術の使い手であることを蒼は知っていた。
陸奥自身は紀伊藩の出身であるが、鐘捲流は仙台藩に伝わる抜刀術である。
陸奥の剣捌きを見て、蒼は両親の斬殺の映像が頭の中を駆け巡った。
(父と母は生麦事件のイギリス人と同じ方法で斬殺された)
当時生後一年程で蒼にとって初めての記憶が、両親の斬殺であった。その時の刀の軌跡が蘇ったのであった。
蒼は両親が抜刀術のような方法で殺されたことを確信した。
しかし、両親の斬殺方法と生麦事件の斬殺方法と陸奥が表した剣術が同じということが何を意味するのか、蒼は、これ以上に推理できなかった。
袈裟懸けの逆に斬り上げるのは、かなり特殊であることを蒼は理解していた。人間の筋肉の動きにも刀身の重みにも逆らう剣法は、剣術に詳しくない者にとっても特異なものに感じる。
蒼の両親を殺したのが仙台藩の人間かもしれない、と言われたことも思い出した。
後の外務大臣の陸奥宗光と同じく、『陸奥』という姓は本名では無く、本名は『伊達』である。
「国包の持主は、陸奥正春かもしれない」
両親の殺害に使われた刀・国包は仙台藩の中でも伊達家に近い者しか持てないと言われたことがあった。
陸奥宗光は、伊達家の家督を義兄に譲ったことから、伊達の名を捨てた。そして、伊達家が支配した国である『陸奥』に因み、自ら新しい姓を名付けたのである。
正春は親戚にあたる陸奥宗光の活躍を見て、同様に伊達から陸奥に改姓したということであった。
陸奥正春に対する疑いを、蒼は次第に募らせるようになった。

五　ロシア皇太子暗殺未遂（大津事件）

鹿鳴館の事件があってから間もなく、支倉兵衛夫婦が病気で亡くなり、蒼は一人となった。
支倉は事業で得た利益を事業の資金として運用しており、個人として蓄財はあまりしなかった。
蒼は日々の生活に困ることはなかったが、鹿鳴館に行っていたときのような余裕の有る生活ができなくなった。
支倉の事業を陸奥が引き継いでから、会社も衰退していき、人手に渡ることになった。
支倉と陸奥の事業は、高山左京により買収されることになった。
高山は、鹿鳴館で東郷平八郎と一緒になって、陸奥と海江田の乱闘を止めた人物である。
彼は薩摩藩の出身で、明治維新前にイギリスに渡る等、外国人との交友もあった。既に亡き政商の五代友厚に並ぶ実力と言われながら、自らは表の世界に出ることは少なかった。
高山左京は、蒼の生活を助けるだけでなく、自らの養子になる高山京輔を蒼の許婚として世話をした。
高山京輔は、将来は鹿児島で政治家を志している青年であった。当時は、鳥取藩士の沖守固という政治家の下で働いていた。
沖守固は神奈川県知事から、一ヶ月だけ長崎県知事を経て、この時は貴族院議員であった。
仙台藩の養父母に蒼は育てられたので、官軍の薩摩藩の高山の親戚に嫁ぐことに抵抗があった。
しかし、生前の養父支倉も高山であれば、と同意していたので、養父の遺言のように従ったのであった。生前の支倉は薩摩閥を嫌っていたが、高山に対して全幅の信頼を置いていたようであった。
一八九一年（明治二十四年）四月二十七日、蒼は高山京輔と結婚することとなった。
この日は、ロシア帝国のニコライ皇太子が長崎に来航した日であった。
ニコライ皇太子は、シベリア鉄道の式典に出席するため、ウラジオストクに向かう途中、日本に寄港したのであった。
当時、ロシアのロマノフ朝は三百年の歴史が有り、世界最大の領土を持ち、全世界の富の約十分の一を支配すると言われていた。
ニコライ皇太子は、ロマノフ朝の次の皇帝として強大な権力を持つことが約束されていた。
もし、ニコライ皇太子の機嫌を損ねるようなことがあれば、日本国がロシアの植民地にされかねないという雰囲気が蔓延していた。



＜関連する人物＞

大黒屋光太夫(1751-1828)　ロシア漂流民
エカチェリーナ２世(1729-1796)　ロシア帝国女帝
榎本武揚(1836-1908)　蝦夷共和国総裁
支倉常長(1571-1622)　慶長遣欧使節団
玉蟲左太夫(1823-1869)　仙台藩佐幕派 遣米使節団
黒田清隆(1840-1900)　第２代内閣総理大臣
大山巌(1842-1916)　黒田内閣陸軍大臣
松方正義(1835-1924)　黒田内閣内務大臣
　第４・６代内閣総理大臣
西郷従道(1843-1902)　黒田内閣海軍大臣
海江田信義(1832-1906)　生麦事件の当事者 貴族院議員
東郷平八郎(1848-1934)　海江田の娘婿
　日露戦争時の海軍大将
高橋是清(1854-1936)　第２０代内閣総理大臣
陸奥宗光(1844-1897)　日露戦争時の外務大臣
沖守固(1841-1912)　大津事件当時の滋賀県知事
津田三蔵(1855-1891)　大津事件の犯人
ニコライ２世(1868-1918)　ロシア帝国最後の皇帝

＜参考年表＞

1792年（寛政４年）ラクスマン・大黒屋光太夫根室来航
1854年（安政元年）日露和親条約　箱館開港
1858年（安政３年）仙台藩白老元陣屋建設
1862年９月（文久２年８月）　生麦事件
1863年８月（文久３年７月）　薩英戦争
1867年11月（慶應３年12月）　大政奉還
1868年１月（慶應３年12月）　王政復古の大号令
1868年１月（慶應４年１月）　鳥羽・伏見の戦い
1868年７月（慶應４年７月）　仙台藩白老元陣屋撤収
1868年９月（明治元年９月）　明治改元
1869年１月（明治元年12月）　蝦夷共和国成立
1869年５月（明治２年５月）　五稜郭の戦い（箱館戦争）
　旧幕府軍降伏
1869年８月（明治２年８月）　蝦夷地を北海道と改称
1881年７月（明治14年７月）　開拓使官有物払下事件
1883年７月（明治16年７月）　鹿鳴館完成
1888年４月（明治21年４月）　黒田清隆内閣成立
1889年２月（明治22年２月）　大日本帝国憲法
　（明治憲法）公布
1891年４月（明治24年４月）　ニコライ皇太子長崎来航
1891年５月（明治24年５月）　大津事件

編集後記

最近日経ビジネスを読んでいたら、豊田佐吉の生き方と理念を整理して文章化した豊田綱領が紹介されていた。

一、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙ぐべし
一、研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし
一、華美を戒め、質実剛健たるべし
一、温情友愛の精神を発揮し、家庭的美風を作興すべし
一、神仏を尊崇し、報恩感謝の生活を為すべし

又学校法人「報徳学園」では、一年前に報徳教育部を発足させ活動を開始したが、昨年九月からスタッフが毎月、言葉を選んで校内各所に掲示している。

九月、徳にむくゆる心をもって、物は大事に始末よく
十月、大事を為さんと欲せば、小なることを怠らず勤むべし
十一月、父母もその父母も我が身なり、我を愛せよ我を敬せよ
十二月、声もなく臭もなく常に天地は、書かざる経をくりかへしつつ

一月、我が道は至誠と実行のみ
二月、山の高く見ゆるうちは勤めて登るべし
三月、いやしくも徳に報いる心なき者は、これ禽獣なり

これらは何れも至誠・勤労・分度・推譲という二宮金次郎の教えを根源としているものである。

このような努力を積み重ね、それが周辺に影響を及ぼすようになれば、将来の展望は必ず開けてくる。

まんじ一〇八号には、お陰様で二二名の同人から玉稿をいただくことが出来た。

様々な分野の、幅広い交流が本同人誌を通じて行われることは、欣快にたえない。

（T・N）

まんじ第108号

平成20年5月1日発行（非売）

発 行 人　三戸岡 道 夫（みとおか　みちお）
編 集 長　中 山 喬 央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋 屋 次 郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま ん じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「日進月歩」

田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.109

2008.8.1

まんじ第百九号　目次

自訴した遊女……太田精一……4
桐の花影―吉良側の忠臣蔵余話（一）……忠内正之……9
狩谷棭斎讃歌（二）……新井宏……13
今川風雲録（二）……千坂精一……20
信じて託す（その四）……三戸岡道夫……28
狩野川のトド（二）……堀内永代……36
ノー・サイド　短歌三十首……曽根竣作……41
短歌　行雲流水（二十一）……石黒修身……45
ぼたん……勝山道子……48
俳句　鷹の呟き（三）……大澤鷹雪……53
漢詩　潮騒錄（五十五）……鯨游海……57
青春彷徨（二）……伊治哲……61
化粧のルーツを訪ねて（四）……鈴木守……65
（司馬雑感十六）島原・天草の諸道を歩く……山田嘉久……86
一兵卒が見た戦場の裏側……森清英……93
青の漂流（五）……宅見勝弘……101
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十一）……松下魏三……107
還暦からの考古学（十四）……中山喬央……111
鏡（その6）……中山喬央……127
れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより……松下壽男……141
ホメラレモセズ　クニモサレズ（十六～十九）……松下壽男……142
福祉サービス第三者評価制度　神奈川県の制度から……鍋屋次郎……152
編集後記……編集子……159
表紙……田寺怜葦……

自訴した遊女

太田精一

長崎の町人は、唐人を、「阿茶さん」と親しみを込めて呼び、元禄（一六八八～一七〇三）の頃に比べ少なくなったとはいえ、享保（一七一六～三五年）のこの時代でも、五千人を超える唐人が敷地内に住んでいた。

吉里は、陳寿官の愛撫を商売と割り切って、始めは適当に受け流していた。ところが、三日たち、四日経つうちに情が移って、丸山に帰る頃には、彼の愛撫を積極的に受け入れるようになっていた。

「もう廓に帰らなくては、いつまでもここにいるわけには参りません」

陳も、さすがに町役人と抱え主との約束をこれ以上引き伸ばすわけには行かない。また、八日間も吉里の身体を味わい尽くしたので、彼女との情交にもそろそろ飽きが来ている。

「しかたがない。帰すことにするよ。また来て貰うからね」

（一）

唐人屋敷の大門を出て、丸山に帰る道脇の桜は、もうすっかり咲きそろっていた。

和泉屋清兵衛の遊女吉里が、その大門をくぐってから八日が経っている。

唐人の陳寿官に買い揚げられて、「唐人行」（からゆき）をし、引き留められるままに長逗留となったのである。遊女が、廓を出て唐人屋敷に行くことを江戸時代、長崎では、「唐人行」と言った。

「唐人行」の遊女たちは、一夜以上、唐人屋敷に留まることは許されていない。翌朝には、丸山に帰る掟になっている。だが、廓の抱え主に了解を取り付け、町役人に鼻薬を利かせてあれば、お目こぼしもあった。

唐船主の唐人は、有福者（フークイ）さんと呼ばれ、遊女にとっては、大切な客である。

吉里は、その言葉を複雑な思いで聞いていた。

（このまま陳さんに買われて唐人屋敷に通ううちに、忘れられなくなってしまいそう。もし、そうなったら与四郎さんとの仲が、これまで通り続けられるかしら）

吉里は、幼なじみの与四郎のことを思った。

与四郎と吉里は、島原の口之津近くの農村で生まれた。与四郎は半農半漁の貧しい家の四男で十二の時、口減らしのため、長崎の大工に預けられた。親方の下で修業を積んで、二十五になってやっと独立させて貰ったのである。

吉里は、本名をハルと言った。与四郎と同じ村で育ち、子供の頃から一緒に遊んだ仲である。家が、貧しく十四の時に、丸山遊郭の和泉屋に売られてきた。

初めて、和泉屋の客となった与四郎を見た時、吉里は一瞬目を疑った。まさか、こんな所で幼なじみの与四郎と会うとは思いも寄らなかったのである。

十五年の歳月が流れている。

吉里は、与四郎が幼なじみのハルだと気がつかないことを願い、そっと枕元から行燈を遠ざけた。

（脂粉にまみれ、遊里で暮らした年月は、純真だった頃の面影を消し去ってしまっているに違いない）

吉里の願いに反して、与四郎はひと目みるなりハルだと分かった。遊郭にあがる後ろめたさが、部屋に案内されるまで知らぬ振りをさせていたのである。与四郎は、三十に手の届きそうな年齢になっていて、丸山で遊ぶのもこれが初めてではない。

「ハルちゃんじゃないかな。綺麗になったね。人違いかと思った」

与四郎は色里で磨き抜かれた吉里の顔をまじまじと見た。

「与四郎さん。そんなに見ないでください。ただ、化粧を濃くしているだけですから」

身元の知られてしまった吉里は、開き直った気持ちになって与四郎に身を寄せた。懐かしさが吉里の恥じらいを拭い去って行く。初めての客のような気がしない。吉里は、与四郎を喜ばせようと愛戯の限りを尽くしたのだ。

それからというもの、与四郎は、吉里の色香に溺れ、足繁く和泉屋に通うようになった。

もともと遊び好きの与四郎は、一人前の大工になるにはなったが、仕事に身が入らず、金を持つと酒と博打に走ってしまう。吉里の揚げ代も溜まり、借金も増え、どうにもこうにもならなくなってしまった。

（二）

梅雨に入って、雨がしとしと降り続いている。その雨が、和泉屋の庭に咲く紫陽花の色を一層際だたせている。

与四郎は、このところ吉里が陳にしばしば呼ばれ、「唐人行」することを知っていた。

「ハル、陳さんから人参を分けて貰えるよう話しをつけてくれないか。二、三斤もあれば、その儲けで、お前を請け出せるかも知れん。うまく行けば女房にもしてやれる」

金に困った与四郎は、陳を使って抜荷を企んだのである。抜荷は、当時盛んに行われていた。

長崎奉行所の犯科帳には、抜荷の仲立ちをする遊女の犯罪が記されている。唐人屋敷から廓への帰りに、高価な織物を腰巻として肌に着けたり、女ならではの隠し場所に宝石を忍ばせるといったこともあったという。

幕府も組織的、計画的な抜荷には、厳しい取締りを行い、厳罰を持って臨んでいた。が、遊女がらみの小口のものについては、十分目が行き届かず、唐人屋敷や阿蘭陀屋敷から盛んに持ち出されていたようである。

吉里は、与四郎の言葉を心底から信じていたわけではない。だが、信じたかった。この苦界から抜け出すためには、藁をも掴む気持ちで与四郎の誘いに乗るしかない。危険を覚悟で承知したのである。

吉里は、陳に抜荷の誘いをかけた。

「票に人参二百匁と書いて、吉兵衛さんに渡してください。売り捌いたらすぐ代金を吉兵衛さんに預けるから、彼から受け取ってください」

吉兵衛は、唐人屋敷の日雇い労務者で、陳寿官とも顔なじみである。票とは、密輸入を行う場合、唐人側から発行される手形のようなものである。票には、品目、取引の方法、日時、場所、などの約定が書いてある。この票を手に入れ、指定の場所に届ければ、黙っていても、目的の品物が手に入る。自分が行かなくても、代人を立てれば、受け渡しが出来るようになっていた。

遊女が床の中で唐人にこの票を書くように口説くことがしばしば行われている。

陳は、予想に反して吉里の頼みをあっさりと引き受けてくれた。抜荷による甘い汁を吸おうとしたからだ。

朝鮮人参は、薬用としてきわめて高価なものである。二百匁の人参は、一年間の吉里の稼ぎにも相当するのだ。

与四郎は、吉里の口利きによって唐人屋敷の日雇い吉兵衛を利用した人参の持ち出しにまんまと成功した。だが、誤算が生じた。

売り先が容易に見つからなかったのだ。密売品であるため、通常の取引価格の半値以下に買い叩かれる。やっと見つけた博多の商人にも足許を見られ、陳との取り決め価格を大幅に下回る結果となってしまったのだ。

代金は、吉兵衛に頼んで陳の下に届けさせたが、約定に定めた金額の半分にも満たない。怒った陳は、遊女の吉里に残りの代金の肩代わりを迫った。

「約束が違う。代金は、半分しか貰っていない。与四郎さんが自分の懐に入れてしまったのではないのか。もし、彼が残金を払わないのなら、あなたが代わって支払うべきだ」

初めの頃の優しさや思いやりは消え、敵の片割れを見るかのような目で吉里を見た。前にくれると約束した縮砂（東インド産の芳香健胃剤）も反古にされてしまった。

それだけではない。彼女の揚げ代まで人参代の残金から差し引くとして、払わなかった。

吉里は、陳の心変わりをなじった。

「色里の女に、本気で惚れてくれる男なんてありゃしない。そんなことは、分かっている。でも、陳さんは、異国から来た人で、日本人とは違う。もっと情が深く、実のある人だと思っていた。今度のことだって、私は、ただ口を利いただけなんだ。抜荷の取引も与四郎さんと直接やったことなのに、約束の金が入らないからといって、全部私におっかぶせて搾り取ろうとする。汚いよ」

吉里は、異常なまでに金に執着する陳を見て悲しくなった。身体だけでなく心まで許そうとした自分が、愚かしく哀れであった。

（二）

吉里は、抱え主の和泉屋清兵衛にも、陳の揚げ代を渡せなくなった。

そこで、彼女は、別の抱え主中津屋に多額の前借をして、滞っていた陳の揚げ代を和泉屋に払った。それによって、吉里の抱え主は、和泉屋から中津屋に移ったのである。

それだけではない。金のない与四郎は、吉里の揚げ代を半年分も溜めていた。それも吉里が被ることになってしまったのだ。

陳への代金が払えなくなってから与四郎は、揚げ代を溜めたまま、和泉屋にぷっつりと来なくなった。

偽りと虚飾に彩られた世界に住む吉里にとって、幼なじみの与四郎だけが、信頼に足る人であった。それなのに何も言わず、彼女の前から姿を消してしまったのだ。

吉里は、手持ちの衣類や装飾品などを売って、与四郎の揚げ代の一部を和泉屋に払い、詫びを入れて何とか急場を凌ぐことができた。それでも、陳の人参代までは、払うことが出来ない。

（とうとう私も丸裸になってしまった。与四郎さんもやっぱり廓に群がる一人の遊び客だった。悪い夢を見たと諦めるしかない。でも、このままにしておいたら、これからも陳寿官からの取立てに苦しめられるに違いない。それにしても、私を利用してこんな目にあわせた男たちが憎い）

吉里は、奉行所に自訴することによって陳からの取り立てを逃れ、二人の男に復讐出来ると考えた。

当時、長崎奉行所は、罪を犯した者でも自訴（自首）すれば比較的寛大な措置がとられていた。長崎は幕府の直轄地であったが、江戸から派遣される役人は、奉行以

下ごく限られている。そのため、町政は、町年寄、会所役人、通詞などの地役人に任されていた。町年寄は、富んだ貿易商人の高木、高島、後藤、などの名家が世襲し、奉行を補佐している。町年寄の下には、警察権を持つ地役人がいて、その役人が、長崎の治安を守っていたのである。

強力な武力を持たなかった長崎では、町衆と共に生まれ育った地役人は、地元に根を張り、治安を維持するために、自訴と密訴を奨励していた。密訴した者には、褒美を与え、自訴した者には、罰を軽減したのである。

また、女子供には、寛大な措置がとられていた。女性は、十五歳未満の男子の「幼年もの」と同等に扱われ、その刑罰は、非常に軽いものであった。「お叱り」か「過台牢」程度で済んだのである。「過台牢」というのは、「これからは、悪いことはしません」と本人や親類から始末書を取った上で出牢させるというものである。

唐人や阿蘭陀人についての処罰は、日本人と同じではなかった。抜荷は、双方合意の上であっても、唐人や阿蘭陀人に対しては、それぞれの国の法律に従って裁かせることにし、船長に身柄を引き渡している。

抜荷の発覚した唐人や阿蘭陀人は、ほとんどが国禁処分となり、国外へ強制退去させられ、日本への再渡航を禁じられている。

諏訪神社の祭礼「おくんち」も終わり、秋も深まった。与四郎と陳寿官の二人の男の色と欲に翻弄された吉里は、思い余って立山町の奉行所に出頭し、これまでのいきさつを洗いざらい打ち明けた。

吉里の自訴により、与四郎、陳、吉兵衛などの関係者全員が捕縛され、罰せられた。

与四郎と吉兵衛は、「国禁を犯し抜荷をなしたる始末、不届きに付き家財半分召し上げの上、唐人屋敷及び唐、阿蘭陀の荷役場所への出入り禁止」となった。

陳寿官は、国禁処分となり、唐人屋敷に閉じ込められ、秋に来航した唐船で、日本から強制退去させられた。

吉里は、半月ほどの入牢の後、お裁きが下された。

「抜荷は、ご法度であることは、その方も重々承知しておろう。にもかかわらず、口利きをするとは不埒である。よって、過料（罰金）を申し付けるべきところ、自訴したるにより差し免す」

奉行所のお裁きを聞いて、吉里は、ほっと胸をなで下ろした。だが、それもつかの間の喜びにすぎない。吉里は、借金を背負って生きるこれからの人生を思って、深くため息をついた。

長崎を取り囲む山々を彩っていた木々の葉が、木枯らしに吹かれ舞散っている。

―長崎犯科帳享保十四年の記録より翻案―

桐の花影

――吉良側の忠臣蔵余話（一）――

忠内正之

『名君であった吉良上野介』

（一）華麗な吉良家の閨閥

日本の大衆演劇の中で最も人気の高い「忠臣蔵」の舞台に、強欲非道の悪人として登場する吉良上野介は実に不運な殿様である。

事件の発端となった殿中の、刃傷事件の原因が不明であったばかりに、さまざまの憶測が生まれ、また内匠頭への同情もあってか、世評は上野介に厳しいものがあった。

加えて浪士の討ち入り事件は、泰平の世に慣れた元禄の人びとを驚かせ、衰えがちであった武士道の鑑（かがみ）として世人を感動させた。結果これが芝居の好題材となって人気を集め、さまざまな演出を重ねた末に不動の人気ドラマ「忠臣蔵」が完成する。

原因の不明なところから却って多様な原因説を生み出す結果となり、どんな時代にもなじむ「新説・忠臣蔵」が相次ぎ生み出されたのである。

そして戦前までは「新説・忠臣蔵」が上演されるごとに、仇役吉良は、その時代の“悪”とされる諸々の悪事を次々に背負わされていった。

結果としてどうしようもない悪人吉良上野介のイメージが出来上がったのである。

ところで、実際の吉良上野介義央（よしひさ）は決してその様な人物ではない。菩提寺である華蔵寺に生前寄贈された木像が納められている。

その穏やかな表情にもうかがわれる様に、高家にふさわしい毅然とした姿の中に優しい人間性が感じられ、また遺された手紙や文書の内容や筆跡などにも、和やかな

気配りと、豊かな教養がしのばれるのである。

おそらくこうした気品は、鎌倉・室町時代を生き抜いた名流、吉良氏の家におのずから備わった風格と言えるものであろうか。

三河国吉良荘を鎌倉の初めより元禄までのおよそ五百年間、一貫して領主として治めたのが吉良氏である。

長い歴史の中で栄枯盛衰は常であり、鎌倉・室町と続いた名家も室町末期の戦国の嵐に多くは消えた。その中にあって幸い吉良氏は三河山間部に生まれた新興勢力である徳川氏との様々な縁によって結ばれた結果、無事、江戸時代まで家門を伝えることが出来た。

江戸幕府の発足とともに、幕府はさまざまな職制を設けたが、その中に朝廷との外交に従事し、かつ城内における諸式礼法を指揮する専門の役である高家の職を設けた。この制度の発足とともに先づ大沢基家が、次いで吉良義弥が高家に登用された。そして、義冬・義央と續いたのである。

吉良氏は、もとは鎌倉時代の承久の乱後、吉良荘の地頭となった足利氏がその出自で、吉良荘の地名によって吉良を名乗るようになった。（同地区では昔から雲母が産出することで知られる事からこれが訛って地名になったとも言われる）。

名族吉良氏は内戦によって永禄年間に滅亡する。しかし上野介義央の曽祖父義定が家康と従兄弟に当るということもあってか、家康の臣下として召し抱えられ吉良家は再興した。

義定は関ヶ原の戦功で三、二〇〇石を与えられ旗本となって近世吉良氏の祖となった。

義定の嫡子が義弥で吉良家で最初に高家職となった。武官から文官へと転進したのである。

その子義冬は義弥が幕府の中枢で働いていたためか時の大老酒井忠清の弟忠吉の娘を妻とし酒井家と繋った。そして父義弥の跡を継いで寛永二十年四、二〇〇石に加増された。

上野介義央は、寛永十八年九月江戸鍛治橋の吉良邸で生まれた。幼名を三郎と名付けられた。吉良家の場合嫡男に与えられる由緒のある名前である。十三才で四代将軍家綱に謁見、十七才の時には早くも従四位下侍従に任ぜられ上野介義央を名乗り万治二年より有職故実を専門に幕府に仕えた。二十二才の時仙洞御所造営に関し将軍の名代として朝廷にお使いをしたのを皮切りに年賀のお使いに十五回、その他のお使いとして九回も京都に上り、そのつど御所に参内して天皇に拝謁している。

このように義央は十九才から六十才でお役御免を願い出るまで実に四十二年の長きにわたって高家肝煎（筆頭職）、今日で言えば宮内庁式部長官として幕府の儀式典

礼を司取って来た。

そして吉良家は、足利以来の名族として、その血統の良さは勿論だが、義央を取り巻く背景がさらに彼をして傲慢無礼な人物としての印象を与えることとなる。

即ち義央の妻の三姫は、米沢三十万石の大名上杉弾正少弼定勝の四女で、播磨守綱勝の妹に当った。これが富子と呼ばれる義央夫人である。

寛文四年妻富子の実家上杉家の当主弾正大弼綱勝（富子の兄）が二十七才で急死した。吉良邸で馳走になり帰邸した直後だったため、後世になって吉良が毒殺したように言うむきもあるが全く事実無根である。思いもかけぬ綱勝の急死であったため上杉家は危うくお取潰しになろうとしたが、急遽義央の長男でわずか二才の三郎を養嗣子として迎え跡継ぎとした。この時三十万石は半分の十五万石に減らされたが、保科正之他の奔走で生前の養子縁組みであったという事にして辛うじて存續が許された。それでも名将謙信以来の家臣の結束は固く、一人の禄離れの士を出すこともなく多数の家臣を養った上杉藩の経営は見事というほかはない。

この三郎がのち、成人して上杉綱憲となる。義央にはその後男子が生まれず、苦労をするのであるが、それから十五年後の延宝六年次男の三郎がやっと生まれ一安心出来たのである。だが、その跡継ぎと目された三郎も八才で夭折してしまう。妻以外の側室を設けなかった義央はその後子孫に恵まれず、上杉綱憲の二男、即ち義央には実際の孫に当たる春千代を自分の養子としてもらい受けた。これが義央のあとを継いだ左兵衛義周である。このように吉良と上杉とは二重三重の縁に固く結ばれていた。

義央は閨閥によって、上杉家を通じて島津・津軽・酒井の各大名、あるいは綱勝の妻の里である会津の保科家、紀伊大納言家、ひいては現将軍家とも縁續きにあると言うわけで、血脈、家柄、親戚など一流で、その毛並の良さを誇るのは当然のことだったと言える。

官位経歴は、禄高こそ僅か四、二〇〇石で大名ではなかったが、官位は従四位上と高家の最高で、大大名なみであり、朝廷には二十四回もお使いにたった。御所の人々はもとより公卿たちとも昵懇の間柄となり権力は一般の大名などは足許にも及ばなかった。朝廷へのお使いの中で、山鹿素行が「聖徳太子の再来か」と評したほど英邁な天子であった「後西天皇」退位を幕命と後水尾上皇の内意を受けて実現させた功績は高い評価を受けた。反面誹を受けることとなった。

頃は元禄、生類憐みの令という悪法が堂々と罷り通り、文化の爛熟とともに、権勢に取り入るためには何よりも賄賂（謝禮）が公然と横行した時代である。

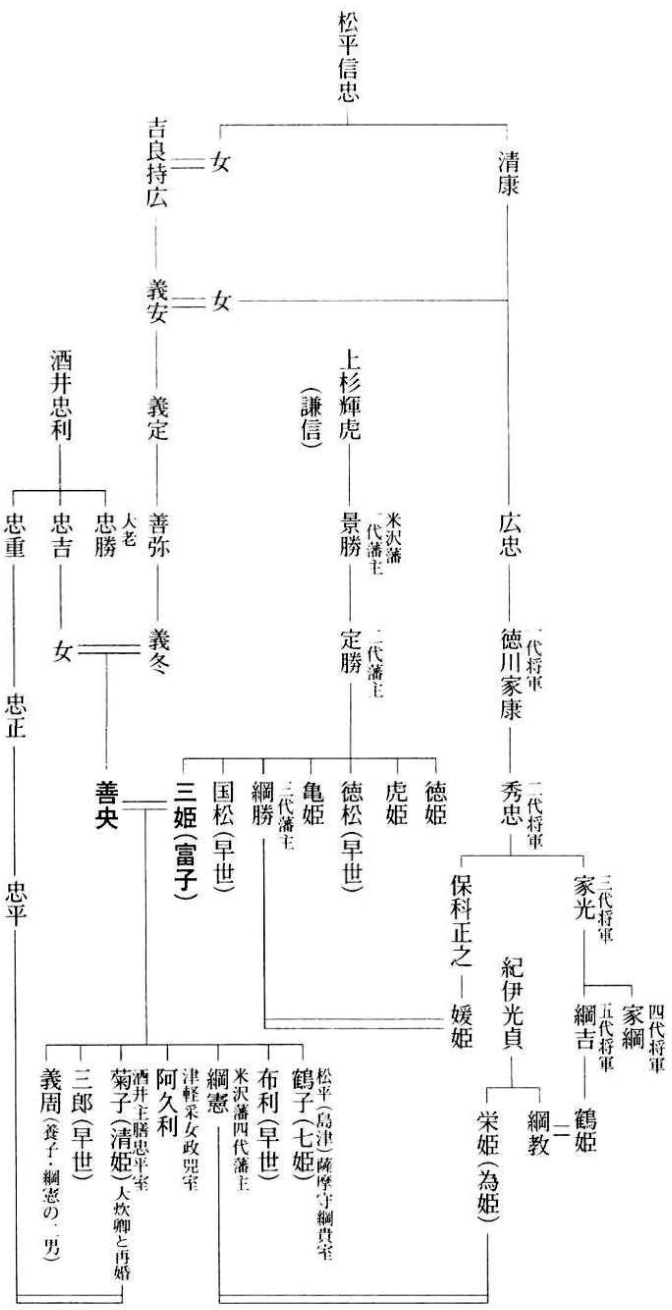
義央だけが、特別に賄賂取りの名人だったというわけ

でなく時代がその様な時代であったのだ。

妬みも加わって、傲岸不遜で権勢に媚びる金銭に汚い悪評が出来上ったものと思われるが、当時一般の常識から突飛する程ではなくその後の忠臣蔵討入以降の「判官びいき」の風潮が極端な悪評を増幅させたものと考えられる。

他方上野介は領地吉良荘に於て多面に亘り領民のため暖かい善政を敷いており未だに吉良の殿様として名君ぶりを慕われている。

その第一は、「黄金堤」の築造であり、第二は、富好新田の干拓並びに塩田の開発であり、上野介の治績は高く評価され、語り継がれている。



狩谷棭斎讃歌（三）

新井宏

(八)大病

棭斎は、家督相続した翌年の寛政十二年(一八〇〇)には畢生の著となる『和名類聚抄』の校読を始めている。『和名類聚抄』は承平年間(九三一～八)に、源順が編纂した漢和辞典であるが、内容的には日本初の百科事典ともいうべきもので、和語の語義を知るに必須の書である。しかし、原本や写本が既になく、伝本には異同、誤りが非常に多かった。

そのため棭斎は諸本に箋注を施し、誤謬を正し、誤りの箇所を明らかにして、いわゆる『箋注和名類聚抄』を著した。その原稿は三稿に及んだというが、ついに棭斎の生前に出版されることはなかった。古代の日本や古典を研究するにあたって、まず信頼できる事実関係の整備から始めている棭斎の学問的な性向をここに見ることができる。

同じ年、棭斎は『遊仙窟』という唐代の伝奇小説の校読も行っている。なぜ、隠語を用いて猥雑なところがある小説などの校読を行ったのか不思議に思って見ると、この本は平安時代に流行したもので、『和名類聚抄』にしばしば引用されていて、その訓が古い日本語を良く伝えているのだと言う。

翌、享和元年(一八〇一)には、室町時代の国語辞典『下学集』の比校をしている。これも『和名類聚抄』との関係であろう。『続世継』すなわち『今鏡』の比校も行っている。

同じ年、平安初期に書かれた『日本霊異記』の校読も行っているが、間違いの多い粗悪な写本であったため「句すべからず」の状況だったらしい。ところが、この粗悪さが棭斎の研究意欲を刺激したのだと梅谷文夫は言

う。

私にもその感覚が良く判る。仮名本『日本霊異記』をはじめとして、他書に引く説話との異同を調べ、誤字、脱字、衍字を訂正して校訂しているうちに、粗本を善本にする楽しさに、はまってしまったのではなかろうか。

その後、より良い底本を求めては校訂を繰り返し、文政三年(一八二〇)に至って初めて『日本霊異記攷証』を刊行している。実に長期にわたる取組みであったが、それでも『箋注和名類聚抄』の初稿完成よりも二年も早い。

かくして、結婚二年目の享和元年は無事に過ぎたが、三年目の享和二年(一八〇二)に桛斎は病に罹る。大病であったらしい。津軽藩の『江戸日記』によると、八月八日から翌年の十一月十四日にかけて、しばしば病気見舞いを桛斎に贈っている。

梅谷文夫が大病と判断したのは、台湾の故宮にある桛斎自筆稿本『日本霊異記攷証』巻下末に「或いは疾病に罹り、医の棄つる所となる」によっている。桛斎の自筆本が故宮にあることも嬉しいが、その事実をしっかりと確認していることにも感心する。

ただし、医者に見離された大病というのが何であったのか判らない。と言うのは、病気の期間中にも、平安朝などの説話を集めた鎌倉時代の『十訓抄』の比校を行ったり、伊澤蘭軒らと豊島郡石浜に遊んだり、また鎌倉初期の説話集『古事談』や『続古事談』の比校を行ったりしているからである。

桛斎の友には、医者に清水濱臣と伊澤蘭軒がいるが、誰に診てもらっていたのであろうか。

(九)市野迷庵

翌、文化元年(一八〇四)十月、病気から回復して間もなく、待望の第一子、喜太郎懐之が生れた。桛斎は三十歳、善は十九歳であった。

桛斎が市野迷庵に会うのは、それから間もなくである。桛斎よりも十歳年上で、桛斎と同じく町人学者であった迷庵は、神田弁慶橋の質屋市野屋の六代目で、名は光彦、字は俊卿、通称を三右衛門と言った。津軽屋の当主は代々三右衛門を名乗っており、ふたりを合わせて「今の国学は六右衛門なり」とか「江戸の学問は六右衛門にあり」と称したという。

迷庵は町人ではあるが、林述斎の門に学んだ俊英な儒学者であった。三十歳の頃、すなわち桛斎が会う十年ほど前から、学を廃し交友を絶って家業に専念したと言うが、この頃には家業の再建を終え、学問の世界に復帰していた。

桛斎は迷庵を訪れ、経書の解釈を巡って、漢や唐の注疏も重視すべきではないかと質問している。最初に学んだ泉豊洲の師・細井平洲が、古注学の流れにあった学者

なので、桛斎にとっては素直な感覚だったのであろう。しかし、朱子学の林門に学んだ迷庵は当然のように宋儒の解釈によらなければ、実用には適さないとの見解を教え諭した。

ここが桛斎の素晴らしいところであるが、いったん退いて、それから凡そ二十余月、教えに従い宋儒の伝注を鋭意研究したと言う。

そして桛斎が得た結論は、漢代の経書解釈は師法を重んじて、その論拠が明確であるが、宋儒は「心を師とし古を蔑ろにしていて」正派とは言えないと言うことであった。いわば、朱子学は本居宣長の国学と同じく、学問ではなく思想だと看破したのであった。

桛斎はこの結論を携え、ふたたび迷庵に会いに行き、迷庵の論拠を縦横に弁駁した。二十余月の研鑽結果は「徴拠明晰」であった。

迷庵の素晴らしさは、ここで「幡然として心折り」今までの学風を棄てて、漢学に従うようになったことである。おそらく、桛斎の態度も素晴らしかったのであろうが、桛斎を年下の書生と軽蔑することなく、その学問を受け入れたことは、迷庵が心広い真摯な学者であったことの証左であろう。その後、ふたりは真の兄弟のように交わったので、世人は六右衛門と称えたのである。

迷庵は、それから漢唐の注疏に没頭し、経学の基本図書である九つの経書、すなわち『周易』『尚書』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左氏伝』『孝経』『論語』とその注疏書の入門解説書『読書指南』を文化元年(一八一八)に著す。漢唐の注疏を重んじる考証学の立場から書かれた、日本における最初の本格的な経書の解説書である。

桛斎と迷庵の共通点は、町人であるとか、名が三右衛門であると言うことだけではなく、事業経営者としての経験であった。迷庵が家業の質屋再建に十年間専念したことから、学んだものが多かったはずである。また桛斎の場合も、津軽屋の経営は平坦ではなかった。津軽屋とともに津軽藩の御蔵元を勤めていた同業者の菊屋の経営が破綻したのは、文化三年(一八〇六)であり、ちょうど迷庵と出合った頃である。

津軽屋は菊屋の負債の後始末をさせられたばかりでなく、その他にも藩からしばしば巨額の出銀を要請されている。この頃、津軽藩は、秋田藩、鶴岡藩、盛岡藩などと共に蝦夷地への派兵を命じられ、その主力を勤めていた。時には、出銀のため、所持する土地を担保に両替屋から八千両借金したり、幕府から四千五百両の貸付金を調達している。津軽屋の経営は計数感覚に秀でた桛斎のもとでやっとバランスを保っていたのが実状であった。

純粋培養の学者は、どこか幅に欠ける。理論を先鋭化して「美しい理論」を作り上げることができても、そこでは矛盾を切り捨て勝ちである。しかし、事業経営者の場合は、簡単に矛盾を切捨てることなど許されない。矛

盾を乗り越えて、異質なものを包容する器量が要求されている。梅斎や迷庵にはその包容力があった。

(十)松崎慊堂

市野迷庵との交友がはじまった頃、すなわち文化三年(一八〇六)には、長女糸(いと)が生れる。梅斎三十二歳、善二十一歳であった。高橋青裳堂が代々名乗った与惣次から幼名を取って与惣(よそ)と付けていることからすぐわかるのように、予定通り高橋青裳堂を継ぐため、梅斎の姉とまの養女になる。

梅斎が津軽屋へ出たあと、高橋家では梅斎の姉とまを戻して継がせていたようである。天保六年(一八三五)に梅斎が亡くなって間もなく、高橋いとも亡くなっている。三十歳であった。これにより分家高橋家は絶えている。

梅斎が松崎慊堂を知ったのも、長女いとが生れた頃である。ふたりは迷庵のところで出会った。それから三十年におよぶ親交がここに始まる。当時、慊堂は林門では塾頭の佐藤一斎を凌駕するほどの実力者であった。

松崎慊堂は明和八年(一七七一)十一月五日、肥後国益城郡木倉村の生まれである。祖父は源蔵という農夫で、源蔵の姉娘のもとに恵芳という僧が住みつき、この夫婦の間にできた子である。十一歳の時に浄土真宗の寺へ預けられたが、学問で身を立てるために十三歳頃に江戸に出て、浅草称念寺の玄門に養われ、寛政二年(一七九〇)林述斎に学び、ついで昌平坂学問所に入門している。生まれつきの学問好きであった。

慊堂は、昌平坂学問所で市野迷庵や佐藤一斎らと学び、寛政六年(一七九四)には塾生領袖となる。しかし、塾友の沢九輔が、慊堂の名で借り出した林家の典籍を質に入れて行方をくらました事件の責任を問われ退塾させられてしまった。その結果、一歳年下の佐藤一斎が文化二年(一八〇五)に塾長になり、儒学者の最高権威者の地位を継ぐことになる。後に、事情が明らかになり、慊堂は許され、享和二年(一八〇二)に掛川藩校教授となっている。

沢九輔といえば、慊堂にとっては許しがたき男であった。この事件さえなければ、慊堂は郷里の大藩熊本藩の儒者として仕官できたはずであった。恨んでいたに違いないが、沢九輔が後に服部和甫と名を変え、京都で学者として活躍しているのを知ると、和甫の『名言通』に序文を与えている。和甫もなかなかの学者であった。

慊堂は、死の直前の天保十五年(一八四四)三月まで、膨大な『慊堂日歴』を残している。江戸後期の研究のためには必見の資料であるが、最初の二巻は失われ、文政六年(一八二三)四月からの分が平凡社東洋文庫に六巻としてまとめられている。

この『慊堂日暦』に最も多く登場する人物が狩谷梅斎なのである。これを読むと、ふたりの交友の親密さばかりでなく、梅斎、慊堂の人柄が活き活きと伝わってくる。

梅斎が死した時、「遺骸を撫して慟哭す」と述べているが、慊堂も心の澄んだ大学者であった。

ここで、梅斎、迷庵、慊堂の三人に絡む逸話を紹介しよう。

慊堂は、彼よりも先に亡くなったふたりの親友のために『迷庵市野先生碣銘』と『梅斎狩谷先生墓碣銘』を遺している。

前者によると、迷庵が「朱子学を論ず」という論文を著して、朱子学は仏教教義の影響のもとで編み出された新しい解釈に過ぎず、本来の聖人の教えとは異なると主張したのに対して、慊堂が激しく反論したが、ついに迷庵を説得し得なかったこと、そして、その論争を聞いていた梅斎が迷庵の意見を正しいとした時に、迷庵が慊堂に向かって「理は宜しく是の如くあるべし」と洪声一喝したことを述べている。

林門に籍を置く慊堂にとっては、梅斎や迷庵の影響を受けて漢・唐の注疏を重視するようになってはいたが、譲りえぬ一線があった。それにもかかわらず、お互いの学識を認め合い、尊敬し合っていた様子が美しい。慊堂には迷庵と同じように心の広さがあった。沢九輔を許したのもその心の広さであった。

後のことであるが、慊堂の人柄の素晴らしさは弟子の渡辺崋山が蕃社(尚歯会)の獄で死罪となるのを、身を賭して救った行動で良く知られている。

大塩平八郎の乱を契機として、「儒教」と「蘭学」が激突したのが、天保十年(一八三九)の蕃社の獄である。その仕掛け人の鳥居耀蔵は、林述斎の三男であり、慊堂の弟子であった。

時に鳥居耀蔵は老中水野忠邦の下で目付けを勤め、幕閣の中枢にいて甲斐守を名乗っていたことから、妖怪と怖れられていた。すなわち、蕃社の獄の当事者、渡辺崋山も鳥居耀蔵も慊堂の弟子であった。

その点では佐藤一斎も同様であった。崋山も耀蔵も昌平坂学問所で一斎から学んでいた。しかし一斎は、大塩平八郎の時もそうであったが、害が身に及ばぬように、尚歯会との係わりを消すのに汲々としていた。一方、慊堂は鳥居耀蔵にも積極的に会い、門下生を通じて老中水野忠邦に上書して崋山無罪を訴えている。結局、全文三千字におよぶ無罪論は、忠邦を動かし崋山の助命を勝ち取った。杉浦明平の『小説渡辺崋山』は慊堂讃歌の著である。

私は佐藤一斎の『言志四録』にある「少にして学べば、則ち壮にして為すことあり、壮にして学べば、則ち老いて衰えず、老いて学べば、則ち死して朽ちず」が大好きである。だから、儒者の最高位に昇った佐藤一斎が身を守るのに汲々としていたのを知っても、ある意味では人間的だとさえ思っている。しかし、だからこそ、それを

超越したところで、働いた慊堂が大きく輝くのである。

実は、慊堂が菊園公(水野忠邦)に呈する書を草した日、天保十年七月二十七日、慊堂は前日より腹候甚だ悪く、食することもできないほどの体調であった。

明治維新で活躍した熊本藩の横井小楠も、一度しか会っていない慊堂について「靄然として春風の裡にあるようで、胸中にはいささかの城郭もない」と述べている。だから、慊堂が、書生時代に援助を受けた娼妓と結婚して、何かと苦労したと伝えられていても、納得できるのである。

友を見れば、人物が分るという。梅斎を語らなくとも、迷庵や慊堂を語れば、自ずから明らかになることがある。梅斎は、終生続く友、しかも当時の最高級の学者を友に持ち、彼らから敬愛を受けていた。

(十一)善の死と二女多加

文化七年(一八〇六)六月十八日朝、梅斎は妻よし(善)を失う。その年、二女たか(多加)が生まれているので、産褥の病であったと思われる。善のことは、梅谷文夫もそれ以上のことを伝えない。幼児三人をのこして妻よしに先立たれた梅斎は、その後、後妻を娶ることなく、母親代わりもよく務めて、子供たちを育てあげる。子煩悩だったと言う。

善の在りし日を想うには、どうしても二女多加の姿を通すことになる。

多加のことは、森鷗外の『伊澤蘭軒』に詳しい。多加は夙くから今少納言と称され、また単に少納言とも呼ばれた才女である。後の名は俊で、天保七年(一八三六)すなわち梅斎の亡くなった年の翌春、二十七歳で伊澤蘭軒の三男で同年の柏軒に嫁いでいる。多加はしばしば「磐安(柏軒)さんがわたしを女房に持ってくれぬかしら」と言っていたそうで、いわば押し掛け女房であった。もっとも、結婚した年、津軽屋は金十二万七五六九両の巨額債権を放棄し、経済的に困窮していた。嫁入りを急いだのには、その事情もあったのかも知れない。

梅斎の学問は、津軽屋を継いだ長男の懐之よりも多加に伝えられたと言う。和漢の書に通じ、時には父に代わって歌や文を書いたが、いずれが多加か梅斎かと言われたほどであった。特に仮名文字の美しさは歎賞すべきだと鷗外は述べている。

また梅斎の弟子、岡本況斎も「たか子といふは、梅翁のいつきむすめにして、ざえかしこく、なまなまのはかせは爪くはる」と書いている。梅斎は多加の教育を況斎に託していた。人物の評価に厳しかった況斎も、親炙した学者五十五人の中で梅斎と清水濱臣だけは特別に高く評価しているが、多加もその一員に加えている。

今少納言と呼ばれたのは、渋江抽斎の後妻で才名をはせた五百が新少納言と呼ばれたことと対をなしているからである。『渋江抽斎』は、森鷗外が最初に書いた史伝であり、抽斎は医学を伊澤蘭軒に儒学を梅斎と迷庵に学んだ。五百はその四番目の妻である。明治十七年まで永らえたので、鷗外は五百について、『渋江抽斎』の中でいきいきと描いている。いや『渋江抽斎』が永遠の価値を得たのは、五百をいきいきと描いたからだとさえ言われている。その五百も豊かな金物問屋の出で、自ら夫を選んでいる点でも多加と良く似ている。

これも鷗外によるが、多加と五百は川崎大師に詣でた時に石川貞白の紹介で出会っている。七歳上の多加のことを五百は「思った程美しくはなかった」と言っていたという。これは、多加が若い頃、「大変美しい」との世評があったと言うことであろう。小柄だったともいう。

また、多加は書生たちと育った故か、見かけは、お酒を好むとか言葉や振る舞いに男っぽいところがあったが、女性的な繊細さも持っていた。

結婚したての頃、柏軒の兄嫁、志保から預かった姪の柏がひき付けを起こしたことがあった。志保が帰宅した時には、既に柏は回復していたが、「あの、お留守にお柏さんが」と言っていきなり泣き伏してしまった。志保は柏が死んでしまったのかと驚いたと言う。

多加が、梅斎から継いだ資質が多かったことは間違いないとしても、私はそこに善を彷彿するのである。善も、多加や五百と同じく豊かな商家で育ち、教養を身につけた「新しい女」であった。梅斎はそのような善を愛し、多加をいつくしんだのである。家庭生活でも梅斎は時代の先を行っていた。

今川風雲録（二）

千坂精一

鎌倉幕府滅亡

正慶二年・元弘三年（一三三三）三月二十七日、足利高氏（尊氏）は二千余の軍勢を率いて鎌倉を進発した。

閏二月に後醍醐帝が隠岐国（島根県）を脱出して伯耆国（鳥取県西伯郡大山町名和）の名和長年を頼り、船上山の智積寺を行在所にして各地の武士に蜂起を促す綸旨を送っている、との報が六波羅から早馬で届いた。

慌てた得宗北條高時は、すぐさま大軍の発向に踏み切り、一族の名越高家と足利高氏を討手の将に命じた。

高氏はこのとき病み上がりで体力が回復していなかったが、高時の執拗な急き立てにやむなく重い腰を上げた。

渋々出陣はしたものの、高氏に戦意はなかった。

というのは、二年まえの八月に後醍醐帝が神器を奉じて京を脱出し、比叡山を逃れた尊雲（護良）、尊澄（宗良）両法親王とともに大和笠置寺を行在所にして挙兵したとき、高時は一族の大佛貞直、金澤貞將と九月五日に父貞氏の葬儀を終えたばかりの高氏に出兵を命じた。

高氏は、服喪を無視した高時の仕打ちに腹を立てた。

あのときの口惜しさを引き摺っている高氏は、討手の将でありながら心中複雑で、激しく揺れていた。

そこへ、足利の家は代々天下を取れぬ無念を抱きつづけてきた、と怨念の系譜を語る母清子の声が重なった。

清子は上杉頼重の女である。

上杉氏の祖は藤原北家の勸修寺系で、後高倉院守貞親王第一皇女式乾門院の蔵人だった藤原重房である。

のちに式乾門院の猶子になった後嵯峨帝の第一皇子宗尊親王が、鎌倉幕府五代執権北條時頼の要請で六代将軍に迎えられたとき、重房は丹波国何鹿郡上杉荘を与えられて上杉を名告り宗尊親王に供奉して鎌倉へ下向した。

その重房の女が五代足利頼氏の子家時を産み、さらに孫の清子が七代貞氏の子高氏・直義兄弟を産んだのだが、頼氏の正室は北條時房の女、貞氏の正室は金澤顯時の女であるから、家時と高氏・直義はいずれも庶子である。

清子は、舅家時や夫貞氏から聴いた足利氏の不遇や執権北條氏への怨念を、高氏に繰り返し語り伝えていた。

高氏が、母清子から聴いた話というのはこうである。

家祖義康の祖父源義家は、十二年間断続した前九年の役に陸奥守鎮守府将軍に任じられた父頼義を援けて安倍貞任・宗任兄弟を討った功績を認められて出羽守に任じられ、武名を高め、さらに二十年後の清原一族の争いでは陸奥守鎮守府将軍に任じられて藤原清衡を援け、五年がかりで清原武衡・家衡らを誅殺して鎮定したが、朝廷は私闘とみなして賞さなかったので、私費で将士を犒ったことから人気が上がったものの、その後も地方長官のままで重用されず、身の不遇を託ち六十八歳で歿した。

その義家が、無念のあまり、

「われは、七代のちの孫に生まれかわって天下を取る」

置文（遺書）を残したという。

源氏の嫡流は七代つづかずに滅亡してしまったが、足利氏のほうは高氏の祖父家時が七代の孫であった。

家時は、三代義兼が頼朝の挙兵に参加した功により北條時政の女時子を娶りながら同族の相婿頼朝の配下におかれ、源氏滅亡後も執権北條の下風に立たされていることに累代不満を抱いていたことを聞かされていながら、自分にも北條を斃す器量のない不甲斐なさを歎き、

「八幡大菩薩に祈り申し給いて、我が命をつづめて三代のうちにて天下を取らしめ給え」

という遺書を認めて、みずから命を絶った。

そのとき高氏は十三歳だったから祖父の自害は知っていたが、遺書は成人してからきかされた。

そして、三代は自分の代に当たることに気づいた。

そのときから高氏は、北條氏打倒の機会を窺ってきたのだが、二年まえの政変で大佛貞直、金澤貞將らと鎮圧に西上して倒幕勢力と対決したとき、その凄まじい攅頭を目のあたりにして幕府の衰退を思い知らされていた。

所領の三河国矢作（岡崎市矢作町）で吉良、今川の軍勢が加わり、足利、上杉、高家の一族が勢揃いした。

高氏は、鎌倉からの道中悩みつづけた結論として、

（祖父家時の源氏再興祈願を成就させる好機到来）

と判断すると、幕府を裏切り勤王方に寝返る決意した。

高氏は船上山への使者に従弟の上杉重能を選び、細川和氏を付けて討幕の綸旨を受けに密行させることにした。

上杉重能は高氏の母清子の妹加賀局が嫁いだ勸修寺別当宮津入道道宏の子で、伯父上杉憲房の養子になった。

勸修寺（京都市山科区）は醍醐帝が母后藤原高藤の女

胤子追善のため、昌泰三年（九〇〇）胤子の兄藤原定方に創建させた皇室所縁の寺なので、別当の子重能を立てれば高氏を信用してもらえると思ってのことであった。

高氏は、近江国鏡宿で船上山から戻ってきた重能と出会い、首尾よく後醍醐帝の綸旨を受けとるといったん京の六波羅へ入り、遅れて到着した名越高家に伯耆国へ遠征することを告げて、赤松則村討伐を高家に任せた。

播磨国へ出陣する名越高家軍を見送り、京を進発した高氏は、山陰道をすすんで所領の丹波国篠村（亀岡市篠町）で軍団を駐留させているところへ、名越高家が久我畷で赤松軍と交戦して敗死した、という吉報が届いた。

四月二十七日、高氏は宿将たちに後醍醐帝の綸旨を示して執権北條氏を見限ることを表明すると、義家の父頼義建立の源氏の守護神篠村八幡宮に白旗を掲げ、鏑矢一筋を添えて『戦勝祈願文』を奉納した。

篠村八幡宮は、嵐山から出ている嵯峨野観光鉄道で終点のトロッコ亀山駅で下車、駅前の一本道の先にある。

京へ取って返した高氏は、五月七日に赤松則村、千種忠顕らと六波羅を攻略した。南探題北條時益は自刃したが、北探題北條仲時は光厳帝を奉じて近江国へ敗走したのでこれを追撃し、追い詰められた仲時は九日に番場の蓮華寺（米原市）で自刃した。二十八歳だったという。

その前日の八日に上野国の新田義貞が新田荘村田郷（太田市新田市野井町）の生品神社で挙兵した。

鎌倉街道を南下した軍勢は途中入間川、久米川、分陪河原あたりで苦戦したが、切り抜けて藤澤に到着した。

翌十八日、新田義貞は軍勢を三手に分けて巨福呂坂口、極楽寺坂口、化粧坂口から鎌倉へ攻め入った。

赤橋守時、金澤貞將、大佛貞直らの軍勢がこれを死守したが時勢には勝てず、つぎつぎに破られていった。

追い詰められた北條高時、金澤貞顕ら一族郎党八百七十余人は、二十二日葛西ヶ谷の東勝寺で自害し、ここに頼朝開府以来一四一年つづいた鎌倉幕府は滅亡した。

高氏を出陣させるとき、謀叛を懸念した高時は高氏から二心を抱かぬ起請文をとり、さらに妻登子と嫡子千壽王（義詮）を鎌倉へ留めさせたのだが、結局高氏に裏切られ大蔵ヶ谷の足利邸に拘禁しておいた登子と千壽王も高氏の六波羅攻めまえに足利荘へ脱出されてしまった。

後醍醐帝が光厳帝を廃し、正慶の年号を元弘に復して討幕に功績のあった足利高氏、新田義貞らを賞したとき、高氏は帝（尊治親王）の一字を賜り尊氏と改名した。

名実ともに高時から後醍醐帝に乗り換えたのである。

なおこのとき高氏に動員された一族のうち吉良は西條三代貞義の名があるが、今川は誰だったのか不明である。

中先代の乱で擡頭

新田軍に追い詰められた高時が、一族郎党を葛西ヶ谷東勝寺に集めて全員自害したことから、北條一門は滅亡したかに見えたが、実は高時の二児が生き延びていた。

高時は、嫡男萬壽丸（邦時）を生母の兄五大院右衛門宗繁に預けて後事を託したが、鎌倉を制圧した新田義貞の詮索がきびしく、北條の遺族を匿った者は誅殺され、密告者には恩賞が与えられたので、逃げ切れぬと覚った宗繁は新田義貞に内通して萬壽丸を殺させてしまった。

生母二位局の扇谷屋敷にいた二男亀壽丸は諏訪三郎盛高が預かって鎌倉を脱出し、信濃国諏訪へ連れ帰った。

鎌倉幕府を倒して天皇親政を復活させた後醍醐新政権であったが、早くも内部批判が燻ぶりはじめていた。

側近萬里小路藤房は、

倒幕の恩賞が公家にだけ厚く武士を蔑ろにしたこと。

戦乱で諸国疲弊のところへ大内裏造営課税したこと。

御家人称号の廃止が有力武士たちの不満をかっていること。

などをあげて、

「いま、もし有力武将が現れて朝廷に異議を唱えれば、そこに諸将が馳せ参じてまた戦乱が起こるであろう」

と鋭く批判すると、出家して行方を晦ました。

この藤房の言動を契機にして、新政に不満を抱く公家たちが立ち上がり、公然と叛旗を翻した。

これらの公家の背後には、北條の残党が連なっていた。

西園寺公宗は匿った高時の弟泰家と大規模な叛乱計画を立てたものの密告されて誅殺され、泰家は逃亡した。

叛軍の精鋭は高時の遺児亀壽丸の率いる軍団だった。

亀壽丸は、成人して相模次郎時行と名告っていた。

時行を庇護した諏訪氏は、この地方随一の豪族である。

建武二年（一三三五）七月十四日、諏訪頼重（盛高改名）と滋野一族をはじめ保科、四宮など五十余将が時行を担いで挙兵、国司を血祭りに上げるとさらに守護小笠原貞宗軍を埴科郡船山郷青沼（千曲市五加）で破った。

この捷報に関東の諸将が時行の許に馳せ参じ、上野に侵攻したときには五万余騎に膨れ上がっていたという。

この『太平記』の記述は話半分としても大軍である。

ともあれ、時行軍は一路鎌倉を目指して南下した。

このとき、鎌倉には征夷大将軍成良親王を擁した尊氏の弟直義が執権として東国を管理していた。

直義に迎撃を命じられた岩松經家、澁川義季、小山秀朝らは女影原（日高市女影）、小手指原（所沢市小手指町）、府中（府中市）などで時行軍と戦ったがいずれも敗北を喫し、澁川義季、小山秀朝らは自害してしまった。

直義は相次ぐ敗報に業を煮やしてみずから出陣し、鎌倉街道を破竹の勢いで南下してくる時行軍を井出ノ澤（町田市本町田）で迎え撃って終日の激戦になったが、

大軍のまえには抗すべくもなく打ち破られて敗走した。

この合戦は『梅松論』にはあるが『太平記』にはない。『太平記』巻十三を要約すると、

直義は、鎌倉を退くことにして、山ノ内あたりまできたとき、ふと考えて近臣淵邊伊賀守義博を呼び寄せ、

「無勢のため一旦鎌倉を退くが、美濃、尾張、三河、遠江の軍勢を集めて取って返せば時行軍などまたたくまに討滅できる。当家にとって窮極の敵は時行より兵部卿親王（護良）だ。宮を死刑にしてよいという勅許はないが、このさい討ち奉ろうと思う。そなたは急いで薬師堂谷（鎌倉市二階堂）の宮の牢に馳せ戻り刺殺してまいれ」

と命じた。淵邊は主従七騎で薬師堂谷へ引き返した。

となっている。

直義軍を破った時行軍はいっきに追撃したであろう。

多摩丘陵の起伏は小野路から七国山あたりまでで、井出ノ澤のある本町田から町田、町谷、上瀬谷、飯田、俣野を経る鎌倉街道上ノ道は平坦地であるから、いかに地理に精通した直義軍といえども一旦鎌倉へ戻ってからあらためて落ち行くだけの時間的余裕はないはずである。

直義は井出ノ澤に出陣しないで鎌倉にいたのなら納得できるが、となると『梅松論』の記述は虚構になる。

直義のことはともかくとして、『梅松論』が伝える井出ノ澤古戦場は本町田にちがいなく、この地にある菅原神社本殿左脇に『史蹟井出ノ澤』の碑が建っている。

時行はこの合戦に勝利して二十五日鎌倉に入った。

幕府滅亡から二年二カ月後、時行は鎌倉を奪還した。

成良親王と甥義詮を伴って八月二日に分国三河まで後退した直義は、矢作に滞陣して頽勢立て直しをはかった。

京で鎌倉の敗報を受けた尊氏は、後醍醐帝に時行討伐を申し出て征夷大将軍と関東八箇国管領権を要求した。

後醍醐帝は、尊氏に東国管領権だけを与えたが、尊氏は勅許も得ずに軍勢を率いて鎌倉へ下向してしまった。

慌てた帝が尊氏に征東将軍を与えて出陣を追認した。

吉良兵衛佐滿義を先発させた尊氏が、途中近江、美濃、尾張で諸将の参陣を得て矢作で直義軍と合流したときは、総勢五万の大軍に膨れ上がっていたという。

尊氏軍は遠江小夜の中山を越えて橋本（浜名郡新居町）まで遠征してきた時行軍を緒戦で破ると、敗走を追って八月十九日には鎌倉へ入り大御堂ケ谷へ追い詰めた。

時行方の諸将は勝長壽院（雪の下）に入って全員自害し、北條残党の鎌倉占拠は僅か二十日余りで終わった。

この状況は鎌倉幕府滅亡のときと酷似しているが、ちがうのは時行がこの場を逃れて生き延びたことである。

鎌倉を奪還した尊氏は、後醍醐帝の帰京命令に従わず居坐り、協力諸将に恩賞として関東の土地を配分した。

このことは尊氏が武家の頭領になったことを意味した。

尊氏は、後醍醐帝が時行討伐を命じ、関東八箇国の管領権を与えてくれたことで天の時を得る好機会を摑んだ。

関東の土地のなかにはすでに新田一族が新政府から拝領した場所があったのだが、尊氏はそれを無視して諸将に与えてしまったために義貞とのあいだに紛争が起こり、新政府が義貞を支援して尊氏追討を命じたことから、両者の相剋は〈南北朝の大乱〉に発展していった。

鎌倉を逃れた時行はその後南朝方と通謀し、陸奥国靈山城（伊達市霊山町）を進発した北畠顯家の西上軍に加わったり、信濃国伊那谷に現われて小笠原貞宗の支城を攻め陥としたりして神出鬼没をくり返し乱世を強かに生き延びていたが、勸應二年、正平七年（一三五二）閏二月十八日新田義貞の遺子義興・義宗兄弟や義貞の弟脇屋義助の遺子義治、それに諏訪氏らが征夷大将軍宗良親王を奉じて上野で挙兵したのに参加したのが最後になった。

このとき時行は、義興らとともに手薄の鎌倉を攻めて尊氏の末子基氏を敗走させたが、態勢を立て直した尊氏が笛吹峠（埼玉県比企郡嵐山町と鳩山町の境）で義宗軍を破って越後へ敗走させたので、義興、時行らは孤立してしまいやむなく鎌倉を捨て三浦に逃亡した。

鎌倉幕府執権北條氏の再興に執念を燃やす時行はまたも潜行したが、翌年五月ついに捕えられて鎌倉龍ノ口（藤澤市片瀬）で斬首され無念の生涯を閉じた。

この時行の蹶起を、のちに〈中先代の乱〉といった。

つまり、北條執権時代〈先代〉と足利幕府時代〈当代〉との間だから〈中先代〉といい、その期間が二十日間だったことから別に〈二十日先代〉ともいったようだ。

この乱で今川範國の兄頼國、頼周、範滿の三人が討ち死にしたが、最大の激戦になった相模川の戦いで戦死した長兄頼國の躰には二十本の矢が刺さっていたという。

建武五年・延元三年（一三三八）八月十一日北朝から征夷大将軍に任ぜられて名実ともに武家の頭領に立った足利尊氏から、今川三兄弟の戦死を悼まれて顯彰されると同時に、末弟範國がこの年一月二十八日鎌倉から西上してきた北畠顯家軍を桃井直常らと美濃国青野ケ原（岐阜県不破郡関ケ原町）で迎え撃ち伊勢へ敗走させた戦功を賞されて、遠江守護に任ぜられた。

範國は、三人の兄が討ち死にしたことで当主の座が転げ込み、さらに遠江守護も拝命できた僥倖に恵まれたのだが、悲しみと喜びが混淆して複雑な心境であった。

亡兄たちとともに育った今川の地はなにかと思い出が多く離れ難かったが、遠江守護を拝命したからには三河国に居続けるわけにもいかず、やむなく天龍川東岸の見付（磐田市）に本拠を移すことにした。

遠江国は、東は駿河との国境大井川から西は三河との国境本坂峠（浜松市三ヶ日町と豊橋市嵩山町との境）までであるから、見付はほぼ中間に位置している。

評定を指揮する裏方に徹して将軍の兄を補佐していた。

尊氏の執事高師直が強引な急進路線をとったのに対して、直義は穏やかな漸進路線だったので両者は対立した。

師直の襲撃を察知した直義は尊氏邸に逃れたが、尊氏は師直を支持して直義を失脚させると側近の上杉重能、畠山直宗を越後国に配流したが、師直が刺客に殺させた。

直義は、尊氏が庶子直冬追討で九州へ出陣した留守に挙兵して尊氏方に勝利したので、尊氏は直義と講和したが、さきに配所で殺された上杉重能の養子能憲が摂津国（兵庫県）で高師直・師泰兄弟を討って怨みを晴らしたことからふたたび尊氏・直義兄弟の対立になり、直義は失脚して鎌倉へ走ったが追討を受けて討ち死にした。

この室町幕府の内部抗争を〈観應の擾乱〉という。

範氏は、この乱で雌雄を決する最大の激戦になった手越河原や薩埵峠など駿河国での戦いで戦功を挙げ、尊氏方有利に貢献したので、尊氏から「一人当千」と激賞され、あらためて父範國兼帯の遠江守護を与えられた。

範氏は、駿河守護の父範國のために大井川の対岸駿河国大津郷に大津城（島田市大草）と館を建てた。

このとき範氏は、菩提寺も建立して慶壽寺とした。

境内に範氏の墓と高さ一四メートルの枝垂れ桜（県天然）があり、寺宝の重文絹本着色釈迦十六善神像は鎌倉末期の絵師詫間了尊の筆と伝えられる。

本堂裏の茶畑を上ったところの今川の段とよばれる平

見付は、のちの江戸時代に東海道五十三次の宿場で賑わったところであるが、この当時は遠江の国府であった。

磐田市内に遠江国分寺跡があるから国府であったにちがいなく、国分寺と道を隔てて府八幡宮もある。

ついでながら市内富士見町にある遠州鈴ヶ森は、歌舞伎狂言河竹黙阿弥作『青砥稿花紅彩画』（白浪五人男）の盗賊首領日本駄右衛門（本名左衛門）が処刑され晒し首にされたところで、墓は近くの見性寺にある。

このころ隣国駿河守護は石塔義房であったが、さきに西上してきた北畠顕家軍に難なく突破されてしまい、その後も戦功がなかったので守護を解任されてしまった。

そして範國が遠江守護と駿河守護を兼帯させられた。

のちに範國は、幕府の引付頭人（訴訟を扱う機関の長官）にも選ばれているから、一門衆のなかでも将軍尊氏にもっとも信頼される人物になっていたのであろう。

駿河に地歩を占める

範國の子範氏は北朝方の武将として遠江、駿河地方の南朝方武将と戦い、大津郷落合城（島田市落合）の土岐四郎左衛門の一族佐竹、藁科連合軍を破って功績を挙げた。

室町幕府は、尊氏・直義兄弟の二頭政治であった。

尊氏は侍所や恩賞方など武士の統率権を握り、直義は地が館跡で、さらに上った山頂が大津城本丸跡である。

ここを本拠にした範國のあとの今川氏は代々駿河守護、守護大名、戦国大名として駿河国を統治することになるので、この範國を駿河今川初代とよぶようになった。

翌文和二年・正平八年（一三五三）八月範氏は父範國と守護を交代し、遠江守護を譲って駿河守護になった。

この年五月二十日に前述の北條時行が鎌倉龍ノ口で斬首されると、十一月八日には宗良親王と越後国小国城に籠もっていた新田義貞の遺子義宗が敗れ諏訪国へ逃れた。

範氏は、大津城に近い葉梨郷（藤枝市）にも花倉城を築き、その麓に居館をおいて両城を本拠にした。

延文三年・正平十三年（一三五八）四月三十日、室町幕府初代将軍足利尊氏が五十四歳で病歿した。

その年十月十日、新田義貞の遺子義興が畠山國清軍に敗れて武蔵国矢口の渡し（大田区東矢口）で自刃した。

十二月八日、尊氏の嫡男義詮が二代将軍に就任した。

五年後の貞治二年・正平十八年（一三六三）鎌倉公方足利基氏は兄義詮将軍の意を体して父尊氏と叔父直義が対立したとき叔父派に属して父に疎まれ、分国越後に逼塞していた上杉憲顕を関東管領に就任させた。

上杉憲顕は、父尊氏の母方の従弟であった。

父尊氏すでに亡く、義詮・基氏の従弟小父にあたる憲顕は上野、越後、伊豆守護の頼もしい実力者であった。

事実憲顕は、就任するや武蔵の芳賀高名、宇都宮氏綱、それに上野の世良田義政をつぎつぎに降していった。

そんな上杉憲顕活躍の噂をきいて、範氏は舌を巻いた。

上杉が頼もしく思える反面、一沫の不安を抱いた。

それは、将来もし将軍家と鎌倉公方家のあいだで尊氏・直義兄弟のような対立抗争が起こった場合、鎌倉公方統轄の東国と境を接しているのは範氏の駿河国であった。

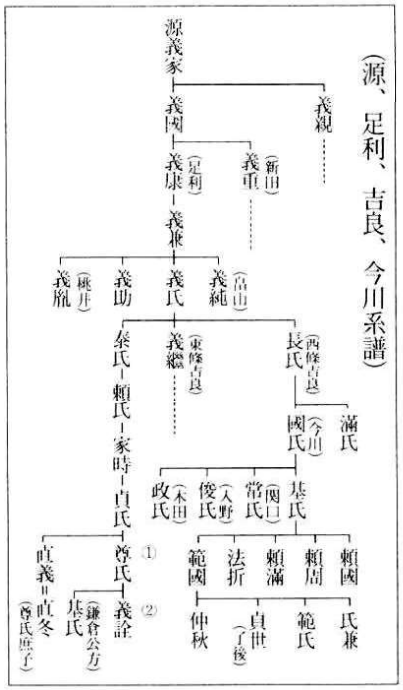
（真逆の時は、守りの要今川が幕府軍の先鋒を承るのだから、強力な軍団につくり上げておかねばならない）

範氏はそう覚悟したが、五十歳を迎えた貞治四年・正平二十年（一三六五）四月三十日に病死してしまった。

父範國が九十歳まで生きたのだから、惜しまれる。

（つづく）

（源、足利、吉良、今川系譜）



信じて託す（その四）

―米山梅吉の一生―

三戸岡道夫

第五章　ジャーナリストをめざした活動

米山梅吉が八年のアメリカ留学を終えて日本へ帰ってきたのは明治二十八年（一八九五年）、梅吉が二十八歳のときであった。

明治二十八年といえばちょうど日清戦争の終った年である。日本が日清戦争に勝って世界に実力を認められた年で、そのような勃興の気分に湧く日本へ帰ってきたのであるから、梅吉も胸にいろいろと抱負を抱いていたものと思われる。

梅吉が小供の頃からの夢は、「文筆で身を立てる」ことであった。沼津中学校時代の夢もそうだったし、また家出して東京で勉強した時代もそうだった。そしてアメリカ留学中にもその方面の勉強を心掛けているので、日本の新聞や雑誌への寄稿も怠らなかったのである。梅吉はいくつかの新聞社を廻って就職活動を開始した。

当時の新聞界には、東京日日新聞、朝野新聞、報知新聞、自由新聞、東京朝日新聞、大阪毎日新聞、読売新聞など数多くあり、梅吉は熱心に各新聞社を廻った。しかし、どこでもすぐには採用してくれなかった。

そのような新聞界の中で、明治十五年に福沢諭吉の主宰で創刊された『時事新報』が、不偏不党と社会啓蒙の姿勢を強く打ち出し、福沢諭吉の書く論説が好評なこともあって、勢いを強めていた。

そのため時事新報は、海外留学から帰ってきた青年にとっては魅力ある職場だった。

そこで梅吉も時事新報を訪れた。それは郷里の友人の土屋元作が時事新報に勤めていたからでもあった。しかし時事新報も一般の新聞社と同じように俸給が安く、また、極力小人数で仕事をしているのが現状であった。就職するのさえ困難な上に、安い俸給では、生活すら満足にできないのではないか。梅吉は憧れの新聞社へ入社するのを次第に躊躇する気分が強くなっていった。

しかし同じ文筆の道を志す友人たちの動きを眺めていると、

（なにくそ、俺だって…）

という気持にもなるのだった。

梅吉とほとんど同時にアメリカから帰ってきた友人の小松緑は、「世界の日本」という雑誌に関係していた。

またアメリカ帰りの松本君平は、「大日本」という雑誌を出し始めた。

旧友の遅塚麗水は小説や美文を書いて、そろそろ地歩を固め始めていた。

また沼津中学校から一番の親友の稲村真里は詩の小雑誌、角田勤一郎は国学研究の小雑誌をやっていた。

また、その後人文評論で名をなした石川半山は、まだ駆け出しの新聞記者だった。

当時、石川半山と松本君平、それに望月小太郎の三人が、「ハイカラ三人男」と呼ばれていた。ハイカラという言葉はその頃の英国で流行した、「高いカラー」から出た言葉で、耳が隠れるくらい高い純白のカラーをつけた英国紳士を、あこがれた言葉だった。

この頃梅吉はこの三人男の中の一人の望月小太郎から、勝海舟を紹介してもらった。望月小太郎は幕臣の子であり、学問見識とも時代より一歩進んでいた人物で、勝海舟のすぐ近くに住んでいたので、海舟と面識があったのである。

梅吉はアメリカで「提督彼理」（ペルリ）という原稿を書き上げて、日本へ持ち帰っていた。梅吉はこれを博文館に持ちこんだ。博文館はその頃のもっとも大きい出版社で、日清戦争の時に、日進戦争実記という雑誌を発行して、大いに当てた。そしてさらにその後「太陽」という大きな高級雑誌も発行した。

経営者の大橋新太郎は梅吉とは初対面にもかかわらず、「ペルリ」の出版を引受けた。

「ペルリ」は相当に売れて、梅吉とペルリの後裔との間を結びつけるきっかけになった。またこれが縁になって、その後財界人になった大橋新太郎と、梅吉は一生の交際をつづける間柄となった。

その頃梅吉は、望月小太郎の紹介で、勝海舟のところへ出入りを始めていた。梅吉は明治維新史を研究して、何かを書くつもりだったのである。この時の梅吉はどこまでも文筆で立つ決心だったのである。

勝海舟は、その頃、高橋泥舟、山岡鉄舟とともに、旧幕臣の三舟とよばれた、名筆家であった。その海舟に梅吉は「ペルリ」の題字を書いてもらったのだった。

初蕾発東隅
丙午仲夏
題提督彼理　海舟

という見事な字が、梅吉の処女出版「提督彼理」の題字として、巻頭を飾ったのである。

また、序文は、かつて土居光華塾で勉強していた頃に知りあった学友の藤田四郎に書いてもらって、推薦してもらった。藤田四郎は井上馨侯の女婿で、農商務省の農務局長をしていたから、梅吉は「ペルリ」の出版に当っては、勝海舟ともども、自分の人脈の中での最も有力な人達を動員したのであった。

この「ペルリ」の出版は明治二十九年の九月であったから、梅吉がアメリカから帰国してからちょうど一年すこしたった頃であった。

後日、梅吉は昭和十年頃になって（六十八歳の頃）、この頃のことを談話記録「思い出」の中で次のように語っているので、左記する。

ところで新たに帰朝した私には、まず新聞記者になれるかなれないかが大事件であった。実際問題として職業とその待遇ということも考慮しなければならなかった。土屋元作が「時事新報」にいたので尋ねていって相談したところが、新聞記者の月給というものが甚だ少い上に、どこへ入社するにしてもそう容易でないのを知った。

米国を立つ前に書いた「提督彼理」を博文館が出版しようというのでこれを托したが、菊判二百ページ内外の本になって、付けた定価が二十銭か三十銭にすぎなかった。原稿料はいくら貰ったか忘れた。この関係で大橋新太郎氏に知り合い、交際は今日までも続いている。博文館は「日清戦争実記」という雑誌を出して大当りし、また「太陽」を出して盛んなことであった。「太陽」は当時珍らしい大雑誌で、アメリカ帰りの連中がそろって原稿料を稼がせてもらったことで、私もまたその一人であった。

私と前後してアメリカから帰った友人の小松緑は、竹越与三郎氏の「世界の日本」にも筆を取ったが、やがて外務省に入った。同じく松本君平はあくまで言論文章で行くといって、自分で「大日本」と題した雑誌を出し、私もこれを手伝ったこともあった。

旧友の中では、今は安房の官幣神社の宮司をしている稲村眞里が、当時巌本善治氏の「女性雑誌」のほかには例のない、婦人むけの「撫子」という雑誌を出したので、私もそれに何か書いたりしたことがあった。角田浩々が「国民新聞」にいて、宮崎湖処子の後を受けて評論で文名がすでにあがり、遅塚麗水は「報知新聞」で小説や紀行の美文で名高く、石川半山は人物評論で一家をなしていたが、私には彼等の眞似はできないと思ったのである。

アメリカ滞在中に感心して読んだ有名な「開国始末」の著者島田三郎は、言論文章二つながら卓絶の人であるのに「東京横浜毎日新聞」の主筆として受ける月給は、あまり大額でないことを知った。島田の外の有名な人達も新聞記者としての収入は甚だ貧弱であることがわかり、そうこうするうちに段々生活上の実際問題にも逢着し、かつ、いささか贅沢な外国風の生活風を学んでいた私は、ここで自分の性質なり技量なりを省みて、直さなければならなくなった。

時まさに勃興して来ようとした実業界の方が身を置くのによろしかろうと思って、ここに転向の途を見出そうとするようになった。

この談話では、同じように文筆の道をめざす友人たちの動きを通して、当時の様子を的確に描くと同時に、梅吉自身が「太陽」や「大日本」、「撫子」などへ執筆をしながらも、梅吉の結婚生活という現実を控えて、やむなく実業界へと志向を転じていく心情があざやかに語られている。

なお、博文館の雑誌「太陽」への梅吉の寄稿は、出版の年月順に挙げると次の七回になっている。

一、明治二十九年六月二十日号「米国の鉄道事業」
二、明治二十九年七月五日号「米国の鉄道事業　その二」
三、明治二十九年七月二十日号「米国の鉄道事業　その三」
四、明治二十九年十月五日号「米国の過去及び現在」
五、明治三十年三月五日号「世界最大の事業」
六、大正七年六月十五日号「日米経済関係と其の危機」
七、大正十三年一月一日号「質実、雄大、剛健の新帝都」

右の内、一から五までは、後日梅吉が日本鉄道会社へ入ってからのもので、梅吉が二十九歳と三十歳のときのものである。

そして、一、二、三、および五は、米国の鉄道事情を紹介したもので、のべ十一ページ（一ページは約千字）とかなりの長論文である。そしてその最初の号には、編者が梅吉を次のように紹介している。

（米山君はさきにアメリカに留学し、主として全国鉄道のことを研究し、昨年帰朝し、現在日本鉄道会社の社員である）。

四、の「米国の過去及び現在」は、明治二十九年がアメリカが独立宣言してから百二十年にあたるのを機に、アメリカ社会の現状を分析紹介した五ページほどの論文

である。

六、の「日米経済関係と其の危機」は三井銀行へ入ってから政府特派財政経済委員として訪米帰国したときのもの（梅吉が五十一歳）、七、の「質実、雄大、剛健の新帝都」は、関東大震災後の首都のあり方を論じたものである（梅吉が五十七歳のとき）。

第六章　就職と結婚

このようにアメリカから帰ってきた梅吉は新聞記者にならうと、あちこち奔走した。友人、知人の多くも、いろいろと文筆面で活躍していた。文筆業への希望はいやが上にも梅吉の中で燃え上るばかりであった。

しかし、なかなか文筆業での就職先を見つけることはできなかった。それに文筆業界の実態が次第にわかってくるにつれて、文筆業の活動は表面的には華々しく見えるけれども、文筆業者の収入は意外と少く、経済面においては苦しいものであることがわかってきた。梅吉も「ペルリ」を出版し、相当売れたけれども、梅吉のところへ入った原稿料は期待したような額ではなかった。

梅吉の心がいかにはやっても、当時の日本はまだ文筆業で世間並みの生活が出来る時代ではなかったのである。いろいろ新聞が出ているといっても、それは主として都会が相手で、地方へ行けば読むのは地主か、役場の吏員か、学校の教師ぐらいなもので、一般の民衆は自分たちには関係がないものだと思っていた。だから新聞の発行部数も少いから、新聞記者の収入が少いのも止むをえないのであった。

日本で一般の人々も新聞を読みはじめたのは、それから十年後の日露戦争の頃からである。日露戦争は日清戦争とちがって戦争の規模が大きかったから、どの村々からも多くの兵士が出征した。その安否を知るために、農村でも小作人の三軒に一軒ぐらいの割合で、新聞を購読するようになったのである。雑誌もいろいろな種類のものが出ていたが、それが大量部数を発行できるようになったのは、さらにまた十年後の第一次世界大戦が終ってからであった。

このような実際の文筆界の実情がわかるにしたがって、

（果してこの文筆の世界で自分はやっていけるであろうか）

（この文筆の世界へ本当に入って行っていいのであろうか）

という疑問が梅吉の中に起ってきた。すなわち、あれほど熱望していた文筆の世界へ入っていいかどうか、迷い始めたのであった。

それは梅吉が解決しなければならない大問題が、目前

に迫っていたからであった。

梅吉の結婚問題であった。

梅吉が十二歳のとき米山家へ養子に入ったのは、一人娘の春子（当時六歳）と夫婦となり、将来、米山家を継ぐためであった。それが何時のことかと米山家の方では期待していたのに、梅吉はその期待に反して沼津中学校を中途退学すると東京へ勉強に行ってしまい、さらに八年もの長い間アメリカ留学生活を送ったのである。

やっとアメリカ帰ってきた梅吉はもう二十九歳になっていた。娘の春子も二十三歳になり、当時の女性としては婚期が後れていた。

一日も早い結婚が望まれていた。

そのためには自分の進路を決めねばならない。

（結婚して、果して文筆業で生活していけるであろうか）

梅吉は悩むのだった。いくら幼い頃から文筆業にあこがれていたとはいえ、自分で世帯を持って、天下国家ばかりを論じてもいられまい。文筆の世界では収入が足りない。

筆は一本、箸は二本である。ましてや結婚すれば箸は四本になるのである。とても収入が追いつくものではない。

こうして梅吉はついに、文筆で生活を立てることを諦めたのであった。

それではどこへ就職したらいいのかということになると、新聞社、雑誌社以外はまったく考えていなかったので、梅吉には見当もつかなかった。

官吏になったらどうかとすすめてくれる人もいたけれども、官吏になる意思は梅吉にはまったくなかった。差し当り、

（英語を利用して収入を得るほかに方法はないだろう）

と思った。この頃は英語の出来る人間は少なかった。また、英語が出来るといっても、本は読めるが、話すことは下手だという英語であった。その点梅吉は八年間もアメリカに留学していたので、英語は読み書きともに得意中の得意というところである。

すると、かねて就職を頼んでおいた旧友の海野力太郎が、

（日本鉄道会社が英語のできる者を求めている）

という話を持ってきてくれた。

そこで梅吉は海野力太郎の世話になって、日本鉄道会社に入社した。

こうして梅吉は生活を経済的に安定させておいて、明治二十九年（一八九六）十月六日に、郷里の長泉村で春子と結婚式を挙げた。梅吉が二十九歳、春子が二十三歳のときである。

鉄道が国有になってから日本鉄道会社はその姿を消し

たが、日本鉄道会社はその頃日本中の鉄道の大部分を引受ける、日本一と言われた大会社であった。社員は技術系と事務系に分かれていたが、機械を動かすのが主の鉄道会社だから、当然技術系の方が重んじられていた。

事務系の梅吉は運輸課の渉外事務担当ということになったが、運輸のことはまったくわからないので、時々、英語の翻訳や通訳の仕事が来る程度で、仕事は暇だった。

日本鉄道会社という大会社へ入社したものの、俸給は低く、役目は軽く、将来の見込みがなかった。しかし梅吉はすでに結婚して家庭を持っていたので、生活する基本的な一定の収入が必要であった。梅吉は引つづき内職の原稿書きで稼がなくてはならなかった。

すると外務省にいた宮川久次郎が事情を聞いて、

「高田商会のスコットが日本語の顧問になるような人を捜している」

と梅吉を紹介してくれた。そこで夜間はスコットの所へ行って、ここで収入の増加をはかるようなこともした。

しかしこういう仕事ぶりでは、梅吉にまだ文筆への未練があるように見られて、会社の幹部からはあまりいい目では見られなかった。梅吉から言わせれば、俸給さえもっと上げてくれれば内職などする必要はないのである。しかしこれを会社から言わすれば、内職ができるほど楽な仕事をしている人間に、これ以上俸給を上げてやる必要などないわけである。

次第に梅吉の中に、日本鉄道会社への嫌気が芽生えはじめてきたのは仕方がないことだった。

しかしこの間も梅吉は、勝海舟のところへ出入りするのを忘れなかった。梅吉は勝海舟を偉人として崇拝していたのである。それに梅吉には、もう一つ勝海舟から話を聞いて、幕末の維新史を書きたいという願いがあったからである。

勝海舟もこの頃になるとさすがにもう晩年で、また病気がちであったので、あまり人が寄りつかなくなっていた。そのため梅吉は勝海舟の話を一人じめで聞くことが出来た。そんな雰囲気もあって、ある時勝海舟が梅吉へむかって、

「君はよく来てくれるけれども、そのうち偉くなると来なくなるよ。誰でも皆そうだ。出世すると来なくなる。もっとも君が偉くなる頃には、わたしは死んでしまっているから、わたしのことなど構わないでいいけどねえ」

と、冗談半分に言ったことがあった。明治維新の立役者が世間からすでに忘れられてしまっている心の淋しさを、若い梅吉にそっと言ったのであろう。

それを聞いて梅吉は、やはり自分は実業界では偉くなれそうもないと、悲観的な気になった。そして、同じ実業界に身を置くにしても、もう少し違った方向があるのではないかと考えはじめた。

さて、世帯を持った梅吉は、住居を本郷の弥生町に構えていたが、俸給が少くて食うのに大変だった。

しかしそんな苦しい生活を梅吉は耐え忍んだ。

翌年（明治三十年）になると、長女の愛子が生まれた。子供の誕生は、愛情とともにますます生活の責任感を、梅吉に強くさせた。

生活費の苦しいところは郷里の米山家の方が、陰に陽に応援はしてくれていたのではあろうが、いつまでもそうしたものに甘えているわけにはいかなかった。梅吉は次第にじっとしていられない気持に追いつめられていった。

日本鉄道会社の上役に村上彰一という人間がいた。後に、台湾総督府民政長官の後藤新平の下で、台湾の鉄道敷設に功のあった日本鉄道界の傑物であったが、その村上彰一が梅吉を認めて、いろいろと面倒を見てくれていた。そして梅吉の様子を見て、

（ここは長く君のいる所ではない。はやく辞めて、官吏にでもなったらどうか）

とアドバイスしてくれたのだった。上役が梅吉を見るに見かねてそう言うのだから、よくよくのことであった。そして梅吉も、

（村上さんがそう言うのだから、やはりそれがいいのだ）

と、梅吉はついに日本鉄道会社を辞める決心をした。

（辞めてどうする？）

まだ、当てはない。村上彰一はそうアドバイスしてくれたくらいであるから、頼めば官吏の職は探してはくれたであろう。しかし梅吉は官吏になる意思はなく、村上彰一に再就職の途を頼まなかった。

（つづく）

狩野川のトド（2）

堀内永代

い。俺がもし軍隊に入ったら、お国のために命を捧げることになるかも知れない。そうなったらおとみ、子どもたちを頼むぞ・・・」

いつになく藤吉は、真剣な顔をして話した。

すると一歳になったばかりの五女桐子を抱いて、藤吉の左隣に座っていた女房のとみは、

「いやだねぇお父ちゃん、正月早々そんな命を捧げるのなんのって、縁起でもない、子どもたちが吃驚するじゃないの・・・」

と顔をこわばらせて藤吉に抗議した。しかし藤吉は、

（俺はいい加減なことを言っているんじゃないんだ）

と言わんばかりに首を左右に振って、

「なぁおとみ、雪子も聞いてくれ。去年の暮れには角屋の源吉さぁが中支で戦死したっていう公報が入ったばかりだ。あいつは俺より三つ若いだけだ。あいつが兵隊に行って戦死したということは、俺だっていつ兵隊に採られて、どんな危ないところへ配属されるか知れたものじゃぁない。命の保証なんてありゃぁしないんだから・・・戦争もだんだん拡がってきて、最近は支那や満州だけでなく南の方へ行く部隊もあるという話だ。俺たちも腹を括っておいた方がいいと思う・・・」

と真面目な顔で言い出した。

「そうだねぇ、男の働き手はみんな兵隊に採られてしまうし、船を動かす油もなくなるし、これで父ちゃんが戦地へ行っちゃったら、わたしは一人でどうすればいいんだね・・・」

とみは、雑煮を食べる手を止め、恨めしそうな顔をして藤吉を見た。

藤吉は、卓袱台の向こう側に座っている雪子へ、

「ところで雪子、お前はこの四月の新学期で五年生になる。もしお父ちゃんが兵隊に行ったら、母ちゃんがお前たちを食べさせるために働かなくちゃぁならないから、雪子が妹たちの面倒を見るんだよ。解ったね・・・」

と諭すように話し掛けた。

「うん、お父ちゃん解ったよ・・・　秋子と二人で春江たちの面倒を見るよ。ねぇ秋子・・・」

雪子は、父親の右隣に座っている年子の妹秋子と藤吉の顔を半々に見ながら、屈託ない顔で元気よく返事をした。

「雪子、秋子、頼むよ。夕べ俺は、俺の留守中のことをいろいろ考えたんだ。雪子には去年ボラの大群を予言したように、普通の人にはない霊能力のようなものがある。作文が『沼津文苑』に載ったときもそうだが、雪子が耳鳴りするという時は、それが吉兆の知らせみたいなものだ。俺は雪子が大人になったら、その霊能力を生かして必ず出世すると思っている。いや、出世して欲しいんだ。そうして母ちゃんを楽にしてやって貰いたい。そのために雪子ではなく、もっと出世する名前に変えた方がいいと思うんだ。おとみ、お前どう思う・・・」

藤吉は、僅かな屠蘇酒で耳まで真っ赤になった顔をさらに紅潮させて、そう言い出した。

「お父ちゃん、突然雪子の名前を変えるがどう思うって言われても、私はすぐに返事ができないわ・・・」

とみは、箸とお椀を口に近付けたまま、戸惑っていた。

すると藤吉は、

「雪子、お前の名前を変えようと思うがいいね」

と話を雪子の方へ向けるのだった。雪子は、

「うん、いいよ・・・　お父ちゃんとお母ちゃんがそうするって言えば、その名前に変えてもいいよ。わたし色黒でしょ、だから雪子っていう名前、あまり好きでないもん・・・」

とあっさり答えた。とみは雪子の返事を聞いて、

「雪子、お前は少しも黒くなんかないよ。ちょっと日焼けしているだけだよ」

（二）

狩野川河口の漁師町沼津我入道が、ボラの大漁で沸いた年も終わり、昭和十六年（1941）の新年を迎えた。四年前に始まった支那事変が長期化し、さらに対米英との外交関係も緊迫度を増して、平和な漁師町も騒がしくなってきた。

四二歳の厄年になった漁師の佐藤藤吉は、ささやかな正月料理の並んだ卓袱台を前にし、家族に向かって口下手ながらも新年の祝いの言葉を述べ始めた。

「新年おめでとう。今年もみんな健康で、仲良くやっていこう。昨年は、雪子に神様のお告げがあって、ボラを沢山獲ることができた。そのお陰で久し振りでよい正月が迎えられた。だが、昭和十二年に始まった支那事変も、今年で四年になる。我入道の漁師仲間も大勢兵隊に行ったから、俺のところにも何時召集令状が来るかも判らな

とわが子を慰め、それから藤吉に向って質問した。
「それでお父ちゃんは、どんな名前にするつもりなの」
藤吉は、ちょっと口ごもったが、
「うん、名前を変えるっていっても、戸籍の名前は変えられないから、呼び名だけ変えたいと思っている。それも子供の時だけでいい・・・」
そうは言うものの名前の変更は重大なことであるので、藤吉はすぐには名前を言わなかった。しばらく口をもごもごさせた挙句、冷えた屠蘇酒をぐいっと飲み干すと、
「おとみ、雪子、いいな・・・ 新しい名前は『オボコ』だ・・・」
「えっ、それってなに・・・」
とみと雪子は吃驚仰天、しばし言葉が出なかった。ひと呼吸をおいて藤吉は、
「実は・・・ 去年のボラ騒動のあった時から考えていたんだ。ボラは成長するにつれて呼び名が変わる縁起がいい出世魚だ。可愛くて初々しい娘のことを『オボコ娘』、粋な若者を『イナセな若衆』というが、みんなボラの小さい時の名前をとってそう言うんだ。ボラの幼魚は可愛いからオボコ、それからイナッコ、スバシリ、イナと名前が変り、さらに大きくなって、五〇センチから八〇センチくらいの成魚になると『ボラ』と呼ばれる。ボラは泳ぎも敏捷だし、自分の身長の二倍から三倍の高さまでジャンプする力もある。中には二メートルくらいの超大型になるボラもある。このような大型のものを『トド』と呼んでいる。海獣のトドは身長四メートル、体重一トンと大型だが、魚のトドも日本で川に棲んでいる魚の中では最大級だ。これ以上大きくはならない。『これで終わり』『これ以上はない』ということを『トドのつまり』というが、この言葉は魚のトドからきている。どうだ、おとみ、雪子、解るか・・・」
藤吉は、得意な魚の講釈を始めた。
「ボラの名前が変わることは解ったが、それと雪子の名前とどんな関係があるの・・・」
とみは、怪訝な顔で藤吉に聞き返した。
「うん、関係は大ありなんだ。ボラは『太っ腹』という意味もあるし、からだ全体が青味がかった銀色白で、角笛に似たスタイルのいい魚だ。それにボラは雄より雌の方が大きくて、強くて元気がいい。おまけに味も良い。雪子もボラみたいに器量良し、スタイル良し、頭良し、気立て良し、というように三拍子も、四拍子も揃った立派な人になって、出世して欲しいんだ。そしてお父ちゃんやお母ちゃんを喜ばせてくれ。そこで出世魚のボラの幼魚にあやかって、雪子の名前を『オボコ』としたんだ。いいな・・・」
藤吉がくどくどと説明すると、とみも雪子も、
(へぇ・・・)

と言わんばかりに吐息を洩らし、二人は顔を見合わせた。すると藤吉は、
「ただ、ボラは『一妻多夫型』だ。だから雪子も大人になったら男に気を付けなきゃぁいけないな・・・」
そう言ってにやりと笑った。
「お父ちゃん、子供の前でそんな下品なことを言わないで・・・」
とみは藤吉をたしなめた。しかし、とみ自身も、
(そういえば、雪子は色白で、器量良しだから、男で失敗しなければよいが・・・ でも利発な子だからそんなこともあるまい・・・)
そう思いながら雪子の顔をじっと見た。
その日から藤吉ととみは、会う人ごとに雪子の改名を告げていたが、我入道の人たちは、
「縁起物の出世魚の名前だからといっても、オボコはちょっと呼びにくいわ・・・」
そう言って、なかなかオボコとは呼んでくれなかった。それでも藤吉は一向に意に介せず、自分だけ、
「オボコ、オボコ・・・」
と呼んで一人納得していた。

(四)

月日の経過は早く、その年も暮れが近づき、十二月七日の第一日曜日となった。
雪子はお昼過ぎに、工作の授業で使う御弾き用の貝殻「きさご」を拾いに、我入道の浜辺にやって来た。
その日は冬には珍しく風もなく、よく晴れて静かな日であった。浜辺から北の方を見上げた雪子は、
「今日の富士山はとても近くに見えるわ。何か富士山の囁きが聞こえそうネ、どうしてかしら・・・」
と独り言をいいながら、右の耳に手を当ててみた。しかし富士山の囁きなど聞こえる筈もなかった。それから二時間余り貝殻拾いをしていた雪子は、太陽が西の水平線に沈みかかったことに気付いて、慌てて帰り支度を始めた。
浜辺から町道に向かって帰りかけた雪子が、大山伯爵別邸の近くに来た時に突然風が吹き始め、太くて大きな熱帯産防風樹ガジュマルの樹上から、風の音に混じって話し声が聞こえたような気がした。
雪子はハッとして足を止め、ガジュマルの樹を仰ぎ見た。しかし、四方へ大きく伸ばした枝には、小判型をした濃緑の葉が重なり合って密生しており、樹の上まで見透すことはできなかった。ただ潮風に吹かれて僅かに枝葉が揺れているばかりである。
このガジュマルの樹は、明治時代に数々の武勲を立てた元帥大山巌を慕って、大山伯爵別邸の近くに移住してきた沖縄出身の軍人が、故郷を偲んで植えた数本のうち

の一本である。
もともと熱帯樹のガジュマルは、冬の冷たい潮風には弱かったが、丹精して手入れした甲斐あってこの一本が残り、大きく生育したのであった。
雪子は、またいつもの耳鳴りが始まったのかと思い、右の耳を手で抑えたまま、一、二、三歩歩き出した。
すると今度は、はっきりと低いがよく澄んだ声が聞こえてきた。
「遠い海の向こうで、大きなことが始まる・・・　気をつけなさい・・・」
(海の向こうで・・・)
(大きなことか始まる・・・)
(はて、なんのことだろう・・・)
雪子は、ガジュマルの大樹を見上げて考えた。
ガジュマルの樹は『多幸の樹』とも呼ばれ、幸福をもたらす妖精『キジムナー』が棲み、その姿は心のきれいな人にしか見えないし、声も聞こえないと去年の春死んだおかねお祖母ちゃんから聞かされていた。
また、この樹の前方にある大山伯爵別邸前の三叉路には、魔物マジムンを撃退する魔除けの石碑『石敢當』が建てられている。マジムンは町中を徘徊して突き当たる性質があり、この高さ一メートルほどの石敢當に当たって砕けて撃退されたマジムンが、大注連縄のように捩じれて太いガジュマルの幹に棲みついているともお祖母ちゃんは話していた。
妖精キジムナーも魔物マジムンも、共にガジマルの苗と一緒に沖縄から渡ってきたらしい。
(いまの声は、妖精キジムナーの声か魔物マジムンの声か・・・　キジムかマジムか・・・)
雪子は少し不気味さを感じ、浜辺で拾い集めた御弾き用の貝殻「きさご」を入れた布袋を両手でしっかり握り締め、急ぎ足で家に向かった。一〇分ほどで家に着き、
「お母ちゃん、今、ガジュマルの樹の上から、不思議な声が聞こえてネ、海の向こうで何か大きなことが起こるって言ってたよ。本当だよ。わたしはネ、その声がガジュマルの樹に棲んでいるキジムナーの声か、マジムンの声か、どちらの声か判らなかったの・・・　それにサ、ガジュマルの樹ってサ、枝が垂れ下がり、地面に根を張って、丁度人が歩いているような形にも見えるでしょ、だから、ちょっと気味が悪かったの・・・」
雪子は、浜辺で聞いた不思議な声のことを、興奮気味に、早口で母親に話した。
母親のとみは、眉根を寄せて、
(またか・・・　また雪子の神憑りか・・・)
と困惑気味な顔をした。
雪子が、ガジュマルの樹の下で不思議な声を聞いた日の翌日、西太平洋の一角に、本当に大事件が発生したのである。

つづく

ノー・サイド

曽根竣作

いくばくの刻の流れか敗荷伏す沼に粉雪の斜に降りそそぐ
枝垂れ梅つぼみふくらみ朝よりの小雨に紅の水滴落とす
甲高く啼きて裸梢にうづくまる百舌のよこ顔夕日が照らす
均勢のとれし姿態の神さびて釧路雪原に丹頂の舞ふ
北風に朽ち葉舞ひ散るわが持てる残んの時を攫ふごとくに
いま此処に歎異抄読むわれありて過去世を払ふ光陰寸余

雪もやふ雲圧し来る大寒の海蕭条と昏れいそぐなり

流星のふたつ続きて光芒は水漬くかばねの友を喚ぶなり

青と白がっちり組みて譲らざるししむらの弾み美しきかな（大相撲・横綱戦）

人生と俺とはすでにノー・サイド没日にかげるポール見てゐる

いく重にも銀のじゆうたん巻く如く黄砂の昼を波頭かぶさる

襲ひたる鳥の落としし魚いっ尾盗賊かもめがひるがへり盗る

玉筋魚のくぎ煮に目あり幾千の春のめぐみとふと箸をとむ

店閉ぢし魚屋のかど鮫鰊の吊るし切りもなくきさらぎ過ぎつ

地を覆ひしだるる太き老梅の王朝被衣のごとき鎮もり

「見驚」とふ好文木の匂ひ立ちうすき緋色が闇に灯ともす

かぶと虫の暗き触角そらを截るビル屋上に昏るるクレーン

その上の抗日戦のルポ読みつぐ趙一蔓はジャンヌ・ダルクか

微吟すれど寮歌の日日のかへるなく鳳凰木に凭りしわが青春

大き掌がわが懐に入り来て把み出だせよ自負のかたまり

鳥帰る、七堂伽藍のしづもりて桜狩る身に陽はかたぶけり

引き揚げて祖国のさくら拝みたる埠頭も杳か花仰ぐとき

わかば風頬にやさしもほの暗きみ堂の菩薩半ば眼を開く

池の面に漂ひ光る落椿かすめてあさの真鯉あぎとふ

国境を越えて滑空する鷹のいつか鳩とぞ化るも夢かや

川面吹く風めるみたりさんらんと土手を覆ひて雪柳垂る

音低く白鯨のごとく忽然とビルの間(あひ)よりジャンボ機の航(ゆ)く

年金より天引される保険料じつと手を見るけふ啄木忌　(4/13)

定命(ぢやうみやう)はそれぞれのもの大患を超えて辛夷(こぶし)のこの春に逢ふ

歳月とふ篩(ふるひ)を経たる旧友ら僅かなれども「地上の星」ぞ

短歌

行雲流水（二十一）

石黒修身

近詠二十首

春眠は未だ醒めやらず新学期登校の童(こ)らのざわめき遠く

吾孫(こ)たちが烏帽子装束愛らしく行列ゆるり今日花まつり

修証義の誦(ず)ずに吾を誘(いざな)える僧月参り「行持報恩」

母の日に届く花鉢留守番の父なる吾が受取りている

この街も高齢化せり救急のサイレンの音しばしば近く

七十路後は余生と言いし人も居て「後期高齢」喧しき宴

人権と覇権主義とで迷走す彼の隣国の妄を怖れる

往年の「ガンジー」の様髣髴とダライ・ラマ叫ぶ民の自決を

聖火持つランナーを守る重層は騒乱に似て異状危ぶむ

「アポリア」とは言えぬ議案も決まらずにねじれ国会空転むなし

「満地球」月から昇るこの神秘「かぐや」の撮りし球体蒼く

「望郷のバラード」弾く「天満」居て春分の午後横浜は雨

その風姿素にして清し「ストラデ」を夫と尊ぶ「天満敦子」の

頂点を極めし後はしのび寄る限界を知れアスリートらは

「チョモランマ」再登頂せし「三浦氏」に益荒猛男の面差しをみる

再登頂果たせし後も淡淡と五年後希う「三浦氏」勁し

杣人と称し吉野に山居せし「前登志夫」逝く花の下にて

須臾の間の命なるらんがん末期故郷の友吾に笑顔で

「蟹工船」ブームと聞けば若き日に読みし亢りいまは懐かし

「多喜二寿司」とう店のあり小樽の街はさびさびとして

ぼたん

勝山道子

打つ鐘がつつじの赤をむせかえす
沙羅の花浄土にたちし師の影や
すきとほる脚(アシ)を揃えた彼岸花
罪残す佛もあるや彼岸花
選挙カー梨花(リカ)を散らして走り去る
芽ぶきにも木々それぞれの性(サガ)をもち

ろう梅のすかしに偲ぶ逝きし人
青梅をたゝけば露が目に沁みる
用水を取入れて咲く花菖蒲
すだれ下げ座敷がらりと模様がえ
夏またず逝きし人にも寫経そえ
かに膳にぼたんえびあり利尻寺
高層の都庁まき込む春吹雪
絶筆の絵手紙ばらが赤く咲き
暗やみにぼたん見せたく招じ入れ
梅の香がなつかし母のにほひとも

ふとそこに一寸ほどの芽ずいせん

走りゆく車窓にぼたん見逃さず

雪なくて富士あらあらし車窓かな

蝶(デウ)まうて読経の中亡師あり

終えんは安らかなりし朴の花

絵手紙やわれを祝いて大トマト

重ねあうサラの落花をはきよせつ

キウすえて昨日の登山を楽しみつ

征きしときさかりのサラは帰り散り

万緑が海に迫りて波もどる

サリーにもしぶきかゝりぬナイヤガラ

見るアホー浅敷のわれは徳島に

あわおどり　眞深の傘は器量あげ

マンションを背にして一齊(せい)植田かな

あじさいの墨(スミ)絵の帯でおどる人

まぎれなく視臾あつめたホタルかな

マンションをうつして植田水ゆたか

沙羅の花ひとよい咲いて散るもよし

血縁の絶えてわびしき彼岸かな

病む窓辺木々に春雨(サメ)生気もつ

あじさいで色どる街のまつりかな

耐えられぬ事の多くて盆かなし

窓ごしに吟行やすみこぶしみる

丁重な想ひこめたる春茶席

俳句

鷹の呟(つぶや)き(三)

大澤鷹雪

屋根赤き少年院や夏木立

朝顔の捩りたる身を解き放つ

白南風やかすかに潮の匂ひあり

朝涼や眼光澄みしメダリスト

向日葵や大歓声の応援団

鞍と置く極細麺や茄子の馬

迷ひ人捜す放送敬老日

我が庭の萩吹き上げてこぼれけり

四阿（あつまや）に人誘ひたき良夜かな

五ヶ国語話す庭師の松手入

得意気に林檎に印す歯形かな

引き結ぶ辰に触れたる桔梗かな

外套の中に犬抱く少女かな

おでん食ふ尽きぬ話題のワイドショー

モノクロの陰影深く蓮根掘る

呑兵衛のはしご無用の玉子酒

引き際を決めて提訴の開戦日

天災に人災熊の御難かな

髭捕へ暴れ伊勢海老茹でにけり

百人の韋駄天駈ける初戎

初明り金糸ひとすぢ走りけり

春雷に噛み殺したる欠伸かな

遊歩道逸れて独りの梅見かな

春めきて淡き黄色のタイを締め

漢詩

潮騒錄（五十五）

鯨游海

軍船愛宕直撃漁舟・諷諫詩連作其一

平成二十年二月

冥海如油雨水晨
軍船直撃葬漁人
右旋鳴笛何不避
此國古來官蔑民

押韻・晨 人 民

〈軍船愛宕漁舟を直撃す・諷諫詩連作その一〉

冥海油の如き　雨水の晨
軍船直撃して　漁人を葬れり
右に旋り笛を鳴らして　何ぞ避けざるや
此の国古来　官　民を蔑めばなり

〔注　解〕

冥海＝冥は暗く、冥に通じる。中国人にとって海は遥かに東方のおどろおどろした幽冥の不気味な所であった。ここでは暗い海での不幸な事故を予感させる発句。

雨水＝二十四節気の一。立春の次に位置する二月十八～二十日頃を指す。次は啓蟄で、三月五～六日頃。

禮記・月令「仲春之月　始雨水」とあり、雪が春を迎えて雨になるからという。今年は二月十九日が該当。

諷諫＝遠廻しに諫めること。政官の失態悪業を諷刺。

〔口語訳〕

未明の冥い海。油の如く穏かで風波なき雨水の早朝。軍艦「あたご」が漁舟「清徳丸」を直撃し、親子二人の漁民を葬むり去って了った。

「あたご」は自動操航を続けていたが、どうして手動に切り替え右旋回し、警笛を鳴らして衝突を避けなかったのであろうか。（これは人災であり、その遠因は）この国には古来、官尊民卑の風土があるからだ。

☆音もなく黒鉄迫り牙を剝き

薪割る如く我を貫く

迷走中央銀行總裁人事・諷諫詩連作其二

平成二十年四月

日本銀行未得人
法王空位既幾旬
念頭唯有省權益
此國古來官侮民

押韻・人旬民

〈迷走す中央銀行総裁人事・諷諫詩連作その二〉

日本銀行　いまだ人を得ず
法王の空位　既にいく旬ぞ
念頭ただ有るは　省の権益
この国古来　官　民を侮ればなり

〔注　解〕

法王空位＝総裁空席。戦後の復興期、日本銀行は総裁が一万田尚登氏のとき法王庁と称され、更に総裁は法王と半ば敬意を籠め、半ば揶揄されて呼ばれた。当時の日銀はそれに相応しい権威と実力を有していた。法王であるからには、空席というよりは空位と現わすべきであろう。省益を護ろうとする官と財政金融分離を叫ぶ野党。日銀の歴史に於いて今回総裁が決まる迄の混迷は永く記憶されよう。結句は連作共通の畳句。

☆省益の何ぞ劣らむ国益に
いよよ栄へむ国亡ぶとも

何處消滅虎兒的年金・諷諫詩連作其三

平成二十年四月

粒粒流汗養老銀
忽焉消滅世人瞋
誰思因在公營弊
此國古來官詐民

押韻・銀嗔民

〈何処に消滅したるや虎の児の年金は・諷諫詩連作その三〉

粒々汗を流したる　老を養ふの銀
忽焉と消滅して　世人を瞋らしむ
誰か思はむ　因は公営の弊に在るを
この国古来　官　民を詐けばなり

〔注　解〕

的＝…のような。
粒粒＝米のひとつぶひとつぶを云う。李紳・憫農「粒粒辛苦」＝こつこつと苦労して努力するさま。
銀＝ここでは銀子。金銭を指す（路銀＝旅の費用）
瞋＝目くじらを立てて真剣にいきどおること。自分の意に反することに対する心からのいかりと恨み。誰思＝反語。誰も思わない。公営弊＝社保庁の無能と無責任。

☆養老の虎の子何処民は今
官に委ねし過ちを悔ゆ

如何暫定石油税・諷諫詩連作其四

平成二十年四月

萬價急騰狂亂春
如何油税百論巡
勿忘暫定垂世紀
此國古來官誑民

押韻・春巡民

〈暫定石油税を如何せん・諷諫詩連作その四〉

万価急騰す　狂乱の春
油税を如何せん　百論巡る
忘るる勿れ暫定とは　世紀に垂とするを
この国古来　官　民を誑かせばなり

〔注　解〕

暫＝少時。わずかな間。斬には「わずか」の意がある。この国の為政者たちは、道路を作るという大義名分を掲げて石油に重税を課し、民から搾取してきた。また暫定を繰り返しては延長し、何と半世紀に垂とするに至った。誑かされたことに気づいた庶民は終に怒りを爆発させ、内閣支持率も10％台にまで低下させた。
誑＝たぶらかす。あざむく。だます。いつわり。
誑惑＝だまして迷わせる。誑誘＝あざむいて誘う。

☆暫定は少時に非ず半世紀
苛斂誅求かくてありなむ

奇怪後期高齢者醫療制度發足・諷諫詩連作其五

平成二十年四月

可怒神州壽老人
吟風弄月酒痕身
突如被剝於家族
此國古來官虐民

押韻・人身民

〈奇怪なる後期高齢者医療制度が発足す・諷諫詩連作その五〉

怒るべし　神州の寿老人
吟風弄月　酒痕の身となるに
突如家族より　剝がさるるとは
この国古来　官　民を虐ぐればなり

〔注　解〕

神州＝自国の尊称。ここでは日本を指す美称。
壽老人＝七福神の一。長寿をもたらす神＝長寿の老人。
酒痕＝酒の傷跡。被＝受身形る・らる。於＝～より。
わが国の誇る医療保険制度が瓦解し、老人は別枠となり、従来子供や孫らに扶養されて来た親や祖父母は強制的に家族から切り離され、姥捨て枠に入れられたのだ。

☆暖かき孫子と別れ独り逝く
姥捨て山は淋しかりけり

《漢詩の流れ44》遼・金・元の詩（二）金・元好問

元好問（一一九〇～一二五七）、字は裕之、号は遺山。太原容秀（山西省忻県）の人で、鮮卑族。進士に及第し尚書省左司都事に至るも、金の滅亡で放浪すること二十年近く、遂に元に仕えず金史編纂に従事した。

金・元を通じ最大の詩人とされ、金の士大夫の生まれ乍ら悲壮な彼の詩と生涯は杜甫の再来といわれた。

蒙古軍の来襲に逃れ登封に安住していた頃（三十歳）の作をみよう。

山居雑詩其一

瘦竹藤斜挂　瘦竹に　藤ななめに挂り
幽花草亂生　幽花　草乱れ生ず
林高風有態　林高くして　風に態あり（風がしなを為す）
苔滑水無聲　苔なめらかにして　水に声なし

又・其二

樹合秋聲滿　樹あつまって　秋声みち
村荒暮景閑　村荒れて　暮景閑かなり
虹收仍白雨　虹収まって　仍お白雨
雲動忽青山　雲動けば　たちまち青山

汴京陥落の時、四十四歳の彼は蒙古軍に捕らわれ聊城に三年監禁されたが、虐殺を免がれ一命をとりとめたのはまだしも幸いであった。亡国の遺民となり六十八歳没。

岐陽（岐陽）

百二關河草不橫　百二の関河　草横たわらず
十年戎馬暗秦京　十年の戎馬　秦京くらし
岐陽西望無來信　岐陽西に望むも　来信なく
隴水東流聞哭聲　隴水東に流れて　哭声を聞く
野蔓有情縈戰骨　野蔓情あり　戦骨にまつわり
殘陽何意照空城　残陽何の意か　空城を照らす
從誰細向蒼蒼問　誰に従ってか細かに蒼々に向かって問ふ
爭遣蚩尤作五兵　「争で蚩尤をして五兵を作らしめしか」

と。

（口語訳）

古来、要害堅固で「二を以て百に勝つ」と謳われた秦の地に、今や草一本生えておらぬ。

十年の戦乱によって長安の都はまっ暗闇となった。

西のかた鳳翔を望んでも消息なく、唯東に流れる隴水のむせび泣く声が聞こえるだけ。

野づらにはびこるつる草は情有りげに戦死者の白骨にまつわりつく。

夕陽はどんなつもりで空っぽの街を照らしているのか。

ああ、誰に託して蒼天に問いただせばよいのか。

「あなたは、何故蚩尤に命じて五種の武器を造らせたのですか」と。

※蚩尤とは、古代伝説に見える部族の首魁。黄帝に滅ぼされた。殺戮を好み、始めて武器を作ったという。

青春彷徨（二）

暗転

伊治哲

加藤レイコの電話を受けてから、修平は珍しく落ち着かなかった。

「ドングリコーラス」・・・？　なぜ「コーラス」で、「ドングリ」だったのだろうか？

そんなことを気にかけているうちに、ずっと以前の、消し去ることのできない傷跡があることに思い当たった。修平は名古屋支店で「ドングリコーラス」を始めるにいたるまでの、古い記憶を無意識に思い出していたのだ。

あたかも、轆轤仕掛けの回り舞台のように、それまで浮き立っていた情景が、思いもかけない闇の空間に暗転していくのに似ていた。

それは今にして思えば、修平にとつて“さまよえる青春”とでもいえる一時期のことであった。

この遠い日の出来事を思い描くのは絶えて久しくなかったことである。加藤レイコの電話が触発したのだった。しかし、なぜかその古い記憶のなかの自分の姿の方が、コーラスの頃のそれよりも鮮烈な記憶として頭の奥にこびりついていた。

彼女たちとコーラスを始める四年ほど前、初めて社会というものに触れた頃にさかのぼる。

人生のなかでも最も夢の膨らむ時期であったにもかかわらず、およそ青春を謳歌するにはほど遠い、息苦しいような生々しさをともなった思い出であった。そして、未だに忘れ去ることのできない痛烈な洗礼でもあった。

修平は、これまで自分の恥部を曝すようで、これだけ

は絶対に告白すまいと口を閉ざし、一切を封印してきた。しかし、あれから半世紀を超える年月を経て、銀行はもちろん、周囲の人たちも、世の中全体もすっかり変ってしまった今となれば、敢えて口を開くことも許されるのではないか、そして、今やこの銀行の帰趨を握っている人たちに、一銀行の生い立ちがどんなものであったかを知らしめる切っ掛けにもなるのではないか、と思い始めた。思い切って吐き出してしまいたいという衝動に駆られてきたのである。

修平は回想する・・・。

修平が共栄銀行に入行したのは、昭和二十八年である。その年の四月、入行と同時に名古屋から電車で三十分ばかり離れた町のI支店勤務を命ぜられた。

人事部長は辞令を手渡す折、修平にこう言った。

「君が勤務するI支店の支店長は、天下に名の知れた厳しい支店長だ。腹をくくって行け」

励ましの言葉を期待していた修平はちょっと虚を衝かれたが、すぐに思い直した。

〈どのように厳しいのかは分らないが、天下といったって、たかが一銀行の一地方のことではないか。仕事に厳しいのは当然のことだ〉

修平は腹の中でうそぶいて、勇躍I支店の門を叩いた。

支店長は、人一倍大きな図体に似合わず、髭づらに満面の笑みを湛えて迎え入れてくれた。

〈それみろ、このとおりじゃないか。こわもてだが、案外肝っ玉は小さいのかもしれぬぞ〉

修平は一瞬、緊張の糸を緩めた。

しかし、この浅薄な思い上がりがいけなかった。

最初に配属された出納係で、一か月も経たないうちに大失敗をやらかしてしまったのだ。

支払方――(当時、銀行窓口での現金の受払いは出納係に集中されており、収納方と支払方、それを統轄する元方の三人が担当。その一画は柵で仕切られていた)――に座った修平は、差し向かいの収納方女子行員の美貌に見惚れていたのか、札捌きの妙技に見とれていたのか、うっかり多額の過剰支払をやってしまったらしい。

夕刻、伝票を締めて"一算ゴメイ"――(最初のソロバンで勘定が合うこと)――の振鈴が鳴らない。収支の計算が合わない。現金が不足するというのだ。当時の修平の月給を数倍も超える大金であった。

一斉に同僚の目が出納係に集中する。金額が金額だけに修平たち出納係の三人は血眼になった。同僚たちも出納の柵を取り巻いて伝票の精査を始めた。どうも現金の受払いに問題がありそうだが、なかなか原因が掴めない。あれでもない、これでもないという周囲の声を背に、修

平は必死になって朝からの現金の動きを思い出そうと焦った。

やおら支店長が出納係二人を支店長室に呼び入れた。ここからが問題だった。

「これだけ多額の現金が足りないということは、ここにいる三人のうちの誰かが誤魔化したのに相違ない。お前たちのポケットに入っているものを全部この机の上に出せ。もちろん財布もだ」

支店長は髭づらの中の小さな目をギョロッと飛び出させて三人を睨みつけた。

その怒声に三人とも呑みこまれてしまって、説明どころか言い訳さえも口に出ない。まず元方の先輩、次いで収納方女子行員がおずおずと財布、手帳、ハンカチまでも机の上に差し出した。

じっと様子を見ていた支店長は、

「お前はどうした！　出さないのか、出せないのか！」

と、一段と声を荒げて修平に迫った。

「違算を犯したことは申しわけありません。もう少し精査の時間を与えてください。・・・しかしお言葉ですが、私は出しません。・・・頭から盗っ人呼ばわりして、私物まで出せというのは、人権・・・・」

そこまで修平は言って、それ以上は言葉を呑みこんだ。体が震えてそのあとを続けることができなかった。

「ナニーッ・・・？」

と支店長が唸るように呟いたあと、不気味な沈黙が続いた。

しばらくして、他の二人は席に戻り再び精査にとりかかったが、

「懐のものを出すまでこの部屋でよく考えろ」

と言われて修平だけが独り留め置かれた。

かなりの時間が経った頃、

「ありました！　見つかりました！　過払いした現金が封筒に入れたままお客さんの金庫に入っていたそうです。お客さんから今電話がありました！」

と、顧客担当で"カルタトリの名人"――(伝票をめくっただけで違算を発見する動物的嗅覚の持ち主をこう称した)――といわれるベテラン先輩が、大声を挙げた。店内全体に「ワーッ」という安堵と喜びの喚声がどよめいた。

支店長室に独り取り残されていた修平は、一挙に床にくずおれてしまった。安堵したというより、恥かしさと同時に、同僚に迷惑をかけたという罪悪感とがないまぜになって修平の胸を締め付けた。

しかし、支店長の人格無視の暴言だけは、修平の心に忘れられない傷跡を残してしまった。

このことがあってから、支店長は修平に対してことごとに疑惑と不快の表情を露わにするようになった。仕事

を覚える暇もなく、短時日のうちにつぎつぎと係をたらい回しされた。

当座預金係の頃である。

残高不足のまま小切手を乱発する客がいた。きまって締め上げの時間が過ぎてから不足分の現金が入金されるのだが、修平はたまりかねて

「当座預金残高不足のまま小切手を発行することは、小切手法で禁じられています。もし受取人が銀行に小切手を提示した時点で残高が不足する場合は、不渡り処分にしますよ」

と、四角四面の苦情を申し入れた。

お客は烈火の如き勢いで店頭に怒鳴り込んできた。修平が低姿勢で説明しても話にならない。客の声はすぐに支店長の耳に届いた。

「大口の定期預金を預かっているお客様に対してなんということを言うか！」

と、支店長かち大目玉をくったことはいうまでもない。

それでも修平は、

〈法律は法律だ。枉げるわけにはいかない〉

と、腹の中で抵抗した。

支店長席（外回り）になった時だ。

夕方、外回りが疲れた体で自転車を引きずるように銀行に帰ってくる。それを裏門で仁王立ちになって待ち構える支店長。携帯するカバンの中を開けさせて、定期預金申込書と集金した現金が入っていなければ、

「定期が取れるまで帰ってくるな！　オレは〝競輪選手〟を養っているのではない！」

と叱咤され、また暗い夜道に追いやられる外回り。

修平は

「定期預金だけが銀行取引ではありません」

と口答えして、またまた支店長の逆鱗に触れた。

こんな衝突が何度か続発した。現金過払い事件以来、常に懐にしのばせていた退職届がヨレヨレになったころ、遂に決定的な事態が暴発した。

——つづく

化粧のルーツを訪ねて（四）

第二話　額化粧の文化史

鈴木守

まえがき

ヒマラヤの山並みを背景に尼僧が鐘をついている。戦後間もないころに見た映画・黒水仙の一シーンである。初めて見たカラー映画であり、デボラ・カー扮する尼僧の美形もさることながら、薄紫色に染まった壮大な山々に魅せられてしまった。今でも、そのシーンが目に浮かんでくる。ストーリーの記憶は薄れたが、インド女性役のジーン・シモンズの額にビューティ・スポットが点たれていた。このスポットをビンディと呼ぶことは後から知ったが、これが初めて見たビンディである。

以前にみた美術全集に正倉院御物・鳥毛立女屏風（立女図）と中国西域出土の桃下の美人図が掲載されていた。二つの絵には桃樹の下に佇ずむ美女が描かれ、構図といい女性のイメージといい、同じ画家が描いたかのようによく似ていた。化粧の様子もそっくりで、額と口辺にポイント化粧が施されていた。このポイント化粧を花鈿と靨鈿と呼ぶことは解説文で知った。

インド女性の額化粧といえば、男性でも「あー、あれか」というだろうが、ビンディという名称を知る人は少ない。花鈿に至っては、そのもの自体も言葉も知らない人が多い。

手元の辞書を二、三調べてみた。漢和大辞典に「花鈿は女の髪につける装飾品」と説明され、化粧の花鈿は書かれていなかったから、花鈿は死語に近い言葉である。ビンディもエンサイクロペディアにさえ出ていないので、両者とも名称に関する限り知らない人が多いのも無理からぬことである。

かくいう本人も、ビンディの名を知らなかった。後述する松山氏の論文で額飾ティラカと記載されていたので、ティラカだと思っていたが、大阪大学の小塚氏がシンガポールで体験したビンディ皮膚炎を『クムクム皮膚炎』と題して発表した。氏に聞くと、病院のスタッフはクムクムと称しており、シンガポールでは市販しているとのことであった。それ以来、額のスポットがティラカかクムクムかで迷ったこともあった。

第1節　額化粧見聞記

1・インド人の額化粧

日本では、額にスポット化粧をした女性に出会うことはない。以前、ミスユニバーサル・コンテストの前夜祭に招待された。その際、ミス・インドと記念写真を撮る光栄に浴し、付き添いの女性大使館員に出会った。ミスの額になかったビンディが館員の額にあった。これが生のビンディを見た最初である。女史に尋ねると、「ビンディといい、クムクムは地方語である。ティラカは別物で、宗教的なものである」と教えてくれた。ここで初めてビンディの名を知った。

次いで、オーストラリア旅行の時、インド人の家族連れに出会った。よく見ると額の化粧は夫人と老母だけでなく、主人の額にもスポットが印されていた。もしかすると、これがティラカではないかと思った。

2・東南アジアのビンディ

台北とバリ島で開かれた学会に出席し、歓迎晩餐会が催された。両国とも、東南アジア独特のダンスが披露され、踊り子たちの額にビンディを見ることができた。

バリの踊子が施すビンディは、額の中央に黒く丸みを帯びた三角を描き、その中央に白い丸を塗り、下に赤線を引く。黒は三角の山、白丸は月、赤線は波であり、この紋様は踊りの基本動作を示す。立ったり座ったりする動作は山の登り下り、丸い月は月の周囲を回る動きで、赤い波は左右に動く動作を意味しているという。

バリ島のホテルに入ると、ビンディをつけたフロントガールが出迎えてくれた。彼女のビンディは、異国情緒演出のための額化粧のように受け取れた。

3・日韓の額化粧

以前、大阪玉造近くの教会前で結婚式の記念写真を写している一団を見た。花嫁はチョゴリを着て額と両頬に赤く大きな丸をつけていた。額の赤丸をコンジ、頬の方

をヨンジという。また、韓国には額と頬に赤丸を施した媼の面がある。これは仮面劇の主役・守護神の化身の面で、この赤丸もヨンジコンジと呼んでいる。

日本にも民俗行事の中に額化粧が残されている。

お七夜のころ、新生児の無事な成長を祈願して宮参りする。そのとき額に化粧を施す風習がある。所により呼称は異なるが"綾っこ"などという。この風習は北は岩手、南は鹿児島に至る各地で行われている。額化粧には鍋釜の煤で黒くつけるか、紅で赤く染めるか、いずれかの方法で印をつけるのが主流である。

紋様は地方ごとに異なり、点描したり星印や丸印をつけたり、十の字や一の字あるいは犬の字を書く。また、男女で印を変える地方もある。男児は大、女児は小の字、あるいは黒と赤で区別する。

豊穣や無病息災を祈願する神事や祭礼では、参加者は額に紅か墨で点を打ったり、星や丸を記したり、あるいは十字や八の字を書いたりする。沖縄の久高島では、イザイホーと呼ばれる神事を御嶽（斎場）で行う。この神事は女性が神女となるための儀式であり、彼女たちは額と頬に朱印を捺して巫女となる。また、島根県の美保関神社に伝わる青芝垣神事では、主催たちは顔を白く塗り、紅で額と両頬に丸または点状に彩る。

以上、現代社会における額化粧について述べたが、インドとシンガポールではビンディが市販されているので、庶民の日常的な化粧習慣であることが窺えた。東南アジアでは、踊り子たちが職業的な意味のビンディを施し、日韓の額化粧は民俗風習の中に残されていた。

第2節　花鈿と白毫

現代の日本でも、民俗行事の中に額のポイント化粧が残されているので、花鈿に関する資料を探したが、立女図以外に菅原道真の菅家文章に花鈿の別称・梅粧がみられるのみだった。しかし、道真は漢詩からの引用で平安時代の化粧を記したのではなかった。

1・立女図と花鈿

日本の化粧史を記した多くの書には、奈良時代の化粧として立女図の花鈿を引用しているが、花鈿や靨鈿などのポイント化粧は日本では流行らなかったという指摘もあるが、花鈿化粧の存在を前提に話を進める。

前出の美術全集の解説文に「彩色の代わりに鳥の羽根を貼ってあるので鳥毛の名が荷せられているが、現在、鳥の羽根は殆ど落剥し、下書きの素描線が露出している。その容姿は豊頬で唇が厚く、太り気味の肉体美人であり、額と口辺に白緑の点が打たれ、額の点を花鈿、翠鈿とい

い、口両辺の点を醫鈿という」と記されていた。

2・白　毫

立女図は聖武天皇の御物である。奈良の大仏も聖武帝の肝煎りで造営された。この大仏には額に白毫がある。花鈿は人間の額化粧であり、白毫は仏を象徴する仏像の額化粧ともいえるので、両者の関連を想像した。

大仏開眼以前の白毫を美術全集で調べると、法隆寺などの如来像と菩薩像に白毫があり、奈良安居院の釈迦如来銅像は六〇五年の作で白毫像として最も古かった。

白毫は仏の眉間にあって常に光明を発する白い毛といわれ、普通、仏像では円形の凹あるいは凸であるが、東大寺法華堂の観音像と金剛神像は、額に縦長の第三眼のような白毫をつけている。

白毫はわが家の近くでも見ることができる。鎌倉の大仏、長谷と大船の観音、路傍の地蔵にもついている。だが、弘法や日蓮など高僧の像でさえ白毫をつけていない。白毫は如来とか菩薩という仏教界の超エリートの像にしか認められないようにみえる。しかし、江ノ島海岸竜口寺本堂の天蓋と鎌倉英勝寺本堂の天井画に三日月形の白毫を施した天女が見られ、江ノ島の裸弁天脇にインドから贈られた弁財天の額にも白毫が施されている。

ところで、インド招来の弁財天に白毫があったが、わが国の弁天に白毫が施されてるという話は未だに聞いた覚えがない。白毫は如来と菩薩の専有物のように思っていたが、インド寄贈の弁天像や天女図にもあったので、弁天と天女の戸籍調査をしておく。

インド仏教における弁財天はヒンズーのサラスヴァティ神であり、バラモン教でも、知恵、学問、歌舞音曲の女神とされ、偶像の額には印章が施されている。

要するに弁天は、バラモン神として誕生しヒンズー神となり、仏教では弁財天と改名、日本に渡来すると、弁天様と愛称されるとともに神道の宇賀神に変身した多宗教的な神女だった。彼女は祖国インドでは額印をつけていたが、東アジアへ渡る途中で額印を置き忘れてしまったようである。

インドの天女・アプサラスは天界の踊り子で神々を愉しませる役柄だった。天女は人間界に降り人間と恋をしたりするので、羽衣伝説や竹取物語を思い出させる。

3・韓国の花鈿と白毫

韓国にも羽衣伝説がある。天女もシルクロード上空を東アジアまで、白鳥が翔ぶが如くに舞い来ったのだろう。天女説話は日朝文化の交流を示す一つの証拠である。そのうえ韓国には、花嫁や媼の面にヨンジコンジがあったので、花鈿も半島から波及したのではと推測した。

韓国においても、7世紀ごろの百済の都扶余定林寺跡で出土した陶俑の額に赤い点が施されていた。この陶俑は立女図より古いので、立女図の花鈿との関連を期待された。だが、立女図には花鈿と醫鈿があり、陶俑には花鈿しかなかった。

韓国旅行のとき慶州仏国寺近くの石窟庵に行った。本尊の如来坐像に白毫がある。美術全集に収載されていた慶州南山の如来坐像と磨崖仏にも白毫があった。いずれも八世紀中頃の作品である。それ以前の白毫資料としては、慶尚南道宜寧で出土した金剛如来像があった。この像は五三九年作とされている。

第3節　絹の道の額化粧

天平期の奈良は、絹の道、いわゆるシルクロードの終着駅とよくいわれる。このことは古代日朝文化の源流が中国にあることを示している。絹の道は仏教伝播の道でもあり、化粧文化についても同様である。事実、終着駅・奈良には立女図の花鈿と諸仏の白毫があり、朝鮮にも額の印章が残されていることは前述の通りである。また、菅家文章に漢詩の梅粧が詠まれており、中国の花鈿化粧を窺わせた。したがって、額化粧についても中国からの伝播を考える必要があろう。

1・中国の花鈿化粧

中国化粧史の書はなかなか見つからなかったが、中国歴代婦女妝飾（婦女装飾）を入手できた。そのお陰で本節も形を成すようになった。

婦女装飾には、明代以降の花鈿は記述されていなかった。元の時代に入ると、山西省の寺院壁画に描かれた女性に花鈿がみられた。宋代の証拠としては、金箔で作られた花鈿が蓮華座に坐った仏像に彫られており、徽宗伝の搗練図には、花鈿を施した女性たちが描かれていた。五代十国時代には、甘粛省安西楡林窟壁画にウイグル族女性の額に花鈿があった。

唐代になると、婦女装飾には張萱の搗練図をはじめ、壁画、帛画、俑などにみられる化鈿32点が掲載され、うち21点が西域に由来した。この書には唐代の花鈿16種の紋様が図示され、「唐代の女性にとって花鈿は一般的な化粧だった。花鈿には種々な紋様があり、小さな点を施した花鈿が最も単純で、花弁状、牛角状、扇形などの抽象図案のものがあり、細工の細かさや大小も様々であり、翠鈿は翠鳥の羽毛製であった。花鈿の色材は、金色は金箔、黒色は黒光紙、白色は魚の鰾骨などであり、唐代の花鈿は貼付式であった」と解説されていた。

唐以前については、花鈿発祥の逸話「南朝宋の武帝の娘・寿陽公主の額に舞い落ちた梅花が公主の額を染め、

洗っても落ちなかった。その様子を宮女たちが真似て、花鈿風習となった」が記載されていた。また、湖南省長沙の東晋墓から金箔の花鈿が出土している。

東晋より昔へ遡ると、婦女装飾には花鈿の記述はみられなかったので、美術全集を資料として花鈿の足跡を辿ることにする。花鈿が認められたのは五胡十六国から唐の間の壁画、塑像、絹画など8点の美術品だった。時代は前後するが、興味がもたれる資料について触れる。

花鈿は天山北路のアスターナやトルファン周辺から出土した唐代の壁画、絹画、俑の女性たちの額にみられ、前出の桃下美人図はその一つである。この絵の解説に、額や頬の赤い花文は、宮女の月事あって進御にたえぬものの標注から起こったという説もあると花鈿醫鈿の発祥説が記されている。

西域北道クチャ近く、キジルでトハラの貴人図と釈迦説法図の壁画が発見された。貴人図に描かれた男女貴人の眉間には細く縦長の毛髪のような紋様が施されていたが、貴人と対話している僧侶の額にはなかった。また、釈迦説法図には、光背を負った釈迦と菩薩に白毫が印されているほか、十数名の聴衆の額にも印章があった。

アスターナ古墓出土の西涼・宴楽図に描かれた舞姫には花鈿と醫鈿が施されていた。舞姫以外の貴賓や侍女、楽士には見られなかった。この花鈿は前出東晋の金箔花鈿とともに4世紀のもので、手元の資料では最古の花鈿であった。

2・仏の道と白毫

花鈿について絹の道を辿ってきた。絹の道は仏の道でもあるので、白毫について唐以前の証拠を探すことにする。また、仏教の中国伝播も重要な資料であろうから、これについても併記する。

西域を行くと、ローラン、ミーラン、ホータン、クチャ、トルファンなどの周辺には、隋や唐の時代の仏像が数多く発見されている。これらの仏像のうち、西域北道クチャ近くのショルチュック出土の仏坐像の白毫は赤く彩った火焔を有する宝珠を象り装飾的である。クチャ・クムトラ寺院の菩薩頭彫像の白毫は、赤く彩られ縦長の筋様で、一見、額に血が流れたような印象を受けた。

南北朝後期、洛陽の竜門石窟をはじめ、山西省天竜山石窟や雲岡石窟などに幾多の仏像が祠られている。竜門蓮華洞の羅漢像の額には丸い印章が刻まれていた。調べた範囲で最も古い白毫像は4世紀ごろの菩薩立像だった。

中国仏教の歴史をみると、仏教の東伝は後漢の明帝のとき始まり、仏像の制作が興ったとされているので、中国では3世紀以降に造像されるようになり、白毫の歴史もこの時代まで遡るものと思われる。

中原の地に南北朝時代の仏跡があるにも係わらず、仏の道筋である西域には、南北朝以前の仏像が見当たらなかった。タクラマカン砂漠の砂の下に眠っているのだろうか。それとも、異教徒の手によって仏像が破壊されてしまったのだろうか。事実、カシュガル近辺では、仏像がイスラム教徒によって破壊された歴史がある。

アフガニスタンには、7世紀初期ごろの菩薩像と4世紀の仏立像の額に白毫があった。ここにもイスラム教徒の暴挙の跡がある。バーミヤンの巨大磨崖仏がイスラム原理主義タリバーンによって破壊されたことは記憶に新しい。美術全集の解説に、イスラム教徒により磨崖仏の顔は口と顎を残して削りとられたとあるから、今となっては白毫があったかどうか知る由もない。

インダス川上流のパンジャブ地方に入ると、参考資料の中に1世紀から6世紀ごろまでのガンダーラ像が百点以上掲載されていた。数多くのガンダーラ像の中から特徴的な白毫を拾っておく。

白毫は仏陀像と菩薩像にしかなかったが、仏陀や菩薩像でも白毫がないものもあった。中に、額に赤い円が施された3～4世紀ごろの仏像があり、白毫はストゥコ仏では突起ではなく、赤い円で示されることが多いようである。また、赤い円の周囲に赤い連珠で飾られた極めて装飾的な白毫の菩薩頭部像もみられた。最も古い白毫像は1～2世紀ごろの仏坐像であった。

第4節　海の道の額化粧

南アジアと東アジアの交易ルート・海の道も文化交流のルートでもあった。この道筋における現代の額化粧については第1節で述べた。また、これまでに訪問したバリ、タイ、サイゴン、カンボジアで神仏の額の印章はアユタヤの涅槃仏しか気付かなかったので、海の道の額化粧を美術全集などの文献資料で辿ることにする。

1・東南アジアの額化粧

インドネシアでは、ジャワのボロブドール寺院などの仏陀像や菩薩像に白毫が認められ、ジャワ島中部のシヴァ堂にあるレリーフの舞姫の額に突起様のものがつけられていた。これらは大乗仏教を信奉した8～9世紀ごろのシャイレンドラ時代の作品である。

インドシナ半島では、前出の涅槃仏のほかに、美術全集には、チャイヤー出土の観音菩薩像とロッブプリ出土の仏坐像に白毫が収められており、ベトナム中部のダナン近くで出土したリンガ像台座にあるレリーフの舞女の額に印章があった。

アンコール・ワットなどの遺跡では、仏像、ヒンズー

神像、天女像を数多く見たが、額の印章を確認することはできなかった。美術全集には、クメールの美術品で、額に印章が認められたのは、ヴィシュヌ神頭部ならびに青銅製の踊る天女像だった。以上のインドシナ半島における証拠資料は、いずれも9～13世紀の作品である。

2・インドの額化粧

現代のインド社会では、婦人層だけでなく男性でも額に印章を施す例があることは先に述べた。17～18世紀のラージュプト派の絵画にも、女性やクリシュナ神の額には印章が描かれていた。

前節で述べたパンジャブ以外にも、5～11世紀の仏像に額印があった。ネパールの観音坐像には、横長眼状の白毫が印され、摩利支天像も白毫を刻んでいた。アジャンタの壁画にも仏陀の額に白毫が描かれ、ジャンム出土の人物頭部像は、釈迦と思われる頭部にだけ白毫がつけられていた。5世紀末のセイロン・シギリアの壁画には、天女の額に糸状の印章が認められ、解説に白毫と記してあった。

ヒンズー神像の額にも印章があった。7～8世紀のエレファンタ石窟寺院のシヴァおよびエローラ遺跡のシヴァとパールバティである。二・三の書を参照すると、ヒンズー神で額印のあった神々を挙げる。シヴァ、パールヴァティ、インドラ、ヴァルナ、クベーラ、サラスヴァティ、ラクシュミーなどであり、神々の額印の形は多様であった。シヴァは三本の平行線と第三眼、クリシュナは試験管に似たU字形、サラスバティは点状だった。

なお、グプタ朝のころ、結婚式のとき花嫁の母親は雄黄と鶏冠石で作った黄色のペーストで娘の額に特別な印をつけたことが知られている。

3・インドの歴史と額化粧の概要

これまでに、海の道における額化粧の形跡は5世紀ごろまで追うことができた。一方、絹の道を辿ると、2～3世紀ごろの白毫仏に行き着いた。したがって、紀元後のインドの歴史的背景と額化粧の要点を括めておく。

紀元後、ガンダーラ美術が盛行し、白毫像が作られ始めたのは、仏教を支援した1～3世紀に栄えたクシャン朝の時代だった。4～6世紀はヒンズー教を信奉したグプタ朝の時代となり、この時代5世紀には、アジャンタの窟院やシギリアの壁画に白毫がみられ、花嫁は額に特別な印をつけた。

6世紀後半から11世紀の間は分裂の時代で、仏教に変わりヒンズー教が盛んになった。この間、7～8世紀のエレファンタ石窟院やエローラ遺跡のヒンズー神像に額印が付され、10～11世紀ごろには白毫像が散見できた。

8世紀ごろからイスラム教徒の侵入が始まり、16～19世紀はムガール帝国の時代であり、タージマハル廟にみられるように、この国はイスラム教を信奉していたが、額印のある人物を描いたラージュプト派の絵画が残されていた。ムガール帝国滅亡後から一九五〇年に独立するまでは植民地の時代であり、この間の化粧史を記した書物はみたことがないが、現在でもビンディはインド化粧の特徴となっている。

第5節　古代の額化粧と宗教

古代インドの額化粧については、松山俊太郎がリグ・ベーダなど数多くの古典を引用して論じているので、彼の論文（松山論文）を中心に古代インドの額化粧と宗教との関連について括める。

これまで額の印章を花鈿とビンディの名で述べてきたが、松山論文では額飾と額標に分けて記載しているので、この用語を用いる。額飾は女性が装飾的に施す額印で花鈿とビンディがある。額標はヒンズー教徒の宗派標識を指す。前述のインド人男性の額の紋章は額標である。

1・額標の発祥

額標の前身はヒンズー神の第三眼である。第三眼については後述するとして、ヒンズー教信者は、神格の象徴である第三眼にあやかるため、神の標識を模倣して額に印章を施し始めた。ヒンズー教の神々はそれぞれ神格や特質が異なるので、信者が施す額標は宗派ごとに分かれ、額標が宗派の標識として認識されるようになった。宗派ごとの額標の形は前節で述べた神々の紋様と同じである。

額標成立の経緯だが、古代インドの男性は化粧としての額飾を施さなかったが、紀元前後のころシヴァ派信者が全身に灰を塗ることを始めた。彼等はシヴァの第三眼で焼かれた灰が清浄かつ神聖な存在としていたので、額に灰を塗ることがシヴァの第三眼にあやかることになると信じ、最初の額標は塗灰によって潜在的な第三眼、すなわち浄智の眼が活動し始めるという理由で行われたと考えられる。

紀元前後二〇〇年ごろに、彼等はイメージ上の第三眼に変えて、シヴァの神格を具象化した紋様を額に施すようになった。次いで、ヴィシュヌ、パールバティ、サラスバティ信者なども額標をつけ始めた。先述したように、後世に造像された神々には信徒がつけていた紋様を施した。また、額標の当初の目的は神の加護に預かるための除災だったが、願望に対しても効力があると信じられるようになった。

先にティラカとビンディの名称について触れた。額標ティラカの名は紀元三五〇年ごろの古典にみられ、ティラカ・ビンドゥの言葉も登場する。前出のインド大使館員が「ティラカはビンディとは別」といっていたので、現在では、宗派標識の額標をティラカと呼び、ビンドゥが額飾ビンディになったのだろう。

2・額飾の発祥

額飾の発祥について、リグ・ベーダに「夫に危害を加える女性の邪眼」が記され、男性の浄智の眼に対応して女性は邪眼をもつとされた。額飾は邪眼を封じる呪いとして施されたと推測されている。したがって、最初の額飾は装飾目的ではなく、呪いの印章を結婚直前に施すようになった。未婚女性が額飾を施さないのは、邪眼によって暴漢や猛獣から身を守る意味があった。先述のグプタ朝期の花嫁が施した額の特別な印章は、邪眼封殺の護符ということになる。一説によると、「黒子（ほくろ）は瑞相とされているので、自己の瑞相表現とともに邪眼封じという二つの機能を重ねて黒子を額飾に採用した」という。

額飾発祥の時代は、額飾ティラカの名がジヤータカ・マーラに記されているので、額飾は紀元一〇〇年ごろから始まったと思われる。

古典にみられる額飾用の黒色顔料は墨と灰、橙黄色の顔料は雌黄（しおう）、雄黄（ゆうおう）、鶏冠石などである。現代風の赤い額飾は13世紀ごろに始まった。赤い顔料には辰砂が用いられ、後代には、エンジや赤い土で染めたり、バンドゥジーバの赤い花で飾ることもあった。

3・神仏像とその額印

ここまでの叙述では、ヒト額には花鈿、額標および額飾が施され、それらは白毫ならびにヒンズー教の第三眼と邪眼に起因していたので、神仏像の額印について、紀元前の資料を中心に検討し、ヒト額印の起源に関する傍証としたい。

紀元前は無仏像の時代であった。仏教における造像はガンダーラ仏やマトゥラ仏に至ってからである。では、ベーダの宗教では神像をどのうな姿で造っていただろうか。その点について美術全集で確認することにした。

美術全集には紀元前の仏像の掲載はなかったが、神像は幾つか認められた。それらの神々を挙げると、インドラ、シヴァ、ラクシュミー、ヤクシーニおよびヤクシャ神の姿が人間の形で現わされていた。ヤクシャとヤクシーニは夫婦神で土俗宗教神であり、他はバラモン神である。これらの神像で、額印を認めた神像は前一五〇年ごろのラクシュミーだけだった。前3～2世紀ごろのヤクシーニは額印の代わりにアクセサリーを着けていた。このアクセサリーが額飾と関連するか否かは後述する。

古代インドの造像の歴史を括めると、前3～前2世紀ごろに土俗宗教の神像が擬人化した姿で現われ、前2世紀ごろにはバラモン神の姿が彫像として造られた。また、紀元前の仏像はなく、最も古い仏像は紀元1世紀だった。このような造像の歴史をみると、ガンダーラ美術の勃興以前にヘレニズム文化が影響して造像の機運を導いたように思われた。

ヤクシーニの額のアクセサリーについて考察する。前述のバンドゥジーバの花のアクセサリーは邪眼封殺の護符だったので、額のアクセサリーもまた額飾の前身ではないかと考えた。

美術全集ではヤクシーニのほかに、ハーリティー像、アジャンタ壁画の天女、ラジュープト絵画に描かれた女性たちが額に飾りをつけていた。ラジュープト絵画は、ヴィシュヌ信仰に結びついた題材を描くことが多く、額のアクセサリーにも宗教的背景を窺うことができたので、ヤクシーニ像装着のアクセサリーについて考察する。

ヤクシーニの額のアクセサリーに関する文献は見つからなかったが、ハーリティー神は、もとはヤクシーニとされ、日本では仏教神で鬼子母神に当たる。鬼子母神の子供さらいの話はよく知られている。この前歴は邪眼のなせる技としか思えないので、仏に帰依した後は邪眼封じの護符として額にアクセサリーを装着するようになったのではと考えた。したがって、ヤクシーニのアクセサリーも邪眼封殺の護符だった可能性が浮かんでくる。そして、それが後世の赤い花の額飾になったのではなかろうか。

4・神仏の額印とその発祥

前項で述べた神仏像の姿や額印は造形物であり、造像に当っては、それらのイメージがなければ造像できない。紀元前のベーダ神像は人間の形で彫られていたので、造像が始まる以前から神仏は人間の姿にイメージされていたことになる。では、額印はどのように想像されていたのだろうか。

まず、花鈿の前身・白毫についてである。

白毫は白い柔らかな巻毛とされ、仏陀のほかにも、転輪聖王、優れたバラモンにも具っているとされていた。白毫誕生には二・三の説があるが、それを括めると、「白毫の前身はベーダ神の第三眼で、人間がつけると兇々（まがまが）し過ぎると認識された。一方、クシャン族などでは、

額の痣や黒子は吉祥とみなされ、王位の象徴としたので、仏像を国王に匹敵する存在として仏像を創始したときに、眉間の痣、黒子を考えた。だが、黒子や痣は人間に内奥する第三眼を遮蔽してしまうので、第三眼所在の目印として邪魔にならない巻毛を代用した」ということである。したがって、白毫は第三眼から分化したものであり、仏教草創期には、すでに白毫の概念は発生しており、クシャン朝の1～2世紀ごろに至って、白毫像が造られるようになった。

額飾は既述したように、邪眼封殺を目的に施されたとされている。そもそも邪眼とは何であろうか。

古代インド人は、次ぎに述べる額標の原点となった第三眼と対応させて邪眼の存在を信じ、邪眼は女性の身体に内在し、夫など身近なものに危害を与える不気味な力をもち、その中枢は女性の内奥に潜在すると信じていた。この邪眼概念の成立は前20世紀に遡る可能性がある。

次ぎに、額標の原形であり、白毫発祥の前提となった第三眼について述べる。

額標はヒンズー教宗派の標識とされ、シヴァの第三眼で浄化された灰を塗ることから始まったと想定される。松山論文によると、男性に内在する知恵の眼は、先ずシヴァの第三眼として直載的に形象化され、次いで、女性が額飾を施し始めると、それに刺激されて知恵の眼を男性における第三眼の代用ないしは象徴として、額標を出現させたというのである。

だとすると、内在する知恵の眼が具象的なシヴァの第三眼となったのであるから、抽象的、概念的な第三眼は、それ以前にイメージされていなければならない。

また、知恵の眼と邪眼の中枢は対応しているといわれているので、邪眼と第三眼も相対したものとみられ、ニュアンスとして、正邪の眼を想像していたであろう。

第三眼とは何か。シヴァ派信者はシヴァの第三眼を直接象ることは怖れ多いとして、三本の横線を額標としたが、この印はシヴァの神格を象徴し、過去現在未来の三世、日月火の三聖火、AUMの三音、天空地の三界を意味するとした。かように、第三眼の前提には、事象を三元化する思想が横たわっているように感じられた。

第三眼の概念発祥の時代についてである。

額標の原形が発祥したのは、額飾の前身発生よりも早い時代とされている。現に第三眼もリグベーダにあり、さらに古く、非アーリア的なインド社会には優れた存在は、すべてを見通す第三の眼を備え、普通の人間でも潜在的にそれをもつという俗信がゆきわたっていたという。この俗信はインダス文明期にまで遡る公算が大であるといわれているので、額標の淵源となった三眼思想の発祥

は前二五〇〇年から前二〇〇〇年の間と設定される。

額化粧誕生までを結論的に括めると、インダス文明時に発祥した三眼の考えが非アーリア人に伝承され、それがベーダ社会に取り込まれて、シヴァの第三眼を生じるとともに、男性に内奥する知恵の眼の発想を導いた。次いで、女性のもつ邪眼の概念が生じて邪眼封殺の額飾に至った。それに引き続き、第三眼にあやかるために額標が発祥したというプロセスが想定される。

第6節　三元思想と三眼概念の発祥

額化粧の歴史を遡ると、白毫や邪眼、第三眼が原形として存在し、三眼の概念形成はインダス文明にまで遡行する可能性があった。しかし、三眼の概念が突然に湧き出たとは考え難く、シヴァ派の額印から察すると、三眼概念の淵源として、三元思想があったのではないかと考えるに至った。

三元思想をトリオを組んで一組とする考え方とすると、三元化は現代社会にも数多くみられる。例えば、真善美や知情意などである。かように事物を三元化する思想の根源には、森羅万象を三つの要素で構成させることが多いので、人類も自然界の一構成員として、事物を三元化しようとする思考基盤が先天的に遺伝子の中に備わっているのではないかとさえ思えてくる。

1・三元思想とその発祥

前節において、ヒンズー教におけるトリオを例示したが、仏教の三法（仏・法・僧）やキリスト教の三位一体（神・キリスト・聖書）とか、3年ごとに行う死者の年忌を仏教では三回忌、キリスト教ではトリアニュアルと称しているので、宗教が異なっていてもトリオを組む習慣は宗教界に広くみられる。仏教界では、三界、三蔵、三過など三元化した用語は数多くある。したがって、トリオを組む発想を三元思想と呼ぶことにする。

宗教に限らず、古くから三元化しているものに、宇宙空間の天空地、時間空間の前世現世後世があり、光源を日月星とし、シュメールでは、日月と金星を主神として信仰していた。西洋の三元の例を挙げると、ギリシャ三悲劇をトリロジーといい、古典劇には時、場所、筋書きの三一致の法則があるという。

現代社会では、三権分立があり、組織運営には三役を設けることが多い。スポーツの世界では、三賞や三冠王がある。オリンピックの金銀銅は国際的な価値をもった三賞である。遊びでも花札の赤短青短は3組で役をつくり、ジャンケンは紙鉄石のトリオを組んでいる。

自然現象や宇宙存在にも、トリオを組むものが多々あ

る。三次元の立体はｘｙｚの3軸、時間も過去現在未来に三元化される。色彩は赤青黄が三原色、無彩色系は白灰黒で表現される。物質の状態は固液気の三相に分けられ、原子の構成も陽子・電子・中性子の3素粒子が中心で、力学の領域では、三力の釣り合いが法則となっている。かように、自然現象の基盤が3要素によって構成されることが多いので、自然界の事象が三元思想発祥の根底に横たわっていたと考えたのである。

三元思想が萌芽する根底を示す証拠は、神話伝説に見られるだろう。重要な証拠として、各地の民族神話が宇宙創成を語っていることに注目したい。その多くは神がカオスからコスモスへ、言い換えれば安定した世を造ったとしている。恐らく、古い時代の先祖たちは、安定した生活を希求し神に祈願したのが神話として伝承されたのだろう。

先に取り上げた自然現象のうち、太古の祖先でも容易に感知できる事象は三力の釣り合いであろう。これは安定化の代表的な現象である。したがって、三力の均衡を中心に述べる。

三力の均衡は蛇・蛙・蛞蝓の三竦みの状態が想定され、強弱だけの二元関係だけでは弱者は滅びる。三竦みの関係があるからこそ、安定的に維持できるのが生物の世界である。かって、孔明は三国分立の計を劉備玄徳に提言し、四川の地に安定基盤を求めた。孔明は三力の釣り合いを政治的な三力均衡に応用したのである。

カメラの三脚やキャンバスのように、重い物を安定した状態で乗せるのに三本足の道具を使う。物理的に安定を保つには三叉が必要である。では、三叉の道具をいつごろから使い始めただろうか。煮炊きに使った三叉の鼎は前17～前18世紀の中国青銅器文化の時からみられ、前二〇〇〇年ごろの灰陶の鬲も三叉である。

上古の中国より古い三脚利用の証拠は見ていないが、前期旧石器時代、約四〇万年前のフランスのテラ・アマータや約一六〇万年前のエチオピアのメルカ・クンツレ遺跡で住居跡が出土している。三叉は住居より単純な構造であるから、住居の構築より古い時代から、直立させる目的に三叉を利用したはずである。したがって、三叉による安定状態を経験したのは、ホモ・エレクタスの時代と想定され、それ以降の祖先たちは、三叉使用の長い長い体験の中からカオスの状態をコスモスの世界に安定させる三元の思想を醸成したに違いない。

2・三眼思想の発祥

次に、三元思想から三眼の概念が分化するプロセスを考えてみたい。三眼思想は宗教色の強い考えである。人類がいつごろから、宗教的な心をもち始めたのだろうか。

イラクのシャニダール洞窟に約六万年前のネアンデルタール人の埋葬跡と供花の跡がある。死者を悼む心は宗教心の萌芽であり、埋葬の例は約九万年前に遡る。また、人類は出現すると直ちに宗教的行動や神聖な領域を意識し始めたという意見さえあるので、人類は一〇万年前以前に宗教的な意識をもち始めていたのである。ネアンデルタール人や古代型ホモ・サピエンスの時代である。

呪術は宗教の前身である。前出テラ・アマータ原人は火を焚き、今日一日の無事と明日の豊猟を祈願したといわれている。彼らには、まだ神の概念はなかっただろうが、魔物が住む闇の世界とか、闇を照らす火に魔除けの霊験を感じていたに違いない。

第一話で主張したように、文化は遺伝するとの考えをもっているので、四〇万年昔には呪術的な意識があり、かつ、一〇万年前以前の祖先には宗教意識の萌芽があったと思われる。そして、その遺伝子がシュメール人に三主神を信仰させたと考えたい。シュメール以前の三元思想の資料がないので、シュメール文化の遺伝という立場で話を進める。

まず、インダス文明の担い手、ドラビダ族の祖はシュメール人だったとする説があるので、シュメールの三元思想が伝播してインダスの三眼概念に分化し、ベーダ神話以降の第三眼発祥の起源になった可能性を考えたのである。一方、キリスト教の三位一体も三元思想を踏襲していると思う。それについては後に考察する。

インドにおける最初の額標は、シヴァ神の第三眼で焼いた聖なる灰の塗布であった。キリスト教でも聖灰を塗る儀式がある。このように、ヒンズー教とキリスト教の間には聖灰の思想という類似点があった。このような類似が生じるのは、共通の文化的遺伝子が存在したのではなかろうか。そして、その遺伝子がシュメール文化だったのではないかと推定するのである。

三元や聖灰の思想の起源がシュメール文化にあるとすると、インダス文明の担い手や旧約聖書の民・ヘブライ人がシュメール人との間に交流の歴史をもっていなければ、先の主張は成立しない。

シュメール人が渡来してインダス文明を担ったといわれているから、シュメール人とインダス文明人の関係は成立し、シュメール文化が古代インドの文化に影響しただろうことは容易に予測できる。

一方、旧約聖書の創世記には、「ノアの子孫が東に移り、シナルの地に平野を得て…」との記述があり、シナルはシュメールである。今一つ、旧約聖書中のアブラハムはシュメール都市ウルに住んでいたという。ユーフラテス川はシュメールの時代にはウルでペルシャ湾に注ぎ、ウルは港湾都市として栄え、エジプトやインダス流域と交易していた。したがって、シュメールがヘブライ

人の故地の一つだったことを旧約聖書は示している。

次に、灰がなぜ聖性をもつのかを考えてみよう。

石鹸の発見はシュメール人とされている。その説では、温かな灰の上で羊毛を脱脂・乾燥させ、灰の上に落ちた毛の脂肪からできた石鹸を見出だしたとある。

ところで、聖なる灰は概念的には聖なる火によって作られたので、聖性が得られると考えたのだろうが、石鹸を含んだ灰は洗浄力によって身体を清浄にするので、石鹸入りの灰は実質的に浄化の灰であり、実質性を伴ったからこそ、シュメール人は聖なる灰の概念を創作し得たのだろう。

かくして、シュメール人の三元思想と聖灰の概念が、インダス文明人とヘブライ人を介して、それぞれ、ヒンズー教徒とキリスト教徒に敷衍し、シヴァ派の聖灰による第三眼となり、キリスト教における三位一体と聖灰の儀式へと分化していったものと思われる。

第7節　総括と考察 —額化粧の歴史—

前節までは額のポイント化粧の歴史を遡行し、その淵源を三元思想と想定したが、この歴史を時代の順に従って括め、必要に応じて考察を補足することにしたい。

1・額化粧発祥の前駆段階

三元思想が発生する根底には、三叉による安定が横たわっていると考えた。すなわち、太古の先祖が生活の安定を希求していたため、三力の釣り合いをもたらす三叉を安定の象徴のように感じ始めたのだろう。恐らく、ホモ・エレクタスのころ、すでに三叉による安定を体験したはずである。

それとは別に除災招福を祈願する呪術は、ほぼ四〇万年前には発祥しており、遅くても一〇万年前ごろの人類は、神聖な領域を感じ始めていたと想定されているが、前三五〇〇年ごろのシュメールの時代に至って初めて、三元思想と宗教を結びつけた、日月金星を三主神としたシュメール信仰の資料が認められるようになった。

こうした光明を三元化するシュメールの思想は、古代インダス文明人やヘブライ神話に受け継がれ、やがてはバラモン教の第三眼とキリスト教の三位一体の概念に敷衍したものと思われる。また、シュメール人発見の石鹸を含んだ灰がシヴァ信者やキリスト教徒の聖灰の起源となったはずである。

インダス文明は前二千年ごろにアーリア人の侵入により滅びたが、インダスの三眼に関する概念がアーリア人に伝承され、リグ・ベーダの時代に、神々の額に第三眼

が宿り、人間にも潜在的に第三眼が存在するという見方が成立した。また、古代インド人は普通の男性でも内奥に知恵の眼をもつと考えていた。

一方、女性は身近な人に危害を及ぼす邪眼をもつとリグ・ベーダに記されている。恐らく、古代インド人たちは、潜在的第三眼を男性が宿せば知恵の眼となるが、女性の場合は邪眼に変わると考えたように想像される。

第三眼と邪眼とは別に、前5世紀ごろの仏典に、第三眼から分化した白毫が記されている。

第三眼や邪眼、白毫は、抽象的概念だったが、やがて、神仏像に具象化された額の印章が現われるようになった。

手元の資料で造像と額印に関する歴史をみると、ベーダ時代の宗教は神像をもたず、紀元前は無仏像の時代だったが、前3～前2世紀には土俗信仰の神像が現われ始め、ヤクシーニ神像の額に邪眼封殺の護符と思われるアクセサリーが装着された。次いで、バラモン神は前2世紀ごろから造像され、やがて、ラクシュミー像に第三眼が施された。また、仏像は1世紀にガンダーラ仏として造られるようになり、白毫像は2～3世紀に至って初めて出現したのである。

2・額標の発祥とその歴史

額標を始めた契機は、額に灰を塗ることにより潜在的な第三眼が活動し始めるという意味で行われたとされている。次いで、二〇〇年ごろにシヴァの神格を具象化したトリ・プンドラを額に施して額標が誕生し、これが他宗派にも伝播し、夫々が信じる神の特質を現わす徴章を額標とするようになった。この紋様が宗派ごとに異なったので、宗派標識という認識が生じた。

その後、7～8世紀ごろのエレファンタ寺院など、インドから東南アジアにかけてヒンズー神像が数多く造られ、神像第三眼の証拠は豊富にみられたが、イスラム教の進出によりヒンズー神の造像は下火になり、この当時から現代に至る間の宗派表示の額印を記した資料には、現在のところ接していない。

現代社会では、宗派標識の額標を知る人は少ない。しかし、偶然の機会だったが、オーストラリアで額標を施したインド人男性を見掛ける幸運に恵まれた。お陰で男性ヒンズー教徒が現在でも宗派標識の額標を施す風習を維持していることを知ることができた。

3・額飾の発祥とその歴史

当初の額飾は、ビンディのように装飾が目的ではなく、女性の邪眼封殺のために行われ、額飾発祥の時代については、紀元一〇〇年ごろの古典に額飾ティラカが記され

ているので、その時期は1世紀ごろであろう。

初期の額飾は人工的な黒子を描くため黒く塗り潰したので、赤く彩った額飾は古典には皆無だったが、13世紀の絵画にはしばしば見られ、それ以前、グプタ朝時代の花嫁は黄色の額印を施したので、このような彩色の変遷は額飾の目的が邪眼封殺から美の演出へ移行する過程を示している。時代が下がって、14世紀ごろからイスラム化が進んだが、それでも17~18世紀ごろには、ラージュプト派の絵に額飾を施した婦人が描かれ、装飾的な額飾を持続していたことが知れる。

ビンディの呼称は古典記載のビンドゥに由来するのだろう。これはビンドゥに英語の接尾辞yをつけた言葉となるので、英国が統治した一八五八年以降に額飾をビンディと呼び、これが常用語になったと推察される。

現代社会では、インドの既婚女性はビンディを日常的な化粧としており、ほかに、シンガポールではクムクムといい、日常的に施しているようである。

4・花鈿の発祥とその歴史

白毫像は1~2世紀ごろからガンダーラで造られ、3~4世紀には装飾的な白毫が現られた。5世紀には天女にも白毫が点けられた。他方、中国では4世紀に白毫像、7~8世紀ごろには装飾的な白毫が現われた。このような装飾的な白毫へ向けての変化は、仏界の標章が生身の人間界へ降下する前提になったように思われる。

花鈿発祥については、南朝・宋代の梅花説ならびに、后妃の月事に印した標注が花鈿の起源とする説があったが、紀元前後の漢代に、后妃が月経の印として靨鈿を施したという文献があるので、先の月事説は採用し難い。紀元前後はガンダーラに白毫像が現われ始めた時代である。

また、花鈿の証拠として、4世紀に西涼宴楽図と金箔の花鈿が発見されているので、5世紀の梅花説は発祥の時代としては遅すぎるので、花鈿の一つ梅粧発祥説とみるべきである。

花鈿発祥早期には宴楽図や金箔の花鈿、梅花説があった。その後、5世紀以降唐代に花鈿化粧の最盛期を迎え、搗練図を始め、壁画、帛画、俑などに花鈿が数多く認められた。7世紀ごろの朝鮮には、眉間に赤い点を施した陶俑があり、日本でも8世紀、立女図の美人が花鈿を施していた。しかし、立女図は舶載の絵を模写したという書もあり、立女図以外の資料がみられないので、天平の女性が花鈿化粧を施していたかどうか甚だ疑わしい。

10世紀から14世紀にかけて、五代十国時代、ウイグル系の女性に花鈿が施され、宋代には金箔の花鈿があり、元代の壁画に花鈿女性が描かれていた。しかし、14世紀後半以降、明の時代から現代に至る間、中国に限らず東

アジアには、花鈿の証拠はみられず、花鈿は過去の化粧になってしまった。

5・踊り子のビンディほか

ここまでは、額標、ビンディと花鈿について括めたが、これらとはニュアンスが異なる額印について述べる。

① 職能表示の踊り子のビンディ

バリ島の踊り子は、踊りの基本動作を額の紋章に描いているので、彼女たちの額印は美を演出するビンディとは性格を異にし、この化粧のルーツは、天女の白毫であろうと思われる。

5世紀末シギリアの天女散華図の天女には白毫が施されている。9~10世紀クメール美術品の一つに白毫をつけて踊る天女像があり、日本でも竜口寺と兵勝寺には、白毫をつけた天女が描いた絵がある。

天女は天界の舞姫とされている。9世紀ジャワ島と10世紀ベトナムのレリーフにある舞女像にも額印が施してあった。現代でもバリ島や台湾の踊り子たちもビンディを施している。彼女たちの額の印章は美の演出を兼ねた職業表示の化粧に分類されよう。

天界の舞姫は、いつごろから白毫を具えるようになっただろうか。天女散華図のほかに、5世紀のアジャンタの天女図は額にアクセサリーをつけている。これより古い天女図や像の額印を見ることはできなかったので、五世紀ごろからの事であろう。

ところで、江ノ島のインド寄贈の弁天像には白毫が点じてある。弁財天・サラスバティは歌舞音曲の女神だから、天女の白毫はサラスバティの第三眼が伝播したのではなかろうか。したがって、踊り子が施すビンディの起源はサラスバティの第三眼にあり、天女が下界の踊り子たちに職能の紋章を流布したとも考えられる。

② 位階表示を目的とした額印

仏陀の白毫に由来する花鈿とは異なった履歴をもつと考えられる額印がある。西域北道クチャ近くで発見されたトハラの貴人図と釈迦説法図である。前者には貴人の眉間に縦長の印章があり、後者には、説法を聴いている信徒にも額印が施されている。これらの壁画の額印は男性に施されたものである。かような印章は転輪聖王や優れたバラモンに具っている白毫が原点になっているように感じられた。トハラの貴人の身分は不明だが、仏に帰依し慈悲深い貴人が聖王に匹敵するものとして、白毫を模した紋様を施すようになったのではなかろうか。

釈迦説法図の聴衆は、釈迦から直接に説法を受けているのだから、例え衆生の仏徒であっても優れた仏弟子に位置付けられたのだろう。だとすると、優れたバラモンの考えに基づいて、優れた仏徒にも白毫を模した印章が与えられたのではなかろうか。

そのほか、6世紀ごろの中国竜門蓮華洞の羅漢像の額には印章が刻まれている。羅漢は小乗仏教で最高位に達した修行者だから、先の推察を支持している。いずれにせよ、仏教由来の白毫が世俗社会における位階表示の標章に分化したものと考えた。

③除災招福の額の護符

現代の日本社会にも、民俗的風習として額のポイント化粧が残っている。一つは、新生児の無事な成長を祈願してお宮参りするとき額に化粧を施す。また、村祭りなど五穀豊饒や商売繁盛を祈願する祭礼のときも、額に印章を施す地方が多い。これらの風習は、神仏の加護を目的とした除災招福の行事であるから、額の印章は呪術的な魔除けの護符が淵源になっているはずである。この額章がどのようなルートで日本にもたらされたか、それを記載した文書に接したことはない。

④シャーマニックな三鈿化粧

神事における化粧風習をみると、沖縄では額と頬に朱印を捺して巫女となる儀式がある。また、美保関神社に伝わる青芝垣(あおふしがき)神事では、紅で額と両頬を丸または点状に彩る。韓国では、結婚式のときの花嫁や仮面劇の主役・守護神の化身は、額と頬に赤い丸をつけている。

額と頬のポイント化粧といえば、花鈿と靨鈿を思い出す。この両者に共通して鈿の字が当てられる。額に1点と頬に2点あるので、三鈿化粧ともいえる。三鈿化粧の証拠としては西涼・宴楽図の舞女にみられ、トルファン出土の女性泥俑にも三鈿がある。これら三鈿の紋様は素朴であり、中国中原に繁栄した花鈿靨鈿化粧とは異質にみえる。

日本における三鈿が神事に関わっているため、シャーマニズムの影響を感じる。一方、西涼やトルファンにも三鈿化粧の跡が認められるので、昔、ツングース人が天山北路の辺りで三元あるいは三眼の思想を知り、その思想をシャーマニズムに取り入れて、除災招福の護符として三鈿化粧を始めたのではないか。したがって、シャーマニズム伝播の道を介して、韓国の守護神に三鈿が施され、現存する韓国の花嫁や日本の神事に三鈿が引き継がれた構図を頭の中に描いた。この仮説の証明には、シャーマニズムの故郷・シベリアやモンゴル、中国東北地方の民俗的化粧、あるいはアイヌやイヌイットなどの伝承に残されていないかを求めなければならないが、今のところ、そのような資料に出会っていないので、仮説として提唱する次第である。

［参考文献］

世界美術全集全30巻、平凡社、一九五六～五七

松山俊太郎、古代インド人のよそおい、化粧文化、一九八五

切畑健編、日本の女性風俗史、京都書院、一九九七

佐藤明美、アジア・カルチャーガイド③・バリ島、トラベルジャーナル社、一九九四

板谷徹、民俗行事における化粧、化粧文化、10号、11号、一九八四

村沢博人、顔の文化史、東西選書、一九九二

斎藤昭俊、インドの神々、吉川弘文館、一九八六

田中於菟弥、世界の神話伝説、自由国民社、一九九二

坂本太郎ら校注、日本書紀一～五、岩波文庫、一九九四～九五

金両基監修、図説・韓国の歴史、河出書房新社、一九八八

周汛、高春明、中国歴代婦女妝飾、三聯書店、上海学林出版、一九八八

田辺勝美、堀晄、シルクロードのみほとけたち図録、鎌倉美術館、一九九三

コーソン著、石山彰監、メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八二

F・アァッキーニ著、片山一道監訳、人類の起源、同朋舎、一九九三

東野治之、正倉院、岩波新書、一九八八

(次回は第三話に入る)

（司馬雑感　十六）

「島原、天草の諸道」を歩く

山田嘉久

一　雲仙普賢岳

かって全国的に有名となった「雲仙普賢岳」は今では僅かな一条の噴煙を微かに挙げながら静かに佇んでいた。

私がこの地を始めて訪れたのは、十八年前の平成二年十一月、「還暦旅行」の際だったが、ガイドが「つい一週間前に噴火したばかりです」の説明にも誰もがさして気にも留めなかった。

この山が話題になるのは、その半年後、火砕流によって多数の死者が出てからのことだが、救助の先頭に立った当時の鐘ヶ江島原市長も「ひげの市長」として時の人となった。

司馬遼太郎が「島原、天草の諸道」を書いたのは噴火の十年近く前の昭和五十五年だから、当然、「平成の噴火」については書かれていないが、二百年前の「島原大変」については詳細に記している。

また「ひげの市長」鐘ヶ江氏はこの本では県教育委員長として再三、司馬の相手役として登場している。

司馬の泊った宿も鐘ヶ江氏経営の旅館であった。

我々は「平成の噴火」と「寛政の大変（肥後迷惑）」を新しく出来た島原市文化センターで見て廻ったが、人口数万の小都市に相応しくない豪華なこのセンターは今、問題の「道路特別財源」によって作られたものらしかった。

今回の噴火によって出現した溶岩ドームは「平成新山」と命名され、肝心の普賢岳より高く聳えていた。

二　島原城

「島原、天草の諸道」は「日本史のなかで、松倉重政という人物ほど忌むべき存在はすくない」という文章で始っている。

この「ごろつきのような」重政によって作られたのが島原城である。

確かに僅か二万強石の小大名にしては、豪壮過ぎる居城を作った。五層五階の威風堂々たる唐作りの天守閣、高く積まれた石垣が連なる広大な郭である。そのために彼は前任有馬氏の旧城である原城の石垣を全部はずし、それを運ばせた。動員された人夫は延べ百万人といわれ、「この費用をひねり出すために、農民を擦り殺すほどの勢いで擦った。」

司馬はまたこの城が、それまでの城郭からみて特異な点がいくつもあることに注目している。その一つが「この天守閣は五層ながら、中国によくある塔（西安の大雁塔や小雁塔など）のようなかたちをしている。つまり破風がない」と記し、最初から切支丹との戦いを想定して作ったのではないかと築城の理由に想像をめぐらしている。

その重政とその息子勝家は二代にわたって、領民に対して「苛斂誅求」を極めた。特に保身のために切支丹を苛め殺した。勝家にいたっては臨月の農民嫁を川にほうりこみ殺すという蛮行を敢てした。

「ここまで、追い詰められれば、魚でも陸を駈けるのではないか」と司馬は書いている通り、一揆が起きるのは当然であった。

島原城は明治の御一新によって取り壊されたが、戦後再建され、館内には収集された「切支丹資料」が公開されている。

また城の近くには七十石以下の下級武士の住まいとして、碁盤の目のように整備された「武家屋敷」が並んでいた。当初は石垣や塀などなく、隣の家や庭が丸見えであまるで鉄砲の筒の中を覗いているようであったために「鉄砲町」と呼ばれた。しかし安永四（一七七五）年に藩主の命により各戸に石垣がつくられ、現在のような町並みになったようだ。

我々は司馬と同様に、そのうちの一軒篠崎家を見学した。石高は十三石二人扶持だったという。

三　島原ノ乱

司馬は「島原ノ乱の本質は、宗教一揆ではなかった」とも書いている。

その証拠に乱の責任をとらされた勝家が幕閣によって「打首」になった事実を挙げている。

幕府の方針である切支丹弾圧について、むしろよくやっていた勝家はせいぜい「切腹」が順当だったであろうが、それが「打首」の極刑になったのは、乱の原因が切支丹の存在ではなくて、松倉親子の政治にあったというのである。

乱の直前には島原半島には切支丹は表面上は顕在していない。そのため「蜂起の段階においては宗教色はなかったが、一揆が形成されてゆくにつれ、結束のためもあ

り、かれらは切支丹にもどったのである」と書いている。

すなわち、島原ノ乱とは一旦、切支丹を棄教した人々が松倉氏の苛斂誅求に耐えかねて切支丹に「立ち返り」「立ち戻り」した一揆であるというのが司馬の解釈となっている。

○日野江城跡と原城址

我々はその一揆の最後の舞台となった原城址の見学の前に、原城の本城である日野江城跡をまず見て回った。

この城跡は現在でも発掘調査中で、全貌が明らかにされていないが、市職員の説明によりと、一七世紀初頭まで島原半島から肥前国一帯二一万石を領有した切支丹大名有馬氏の居城であった。特に日本初のヨーロッパ派遣団「天正遣欧少年使節」が八年半を要して帰国した際には、この城で八日間にわたって帰国報告会が催されたという。

司馬はこの日野江城を割愛して、すぐに原城に急いでいるが、我々は原城の見学は翌日とした。

原城は明応五（一四九六）年に有馬貴純によって築かれたといわれ、周囲四キロの三方を有明海に囲まれた難攻不落の要害で、別名「日暮城」と呼ばれた。

この城跡の発掘調査も平成十一年から進められているが、本丸はそれまで最大といわれた唐津の名護屋城（豊臣秀吉が朝鮮出兵のおり築城）を凌ぐ規模と判明した。

（なお、この名護屋城には平成十八年三月に「肥前の諸街道」として訪れた。秀吉が文禄一（一五九二）年、加藤清正らの全国の諸大名にわずか五ヶ月で作らせたという城も、今は石垣や礎石を残すのみだが、此処に三十万八千人の大軍が朝鮮出兵のため集められたとは驚きだった。）

原城に関しては、慶長一七（一六一二）年、有馬晴信が岡本大八事件に連座して配流、切腹となり、二年後、子直純は日向に転封となった。その後の領主となったのが大和五条より移った前記松倉重政である。

しかし重政は前述の通り島原城を築城したので一国一城の令により日野江城、原城は廃城となったわけである。

この廃城が「島原天草ノ乱」の最後の舞台となった。

寛永十四（一六三七）年、松倉氏の悪政に苦しんで立ち上がった一揆軍がまず包囲したのは松倉の居城島原城だったが、偶然にも類似の事態が唐津藩主の領地である天草でも起こった。

そこで双方、天草四郎を大将とすることを申し合わせ、廃城の原城に立て籠もったのである。此処でジェロニモ天草四郎（本名―増田四郎）は奇跡と予言能力を持ったカリスマ的存在となった。

幕府側は当初、事態を軽視して板倉重昌という軽輩を指揮官とする陣容を取ったが、容易に片がつかない。そこで老中松平信綱の出陣となり、動員される大名は九州

一円に及び、その数総勢一二万四千人という大軍となった。

一方の一揆勢は三万七千人。当初は幕府の大軍を圧倒したが、結局は兵糧が尽きて、寛永一五年二月、幕府の総攻撃を受けて、司馬の表現によれば「霜柱の溶けるように崩れおちた。」

幕府軍は生き残ったものをことごとく殺した異常な事件であった。

現在、原城跡は公園となっているが、遺構は草に埋もれて石垣が僅かに残るのみ。落城後、幕府によって徹底的に破壊されたためである。

天草四郎の墓のある原城本丸跡に立ってみると標高三十mの高台にあり、海に面したところは断崖絶壁となっている。前方には島原湾が広がるが、この洋上にオランダ船が出現して一揆勢向け発砲したとは驚きだった。幕府軍が平戸のオランダ商館長を口説き落として砲と火薬、船一艘を貸し出させるという不見識なことまでした。

幕府軍の慌てぶりを露呈した行為だった。

四　天草へ

我々は島原半島の南端口之津から天草下島の玄関口鬼池までフェリーで渡った。口之津はその昔はこの地区有数の貿易港で、多くの「からゆきさん」が遠い南方の島々やシベリアまで売られていった港として知られている。

フェリーの船上からは湯島が望めた。この島は別名「談合島」とも言われるが、前記一揆の島原勢と天草勢とが事前にこの島に集まって合議したことからこの名がついたといわれる。

またこの辺りが県境とのことだったが、島原半島が長崎県に対して天草諸島は熊本県に属する。一口に「島原、天草」と称するが、属する県は異なる。

明治初期の廃藩置県の際、問題にならなかったのだろうか、と考えながら海を渡った。

天草下島の鬼池に上陸した我々は、西側に天草灘を見ながら島を南下、途中景勝地の妙見浦で休憩した後、切支丹のメッカ大江天主堂、崎津天主堂へ急いだ。

天草切支丹の歴史は、聖Fザビエルが初めて日本に基督教を伝えてから一七年経った永禄九（一五六六）年からだという。その後の長期の切支丹禁制時代にはこの地区は肥前の平戸、生月島とともに「隠れ切支丹」のメッカとなった。

明治六年ようやく解禁、明治二五年に着任したガルニエ神父が私財を投じて昭和八年に完成させたのが現在の大江天主堂だという。

吉井勇の「白秋とともに泊まりし天草の大江の宿は伴天連の宿」の歌碑が立っていた。此処を有名にしたのが

五人の青年による旅行記「五足の靴」であることはよく知られている。

明治四〇年に切支丹遺跡探訪の旅に東京から夜行列車に乗り込んだ五人の青年（与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野万里）が此処を訪れ、ガルニエ神父と語り合った旅行記が東京の新聞に匿名で掲載されて評判になった。

特に白秋は処女作「邪宗門」を明治四三年に発表し、詩の愛好者から熱狂的に迎えられた。司馬も「天草諸島は若い白秋の詩によって、それまでの世間の既成イメージとはまったく異なる舞台装置が与えられ」と記している。

高台に立つ大江天主堂に対して、崎津天主堂は海の中に浮かぶように立っている。永禄一二（一五六九）年に建てられたこの教会も天草の基督教の中心となった。

「町のにおいは、熊本県下の町より長崎の町のどこかに似ている。」と書く司馬は、江戸期以来昭和に至るまで崎津の代表的宿屋だった紋付屋跡を訪れて「島原、天草の諸道」を終えている。

五　天草松原から熊本へ

我々は天草下島を北上して、上島に移り天草五橋の玄関口松島で一泊した。この天草松島は宮城県松島、長崎県九十九島と並んで日本松島の一つに数えられ風光明媚な名所として知られている。

リアス式海岸と点在する多くの小島の島原湾と八代湾の絶景は美しかった。

天草五橋を渡るといよいよ熊本県本土（?）に入る。「街道をゆく」では初期の作品「肥薩のみち」（昭和四七年）である。

我々は先ず「熊本城」に直行した。

日本三名城の一つといわれるだけに実に豪壮。さらに城下町として発展した熊本市内もなにかしら風格漂う街と感じられた。

天正一六（一五八八）年、肥後半島の領主として熊本に本拠を置いた加藤清正によって築かれたことはよく知られているが、その完成が慶長一二（一六〇七）年。昨年が四百年祭ということで市中、賑わっていた。

まず大天守閣と小天守閣が並立する威容に目を引いたが、何よりも美しいのは「武者返し」と呼ばれる曲線を描いた石垣。また「宇土櫓」は創建当時から唯一残る多層櫓だが、他の城郭では優に天守閣に匹敵するだろう。

本丸御殿大広間の復元は完成間近で来月（平成二十年四月）公開ということで、見学が出来なかったことは残念だった。

此処を居城としたのは加藤家二代（四十四年）、細川家十一代（二三九年）だが、明治十（一八七七）年の西南の役に際しては、薩摩軍を相手に五〇日余も籠城し、

難攻不落の城として真価を発揮した。しかし薩摩軍総攻撃の二日前、原因不明の出火により天守閣など主要な建物は焼失した。

この辺の事情は司馬が「西南の役」を壮大に描いた長編「翔ぶが如く」に詳しい。城域内には谷干城の銅像が薩摩の方角を向いて建っていた。勇名高き薩摩軍を予想以上にてこずらせた熊本鎮台司令官である。しかし彼は土佐の出身。

「肥薩のみち」では司馬は「肥後モッコス」について語っている。

秀吉が熊本に最初に封じたのは佐々成政だったが、肥後の地侍団はこのよそ者を一揆を起して追い出してしまった。「肥後モッコス」の恐ろしさだが、その後を継いだ清正が奇跡的にその一揆を平定しまったのは肥後人の気質と清正の人柄が適ったのかもしれないと司馬は書いている。

清正の子の代になって加藤家は潰されるのだが、豊前小倉から移封されてきた細川家は肥後に入ってくるとき、行列の先頭に清正の霊位を捧げてきたという。

このように領民の安堵を得ようとした例はないとも記している。細川家は江戸藩邸でも「清正公」の祠を建て祭祀を欠かさなかったといわれる。

市内のホテルから望む熊本城がライトアップされて美しかった。

翌日は清正の菩提寺である市内の本妙寺に詣でたが、併設した資料館にある清正愛用のやけに細長い長鳥帽子兜を指してガイドが小柄な清正が少しでも大きく見せようと、このような長大な兜を用いたとの説明に一寸首をかしげた。一般に清正は大男とされており、司馬も「清正は顔長く、あごひげ長く、四肢よく発達し、見上げるような長身の偉丈夫」と書いてあるからである。

ともかく「歴史上の人物」には極端な指摘が多いということか。

六　田原坂

翌日は西南ノ役の雌雄を決した「田原坂古戦場跡」を見て廻った。

明治十年、西郷隆盛率いる薩摩軍主力と熊本城救援に南下する政府軍とが衝突、三月四日から二十日まで合計十万の将兵が激闘し、死傷者三万五千名、遂に薩摩軍は敗退した。

日本最大、最後の内乱の地である。

司馬は書く。「われわれは田原坂に来てしまったのである。雨は降る降る人馬は濡れる。越すに越されぬ田原坂、というあの唄にある田原坂である。」

また土地の老母が「太平洋戦争なんか、アータ、小さな戦じゃったよ、西南戦争にくらべれば」と言ったというユーモラスな話まで紹介している。

坂の上にある資料館では西郷さんによく似た学芸員が説明してくれたが、評判の「行きあい弾」も見ることが出来た。敵味方の弾が空中でぶつかり会って互いに噛み合い、だんご状になっている。この戦いの壮絶さを物語っていた。

政府軍だけでも一日平均三十二万発余りの小銃弾を使い、死傷者も二百名に及んだという。

また植木南方の戦いで薩摩軍に奪われたという乃木（当時小佐）の第十四連隊旗も展示されていた。

同時代の世界史の中でも類を見ない一七日間に及んだこの激戦に決着をつけたポイントは「抜刀隊」の存在だった。旧会津藩の士族を中心として結成された「抜刀隊」は「戊辰の復讐、戊辰の復讐」と叫んで薩摩軍に突入したという。

政府は会津人の恨みを政治的に利用したわけである。

現に戊辰戦争に生き残って後に陸軍大将となった会津人柴五郎の「ある明治人の記録」にも「芋（薩摩）征伐仰せ出さる、めでたし、めでたし」と記されている。

司馬はこの本で「田原坂」をこう結論づけている。

「その敗北は日本国に史上類がないほどに強力な官憲政府を成立させるもとになった。あるいは西郷の敗北は単に田原坂にとどまらず、こんにちにいたるまで日本の政治に健康で強力な批判勢力を成立せしめない原因をなしているのではないか」

こんな歴史の見方もあるのかと感心しながら田原坂付近を歩いた。

司馬は「肥薩のみち」を書いた昭和四十七年の翌年に長編「翔ぶが如く」の連載を始めている。従がって、この紀行文は「翔ぶが如く」の予告編と見ることができる。

「肥薩のみち」で八代、人吉を過ぎると既に薩摩である。司馬は薩摩に入るとすぐに十四代薩摩焼の名工沈寿官について語っている。これより数年前、司馬は沈を主人公とした「故郷忘じがたく候」を書いている。

沈は朝鮮からの帰化人の子孫だが、司馬に云わせると典型的な薩摩隼人となる。

また肥薩の国境に立った司馬は戦国の世にも思いを馳せる。

関が原の戦いに敗れた島津勢が薩摩に逃げ戻ると、すぐに三州（薩摩、日向、大隅）の国境を閉ざし、多くの城砦を築き全土に臨戦態勢を敷いた。

薩摩人の凄みはこのあたりにあるというのである。

一兵卒が見た戦場の裏側

森　清英

はじめに

日露戦争における二百三高地攻略の壮烈な戦死の報道や、旅順港封鎖のために軍艦を沈める作戦が行われ、広瀬中佐の軍艦に乗った杉野兵曹長の行方が分からず、小学校の教科書に掲載されたこの場面の沈みゆく軍艦の中を杉野兵曹長を声を限りに探す「杉野は何処（いずこ）」「杉野はいずや」という軍神といわれた広瀬中佐の叫び声は今でも私の脳裏に焼き付いている。

また、今次大戦緒戦における山崎大佐率いるアッツ島玉砕のニュースは胸を打つものがある。

今次大戦ではフイリッピンにおける逃避行で口にする物もなく死んで逝った兵隊は数知れないというし、ビルマでも同じような情況であったという。

私は一兵卒として中支（現・中国中部）の戦場の裏側にあった悲しく哀れな現実を見てきた。

一、軍人勅諭を詠みながら死んで逝った戦友

一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。凡生我国に稟（う）くるもの、誰かは国に報ゆるの心なかるべき。況（ま）して軍人たらん者は、此心の固からでは物の用に立ち得べしとも思はれず。軍人にして報国の心堅固ならざるは、如何（いか）程（ほど）技芸に熟し学術に長ずるも猶偶人にひとしかるべし。云々…

一つ軍人は礼儀を正しくすべし。凡軍人には上元帥より下一卒に至まで其間に官職の階級ありて統属するのみならず、云々…

と、軍人勅諭を暗誦している声が聞こえてくる。夢うつつの中で聞こえてくる軍人勅諭が「般若心経」を詠んでいるようにも聞こえた。

軍人勅諭は前文があって、つぎに五カ条からなってい

るが、一カ条から五カ条まで一カ条ごとに説明文がある。
その五カ条全部を声を出して詠んでいるのが聞こえる。
どれくらい時間が経ったのか分からないが、その朗読の声に私は目を覚ました。
薄目を開けて見ると白い丸形の帽子をかぶり、白衣で身を固めた看護婦が行き来している。
「こんな兵隊を見たことない！」
と、軍医らしき医者が感心しきりに看護婦に繰り返して言っている。
軍隊に入れば否応なしにまず、軍人勅諭を声を出して暗記させられる。
一カ条ごとに説明文があり、幹部候補生の資格のある兵隊は五カ条と説明文全部を暗記しなければならない。
普通の兵隊はまず五カ条の条文だけでも暗記すれば、それで済んだ。
その兵隊は私の向こう側のベットに寝ている。
標識に田口二等兵と記されている。
埼玉県出身の知ったことのある同年兵であった。
暫く様子を見ていると軍医が看護婦に指示してその兵隊を向こう向きにさせ、背中を私の方に見せるようにして、軍医が脊髄に注射針を打った。
看護婦は日本赤十字社の各県から派遣された看護婦さんたちで、年齢は我々初年兵と同じくらいから少し上の働き盛りの人たちであった。
ともかくキビキビと軍医や婦長の指図に従って働く様子に心強さを感じた。一人の沖縄出身の看護婦は背が高くて特に親身になって看護し、頼りになる姉さん看護婦という印象を受けた。
田口は一瞬、痛そうな呻き声を発した。
当時、陸軍病院における手術の際、痛み止めの注射などは一切行われなかった。
見ていると脊髄から液体が下に置いた大きなビーカーのような器にポツリ、ポツリと少しづつ落ちはじめた。
田口は苦しそうだが、相変わらず軍人勅諭を声を上げて詠んでいた。
私はその一部始終を眺めながら、これは容易ならざることになったと実感した。
私が目を覚ましたことに気付いた看護婦が、
「ここに紐の付いたビンがありますので、お小水は紐を手繰ってこのビンの中にして下さい」
と、紐のついた瓶を置いていった。
「はい、分かりました」
立つことの出来ない重病患者には、広口の瓶に紐を付け、患者自身に用足しをさせた。時々看護婦がそれをバケツに集めるのである。
大の方は看護婦さんが介添えしてくれた。
暫く様子を伺っていると、この部屋は一階にある四人

部屋で重病人患者を収容している部屋であることが分かってきた。
これは自分も重病人であると想像し容易ならざることになったと思った。
自分自身、何時ここに収容されたか覚えがなかったからである。
私は終戦前年の昭和十九年九月に千葉県の柏という小さな駅から歩いて急造したと思われる兵舎（部隊名を覚えていない）に入隊した。ちなみに現在の柏市は人口約四十万人近く東京のベットタウンとなっている。
兵舎に現役入隊した人たちは埼玉県人と静岡県人が約半々ぐらい、ただ静岡県出身者は幹部候補生要員のみであった。
南支（広東付近）要員に動員されたということで、この兵舎に約一カ月いて十月に長さ約六尺ほどの太い孟宗竹を渡され、列車に乗せられて佐世保から船に乗り、朝鮮の釜山に上陸した。孟宗竹は敵の攻撃を受けて沈没したときに浮輪替りにするためであった。
ここからは有蓋の貨物列車に乗せられ、用足しのために二十センチほど引戸を開けておかねばならなかったので、列車が走るに連れて入る寒風とともに用足しした小水が冷たい風とともに列車の中に入ってきた。
私は列車長という偉らそうな職を命じられていたが、この職は指定された駅で軍用のバケツに入った飯と味噌汁を受取って配給する役目であった。
朝鮮半島を縦断し満州（現・中国東北部）を経て支那（現・中国）に入り、津浦線を何日かかけて揚子江の西岸の浦口という要衝地に着いた。
計画ではここから船で揚子江を下り、上海を経て海上輸送で南支の予定地へ行く段取りであったと想像した。
しかしすでに戦況は悪化する一方で、船で海上を南支へ行ける状態ではなかった。
そこでこの浦口に一週間ぐらい滞在し、その間の米飯の炊き出しは抱えてきた竹を燃料にした。海上輸送がないことが分かり浮輪替りの孟宗竹は不要となった。
結局、初年兵教育は中支の山口県の部隊（部隊名の覚えがない）のある杭州の先の金華からさらに奥地に入ったドウロ（漢字不明）という所のお寺に改造した宿舎で教育を受けることになった。
山口県人は幕末に吉田松陰門下に多くの優秀な志士を輩出した県だけあって関東人とは大違い、下士官程度の指導者でさえおおらかで人柄が良く、ここの初年兵教育で嫌だと思ったことは一度もなかった。
それに比べると関東人の意地の悪さは軍隊生活の終わりまでつづいた。
ただ、このとき朝鮮人の初年兵が二人入隊してきて、一人を埼玉の間下という兵隊が面倒を見ることになり、もう一人は私が面倒を見ることになって隣のベットに入

ってきた。
そしてシラミを移され、このシラミとの長い付き合いがはじまるのである。
以後はシラミと共同生活を余儀なくさせ、復員して煮沸消毒をするため自分の家の中庭にタライを置いて、着ている衣料全部を退ぎ捨てるまで付き合わされるという羽目になった。
初年兵教育が終わり海上からの南支赴任はできないので、内陸部を行く計画で南京の兵員移動に使われる「ワキコンス」（漢字不明）という宿舎に何日間を泊まることになった。
ところがこの移動する兵隊を収容するこの「ワキコンス」という宿舎は、兵隊の数が多かったためか、六畳一間ぐらいの部屋に二十人ぐらいの兵隊がはいり、まず横になって寝られない。
そして夜になると意地の悪い古参兵が我々初年兵に因縁をつけて、次々にビンタを食らわすのである。
関東人の意地の悪さは野卑と評すべきもので、人間性は全く感じられなかった。
まだ移動の途中で部隊編成も行われていない状態のなかで、制裁を加えたのは大方は埼玉県川口出身のSという古参上等兵で自分の手が痛くなると、初年兵を二列横隊に並べて、自分の前にいる兵隊を交互にビンタをさせるのであった。
毎晩恒例のようになり、初年兵も相手のことを考えて手を抜くようなことがあると、その仕返しが怖かった。
静岡県の出身者は口々に、
「内地に帰ったらあいつを殺してやる」
と、言うほど過酷な制裁であった。
六畳ほどの部屋に二、三十人が収容されていたので、外は一月の寒風が吹き荒んでも、部屋の中は人熱れで暑くて暑くて堪らず喉が渇き水分が欲しくなる。
ところが外の洗面所は蛇口をひねれば冷たい水がコンコン湧きと出る。私はこのコンコンと出る蛇口をくわえ喉を潤した。その水のうまさは何物にも変えがたかったが、この水が私の運命を狂わしたのである。
結局、部隊は南支へ行くことは適わず、中支に新しく編成された部隊（確か矢石混成旅団といった）に配属させられることになり、南京に近い蕪湖という町に我々の部隊本部が置かれた。が、私はその事実を発熱のため全く把握出来ず私の知らない間に入院させられていた。
「ワキコンス」のうまかった水の中にチブス菌が入っていたのである。後になって分かったが私と特に仲が良かった磐田出身の出野という戦友も同じ病気に罹っていた。
この当時、将校にしても古参兵にしても、
「生水は飲むな」
と、いうような注意を全くしなかった。生水を飲むなぐらいの注意は当然すべきであった。日本の軍隊のお粗末さ加減というべきか。
そんなことも出来ない軍隊が勝てる筈はない。米軍との勝敗の差は小さなことだがこのような肝心なことをおろそかにした差であったと言わざるを得ない。
田口の軍人勅諭の朗読は相変わらずつづいていた。
「田口の病気はなんでありますか」
と、時間が若干経ったので少し慣れた看護婦に聞いてみた。
「流悩です」
「流悩？」
私はオウム返しに聞いた。流悩なんて聞いたことのない病名であった。
看護婦は、
「流行性脳脊髄膜炎」
という。こんな名前の病気があることも知らなかった。
そして、
「私の病名はなんでありますか？」
「森二等兵はA形パラチブスです」
ここが南京陸軍病院蕪湖分院であることが分かり、そしてこの木造の建物が隔離病棟であることが分かってきたのは後のことである。
後になって散歩が出来るようになって分かったことだが、本館は鉄筋煉瓦づくり三階建ての堂々とした建物であった。戦前にイギリス人が建てたという、多分、キリスト教の宣教師が建てたものだろう。
日本に比べてイギリスのやることは違うと、日本のお粗末さ加減を見せつけられた思いであった。
相変わらず、田口の軍人勅諭の暗唱はつづいていた。
「軍医はこんな兵隊見たことない！」
と、誰に言うともなくつぶやいた。
そして三日目ぐらいに息を引き取る時が来た。
田口は夢うつつのなかで息も絶え絶えに軍人勅諭の暗誦がつづいていた。
軍人勅諭の声がだんだん小さくなり最期のときが来た。陸軍二等兵の死に軍医と看護婦は敬意を表するため、直立して彼の最期を見守ったのである。

二、古年兵の自殺

昭和二十年八月十五日、ちょうどその日、私は揚子江沿いにある馬鞍山という分屯地から連絡を兼ねて糧秣の補給に大隊本部に来たところ、所属の機関銃中隊はてんやわんやの大騒ぎの最中であった。
私は何が起こったのか情況が掴めずいた。当時のラジオは不具合が多く天皇の終戦の詔勅が良く理解出来ていないときに出会したのである。

ともかく馬鞍山の分隊長以下十人前後いる人数の糧秣だけを確保して頭陀袋に入れ、取る物も取りあえず汽車に飛び乗って、三駅ほどの馬鞍山という駅に辿り着き、そこから分屯地まで手押しの車で軌道を走らせた。

我々がいる百メートルほどの高さの馬鞍山という駐屯地には速射砲三門と機関砲二門があってコンクリートで固めて要塞化していた。

この速射砲と機関砲は第一次世界大戦後にドイツからの戦利品として押収したものであった。

眼下には長大な揚子江が流れていた。

近くから蛍石（弗化カルシウムから成る鉱物、ガラス工業・光学機器などに使われる）が産出し、台湾から来た若者が働いていた。蛍石を運搬するため軌道が馬鞍山の駅まで通じていた。

我々はその軌道を手押車を利用して駅との往復にあたっていた。

伍長の分隊長に戦争の終わったことを報告したが、その後の何日かは敵襲に備える日々が続いた。

揚子江の向こう岸付近に敵（共産軍・新四軍）が行動する様子が見え隠れするので、早急に大隊本部に引き上げることになり、速射砲などを貨物に積み込んで本部のある蕪湖に引き上げた。

しかしそれからの毎日が大変であった。

戦争が終わって、やれやれという気持ちが強く、いつ内地に帰れるか希望が膨らんでいたが、時局はそんな甘いものではなかった。

中隊に帰ったその夜に非常呼集がかかり、非常呼集は毎晩のようにつづいた。

その理由は前線に分屯している中隊や小隊、分隊が敵の急襲を受けて包囲され、その救出に当たるためであり毎晩のように非常呼集がかかった。

そのため軍靴を履いてゲートルを付けたまま横になるだけの毎日であった。

救出の殆どは夜中に出発した。私が所属する機関銃中隊は大隊の先頭にいて、夜の明け初める払暁に、まず前方の小山に向けて曳光弾を撃ち、それが戦闘の始まる合図となっていて戦闘が始まった。

曳光弾を撃っても何の反応がないときもあり、その時はそのまま引き上げた。

ところで、私の隣りの一番上席には古参上等兵がいた。この上等兵は日頃から口数が少なく、一言も喋らず、だだ、黙々と目を閉じ、時々「般若心経」を口ずさんでいたので、私はどう声をかけたらよいか分からなかった。

関東の出身者でないことは言葉づかいから分かったが、顔は髭づらで体は大きく強健そうであった。歳格好は四十近かく威厳のある古参兵であった。

そして時々座禅して「般若心経」を詠むのを日課としていたので、僧侶ではないかと思っていた。

同時に毎日かかる非常呼集には微動だもしなかった。いつも素知らぬ顔をしていて我関せず、という風で出動はしなかった。

分隊長も既にこの古参上等兵を見逃しており、中隊長にも報告されていたと思われるが、出動せよという命令もなかった。

そんなある日、いつものように非常呼集がかかり、兵隊は急いで出動支度をしていた。

そうしたなかで同年兵の衛生兵がどこが具合が悪いのか前日の非常呼集にも休んでいたが、この日も出動準備をしようとしなかった。

それぞれがあたふたと出動準備をするなかで、例の古参兵が上靴と称する革で出来た丈夫なスリッパ二つを持ってこの衛生兵に交互にビンタをくらわしたのである。一般に手でなぐるくらいのビンタは痛いには違いなかったが、まだ許せる痛さであった。

しかし上靴を両の手にもって交互におもっきり殴るのである。私たち兵隊はただ呻然としてこの情況を見つめた。その凄さは目を背けたくなる程のものであった。

そしてそのときの出動は何事もなく引き上げたが、いつも夜中にかかる非常呼集が、翌日の昼ごろかかったのである。

兵隊たちは何だろうといぶかいながら中隊前に整列したところ、兵隊が一人いなくなったという。

というのは自殺した兵隊がいるというので、どこの中隊の誰か、調べるためであった。

それが何と私の隣りの古参上等兵であった。

自殺の場所は診療所の裏庭で手榴弾をもって最期を遂げていた。

普段は手榴弾など渡されていないが、非常呼集がかかるようになってからは一人一人に一個ずつ渡された。

普通は一列の床に大体六、七人のベットがあったが、隣りの兵隊は戦友ということになっていた。

何か事があると戦友が事の処理にあたった。

古参兵の自殺の処理は当然隣りにいた戦友私の仕事であった。

中隊長の命令で取るものもとりあえず現場の診療所の裏庭に行って見ると古参兵の死体が上を向いて転がっていた。

死体を覗いて見ると、手榴弾を腹に抱えていたとみえて腹の中は見事に空っぽであった。自殺にはこうゆう方法があるのかと、改めて認識させられた。

その夜は私を含めて分隊で屍葬の勤務についた。

まず、木屑を集めてその上に樹の皮などを置き、その上に丸太を四の字に組み、その上に死体を置いて火を付け完全に骨になるまで焼いた。

その間、兵隊は軍装を整え小銃を肩にして、焼き場の

回りを巡回して亡くなった兵隊に敬意を表した。
翌日、火が消えて灰をかきわけ、遺骨を拾うまでが戦友の勤務であった。

おわりに

私は義兄が爆撃機で昆明上空において戦死し、特に仲の好かった従兄弟が沖縄で戦死したので、いつかは靖国神社に参拝しなければと思いながら、この歳（八十四）になるまで機会を逸してきました。
本稿を書くに当たってどうしても田口の墓に参詣しなければという思いから、靖国神社に跪き三人に今日まで参拝できなかったことを詫びて許しを請いました。
最初は手を合わせて詫びるうち、だんだん高揚して神殿に泣き崩れました。
側にいた人も同じ境遇の人だったのでしょうか、心配して私に声をかけ励ましてくれました。
田口のことは埼玉県出身ということだけは知っていましたが住所は知りませんでしたので、社務所に伺って事情を話し、住所を教えてくれるようお願いしました。
ところが住所は教えられないという冷たい返事でした。
そんなばかな、戦友の住所でも教えられないのですかと、二度、三度とお願いしましたが、こうゆう規則だからと冷たい返事しか戻って来ません。
こんな悲しいことがあって好いものかと、憤慨しましたが、いかんともなりませんでした。
日本はどうかしていると、痛切に感じました。
これが、日本の現状です。靖国神社の現状です。
日本の将来を夢見て死んで逝った彼らが哀れでありませんか。
悲しいことですが、これが現実です。

青の漂流（五）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】
一八六九年（明治二年）五月、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付け育てた。その後、支倉は事業を興し、蒼と東京に移り住んだ。明治憲法公布後間もなく、鹿鳴館に支倉と蒼が招かれた。鹿鳴館で、蒼と一緒にいた陸奥正春が海江田信義と騒動を起こした。そこで、蒼は両親を斬殺した方法が生麦事件でのイギリス人殺害と同じ特徴の有る剣術であることに気付いた。蒼は、抜刀術を心得ている陸奥に対して、両親殺しの疑いの目を向けた。その後、蒼は結婚するが、その日（一八九一年四月二十七日）は、ロシア帝国のニコライ皇太子が日本に来航した日であった。

五　ロシア皇太子暗殺未遂（大津事件）続き

一八九一年（明治二十四年）四月二十七日にニコライ皇太子は長崎にロシア艦船で来航した。
ニコライは長崎の稲佐（いなさ）お栄（えい）（道永えい）のロシア旅館で日本政府には非公式の夜を過ごした。この長崎でのニコライの出来事は三十年後に、蒼の運命に交錯していくことになる。
ニコライは五月五日まで長崎に滞在した後、六日に鹿児島へ渡り、長崎廻りで九日に神戸に入港し、列車で京都に着いた。
ニコライ一行にはギリシア国土の第二王子のジョージ親王も同行していた。

十一日には京都から琵琶湖へ日帰りの観光に行くことになっていた。

一方、蒼は四月二十七日に高山京輔と結婚したが、夫の高山が仕えていた沖守固が滋賀県知事として五月六日に赴任したので、一緒に大津に移り住んだ。

十一日当日は、蒼は新居となる家の前で、ニコライ皇太子の観光の帰りを町民と共に迎えることになった。

「西郷隆盛がニコライ皇太子に伴ってロシアから帰国したそうだ」

隣の人が新聞を小さく開きながら、蒼に囁きかけた。

四月一日付の東京朝日新聞で、西郷隆盛がロシア艦船で帰国する記事を載せていた。続いて、東京日日（現在の毎日）新聞や読売新聞も同様の報道がされていた。

西南戦争で自害した筈の西郷隆盛が生き延びて、ロシアに逃れた、ニコライ一行が鹿児島を経由したのは、西郷を薩摩に届けるためだ、という記事の内容であった。

蒼自身は信じていなかったが、新聞を読んで信じた人が周りに多くいたのであった。

「もし、皇太子に対して失礼なことがあったら、ロシアと戦争になるぞ。ロシアと戦争になったら、日本に勝ち目は無い」

別の隣人は呟きながら、怯えるように人力車の来る方向に目を向けていた。

蒼はニコライ一行が左折する角、一行から見ると左折後すぐ右側の角で迎えていた。左折するまでは一行を真正面から見える位置であった。

警備の様子を見て、蒼は疑問を感じた。

「反対側を向いて警備して、暴漢が現れた場合に未然に防げるのかしら」

警備には多数の巡査が動員されていたが、全員が群集に背を向けて警備していたのであった。

蒼は、自分の左側の道路を隔てた場所で警備していた巡査と目が合った。

細い目つきで睨み付けるように蒼を見た巡査は、蒼が後にその名前を知ることになる津田三蔵という滋賀県警巡査であった。

怒っているような津田の異様な視線を感じて、蒼は心中の疑問を察せられたように感じて、少し身震いをした。

遠くから人力車が近づいてくるのが見えた。先頭の警察の人力車二台の後に、沖守固知事の人力車が現れた。

一台置いて、ニコライ皇太子・ジョージ親王・有栖川宮威仁親王の人力車が続いていた。この三者の人力車だけは引き手の車夫の他に後ろに二人の車夫が押していた。

皇太子の人力車が近づくと頭を下げなければいけなかったが、真正面にいた蒼は、手前までニコライ皇太子を見ることができた。

「ロシアの皇太子様も碧い眼をしているのね」

ニコライの瞳は蒼のものと全く同じ色で同じ明るさをした碧眼であった。

碧眼は、年齢が上がるにつれて色素の沈着が進むため、虹彩の青色は深く濃く変色していく。

蒼は明治の元号に合せて年齢を数えていたが、ニコライ皇太子は明治元年の一八六八年の生まれであるから、ほぼ同年齢であった。

皇太子と蒼の二人の瞳は生れつきの碧さが同じで、年齢により同じように深い色に変わっていったのであった。

蒼はニコライと目が合ったように感じた。皇太子も群集の中で自分と全く同じ瞳をしている日本人を見つけて少し気になる様子を見せたように、蒼は感じた。

蒼自身は自分の先祖が皇太子と同じニコライという名前を持つロシア人であることを知る筈も無かったが、碧眼を見て、血が繋がっているような錯覚をした。

人力車が近づいてきたので、蒼は他の人と同じように頭を下げた。

ニコライの人力車が蒼の目の前を曲がろうとした。

その時、蒼は頭を下げた状態で、視界の片隅で人が動くのを感じた。

少し前に蒼を睨み付けた津田三蔵であった。

津田はサーベルを抜き出すと、皇太子に向かって突進していった。津田はサーベルが皇太子の山高帽の上から振り下ろし、右こめかみを切り裂いた。

山高帽が飛んで、蒼の目に、ニコライ皇太子の右こめかみの傷口から一瞬の間、頭蓋骨が見えた。しかし、直ぐに鮮血が迸しり、皇太子の右の碧眼が真赤な鮮血で覆われた。

再び、津田はニコライの右こめかみを斬り付けた。

ニコライは人力車の左側から飛び降りて、脇の路地へ逃げ込んだ。津田はニコライを追いかけ、さらに斬りかかろうとした。

その時、後続の人力車からジョージ親王が追いついて、津田の背中を杖で打った。ニコライの人力車の左後を押していた車夫が、津田の両足を抱えて引き倒した。

ジョージ親王の人力車の右後の車夫が、津田のサーベルを拾い、津田の首を後ろから斬りつけた。

津田は、警備中の他の巡査に取り押さえられた。沿道の住民は逃げるように駆け出した。

ニコライは沿道脇にある呉服屋に連れて行かれ、店先で安静のために腰を下ろした。

蒼は暫く呆然と立ち尽くしていたが、真新しい純白のハンカチを持っていたので、傷の手当てにと思い、巡査の一人に差し出した。

ハンカチは巡査から威仁親王を通じてニコライに渡された。傷口に当てると、直ぐに鮮血で真っ赤に染まった。

「この光景は前に見たことがある」

蒼はニコライ皇太子が襲われた光景に、既視感（デジ

ャヴュ）を感じた。

その既視感とは、蒼が幼児の時の白老のアイヌ村での惨劇であった。

全く同じ碧眼を持つニコライが襲われ、碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は自分自身を投影したのであった。

蒼は未だ一歳の幼子であったが、日本刀で斬り付けられようとしたこと、実父のサクサイヌの鮮血で碧眼が覆われ、その瞬間に犯人が凶行を止めたことが、淡い記憶として残っていた。

暫くの間、大津の街は騒然としていたが、ニコライ一行は大津から立ち去り、京都に戻った。

ニコライ皇太子は明治天皇に会うための東京へ行幸する予定であったが、中止になった。

代わりに明治天皇が神戸港に停泊しているロシア艦船に見舞いに訪れた。

警備をしていた警察官による犯行ということで、日本政府の失態として国際的な非難にも晒された。

大津事件により日本国民の間ではロシアに占領されるという恐慌に陥った。山形の村では、津田の姓と三蔵の名を禁止する条例を決議した。

北海道や九州を割譲して謝罪すべきという議論もされるほどであった。

日本政府は津田に大逆罪を適用し死刑を適用するように圧力を掛けたが、事件から十六日後、裁判所は一般人に対する謀殺未遂として無期徒刑の判決を言い渡した。

津田三蔵の動機として様々な風評が流れた。

一つは、ニコライが西郷隆盛を連れて帰ったと信じて、西南戦争の官軍での自らの勲章が剥奪されると思い、発作的に凶行に及んだというものであった。

大津には西南戦争の慰霊碑が有ったが、随行のロシア人が敬意を表していないと、津田が不満を募らせていたとも言われていた。

「津田三蔵は西南戦争の官軍だったのね」

その事実を蒼は新聞報道等で知ると、自分でも理解できない天啓のような閃きを感じた。

大津事件の惨状を目の前で目撃した時にも、明治政府に仕えている筈の巡査が凶行に及んだことで、同じ感情を抱いていた。

「白老の犯人も官軍だったかもしれない」

津田三蔵が巡査で西南戦争の官軍だったということから、自分達を襲った犯人も、官軍つまり五稜郭の戦いにおける明治政府軍ではないか、という連想が働いたのであった。

もともと白老の事件では、先入観で犯人が江戸幕府軍でないかと蒼は思い込んでいた。それほど幕府軍を示唆する状況証拠が多かったからである。

また、義父の支倉が蒼を献身的に育てたのは仙台藩士が犯人と疑っていて、その贖罪のつもりであったので、

蒼もその影響を受けていたのである。

証拠としては、特に犯行に使われた国包の存在が大きかった。蒼の実父サクサイヌの背骨に食い込んだ国包が犯人の遺留物と考えていた。

仙台藩の刀匠である国包は仙台藩つまり幕府軍の刀と思われていたからである。

鹿鳴館で見せた陸奥正春の剣術の振舞いで、陸奥を疑ったことから、犯人が仙台藩士かもしれないという思い込みも強くなったのであった。

また、アイヌ夫婦も同時に襲われたことも政府軍でなく幕府軍の犯行と思っていた理由の一つであった。

当時は敗走した幕府軍の武士が困窮して、アイヌの村を襲う例があった。しかし、勝利を得た政府軍の武士がアイヌ人夫婦を虐殺する理由を考えられなかった。

幼女である自分まで殺害しようとした記憶が、蒼に残っていた。犯人は蒼の碧眼を見て凶行に及んだのであった。犯人の動機が分かれば、解明に近づけるように感じていた。

両親と供に斬殺されたのは、仙台藩士であるから、他の状況証拠の説明ができれば、犯人が官軍であって不思議は無い、と考えるようになった。

ニコライ襲撃を目撃したことと犯人の津田が官軍ということを知り、蒼は白老の事件の犯人が江戸幕府軍でなく明治政府軍でないか、と疑うようになったのである。

六　ロマノフ王朝の血脈

大津事件から三年六ヶ月後の一八九四年十一月にニコライ皇太子はニコライ二世としてロシア皇帝に即位した。

当時は日清戦争の最中であり、翌九五年四月に日本は清国と遼東半島を占領する下関条約（日清講和条約）を結んだ。ニコライ二世が率いるロシアは、ドイツ・フランス共に三国干渉を行い、日本の遼東半島の占領を認めなかった。

一九〇四年に日露戦争が勃発した。日本が勝利したが、ニコライ二世は、ポーツマス条約（日露講和条約）で、領土の割譲や賠償金を認めなかった。

極東の小国の日本に敗北したことにより、ニコライ二世の皇帝としての威信は失われ、ロシア国民の不満が募った。

一九一四年には第一次世界大戦が始まった。大戦の終りに近づいた一九一七年にロシア革命が起こった。

革命軍により、ニコライ二世と皇后・皇太子一名・皇女四名の家族全員が銃殺された。三百年十八代続いたロマノフ王朝は滅亡し、十五世紀から続いたロシアの帝政は終焉した。ニコライ二世の血脈は完全に途絶えた筈であった。

しかし、ニコライ二世の血を継いだものが、日本に生きていたのである。



＜関連する人物＞

大黒屋光太夫(1751-1828)　ロシア漂流民
エカチェリーナ２世(1729-1796)　ロシア帝国女帝
榎本武揚(1836-1908)　蝦夷共和国総裁
支倉常長(1571-1622)　慶長遣欧使節団
玉蟲左太夫(1823-1869)　仙台藩佐幕派　遣米使節団
黒田清隆(1840-1900)　第２代内閣総理大臣
大山巌(1842-1916)　黒田内閣陸軍大臣
松方正義(1835-1924)　黒田内閣内務大臣
　第４・６代内閣総理大臣
西郷従道(1843-1902)　黒田内閣海軍大臣
海江田信義(1832-1906)　生麦事件の当事者
　貴族院議員
東郷平八郎(1848-1934)　海江田の娘婿
　日露戦争時の海軍大将
高橋是清(1854-1936)　第２０代内閣総理大臣
陸奥宗光(1844-1897)　日清戦争時の外務大臣
沖守固(1841-1912)　大津事件当時の滋賀県知事
津田三蔵(1855-1891)　大津事件の犯人
ニコライ２世(1868-1918)　ロシア帝国最後の皇帝
稲佐お栄（道永えい）(1860-1927)
　長崎ロシア旅館経営者
西郷隆盛(1828-1877)　明治維新の功労者
　西南戦争の盟主

(お詫び) 前号で陸奥宗光の外務大臣を日露戦争時としていましたが、日清戦争時ですので、お詫びして訂正します。

＜参考年表＞

1792年（寛政４年）　ラクスマン・大黒屋光太夫根室来航
1858年（安政３年）　仙台藩白老元陣屋建設
1862年９月（文久２年８月）　生麦事件
1867年11月（慶應３年12月）　大政奉還
1868年１月（慶應４年１月）　鳥羽・伏見の戦い
1868年７月（慶應４年７月）　仙台藩白老元陣屋撤収
1869年１月（明治元年12月）　蝦夷共和国成立
1869年５月（明治２年５月）　五稜郭の戦い（箱館戦争）
　旧幕府軍降伏
1877年２月（明治10年２月）　西南戦争
1881年７月（明治14年７月）　開拓使官有物払下事件
1883年７月（明治16年７月）　鹿鳴館完成
1888年４月（明治21年４月）　黒田清隆内閣成立
1889年２月（明治22年２月）　大日本帝国憲法
　（明治憲法）公布
1891年４月（明治24年４月）　ニコライ皇太子長崎来航
1891年５月（明治24年５月）　大津事件
1894年７月（明治27年７月）　日清戦争開戦
1894年11月（明治27年11月）　ニコライ二世皇帝即位
1895年４月（明治28年４月）　下関条約（日清講和条約）
1895年４月（明治28年４月）　三国干渉
1904年２月（明治37年２月）　日露戦争開戦
1905年１月（明治38年１月）　ロシア第一革命
　（血の日曜日事件）
1905年９月（明治38年９月）　ポーツマス条約
　（日露講和条約）
1914年６月（大正３年６月）　第一次世界大戦開戦
1917年３月（大正６年３月）　ロシア革命（二月革命）
　ロマノフ王朝滅亡

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十一）

松下魏三

十九　敗戦・窮乏のなかで

アメリカ軍は昭和十九年（一九四四年）の秋から日本に対し空襲を開始し、翌年の昭和二十年三月にはB29爆撃機の編隊が東京の江東地区を空襲し、次いで大阪も空襲を受け、約十三万戸の家屋が消失した。戦禍はさらに人口の多い順に全国の都市に拡大していった。

日本の各地では、このような大きな被害を受け、大阪帝国大学でも学生や教官など多くの人々は軍務についていたので、中之島にあった大学は電気もガスも使用できない状態で、建物は廃墟となり、大学では何も出来なくなったので、赤堀研究室は西宮の神戸女学院の料理教室を借りて細々と研究を続けていた。

そして昭和二十年の八月十五日には終戦となり、学生のなかには終戦の詔勅[1]を聞いてすすり泣く者もあり、赤堀博士はこの悲惨な状況を見て、無念の涙がこぼれて仕方がなかったと語っている。（赤堀四郎「わが青春」による）

戦争は終ったが敗戦のショックは大きく、赤堀博士は不本意ではあったが、軍の要請で戦時の研究をやっていたことが自身の心に大きな負担になっており、これから何時の日か占領軍に呼び出されて絶え難い屈辱を受けるようなことがあったら、これを飲んで自らの生命を断つことを考え研究用青化[2]ソーダを小さな瓶に詰め、そっとかばんに入れて持ち歩いていた。と言っている。（吉原賢二「化学者たちのセレンデピティー」による）

赤堀博士が戦時中に研究したのは“防御用”のガスマスクの素材を開発しようとしたもので、直接的に人を殺傷するようなものではなかった。しかし解釈のしかたによっては敵を殺し、味方の危害を防ぐためであるとも解釈されるので赤堀博士の不安は続いたのである。

このような落ち着かない日々を送っていたところ、連合国軍総司令部（GHQ）は戦争犯罪者あるいは右翼国粋主義者を学校から追放する目的で教員適格審査委員会をつくり、皮肉にもその委員長に赤堀博士がなっていた。

赤堀博士は以前から親しい友人であった水島三一郎博士の義兄弟であり、日頃から尊敬していた正田健次郎博士と相談し、同僚の教職員から一人でも戦争犯罪人が出れば自分自身も辞職しなければならないので、内心では一人でも戦犯を出してはいけないと固く心に決め、教授会だけで秘密会をつくり、皆に諮ったので、理学部からは一人も戦犯は出なかった。

正田健次郎博士は抽象代数学の世界的な権威として知られた学者で赤堀博士とは専門分野は異なっていたが、正確な判断力と優れた常識をもっている学者であり、いつも意気投合し合った先輩教授で、大阪大学の総長を二期勤められ、大学の発展に大きな功績を残された大学者である。

特に戦後の混乱は物心両面にわたり、戦時中よりも更に厳しい苦難の毎日であった。日本人の誰もが生きることに精一杯の努力をしている時、米軍が進駐してから二週間になると借りていた神戸女学院を視察することになったので、研究用の機材を中之島の大阪帝大に運搬することになった。

だが運搬する手段である貨物自動車は動けないので、近くの工場から牛車を借りて学生に手伝ってもらおうとしたが、食事も満足に食べていないので、大阪府庁に無理に頼んで「うどん」二十食分を提供してもらい、研究用の機材や荷物を大学に持ち帰ることができた。

当時は学生も教官も将来のために研究を続ける気力も体力もなく、郷里に帰って農業をやろうと真剣に考えていた。

昭和二十年の十月には満四十五歳の男盛りになっていた赤堀博士は将来に向って研究を続ける気力も衰えてきたので、郷里の千濱に隠とんしようかと考え、生きていくためには農業でもやろうかと真剣に考えた。

特に食糧不足が続き、明るい見通しもない都市生活を考え、幼少年時代に母とともに農作業を手伝った懐かしい思い出とともにふる里千濱の海や山さらには幼なじみなどの郷愁が重なり合って郷里に帰って百姓をやろうと考えたのであった。

敗戦後まもなく学生や陸海軍の技術将校になっていた卒業生が続々と復員してきて、大学の研究室に訪ねて来るようになった。

この人たちに会って話をしていると皆生きていくためには“ヤミ屋になろうとか、ふる里に帰って百姓をやろうか”と考えており、自らの才能を生かしていく自信を失っていた。

このような〝やけ気味〟で生きていく自信すら見られない若者をこのままにしておけば優秀な才能を生かすことは出来なくなる恐れがあると思い、その時彼等を励ました言葉は「化学を専攻した者は今後どんな社会になろうとも、やはり化学で身を立てるより外に道はあるまい。とにかく毎日研究室に出てきて細々でも一緒に研究をやろう。」と言って、理学部の地下の定員十人くらいの狭い研究室に三十人近い人たちを入れ、できるだけ研究費のかからない研究テーマを探し、走りまわって資材と研究費を集め、生化学の研究実験を始めた。

ところが地下にある赤堀研究室は湿気が多く、ガスは出ないし、電力も不十分という劣悪の条件で、この部屋に三十名余りの研究生が入っていたので極めて狭く感じるし、厳しい環境であった。

化学の実験にはガスを使用することが多いので、研究らしいものはほとんど出来ない苦難の毎日であった。

やがてガスが出るようになり、なんとか研究らしい実験が出来るようになったのは一九五〇年（昭和二十五年）頃からであった。

このような窮乏の毎日が続くなかで、研究の先頭に立って始めたのは弟子の成田耕造博士を中心とする絹のタンパク質の分析実験であった。研究用の材料は集めることが出来たが、絹のタンパク質は難物で他の学者も敬遠して、無茶な研究ではないかと思われていた。

当時は試験薬品をはじめ多くの物資が不足しているなかで進めた研究であったので、困難の連続であった。しかし、その困難を乗り越えて赤堀博士の指導のもとに成田博士らは日本の誇るタンパク質の化学構造や酵素タンパクの活性と構造等という大研究へと進んでいったのである。（つづく）

（註1）詔勅
天皇が意思を表示する文書。詔書と勅書と勅語。（広辞苑）

（註2）青化ソーダ
青酸加里のこと。シアン化カリウムの別称（広辞苑）

（註3）水島三一郎
化学者。東京生れ。東大教授。双極子モーメント・ラマン効果・赤外吸収などにより分子内回転を研究。文化勲章（一八九九―一九八三）（広辞苑）
回転異性体のゴーシュ形を発見し、構造化学に新境地を拓いた。

南方で誕生した丹沢は、プレートに乗り北上を続け、一〇〇〇万年前頃には、丹沢層群の下部はプレート運動により地下深所に引っ張り込まれ、高い温度と圧力を受け、西丹沢に見られる結晶片岩が形成されました。それに引き続いて石英閃緑岩質マグマが西丹沢に貫入しました。

この頃には、ほぼ現在の位置に近づき親潮の影響があったことが、北方系のカネハラニシキ化石の産出から知られています。

丹沢の衝突と相模川の誕生（五〇〇万年前頃）

六〇〇万年前頃、伊豆・小笠原弧の火山島だった丹沢は本州弧に近づき、関東山地との間の深い海に陸から運ばれた泥が堆積するようになりました。

こうして堆積したのが東丹沢の寺家泥岩、桂川沿いの島田泥岩などです。五〇〇万年前頃になると丹沢は本州弧の下に沈み込めずに、本州弧に衝突しました。

この時、関東山地の一部がはぎ取られ、丹沢東部に落合礫岩や石老山礫岩が、北部に岩殿山礫岩や桂川礫岩が堆積しました。この頃、相模川は誕生し、衝突境界を流れるようになりました。

以上お話したことからも明らかなように、現在の日本列島の大部分は、中国大陸・朝鮮半島と地続きで、ユーラシアプレートの一部でした。

そして大陸からの分離活動も複雑な動きをしています。

日本列島・朝鮮半島・中国大陸産、鉛鉱石の鉛同位体比の判断をするには先ずこの事を念頭に置く必要があります。

日本列島・朝鮮半島・中国大陸産鉛鉱石の鉛同位体比

一九八二・一九八七年、馬渕・平尾論文による日本列島産鉛鉱石八六点、朝鮮半島産鉛鉱石三十点、中国大陸産鉛鉱石三六点に加え、二〇〇一年『古代東アジア青銅の流通』二五一頁記載のロシア・バイカル湖付近の鉛鉱石資料による一点を入れて、日本列島・朝鮮半島・中国大陸産鉛鉱石の鉛同位体比指数の全体を概観できるように作成したのが第一図と第二図です。第一図では207/206と208/206を0.01の目盛で区切り、第二図では206/204を0.1、207/204を0.01で区切って、同じカテゴリーに入るものが多いところは、それぞれ大型の表示がしてあります。

この二つの図を見て考えられることは、日本列島産鉛鉱石の鉛同位体比が両方共、ほぼ中央に集中するのに対し、朝鮮半島産のそれは、第一図（A式図）では、向かって右側上方と左側下方に分布域があり、中国大陸産のものは、中央と向かって右側上方にきます。第二図（B式図）では、朝鮮半島産のものは向かって右側上方と、中央左側に集中し、中国大陸産の鉛鉱石の同位体比は中央から上方にかけてと、向かって左側下方に別れます。

そして中央から最も離れたところには、A式図では向かって左側下方に北海道・広尾、バイカル湖付近、雲南省・会沢、慶尚北道・第一蓮花と、日本列島・バイカル湖付近・中国大陸・朝鮮半島の、地理的に最も遠隔地同士のものが存在するのに対し、右上方には、中国大陸・山西省・西楡皮、遼寧省・柴河及び朝鮮半島・咸鏡北道・検徳と比較的近い地域のものが集まっています。

一方B式図の中央から最も離れたところは、A式図と右上方と左下方のものが入れ替わっています。

全体としては中央密集部分を除けば、概ね日本列島・朝鮮半島・中国大陸産の区別が出来る状態です。

次に問題となる中央密集部分で、日本列島・朝鮮半島・中国大陸産鉛鉱石の鉛同位体比指数が前述のカテゴリーで一致したものにつき個別に説明します。

該当した所は、第一図（A式図）で列島・半島・大陸の指数が一致した三ヵ所と列島・大陸の指数が一致した四ヵ所、及び半島と大陸の指数が一致した一ヵ所の合計八カ所、第二図（B式図）で列島・半島・大陸の指数が一致した二ヶ所、列島と大陸の指数の一致した一ヶ所、列島と半島の指数の一致した一ヶ所、及び半島と大陸の指数の一致した一ヵ所合計五ヵ所、全体で十三箇所となっております。

第一表参照（207/206—0.8400～0.8499、208/206—2.0900～2.0999）

この範囲には日本列島産十四点、朝鮮半島産二点、国国大陸産八点が存在する。206で207と208を割った指数が一致したものであるが、日本列島産のものと朝鮮半島産・中国大陸産とは204で206・207・208を割った数値に違いがある。すなわち朝鮮半島・慶尚北道・第二蓮花鉱山のものは206/204の数値が18.6台を示し、日本列島・秋田県・太良鉱山他の数値18.5以下とは異なり、中国大陸のものは207/204の数値が15.63以上で、日本列島産のそれが15.62以下であるのと違っている。従って判別は可能である。

第二表参照（207/206—0.8400～0.8499、208/206—2.1000～2.1099）

この範囲には日本産七点、朝鮮半島産二点、中国大陸産二点が存在する。ここでも206/204の数値において日本列島産のものが18.47以下であるのに対し、朝鮮半島産のそれは18.48以上、中国大陸産のものは18.65以上と違いがある。しかし日本列島・長崎・対州鉱山72と、

朝鮮半島・慶尚北道・将軍鉱山428とは全体の数値が近接しており、これについては第八表で説明する。

第三表（207/206－0.8500～0.8599、208/206－2.1100～2.1199）

この範囲には日本列島産九点、朝鮮半島産二点、中国大陸産六点が存在する。このなかで朝鮮半島・慶尚北道・漆谷鉱山425の指数は、日本列島・神岡鉱山・栃洞GJ－13と五つの指標が全て近接し鉛同位体比のみでは判別することができない。又日本列島・滋賀県・鮎河鉱山60の同位体比と中国大陸・浙江省・五部鉱山219のものも五つの指数全部が同様に近接している。

その他数値が近接している日本列島・神岡鉱山・栃洞46と、朝鮮半島・慶尚北道・漆谷鉱山425については、第十一表で説明する。

第四表（207/206－0.8800～0.8899、208/206－2.1800～2.1899）

この範囲には日本列島産一点と中国大陸産二点が存在する。一見相似すると思われる日本列島・秋田県・太良鉱山GJ－6と、中国大陸・陝西省・丹鳳鉱山とは、206/204・207/204・208/204の指数に若干の違いがある。

第五表（207/206－0.8600～0.8699、208/206－2.1200～2.1299）

この範囲には日本列島産二点と、中国大陸産一点が存在するが、両者の間で206/204・208/204の指数に若干の違いがある。

第六表（207/206－0.8400～0.8499、208/206－2.0800～2.0899）

この範囲には日本列島の北は北海道から南は島根・広島・山口までの鉛鉱石三十点が集中している。ここに入る中国大陸・江西省・漂塘鉱山222とはB式図関連の指標全てで違いがある。

第七表（207/206－0.8900～0.8999、208/206－2.1600～2.1699）

朝鮮半島・平安南道・三徳鉱山と、中国大陸・江蘇省・棲霞山鉱山であるが、両者の間にはB式図関連指数で若干の違いがある。

第八表（206/204－18.400～18.499、207/204－15.660～15.669）

このカテゴリーには日本列島・対馬の対州鉱山72、朝鮮半島・慶尚北道・将軍鉱山426と中国大陸・湖南省・水口山鉱山225が存在するが、何れも五つの指標全てが接近している。

第九表（206/204－18.400～18.499、207/204－15.670～15.679）

このカテゴリーには日本列島・対馬・対州鉱山GJ－19と、朝鮮半島・慶尚北道・将軍鉱山427及び中国大陸・浙江省の鉱山の三点がある。何れも五つの指数全てが近接しているが、なかでも朝鮮半島・慶尚北道・将軍鉱山427と、中国大陸・浙江省・五部鉱山219は、両者の五つの指数が完全に一致している。

第十表（206/204－18.400～18.499、207/204－15.630～15.639）

日本列島・石川県・倉谷鉱山GJ－11と中国大陸・雲南省・金頂鉱山235が入る。両者の五つの指数のうち207/204は極めて近いが208/204・208/206が若干異なっている。

第十一表（206/204－18.100～18.199、207/204－15.570～15.579）

この表は、第三表と関係がある。第三表はA式図からカテゴリーを決めたのに対し、この表はB式図から範囲を決めている。朝鮮半島・慶尚北道・漆谷鉱山425と日本列島・神岡鉱山・栃洞46の五つの指数が極めて近いことがわかる。

第十二表（206/204－18.600～18.699、207/204－15.710～15.719）

この表は朝鮮半島・慶尚北道・第二蓮花鉱山420・421の指数が、中国大陸・湖南省・宝山鉱山228と五つの指数全てが、極めて近いことをあらわしている。

第十三表（207/206－0.8500～0.8599、208/206－2.1000～2.1099）

日本列島の九州を含む五点と中国大陸・山東省と広西自治区の鉱山の鉛鉱石が入る。大分県・尾平鉱山GJ－20と山東省・福山鉱山出土の鉛鉱石の鉛同位体比は五つの指数が何れも近接している。

結び

以上日本列島・朝鮮半島・中国大陸産鉛鉱石の鉛同位体比を分析した結果から考察したことは、三者共それぞれに特色があり、出土青銅製品の鉛同位体比が出た場合、鉱石が供給された鉱山を特定することは概ね可能ですが、なかにはそれだけでは全く判別不可能の場合も存在するということです。

したがって青銅製品の鉛同位対比を分析し、それがどの地域の鉱山の鉱石を使用しているかという事の研究を行うためには、鉛同位体比の分析に加えて、製品出土地点と鉱山所在地の該当する時期の土器型式・墳墓形態そ

の他の文化的交流の有無とか、人の流れ、物の流れ、それぞれの地域におけるそれぞれの社会の動き等、実情に踏み込んだ研究が必要となります。

具体的に言えば、中国大陸・朝鮮半島・日本列島において、戦乱の最中、長距離の貴重な物資の交易が可能であったかどうか、又それを行いうる有力者が当時の半島・列島に存在したのか、中国大陸においては旺盛な青銅製品の需要を満たすだけの鉱山開発が行われていたのかどうか、当時青銅製品につき先進国であった中国と、後進国であった朝鮮半島・日本列島間の交流はどのような形で行われていたのか、又、中国大陸の戦乱を逃れて、優秀な青銅工人を含む集団の半島・列島への移住はなかったかというようなことです。

次号では、確実に中国大陸・朝鮮半島で出土した青銅製品、及び日本列島で出土した、銅剣・銅鐸の鉛同位体比分析を通じて浮かび上がってくるものにより、日本列島の銅鉱山開発と銅製錬開始に付き論じてみることとします。

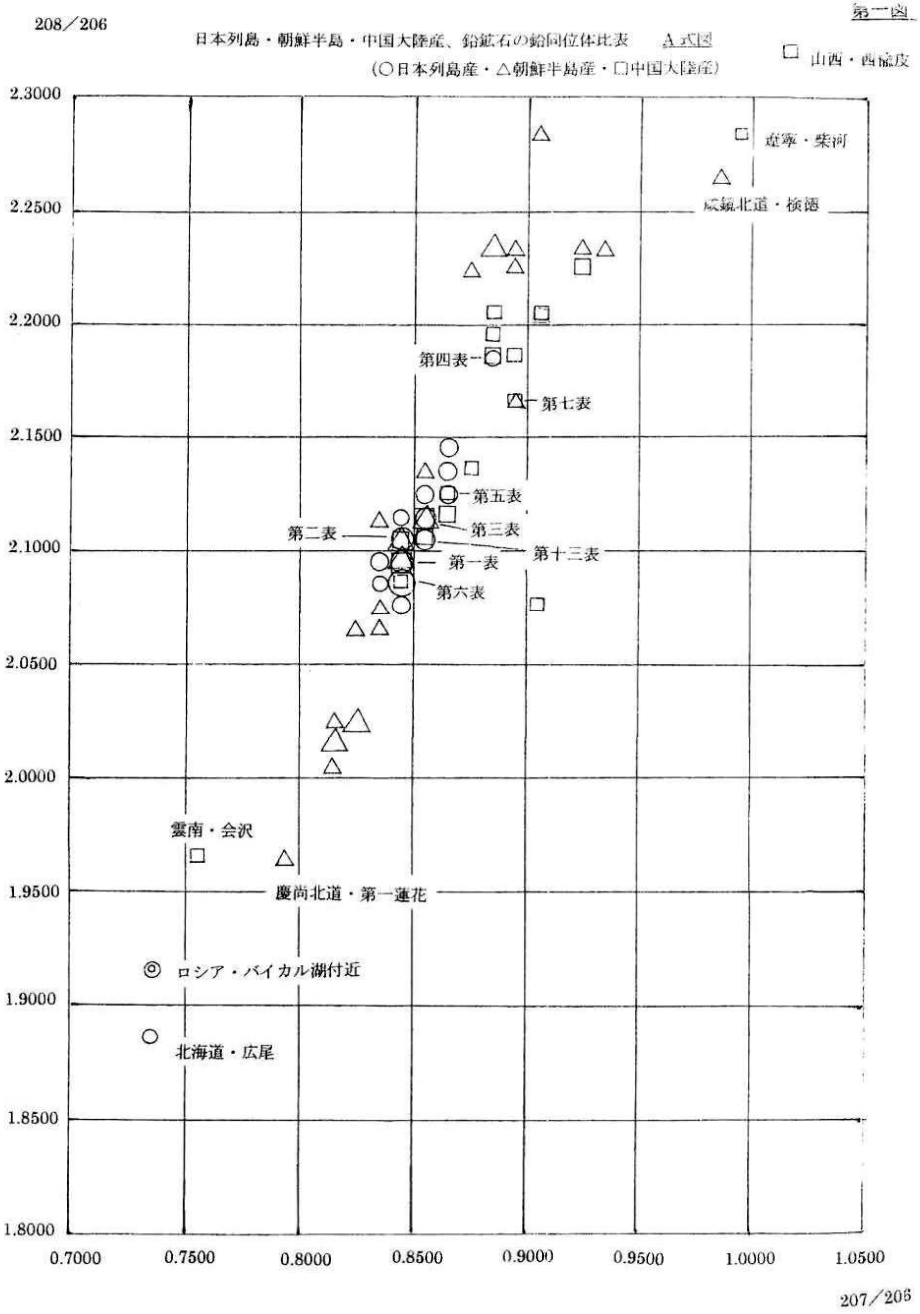
参考文献

高浜秀・早川泰弘・平尾良光「中国北方系民族の青銅器」『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、二〇〇一年。

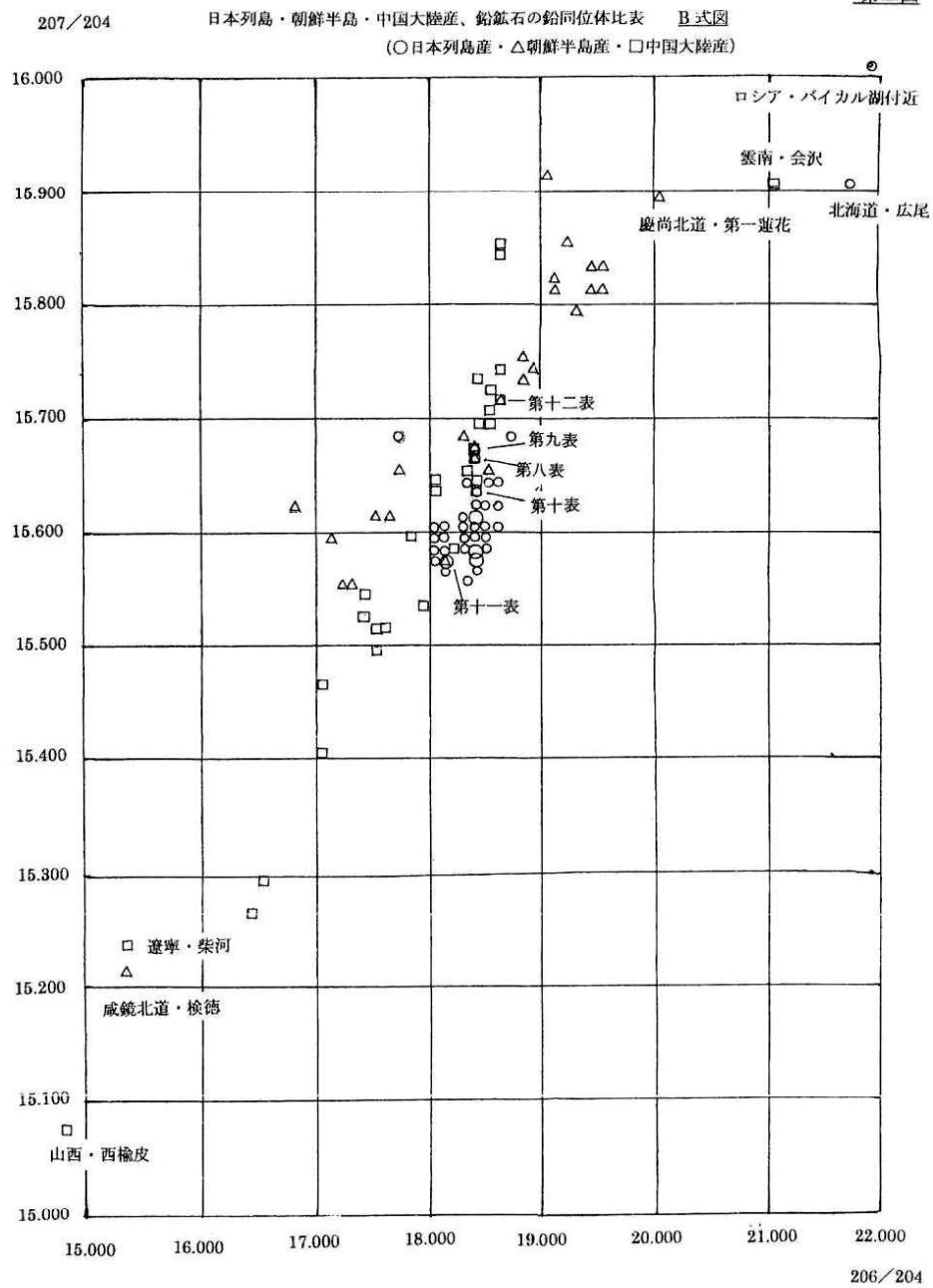
馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』三七〇東京国立博物館、一九八二年一月。

馬渕久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』七三―二日本考古学会、一九八七年十二月。

第一図



第二図



第一表　日本列島・朝鮮半島・中国大陸

207/206—0.8400～0.8499・208/206—2.0900～2.0999

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
１９	太良・秋田	18.442	15.596	38.551	0.8457	2.0904
２５	鉛山・秋田	18.505	15.620	38.729	0.8441	2.0929
２８	小山・山形	18.324	15.557	38.376	0.8490	2.0943
３４	北沢・宮城	18.409	15.581	38.490	0.8464	2.0908
３５	葡萄・新潟	18.435	15.587	38.584	0.8455	2.0930
３６	南越・新潟	18.464	15.589	38.608	0.8443	2.0910
３７	長沼・福島	18.474	15.623	38.770	0.8457	2.0986
４０	秩父・埼玉	18.419	15.584	38.549	0.8461	2.0929
４１	三富・山梨	18.460	15.593	38.598	0.8447	2.0909
５９	津具・愛知	18.472	15.607	38.680	0.8449	2.0940
６９	桜郷・山口	18.440	15.613	38.553	0.8467	2.0907
GJ—９	長沼・福島	18.486	15.628	38.789	0.8454	2.0983
GJ—１０	葡萄・新潟	18.443	15.605	38.631	0.8461	2.0946
GJ—１５	津具・愛知	18.479	15.618	38.710	0.8452	2.0948
４２０	第二蓮花・慶尚北道	18.667	15.714	39.085	0.8418	2.0938
４２１	第二蓮花・慶尚北道	18.658	15.710	39.049	0.8420	2.0929
２２３	水口山・湖南	18.412	15.643	38.645	0.8496	2.0989
２２４	水口山・湖南	18.504	15.693	38.784	0.8481	2.0960
２２５	水口山・湖南	18.493	15.669	38.719	0.8473	2.0937
２２６	東坡・湖南	18.567	15.704	38.876	0.8458	2.0938
２２７	黄沙坪・湖南	18.540	15.705	38.906	0.8471	2.0985
２２８	宝山・湖南	18.614	15.714	38.987	0.8442	2.0945
２２９	瑪瑙山・湖南	18.571	15.724	38.943	0.8467	2.0970
２３５	金頂・雲南	18.416	15.637	38.639	0.8491	2.0981

第二表　日本列島・朝鮮半島・中国大陸

207/206—0.8400～0.8499・208/206—2.1000～2.1099

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
42	倉谷・石川	18.456	15.621	38.885	0.8464	2.1069
61	生野・兵庫	18.370	15.613	38.711	0.8499	2.1073
62	生野・兵庫	18.387	15.612	38.690	0.8491	2.1042
63	生野・兵庫	18.377	15.604	38.678	0.8491	2.1047
72	対州・長崎	18.476	15.666	38.983	0.8479	2.1099
GJ—11	倉谷・石川	18.465	15.634	38.913	0.8467	2.1074
GJ—16	生野・兵庫	18.355	15.594	38.648	0.8496	2.1056
426	将軍・慶尚北道	18.485	15.666	38.855	0.8475	2.1020
428	将軍・慶尚北道	18.506	15.654	38.863	0.8459	2.1000
232	泗頂・広西	18.657	15.847	39.294	0.8494	2.1061
234	泗頂・広西	18.654	15.852	39.287	0.8493	2.1061

第三表　日本列島・朝鮮半島・中国大陸

207/206—0.8500～08599・208/206—2.1100～2.1199

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
44	神岡・栃洞	18.179	15.578	38.496	0.8569	2.1176
45	神岡・栃洞	18.185	15.585	38.523	0.8570	2.1184
46	神岡・栃洞	18.183	15.579	38.512	0.8568	2.1180
47	神岡・栃洞	18.181	15.579	38.507	0.8569	2.1180
48	神岡・栃洞	18.180	15.580	38.507	0.8570	2.1181
49	神岡・栃洞	18.177	15.574	38.499	0.8568	2.1180
50	神岡・栃洞	18.182	15.580	38.509	0.8569	2.1180
60	鮎河・滋賀	18.392	15.642	38.807	0.8505	2.1100
GJ－13	神岡・栃洞	18.161	15.562	38.445	0.8569	2.1169
425	漆谷・慶尚北道	18.183	15.576	38.455	0.8566	2.1149
427	将軍・	18.415	15.677	38.870	0.8513	2.1108

	慶尚北道					
218	五部・浙江	18.388	15.659	38.817	0.8516	2.1110
219	五部・浙江	18.408	15.671	38.876	0.8513	2.1119
220	黄岩五部・浙江	18.407	15.675	38.874	0.8516	2.1119
221	黄岩五部・浙江	18.410	15.678	38.884	0.8516	2.1121
230	菜園子・貴州	18.408	15.733	38.846	0.8547	2.1103
231	凡口・広東	18.403	15.698	38.961	0.8530	2.1171
GJ13 と 425 の差額		▲0.022	▲0.014	▲0.010	0.0003	0.0020
60 と 219 の差額		▲0.016	▲0.029	▲0.069	▲0.0008	▲0.0019

第四表

日本列島・中国大陸

207/206—0.8800～0.8899・208/206—2.1800～2.1899

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
GJ—6	太良・秋田	17.711	15.687	38.629	0.8857	2.1811
209	丹鳳・陝西	17.622	15.513	38.432	0.8803	2.1809
216	銅官山・安徽	17.579	15.492	38.428	0.8813	2.1860
GJ6 と 209 の差額		0.089	0.174	0.197	0.0054	0.0002

第五表

日本列島・中国大陸

207/206—0.8600～0.8699・208/206—2.1200～2.1299

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
52	神岡・円山	18.102	15.571	38.508	0.8602	2.1273
GJ—14	神岡・円山	18.146	15.609	38.644	0.8602	2.1296
215	桐柏・河南	17.934	15.534	38.160	0.8662	2.1278

第六表

日本列島・中国大陸

207/206—0.8400～0.8499・208/206—2.0800～2.0899

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
1	余市・北海道	18.435	15.574	38.466	0.8448	2.0866
2	豊羽・北海道	18.460	15.573	38.520	0.8436	2.0867
3	豊羽・北海道	18.477	15.571	38.501	0.8427	2.0837
4	稲倉石・北海道	18.452	15.585	38.517	0.8446	2.0874
5	稲倉石・北海道	18.425	15.573	38.470	0.8452	2.0879
6	寿都・北海道	18.438	15.576	38.499	0.8448	2.0880
7	大江・北海道	18.425	15.571	38.462	0.8451	2.0875
8	大江・北海道	18.421	15.564	38.441	0.8449	2.0868
9	上国・北海道	18.482	15.578	38.555	0.8429	2.0861
10	舟打・青森	18.485	15.603	38.556	0.8441	2.0858
11	大鰐・青森	18.486	15.597	38.571	0.8437	2.0865
12	尾太・青森	18.446	15.570	38.486	0.8441	2.0864
14	尾去沢・秋田	18.478	15.586	38.556	0.8435	2.0866
15	尾去沢・秋田	18.473	15.582	38.544	0.8435	2.0865
16	尾去沢・秋田	18.467	15.582	38.539	0.8438	2.0869
18	小坂・秋田	18.464	15.585	38.577	0.8441	2.0893
20	太良・秋田	18.485	15.579	38.545	0.8428	2.0852
21	釈迦内・	18.523	15.595	38.613	0.8419	2.0846

	秋田					
22	深沢・秋田	18.563	15.608	38.663	0.8408	2.0828
23	不老倉・秋田	18.532	15.598	38.643	0.8417	2.0852
24	松峰・秋田	18.501	15.602	38.625	0.8433	2.0877
26	古遠部・秋田	18.583	15.643	38.809	0.8418	2.0884
27	八谷・山形	18.430	15.572	38.497	0.8449	2.0888
38	黒沢・福島	18.459	15.576	38.524	0.8438	2.0870
39	黒沢・福島	18.457	15.565	38.487	0.8433	2.0852
66	都茂・島根	18.482	15.614	38.592	0.8448	2.0881
67	都茂・島根	18.493	15.615	38.595	0.8444	2.0870
68	西城・広島	18.443	15.577	38.505	0.8446	2.0878
GJ—7	細倉・宮城	18.610	15.649	38.716	0.8409	2.0804
GJ—18	桜郷・山口	18.443	15.612	38.496	0.8465	2.0873
222	漂塘・江西	18.694	15.742	39.059	0.8421	2.0894

第七表　朝鮮半島・中国大陸

207/206—0.8900～0.8999・208/206—2.1600～2.1699

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
403	三徳・平安南道	17.516	15.617	37.899	0.8916	2.1637
217	棲霞山・江蘇	17.440	15.527	37.822	0.8903	2.1687
403と217の差額		0.076	0.090	0.077	0.0013	▲0.0050

第八表　日本列島・朝鮮半島・中国大陸

206/204－18.400～18.499・207/204－15.660～15.669

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
72	対州・長崎	18.476	15.666	38.983	0.8479	2.1099
426	将軍・慶尚北道	18.485	15.666	38.855	0.8475	2.1020

235 の差額						

第十一表　日本列島・朝鮮半島

206/204—18.100～18.199・207/204－15.570～15.579

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
４４	神岡・栃洞	18.179	15.578	38.496	0.8569	2.1176
４６	神岡・栃洞	18.183	15.579	38.512	0.8568	2.1180
４７	神岡・栃洞	18.181	15.579	38.507	0.8569	2.1180
４９	神岡・栃洞	18.177	15.574	38.499	0.8568	2.1180
５２	神岡・円山	18.102	15.571	38.508	0.8602	2.1273
４２５	漆谷・慶尚北道	18.183	15.576	38.455	0.8566	2.1149
４６と 425 の差額		0	0.003	0.057	0.0002	0.0031

第十二表　朝鮮半島・中国大陸

206/204—18.600～18.699・207/204—15.710～15.719

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
４２０	第二蓮花・慶尚北道	18.667	15.714	39.085	0.8418	2.0938
４２１	第二蓮花・慶尚北道	18.658	15.710	39.049	0.8420	2.0929
２２８	宝山・湖南	18.614	15.714	38.987	0.8442	2.0945
４２０と 228 の差額		0.053	0	0.098	▲0.0024	▲0.0007

第十三表　日本列島・中国大陸

207/206—0.8500～0.8599・208/206—2.1000～2.1099

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
６４	明延・兵庫	18.355	15.602	38.667	0.8500	2.1066
６５	明延・兵庫	18.361	15.607	38.681	0.8500	2.1067
７０	尾平・大分	18.344	15.607	38.634	0.8508	2.1061

２２５	水口山・湖南	18.493	15.669	38.719	0.8473	2.0937
72 と 426 の差額		▲0.009	0	0.128	0.0004	0.0079
72 と 225 の差額		▲0.017	▲0.003	0.264	0.0006	0.0162
426 と 225 の差額		▲0.008	▲0.003	0.136	0.0002	0.0083

第九表　日本列島・朝鮮半島・中国大陸

206/204—18.400～18.499・207/204—15.670～15.679

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
GJ—１９	対州・長崎	18.477	15.670	39.033	0.8481	2.1125
４２７	将軍・慶尚北道	18.415	15.677	38.870	0.8513	2.1108
２１９	五部・浙江	18.408	15.671	38.876	0.8513	2.1119
２２０	黄岩五部・浙江	18.407	15.675	38.874	0.8516	2.1119
２２１	黄岩五部・浙江	18.410	15.678	38.884	0.8516	2.1121
GJ １９と 427 の差額		0.062	▲0.007	0.163	▲0.0032	0.0017
GJ１９と 219 の差額		0.069	▲0.001	0.157	▲0.0032	0.0006
４２７と 219 の差額		0.007	0.006	▲0.006	0	▲0.0011

第十表　日本列島・中国大陸

206/204—18.400～18.499・207/204—15.630～15.639

NO	鉱山名・地名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
GJ—１１	倉谷・石川	18.465	15.634	38.913	0.8467	2.1074
２３５	金頂・雲南	18.416	15.637	38.639	0.8491	2.0981
GJ１１と		0.049	▲0.003	0.274	▲0.0024	0.0093

71	土呂久・宮崎	18.348	15.599	38.615	0.8502	2.1046
GJ—20	尾平・大分	18.317	15.580	38.557	0.8506	2.1050
214	福山・山東	18.281	15.586	38.540	0.8526	2.1082
233	泗頂・広西	18.634	15.841	39.189	0.8501	2.1031
GJ-20と214の差額		0.036	▲0.006	0.017	▲0.0020	▲0.0032

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇—〇—六四五九二一

加入者名　まんじ

鏡（その6）

中山喬央（たかひろ）

遠矢の巻

園内は、そのとき何万株もの様々な樹木が青を含んで緑を吐き、花の群れが四方に輝き、紫を散らしながら紅を翻していた。

激石（泉水の流れを止めて音を立てて流れるように配置した岩石）と鳴泉、築山と石橋がある。夏・冬にかかわらず愛くるしい鶯が錦の枝に騒ぎ、時の流れを無視して見事な鮎（川魚の一種、古来鯉と共に賞美された『本草綱目四四』）が銀の池に踊り、あでやかな花木が生い茂り、ひやりとした風が吹きそよぐ中、白鳥と鴨が分れ飛び、芙蓉が入り混じって咲いていた。

大きな竹、小さな竹の夥しさは、渭南の千畝（漢代、渭川一帯は竹が多く、この地で千畝を所有していれば千戸侯に等しいといわれた）を圧倒し、花の蕾、花の咲き誇る賑わいは、河陽一県（晋の潘岳は、河陽県の令をしていた時、県の各地に桃を植えさせたという）をしのぐ盛観で、青々とした岸の柳のしなやかな枝は、武昌の柳（晋の陶侃は、武昌の道路にあまねく楊柳を植えさせたという『類聚』八九）を払いのけ、盛んに繁る山楊の箭幹（やがら）は董沢の蒲（春秋時代、董沢の蒲は、箭幹として品質が高く名高かった）より多かった。

わたしは、そこで花を題材にして詩を作った。

風吹遍樹紫　風に吹かれて樹はあまねく紫になり
日照満池丹　日が輝いて池一面赤くなった
若為交暫折　どうしたら少しの間折らせてくれる
　だろうか
擎就掌中看　手に受け取って眺めたいものだ

十娘が歌った

映水倶知笑　水に映ったので笑みを知っておりました
成蹊竟不言　小道ができるほど通ったけど黙っておりました
即今無自在　だけど、今では自由ではなくなって
高下任渠攀　高い枝でも下の枝でも人にひかれるままなのです

わたしは、すぐさま立ち上がって礼を述べた。

十娘が一首作った

梅蹊命道士　梅蹊は道士を呼び寄せて
桃澗佇神仙　桃澗は仙人を待ち望んでいる
旧魚成大劔　年を経た魚は大きな剣になり
新亀類小銭　生まれたばかりの亀は、小銭に似ている
水湄唯見柳　水際には柳ばかりが見え
池曲且生蓮　池の曲には蓮が生えている
欲知賞心処　面白い処が知りたいのなら
桃花落眼前　桃の花が目の前に落ちている

桃澗は、人が仙人に会うところだという伝説があります。

漢の明帝の永平五年、剡県の人、劉農と阮肇の二人が天台山に登り、穀皮を取りましたが、道に迷ってしまいました。帰れなくなって十三日目、餓死寸前のところで、はるか山の上に実がたわわになっている桃の樹を見つけました。絶壁や深い谷川のため道が無く、藤や蔦にすがって登り、桃の実をとって食べ。下山して杯で水を汲みますと、蕪菁（かぶら）の葉が流れてきました。さらに胡麻飯が一杯流れてきました。そこで人家が近くにあると察して、二人は川を渡り、山を越すと、二人の絶世の美女に呼び止められました。二人は美女の家で歓待され、酒宴が続き、ついに半年も逗留しましたが。帰りたいといって故郷にもどると、子孫はすでに七代目だったということです（六朝、宋の劉義慶撰『幽明録』魯迅輯校『古小説鉤沈』）。

その時、花園に突然一羽、雉が現れた、私が弓と矢を持ってこさせて射ると、弦の響きに応じて雉が倒れた。五嫂が笑いながら言った。

「張さまの詩才は、曹植（魏の詩人、父は魏の曹操）のように天成でいらっしゃる。いま武芸を見ましたが、これはこれで子南（春秋時代、楚の穆公の孫、公孫楚のこと。鄭の大夫の徐吾犯の妹が美人で、すでに公孫楚との間に婚約が成立していた。ところが公孫黒が無理に求婚してきたので、徐吾犯は心配して、鄭の宰相、子産に相談した。子産は本人にその相手を選ばせることをすすめた。徐吾犯がこのことを二人の求婚者に告げたところ、当日、公孫黒は華やかに着飾って入ってきて、支度の品物を並べて立ち去った。公孫楚は武装して入ってきて、左右に弓を射て、門外の車にとびのって出て行った。徐吾犯の妹は室内からこれを見ていて、子晳（公孫黒）はなるほど綺麗だが、子南は丈夫の気性があるといって公孫楚を夫として選んだという『左伝』昭公元年）に劣らない武夫ですわね。いま奥様とご一緒になれば、世の中にまたとないご両人だわ」

十娘は、雉を射るのを見たので、そのまま一首作った。

大夫巡麦隴　殿御が麦畑をみてまわり
処子習桑間　娘が桑のなかを飛び回る
若非由一箭　弓の心得がなかったら
誰能為解顔　なんで見られよう、その笑顔

わたしはこれに答えて

心緒恰相当　気持はぴったりと合っているのです
誰能護短長　だれもお節介はできません
一床無両好　同じ床に二人が寝るのです
半醜亦何妨　片方が醜くたって差し支えないでしょうに

五嫂が言った。

「張様、遠矢は、どうなの？」

遠矢は唐代、科挙の一つである武挙の種目の一つでした。則天武后の長安二年（七〇二）春正月、武挙を設けました。

なお『続日本紀』三、慶雲三年（七〇六）春正月条に、大射禄法を制定した事が見え、内院、中院、外院に命中した場合の褒美の違いが出ています。唐代の制度の導入が、いかに早かったか、推測できます。

わたしは

「どうにか失態なく、やるだけです」

と答えて、矢を射た。三発矢を射てどの矢も等しく的に当ったので人々はお見事と誉めたてた。

その時、日が西の淵に落ち、月は東の嶺にさしかかった。五嫂がいった。

「いましがたのおかしなやりとり、どれも結構でしたけれども、日が暮れましたので、ひとまず室内に戻りましょう。張様は、奥様と一緒におやすみください」

「せっかくお会いしたんですもの、お酒をもっと飲みたいわ。部屋の中は狭苦しいし、急ぐ必要はないわよ」

十娘がそう言ったけれども、そのまま五嫂は少府様を案内して十娘の寝間へ行った。

十娘寝間の巻

屏風が十二双めぐらされ、画障が四、五張置いてあり、両端に彩りの有る帷子をしつらえ、四隅に香袋が下がっていた。檳榔（南方に産する木の名。その果実が食用と薬用に供された）と豆蔻子（草果ともいう。薬用にされる『本草綱目』十四）、蘇合（蘇合香）と緑沈（緑の濃い物を指し、漆で塗ったような黒い沈香という意味であろう）の香りである。あざやかな紋様を織り出した枕を置き蓆や、眼もあやな色とりどりの衣裳をしまう長持があった。

後について寝室に入ると、あちこちに綾織物や薄物の衣裳が輝いていた。鏡台には蓮花の飾りがあり、金の履物には翡翠が細工してあった。帷の入口には、銀製の虻の装飾が施され、寝台の端には玉の獅子が彫られていた。

いつも寄り添っていたという二種の獣を織り込んだ毛氈が十重の敷物に、鴛鴦の図柄が八重の掛物に織り込まれた襖がそれぞれ置いてあり、数々の上下の衣装は、世にも珍しいほど艶麗であった。見目形は生まれながら備わるものだが、十娘が本当に色彩感覚が豊かなことを教えてくれる。

身体の線を美しく見せる為、赤い衣の先がすぼまって腕をいくらか締め付け、緑の胸当てが乱れて腰にまつわり、細い腰を際立たせるように仕立てられている。絹の布で払うと、焚きしめられた合わせ香がただよった。天成の美しさに装いと着こなしが加わり、わざととりすまして金の簪を直し、魅力に満ちた手で、刺繍の褥を整えていた。

この十娘を前にすれば、あの梁家の妻（後漢の順帝、恒帝の時の大将軍梁翼の妻を孫壽と言い、美貌で妖艶、化粧の方法に凝り、髪型をはじめ、当時の流行の先端をいったという『後漢書』六四「梁統伝」）が髪型の新趣向を誉められたというのも、張京兆の妻（前漢の宣帝の時、京兆の尹を勤めた張敞は、その妻のため眉を書いてやり、長安の人々は、それが魅力的だと噂した『漢書』七六「張敞伝」）が、眉の書き方に工夫を凝らしたというのも色褪せてしまうだろう。

十娘が後ろに下がり、ためらって、中々来なかったので、私は五嫂に質問した。

「十娘はどこへ行ったのです？誰かが邪魔をしているのでしょう」

五嫂が言った。

「女は自分から押しかけるのを恥ずかしがるものです。わざと貴方に呼ばれるのを待っているのですよ」

そう言い終わらぬうちに、十娘が来た。

私は訊ねた。

「朝から明るい気持で、香りのするところで花をさがしていたのに、突然、狂風にあって、蓮のなかで連れ合いを見失いました。貴女はどこへふわふわと行っていたんですか」

十娘は振り向いて笑顔を見せながら、

「星が織女をひきとめようと、そのまま人間の世界に居りましたけれど、月が嫦娥（月に棲むという美人の名。太古の英雄羿の妻で、西王母の不死の薬を盗んで飲み、月の仙女になったという）を待っておりますから、少しの間、天上に帰ったの。少府様、そうしつこくとがめないでくださいな」

こうして二人は向かいあって坐り、互いに手も出しかねるまま、夜がふけるに連れて感情が高ぶり、無我夢中になったのである。

わたしはやっと一首、口ずさんだ。

千看千意密　見れば見るほどこまやかに
一見一憐深　深まり行く恋心
但当把手子　御手をとらしてたもうなら
寸斬亦甘心　切り刻まれても悔いは無く

十娘は、無表情で引き下がろうとした。

五嫂が、歌を作った。

他家解事在　あの人はわかっているので
未肯輒相瞋　すぐににらんだりはしないわ
徑須剛捉著　いっそほんとに捉まえてしまうのよ
遮莫造精神　思い切って元気をおだしなさいね

わたしは、その時、手の先を握っていたが、我慢できなくなった。又一首、

千思千腸熱　思えば思うほど、はらわたが熱くなり
一念一心焦　ひたすら恋焦がれる
若為求守得　どうすれば、お気に召すのやら
暫借可憐腰　可愛い腰を借りたいが

だが、十娘はこれもいやがった。わたしは手をつかんで引き寄せ、二人は力比べをした。五嫂は、そのさまを口ずさんだ。

巧将衣障口　上手に衣で口をさえぎり
能用被遮身　しなれた格好で、上掛けで身体を隠している
定知心肯在　わかっているのよ、心ではいいわと思っているのに
方便強激人　わざと人にさからっているのね

十娘は、思わず声を出して笑い出し、身体をくねらせて、私のふところに入った。そのとき、腹のうちはくつがえり、心の中はわきたって乱れた。そこで又、

腰支一遇勒　腰は首尾よく抱きしめて
心中百処傷　心がうきうきとはずむ
若為得口子　どうにかして口が得られたなら
余事不承望　ほかのことは希望しません

十娘は目でにらみながら、口ずさんだ。

手子従君把　手はとられたままなのよ
腰支亦任迴　腰も引き寄せられるままになっているのに
人家不中物　人の堪えられないものが
漸漸逼他来　だんだん迫ってくるのね

そして十娘は、

「つっぱったけれど、どうしたってあの人に口を奪わるわ」

と言った。

十娘の口はかぐわしい香りがして、鼻にしみとうるようだったし、舌は良い匂いがして、頬がつきぬけそうであった。

五嫂が一首作った。

自隠風流到　自分がとても粋だと思って
人前法用多　人の前では勿体をつけましたね
計時応拒得　当然、はねつけた筈ですのに
佯作不禁他　そのふりだけでは、あの人をおさえられません

十娘が言った。

「昨日は、あの人をからかったけど、今朝は、あの人にすっかりからかわれるままだったわ」

わたしは立ち上がって、五嫂に相談した。

「十娘は心になにか考えており、わたしもお話したいことがあるのですが、自分では言い出しかねるので、五嫂さんに取り計らっていただきたいのです」

五嫂、

「おっしゃって下さい。気兼ねなさる必要はないのよ」

わたしは、そこで次の詩を作った。

薬草倶嘗遍　薬草は残らず試してみたが
並悉不相宜　どれも適当でなかった
惟須一箇物　ただ一つ入用の物が有る
不道亦応知　いわなくても気がついている筈

十娘がそれに答えて

素手曾経捉　手は握られてしまったし
繊腰又被将　腰も引き寄せられている
即今輸口子　今は口まで奪われたんだもの
余事可平章　ほかのこともお好きなようにして

わたしは丁寧にお辞儀して答えた。

「いましがたは疑心暗鬼から何か失錯をしたのではないかと存じます。奥様が旅の身を不憫と思われて、お恵みくださるなら、まことに白骨に再び肉がつき、枯木に花が咲くと申すもの。地に付して叩頭して、心からお詫び致します」

五嫂は立ち上がって礼を述べた。

「わたしはこう聞いておりますわ。糸は針を頼りに通るが、針にたよらず縫い合わせる。女は仲人を頼りに嫁ぐが、仲人に頼らず身をまかすと。わたしは、これまで一心にお世話をしてきましたが、これからのことは口出しは差し控えます。奥様、安らかにお心をしずめてね。わたしは自分の寝室に行きます」

花容満面（あでやかな顔が眼一杯にひろがる）の巻

その時、夜はすっかりふけて、二人の情意はあせりながら、こまやかであった。魚油の灯が四方に輝き、蝋燭が両側で明るかった。

十娘は、直ちに桂心を呼んだ。そして芍薬も呼んで、少府様のため、皮履を脱がせ、袍衣をたたみ、頭巾を取って置き、腰帯をかけさせた。それから自分は、綾の上掛けを支度し、薄物の裙をとき、紅の衣を脱がせ、緑の胸当てをとった。

あでやかな顔が眼一杯にひろがり、かぐわしい匂いが鼻を裂くばかり、心は上の空で制する人も無く、愛情がこみあげてとめどがなかった。紅い褌に手を差し入れ、緑の上掛けに脚を交えた。二つの唇を口にあてたまま、片腕で頭を支え、片腕で乳房を掴み、内腿のあたりをなでさすった。口を吸うたびに快感が走り、抱きしめる度に嬉しさがこみ上げた。鼻がつんと痺れ、胸がつまった。しばらくして、眼がちらつき、耳がほてり、血管がふくらみ、筋がゆるんだ。私はこうしてはじめて十娘がただ一人のどんなに大切な人であるかを感じ、かたじけなさ、もったいなさを知った。わずかの間に数回もあい接したのである。

ところが、はからずも憎たらしい鵲のやつが夜半に人を驚かし、ならずものの鶏めが、空が明けていないのに暁の時を作った。

傍線部分の句の古訓は、日本文学では、古来、朗詠に

取り入れられて周知の文句になっています。藤原基俊（一〇五六～一一四二）の『新撰朗詠集』下「雑」の「恋」に

生憎病鵲半夜驚人
薄媚狂鶏三更唱暁

とあります。

そのまま、衣を羽織って向かい合って坐り、涙を流してお互い顔を見つめあった。

わたしは涙をぬぐって言った。

「口惜しいことながら、別れるのはやさしいが、会うのは難しく、去る者、留まる者はかけ離れてしまう。だが公の使命は期日が限られていて、そう逗留してもいられない。そう思うたびに骨の髄まで痛みを感じます」

十娘は、

「わたしは少府様とはこれまでお目にかかったことが無く、偶然お会いしてお付き合いしたばかりで、存分楽しい思いもしないうちに、突然お別れすることになって、悲しみにくれております。人の出会いと別れはどうにもならないものなのですね」

と言って、次の詩を作った。

別時終是別　別れる時は別れるにしても
春心不値春　春の心は春にそぐわなくなりましょう
羞見孤鸞影　一羽飛ぶ鸞鳥（神鳥の名。鳳凰の一種）の姿を見るのも恥ずかしく
悲看一騎塵　ただ一騎のたてる塵を眺めるのが悲しい
翠柳開眉色　翠の柳の開いた眉の色が鮮やかで
紅桃乱臉新　紅の桃の乱れた顔が真新しくても
此時君不在　そのとき貴方はいないもの
嬌鶯弄殺人　甘える鶯になぶられてせつないわ

五嫂が一首作った。

此時経一去　この時去ってしまうと
誰知隔幾年　何年別れてしまうのか
双鳧傷別緒　二羽の鳧が別れの緒に悲しみ
独鶴惨離絃　一羽の鶴が離れる絃に心を痛ましめる
怨起移酲後　酔いが醒めてから恨みが起り
愁生落酔前　酔いしれる前に寂しさが生ずる
若使人心密　人の心をこまやかにさせたいのなら
莫惜馬蹄穿　馬の蹄に穴があこうと、また通ってください

わたし

元来不相識　はじめからお会いした事も無く
判自断知聞　もともとお友達の間は切れていたのに
天公強多事　お天道様が余計な事をして
今遣若為分　いま、なんとかして間を裂くのね

わたしは、そこでこう歌った。

積愁腸已断　積もった愁いにはらわたは切れ
懸望眼応穿　あてもなく眺めて眼は虚ろになるだろう
今宵莫閉戸　今宵は戸を閉めないでおくれ
夢裏向渠辺　夢のなか、あなたの許に向かうから

まもなく空が明るくなった。それから二人とも黙ったまま涙を流し、胸が詰まって取り乱した。数人の女奴隷も、すすり泣いて顔があげられなかった。

五嫂がいった。

「会うは別れのはじめで、昔からそうと決まっております。歓楽がつきると悲哀が生まれるのは、古来よくある事です。どうか奥様、心残りを捨てなさい」

わたしは、そこで衣の袖で奥様の涙をふいてさしあげた。

十娘はやっと別れの詩を作った。

忽然聞道別　不意にお別れねと言われて
愁来不自禁　愁しさはどうしようもなく
眼下千行涙　涙はとめどなくほうり落ち
腸懸一寸心　わが心は乱れに乱れた
両剣俄分匣　二口の剣が、まもなく匣を離れ
双鳧忽異林　つがいの鳧が、突然、林を別にするのだ
慇懃惜玉体　どうかお体を人切にして下さい
勿使外人侵　ほかの人に奪われないように

十娘は、幼名を瓊英といった。わたしはそこで、さらにこう歌った。

卞和山未斲　卞和の山ではみがいていないし
羊雍地不耕　羊雍の地では耕してもいない
自憐無玉子　玉の子の無い身がいとおしく
何日見瓊英　いつになれば瓊英が見られよう

十娘は、うてば響くように詩を口ずさんだ

鳳錦行須贈　鳳錦をお贈りしたいのに
龍梭久絶声　龍梭は長らく使っていない
自恨無機杼　口惜しいことに機の杼がなくて
何日見文成　いつになれば文成が見られよう

わたしは眼を見張って驚き、憂鬱が消えて笑顔になった。

揚州の青銅鏡の巻

そこで奴隷の曲琴を呼んで、相思の枕を取って、十娘に形見として残した。そこでわたしは、

南国伝椰子　南の国から椰子を伝え
東家賦石榴　東の家から石榴を捧げる
聊将代左腕　これを左の手首に代えましょう
長夜枕渠頭　長い夜、君が頭を支えてください

十娘は、お返しとして一足の履をよこし、詩の返しとしては、

双鳧乍失伴　一つがいの鳧(のがも)が、ついにはぐれたが
両燕還相属　二羽の燕は、まだ連なっている
聊以当児心　これをわたしの心のしるしに致します
竟日承君足　ひねもす、貴方の足を受けていたいのです

わたしは、さらに曲琴をやって、揚州の青銅鏡を取ってこさせ、それを形見として十娘に残し、あわせて詩を贈った。

揚州は、唐の時代、青銅鏡の産地として有名でした(『新唐書』四一「地理志」五)。また白居易「新楽府」の一首「百錬鏡」に、旧暦五月五日、長江の江心で鏡を鋳ることが歌われています。又唐代、女性は鏡を化粧用だけではなく、装身具としても使用していました。これには魔除の意味もあったようです。伝奇小説『崑崙奴』に出て来る大官屋敷の囚われの美女が、胸元に小さな鏡を下げているのは、この例です。

仙人好負局　仙人は鏡を磨くのが好きで

劉向の撰と伝えられる『列仙伝』下には、負局先生という仙人がいて、鏡箱を背負い、呉の市中を回って鏡を磨いて手間賃を稼いでいたという記事が掲載されています。

隠士屢潜観　隠士はしばしばこっそり鏡を見る

晋の葛洪(二八三～三六三)の『抱朴子』によりますと、万物の年を経た者の精は、人の形を仮て人の目をまどわし、よく人をためしますが、鏡のなかではその眞の形をかえることが出来ません。それ故、古来、山に入る道士が、直径九寸以上の鏡を背にかけていれば、年を経た魅は、人に近づかないといいます。こうして山に住む道士は、鏡によって妖怪か人間かを見分ける事ができると信じられていました。

映水菱光散　水に映って菱の光が散り

菱の花、すなわち菱花は、詩文で鏡の代名詞に用いられました。古代、銅鏡の六角形の物、あるいは鏡背に菱花を刻む物を、菱花鏡といったからです。

北周の庾信(五一三～五八一)の「詠鏡詩」に

玉匣聊開鏡　玉匣いささか鏡を開き
軽灰暫拭塵　軽灰、しばし塵を拭う
光如一片水　光は一片の水のごとく
影照両辺人　影は両辺の人を照らす
月生無有桂　月生じて桂の有るなく
花開不逐春　花は開けど春を追わず
試挂淮南竹　試みに淮南の竹にかければ
堪能見四鄰　良く四鄰を見るに堪えん

というのがあります。

これは鏡箱を開けて塵を拭い、鏡を眺める詩ですが、そのなかで鏡を丸い月に譬えると共に、花にも譬えています。その花は菱花であり、菱の花は夏開くので、春を追わないと歌っているのです。

臨風竹影寒　風を迎えて竹の影が冷たい

唐初の詩人、蘇味道(六四八～七〇五)の「詠鏡詩」に、次のものがあるという説があります。

掛竹光逾遠　竹に掛ければ、光いよいよ遠く
翻菱影暫移　菱を翻せば、影しばらく移る

月下時驚鵲　月の下で、しばしば鵲(かささぎ)に驚き

『神異経』によりますと、昔ある夫婦が別れるに際し、鏡をこわし、それぞれ半分を手許において、しるしとしました。その妻が人と通じ、鏡は鵲となって夫のところに飛んで来たので夫はそれを知ったといいます。その為後世、鏡を鋳る時、鏡背にそれを鋳るようになりました。ここでは鵲を鏡に譬えています。

池辺独舞鸞　池のほとりで一人鸞鳥を舞わせた

『異苑』によりますと山雞は、その毛羽を愛し、水に映しては舞いました。魏の武帝の時、南方からこれを献上しましたが、公子の蒼舒が、その前に大鏡を置かせると、雞はその映る姿を見て舞い、やめることを知らなかったので疲れきって死んだといいます。

また六朝の宋の范泰の「鸞鳥詩序」によりますと、昔カシミール王が、鸞鳥を網で捕獲し、大変可愛がり、その鳴声を聞きたがったのですが、三年たっても鳴きませんでした。そこで夫人が、鏡をかけて映してみてはどうかと勧めました。王はその意見に従いましたが、鸞鳥は映った己の姿を見て悲鳴をあげ、悲しい声を雲間に響かせ、一声鳴いただけで息絶えたといいます。

若道人心変　もし人の心が変わると言うのなら
従渠照胆看　胆が映るまま見てください

『西京雑記』三の秦の咸陽宮に、人の内臓を映す鏡があった事を指しています。

血の涙、胸元に流れる巻

十娘は又、手にしていた扇を贈り、詩を歌った。

合歓遊璧水　太学の池に遊ぶ公達の合歓の扇よ
同心侍華闕　宮廷に侍る文臣の同心の扇よ
颯颯似朝風　その涼しさは朝の風に似て
団団如夜月　まんまるな形は月のようだ
鸞姿侵霧起　鸞鳥の姿は霧をおかして立ち
鶴影排空発　鶴の影が空をおしわけて飛んでいる
希君掌中握　君が手に握られておりますように
勿使恩情歇　愛情をたえさないでおくれ

わたしは暇乞いが終わったので、傍らの者をやって益州（四川省内）の新型の錦一匹を持ってこさせ、五嫂に贈り、詩を差し上げた。

今留片子信　いま、僅かですが形見を残しておきます
可以贈佳期　美しい方への贈り物です

裁為八幅被　裁断して八幅の被を作ってください
時復一相思　おりおりに思いしのびましょう

五嫂は金の簪をはずして張様に届け、その詩に返して、

児今贈君別　わたしは、いま別れ去る貴方に贈ります
情知後会難　これからはお会いするのが難しいと心得ております
莫言釵意小　僅かな贈物だと言わないでください
可以掛渠冠　簪は、その冠に掛けられるのです

わたしは涙をぬぐって、

「犬や馬はものの道理は分らないけれども、別離の悲しさを心得ているし、鳥や獣は感情がなくても、別離を怨むことは知っている。心は木石ではない。深い情愛を忘れるものですか」

十娘が詩に返して口ずさんだ。

他道愁勝死　淋しくても死ぬよりましと言うけれど
児言死勝愁　わたしには淋しさより死ぬ方がまし
愁来百処痛　淋しさは身体中が痛むもの
死去一時休　死ねば、たちまちみんなおしまい

さらにもう一首

他道愁勝死　淋しくても死ぬよりましと言うけれど
児言死勝愁　わたしには淋しさより死ぬ方がまし
日夜懸心憶　昼も夜も心にかけて思うもの
知隔幾年秋　あれから幾年たったかと

わたしは一首作った。

人去悠悠隔両天　人が行っていつしか二日隔ててしまった
未審迢迢度幾年　いったい遠く何年過ぎるのであろうか
縦使身遊万里外　たといこの身が万里の外に遊ぼうと
終帰意在十娘辺　とどのつまり心は十娘のもとにある

十娘も詩を作った。

天厓地角知何処　天の果て、地の隅、どこにおりましょうとも
玉体紅顔難再遇　玉の姿、紅の顔に再会するのは難しい
但令翅羽為人生　なんとか羽翼が生えてくれないで
会此高飛共君去　きっと高く飛んで貴方と一緒になれる筈

しょうか

わたしは顔を見るに忍びず、いきなり十娘の手を取って別れた。二、三里行って、振り向いて見ると、まだ数人もとの所に立っていた。わたしがそれから次第に遠ざかると、声はかすかになり、影も消え失せて、振り返ってみても見えず、心を痛めながら去った。

山のはずれに着いて、舟を浮かべて過ぎ去った。夜は落ち着かなくて眠れなかった。うらがなしくてよるべがなく、猿の鳴き声に鬱々とするばかりか、去り行く白鳥を見ても悲痛な思いにかられた。

痛みを押し殺して黙したまま、天道と人の世の有様を歎いた。別れは必ず怨みを伴い、怨みがあれば必ず思いはつのるもの。去る日はどうしてこうも短いのか。来る夜は、どうしてこうも長いのか。比目の魚（『爾雅』「釈地」に東方に比目魚あり。比ばずんば行かず。―仲のよさの譬え）は相手を絶たれ、つがいの鳧は伴を失う。日毎に衣が緩やかになり、朝な朝な帯が緩むのである。乾いた口許は唇が裂け、胸は苦しく、煩悶のあまり、顔は流れる涙にしとど濡れ、愁いのために腸がずたずたに千切れてしまった。

心を落ち着かせようと端座して琴を横たえ奏でても、

血の涙が胸元に流れ、様々な思いが沸き起こり、いろいろな憂いがこもごも迫ってくる。
心は物思いで乱れ、何も考えることの出来ないまま、空しく膝を抱いて長々と吟じたのであった。

望神仙兮不可見　神女を眺めたが、見ることができなかった
普天地兮知余心　あまねく天も地も、わが心を知っていようか
思神仙兮不可得　神女にあこがれたが、それは不可能だ
覓十娘兮断知聞　十娘を求めようとしても理解する人はおらず
欲聞此兮腸亦乱　これを聞いたら腸も千々に乱れよう
更見此兮悩余心　ましてこれを見たならば、我が心は悩み苦しむであろう。

参考文献
今村与志雄　『遊仙窟』岩波書店、一九九〇年。
成瀬哲生　「遊仙窟」『中国古典小説選4』明治書院、二〇〇五年。

れんしゅう(恋詩集)しさくのかなしみより その四

松下壽男

街灯

公園に車を停めて
茶色い硬貨を探し出す
あなたに電話をするために
こんなに遠くへ来てしまう

探したたばこに火をつけて
二人の会話をよびおこす
子供の笑う声のした
あなたの家の灯りを探す

電話の前にたたずんで
あなたは思いを馳せただろう
受話器の声のへだたりに

鈍く光る鎧戸に
五つの数字を照らしだす
街灯の下を駆け抜ける

ホメラレモセズ　クニモサレズ（十六～十九）

松下壽男

十六　報徳社の自立

陸一は、その足で貞三の家に向かった。貞三は、母屋の土間で、田植えの条縄に赤い端切れで目印をつけ直していた。間を詰めて、もう一条増やせば実際に収量が増えるものか試してみるべというのだった。

貞三は、陸一を座敷に招き上げた。陸一は貞三に今まで考えたことの全てを話した。

「陸一さん、よくぞそこまで考えなすったべ」

貞三は、頷いて、満足げに陸一の顔を眺めるのだった。

わしには子どもが授からなんだ。それは、昔、天道をないがしろにした報いだと諦めている。だがわしは悲しくはない。陸一さんが農学校に入学した時から、悲しみが楽しみになったのだと語る貞三だった。

「陸一さん、もしわしが、一緒に開いてきた開墾地を今お前さんに譲るとしたらどうするべ」

突然のことで、呆然とした陸一の脳裏に、やがて真っ先に浮かんできたのが報徳社だった。

「ほら顔に書いてあるべ。それを報徳社の土台にするだろうべ。陸一さん、それでこそ報徳人というもんだべ。よくぞそこまで成長しなすった」

貞三は、語り続けた。昨年得次の借金のことで陸一らがやって来た時、女房はたいそう喜んだ。子供を産めなくて申し訳なく思っていたが、貞三の嬉しそうな顔を見ていて気持ちが変わったと。あんたはちゃんと子供を育ててきたんだと。しかもたくさん育ててきたんだと。だから私は嘆くことなく、報徳社の若者を子供と思って余生を楽しく生きて行けると。

「わしには、女房と二人が食っていけるだけの土地がありゃいいべ。後はわしらの子供たちに譲るべえと考えて、その日から譲る時を楽しみに待っていただべ」

貞三の言葉を聞いて陸一はただただ有難かった。ここ数年ずいぶん話慣れがしてきたというのに、こんな時に限って言葉を失う陸一だった。胸が熱くなって目に涙が込み上げてくるのだった。

その夜、陸一の家に四人の仲間が集まった。

事態の展開に、誰もが興奮していた。

兵造の奔走で村長以下村役場の力によって社団法人の認可が実現するという可能性に加え、貞三からの開墾地の寄付によっても、実現の可能性が見えてきたのだった。

同じ認可に関わる可能性とはいえ、一方は社を一村報徳へと導き、他方は結社の独立へと導くのだった。それは村の報徳社がめざす報徳の理念に関わる選択だった。しかもせっかく盛り上がってきた報徳社の内部に、対立を生じかねない選択であった。村の報徳社は自立を前にして大きな岐路に立たされていた。

先の常会では、力強い兵造の言葉に乗せられて明るい未来を描いた彼らも、それぞれに振り返ってみると、心の底に納得できないものを感じていた。

一村報徳か結社報徳かという選択が迫られてきたこと自体、元はといえば彼らの報徳運動の成果なのであった。その成果が報徳社を、彼らの手の届かない力によって手の届かないところへ押し上げて行くようでもあった。

確かに、貞三の寄付の申し入れはありがたかった。兵造や村長の言うなりにならずに済む道が開かれたのである。しかし、それも、彼らの手の届かない力を見せつけられていることに変わりはなかった。

おれたちの報徳社が手の届かない力によって手の届かないところへ羽ばたこうとしている。

それは、組織が法人として社会の認知を受ける際には付き物の感情かもしれなかった。おのれの肉体が国の物になるような徴兵検査で味わった感情と同根のものなのかもしれない。その心の一抹の切なさは、慈しみ育んできた者にしかわからない切なさなのであった。

そして誰よりもそれを感じている陸一であった。

皆が興奮している裏にはその切なさがあった。それゆえ興奮すればするほどそれを口で表すことができなくなっていくのだと陸一は思った。

報徳社は、貞三さんの元に出入りしていた自分たちが金次郎さんの銅像建設の苦い挫折を味わってつくってきたものだ。だども村長や兵造は、力を笠にきて、それを横取りしようとしているべと友一は憤慨していた。

村役場に顔を効かせているのは大地主の面々だ。地主等が報徳社を牛耳った時、俺たち小作社員の立場はどうなるべ。報徳社に裏切られたと言い出す者も出るかもしれんと五作が嘆いていた。

金があるに越したことはない。得次の時も、金を貸すことができたから生き方を変えられたんでねえか。だからこそ人は変われるという夢を村人に持たせることができ

たでねえか。経済の伴わない道徳は寝言だべ。と機一が言った。

こうして悩むのも、まだ報徳社が一人前じゃないからだと俺は思う。一人前じゃないからよ、後見人になってやろうというのが村長たちの言い分じゃないかと熊蔵が言った。

しかし後見人と言やあ、貞三さんも後見人じゃあないか、と機一が言った。

確かに貞三の支えがなければ、とてもここまでやって来れなかったのだと皆が頷いた。

結局のところ、一村報徳か結社報徳かというのは、村長と貞三さんのどちらを後見人に選ぶのかということなのか、と機一が言った。

「貞三さんの金か、村長の力か」

「村長の権力か、貞三さんの民力か」

「結局のところ、人頼みだべ」

「しかも金も出せば口も出すのが後見人だべ」

「情けなかんべ」

熊蔵がしみじみ言った。全く、独力では独り立ちできないひよっこのような自分たちが情けなく思えてくるのだった。

すると、五作が口を開いた。

「おらは、貞三さんのことを振り返ってみたが、貞三さんは後見人なんかじゃねえ。親父だ。生みの親だべ。貞三さんも俺たちのことを息子だと思っていてくれるし、俺たちも貞三さんのことを親父だと思っているべな。貞三さんは息子に恵まれ、俺たちは親父に恵まれているんだべ」

友一があとを続けた。

「そうだべ。貞三さんは後見人なんかじゃねえ。だから貞三さんの寄付は、貞三さんの推譲だと思えばいいし、それが本当じゃなかんべか。だども村から受ける資金提供は、下賜ではあっても推譲ではなかんべ。報徳社は、下賜と推譲とどちらを尊ぶべ」

陸一が、

「そりゃあ推譲だべな」

と、答えた。下賜は上の者が下の者へ施す義務であろうが、推譲は、自分の権利を棄てて人に譲ろうというのだから、推譲の方が尊かろう。

「そうか、ならば下賜と推譲のどちらを先に受けるかとなりゃ、推譲だべ。だども下賜も遠慮なく受けりゃいいべ」

機一の言葉によって、一同にいつもの笑いがよみがえってきた。

貞三さんの推譲をありがたく受けて報徳社が独り立ちし、独り立ちした報徳社は村役場の下賜を拒まない。報徳社は村とは独立して報徳を押し進めるし、村が一村報徳を進めるのなら協力を惜しまない。報徳社が独り立ちしていれば、それができると友一も納得した。

陸一は、金次郎さんの一村報徳の姿が見えてきたように思えた。当時は領主という武士がいて、百姓がいた。農家に報徳があり、武家にも報徳があった。武士の徳に報いる百姓の徳があり、百姓の徳に報いる武士の徳があったのだった。一村報徳を進める金次郎さんの努力は、報徳によって自立した農村とその村を治める為政者とのせめぎ合いの間に立って、常に人として生きて行く、正に薄氷を踏むような調整作業であったことだろう。だからこそ為政者でも民でも一つにすることができたのだろうと、今さらながら金次郎さんの心を思いやる陸一であった。

陸一は、一座の話をまとめるように語り始めた。

村民が自分の足で歩んで行けるために、村民同士が支え合うのが村の報徳社だ。しかもこれからは、村民が村を支えたり支えられたりできるよう、村民と村の仲を取り持つ報徳社に育っていかなければならない。

一同は、その通りと頷いた。

そのために、まず貞三さんの推譲を受けて社団法人として自立させ、大日本報徳社に加わろう。そのための組織固めは、その後の一村報徳への道もさぐりながら、十分に話し合おう。

皆、それがいいと同意した。

次の常会では、会務報告で推譲の申し入れを受け入れることを伝え、いもこじで社団法人認可申請のための組織固めを相談しよう。

「兵造さんがつんぼ桟敷に置かれたと怒りだすべな」

と、五作が言った。

「なあにその頃は、兵造は、祝言を挙げたばっかりで、でれでだべ」

と、友一が笑った。

十七　兵造の祝言

兵造の祝言には、報徳社の代表を、所帯持ちで、しきたりに一番詳しい作衛門に頼んだ。

陸一は、作衛門の元に、兵造との約束通り大奮発した祝儀をあつらえに行った。そして料理も引き出物も好きにしてくれと伝えた。それじゃ遠慮なくいただくとするか、子どもが喜ぶべと作衛門も嬉しそうだった。

祝言の帰りに、作衛門は兵造の家に寄った。土産はないが、土産話ならある、びっくりするぜ、と前置きをして、作衛門がこう語り始めた。

「兵造の親父が家督を兵造に譲るべな」

祝言も無事お開きとなった席で、父親は、やっと息子も身を固め、しかも孫まで授かったので、わしはもう趣味の俳句三昧の生活を送りたい、女房も、家のことは若夫婦に任せて、孫の世話を楽しみに暮らしたいと言っている。この祝言を潮時に息子に身代を譲る決心をしたので、皆さ

ん、若輩者の伜夫婦にご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げるとあいさつをした。帰り道は、兵造一家の代替わりの話で持ちきりだった。体が弱く、広い世間に打って出る気概の乏しかった父親は、親から土地を分けてもらって分家をしたが、それは兄の村長と何かとうまくいかない原因になった。しかし息子の兵造は体も才知も逞しかった。村長は甥を右腕にと頼んでいたのだった。となれば、父親としても早く隠居をして道楽三昧の生活をした方が安泰じゃろう。いや、嫁のおたかは、家柄は申し分なかろうが、あの通り男勝りだし、臺が立っているし、のっけから妊っての祝言とくりゃ、姑とうまくいかないに決まっているべ。ならば早々に家督を譲って隠居して、波風が立たんようにしておくに越したことはなかろうて。持参金はたんまり頂いたことだろうしの。そんな出放題の話で盛り上がった。

「噂はよ、どれも当たりでどれも外れというところじゃなかんべか」

作衛門は皮肉っぽく笑うと、引出物を見せて、ありがたく頂戴するべと礼を述べ、子供らの待つ家へ帰って行った。

陸一は、報徳社にとってはありがたい展開だと直感した。

十八　揺れる常会

五月の常会は、田植えを前にした慌ただしい時期であったが思いのほか盛会であった。それは、報徳社が弾んだ祝儀に対する返礼として、兵造が紅白の饅頭を振る舞うという噂が流れたためでもあった。実際それは兵造婦人となった腹の大きいおたかの差配で娘衆の手で会場の小学校に運び込まれ、戸口の机の盆にこんもりと積み上げられていた。常会はいつになく甘く華やかな空気に包まれていたのだった。

開会の辞と報徳訓唱和の先導は友一が買って出た。案の定、父母の根源はのくだりは、とびきり力がこもっていた。

続いて陸一が、原稿を持って会務報告に立った。

「田も道具も準備が整い、いよいよ村を上げて田植えを迎えるこの季節に、元気の出る報告を二つもできることを喜んでいます」

と、陸一は前置きをした。一つは兵造の祝言だろう、もう一つはなんだろうと囁き声が聞こえた。

「入口の紅白の饅頭でお気づきだと思いますが、この度、社にとってはなくてはならない兵造君が目出度く祝言を済ませたことを報告します」

拍手が沸き起こり、よっ天地の令命と言う掛け声がかかった。只今声の掛かったように、と陸一は話を続けた。

「細君のおたかさんとはこの報徳社の常会を通して結ばれたこと、正に天地の令命であります。その証拠が今おたかさんの胎内で元気に成長中であります」

温かい拍手が起こった。

「祝言には報徳社より作衛門君が代表で出席しました。その報告として、祝言の席で兵造君はお父上より家督を譲られ、まさに独り立ちを遂げました。今後は一家の大黒柱としてまた社の大黒柱としてご活躍を祈念いたします」

盛大な拍手の中を、会場の真ん中で胸を反らせて聞いていた兵造が笑顔で立ち上がって頭を下げた。

「兵造君夫妻のおめでたい話のほかに、もう一つ嬉しい話があります。それは、我々の報徳社の社員でもある或る篤志家から、社団法人になるための土台としても十分な土地のご寄付の申し入れが在り、役員一同検討した結果、心からの得難い推譲であると判断いたしました。そこでいよいよ社団法人認可のための事務手続きに入ることができるのであります。その詳しい相談に付きましては、講演の後のいもこじに回すことにします。さて今日の講演は、役場農林課長に村の農林行政についてお話をしていただきます」

陸一は、話をしながら兵造の顔をちらりと見たが、案の定笑顔は消えて、苦り切った表情であった。

いつになく正装をした課長の方言丸出しの講話が終わると、参会者の多くは、いよいよ田植えが始まるべと口々に言いながら帰って行った。戸口では娘衆がにこやかに饅頭を配った。人々はそれ受け取ると、兵造の方を見ておめでとうございますと頭を下げた。兵造は満足げに頷くのだった。

いもこじが、まず講師の課長を囲んで始まった。陸一の感謝の言葉に対して、課長の方も、村民に課の仕事を直接伝えることができてありがたい、参会者も真剣に聞いてくれた、報徳社は誠に得難い存在だと感謝の意を述べた。陸一も、ぜひ役場の役に立っていきたいと答えた。兵造は、村役場も報徳の教えを学び、村を挙げて報徳を押し進めて行くべきだと熱っぽく語った。

私共も明日から忙しくなるのでと課長は立ち上がった。一同は起立してお辞儀をして見送った。陸一は謝礼を手渡した。

それから残った社員で相談が始まった。真っ先に兵造が、

「寄付の話は、初耳だべ」

と、皮肉っぽく切り出した。友一が、

「祝言で忙しいと思って誘わなんだべ」

と、切り返した。兵造は口ごもった。事実その通りだったのだ。

陸一は、貞三の寄付の申し入れから、役員会を経てきた経緯を、あらためて詳しく話した。兵造は憮然とした顔

で、

「それでは、村長や役場や大地主連中との間に入って後ろ楯を取り付けるところまで漕ぎ着けた、俺の努力に水を差すようなもんじゃなかんべか」

と、言った。

「い、いや、そうではない」

と、陸一は兵造に答えた。

「ぜひ村の後ろ楯を頼みたいべ。しかも村は金を出さんでもよくなったということだべ」

兵造の表情が和らいだ。不景気な時代なのであった。村も、費えがないに越したことはないのだ。

しかも報徳社が経済的にも自立した組織となれば、逆に村の行政の後ろ楯になることもできるだろうと熊蔵が言った。

もし村の行政が報徳に反する時は、報徳社は、はっきりと物申すこともできると、友一が言った。

それに独り立ちすれば、報徳社は自分たちの力で、村の行政にさきがけて報徳を押し進めることもできるのだと機一が言った。

「なるほど」

と、兵造が頷いた。

報徳社には小作も居るべ、と五作がぽつりと言った。

お上に呑み込まれるのではなく、お上に力を示せて初めて村の支えになれると言うことかと作衛門が言った。

「おれは、将来、報徳社で育った人物が村会議員や村長になっていくのが一番いいと考えているべ」

陸一のその言葉に若者たちはときめいた。それまで村の行政は年配の大地主等旦那衆がやるものだと考えていた彼らだった。いもこじに残った中老や年寄衆も、常会に来る度に、これからは若者の時代だと感じるべ、それが楽しみで寄せてもらっているべと語るのだった。

陸一は、いよいよ組織固めに取り組む時が来たが、まず社長はだれにすべかと切り出した。一座は静粛になった。それぞれが頭の中で、様々な顔を思い浮かべては、消している様が皆の表情から読みとれるのだった。

もはや村長はじめ旦那衆を頼む筋ではなくなった。また貞三の寄付を推譲と判断した以上、貞三の名を上げることは憚れたし、貞三の方で固辞することは明らかだった。

村の報徳社がここまで漕ぎ着けられたのは陸一の奔走のお陰だった。しかし彼はまだ独身で、村では若衆の一人でしかなかった。もし自分から名乗りを上げれば異存はなかろうが、村の旦那衆から報徳社が軽く見られるのは目に見えていた。

「ほかに誰も口火を切る者がおらんで」

と、陸一がおもむろに口を開いた。

「これは、おれ一人の考えだが、兵造さんになっちゃもらえねえか」

一座は、はっとして息を呑んだ。頭に浮かんだいくつもの顔の上に兵造の顔が浮かび、誰もがその上に一条の光の道が拓かれるような思いがした。

「兵造さんは、今年三十だし、家督も譲られて、もう一人前だべ。村の旦那衆とも対等に付き合っていける。何より大日本報徳社の教えを直に学んできているし、顔も利くべな」

一座の年配者たちはなるほどと頷いた。若者たちも、陸一がそう言うのなら異存はないと答えた。

兵造は、いつになく冷静さを失って、

「一体何を言いだすべ」

と、慌てだした。思えば、持ち上げられて下げられて、また持ち上げられてと、兵造には大変な常会だった。

「俺だって、祝言はしたわ、親父が隠居したわで訳もわからん最中だっていうに、そんな大役を背負うとなっちゃ堪んねえべ」

「おまけにもうじきおとっつぁんにもなるべな」

と、若衆の一人がちゃちゃを入れた。みんなが笑った。一緒に笑ったところを見ると兵造はまんざらでもなさそうだった。

社長の仕事が始まるのは認可を受けた後の来年以降のことだ。それまでに兵造さんのやりやすいように組織を固めていけばいいのだからと陸一が話した。

「俺等も決して兵造さん任せにはしねえべ」

「それに兵造さんは、先に、どんな役でもひきうけようと言ってくれたでねえか」

最後の一言二言は、殺し文句のように兵造の心に響くのだった。

兵造は神妙に居住まいを正して、

「よし、わかった。俺が社長を引き受けるべ。みんなよろしく頼むべ」

と、頭を下げたのだった。

十九　譲の心

いくさのような田植えの季節が過ぎると、報徳社の役員は兵造の家に集まって村の報徳社の組織固めの相談をした。副社長は、兵造より年上で、若いに似合わず村の歴史としきたりに精通している作衛門と、兵造より年下ではあるが、若衆の頃は兵役仕込みの逞しい指導力を発揮した猛蔵が引き受けてくれた。作衛門の起用は、陸一の度々の懇請が実ったのだった。

そして理事には、まず、それまでの暫定役員が務めることになった。五作が、俺は小作だどもいいだべかと言うと、小作だからこそ理事に入ってもらなわにゃなんめえと兵造が言うのだった。

小作の代表が五作なら地主の代表はだれだろうということで一同は頭を悩ました。

地主連は自分からは名乗りを上げず、かといって一人に

声を掛けると一層難しくなるしということで扱いにくい問題だった。すると兵造が、じゃあ伯父貴に話を持ちかけてもらおうかと言った。一座はさすがと叫ぶのだった。陸一も、兵造を社長に選んだことに間違いはなかったと思った。

若者が生み育ててきた報徳社とはいえ、平均年齢が三十才そこそこの理事連に、一同は、頼りなさを感じるのだった。そこで四十代五十代からも理事を選ぶことにした。

報徳を教え導いて行けるような年配者の理事がほしかった。それは、貞三のほかにいなかったが、貞三がそれを引き受けるとは思えなかった。しかも決定的な寄付者である彼に対する他の理事の遠慮や、やっかみが心配だった。社長の兵造の身になればなおさらだった。しかし、やはり貞三のほかには考えられなかった。そこで陸一がまず貞三の意向を聞いてみることになった。

夕食後陸一が貞三を訪ねると、貞三は薄暗い井戸端で鎌を研いでいた。

「この頃は日が長くなったで、こうして晩飯後の一仕事だべ」

と、片付けを始めながら話す貞三だった。

様子から、ただの世間話ではあるまいと、座敷に上がってあらためてあいさつをする貞三に、

「今日は一つお願いがあって」

と、土間で頭を下げる陸一だった。

「まあ、陸一さん、上がってけろや」

貞三も陸一を待っていたかのように、座敷に招き上げるのだった。

実は、ぜひ報徳社の理事を引き受けてほしいという陸一に、貞三も穏やかな口調で答えたのだった。

「実は、わしも、一つお願いがあるべ」

陸一は、それが、理事を引き受ける交換条件だろうと思った。

「報徳社に寄付すると決心した時は、報徳社にかかわるのは潔くやめるべえと常会にも出なんだが、あらためて考えてみると、わしら夫婦が食っていく田畑の世話だけちゅうのも何とも寂しく感じるようになってきたべ。何より陸一さんら若い衆と開墾をしたり鶏や牛の世話をしたりすることがなくなると思うと、生きる楽しみを奪われた様だべ」

陸一は、自分たちの愚かさが情けなくなった。譲られることばかり考えていて、譲る貞三の気持ちを思いやったことなど一度もなかったのだった。

(それでよく報徳社と呼べたものだ。だが、一度寄付の決まった土地を貞三さんに返すとなると・・・)

陸一の背中に冷や汗が滲んだ。それは報徳社にとってとてつもなく大きな挫折だった。しかしそれも自分たちが至らなかった所為なのであった。

潔く話を元に戻すほかはないのであった。

「て、貞三さんの気持ちを汲めなくて申し訳なかったべ。と、土地の寄付を受けると言う話は、な、なかったことにしてけろ」

すると今度は、貞三が慌てだした。

「いやいや、陸一さん、わしの話の切り出し方がまずかったべ。ぜひ土地は報徳社に譲らせてけろ。わしの頼みは別のことだべ」

陸一の肩の力が一遍に抜けた。最悪の事態は免れたのだ。

「な、なんなりと」

もう何事にも動じまいと腹を決めた陸一だった。

「陸一さん、わしに農学舎というもんを開かせてくれねえか」

報徳社が人を育て、人が報徳社を育てる。農学者という言葉を聞いて、陸一の前に、報徳社の未来が、村の未来が大きく確かに開かれて行くのを感じた。

「貞三さん、そりゃ凄え、凄えべ！」

陸一は思わず声を上げていた。

「わしは、報徳社の田畑山林を生かして、若者や村の衆と一緒に、教えたり教えられたりしながら、天地人の徳をもっともっと学んでいきたいべ。陸一さんの研究した土壌の改良を村中に広めていきたいべ。報徳は土作り、人作りだべの、陸一さん」

金次郎さんの時代から、教育が、心田開発が、報徳社の最大の仕事のはずであった。その報徳社の裏の要とも言うべき役割をずっと果たしてくれていた貞三さんだった。その報われることの少ない陰徳を、これからも村の報徳社のために喜んで積み続けてくれるというのだ。

「では、農学舎の塾長兼任の理事を引き受けてくんなせえ」

「肩書きは何でも構わんども、わしのあとは、陸一さん、お前さんが継いでくれるべな」

陸一は深く頷くのだった。

福祉サービス第三者評価制度

神奈川県の制度から

鍋屋次郎

（一）はじめに

福祉サービス第三者評価制度とは、神奈川県外郭機関である「かながわ福祉サービス第三者評価推進機構」（以下推進機構と略称する）が認証した評価機関が、高齢者施設（特別養護老人ホーム・介護老人保健施設など）、障害者施設（身体障害者入所授産施設、知的障害者入所授産施設など）、保育園（認可保育園・認定保育園など）などを対象に、それぞれの施設が

① どのような理念・方針に基づいて利用者に接しているか

② 個人の尊厳と人権の尊重についてどのように対応しているか

③ 入所施設であれば、日々の生活を、入所者が主体的に送ることが出来るように支援・介護をしているか

④ 保育園であれば、保護者と密接な連携のもとに、日々の保育を行っているか

などについて、実地調査をして評価報告書を作成し、その結果を社会に公表する制度である。

また、横浜市は独自の制度として第三者評価料金の補助制度を設けて、第三者評価の推進を図っている。

（二）評価制度のねらい

各施設が実施しているサービス実態について、客観的・公平・公正な第三者的評価を受けることにより、本来あるべきサービス水準（サービスの質）との比較において、当該施設のサービスが現在どのような位置にあるかを施設自身が知ることができ、それにより施設自身が更なるサービスの向上努力を行うことと、またその評価結果を推進機構並びに横浜市などがホームページで社会に公表（評価機関のホームページでも）することにより、現在と将来の利用者に、利用施設選択の情報を提供することにある。

（三）評価機関は

評価機関認可の条件は

① 評価機関は法人であること

② 評価を公正且つ客観的第三者的見地から実施できる体制にあること

③ 個人情報保護が百%できる体制にあること

④ 施設との評価契約書・評価実施要領などが推進機構のあるべき基準を満たしていること

⑤ 高齢・障害・保育・保護など各分野の調査員として、推進機構の三次に亘る研修と試験（横浜市条件は後述）に合格した調査員を複数擁していること

⑥ 苦情相談窓口を明示していること

など多くの条件を求められている。

なお、評価を公正且つ客観的第三者的見地から行うため、第三者をもって構成する評価委員会の設置が義務つけられている。

これらの条件を満たして、初めて推進機構から評価機関としての認証を受けることが出来る。

（四）評価調査員

神奈川県では、推進機構が毎年募集を行い、第二次までの研修と終了試験合格者に評価調査員資格を付与し、且つ、推進機構に調査員登録をした者のみが評価調査に従事することができる。

応募資格は問わない。これは、評価調査の専門性に加えて「市民視点感覚」をもって行うことの必要性を重視していることによる。

なお、施設が横浜市の評価料金補助を受けるためには、評価機関及び評価調査員について次の条件が求められる。

① 評価機関

評価調査を行う評価機関は、横浜市が一定の審査を行った上で、指定した評価機関でなければならない。

② 評価調査員

推進機構に登録した評価調査員を対象に、横浜市の分野別評価基準と評価システムについて、分野別調査員研修・試験を行い、合格者のみがこの評価調査を行うことが出来る。（合格者は推進機構試験合格率×横浜市分野

別試験合格率となるから、最終的合格率はかなり低くなる）

そして、評価調査員は、自分の希望する評価機関に所属して評価活動を行う。評価機関所属は複数評価機関に所属することも可能である。

③ 横浜市の評価料金補助制度

横浜市は、市内にある施設に対して、第三者評価を受けた場合に、原則として契約金額の五十％と三十万円の低い金額を補助する。

（五）評価の進め方

高齢、障害、保育、保護など各分野とも　左記スケジュールですすめる。

① 施設と評価機関との間で　評価契約の締結
② 評価にあたっての打合せ
③ 施設での自己評価の実施・家族アンケートの送付

この施設での自己評価は、可能な限り多くの職員に関わって貰うことにより、職員が評価項目としての「サービス期待水準」を知り、そこから多くの「気付き」がもたらされ、職員のレベルアップとモチベーション向上効果が期待できる。

④ 評価機関による家族アンケート・自己評価表の回収集計と分析

家族アンケートは評価機関が直接回収し、施設が関知しないシステムをとることにより、家族は忌憚のない意見を述べることが出来る。

⑤ 訪問調査の打合せ

事業所調査二日間の日程、利用者本人調査、職員ヒアリング

⑥ 事業所調査　二日間

書類チェック、施設長ヒアリング、支援サービスの動態チェック

⑦ 評価結果の取りまとめと分析
⑧ 評価委員会へ提出　評価の決定
⑨ 評価結果の事業所への提示
⑩ 事業者意見提出（事業者が第三者評価結果を今後どのように活用するか　など）
⑪ 公表データ　作成
⑫ 推進機構・横浜市での公表　　事業者の自己開示

（六）評価領域分類

評価の実施にあたって、主な評価領域とその内容（事例は高齢分野の特別養護老人ホーム・老人保健施設の評価）は左記の通りである。

① 利用者の尊重
利用者本位の理念
利用者のニーズを正しく把握した個別支援計画の作成
② 快適な施設空間の確保
サービスの実施内容
利用者本位のサービス提供
余暇・生活内容の自由な選択
健康管理
③ 利用者家族との交流・連携
開かれた経営
施設の地域開放、地域コミュニティへの働きかけ
サービス内容等に関する情報提供
④ 人材育成・援助技術の向上
職員の人材育成
職員の援助技術の向上・一貫性
職員のモチベーション維持
⑤ 経営管理
経営における社会的責任
効率的な運営

など、六十一項目で、二百以上の設問が用意され、その全てを評価する。

（七）評価調査者に求められるもの

① 評価調査者は市民性と専門性を兼ね備えること

市民的視点から専門的介助支援事業を見ることにより、専門的閉鎖性から市民的開放性への移行が可能となる。

② 評価調査者は「評価項目」の意図、ねらいを的確に理解すること
的確な事実調査を行うためには、的確な理解が必要。

③ 評価調査者は、訪問前に提出を受ける事前書類（自己評価票や事前書面）を詳しく、的確に読み込むこと
訪問時の調査内容と質問内容を的確に準備すること。これが出来ていない場合は、訪問調査のレベルが落ちる。

④ 評価調査者は、評価のための調査を担当すること
評価委員会に対し、事実の的確且つ客観的な報告が必要。調査員の主観は不要。また曖昧な表現も不可。
調査員の意見は評価確定後の改善案の提示のみとする。

⑤ 評価調査員は、調査的面接技術を習得すること
オープンクエッションは情報の鍵
必要な情報を的確に引き出す
発言を肯定も否定もしない技法
ヒアリングのときの目線・態度は、上からの威圧的なものではなく、「謙虚によく聞いてくれる調査員」との印象を与えることが必要

（八）評価機関のあるべき資質

① 評価結果報告は、調査員レベルではなく、評価機関が責任を持った「評価機関としてのレベル」で報告できなければならない。
施設の実態と評価調査員報告のミスマッチを洞察する能力が必要。

② 評価結果報告は、専門的従事者である施設側経営者・職員が納得し、且つ、素人の一般社会人が読んで理解できるものでなければならない。その上、施設側の改善意欲に繋がるものでなければならない。

③ 調査分析は専門性があり、報告書の文章は、確認したことを客観的・正確に表現し、文章は簡潔でなければならない。文章の推敲を軽んじてはならない。

（九）評価料金

評価料金は評価機関によって異なる。一応、評価機関毎に推進機構及び横浜市に対して「評価料金算定基礎」を提出することになっている。

各評価機関の評価料金は、一件の評価調査が五十万円程度であるが、評価機関によって最低三十五万円から最高六十万円程度まで開きがある。

これは、評価機関の体質によって差が出るもので、例えば一般的に株式会社とNPO法人と比較すれば、コスト面で大幅な差があることから、評価料金体系にかなりの差が出ることとなる。

（十）評価期間と評価調査員報酬

評価期間

例えば、入所者が百人の特別養護老人ホームを評価する場合は、どのくらいの期間が必要かといえば

① 評価の説明と契約　一週間
② 自己評価の実施と提出・家族アンケート　一ヶ月
③ 評価機関調査員二名による自己評価の読み込み　三週間から四週間
④ 評価調査訪問　一週間（一回目の訪問と二回目の訪問は一週間程度の間隔を置く）
⑤ 評価結果のまとめと評価委員会開催　一ヶ月半
⑥ 評価結果報告と公表　二週間

以上の通り、最初から最後までは四ヶ月以上を必要とする。

評価調査員報酬

評価調査員報酬は、評価機関によって職務の行うべき範囲が異なることから、表面的にはバラツキがあるが、一般的には

主任調査員　一件当たり　七万円程度
副調査員　一件当たり　五～三万円程度

である。

先の必要評価期間から考えると、評価調査員を職業としてはとても生活が出来る収入は確保できない。そこで、男性であれば定年退職後、女性であれば子育てが終わった専業主婦が中心となってくる。

（十一）私が主宰する評価機関

私が代表を務める評価機関は、内閣府認証のNPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブを母体として、同クラブの神奈川県在住者を中心として設立したものである。

名前は「ナルク神奈川福祉サービス第三者評価事業部」と称し、平成十七年六月二十二日に推進機構から認証を得ている。（ニッポンのN，アクティブのA，ライフのL，クラブのC　をとってNALC「ナルク」と称している）

主な経営メンバーは平均年齢七十歳、様々な職歴の人々が退職後の人生を頑張っている。

経営主要メンバーの収入は、評価機関の運営に関する仕事は一切無報酬、例えば毎週の運営会議、行政機関との打合せ、運営企画、評価調査員研修講師などは一切無報酬で、受注した評価に携わった分だけ収入を得る。これは、定年退職後の人生を、今まで培ってきた賜を生かして、立場上弱い立場にいる人たち（特別養護老人ホームの入所者皆さんは、先ず自己主張は困難であり、家族も施設に対して遠慮している傾向が強い）の支援を通して社会貢献をしようとする集団の人生観と生き方の価値観である。

評価調査員研修と試験にも積極的にチャレンジして高齢・障害・保育・保護などの各分野の調査員ライセンスを取得した人たちも多い。

平成二十年度は、保育園評価を中心に、第三者評価のみで二十件を越える受注を得ている。これは、神奈川県の評価機関の中ではトップクラスである。消化しきれない危険があり、調査員の協力を得て乗り切るしかない、嬉しい状態である。

第三者評価の他に、横浜市から認定された「指定管理者第三者評価」、神奈川県知事から選定を受け「認知症対応型グループホーム及び小規模多機能型居宅介護事業所の外部評価」も行っており、主要メンバー全員が、家族から「現職時代よりハードな生活」と評され、健康に留意しながら頑張っている。

評価事業の年間の収支差額は、NPO法人として，本来のボランティア事業に全額注入している。NPO法人故、配当も賞与もできない。

今、最も必要なことは、後継者作りである。主要メンバーの高齢化は避けられない。

折角灯した火を消すことのないように、団塊の世代に引き継いでゆきたいと願っている。

終わり

編集後記

静岡県の西部地方を遠州というが、昔から物作りの盛んなところで、第二次世界大戦後、いち早くオートバイと楽器で世界一となっている。

その楽器でトップメーカーとなった日本楽器製造（現ヤマハ）を再建した川上嘉市氏に関する興味深い話があるので紹介する。

戦前、日本楽器の調律師達は同社のピアノが売れず外国製に人気が集まるのは音質が劣っているからだと思っていた。それを知った川上氏は、ピアノの前に幕を引いてドイツ製か日本楽器製か分らないようにして、彼等に聴き比べをさせ点数をつけさせた。その結果、日本楽器の調律師達は、自分達の会社が製造したピアノの方が優れた音質を持っていることに気が付き、それが同社製のピアノが世界に進出するきっかけとなったのである。

話は変るが三戸岡さんから、二宮金次郎の道徳と経済の一致に付き、外国人をどのようにしたら説得できるのか、そのロジックを考えなくてはとの宿題をいただいた。アングロサクソン・ユダヤ・イスラム等皆それぞれの優れた論理を持っているが、編集子はヤマハピアノの音質のように道徳と経済の融合については報徳精神が最高だと考えている。そこで海外のそれぞれの論理を勉強し、その中から報徳精神に該当する部分をピックアップして新しい考え方を生み出し、その考えを基にして、互いに理解しながらも、依存せず、切磋琢磨していく関係を構築できたらと愚考した。

時節柄、体調には充分ご留意下さい。

（T・N）

まんじ第109号

平成20年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「日進月歩」　　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ110号記念

目次

木更津の月　千坂精一　7
岐路（わかれみち）　太田精一　29
山妖記　森下征二　53
酔狂な将軍義政と三人の女　島津隆子　85
抄訳『古本説話集』　相原精次　117
聖徳銀行秘書室　鯨游海　141
天賦の報徳人　大原孫三郎の一日　堀内永代　159
森田萬右衛門物語　幸山周平　179
桐の花影――吉良側の忠臣蔵――　忠内正之　191
海舟座談余話（明治二十八年七月）　松下壽男　213
東洋のマタ・ハリ　偶感　曽根竣作　233
――男装の麗人、川島芳子の虚と実――
掌編小説　小さなスポットライト　亜木陽一　251
権兵衛の恋　瀧澤中　265
俳句　鷹の呟き㈣　大澤鷹雪　285
スタインベルク・ピアノ、後日譚　伊治哲　289
――〝見えない糸〟に結ばれて――
後日譚　三題　石黒修身　309
誘惑のアルゼンチン・タンゴ　森実与子　325
姉と慕われて　勝山道子　333
墓参　新井宏　343

ジョン・グレン、向井千秋さんなど七名の宇宙飛行士搭乗のスペースシャトル・ディスカバリー号打ち上げ見学記　吉田　豊　355
ヨーベルの響き　吉田　崇
「司馬雑感」あれこれ　吉田忠雄
化粧雑記　鍋屋次郎　365
日本列島にも青銅器時代はあった　山田嘉久　383
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の試練期　鈴木　守　401
源平交代思想　中山喬央　419
消えた室　松下魏三　435
あとがき　宅見勝弘　455
三戸岡道夫　471
491

まんじ110号記念

木更津の月

千坂　精一

一

八時すぎに懇親会が終わり、中締めのあと世話役が恒例の『同期の桜』斉唱を促すと、待っていたとばかりに誰からともなく円陣をつくって肩を組み合った。

今回は唄えるかと思ったが、やはりだめだった。

唄いはじめると、六十年まえのあの光景が昨日のことのように瞼に浮んで、涙が滲み、声が掠れた。

出席者は内地勤務が多く、特攻基地を知らなかった。

（六十年経ってもまだ歴史になっていない）

久坂は、今年もまたそう思った。

散会のあと、それぞれにバーやカラオケへ誘い合っていたが、開会時刻ぎりぎりにホテルに着いたのでスーツのまま出席した久坂に誘いはなく、部屋割で同室になったというAが鍵を渡してくれながら、

「フロントへ預けてゆっくり温泉に入りなさいよ」
と言ってくれた。
久坂は、ボストンバックを持って部屋へ行き、浴衣に着替えて一階のフロントに鍵を預けると、あらためてエレベーターに乗って最上階の浴場へ行った。
温泉地での会合は風呂に入ってからはじめるのが順序だから、この時刻に入浴する客はまれで脱衣場にも浴室にも人影はなく、ひっそり静まりかえっていた。
総硝子の浴室から見下ろすと、箱根湯本駅前の商店街だけネオンが蝟集していて、それが周辺の闇をいっそう濃くしていた。
真下を流れる早川が、闇のなかで光っていた。
(そうだ。今日は十三夜だった)
十三夜に曇りなしというが、なるほど今日は終日快晴だった。
浴槽に入ると、見上げる位置に月が昇っていた。
左肩のあたりがもう少しと思われる程度でほぼ満月に近いその月は、達成した満足感で吻と安堵しているような十五夜より、もうひと踏ん張りと意気込んでいる生気が判然り輪郭に顕われていて頼もしかった。
久坂は、誰もいない浴槽にとっぷり浸りながら十三夜の美しい月を飽くことなく凝視めつづけていた。
そうしているうちに、いちどだけ月を眺めながら極限状態に立たされた人の懊悩に思いを馳せたことがあったのを思い出した。

あれからもう五十年の歳月が経っていた。

二

終戦の年の一月、久坂は練習生教程を卒えて南九州基地の海軍航空隊に配属された。
前年十月、レイテ沖海戦で航空部隊による起死回生の体当たり攻撃も効を奏さず、空母四隻、戦艦三隻をはじめ多数の艦船と航空機を喪い、海軍の誇る連合艦隊は事実上壊滅状態になってしまっていた。
まもなく久坂たちの実戦訓練が開始されようとしている二月初旬、南九州に点在している航空隊を纏めて航空艦隊が新編制され、戦闘隊、攻撃隊、爆撃隊を問わず全飛行隊に体当たり攻撃が命ぜられた。
久坂の所属飛行隊は五百キロ爆弾を搭載する爆撃機で、地上六百メートルに急降下したところで爆弾を投下して反転する猛訓練に励んでいたのだが、せっかく磨いた伎倆も発揮する場がなくなってしまった。
ところが、江川飛行長は、
(体当たりするなんて愚の骨頂だ。機材も惜しいが、鍛え上げた搭乗員を喪うのはもっと惜しい)
と考えて、特別攻撃隊編成後も、
「とにかくこれまでどおり爆撃でやっつけて帰ってこい。体当たりなどはどうしてもだめなときだけだ」

そう隊員を励ましておいて、命中率を高めるために投下距離六百メートルを四百メートルまで縮める訓練を開始させて、叱咤激励した。

そのため久坂たち雛鳥は飛べず、先輩たちの世話や降爆訓練の伝令など雑用に振り廻されてしまった。

三月十七日に硫黄島守備隊が玉砕すると、敵機動部隊は南九州の特攻基地潰しに鉾先を向けてきた。

急遽まだ隊名もついていない久坂たちの飛行隊に命令が下り、翌朝第一波攻撃隊が慌ただしく出撃した。

そして、十九、二十日の両日第二波、第三波とつづいたが、江川飛行長の希(ねが)いも虚しく全機還(かえ)らなかった。

レイテ沖海戦のときは、敵機動部隊の虚を衝いた奇襲だったので成功したのだが、特別のはずが通常になってしまっては防備が固くつけ入る隙がなかった。

飛行隊再建のため、江川飛行長が残存機と搭乗員を率いて山陰地方にある基地に移動してしまったので、残された久坂たちは司令部付となり、偵察員の久坂は電鍵(キー)が叩けるのでとりあえず通信科に編入された。

その後まもなくグラマンの空襲が劇甚になり、久坂たちの基地も毎日執拗な攻撃を受けるようになった。

故障機までも破壊されて、基地は空き家になった。

三

四月に沖縄防衛の〈菊水作戦〉が発令されると、関東や中部方面から特攻機が頻繁に飛来して燃料補給と爆弾を搭載すると、翌日沖縄目指して出撃していった。

そんなある日の宵であった。

久坂は当直を終えて防空電信室を出ると、三日ぶりに顔を出した月に誘われて松林の中を彷徨した。

月光を受けた林の中は森閑としていて、修羅場と化した前線基地にいることをいっとき忘れさせてくれた。

どのくらい歩き廻っただろうか。

前方の草叢あたりで呻き声をきいて歩を止めた。

月明りをたよりに声のしたあたりを探るように見渡すと、一本の松の根方に黒いものが蹲っていた。

久坂は、恐る恐るその黒い塊(かたまり)に近づいて行った。

充分気をつけたつもりであったが、好奇心が注意力を疎(おろそ)かにしてしまったらしく、久坂が近づくと黒い塊はとつぜん呻き声を止めてすっくと立ち上がった。

黒い塊は人であった。呻き声は嗚咽だったのである。

「誰かッ」

月光を浴びて立つその人は、飛行服を着けていた。
久坂は挙手の礼をして所属隊と官氏名を申告した。
「少年兵か」
「そうであります」
「こんなところでなにをしていた」
「はい。月が美しかったので遠廻りしておりました」
その人は、仕種から下士官ではなさそうだった。
「風流な奴だな。俺は木更津空の黒木少尉だ」
やはり士官であったが兵学校出の精悍さはなかった。
「貴様、見たか」
「はい」
久坂は正直に答えた。修正といわれる体罰を受けるのは覚悟した。
「出撃をまえにして女々しい奴だと思っただろう」
久坂は図星を指されて、こんどは返事に窮した。
「まあいい。こっちへきて坐れ」
そう言いながら黒木少尉は、その場に腰をおろした。
久坂は命ぜられるまま黒木少尉と肩を並べて坐った。
「俺は未練で泣いていたのではない。こんなかたちで死に追い遣られるのが口惜しくて堪らなかったのだ」

「――」
「貴様たちのように悠久の大義を骨の髄まで叩き込まれた少年には俺の言うことが理解できんだろうなあ」
黒木少尉は顔を上げて月を眺めた。
「仰言ることがよく判りません」
「よし、説明してやろう。俺もこのもやもやした思いを誰かにぶち撒けなければ腹の虫が治まらんのだ」
「うかがいます」
「よし、聴け」
日頃、分隊士や先任下士官から、
「貴様たちは、余計なことを考えずに、ただ命ぜられるまま果敢に行動をすればそれでいいのだ」
と言われ、理屈は一切封じられていたので、久坂は、黒木少尉がなにを話してくれるのか興味を持った。
「俺たち戦闘機乗りは一機でも多くの敵機を屠るために血反吐の出る猛訓練に堪えてきたんだ。そうだろう」
「そうであります」
「艦爆隊の彗星や九九式だってみんなそれぞれに目的をもって製造された飛行機なんだ。それをなんだ。空戦もせずにただ爆弾を抱えて敵艦船に体当たりしろだとよ。それじゃ俺たちはいったいなんのために死ぬ思いまでして今日まで訓練に堪えてきたんだ。このままじゃ俺たち搭乗員も

零戦も浮ばれないじゃないか」

「――」

「俺たち搭乗員は自分が未熟で負けたのなら諦めるさ。だけどだ、伎倆を揮う機会も与えられずにただ体当たりして死ねと言われてもそんな惨めな死にかたはどうしてもできないんだ」

「――」

「このままじゃ俺は口惜しくて死に切れんよ」

大を仰いだ黒木少尉の頬に涙が伝っていた。久坂は、そんな黒木少尉を慰める適当な言葉はないものかと急いで探してみたが、思いつかなかった。

「雇い兵と言われている学徒出身の予備士官あたりがいくらほざいたところで豪いさんの決めた体当たり戦法が中止になるわけじゃないからもう止めよう。この期に及んで愚痴を言ってみてもはじまらん」

黒木少尉は言うだけ言ってすっきりしたようだった。

黒い雲が出てきて、折角の月を隠した。

「貴様たち少年兵にこれだけは言っておくが、いくら精神力で頑張ってみてももういけない。負けだよ」

「黒木少尉ッ」

「まあ聴けよ。現にこの基地へ飛んでくる飛行機を見てみろ。性能の悪い旧式物ばかりじゃないか。消耗がはげしくて生産が間に合わないんだ。それに奇襲であるべき特攻が常套手段になってしまったんじゃもう末期的症状だ。俺たちの世代は悪い時期に青年になったと悔やんでみたところで所詮は運命と諦めるより仕方がないが、貴様たちのような年端も行かない少年たちまでがこんな下らない戦争の犠牲になっちゃいけないよ。一時の感情に溺れないで生命を大事にするんだぞ」

久坂は返事に困った。黒木少尉の言葉は軍人としては女々しいが、一般人としてみれば情があった。

「ここはなんとしてでも生き延びて、やがてくるにちがいない平和な時代を思う存分に生きるんだ。いいな。これは俺の遺言だぞ。判ったな」

久坂はいつか黒木少尉の言葉に首肯いていた。

「俺は文学部の学生だったが、平和な時代がきたら日本文学をやってみろよ。俺は大学で鷗外を研究していたんだが、学業なかばで放り出されたんで未練があるんだ。貴様にやる気があったら俺の遺志を継いでくれ」

せっかくの研究を無理矢理中断させられたのではどんなに心残りだったことだろう、と久坂は同情した。

「自分には、文学などとてもできそうにありません」

時節柄小説の類は一切読ませてもらえなかった。

「小説は人間が書かれているしロマンもあってたのしいぞ。数多く読めば直に馴れるし判るようにもなるさ。そうなれば自然に興味が湧いてくる。とにかく鷗外を全部読んでみろ。俺の最期に出会った貴様に鷗外の蔵書を全部やりたいところだが、生憎このあいだの空襲でみんな灰になってしまったらしい。どうせこっちも明日は木っ端微塵になる身だから別に悔いはないが……」

黒木少尉はそこで絶句して、唇を噛みしめた。
そのとき、とつぜん雨滴が落ちてきた。
黒木少尉が立ち上がったので、久坂も倣った。
黒木少尉は向き合ったまま久坂を見詰めていたが、
「月が貴様を引き合わせてくれた。死に際に胸の閊えを吐き出せてさっぱりしたよ。話を聴いてくれて有難う。俺は明朝〇五〇〇に出撃するが貴様は断じて死ぬんじゃないぞ。いいな。それじゃこれで別れだ。さらば」
そう言って久坂の肩を敲くと、足早に去って行った。
久坂は雨に打たれながらその場に立ち尽くしていた。

四

翌朝、久坂は四時に目覚めた。
昨夜はあれから宿舎に帰って直ぐに床に就いたのだが、感情が昂ぶっていていつまでも眠れなかった。それでも明け方近くになって少しのあいだ微睡んだらしく、魘された自分の声で眼が覚めたのである。
昨夜からの雨音はまだつづいていた。
久坂は、今日の出撃は中止だと思ったがそれでも気になって念のため木更津空の仮宿舎へ行ってみた。

宿舎は深閑としていて、人の動く気配はなかった。
久坂は安心して宿舎に戻り、短時間熟睡した。
雨は午後になって上がり、薄陽が射してきた。
久坂は午後非番だったので、黒木少尉を訪ねてみた。
下士官宿舎には搭乗員たちがいたが、隣の士官宿舎はひっそりしていたので、扉を開けて内部を覗くと黒木少尉が独り窓際に立って陽射しを眺めていた。
久坂に気づいた黒木少尉が、笑って手招きした。
久坂は、黒木少尉に近づいて行った。
「よくきたな。まあ坐れ」
久坂は、黒木少尉と向かい合って坐った。
「雨でまた一日生き延びたよ。やっと覚悟を決めたのに出撃中止だ。冥土への旅立ちが延びてまだ生きている有難さよりも、明日まで凝と待つ身のほうが辛いよ。いま頃は沖縄の海深くに沈んでいるはずだと思うと堪らなくて、それでみんな酒を飲んで誤魔化しているんだ」
久坂は、隊員たちの心中を察して胸が詰まった。
「みんな隣りだから、貴様と二人で別盃を交わそう」
久坂は盃を受け取りいっきに飲んだ。涙が溢れてきた。
「泣くな。貴様も帝国海軍軍人じゃないか」
黒木少尉は、穏やかな眼をしていた。
「俺はいま、木更津でのことを思い出していたんだ」

黒木少尉は、瞼に浮べるようにして話しはじめた。
「木更津に太田山という丘陵があってな。日本武尊が妃の弟橘姫を偲んだところだという伝説があるんだが、その太田山に登ると木更津の町が一望できるんだ。木更津港の彼方に東京湾の海が眩しく光っていてな、晴れた日には富士山も見える。平和になったら貴様もいちど行ってみろよ。いいところだぞ。こっちへくるときは恰度桜が満開でな。一枝折って持ってきたんだが見事な桜だった。貴様にも見せてやりたかったな」
久坂は、そんな黒木少尉に好感を持った。
「俺は太田山が好きだった。日本武尊が東夷征討の途次に相模の海で暴風雨に遭遇したとき、海神の怒りを鎮めるために自分の身替りになって海中に身を投じた弟橘姫を偲んだという伝説にはいかにも相応しいところなんだ。俺はその伝説を信じて夜になると太田山へ出掛けて行き、月夜の山道を独りでよく歩いたよ」
「自分も機会があったらきっと訪ねてみます」
そのとき、隣の宿舎から哀調の唄声が漏れてきた。

沖の鷗と飛行機乗りは
どこで散るやらネ果てるやら
ダンチョネ

俺が死ぬときゃハンカチ振って

友よあの娘よネさようなら
ダンチョネ

手拍子も合いの手も入らなかった。
唄が終わると、程なく一人の士官が帰ってきた。
久坂は挙手の礼をして所属隊と官氏名を申告した。
「俺の最期に出会った友達だ。弟のような可愛い奴だ」
「黒木、別れの歌をやっておこう。こいよ。貴様も入れ」
久坂は、黒木少尉に促されてあとについて行った。
「さあ、別れの儀式をはじめよう」
誘いにきた士官がそう言うと、円陣をつくった。
久坂も黒木少尉と並んでその輪に加わった。互いに肩を組み合うと、躰で拍子をとって唄った。

貴様と俺とは同期の桜
おなじ航空隊の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟
みごと散りましょ国のため

貴様と俺とは同期の桜

おなじ航空隊の庭に咲く
血肉分けたる仲ではないが
なぜか気が合うて別れられぬ

貴様と俺とは同期の桜
離れ離れに散ろうとも
花の都の靖国神社
春の梢に咲いて会おう

みんな泣きながら唄った。
久坂も涙が留め処なく流れ、声が掠れた。

翌朝は白い雲のあいだから青い空がのぞいていた。
紅白の吹き流しが靡く戦闘指揮所のまえに整列した木更津空の零戦隊員たちは、司令の訓示を受けたあと、隊長の指示を聴き、別れの盃を交わし終えると、
「かかれッ」
の号令とともに、一斉に搭乗機目掛けて早駆けした。
久坂は整備員たちと一緒に黒木機の側に立って迎えた。
黒木少尉が早駆けでみるみる近づいてきた。

「おう貴様か。よくきてくれたな」
「ご成功をお祈りいたします」
「うん」
そう言うと、黒木少尉は手を差し出した。
久坂は、その手を確り握って訣(わか)れの挨拶をした。
「見送ってくれて嬉しいよ。元気でな。さらばだ」
黒木少尉は慌ただしく翼に上がり操縦席に入った。
プロペラが廻り出すと、久坂は機上の黒木少尉に挙手の礼をしておいてから、滑走路へ向かって急いだ。
一機、また一機と零戦の特攻機は飛び立って行った。
黒木機が翼を震わせながら滑走路に入ってきた。
いったん停止してエンジンを全開にすると、未練を振り払うようにして轟音とともに全速力で発進した。
久坂は黒木機を凝視(ぎょうし)して懸命に略帽を振りつづけた。
飛び立った黒木機は、白い雲の彼方に消えて行った。

五

それから四箇月後の八月十五日に戦争は終わった。

久坂は、二十二日の司令の解隊宣言で終戦を知った。
いったん家族の疎開先へ復員した久坂は、翌年一月中旬に焼失を免れた東京郊外のわが家へ戻った。
十五年戦争のなかで育った久坂たちを、国家ぐるみの精神統制（マインドコントロール）で国家神道と皇国史観を洗脳し、純粋培養して筋金入りの軍国少年に造り上げておきながら、終戦と同時に国家は骨の髄まで叩き込んだその価値観を全面的に否定して、厄介者扱いして抛（ほう）り出した。
久坂は国家や教育指導者たちに不信感を抱き、それが嵩（こう）じて誰も信用できない人間不信に陥っていった。
二月中旬に通貨改正で新円が発行されてそれまでの預貯金はすべて封鎖されてしまったので無一文同然になり、あらたに収入を得なくてはならなくなった。
久坂は、さいわい偶然知り合った先輩搭乗員の闇物資運搬手伝いをしたり、中央競馬出馬表の筆耕などもあって、物価騰貴（インフレ）の世をどうやら食い繋いでいった。
昭和二十五年に勃発した朝鮮戦争の軍需景気で経済が立ち直り、世の中がようやく落ち着きをとりもどしたころには、久坂もすでに社会人になっていた。
映画や麻雀にも飽きた久坂は小説を読んだ。
野間宏の『真空地帯』や大岡昇平の『俘虜記』などの戦記文学を読むかたわら、太宰治や三島由紀夫にも手を伸ばし、読み了えると神田へ行って新刊本を漁った。
神保町界隈の古書店で鷗外、露伴、藤村なども購入してみたのだが、現代作家に馴染んだ久坂にはたとえ文豪であろうとも古典作品は取っ付きにくかった。

小説は面白ければいいので、学術的に研究する人は余程優れた頭脳の持主なのだろう、と思いをめぐらせているとき、ふと黒木少尉のことが思い出された。
（今年は十三回忌になるな）
そう確認すると、黒木少尉が最期のときに話してくれた木更津の太田山に行ってみようと思いついた。
手帳のカレンダーで確かめると、生きて還れぬ出撃を見送った日が今年は恰度日曜日になっていた。
休日には新宿から内房線直通の快速があった。

六

その頃の木更津はまだ町のたたずまいであった。
例年より早い開花の桜はすでに散りはじめていた。
久坂は、夕刻までの時間潰しに町中を見物することにして、昼食を摂った蕎麦屋できいた見物順序にしたがい、まず駅近くの光明寺からまわりはじめた。
ここには歌舞伎狂言の『与話情浮名横櫛（よわなさけうきなのよこぐし）』で有名になった与三郎の墓があり、相棒の蝙蝠（こうもり）安こと山口滝蔵の墓は近くの撰択寺にあった。
そのあと、狸ばやしで知られた証誠寺へ廻り、童謡が野口雨情作詞、中山晋平作曲であることを知った。

矢那川沿いに海岸へ出たところに、南町の紺屋島屋の型付職人与三郎が網主源次の愛妾お富と出会い、逢瀬を重ねるようになったという見染(みそめ)の松があった。

木更津港へでた久坂は、対岸に航空自衛隊基地の滑走路が眼に入った途端思わずその場に佇立した。

黒木少尉が飛び立った旧海軍木更津基地である。

今日は休日なのでひっそり静まりかえっていた。

凝っと見詰めつづける久坂の眼に、いつか幻覚が現れ、つぎつぎに出撃して行く零戦の勇姿が浮んだ。

どのくらい立ち尽くしていただろう。気がつくと東京湾を隔てた三浦半島の山脈に西陽がかかっていた。

久坂は踵を返すと、目的の太田山へ向かった。

日本武尊のころは太田山の下まで海だったというから、いま久坂は海の底を歩いていることになる。

駅近くの酒店で酒を一本買い、口金をコルク栓に替えてもらうと、念のため太田山への近道を尋ねた。

店主は、これから花見かと訝しんだようだったが、訊きもせず黙って道順をおしえてくれた。

一升壜を抱えて太田山への道を歩いて行くと、花見を終えて上機嫌の酔客たちが三々五々下ってきた。

麓の薄ら寒さも山頂に着いたときは汗ばんでいた。

眼下の町に灯がともると、山頂に人影はなくなった。

昏くなると、月が皓々と照った。木更津の月である。

黒木少尉は出撃前夜山道を登ってここに立ち、あの月を眺めながらなにを考えなにを思ったであろうか。

人は誰も誕生と終焉のときを自覚してはいない。

『論語』でも「死生命あり、富貴天に在り」といっている。

人の生き死には天命で決まっており、人力ではどうすることもできない、というのだ。

死期が判らぬからあっけらかんと過ごせるのであって、頭脳も五体も至極満足でいるところへ、とつぜん、

「明日死ね」

と宣告されたらそれまで平常心でいられるだろうか。〈特攻〉は天命ではない。人為的な仕業なのである。

黒木少尉は、ここからあの月を見て、

(生きていたい)

と懊悩したであろう。

人の生死が天命ならだいたい数十年の寿命は与えられるから、そのあいだにやりたいことは充分できる。

また与えられた寿命が短かくても、体力が衰えれば自覚するから、それなりの予定は立てられる。

だがとつぜん下命によって天命を作為的に縮められたら、人生設計が狂ってしまい無念で諦めきれない。

たとえ強制的に徴集されたとはいえ、軍人になったからには命懸けの戦闘要員にかわりはない。ましてや飛行機乗りは艦船勤務より出撃回数が圧倒的に多いし、死ぬまで出撃を繰り返すことになる。

だが、それでも死はあらかじめ決まってはいない。

それが特攻となると予告によって死を自覚させられる。

つまり出撃日が命日で、こんな酷い仕打ちはない。

黒木少尉にかぎらず、特攻出撃した人たちはみな戸惑い気が狂うほど悩んだことだろう、と察せられる。

黒木少尉はここでどんなにか懊悩したに違いないが、果たして諦めの境地にまでいたったであろうか。

それは、黒木少尉を見詰めていた月しか知らない。

木更津から南九州基地へ飛来してその日のうちに整備、燃料補給、爆弾搭載を了えて待機したが、夜半から降り出した雨が止まず翌朝の出撃は中止になった。

そして、雨つづきで中止また中止が繰り返された。

葛藤のすえ漸く諦めの境地に達したのにはぐらかされ、苦悩を繰り返してふたたび覚悟を決め直したのにまたはぐらかされる、という残酷な三日間を堪え抜いた黒木少尉の強靭な精神力に、久坂は深く感銘した。

無人の山頂に風が吹きはじめて肌寒くなってきた。

久坂は、花見客が坐った縁台の上に供えておいた一升壜のコルク栓を抜くと、あたりに酒を撒いて黒木少尉鎮魂の儀式を執り行った。

そのあと久坂は桜の枝を手折り、花片（はなびら）を一枚ずつ撒きながら黒木少尉が歩いた月夜の太田山道を下った。

黒木少尉の浴びた花吹雪が、久坂にも降りかかった。

（了）

岐路（わかれみち）

太田　精一

（一）

夕闇が迫って、冷気が早池峰山から下りてきた。

遠野の秋は早い。日中の日差しは強くても、盆を過ぎると夜は冷える。靄が薄墨を流したように山々を取り囲み、闇の中に消えて行く。

大友浩一は、安倍氏の屋敷跡といわれる小高い丘の上に立っていた。

安倍氏は、平安末期奥六郡を支配した蝦夷の族長である。前九年の役で源頼義と戦い康平五年（一〇六二）に滅んだ。屋敷跡は、常堅寺の裏手にあり、近くには、河童淵で知られる小川が流れている。丘は、潅木が茂り、雑草が生えている。彼はふと思った。

（安倍氏の栄えた十一世紀には、川幅も広く防御のための堀の役割を果たしていたのかもしれない。遠野物語にある河童の伝説は、滅亡した安倍一族の大和朝廷に対するその後の姿を表したものではないか）

彼は東北大学の四年生ですでに就職も決まっている。夏休みを利用し、一ヶ月かけて、東北の

各地を旅行する予定で、二週間前に仙台を出た。貧乏学生のため、友人の家を泊まり歩く旅である。一関、平泉、花巻と旅を続け、民話の里、遠野に足を踏み入れた。遠野には、友人はいなかったが、民俗学に興味を持つ浩一には、是非とも訪れたい土地である。だが所持金はわずかしか残っていない。

「どこかの農家で、泊めてくれるところはないだろうか」

浩一は、旅館に泊まることは、避けたかった。暗闇の中、心細くなった彼は、とりあえず人家のある街道筋に出ることにして、歩き始めた。

すると、一軒の農家の灯りを見つけた。藁葺きの家でL字型に曲がっている。玄関の左脇に馬小屋があり、馬の臭いが漂っている。

浩一は、厚かましいと思ったが、思い切ってその家の戸を叩いた。

がたがたと戸を開ける音がして若い娘が顔を出した。

彼には、その娘が観音さまの化身であるかのように見えた。

「東北を旅している学生ですが、日が暮れて困っています。旅館に泊まるほどの余裕がありませんので、民家で泊めてくれるところを探しています。お宅のどんな所でも結構ですから、一晩泊めてくれませんか」

娘は、家族に浩一の来意を伝えた。すると奥から、主人の声が聞こえてきた。

「こんな家だども、よがったら泊まっていってけれ」

娘は、戸を開け、浩一を家の中に入れた。中は、広い土間になっていて、大きな竈が置いてある。その竈は、住居と馬小屋の間にあって、冬は暖房の役割を果たしている。土間の脇には、大きな板敷きの居間があった。そこには、囲炉裏が掘ってあり、家族のお膳が並べられていた。居間には、娘の他に壮年の夫婦とお婆さんと小学六年生くらいの息子がいた。

「まんず、上がってけれ。何もねども、温ったけえ汁と飯と焼いた魚ばある。酒っコは飲むべえか」

主人の高橋市太郎が声をかけた。年齢五十歳くらい。長年の農作業のため、手は節くれ立っている。だが、よく観ると鼻筋の通った中肉、中背の好男子である。

その脇に、妻のみよが座っていた。丸顔で、年恰好は四十五、六。農家の嫁にしては、色白でしわも少なく、気立ての優しそうな女性である。

お婆さんはうめと言い、市太郎の母親で、年の頃七十を過ぎている。

息子の名は、順一、小学六年生である。背が高く、すでに百六十センチを超え、母親のみよを上回るほどであった。

娘の名は、佳子と言った。高校三年生で、すでに盛岡の東西銀行盛岡支店に就職が決まっていた。

浩一は、食事をご馳走になり、しばらく世間話をした後、布団の敷いてある客間に案内された。静寂を突き破るように、梟の鳴き声が聞こえる。旅の疲れが出たのか床に就くとすぐ眠りに着いた。

（二）

翌朝、浩一は、いつもより早く目が覚めた。それでも家族は、全員起きていて、すでに農作業

に出ている。

佳子だけが、家事をするため残っていた。

「お早う。朝は早いんだね。皆もう田圃に出てしまったの。順一君も一緒ですか」

「そんだよ。最後の田の草取りに行っただす」

佳子は、紺がすりのモンペに萌黄色のブラウスを着て、黒褐色の髪を二つに束ねていた。ブラウスは、着古していたが、洗濯が行き届いていて、清楚な感じがする。顔は、母親に似て丸い。だが、鼻筋が通っていて、彫が深いところは、父親に似ている。濃い眉が一筋に伸び、長く黒いまつ毛がまばたきする度に、大きな瞳を覆い隠す。笑顔を浮かべるとその口もとに綺麗な白い歯がこぼれるのである。

浩一は、彼女の中には、古代の昔から東北に住む蝦夷の血が流れているのではないかと思った。

「昨夜は、泊めて頂いて有難う。ただで泊まって何もしないで帰るのは心苦しいから、何か手伝わせて欲しい。薪割りでも、水汲みでもするよ」

「お客さんだば、何にもすなくていいだべさ」

「そう言われてみても、ぼくは手持ち無沙汰で困っている。ご両親にも挨拶して帰らなければならないから、帰ってくるまで待つ。何時頃帰るの」

「弁当持って田圃さ行ったから、帰りは夕方になると思うのす」

浩一は迷った。両親の帰りを夕方まで待つか。それとも置手紙をして、今から遠野駅に向かうか。

「もう一晩泊まっていげばいい。そすたら大友さんからいろんな話、聞かれっから」

佳子は、顔を赤らめながら伏目がちに言った。浩一も親切にしてくれたこの家の家族に黙って立ち去るのは、気が引ける。だが、何よりも佳子の一言が嬉しく、夕方まで待つことにした。

「もし、ご両親たちが、夕方遅く帰って来るようであれば、もう一晩泊めてもらうことになってしまう。それでは申し訳ないから、何かぼくで出来ることをしておきたい」

「んだば、薪でも割ってけろ。それから時間があれば、馬小屋に新しい藁でも入れといてけろ」

そう言って佳子は、短く切った丸太の積んである軒下に浩一を案内した。彼は、これでやっと心置きなく泊ることができると思い、薪割り作業に入った。

空気が澄んで、空は抜けるように青い。気温が上がってきた。斧を振る腕、肩、胸が汗ばみ、シャツを脱いで半裸となった。筋肉が躍動している。お茶を運んできた佳子が一瞬立ち止まり、チッラと浩一の上半身を眺め、目をそらした。

「握り飯を用意すたから、少し休んでけれ。おかずは、漬物すかねえだども食べてけれ」

佳子は、握り飯、急須、湯のみ茶碗、漬物の入った鉢を置いて立ち去った。浩一は、木陰で昼食を取った。心地よい爽やかな風が吹いて小鳥が木の枝を飛び交い、囀っている。

庭の片隅には林檎の木が植わっている。その木には、薄く赤みが差した林檎がたわわに実っていた。もうすぐ食べ頃となる。浩一は、その実が可憐な佳子の姿を映し出しているように思えるのであった。

背戸の林には、楢の木が伸びている。家の前を少し行くと河童淵に通ずる小川があり、土手には夏草が生い茂っていた。

昼食後、浩一は、馬小屋に藁を敷いた。馬は、主人の市太郎が連れ出していない。古い藁の上

に、新しい藁を敷く。糞尿の染み付いた古い藁に新しい藁が加わり、野趣溢れる臭いが馬小屋の中に漂っている。

夏の一日は暮れた。浩一は、できればもう二、三日滞在したいと思うようになっていた。

（三）

日も沈み、高橋家の家族が馬を連れ、帰ってきた。高く積まれた薪と新しい藁の敷いてある馬小屋を見て市太郎は言った。

「大友さん。たった一晩泊ったばりで、こんなすて働いてもらってすまねえだ。銭っコさ払わねばなんねえだども、俺らのような百姓は、そったらものをたんと持っていねえす。銭っコはねえだども、食い物はいっぺえあっから、よがったら何日でも泊まってけろ。すばらくのんびり骨休めすたらいい」

「有難うございます。高橋さんにそう言われると、つい甘えたくなってしまいます。遠野は、民話の宝庫なので、前から興味を持っていました。こうなったら四、五日ご厄介になって昔話を聞いて帰りたいと思います。ただ、何もしないで食べさせて頂くのは心苦しいので、畑仕事や草取りを手伝わせてください」

「そんたらば、気の向いた時に畑仕事でも手伝って、どんぞいつまでもいてけろや」

浩一は、草刈や田畑の手入れの手伝をしながら、民話の取材をし、夜には佳子や順一の勉強を看てやったりして一週間ほど過ごした。

遠野を発つ前日、浩一は、佳子を庭の隅に立っている林檎の木の下に誘った。

「今晩十時、林檎の木の下で待っている。来てくれるね」

佳子は、うなずいた。

浩一は、夕食が終わり家族の寝付く十時少し前に外に出た。夜空には無数の星が光っている。静寂な闇の中で、蛙の声が聞こえている。星明りを頼りに腕時計を見た。針が文字盤の十時を指すのがかすかに見える。すると暗闇の中から佳子が姿を現した。水玉模様のスカートを履き、白いブラウスを着ているのが、夜目にも分かる。

浩一を見つけると木に手を伸ばし林檎を二つもいで、その一つを彼に与えた。甘酸っぱい味が、口の中に沁みた。浩一が顔をしかめると、それを見て佳子は笑った。

「いよいよ明日発つことにした。本当に楽しかった。ここで過ごした一週間は一生忘れない。もう会うことはないかもしれないが、手紙を書くよ。お互いに来年は社会人となる。環境も変わるだろうが、新しい生活に向かって生きて行こう」

浩一の言葉をじっと聞いていた佳子は、ただ黙ってそっと手を差し伸べた。浩一は思わずその手を握り締めた。佳子の温もりが伝わってくる。その手を引き寄せ浩一は、佳子の肩を抱いた。浩一の胸の中に顔を埋めた佳子は、しばらく彼の心臓の鼓動を聞いた後、顔を上げ囁いた。

「わたすも大友さんのことは、忘れません。盛岡に着いたら住所教えっから手紙必ずください」

佳子は、心臓が激しく鼓動し、胸が締め付けられるような思いに駆られ、身を引いた。すると、浩一の手が伸び、佳子を抱え込んで胸元に引き寄せた。浩一の唇が、佳子の唇を求めて覆いかぶさってくる。佳子は、顔を左右に振ってその唇を避けようとした。が、別の意志が働いてそれを

させない。やがて二人の唇が重なり合い、容易に放れようとしなかった。
唇を離した浩一は、星明りを頼りにじっと佳子を見つめた。彼女の顔から涙が一筋流れている。
「必ず手紙を書くからね」
そう言い残して浩一は、家の中に入った。
佳子は、しばらく林檎の木の下で、未知の世界に踏み込んだ自分が自分でないような気がして、ぼんやりと星を眺めていた。
翌朝、浩一は、高橋家の家族に見送られ、遠野を後にした。釜石に出て陸中海岸を北上し八戸まで旅を続けた。北に進むほど秋の気配が強く感じられる。その後、青森に出て弘前、大館、秋田、酒田、新庄、山形を経て仙台に戻るつもりであったが、遠野での滞在が伸びたため、予定を変更し、八戸から東北本線で一路仙台に戻ることにしたのである。旅費もほとんど使い果たし数百円しか残っていなかった。
仙台の下宿に着いてからすぐに浩一は、高橋家に宛て手紙を書いた。市太郎と佳子から別々に返事が届いた。佳子の手紙から、林檎の木の下での抱擁が、現実であると理解することにためらいを感じている様子が読み取れた。
「あの星の輝く林檎の木の下でのことは、夢の中で起こった出来事のように思えてなりません。早池峰の山から抜け出した天狗が、大友さんの体を借りて林檎の木の下に舞い降り、私を虜にして、また山に戻って行ったような気がしています。でも、たとえ幻の出来事だったとしても、私の心の中にいつまでも消えないで残ることでしょう」
夏休みも終わり、仙台平野の稲は刈り入れを待つばかりとなっていた。

日本万国博覧会が大阪で開催され、国産の人工衛星「おおすみ」の打ち上げが成功。戦後二十五年経って日本人もようやく誇りと自信が持てるようになった。都会に人口が集中し、巷には、いしだあゆみの歌うブルーライト横浜が流れている。昭和四十五年の夏も終わりに近い頃のことであった。

（四）

三十年の時が流れた。浩一は、洋光商事に就職し、鉄鋼部門で長年活躍してきた。外国生活も長く英国、西独、豪州の各国に駐在した。昨年の平成十一年から、子会社の八木鋼材の専務取締役となっている。会社は、大田区北糀谷にある。
その間、経済立国への道を歩んだ日本は、一九七〇～八〇年代に、貿易、投資の自由化を図り、高度成長期を経て先進国の仲間入りを果たした。それによって、八十年代は、世界第二の経済大国として繁栄を誇るまでになった。浩一も洋光商事の企業戦士として昼夜を分かたず働いてその繁栄を支えてきたのである。
だが、その繁栄も昭和天皇の崩御の頃から、陰りが見え始めた。一九九〇年代になって、株価の暴落が始まり、金融関係機関の破綻が相次いで起こった。いわゆるバブルが崩壊し、「失われた十年」といわれる日本経済「冬の時代」が到来したのである。
その長い冬も二十一世紀を迎え、やっと雪解けの兆しが見え始めていた。
建設、機械業界からの注文も増え、浩一は多忙な毎日を過ごしていた。

一月の半ばを過ぎた寒い日のことである。

浩一が、外出先での昼食を終え、席に着くと総務課の社員で秘書を兼ねている山下美紀がメモを見ながら言った。

「あの、専務、留守中に女性から電話がありました。笹井佳子さんとか申しておりました。また電話するそうです」

「笹井さん。聞き覚えのない名前だなあ。会社とか地名とか他に何か言わなかった」

浩一は、行きつけの料理屋かバーの女性で笹井という女性がいたかどうか記憶を手繰ってみた。だが、心当たりはない。

（まあいいや。必要ならまた電話をかけてくるだろう。それにしてもちょっと気になる）

彼は、女性には縁のない職場で、取引先の女性からも余り電話を受けたことはない。また、五十台の半ばを過ぎて、体力の衰えを感じるようになったため、必要以上の夜の付き合いは取引先といえども避けていた。だから、特定の女性との交際はまったくないのである。

一時間ほどして再び笹井と名乗る女性から電話を受けた。

「あの、笹井佳子と申します。覚えていらっしゃらないかもしれませんが、遠野の高橋の娘です」

か細いためらいがちな声が受話器を通して聞こえてきた。

「遠野の高橋さん。遠野には取引先も、知り合いもありませんが」

「あの、洋光商事さんにお勤めになっていた大友さんではございませんか。洋光商事さんに電話しましたら、大友浩一さんはすでに退職されて、八木鋼材の専務さんになっているとお伺いしましたので電話してみました。私、三十年前大友さんが仙台の大学の学生であった頃、一週間ほど

泊っていらした高橋市太郎の娘です」

浩一は、記憶の糸を手繰り寄せ三十年前の学生の頃を思い返していた。すると、次第にあの遠野の田園風景が蘇ってきた。そして、林檎の木の下の夜のことを思い出し、思わず大きな声を上げた。

「高橋佳子さん。ああ遠野にいて盛岡の東西銀行に就職された佳子さん。思い出しました。あの時は、本当にお世話になりました。お父さんはご健在ですか。あちこち転勤して住所が変わり、もう二十年くらい年賀状も差し上げないでご無沙汰しています」

「父は五年前、母は、三年前に他界しました。弟が後を継ぎましたが、農業では立ち行かないと言って、釜石で食堂をやっております」

言葉は、標準語で受話器からは、成熟した女性の優しい声が聞こえてくる。

「そうですか。少しも知らず大変失礼しました。ご両親については、心からお悔やみ申し上げます。このところ仕事が立て込んでおりますので、すぐとは参りませんが、折を見てお墓参りをさせて頂きたいと思います。お墓は、遠野にあるのですか」

「ええ、あの家の近くにあります。できれば一度お会いして、お話をしたいと思います。近いうちにお時間を頂けないでしょうか」

「はい、分かりました。ぼくも一度会って、話したいと思います。二週間後なら時間が空きますので都合の良い日をおっしゃってください」

「それでは、来月の十一日、建国記念日は、いかがでしょうか。銀座三越の正面ライオン像の前、午後二時にお待ちしております。顔をお忘れになっているといけませんので、私は、川端康成の

単行本「古都」を胸に抱えております。

「分かりました。それでは、来月十一日午後二時、銀座三越前に参ります。三十年ぶりですからぼくの顔も変わっていると思いますので八木鋼材と印刷した茶封筒を持って参ります」

浩一は、電話を切った後、しばらくぼんやりと部屋に飾った水仙を眺めていた。すると遠野を出た後の出来事が頭に浮かんできた。

（仙台に帰って二、三回手紙の交換をした。東京の洋光商事に就職してからも三年ほど佳子と文通した。だが、仕事に追われ盛岡にも遠野にも一度も行かなかった。そのうちに、英国への転勤が決まり、赴任前に知人の紹介で結婚した。赴任してからもクリスマスカードの交換は、しばらく続いた。ところが、帰国する前の年たしか昭和五一年だった。佳子からのクリスマスカードに結婚すると書いてあった。相手は同じ銀行の東京から転勤してきた行員であると）

その頃から浩一は、佳子との邂逅が、早池峰山の神のいたずらで、幻の中の出来事と思うようになった。だが、佳子の電話を受けてから、何となく落ち着かず、ほのかな青春の香りが、体を包み込むような感覚にとらわれるのであった。

（五）

いよいよその日がきた。銀座三越前には四十台半ばの女性が、単行本を抱えて立っている。丸顔で鼻筋が通り、彫が深いところは、昔のままであった。だが、三十年の都会生活は、彼女を洗練された美しい女性に磨き上げていた。濃いグレーのオーバーコートに身を包み、チェックの入った紺色のマフラーをしている。

「高橋佳子さんですか。大友浩一です」

「はい。そうです。本当にお久し振りですね。大友さんは、そんなにお変わりになっていませんからすぐ分かりました」

佳子は、よどみのない標準語で語りかけてきた。

「お茶でも飲んで、お話ししませんか」

「いいですね。そのつもりで参りました」

近くの喫茶店に入り、席に着いてコートを脱いだ。やや長めの栗色のスカートを履き、クリーム色のブラウスにベージュの上着を着ている。

「久しくお会いしませんでしたが、お元気でお過ごしですか」

佳子は、改めて浩一に挨拶した。

「あれから三十年になりますね、その間にいろいろなことがあり、お互いに別々の人生を歩んできました。でも、遠野でお世話になったことは、忘れたことはありません」

「あの頃は、楽しかったわ。まだ十七の高校生ですもの。未来の希望に燃えていました」

「ぼくが、ロンドンにいる時に、盛岡から結婚するというお手紙を頂きました。結婚されてから、東京に越されたのですね」

「はい。主人の転勤に従って、東京に参りました」

「それで、お子さんは」

「二人います。上が女で下が男です。二人とも大学を出て勤めております」

「ご主人は、東西銀行にお勤めでしたね」
「東西銀行は十年前に退職しました。今は、別の会社で経理の仕事をしております」
佳子は、主人のことについては、余り話したがらない。浩一は、そんな雰囲気を察し、詮索しないことにした。
「この前、電話を頂いた時に、ご両親が他界されたと聞きしました。改めてお悔やみ申し上げます。お墓も遠野にあるとお伺いしましたが、時々は、お墓参りに行かれるのですか」
「いいえ、あまり行っておりません。弟が釜石におりますので、まかせっきりになっています。ところで、大友さんは就職されてから、どうされていたのですか」
「洋光商事に入ってから、鉄鋼部門一筋できました。根が固くて融通が利かないから、向いていたのかも知れません」
「そんなことはありませんわ。少なくとも私の知っている大友さんは、教養があって、いろいろなことに興味を持ち、挑戦して行くような方でした。結婚されたのは、ロンドンに行かれる少し前でしたね」
その頃の佳子は、まだ結婚のことなど考えていなかった。だが、浩一からの結婚通知を手にして、にわかに現実味が増し、結婚という二文字が重く心にのしかかってきた。
（大友さんと結婚したかったのかしら。結婚の対象として見ていたわけではないのに、大友さんが遠いところに行ってしまう。林檎の木の下での抱擁は、大友さんを恋していたからではない。大学生の彼に憧れ、好ましく思っている自分が、誘われるままに口づけを交わしてしまったのだ。きっと林檎の精のいたずらだったに違いない）

そう思うことにして、佳子は、大友への淡い想いを心の奥底に閉じ込めたのである。
佳子は、大友と話しているうちにふと思った。
（人生という長い航海には、順風も吹けば逆風も吹く。フォローの風が吹いた時に、それを的確に捉え、それに乗ることができるかどうかによって、その後の人生が決定づけられる）
「大友さん。お子さんは」
「ええ、二人いてあなたと同じ、上が女で下が男です。二人とも一応大学を出て、勤めています」
「そうですか。今は、専務さんで、幸福な家庭を築かれたのですね」
佳子は呟いた。
「幸福といえば、幸福ですが会社と自宅を往復するだけの単調な生活です」
佳子の身の上に何か変わったことがあって、相談したいのではないかと浩一は思った。
「大友さん。またお会い頂けますか。会社にお電話してもご迷惑ではないかしら」
「別に構いません。いつでも電話ください。ただ、会議中で電話に出られない時もありますので、その時にはお許し頂きたいと思います。念のため、あなたの電話番号を教えてください」
二時間ほど喫茶店で過ごし、二人は分かれた。別れ際に、佳子はそっと手を差し出し、握手を求めた。浩一は、その手を握り返し、佳子の顔を見た。瞳が潤んでいる。
「じゃあまた。さようなら」
足早に立ち去る佳子の姿を見送り、浩一は有楽町の駅に向かって歩いた。冬枯れの街の中を小雪が舞っている。ネオンが、浩一の心を映し出すように光っては消えていた。

（六）

春が過ぎ、梅雨が明け、夏がやってきた。

浩一と佳子は二月に再会以来、数回会った。親しみが増し、何でも包み隠さず話せるような仲になっていた。

夕闇の迫る頃、佳子からの電話を受けた浩一は、横浜〝みなとみらい〟のイタリアン・レストランで夕食を共にした。食事後、海岸を散歩し、横浜グランドインターコンチネンタルホテルのロビー脇にある喫茶コーナーに入った。街は、すでに夜の帳に包まれている。折り良く窓際の席が空いていた。波間に漂う船の灯りが揺れている。船着場は、遊覧船の乗降客で賑わっていた。暗い海面に、ネオンが光っては消えている。それをぼんやりと眺めていた佳子は呟いた。

「私、やっぱり離婚することにした。この前からずっとそのことで悩んでいました」

「どうしてまたそうすることにしたの」

「もうずっと前から主人とは、うまく行ってなかったの。結婚して十年ぐらいは幸せだった。真面目に働いて、東西銀行の渋谷支店の支店長代理までになりました。でも、どこで間違ったのか、バーの女の人と仲良くなり、その人のアパートに入り浸って時々しか家に帰ってこなくなってしまったのです。それに最近は、ギャンブルにも手を出しているようで、ポケットから馬券が出てきました。先月もサラ金の人が、借金取りに来て脅迫まがいのことを言って帰って行きました。家を売らないと、どうにもならないところまできていて、時々不動産屋がきています」

「離婚した後、どうするつもり。生活の目途は立っているの」

「特にはありません。でも、結婚していて借金取りに追われるよりはいいと思います。それに、もう愛情のなくなった主人と一緒にいるのは嫌なのです」

「子供たちは何と言っているの」

「お父さんが他の女の人のところにいて、家族と一緒に暮らさないのだから仕方ない、と言っています。家を売らなければならないほどの借金をこしらえたことにも怒っています。主人も今度が初めてなら、私も我慢したかもしれませんけど、これが二回目で、もう我慢できません」

佳子は、ハンカチを取り出し、涙をぬぐった。胸の奥に閉じ込めていた悲しみが堰を切ったように溢れ出て涙が止まらない。浩一は、慰めの言葉を失った。結婚して幸福な家庭を築いているとばかり思っていたが、破局がきていたのだ。

佳子は孤独と嫉妬にじっと耐え、この数年間を過ごしてきた。その重さに耐えかね、救いを求めていたのである。

遠野での浩一との口づけは、佳子にとって夢の世界の出来事であった。だから、浩一からの連絡が途絶えた後も、失恋したという思いに駆られることはなかった。だが、結婚し年月が経ち、夫との溝が深まるにつれ、浩一への想いが募って行く自分を感ずるのである。

「佳子さんも大変でしたね。離婚したほうがいいかどうか、今のぼくには分からない。でも、あなたが、ご主人とこれ以上一緒にいたくないというのであれば離婚するしかないと思う。ご主人は、何と言っているの」

「離婚はしたくないようですが、女とは別れたくないと言っています」

「子供たちが、生活面でも、精神面でも支えになるといいね。ぼくが今すぐ何かしてあげられるわけではないけれど、悩むことがあれば、いつでも相談に乗ります」

浩一は、佳子の苦悩が、少しでも軽減できればと願った。

「大友さんに話をしたら、胸のつかえが下りたような気がします」

喫茶コーナーの人影も少なくなり、船の灯りも見えない。二人は外に出た。コンクリートの湾岸に打ち寄せる波の音だけが耳を打つ。風が二人の体を吹き抜けて行く。二人はその場にしばらく立ち止まり抱き合った。外灯に写し出されるその影が、重なり合って長く伸びていた。

（七）

浩一は、盆休みに遠野に眠る高橋市太郎夫妻の墓参りをしようと思い立ち、佳子を誘った。彼女は、二つ返事で同意した。浩一のまとめて取れる休暇は、盆と正月くらいしかないのである。帰省客で賑わうシーズンのため、切符を手に入れることが容易ではなかったが、少し日にちをずらしたため、何とか二枚確保できた。

八月十五日に東京を出発し、遠野に向かった。新花巻で普通列車に乗り換えて、遠野には、午後一時に着いた。三十年前に比べ、市内も整備され、町の様子も変わっている。

浩一と佳子は、タクシーで高橋家の墓に向かった。墓は、背戸の小高い丘の片隅にあった。高橋市太郎とその家族が、一つの墓石の中に眠っている。夏草が生い茂り墓は、その中に埋まっていた。浩一は、周りの草を除き、墓前に手を合わせた。昔日の厚情を感謝し、冥福を祈った。佳子も長い間放置していたことを詫びるかのように、じっと長い間手を合わせていた。

二人は、周りを眺め渡した。林の木は、ほとんど切り倒されている。佳子の生家は、すでにない。その屋敷跡さえ、痕跡を留めるものは何もなかった。

ただ、林檎の木だけが残っていた。老木となってはいるが、うす紅色の実を付け、毅然と立っている。佳子は思わず声を上げた。

「林檎の木だけは、昔のままだったのね。ほら、ここにもあそこにも実がなっている。でも、あの時に比べて数も減り、実が小さくなっている」

佳子は、木切れを拾い、林檎を二つ叩き落とした。手入れもされておらず、未熟なこともあって、甘味が乗っていない。

「この木も相当疲れているようだね」

「あれから三十年も風雪に耐えてきたのですから、無理ないと思います」

佳子は、林檎の木を眺めながら、遠野を後にしてからの人生を振り返っていた。

蜩が鳴き日差しも傾きかけてきた。涼風が立った。二人は、その風に押されるように、遠野を後にし、夏油温泉に向かった。

遠野駅から、釜石線で花巻に出る。そこから東北本線に乗り換え、北上で下りる。北上からタクシーで一時間ほど北に向かったところに夏油温泉がある。

ブナの原生林の茂る夏油川沿いを車は走った。

山峡の日暮れは早い。夕靄が清流の上を覆い、薄墨を流したように見える。夕陽が沈み、薄暮が迫る頃、夏油温泉に着いた。江戸の昔からある温泉で、地元湯治客には人気が高い。

客室に案内された。部屋着に着替えるとすぐ食事が運ばれてきた。山菜と川魚料理で素朴な田舎の味がする。

「遠野にいた頃を思い出します」

佳子は、ワラビ、ゼンマイ、ウド、ヤマイモなどの山菜と岩魚の塩焼きを美味しそうに口にした。酒にほんのりと染まった目元を浩一に向けて佳子は言った。

「私、正式に離婚しました。もう夫からは、自由の身です」

「それで、これからどうするの。東京で仕事を探すつもり」

「ええ、そうするつもりです。でも、今日、遠野で両親のお墓の前に立ったら、〝遠野に帰ってこい〟という声が聞こえたような気がして戸惑っているところです」

「そう、遠野に帰ることも一つの方法かもしれない。弟さんも釜石にいることだし、何と言っても、遠野はあなたの故郷だからな」

浩一には、佳子の幸せは、遠野にあるのではないかと感じていた。言葉、衣服、仕草など洗練されて眩しいほど都会的であった。だが、純粋で素朴な性格は、変わっていない。都会の垢に汚れることなく、あの女子高校生の純真さを保ち続けている。

二人は、川岸の野天風呂に下りた。夏油川に沿って、大湯、滝の湯、疝気の湯、真湯、白猿の湯とあり、いずれも混浴である。大湯には、数人の客がいて和やかに談笑している。川沿いに少し下って、川床から湧き出る湯を石で囲っただけの浴槽に、二人は身を沈めた。

客は誰もいない。川の流れが薄明かりに照らされている。静寂を破って、その流れの音だけが、心地よく聞こえる。

浩一は、佳子の体を引き寄せた。二人は生まれたままの姿で抱き合った。唇が自然に触れ、しばらくそのまま愛撫を続けた。浴槽から出ると、外気の冷たさが二人には、心地よく感じられた。

（八）

部屋に戻ると、布団が二つ並べて敷いてあった。

浩一は、佳子の手を取り、自分の布団の中に引き入れた。湯上りの佳子の身体は熱く燃えていた。二人は、折り重なって唇を合わせた。浩一の手が、佳子の乳房を愛撫している。佳子は、あえぎ、のけぞってその愛撫に応えた。

浩一への想いと抑えきれない激情が、身体を駆け巡り、佳子は浩一と一つになることを望んだのだ。浴衣からこぼれる佳子の裸身は汗に濡れ、枕もとのスタンドの薄明かりに照らされ光っている。

二人は激しく求め合った。

「こうなることがずっと前から分かっていました。大友さんには、奥さんがいる。でも、どうすることもできなかった。遠野でお会いしたあの時から、何か運命的なものに導かれているような気がしていました」

激情の去った後、佳子は浩一の胸の中で呟いた。

「遠野のあの時は、お互いに幼かった。結婚するには若すぎた。まさか佳子さんが、ぼくのことをずっと覚えていて、電話をくれるなんて思ってもみなかった」

「大友さんは、私のことなど忘れてしまっていたでしょう。遠野や盛岡にいた時は、大友さんは、いつでも相談できるお兄さんのように思っていました。でも、結婚するという手紙を頂いた時、そう思っていたのではないことに初めて気が付きました。その時は、すでに遅かった。気が付くのが遅すぎたのです」

浩一は、もし結婚する前に佳子から恋文を受け取っていれば、佳子との結婚を真剣に考えたかもしれない。〝運命〟といういたずらは、二人に別々の道を歩ませた。だが、今二人は交差点で再び出会った。このまま手を携えて同じ道を歩むか、それともすれ違い際に、挨拶を交わすだけで、また別の道を歩むか岐路に立っている。

浩一は、三十年、共に歩んだ家族を捨てることはできない。

佳子は、すでに離婚し自由な立場にあった。だが、離婚の苦悩を味わった佳子には、浩一の家族に同じ思いをさせることへの咎めから逃れられないでいる。

「私、やっぱり東京を引き払って故郷に帰ることにします。東京での生活のほうがずっと長くなりましたが、いつも遠野に忘れ物をしているような気がしていました。それは、きっと遠野の両親や伝説の河童の呼ぶ声が聞こえていたのかもしれません」

佳子は、浩一と結婚できないことを感じ取っていた。人生には、重大な〝岐路〟にあることを気付かないまま通り過ぎてしまうことが多い。通り過ぎた後に、その分かれ道まで戻ろうとしても、すでにその場所は消えている。

佳子は、その消えた道をもう一度探そうとは思わなかった。もし見つければ、それは、彼女にとって幸福な道かもしれない。だが、浩一の家族を不幸にする道でもあるのだ。

このまま浩一との関係を続けて行けば、愛欲の虜となって、離れられなくなってしまう自分が恐ろしかった。

「大友さん。私はこの幸せなひとときを生涯忘れません。主人と結婚して十年くらいは大友さんのことは、遠い記憶の彼方に押し込めてきました。でも、夫との気持ちが通わなくなり始めてからは、ずっと大友さんのことが頭から離れなくなりました。それも一人の男性として」

佳子は、その想いが通じたことに満足したのか、浩一の腕の中で深い眠りについた。夏油川のせせらぎの音が、佳子の心に安らぎを与えてくれている。

浩一は、明日の別れを惜しんで、佳子の寝顔をそっと覗き込んだ。林檎の木の下にいた純真な穢れのない顔がそこにあった。三十年前のあの別れの秋がもうすぐ近い。

山妖記

森下　征二

（一）

奈良朝の末、宝亀年中のことである。紀伊国は那賀郡の山また山のその奥に、羅刹ヶ嶽と言う名の深山があった。木の実をつける樹が多いためか、熊や鹿、それに猪や兎などが育ちやすく、この国でも屈指の豊かさを誇っている。

しかし不思議なことに、この山には村人は勿論、地元の猟師も全く近づこうとしなかった。何故なら、羅刹ヶ嶽には鬼が棲んでいたからである。正確に言うと、鬼が棲んで人を食らうと、固く信じられていたからである。

根拠を挙げると幾らでもあった。現に、十日前にも旅の男が迷い込み、鬼に食われたばかりではないか。草むらに残された死骸は悲惨だった。食いちぎられた肉片や骨のかけらが散乱し、高い木の枝に胃の腑や腸が、これ見よがしにかけられていたのである。おそらく、誰が見ても鬼の仕業と気がつくはずだ。

ところで、羅刹ヶ嶽の鬼は一体どんな鬼なのか？　噂によるとこの鬼は、夜の闇が好きだと言

う。月が消え、星の光が閉ざされ、深い闇が夜を蔽うと、鬼が何処からともなく現われて、毒気のこもった息を吐く。その息をまともに受けると、たちどころに手足が痺れて力が萎える。そうなると、頭から齧られるのを待つだけとなる。鋭い牙で肉を裂かれ、食われるだけでは終わらない。骨を齧られ血を飲まれ、挙句の果てに骨を割られて、骨の髄まで食い尽くされてしまうのである。

だから……と、人々は真面目な顔で諭すように言う。たとえ鬼に捕まっても、決して毒気を浴びてはならない。顔を背け、息を止め、毒気を吸ってはならないのだ……と。だけど、そうは言っても、そんなことが出来るだろうか？　そう、相手は鬼だ。出来るはずがないのである。そうだとすれば、羅刹ヶ嶽に近づいてはならない。たとえ何があっても、近づいてはならないのである……と。

ところが、秋も終わりの陰暦十月半ばを過ぎた頃、この羅刹ヶ嶽に、二人の猟師の兄弟が乗り込んで来た。兄の多聞丸は三十歳前後で妻子があり、弟の次郎太は二十四か五の独身であった。彼らはそれぞれ、年老いた母親が住む壺屋を囲んだ家にいたが、太陽が沈み始める頃を見計らって、この鬼が棲むと言う山の奥へ大胆にも乗り込み、鹿を狩るため「待ち」を仕掛けてきたのである。

「待ち」と言うのは、高い木に登って獲物を待ち伏せ、弓矢で射止める猟である。理屈は極めて単純だが、鹿を狩るには時間がかかる。昼から始めて夜更けになることも多く、人並み以上の我慢強さと、闇の中でも獲物を仕留める腕が求められた。

二人は、それらの資質を十分に具えていただけではない。彼らは必ず、二人で組んで猟をした。獣道（けものみち）を挟んで二手に分かれ、別々の木に登って獲物を待ち、一人が矢を外しても、残る一人が必ず仕留めた。二人の名手が、阿吽の呼吸で猟をするのだ。彼らの獲物が誰よりも多かったのは当然かもしれない。

しかし、今年の秋は勝手が違った。春先から続いた日照りのためか、山が極端に貧しくなった。秋になっても木の実が熟さず、生きた獣の姿が消えて、代わりに増えたのが死骸である。痩せ衰えた鹿や猪の死骸が、あちこちで見つかるようになると、里の近くの山では、獲物が殆んど獲れなくなったのである。

当然のことだが、災害に巻き込まれたのは山だけではない。麓の里や村でも深刻な飢饉に襲われ、地獄のような修羅場が繰り広げられていたのである。農夫は皆争って、掘り起こした草の根を奪い合い、壁の土を崩して啜り、飢えを凌ぐ有様だった。

そうなると、里へ降りて物乞いする訳にも行かない。兄弟の取ることが出来る道は限られていた。彼らはひたすら山へ入り、猟をするほか道はなかった。しかし、一体どこで猟が出来るか？　彼らは当然知っていた。獲物がいる可能性はたった一つ……。羅刹ヶ嶽しか残っていなかったのである。

勿論、彼らにしても鬼は怖い。出来ることなら、近づきたくなかった。しかし、二人には老母がいた。それだけではない。多聞丸には、妻のアカネと乳飲み子の羊丸がいる。男として、家族をどうしても守らなければならないのだ。

秋が深まり、冬が近づき、そろそろ乾肉も無くなる頃、二人は思い切って羅刹ヶ嶽に乗り込むことにした。鬼の目を盗んで木に登り、股から股へ横木を渡して足場を作った。そして、枝の茂

みに身を隠し、現われる保証もない鹿を待つことにしたのである。

（二）

木枯らしが一段と強くなって、枝の間を通り過ぎて行く。闇の帳をこじ開けるように、鈍い光が射し込んで来た。木の下にぼんやりと、一筋の獣道が浮かんでいる。雲が割れて、月が顔を出したのだろう。

しかし、こんもりした大木がひしめく山奥である。二十三夜の月の光は、樹々の緑に遮られて殆んど地面に届かない。それでもやはり、闇より少しはましかもしれない。多聞丸は弓を肩に掛けたまま、登っていた樫の木から身体を乗り出し獣道を見つめた。しかし、幾ら覗き込んでも、鹿や猪はおろか兎一匹姿を見せない。

こんなはずではなかったのだが……。多聞丸の顔に漸く苛立ちの色が浮かんだ時、厚い雲の塊が、再び二十三夜の月を蔽い隠した。それでなくても薄い光がすっかり消えて、周囲は完全に闇の世界に包まれて行く。

闇の中で木枯らしが吹く。風の鋭い音が多聞丸の鬱屈した心の中を切り裂いて行く。彼は宙を見つめながら、家族の置かれた深刻な窮状を振り返った。

家にはもう、米もなければ麦もない。塩肉はとっくに食い尽くしたし、山の芋もなくなった。今、辛うじて残っているのは、ほんの少しばかりの粟や稗と、干乾びて固くなった鹿の乾肉だけである。しかし、勿論、それも十分ではない。何しろ、年老いた母親と乳飲み子を抱えた妻のア

カネの、飢えを満たすことも出来ないのである。こんなことで果して、今年の冬を越せるのだろうか？

彼はふと、家を出る時に目にした、浅ましい出来事を思い出した。年老いた母に向かって、妻のアカネが血相を変えて飛び掛っている。どうやら老母が、自分の肉を食べた後、アカネの肉を横取りしようとしたらしい。食べ物のことになると、母にはもう、人のものも自分のものも、全く区別がつかないようだ。怒気を含んだアカネの声に、頑なに抗議する老母の喚き声が目の前に甦る。

俺はあの時……と、多聞丸は唇をかんだ。迷うことなくアカネに加勢した。彼女にしても、乳を出すため食べなければならない。俺は老母を押さえつけ、皺だらけの手から乾肉を無理やりむしり取った。左手で確りと母の手首をつかみ、右手で乾肉を握り締めた指を、一本一本折るようにして引き離したのである。

老母が泣いた、泣いていた……。小さな身体をいぎたなく地べたの上に投げ出したまま、顔を突っ伏して泣きじゃくった。

俺はそれを……と、多聞丸は闇を見つめて再び唇をかんだ。憐れに思うどころか、憎いと思った。憎くて、憎くて堪らなかった……。俺には解った。正確に解っていたのだ。この、母の弱々しい姿の中には、老人だけが持つ身勝手なふてぶてしさと、弱者を装う計算された小狡さが潜んでいることを。

それだけに、俺の怒りも激しかった。激情に駆られた俺は、二度三度と老母の身体を足蹴にしたうえ手を上げた。老母の激しい悲鳴も、却って俺の荒んだ気持ちを煽ったのである。多聞丸は

思わず頭を抱えてしまった。瞼の上に甦る地獄絵に苛まれながら自問した。それが果たして良かったのか？　え、良かったのか……と。

勿論、良いはずはない。良いはずがないのである。母に手を上げ痛めつける、そんなことが許されるはずがない。自己嫌悪に落ちながら、それでも彼は心に呟く。誰が……、誰が好き好んで、自分の母を痛めつけるものか。あんなことはしたくなかった。したくなかったのだと、心の中で懸命に叫ぶ。

それなのに……と、彼は思う。母に背き、妻の肩を持った俺に向かって、アカネは突然、実家へ帰ると言い出した挙句、本当に帰ってしまった。しかし、考えても見るが良い。今時、どこの家に、乳飲み子を抱えて戻った娘を食わせる余裕があるだろうか？　おそらく彼女は、三日もすれば帰って来るに違いない。

しかし、何れにしても、俺たちがこの生活から抜け出すためには、どうしても鹿を獲らなければならない。鹿を仕留め、血の滴るような柔らかい肉を、母とアカネに腹一杯食べさせなければならないのだ。

鹿を獲る！　どうしても獲る……と、多聞丸が改めて心に誓った時である。突然……、何処からともなく異様な臭気が漂って来た。例えて言えば、腐肉のような生臭い臭いが、彼の顔を包み込もうとしている。多聞丸は思わず顎を下へ引いた。

この異様な臭気、生臭さ……。毒気だ！　彼の理性は的確に悟った。ならば……？　鬼かもしれない。恐怖に襲われた多聞丸は、懸命に首を捻った。毒気を浴びてはならない。吸い込んでもいけない！　彼は懸命に頭を背け、登っていた樹の幹に顔を押し付け口を塞ごうとした。

しかし……次の瞬間、今度はいきなり、強烈な衝撃が脳天を襲って来た。顔が否応なく引き起こされ、仰向けにされようとした。頭の上から、何か得体の知れないものが、彼の髻（もとどり）をつかんで物凄い力で引っ張ったのである。

（三）

強い痛みに襲われた多聞丸は、思わず低く呻き声をあげた。呻きながらも、反射的に顎を引きつけ、足場の上で懸命に踏ん張る。そうはさせじ……と、何かが再び髻を引っ張る。生温い臭気が二度……三度と繰り返し、頭の上から降りかかる。いけない！　顔を背けなくてはいけない。しかし……、髻をつかまれているため、顔を完全に背けることが出来ない。

毒気がかかる。降りかかってくる。口を閉じ、息を殺した多聞丸の顔が、見る見るうちに赤くなった。喉仏が上下に激しく動き、思わず大きく咳き込んだ。咳と同時に涙が流れ、頬の汗を洗い落とす。顔が涙で洗われたためか？　身体にやっと力が戻った。顎を胸に引きつけ、足を強く踏ん張った。不意の打撃を、何とか身体が受け止めたようだ。身体が常態を取り戻し、頭がやっと働き始める。

頭上の茂みに、何かがいる……。俺はそれを確かめなければならない。毒気に当たって怯んだ気力が、次第に力を取り戻してくる。彼は勇気を振り絞ると、思い切って頭の上に手を回し、髻をつかんだ物を握り締めた。

手首だ。冷たく固い手首のようだ。しかし……意外なことに、極端に細い。細い腕に太い血管

が浮いており、そいつが俺の髻を確り絡め取るようにつかんでいる。細くて強く、ごつごつした冷たい腕。そして、この得体の知れない生臭い吐息……。それが何か？　結論を出すまで、さして時間はかからなかった。

鬼だ！　俺はやっぱり、鬼に捕まったのだ。鬼は俺を食おうとしている……。

正体を確かめた瞬間……、意外なことに恐怖を忘れた。恐怖を忘れ、激しい怒りに燃えてきた。腹の底から湧き上る、強い怒りを感じたのである。彼は怒った。怒りながら心で叫んだ。たとえ相手が鬼でも、理不尽な力に屈服することは出来ない。俺には年老いた母もいれば妻子もあるのだ。おとなしく食われてたまるものか！

彼が戦う覚悟を固めた時である。頭皮に再び強い衝撃が走った。鬼が再び力を込めて、彼の髻を引っ張ったのだ。

うっ！　多聞丸が思わず呻いた。

頭皮を剥がされるような痛みの中で、少しずつ……、ほんの少しずつ、身体が宙へ浮いて行く。多聞丸は鬼の手首を離して樹の幹に当て、足の先を懸命に伸ばした。爪先が、足場の上に何とか辿り着く。彼は懸命に臍の下に力を入れ、股を開いて踏ん張った。引き上げられてはならない。鬼の手許に引き寄せられてはならないのだ。引き上げられると毒気をかけられ、骨の髄まで食われるだろう。まだ体力が残っているうちに、この絶体絶命の窮地から、何とかして逃れなければならない。

弟の……と、多聞丸はその時初めて次郎太の顔を思い浮かべた。同時に何故か、胸の奥で何かが騒ぐ。しかし今となっては、彼の手を借りるほか助かる道は無いかもしれない。

多聞丸は唇を噛み締めると、次郎太が登っている松の木に改めて目を向け、思わず軽く舌を打った。闇、闇……、周囲は全く暗黒の世界である。次郎太の所から、多分ここは見えないのではないか。何しろ、二人の間は、四五段（四五十メートル）ばかりも離れているのだ。

これではおそらく、弓を撃たせても鬼を仕留めることは難しい。何と言っても、鬼は茂みの中に身を隠しているのだ。剥き出しになっている鬼の腕にしたところで、余りにも細過ぎるではないか。

多聞丸は焦った。焦りながらも真剣に考えた。しかし、それを嘲笑うように、鬼が再び毒気を吐き、上から強く髪を引く。多聞丸は激しい苦痛に呻きながら、顎を引き締め、懸命に足を踏ん張りながら思った。身体が次第にだるくなる。幾ら避けても避けきれない、鬼の毒気が効いてきたのだ。俺にはもう、残された時間が殆んどない。何れにしても、次郎太に助けを求めるほかないだろう。やっと、心を決めた多聞丸は、斜向かいの木の上に向かって、くぐもった声で呼びかけた。

（四）

「次郎太、聞こえるか？」

低い声だが夜中の山中である。次郎太には十分聞き取れたらしい。闇の中から直ぐ、訝しげな

声が帰ってきた。
「何だ、兄者……、何かあったか？」
そんな風に聞かれても、簡単には答えられない。しかも、事は非常に切迫している。力が尽きたら食われてしまう。しかし、多聞丸はそれでも落ち着いて言った。
「お前の所から、俺の姿が見えるか？」
次郎太は獣のような目をしている。もしかしたら見えるかも知れない。見えれば、彼の矢が使える可能性がある。
多聞丸の期待を挫くように、次郎太の淡々とした声が返ってきた。
「見えるはずが無いだろう。何しろこの暗さだからな」
「そうか……。次郎太、良く聞け！　何かが、俺の木の上にいる。茂みの中に潜んだそいつが、俺の髻をつかんで引き上げようとしているのだ」
「何だと！」
次郎太が、鋭く反応した。彼は兄の短い言葉の中に、差し迫った異変を嗅ぎつけたようである。それならそれで、話がしやすい。多聞丸がほっと息をついた時、鬼が再び力を入れた。苦痛に歯を食い縛って、多聞丸は一気に畳み掛けた。
「鬼だ！　俺は鬼に捕まってしまった」
「鬼……だと？　姿を見たのか？」
「いや、見ていない。しかし、腕に触った。手首のようだが、細い……。細いが、ごつごつして妙に力がある」

「なるほど、それではやっぱり鬼かもしれぬな。よし！　待っていてくれ、今からそこへ駆けつける」
次郎太の声と同時に、多聞丸の髻をつかんだ鬼の手に一段と力が入った。多聞丸の顎がしゃくれ、思わず口から呻き声が洩れた。
「う、ううっ！」
「どうした？」
「凄い力だ。引き上げられるかもしれない。毒気も少し効いている」
「駄目だ！　毒気を吸ってはいけない」
「解っている！　でも、仕方がないのだ。お前が来るまで、頑張れそうにもないぞ」
辛うじて声を振り絞った多聞丸に、次郎太が大声で応じた。
「よし、解った！　兄者、大きな声を出してくれ。声によって見当を付けよう」
「弓を撃つのか？」
多聞丸が思わず呻いた。
「そうだ」
次郎太の声には迷いがない。
「腕は細いぞ。大丈夫か……？」
多聞丸は、鬼の力に懸命に抗いながら益々声を低くした。次郎太は、矢をめくら撃ちにする積もりのようだ。めくら撃ちなら、鬼より俺に当たる可能性が遥かに強い。めったなことでは大声を出せない。多聞丸はためらった。中々、踏ん切りがつかないのである。何しろ、鬼は茂みに身

を隠している上、露出した腕は余りにも細いのだ。少し間を置いて、次郎太の怒りを含んだ声が返って来た。

「そうか、俺の腕を疑っているのだな？」

「そうではない。そうではないが……」

慌てて打ち消しながら、多聞丸は懸命に鬼の力に抗った。鬼が、まるで嘲笑うように更に力をこめる。

「痛い！」

余りの痛さに多聞丸が呻く。気がつくと、身体が一尺ほど宙に浮いていた。兄の呻き声を聞きつけた次郎太が、声を励まして叫んだ。

「問答は無用だ。他に方法はないのだぞ。心を決めて大声を出せ！　何れにしても、やってみるほかないだろう」

確かにそうだと多聞丸は思った。俺にはもう、残された時間はない。次郎太の矢が、鬼に当たればそれで良し、そうではなくて俺の頭をぶち抜いても良い。何れにしても、運がそれを決めることだ。

彼は迷いを一気に吹っ切って大声で喚いた。

「わかった。次郎太！　俺はここだ。鬼は上から俺の髻をつかんでいる。さあ、撃て！　弓を撃つのだ！」

多聞丸が喚くと同時に、鋭い音が空気を切り裂いた。闇の向こうから細い音が、大気を激しく揺るがせながら飛んで来る。細い音が太くなり、強い衝撃波が自分の顔に向かって来る。来た！

矢が当たる……と、思わず目を閉じた時、がくん……と、身体が急に下へ落ち、一尺下の足場に届いた。足場の固さを感じる間もなく、次郎太の矢が頭の上を、風を切って通り過ぎた。

「うっ！」

微かな呻き声が洩れた。それと共に、熱い血汐が滝となり、激しく頭に降りかかる。思わず髻に回した多聞丸の手が、見る見るうちに赤く染まって行く。髻からぶら下がった細い腕が空しく多聞丸の頬を撫でている。

「次郎太！　当たったぞ！」

鬼の腕を気丈につかんだ多聞丸が大声で叫ぶと、暫く沈黙が続いた後、一拍置いて、次郎太の声が返ってきた。

「そうか……」

「よくやった！　良い腕だ」

「うむ……、何かに当たったことは、矢尻の震えで俺にも解った。それで、鬼はどうした？」

「逃げた。しかし、腕をここに残している。こうやって見ると、細い……。細くて皺だらけな手首だ。こんなものを貰っても仕方がないが、捨てれば却って祟るかもしれない。家のどこかに仕舞っておこう。それにしても、酷い目にあったものだ」

「そうだな。しかし、それでも兄者は助かったのだ。良かったではないか」

「うむ……お前のお陰だ。有難う」

「……」

「次郎太、俺は疲れた。俺にはもう、これ以上狩りを続ける気力はない」

「俺だってそうだ。兄者、俺も疲れた。そろそろ帰ろうではないか」
「そうしよう。今夜こそと、羅刹ヶ嶽に来た訳だが……。獲物を獲るどころか、却って鬼に捕まってしまった。しかし、命あっての物種だ。帰るとするか」
「ああ。それでは、俺は木から降りる」
二人は、ほぼ同時に木から降りた。多聞丸は勿論、次郎太もまた非常に疲れていた。彼の足取りも、兄と同じように重かったのである。

（五）

草臥れきった兄弟が家へ着いた時、真夜中をとっくに過ぎていた。闇の中を相変わらず、木枯らしが強く吹き付ける。
母が住む壺屋の前を通り過ぎようとすると、中から苦しそうな呻き声が聞こえて来た。まるで、断末魔の苦しみに喘いでいるような声である。思わず足を止めた多聞丸は次郎太と顔を見合わせた後、壺屋の引き戸に顔を寄せて声をかけた。
「母者、どうなさった？　何かあったのですか？」
「……」
「黙っていてはわかりません。苦しいのですか？」
「……」
「母者、答えて下さい！」

多聞丸が次第に声を張り上げると呻き声がやっと止んだ。しかし相変わらず、苦しそうな息遣いが聞こえて来る。次郎太が兄の肩に手をかけて言った。
「止せ……兄者。母者は夢を見ているのだ。多分、悪い夢にうなされているのだろう。放って置くのが一番だ。さ、行こう」
「いや！」
多聞丸は次郎太の手を振り払って壺屋を離れ、ついて来い……と顎をしゃくった。そして自分の家の軒先に積んでいた薪の中から、太い松の枝を取って火をつけた後、おもむろに懐の中から鬼の腕を取り出した。真っ赤に燃える火の中で、どす黒い血がこびりついた鬼の手首が白く浮かび上がって来た。
「見ろ！　やっぱりそうだ。次郎太……お前、何か気がつかぬか？」
「……？」
「ほら、手の甲に刃物の傷がある。見ろ、三日月形だぞ！」
「おっ！」
「母者の手だ、な……？」
「むっ！　しかし、まさか……」
「いや、まさか……では、ないかも知れないぞ。確かめてみよう。来い、来るのだ！」
多聞丸は次郎太を振り返りもせず、壺屋の方へ大股で歩く。二人が壺屋の前に戻ると、中ではやはり、母が苦しそうに唸っているではないか。多聞丸は火のついた松の枝を次郎太に預けると、拳でいきなり引き戸を叩いて叫んだ。

「母者、開けて下さい。お聞きしたいことがある……」

しかし幾ら叩いても、中から聞こえてくるのは、今にも死にそうな息遣いと、苦しそうな呻き声だけである。

「母者、開けてくれ！　お願いだ」

苛立った多聞丸は、声を荒げて力任せに戸を叩く。それでも埒が明かないと覚った彼は、終に思い切った手を打った。彼は次郎太を促し、松の枝を庭石の後に立てかけた後、力を合わせて、引き戸に体当たりしたのである。さしもの引き戸も音をたてて中へ倒れた。勢い余って転がり込んだ兄弟が、やっと立ち上がった時である。

「おのれ等は！」

と、闇の中で何かが吠えた。

「灯かりだ！　次郎太、松を！」

急いで松を取って返した次郎太が、得たりやおう……と、闇の奥へ灯かりをかざす。それと同時に真っ赤に燃えた灯かりを浴びて、白髪を振り乱した小さな身体が、ましらのように飛び掛って来た。

これが、あの年老いた母の姿なのか？　次郎太が茫然として立ち尽くす。それを尻目に多聞丸が前へ進み、鬼の手首を投げつけて叫んだ。

「これは、母者の手か？　え、そうなのか！」

「おのれが……」

母が呻いた。投げつけられた手首をつかみ、多聞丸を物凄い眼で睨みつけた。気がつくと、白

い髪の間から二本の角が突き出している。

母ではない。鬼……、そう、まさしく鬼である。鬼が凄まじい顔をして近づいて来た。眦から赤い血を滴らせ、裂けた口から鋭い牙を剥き出している。

「母者、何故だ？　何故、俺を食おうとした？」

鬼の姿にたじろぎながら、多聞丸が懸命に問いかける。鬼が吠えた。低く吠えた。鬼は低く唸りながら、兄弟に近づく。思わず後ろへ下がった次郎太が、真っ赤に燃えた松の枝を鬼に向かって投げつけた。赤い軌跡を描いた松が、鬼に当たって床に落ち、敷かれた葦に火がついた。あっという間に火の手が上がる。凄まじい音を立てて燃え上がった火柱が、鬼と兄弟の間を引き裂いて行く。

「危ない！」

思わずたじろいだ兄弟の頭越しに、冷たい木枯らしが吹き込んで来た。乾いた風にあおられて、部屋の中が燃え上がる。部屋が燃える。坩堝のように真っ赤になった。真っ赤な坩堝で鬼が舞う。小柄な鬼が両手を広げ、後姿を戸口に向けて、よろめくように舞っている。断たれた手首を確りつかみ、静かに、静かに舞っている。

壁が……、そして屋根が、音を立てて燃え上がる。床の上から屋根へかけて、勢いよく火柱が上がった。火の粉が爆ぜる。爆ぜる火の粉を浴びながら、激しく静かに鬼が舞う。くるりくるりと、鬼が艶やかに舞っている。

突然！　太い棟木が鬼を目掛けて燃え落ちた。音を立てて鬼が倒れる。白い腕を真っ直ぐ伸ばし、空をつかんでもがいている。燃える、燃える、棟木が燃える……。棟木が燃えて、鬼の身体

を焼いている。真っ赤に燃えた炎の向こうで、鬼の身体がゆっくりと回り、兄弟を探すように振り向いた。

白い髪に穏やかな顔……。積もり積もった怨念が、炎にすっかり焼かれたためだろうか？　何時の間にか人に戻った母親が、穏やかな眼差しで見つめてきた。

兄弟は思わず息を飲んだ。母親の……、紛れも無く懐かしい母の姿がそこにある！

「母者！」

兄弟が初めて夢から覚めたように、声を合わせて叫んだ。母者……、母者と叫びながら、母の許に駆けつけようとした瞬間である。

壺屋の屋根が音を立てて崩れ落ち、炎を高く突き上げる。勢いを増した火柱が乾いた風に煽られながら、火の粉を爆ぜて燃え盛る。

燃える、燃える……、強く激しく燃えあがる。燃え盛る火はまるで、この世の全ての業を焼き尽くそうとするかに見えた。辛うじて火から逃れた兄弟は、拳を確り握り締めながら、燃え続ける炎を何時までも見つめていた。

（六）

朝……、山は久しぶりに晴れ渡っている。名も知らない山鳥が時々、冷気を突き刺すように鋭い鳴き声をあげた。多聞丸と次郎太は、余燼が燻る焼け跡から拾い上げた母の遺骨を、木卓の上に広げた筵の上に注意深く並べていた。昨夜の強い木枯らしで壺屋は跡形もなく焼け落ち、母の遺体は殆んど灰になってしまった。しかし、その中で頭蓋骨だけが焼け残り、何故か完全な原形を留めている。

筵の上で頭蓋骨の眼窩が、落ち着き払って二人を見つめる。頭骨にはどこにも、角や牙の跡が残っていない。鬼の痕跡が完全に失われていたのである。それだけではない。あの、矢で撃ち落された手首も、すっかり焼け失せてしまった。ひょっとしたら、昨夜見たのは幻だったのだろうか？　しかし、それにしても訝しい。頭蓋骨だけが、何故完全な形で残ったのだろうか？　遺骨を拾い終わった兄弟は、筵の上の頭蓋骨を食い入るように見つめた。朝の風が兄弟の間に割って入る。

その場の重苦しさに堪えられなくなった次郎太が、

「おかしなことだ……な」

と、遠慮がちに語りかけた。しかし、多聞丸は短く頷き返しただけで、頭蓋骨をじっと見つめている。彼の姿は厳しく、取り付く島もないように見える。それでも次郎太は、多聞丸の顔を見ながら話しかけた。

「兄者、どうして頭蓋骨だけが焼け残ったのだろうか？　腿や腰の骨も、ほとんど灰になったのに……」

「そうさな」

振り向いた多聞丸が、やっと重い口を開いた。

「おまえ、どう思う？」

「角が……、角が生えていない。それに、牙も……だ」

「うん？」
「だから……、母者はやっぱり鬼ではなかった。母者は人と同じ形の頭蓋骨を残し、鬼ではないことを俺たちに伝えたかったのではないか。そのように考えれば、右の手首が焼け失せた理由も、はっきり解るような気がする」
「違う！」
多聞丸が厳しい口調で否定した。次郎太の顔が見る見るうちに翳ってきた。それを見た多聞丸が口調を和らげて付け加えた。
「確かに、母者は鬼ではなかったかもしれない。しかし……だ」
「……」
「鬼になられた！　それは、お前も見た通りだぞ」
次郎太が思わず唇を曲げて多聞丸を睨みつけた。しかし、多聞丸は全く構わず強い口調で言い切った。
「そうでなければ、頭蓋骨だけが残るはずがない。考えても見ろ、あの猛火の中で焼け残ったのだぞ。それがまさしく、鬼の骨である証拠ではないか」
「そうかもしれない。しかし、俺にはどうしても、母者が鬼になったことが信じられないのだ。兄者もそうではないのか？」
次郎太が兄を見つめて縋るように訴える。弟から目を逸らした多聞丸は、それでも強い口調をくずさなかった。
「お前の気持ちは解る。解るが……違う。これは鬼の骨だ！　角があろうとなかろうと、人の骨

ではない。多分、俺をそれほどまでに憎んでおられた証だろう」
「兄者を……か？」
「そうだ！」
「……」
「しかし、それよりも……だ」
と、多聞丸が厳しい目つきで次郎太を見つめた。
「俺の頭に、角がないか？」
「何だと！」
「解らぬか？　角が生えていないか……と、聞いたのだ」
「やくたいも無い！　生えている訳がないだろう」
「そうか」
当たり前だ……と、次郎太が見つめる。
しかし、多聞丸は沈んだ表情のままゆっくりと続けた。
「だがな……次郎太、良く聞いてくれ。俺の頭に、角が生えていてもおかしくないのだ。俺は鬼だ！　少なくとも鬼だった。俺はそれが、今度のことでよく解ったのだよ」
「何だと……？　兄者も鬼か？」
次郎太が低く呟き、一息置いてさりげなく言った。
「ああ……そうか。母者に辛く当たったと言いたいのだな？」
「いや、それだけではない。お前にとってもアカネにとっても、俺がしたことは鬼の所業だ。お

前も多分、俺を鬼だと思っていた。そうだろう？」

「違う！」

次郎太が大声で打ち消した。そして多聞丸の厳しい目つきに射すくめられると、そんなことはない……と口の中で付け加えて唇を噛んだ。

「そうか……な？」

多聞丸は一旦静かに受け止めた後、直ぐに次郎太から目を離し、確りした口調で続けた。

「良いか次郎太、思い出してくれ。俺は確かに総領だ。しかし、お前が知っているように、幼い時から貧しい暮らしに耐えられなかった。だから……あの時、母者が泣いて止めるのを振り切り、全てを捨てて家を出た。勿論、総領の座も捨てて……だ。今から考えても、勝手なことをしたと思う。母者が俺を憎んだのも当然のことだ」

「……」

「しかし、俺はもっとひどいことをした。他所でも食いつめて舞い戻り、お前の手から総領の座を奪い返した挙句、その地位を振りかざして、お前の許婚だったアカネまでも横取りしてしまったではないか。俺はお前とアカネの人生を、情け容赦もなく壊してしまった。そんなことが、許されるはずがない。勿論、そんな俺にも、皆の気持ちが手に取るように解った。母者も、アカネも、そしてお前も、時々冷たく俺を見た。その目で冷たく、鬼だ、鬼だと囁いていた。

そうさ！　そうとも、俺は鬼だ！　紛れもなく鬼だった！　恥知らずで理不尽な、鬼だと言われても仕方が無い男だったのだ」

な、そうだろう……と口の中で付け加えながら、多聞丸は改めて次郎太を見つめた。次郎太がそっぽをむいて唇を噛んだ。瞳の奥が微かに潤んでいる。多聞丸は沈痛な表情で暫く次郎太を見つめた後、いきなり彼の前で膝をつくと両手をついて頭を下げた。

「許してくれ、次郎太……、俺が悪かったのだ」

思いがけない展開に次郎太が慌てた。慌てながらも兄の手を取り、握り締めて言った。彼も何時の間にか膝をついている。

「止めてくれ、兄者。今更仕方がないことだ。俺は……な、二番目の子だ。兄者にとっては掛かり人だ。兄者が家を捨てた時はともかく、帰って来れば兄者が総領……。それが、長幼の序と言うものだ。総領の地位を失った俺には、その時から嫁を持つ資格がなくなる。アカネが……、いや嫂さんが、兄者に乗り換えたのは賢明な選択だった。ここで生きるためには、好き嫌いを言うことは出来ない。兄者もそれは良く知っているはずだぞ」

「うむ……耳が痛いが、そうかもしれない。しかし……な、勝手な行動をした挙句、お前たちの生活を壊した行為が許されるはずが無い。次郎太、済まなかった。謝る、この通りだ。今までも、何度も謝ろうと思いながら出来なかった。許してくれ」

多聞丸が再び頭を下げた。次郎太が激しく首を振りながら言った。

「止してくれ……と、言っているのに。そんな話は済んだことだ。それに、家を捨てた兄者を、総領として受け入れたのは、母者を始め、皆が納得した上の話だったはずだ。癪に障るが、兄者が家を飛び出した時、俺一人の力だけでは、とても家族を養えなかった。蓄えを食い繋いで行く外なかったのだよ。だから……だ。だから、母者も兄者が帰ることを納得し、嫂さんだって兄者を受け入れたと言う訳なのだ。兄者が帰って総領の座に戻り、こうして二人で力を合わせている

からこそ、今まで餓えずに生きることが出来た。だから……な、兄者も自分を責めることはない。しかし、それよりも……だ」

と、次郎太は多聞丸の手を離して顔を見つめた。

「俺の頭にも、角が生えていないか？」

今度は、多聞丸が真剣な表情で黙ったまま次郎太を見つめた。次郎太が、両手をぎこちなく地面について言った。

「兄者は気がついていないかもしれないが、俺も謝らなければならない。実は……な」

「止せ！」

多聞丸が強い調子で遮り、次郎太の肩を抱き起こした。

「解っている……次郎太。解っているとも」

「何だって！」

「お前は……あの時、俺を撃とうとした。そのことだな……？　そう、それなら俺は知っていた。お前はあの時、鬼ではなく俺を撃とうとした。お前には闇の中でも、梟や狐のように見ることが出来る力があるからだ。違うか、次郎太。え？　俺は今まで、そうではないかと疑いながら確信はなかった。しかし、今ではそれを確信している。今朝、母者の頭蓋骨を見たからだ。何故なら、お前だって母者の子ではないか。それくらいの能力を具えていても不思議でない。俺はそう思っている」

「……」

「そう言う訳で、もしも……だぞ。もしもあの時、俺の姿が見えていたなら、お前は俺を簡単に撃ち殺すことが出来ていたはずだ。何しろ、お前の腕だもの、百に一つもしくじらない。俺が生き残る可能性は、殆んどなかった。そうだよ……な？」

「うむ……」

「しかし現に、俺はこうして生きている。これは一体、何故だろうか？」

「解らない……。それが俺にも解らなかった。俺がためらったせいかもしれない」

「ほう、ためらったのか？」

多聞丸の皮肉な口調に、次郎太が気色ばんだ。

「勿論だ！　俺は何度もためらった。しかし、どうしても止めることが出来なかっただけだ。二人が力を合わせて生きる限り、兄者に対する怨みは忘れなければならない。しかし、頭の中で納得しても、怨みはさっぱり消えなかった。消えるどころか、抑えれば抑えるほど大きくなり、俺の心に鬼が育った。それが……、そう、俺の中の心の鬼が、兄者に向けて弓を撃たせた。俺も鬼だ！　鬼だった……。許してくれ、兄者」

「許すも許さないもないわさ。全ては俺から始まったことではないか。それよりも、俺は嬉しい。お前が撃つことを迷ったと聞き、本当に嬉しかった。有難うよ……次郎太」

「とんでもない。俺こそ、迷いながらも撃ってしまった。兄者に向かって弓を引いた」

「だが、俺は生きている。それは、一体何故だろうか？　勿論、お前が迷ったこともあるだろう。しかし、それだけではない。良いか、教えてやろう。お前の弓が当たらなかったのは、母者のせいだ！」

「ええっ、母者……だと？　どうして母者が？」

次郎太が叫んだ。意表を衝かれた次郎太には、多聞丸の言ったことが、どうしても理解できなかったのである。

（七）

お前の矢が唸り声を上げて……と多聞丸は始めた。彼は筵の上の頭蓋骨に目をやりながら、ゆっくりと話し始めた。

「お前の矢が唸り声を上げて飛んできた時、俺は思わず目を瞑った。空気を切り裂く鋭い音が俺の鼓膜を震わせた時、俺ははっきり覚った。なーに、俺だって猟師の端くれだ。矢の飛ぶ音で、それが何を狙っているか直ぐ解る。矢は正確に、俺に向かって飛んで来た！　俺は、お前の意図がはっきり解った。それで……な、観念した。俺は観念して目を瞑ったのだ。何と言ってもお前の腕だもの、観念したわ……さ」

「……」

「しかし……だ、丁度その時、母者の手が急に下がり、俺の身体を一尺ばかり下へ落とした。身体が落ちる衝撃を感じる間もなく、矢が勢い良く頭の上を通り過ぎた。俺は助かり、母者の手首に矢が当たった。お前は見事に、鬼の腕を射て取った……と、言う訳だ」

「そうか……、そう言うことだったか」

「しかし……な、次郎太。最初は俺にも解らなかった。何故、俺の身体が下に落ちたのか、解らないまま誤解していたのだ。俺は今朝まで、母者が俺の身体を、誤って落したものだと思い込んでいた。浅はかにも、俺の身体が重すぎたからだと思っていたのだ」

「なるほど」

「しかし、それは違った。全く違った。それに気がついたのが今朝だ。そう！　母者の頭蓋骨を見て、やっと俺も気がついたと言う訳だ。考えても見ろ、母者は……な、残るはずがない頭蓋骨を、完全な形で残す程の力を備えた方だ。それだけではない。神通力を得て鬼になり、自分の倅を食おうとされた。なあ、次郎太。母者も実に業が深い。そんな母者が、狙った獲物を落すはずがあるまい。重みに耐えられないことなど、あろうはずがないではないか」

「うむ」

「そうだとすれば、母者は俺を、ご自分の意志で助けて下さったことになる。手首を……、いや、ご自分の命を犠牲にして、俺を助けて下さった。俺はこの頭蓋骨を見て、やっとそれに気がついたのだ」

「なるほど。しかし、母者は兄者を憎んでおられた。家を捨て、嫂さんと俺の生活を台無しにした兄者を深く憎んでおられた。だから、鬼になられたのではないか？　鬼になり、兄者を食い殺すために、羅刹ヶ嶽へ付いて来られた母者が、どうしてまた、兄者を食うことを止めたのだろうか？　それだけではない。俺の矢から兄者を助けられたのは何故だろう？　俺にはどうも、そこのところが解らない」

「うむ、俺にも良く解らない。しかし、見当は付く。ひょっとしたら……、良いか、ひょっとしたら……だぞ。お前の矢が現実に、俺を狙って飛んで来た時、母者は急に、修羅場の怖さに気がつかれたのではなかろうか？　自分の子が、自分の子を殺そうとする姿を見て、業の深さに気が

つかれたのかもしれない。だから……だ、だから、俺を助けて下さった……」

なるほど……と、次郎太が俯きながら腕を組んだ。暫くして、彼は急に兄に向かって叫ぶように言った。俯いていた次郎太の声に若々しい艶があった。

「良いか兄者、聞いてくれ。俺も今初めて気がついた。もしもそうなら、母者は俺を助けて下さったことになる。だって、そうではないか！　母者は俺を、兄殺しの大罪から救い出して下さったのだ。そうではないか？」

多聞丸が頷いた。彼は弟の手を取りながらしみじみと言った。

「俺は母者に命を助けられたが、お前は罪から救われたようだな。しかし、それだけでもない。母者は自ら鬼になって、俺とお前の心の中にも、鬼が棲んでいることを気が付かせて下さったのだ。解るな？」

「うむ、解った。ありがたいことだと思う……。俺は何とかして母者に恩返しをしたい。しかし、それも今となっては、供養を十分するほか道はないようだ。さて一体、どのように供養すれば良いだろうか？」

「そのことだ、次郎太……。それについては考えがある」

「何だ？」

「近頃、都に、偉いお坊さまがいらっしゃったと聞いている。何でも、唐と言う国から来られたお坊さまだと聞いている。それで……だ。俺は母者を、そのお坊さまに供養して戴こうと思っている。今まで起きたことを皆、正直に申し上げた上でのことだが」

「大丈夫だろうか？　そんな偉い方が、母者を供養して下さるだろうか？」

「頼んでみるほかないだろう。それだけではない。実は……な、もし、許して戴けるなら、俺はそのお坊さまの弟子になり、出家しようと思っているのだ」

「何だと、出家？　そんなことをして嫂さんをどうする？　羊丸をどうするのだ？」

「悪いが……」

「うん？」

「出来ればお前が、面倒を見てほしい。俺が出家すれば、死んだと同じことになる。兄が死ねば、弟が全てを継ぐ。それが、ここの仕来りではないか」

「だからと言って、余りにも唐突な……」

「いや、昨夜、寝ないで十分考えた結果だ。今朝、母者の頭蓋骨を見て、改めて心が固まった。何でも一家に一人出家すれば、家族の人は救われるそうだ。今までのこともある。俺は仏の弟子になって、母者を供養してやりたい。鬼にならられた母者を往生させ、仏に生まれ変わらせたい。それが、俺の務めではないか。だから……なぁ、次郎太、頼む。良いか、頼んだぞ」

「解った、良く解った……。しかし、兄者は本当に、それで良いのだな？」

「うむ、済まない」

多聞丸は次郎太を木卓の前に残すと自分の家へ引き返し、素焼きの壺と長い木の箸を持ち出した。そして、完全な形を残した頭蓋骨を眺めてじっと腕を組んだ。おそらく、壺の口から入りきらない頭蓋骨を、どうやって入れたものかと考えているのだろう。

しかし、彼の下した決断は早かった。彼はおもむろに箸を取り上げると、確りと頭蓋骨を抑え、縫い目に沿って慎重に押し当てた。

傍で見ていた次郎太が、兄の意向を覚って大声をあげた。
「止せ！　割ってはいけない。これには、母者の全てがこもっているのだ。母者が折角残された骨ではないか！」
次郎太が血を吐くように叫んだ。多聞丸は穏やかな瞳を次郎太に返して、静かな口調で諭すように言った。
「いや、だから割るのだ！　良いか、死ねばどうなる？　何もかも無くなるではないか。ならば、死んだ後に形を残してはならない。それが仏の教えだと思う。俺は母者を、ご自分を苦しめていた怨念から救って差し上げたいのだ」
多聞丸は再び、頭蓋骨を食い入るように見つめると、手にした箸に力を加えた。次郎太が、ぐっと大きな息を飲む。
コトッ……。短く乾いた音がして、頭蓋骨があっけなく二つに割れた。彼らの母の妄執が、朝の空気に四散して行く。
まるで、修行僧のような表情をした多聞丸が、無言のまま作業を進める。箸の動きに従って、母の頭蓋骨が微かな音を立てながら、更に小さく割れて行く。割れた骨が壺の中へ手際よく納められ、壺は木卓の上に安置された。
全てが終わった後、次郎太が多聞丸に向かってぽつりと言った。
「兄者、羊丸のことだが……」
「うむ」
「実は……」

「言うな！　それも知っている。三人で、幸せになってくれ……」
多聞丸は、羊丸の父親が次郎太であることを、ずっと前から気がついていた。しかし、全ては自分が播いた種ではないか。俺は母者と弟を鬼に変え、俺を殺す所まで追い込んでしまった。もしもそうなら、最も罪が深いのは自分である。だけど、そんな俺でも、出来ることなら救われたい。俺は果たして救われるだろうか？　難しい……。とても、難しいことだとは思う。しかし、母者は俺に頭蓋骨を、いとも簡単に割らせてくれたではないか。もしかしたら、俺も何時か許されるかもしれない。
骨壺を抱きしめた多聞丸は、弟と一緒に肩を並べて、都のある山の彼方を、何時までも見つめていた。

（完）

酔狂な将軍義政と三人の女

島津　隆子

お今、少年将軍の養育係に抜擢

女性は時として悪魔にもなり、天使にも変貌するものだ。しかし、その女性がどこから天使になり、どこから悪魔に変るのかは誰も知ることができない。

室町幕府八代将軍足利義政の側近には、君側の奸として、世に「将軍をめぐる三魔」といわれる人たちがいて、政治をとりしきっていた。大納言の烏丸資任（からすまますけとう）、有馬持家、そして今参局である。この三人に共通する「ま」の字を当てて、三魔とゴロ合わせをしたわけだ。

落書にも三魔と皮肉られたひとり有馬は、摂津国の大名赤松氏の庶流であり、有馬の守護である。烏丸は義満の生母日野氏と同族のよしみから権勢を握っていた。この二人はともかく、今参局は、ある時までは将軍義政にとって、他にかけがえのない天使のような存在であった。

ところで、古代には奴婢が貴人宅で初奉公することを「今参」といったらしい。狂言や能でも召使を必要としたさる大名が、太郎冠者に命じて適当な人間を物色させるくだりがある。そこで東国の者で都へ行って奉公したいという人物がみつかった。大名はその者に「今参」という名称

をつけてやる。つまり新参の局というほどの意味である。

今参局は通称「お今」と呼ばれていた。

お今は幕府の家臣大館満冬の娘である。幕府の奉公衆大館持房はこの大館家の宗家であること、また、兄の兵庫頭教氏は幕府の申次衆を勤めるなど、なかなか立派な家柄の出である。

義政が三春と呼ばれた幼児の頃、十二、三歳の少女であったお今は、乳母兼養育係として抜擢され、将軍家に仕えることになった。

この養育係りというのがふるっている。子供を相手にお伽話をしたり、一緒に遊んだりすることは建前であって、本音の部分はその子に変な虫がついたり、女子を追いかけ廻したりしないように、性教育を施してお守をする役柄であった。

普通なら、子供が一人の女性から諸々のお話を聞かされたり、文字を習うならまだしも、乳房を吸うことや性の手解きをされるのでは、どんな大人に成長するのか、末恐ろしい話である。

案の定、義政少年のお今に対する執着は大変なものであった。

行く行くは将軍になるかも知れない少年には、誰もがちやほやし、ご機嫌を取り結ぶに決っている。だが、義政少年は他の侍女たちには目もくれず、お今にだけ近寄って、晴れやかに微笑みかけるのだった。ただただお今の愛撫の許で成長し、お今を相手に屋敷内に響き渡るような声で、はしゃぎ廻る少年であった。

しかし、こうして年上の女性の性に強く魅了されてゆくに従って、義政少年からは良家の過保護児にありがちな母親への甘ったれは消えていた。そして、ことお今に関しては、実母にむかってさえ反抗的態度を見せた。

こんな義政の成長ぶりは、お今にとれば願ってもないことだが、面白くないのは烈婦として名高い母の重子である。

実母重子

重子は応永十八年（一四一一）の生まれなので、義政が十三歳で将軍になった時には四十四歳の女盛りであった。超エリートの日野家から嫁いできた重子は、六代将軍義教の後妻として義勝、義政の二人を産んだ。

だが、長男義勝は十歳の時、将軍在位わずか八ヶ月で病死してしまう。これは重子にとって悲しみ以上に大きな打撃であった。なぜなら、それ以前に「万人恐怖」と謳われるほどの専制君主であった夫義教が、重臣赤松満祐から暗殺されていたからだ。

これがいわゆる「嘉吉の乱」である。

こうして思いがけず次男の義政に将軍の座が転がり込んだというわけなのだ。

夫と長男という二人の将軍を相次いで喪ったことは、残された義政に賭ける重子の期待がどんなに大きかったか、想像に余りある。

もとより十三歳の坊ちゃん将軍に何ほどの政治的見識も期待できるわけがなく、政務に関しては、重子がそのバックにいたことは言うまでもない。

ただ問題なのは、この幼稚なわが子を何とか早く一人前の将軍に仕上げようと、重子が焦れば

焦るほど、教育ママタイプのうるさい母親にならざるを得ないことであった。

それでなくても夫の暗殺事件や長男の死を契機に、将軍家を脅かす守護大名の台頭が著しくなった。義政が将軍になった四ヶ月後には、足利成氏が「鎌倉公方」の名乗りを上げて、関東は怪しい雲行きになっている矢先のことである。

未亡人である重子の激しい気性に、混迷した時代背景がさらに鞭打って「傍若無人」だの「頗可比褒似」という悪評が生まれ、しだいに広まっていった。

重子とお今の食違い

お今の義政に対する接し方や考え方は、重子のそれと大きく異なっていた。将軍ともあろう男児が母親に頭が上がらず、言いなりになっているようではいけない。若いうちから自由に伸び伸びと母親以外の女性と接することが、早く大人になる秘訣だろう。そして、強い母親に抵抗し、凌いでこそ天下人の器量というものだ。つまり早い話が早く母親から乳離れするよう、

「絢爛たる将軍職に相応しい男性になるために、私の言う通りにするのです！」

といいたいのだ。

両者とも目的は同じだが、一人の年若い将軍を巡って、強烈な個性をもった女二人が対立することになった。

片や将軍の実母、片や将軍の性指南役である。

だが、成長する義政の目には、お今のもつ濃厚な才色は一段と色鮮やかに映り、今や、お今は

義政の愛妾と呼ぶにふさわしい存在となっていた。

何かと賢母ぶる女と、夢のような情交に耽溺できる愛人とでは勝負にならない。母親はどこまでも母親だが、時として、愛人は天使の存在ともなるものだ。

お今は義政側近の多くの女官の中で、義政の愛情を独り占めにしていった。だが、こうなると女はすぐに天狗になりやすいものだ。

「将軍の真の後ろ盾は、この私である」

とばかり、お今は重子をさしおいて政務にも何かと口出しをするようになる。

宝徳元年（一四四九）、義政十四歳の時、重子とお今が表面だって対立する問題が起きた。尾張守護代更迭事件といわれるものである。

かねて何かと意に逆らう尾張国の守護代織田敏弘を同族の郷広（さとひろ）に交替させるよう、お今は義政を動かした。そして、これに反対する重子との間で激論となった。

この時、義政は重子を批判、一方的にお今の肩を持ったのだ。

「母である私の言うことを聞かずに、あの妖婦の言いなりになっているわが子が嘆かわしい。あんな女に幕府が支配されるとは忌忌しき問題じゃ」

激怒の余り発作を起した重子は、嵯峨野の別邸に閉じこもってしまった。

険悪化した親子関係は、むしろお今の望むところだ。しかし、重子の後には綺羅星のごとく重臣たちが控えている。それに比べ、もとを糺せば一介の子守に過ぎないお今は、いわば日陰者である。

「下賤な女人の分際で将軍の寵愛をかさに、こともあろうに政治にまで口出しするとは、身の程

も知らぬ、でしゃばり女じゃ！」

重子は一旦は引っ込んだものの、今度は逆襲に転じ、最有力な重臣細川勝元と畠山持国に計って、お今追放のキャンペーンを張った。

こうなるとどっちつかずの性格の義政は、勢力のある方へいとも簡単に靡いてしまう。お今は追放の身に。

しかし、今後いっさい政治には介入しないという条件つきで、処罰だけは免れた。

このような義政の性格は生まれつきで、その優柔不断ぶりは、一生涯変らない。だが、えてしてこのタイプの男性は、母性本能を掻き立てられるのか、気性の勝った女性にもてるというから不思議だ。

義政はかなりのインテリにはちがいないが、義政の念頭には常に、三代将軍義満時代に咲き誇った、あの豪奢な北山文化への憧れが、劣等感のようにこびりついていた。

話は前後するが義満の「金閣寺」を真似て義政が「銀閣寺」を創建したことは、その性格からも頷けよう。だが、金が銀に格落ちしたこと自体、幕府財政の欠乏を天下に公表したようなものである。

しかし、当の義政はそんなことにお構いなく書画、陶磁器、その他の工芸品を飽くなく蒐集した。また、庭造りには病的なほど熱心で、京都、奈良一帯の名利、古寺、貴族の邸宅などの名石や樹木で気に入ったものがあると、相手の意向を無視して収集した。そして、それに携わった文人や名工たちを集め、茶会や物見遊山を催した。

つまりよく言えば優雅な風流人、悪評すれば現実をわきまえぬ単純な浪費家であり、放蕩者、道楽息子である。

とくに働き盛りの三十代には応仁の大乱をよそに、東山の地に創建した宮殿「東山殿」に公家や武家の高位高官を参集。時の過ぎるのも忘れた遊宴が、連日連夜にわたって繰り広げられた。

それは、現実逃避の境地を求めつづけた藤原定家や西行や、あの鴨長明などとは似ても似つかない一つの〝華麗なる方丈〟であった。

また、きらびやかな王朝絵巻に描かれる刹那的耽美の世界と、荒々しい戦乱絵巻に描かれる野心的闘争の世界との、接点でもあった。

だが、義政のものの考え方は、短絡的でいい加減なところがある。強固な意志で物事を追求する人間性には程遠い。その時々の人間関係も、好悪の感情だけでどのようにも左右される浮気女と好一対な、軽佻浮薄な男の典型でもある。

このような男と巡りあい、抜き差しならぬ三角関係の狭間に立たされた女こそ、迷惑千万というものだ。その意味でお今は、多分に不運な宿命を背負った女性ともいえよう。

お今、女児出産

さて、将軍家追放二年後の享徳四年（一四五五）正月、お今は義政の一子を出産する。

期待に反して生まれたのは女児であったが、重謹慎の身でありながら、その間隙をぬって年若い将軍と深い情交を重ねるなど、まさに大胆不敵な妖婦を彷彿とさせる。

しかし、義政はこの時すでに数人の側室を持ち、享徳二年、一色右馬頭満範の娘が女児を産み、

翌年にはまた別の側室も女児を出産しているのだ。

お今も烈母重子と他の側室への巻き返しのため、女性最強の武器をもって、将軍の子を産むべく励んだに相違ない。

時に義政は十九歳の血気盛んな青年期であり、お今は五、六歳年上の脂ののった女ざかりである。義政のお今を見つめる眼は、念願の子を持った愉悦に満たされて、無邪気に輝いている。

こうなると、お今の胸の内には、この子のためにも……という野心を越えた貪欲なまでの権勢欲が急速に膨らんでいった。義政の新たな愛情の他に、将軍の子持ちであることを威光として、お今は何の躊躇いもなく将軍家に戻っていった。

そして、以前よりも一段と激しく、政治への介入が始まるのだった。その介入ぶりはエスカレートするばかりであった。

「政権のことは今参の方が発し、その気勢や支配は燃えさかる炎のようで近寄り難く、手のほどこしようもない」

と記録されているほどだ。

それだけ年若い義政が政治的に無力であり、是が非でも義政の背後からしきりに手を伸ばす重子の政治力を排除しようとする、お今の意気込みでもあった。

「何という、しぶとい女！」

重子をはじめお今と敵対する総ての人は、あいた口が塞がらないと同時に、さらに危険なものを肌身に感じ始めていた。

「あの女一人に溺れるのは、いつまでも義政を独身貴族にさせておいたためなのだ。ならば……」

と考えた重子は、この上、お今に男の子でも出産されては一大事とばかり、さらに強力な手をうった。

それは、お今のような容貌と性格を備えている女性を嫁に宛がうことである。相手はお今よりはるかに家柄の良い、若い姫君にかぎる。それも自分の息のかかった女でなくてはならない。そう熟慮した重子は、お今に優るとも劣らぬほどの美貌と、才気に溢れた一人の娘を探し当てた。自分と同じ家門に生まれ育った日野富子である。

義政の結婚

康正元年（一四五五）八月、日野富子は義政の正室として、花の御所と謳われる室町の将軍家に輿入れしてきた。それは何と、お今が子を生んだ八ヶ月後のことであった。

花嫁の行列およそ二千メートル、飾り立てた数十両の牛車を従えている。金粉を散らした黒檀の御車から降り立った白綾の被衣（かつぎ）姿の富子は、この世のものとも思えぬ美しさだった。

日野家は古くから皇室貴族に属す、いわば中流公卿である。第三代将軍義満の正室業子を娶って以来、正室はこの日野家からもらう習慣（ならわし）になっていたので、将軍家に富子が嫁いできたことは別に驚くに当らない。

しかし、ここで注目したいのは、富子の兄大納言日野勝光の権謀術策が働いていたことだ。勝光は常々、

「俺は極重の悪党（わる）である」

と世間に自称して憚らないほどの野心満々の策略家であった。普通では許されないが、この時、十六歳の富子の後見役という名目で、勝光も共に将軍家に乗り込んだのだ。つまり、重子は富子よりもバックにいる勝光の手腕を見込んで、婚姻させたと言う方が当っているかも知れない。ここに、お今独りを向こうに廻して、重子―勝光―富子という三者の呼吸がぴたりと一致したのだ。あとに残る問題はひとつ、義政がどっちに転ぶかである。

女、三つ巴の葛藤

自分を取巻く人々の思惑をよそに、義政は相変わらずの日々を送っている。

(母と愛人の確執、妻と愛人の対立、女たちのややこしく陰湿な関係に頭を突っ込んで煩悶するほど子は暇ではない！)

この呟きが威厳からならまだしも、退屈極まりない義政は、まるで対岸の火事を眺めるように、自分だけが色男だという態度に終始していた。そして、

(女たちの葛藤こそ、予に対する深い愛情の現われである)

などと虫のいい考えに浸っていた。

昼間はお今との子を膝に抱いて、目に入れても痛くないほどの可愛がりようである。だが、夜になればなったで、新妻の富子を胸に抱いて可愛がりたい素振りを示すのだ。

しかし、お今はあれこれと理由をつけて義政を牽制。けっして富子の寝所へ足を向けさせまいとした。その常軌を逸した火のような嫉妬こそ、お今の立場を守るための砦でもあったのだ。

義政のわが子に示す愛情が、父親一般のそれと変らぬかぎり、義政が他の側室たちにどんな愛情を示そうと、それはそれでお今には我慢もできた。

だが、こと富子に関してだけは病的なほど監視の目を怠らなかったし、義政に対して少しの妥協も許さなかった。

(将軍様なら自分の一存でどうにでもできる。義政の最高の意思決定権を持つ存在は、自分しかいない)

お今はそう信じていた。

一方、たかが家庭教師役の女に頭も上がらず顔色ばかり窺う夫への、富子の落胆ぶりもわかるというものだ。後年、富子がパンチのきいた烈女、悪女、悪妻として歴史の檜舞台に登場する下地は、このように屈折した嫁ぎ先の家庭事情にあったのかもしれない。

楽しかるべき新婚二人を陰険な目つきで監視する鬼婆さながらのお今の姿は、忍従だけを美徳とする中性的世界の女性にはほど遠い。そして、その心情は現代女性たちに近いものがありそうだ。

しかし、お今がいかに目を凝らしたところで、四六時中義政と富子を見張りつづけるなど、どだい不可能な話である。

ある月明かりの夜。

富子の寝所から出てくる義政の姿が月光の下に白く浮かんだ。その姿をお今側近の女監視人の目が捉えた。

「う、うッ、しまった……私としたことが」

怒りと焦燥の中で、鋭いお今の本能は、ある種の危険を感じとっていた。
お今のその予感が的中したのは、それから間もなくのことであった。

富子の死産

長禄三年（一四五九）正月、富子は衆人待望の男児を出産した。富子が嫁いでから三年四ヶ月目のことである。
この事実に、当の富子はもちろんだが、重子や勝光以上に、喜色満面、小躍りしたのは義政であった。
「とうとう予にも世継ぎができたわ！」
いちばん早くこの世に顔を出した男子が、その家の鍋一つ、茶碗一つまでも引き継ぐ権利がある。それは王侯でも百姓でも、昔から変わることのない家族制度の掟だ。まして将軍家の男の子なら、少々お脳が弱かろうが、一切を後継する権利を有するのである。
今や義政は、愛妾よりも正室の産んだ男児に、持てる愛情のすべてで傾斜してゆく。
禁欲主義は矛盾を秘めていて、生きながら生きるなと、命じているようなものだ。お今はその
ことを、骨身に滲みて思いしらされることになる。
富子の出産祝いに湧く御所の長い廊で、多くの女官を従えた重子と、同じようなお今の一行がすれ違った。重子は控える格好のお今を見下して冷然と言った。
「閉ざされた火はなお盛んに燃えるとか。まして若い二人ですものなぁ。妬み深いお女（ひと）のお陰で、

将軍殿も火のように富子様を抱かれて、やっとお世継ぎができたと申すものじゃ」
強者の側に立ったときの女の傲慢ぶりこそ、女が動物に近いといわれるゆえんだ。だが、確かに勝ち誇った重子の言葉は、義政と富子に禁欲を強いて、結果、愛の媚薬を注ぐことになった、お今の愚かさをずばり指摘していた。
（女は何と孤独なもの。女を支えるものは、子供以外何もないのか）
とお今は思う。悲しむべきはお今の立場である。それが男であれ女であれ、子は母親にとって命以上の存在だ。当然父親から注がれるべき愛情関係が、今、お今母娘の前で音を立てて崩れようとしているのだ。
お今と富子の子は誕生が同じ一月だから、四歳ちがいの異母姉弟ということになる。この姉と弟が何の波乱もなく成長していたら、どんな人生が用意されていたかは知る由もない。ただ二人の母の互いに引くに引けない確執からみて、この姉と弟も幼児からわめき合い、汚く罵り合う、恵まれない人生を送ったことは想像に難くない。いずれにせよ暗く侘しい想像しか浮かばないのは、一人の父親と二人の母親にその責任があるといえよう。

ところで、富子の出産数日前のこと。
富子の兄勝光は、お今の兄大館教氏（のりうじ）に、安産祈願のための春日神社への使者の役を「是非に」と頼んだのである。表向きの理由は、
「このへんで、そなたの妹と私の妹とを仲良くさせようではないか。そのためには、後ろ楯である我われ兄同士が、手を結んだことを行動で示す必要があると存ずる次第」

というものだった。
この言葉に賛同した教氏は、使者の役を引き受けた。
しかし、運命はどこまでも人間を翻弄し嘲笑してやまないものらしい。
男児出産の慶びに沸き返る将軍家と日野家。そこに駆けつける引きも切らない祝い客の列を嘲笑うかのように、運命の導き手は、この男児をあっけなく他界させてしまったのだ。
死産に近かったともいう。
義政の落胆と富子の嘆き。富子を見つめる義政の冷ややかな目。
「お前はまともに子も産めぬのか!?」
二日後、周囲には義政夫妻の亀裂さえ囁かれる始末である。
その日、義政はお今との間にできた女児を抱きしめ、夜はお今の寝所に入った。
同じ頃、やつれ憔悴しきって床に臥す妹富子に、勝光は落着きはらって言葉をかける。
「まあよい、すべて、この兄に任せよ」
その足で勝光は重子の所へ向う。
かすかに揺れる燈明の火に、重子の険しい形相が浮かぶ。そして、勝光を待ちあぐねていたように、
「勝光殿、こんなことになって、どうなさるおつもりじゃ」
「心配ご無用、こうなったが、むしろ好都合というものでござる」
平然とうそぶく勝光に、重子の詰問がとぶ。
「ええっ！　好都合とはどういう意味ですか？」

「今、流れている噂はご存知ですね、重子様も」
「うわさ？」
「そうですとも、大変な噂が流れておりまするぞ」
したり顔の勝光に、怪訝な面持ちの重子が呟く。
「何のことか、さっぱりわかりませぬが……」
「噂があるのです。驚くべき噂ですぞ！」
いつにない勝光の厳しい表情と、断定的なもの言いに、重子は暗黙の内にすべてを了解した。

お今、流刑の身に

奇妙な噂が義政の耳に聞こえたのは、翌朝、つまりお今を抱いて、その寝所を出た朝のことである。
〝将軍様のかけがえのないお世継ぎが死産なのは、大館教氏が安産祈願に変えて、胎児呪詛の願文を春日神社に奉納したからだそうな。それを計画したのは妹の今参局だという〟
〝いや、昨年の夏、正室富子様のご懐妊以来、今参局は夜毎に呪詛をつづけていたそうな〟
この噂を耳にした義政は、はじめ、あっけにとられた。
しかし、お今の祈りの姿を見たというお今側近女官の言質や、春日神社への使者役は、教氏が願い出たのだ、という重子や勝光の言葉を聞くに及んで、お今に対する疑惑は義政の心の中で拡大していった。根が単細胞な義政のことだからひとたまりもない。

一方、噂は噂を呼んで、その日の昼頃には室町御所全体に広がり、世間にも実しやかに流れていった。こうなると噂でも取り返しがつかない。

ずる賢い方法だが、自分が疑われないためには、世間の名を借りて、世間ではこう言われていると流布させるのがいちばんだ。世の陰口は誰も免れることができない。だから、あくなく繰り替えされるデマは、やがて真実として受けとられてゆく。

このようにデマ、中傷、噂はライバルや有力者を蹴落とし失脚させるのに、古来から用いられる恐ろしい言葉のテロである。

他人の口を借りて語り伝える冷酷非情な仕打ちといえる。一種の処刑であり、人を破局へと追いやる最強の手段かもしれない。

その意味で、お今の風評は義政にとれば、聞くほどに真実味を帯び、胸板を貫いてこたえるのだ。

「そういえば思い当たることばかりだ。恐ろしい女狐めが！」

激昂した義政は直ちにお今を召し出し、詰問につぐ詰問の矢を浴びせかける。お今は、

「そのようなたわいもない噂を、本気で信じるおつもりなのですか」

と訴える。しかし、義政は、

「信じるも信じないもあるものか。現に予の子は生まれるとすぐ死んだではないか！」

「……」

「何も言えぬのか。えエッ、どうなのだ。返事をいたせ！」

お今は黙ったままだ。

「予の、予の子どもは死んだのだ！　そのことに答えてみよッ！」

「何をおっしゃるのです。それは自然にそうなったまでのこと。敢えて申せば、産んだ女の責任ではござりませぬか」

「それみよッ、そちはやっぱり富子を憎んでおるではないか」

「それとこれとは違います。あなた様には女人の心がわかりませぬのか？」

「ええいッ、黙れ！　黙れ！　お前のような者は予の目の前から、とっとと消え失せてしまえっ！　目ざわりじゃ！」

怒り狂ったときの人間は、一時的にせよ一種の狂人である。相手が何を言っても聞く耳を持たないのだ。話せば弁解ととり、言い訳とみなす。途中で黙ると言葉に詰まったととられ、なお不利になる。

人はこのようなとき、はじめから黙秘し、無視してしまうのが最善なのだ。だが、勝気な人間にかぎってはげしく言い合い、相手をいっそう激怒させてしまうか、途中で自分の心情を吐露する方法をとるものだ。

お今はこの二つが入り混じった最悪のケースで応対した。

（昨夜、私を抱擁したときの義政の仕草や言葉は何であったのか。この男にとって、女とはただその場その時の無為の慰み物か、つれづれに過ぎないのだ……）

無念の男涙を流して憤懣やるかたない義政の顔を、身動ぎもせずに見つめるお今。その目には勝ち誇って冷笑する三つの顔――重子、勝光、富子のそれがはっきりと浮かんでいた。

そして、かつてあれほど義政と馴れ親しんだ乳母として、保母として、愛人としての自分の存

在が、泡沫のように消えてゆくことを、お今は実感した。

「貴方は人の良過ぎるお坊ちゃん。騙されてはなりませぬぞ。お今の口車になど、二度と乗ってはなりませぬ。貴方は私が産んで、一人残った、かけがえのない将軍なのですぞ」

語尾を長く引く特徴ある重子の音色が、それこそ呪文のようにお今の耳朶に聞こえる。

お今が追放流罪の身となったことは、富子にとって、どれほど幸いであったか計り知れない。同じ家門の出で、同じように誇り高く個性の強い姑と嫁なら、激しい葛藤と確執の関係になるのは当然といえよう。だが、個性は強いが自分たちより身分の低いお今を共通の敵とすることで、重子と富子は親密に手を組むことができた。いわばお今は富子の身代わりとさえいえる。

もっとも、お今のような女性が義政の相手でなかったなら、重子はもっと個性のない平凡な女性を義政の嫁に選んだかもしれない。

長禄三年（一四五九）一月十三日、琵琶湖上を一隻の船が、沖の小島を目指して行く。

そこには寒風に髪を流した白衣の囚われ人お今が乗っている。富子の子が死産してからわずか三日後のことである。

湖面を吹き渡る風と、流れゆく雲と、蒼白のお今の頬を濡らす冷たい飛沫。囚われの女人などには全く無関係な風景が、果てしなく広がっているばかりだ。

遥かな水平線にはまるで震えているような小さな漁船が望まれる。それら一切のものを、鋭く研ぎ澄ました眸で凝視するお今。その胸奥には、やがて無惨な死を迎えるであろう、独り取り残された四歳のわが娘に対する、限りない惜別の念いがある。

（この冬の日の黄昏、心を凍らせる寂寞、ああ！）

苦痛なまでの孤独感を噛みしめて耐えるお今の影法師がゆれる。

一方、室町の将軍家ではさらに姦計が企てられていた。

ひとたびは激怒した義政であるが、あの性格ではいつまた気が変わって、お今を呼び戻さないとも限らない。先手を打って刺客を差し向けたがよい……という重子、勝光、富子による謀議は、完璧なまでに意見の一致をみたのだ。

琵琶湖上の沖ノ島に幽閉されたお今は、見張りの屈強な一人の武士を前にして、一切を悟っていた。

「そなたの手を借りずともよいのです」

きっぱり一言を言い切ると、お今は懐剣を握り従容として自害し果てたのだ。

自害といっても喉や胸を突く女人一般のそれではなく、武将同様、古式作法に従った見事な切腹であった。

「武将の棟梁たる者は、このように潔い死に様でなければなりませぬぞ」

その人生の今はのきわに、お今は身をもって義政に教えたかったのかもしれない。

この時代、呪詛という非科学的なことが、どれほどの信憑性をもって信じられていたかはわか

らない。しかし、富子の産んだ子は男児ではなく、実は女の子だったという説もある。また、敢えてお今を葬るための重子、勝光、あるいは重子、富子、勝光による男児毒殺も考えられる。

実際にお今やその兄教氏による呪詛、呪殺があったのか、どうか？　いずれにせよ、お今の悲劇の真相は遠い歴史のかなたに消えてしまい、知る術もない。

お今が死んだ年の六月十九日と、七月二十日、空に二つの太陽が出現するという不吉な現象が起きた。

また、室町御所には夜な夜なお今の亡霊が出るという噂に、人々は恐れはじめた。そして、お今に対する世間の同情がしきりとなった。

その後、富子の末子養覚が悪質な眼病を患い片目が潰れたことから、お今の祟りであると噂された。そのため富子は京都御霊社の末社を建て、お今の霊を祀った。

そのことが、この陰惨な事件にいくらかの光明を投げかけているといえようか。

義政、遊興の虜に

さまざまの事にふれつつ嘆くぞよ
道さだかにも治め得ぬ身を

いろいろな事柄にふれるにつけ、嘆かれることである。はっきりと政治の道を治めることのできない、このわが身の不運を。

室町幕府第八代将軍足利義政の、偽らない心境を詠んだ歌である。一体なにが義政をしてこのような心情に駆り立てるのか。「さまざまな事」に触れては、何を嘆くというのだろう。どうして「治め得ぬ身」なのであろうか。

日本史上の歴代将軍中、最悪ともいえる評判をとっている、悲しくもユーモラスな義政像が浮かび上がってくるようだ。

では、義政が嘆く「さまざまの事」からみてみよう。

義政の父義教（よしのり）は数奇な運命の持主であった。出家の身だったが兄の将軍義持急死のため、三条八幡宮の神前で、次の将軍を決めるクジを引いて当選したという、いささか滑稽な経緯の持主である。そんな成り行きで将軍になったのだから、当然、面白くないと思う者も多くいた。

一族の関東管領足利持氏（もちうじ）などはその代表格であった。持氏は関東に起った上杉禅秀の反乱を平定したので、すこぶる鼻息が荒かった。

「たかがクジ引き上がりの将軍めが」

と露骨に反感を示して、京都にいる将軍の命令をきこうともしなかった。それどころか、自分こそ将軍に相応しい人物であると、自負して憚らなかった。

だが、このクジ引き当選将軍は、そう問抜けな人物ではなかったのだ。突如、大軍を以って持氏に攻めかかり、あっけなく持氏を殺してしまった。「永享（えいきょう）の乱」である。

ところが、持氏の遺児を担いだ結城氏朝が関東で、土着の豪族たちを率いて反乱を起した。だが、この頃の幕府にはまだ相当の力が残っていて、氏朝の本拠である結城城を攻め落とし、反乱は程なく鎮圧されたのである。これを「結城合戦」という。

これら一連の事変における将軍の実力を知った幕府の守護大名の赤松満祐（みつすけ）は、この坊主上がりの将軍に得体の知れない不気味さを感じ、自分も滅ぼされるのではないかと、恐怖に駆られたのだ。そのあげく、自分の屋敷内で催した宴の席に義教を招き、暗殺してしまった。これが「嘉吉（かきつ）の乱」である。

〝いなかにも、京にも御所のたえ果てて、公方（くぼう）にことを嘉吉元年〟

将軍様が宴会の最中に殺されるとは、恐ろしい世の中よと、誰が作ったのか、こんな歌が京に流行った。

田舎の鎌倉と都の京で、前後して持氏と将軍義教が殺されて、嘉吉すなわち欠吉（かきつ）で、嘉吉というめでたい元号は無いに等しい、というのである。

この赤松満祐もまた、同じ守護大名の山名持豊と細川持久によって滅ぼされた。

時に義政は六歳であった。

そして、八歳にして将軍の座に就いた。わずか八歳の幼児に世に対してどんな対策が講じられるというのか。義政は幼い時から、激動する社会の中にあって、白痴的将軍として世の興亡を、ただ眺め暮らすだけの存在に運命づけられたのである。

世に何が起ろうとも、ただただ、傍観者であればよいのが、将軍という職業であった。実権は烏丸資任（すけとう）、有馬持家、愛妾今参局、いわゆる幕府の「三魔」が握り、やがて、義政の正室である日野富子に移っていった。

寛正二年（一四六一）には空前の大凶作に見舞われ、極度に飢えた農民が暴徒と化す、いわゆる土一揆が全国的に勃発した。義政にとれば、大災も人災も、現代でいえばテレビの画像を眺めているようなものであった。

それでも義政は、政治家として何の力もない我とわが身を嘆くことだけは忘れなかった。

憂き世ぞとなべて言へども治めえぬ
我が身ひとつになほ嘆くかな

力のある父義教でさえ殺されたのだ。まして全く無力な自分が、身内や側近に、いつ暗殺されてもおかしくないと、義政は常々思っていた。

このように自分の将来に全く希望が持てず、危険が迫っている場合、とるべき道は三つある。一つは鴨長明のように出家隠遁してしまうか、西行のごとく和歌の道へはいってゆくか、源実朝のように叶わぬまでも何らかの抵抗を試みるかのいずれかであろう。

だが、義政はそのいずれをも選ばなかった。所詮、自分はロボットにすぎない。あるのは「将軍」という役職（ポスト）だけである。この立場を利用しない手はない。

義政は幕府の蓄財を濫費して、とことん遊びに没頭することに決めた。

ここに、日本人にしては珍しい義政の個性がある。

政治的には為すべき何事もない。どうせ父親ほどの力量もない。それに一つや二つの反乱を鎮圧したところで、もうどうなるものでもあるまい。それは至る所に噴出する火山のようなもので、幕府と肩を並べるほどの守護大名は全国各地に点在して、一つの独立国のような形で成長しつつあるのだ。

事実、当時は群雄が割拠する戦国の世が、足音をたてて近づきつつあった。もはや幽玄の境地を気取っているどころではない。それに義政には長明ほどの文才も、西行ほどの歌の才も、実朝ほどの教養もない。政治力も皆無である。ただ遊ぶ術しかなかった。だが、義政の遊び方は異彩を放っていた。

さまざまに嘆きわびてもかひぞなき
かかる世をしも捨てやらぬ身は

いくら政治力がない、何がないと嘆いたとて仕方がないじゃないか。だが「かかる世」に生まれたことをはかなんで出家しようとは思わないと、義政は心情を詠うのだ。

むくひありてかかる時にし生れあふ
身をこそ嘆け世をば恨みず

義政は自ら嘆く嘆くというわりには、結構ふてぶてしい。嘆きのポーズがなかなかに上手いのだ。そんなポーズをとりながら義政は、室町幕府最盛期に君臨した祖先の義満の時代を思った。そして、それをもう一度実現させてみたいと考えた。

義満の時、京の室町の屋敷は花で埋まり、世に「花の御所」と謳われた。あの色彩豊かであった時代に思いを馳せた。

西方極楽にも換ふべからず

といわれるほどの金閣寺、正式には鹿苑寺舎利殿を中心とする北山の別荘に移り住んだ義満は、後世に〝北山文化〟と称される華麗なる文化遺産を遺したのである。

義政は恍惚とした眼差しで、祖先を偲んだ。ここで、義政の徹底した遊びの哲学が決意された。

応仁の乱勃発

このような時である。有力守護大名の斯波家で相続争いが起きたのは。そして、斯波義敏は細川勝元を、斯波義兼は山名持豊（宗全）を後ろ楯とした。

さらに同じく足利一族で有力守護大名の畠山家でも相続争いが起った。畠山政長は細川氏、畠山義就（よしなり）は山名氏を頼った。

偶然とは恐ろしいもので、そんな時、将軍家でも跡目争いが起きたのである。義政にははじめ子供がなく、弟の義視（よしみ）を跡継ぎとし、細川勝元をその後ろ盾とした。

ところが、妻の富子は義尚（よしひさ）を生むと義視を排除して、義尚を立てる策略を巡らし、山名宗全を頼ったのである。何のことはない、幕府内部、有力守護大名が自然と真っ二つに分かれて対立が始まったのだ。

細川派には足利義視、斯波義敏、畠山政長が、山名派には日野富子、その子義尚、斯波義兼、

畠山義就らのグループが出来上がり、睨み合った。

ところが、そのような対立など、義政にとってはどうでもよかった。自分の子が将軍になるのも、弟がその座に就くのも、同じようなものである。

大の大人がそんなことに血相を変えることもあるまいにと、どこ吹く風と受け流した。

むしろこの頃義政は、派手好きで虚栄心の強い富子を連れて物見遊山に出かけることが多くなった。チャンスが廻ってきたのだ。義政の濫費への第一歩が開始された。

古寺や旧所名跡を廻り、庭園を観賞するのが何よりも楽しい。その遊山は豪華を極めた。道楽は大きければ大きいほど愉快にきまっている。

奈良は春日神社を巡るときなど、数百人のお供の者の乗り物に花輪を飾り、騎馬の鞍には黄金を散りばめた。夫人の富子はご満悦であったが、他の者たちにとってはいい迷惑である。財を削り、所領まで質に入れて、派手で遊び好きの夫婦のお供をさせられるのだ。

このように将軍夫妻が遊びにうつつを抜かしている時であった。畠山政長と畠山義就が京都で衝突したのである。これが口火となって、とうとうあの応仁の大乱の火蓋は切って落とされた。

時に応仁元年（一四六七）五月二六日の夜明けの頃であった。細川軍は京の東部にあって東軍と呼ばれ、二四ヶ国約十六万の兵を集め、山名軍は西南部に拠って西軍または西陣と呼ばれ、二〇ヶ国約一二万の兵力であった。

これだけの大軍勢が京都を舞台に実に一一年間も戦い続けたのだから、京都は見渡す限り焼け野原と化してしまった。

疲弊した都にも春が巡り来て焼け野原に青草の芽が出た。そんな京の有様を飯尾彦六左衛門という武士は歌に詠んだ。

汝（なれ）や知る都は野辺の夕ひばり
あがるを見ても落つる涙は

京の都は跡形もなく焼け野原になってしまったのに、灰塵の中から、夕雲雀が飛んで行く。その雲雀を見ていると、どうしてもひとりでに涙が溢れて、頬を濡らすことだ。

一般の民家は言うに及ばず、公家たちの邸宅や、王朝の栄華を留める内裏も、天竜寺、相国寺などの大社寺の名刹も、ことごとく戦火に見舞われて消失してしまった。ある高位の貴族でさえ人前に出るのに着るものが無く、蚊帳を身にまとう始末であったという。

町民の困窮は推して知るべしである。

富子の醜聞とお今の幻影

そのようななか、義政は連日の風流の遊びに飽きると、連夜にわたり炎上する京の都を眺めながら、宴の盃を酌み交わした。

やがて、即位したばかりの後土御門天皇と後花園上皇を室町殿に迎え入れたのである。御殿の外ではいつ終るとも知れない戦いの日々がつづく。御殿の人々の心はその退廃に倦み、侍女と若い公達（きんだち）が、朝廷の女房と幕閣が、刹那的で刺激的な遊戯に耽っている。

こともあろうに、後土御門天皇と富子との怪しい関係も流言となって御所の中を駆け巡った。

乱れた呂律で糺す義政に、富子は艶然と言った。

「帝と私と？　まるでお伽話ですわね。こんな戦乱の世の中ですもの。お伽話の一つや二つあっても、夢をみているようで楽しいことよ。閑を持て余している人々の噂話でございましょう」

「そんな子供だましの言い逃れは許さぬぞ」

義政の猜疑に満ちた酔眼が富子をみつめる。

「何をおっしゃいますか。あなた、お今の亡霊にでも取り付かれていらっしゃるのでは？　きっとお今が言わせているのよ」

二人にとって死んだお今は、共通の後ろめたさが支配する存在である。しかし、お今に対する消し難い愛着が義政の心を占めていることが富子にはわかっている。

意地悪な富子の言葉に肩を落とす義政だが、より現実的に生きる富子は、天皇と上皇を抱え込むことで、錦の御旗を掲げたことになった。それは富子と気脈を通じていた勝元の策略であったのだ。

富子にすれば自分の子を将軍にするために始めた戦であってみれば、とことん勝利を治めるまでのことだと覚悟は決っている。どんな事態になっても幕府だけは維持しなければ意味がないと、そのための資金獲得に手段を選ばなかった。

賄賂を贈らせ、高利貸、米相場、そしてかの悪名高い関所を至る所に設けて、びしびしと金銭を取り立てた。

富子の悪名は一時に高まった。

義政も相変わらず庭造りや、書画、陶器収集に没頭し、大金をはたいては茶会や歌会を催した。また、それら風流人たちに恩恵を与え、保護した。

ある時など、兵火が御殿近くまで迫ってきたが、側近の驚きをよそに、義政はひとり悠然と盃を傾けていた。酩酊している指先が震えて、盃の酒が義政の膝を濡らす。

義政の唇から、お今の幻影に語りかける声がもれる。

「お今よ、どうして死んでしまったのだ。生きて、わしの傍にいてくれればよかったのに……」

「あなたが私を殺したのですよ。あの富子さまのために……」

「わしはどうすればよい？　お今、許してくれ」

「知りません、お気づきになるのが、遅すぎたのです」

「人間は何て愚かなものか。手許にいる時は気づかずにいたが、いざいなくなってみて、お今が何ものにも変え難く、大切だったことがわかったのだ。ああ、どうすればよい、お今よ、許してくれ……」

子供のように泣きじゃくっている義政の耳元に、お今は優しく囁いて消えた。

「あなたのお好きなことに打ち込めばよいのよ。あなたは幼い頃から、非凡なところのあったお子でしたもの。私がいつもついていてあげますからね」

酔いから醒めた義政は、まるでお今の励ましを味方につけたように、世の混乱をものともせず、いよいよ自分の遊興にひたすら熱中していった。

世の中は騒然とすればするほどよい。将軍職の名誉や権威などどうでもよいのだ。ただ、ただ

幕府の蓄財と悪妻富子の徴収する金を湯水のごとく使えばよいのだ。
義政の道楽はクライマックスに達しようとしていた。

粋狂の落とし子、東山文化

義政は義満の北山の別荘の向こうを張って、東山に山荘を建設しはじめた。いわゆる銀閣寺の建立である。

応仁の大乱、富子による情容赦のない悪政、農民の反乱である土一揆の頻発、打ち続く大飢饉などで、全国では数千、数万人、京の都でさえ一日数百人の餓死者が出るといわれる世相であった。

だが、義政は一人華美歓楽に耽り、東山一帯の邸宅造営に夢中となり、庭園は数寄を凝らし、さらに都の糺河原に大きな劇場を設けて、猿楽を催したりした。

また、春は花頂山、大野原に花を愛で、秋には奈良の古都を楽しんだ。ゆえに歴史上、義政の評価は最悪だが、義政に言わせれば、大乱も、政治の無力化も、一揆も、みな運命のいたずらで、それは飢饉も含めて天災のようなものだ。人々はよろしく己の境涯のなかで、生をたのしむべし、とうそぶいて憚らない。

暗雲の時代に生きながら憂鬱を吹き散らして、独特な活力をもって生きた義政は、ここで不思議な結果を後世に遺すのである。

竜安寺の石庭にみられるごとく、日本庭園の粋はこの時代に完成されたし、茶道の開祖といわれる村田珠光も、水墨画の大成者雪舟も、大和絵の土佐光信、狩野正信も、連歌の宗祇も、その他多くの能楽師、画家たちも義政の政治下の人々であった。

また、立花も華道として成立。一寸法師、浦島太郎などのお伽草紙、狂言など、今日の日本文化の極地といわれるもののほとんどが、絢爛と華咲いた。

世に言う暗黒の中に開花した極美の芸術「東山文化」である。それはあの義満の「北山文化」に優るとも劣るものではない。

義政を挟んで、はからずも憎み合う立場に置かれた、お今と富子という二人の女からの恩恵を蒙りながら、義政が華美に耽溺し、道楽三昧に生きた、とどのつまりの驚嘆すべき数々の遺産なのだ。

いわば東山文化を築いたのは、お今と富子の力に与って余りある、といえるかもしれない。

はかなしやめづる心の花園に
まよふ胡蝶の夢の世の人

義政晩年のロマンチックな独白である。

抄訳『古本説話集』

相原　精次

第一　大斎院の事

これはもう昔の話なのでございますが、大斎院で私どもが選子（せんし）様と申し上げる村上帝の皇女がいらっしゃいました。御治世が数代にわたりましたにもかかわらず、斎院をそのままお続けでございました。

斎宮とか斎院は仏や教典のことは忌み事として、お避けになるはずですのに、このお方は、あがめておられ、朝ごとに経を読むことを欠かすことはなさらず、三尺の阿弥陀仏にお向かいになりながら、特に法華経をお誦みでしたと、人は伝えております。その大斎院様のことを、もうすこしお話申し上げることにいたしましょう。

例えば、賀茂の葵の祭の日のことでございましたが、

「一条の大路に多くの人が集まっていますこと。皆、ともに仏になれますように」

とご誓願なさいました。これなどは輪をかけての驚きで、ございました。

こんなことでしたので、現世での栄華のことも無関心、というわけではありませんでした。祭

にさきだつ賀茂川での禊ぎにはじまって、三日法要などの出車の立派さ、心づかい、ご様子、等々いずれにおいても、実に美しく、しつらえなさっていたものでございました。

宇治殿の頼道様が兵衛佐で、賀茂祭の御前駆けをなさったおりなど、斎院様はまだ幼くていらっしゃった頃でした。一般であれば斎院の本院にお帰りなさり、ご祝儀のものなどをお与えであることなのだけれど、賀茂の河原より出発なさっていたのでご用意もないことでしたので、御前にお呼びになって対面なされながら、お召しの御小袿を兵衛佐にかけてさしあげなさったものでした。入道道長様はそれをお聞きになって、「ずいぶん立派な振る舞いだったな。ご褒美のないのも気の毒だし、取りに戻るのも時間が許さなかったろうし、その御機転ぶりはとても中途半端な者には考えつくことではない」と仰せになりました。

後一条院・後朱雀院がまだ幼くていらっしゃる頃のことでございます。お二人に祭をご覧に入れることになりました。御桟敷の前を大斎院様の御輿が御通過なさいますことで、道長様の御膝にお二人はお座りになっておりました。

「私どもの前をお通りになるときはどうぞ、この宮たちをご覧になって下さい」

と申し上げておいたところ、大斎院様の御輿の帷子から丹色の御扇の端をちょっとのぞかせていらっしゃいました。これを見て殿をはじめ皆様が、

「やはり御心がご立派なことだなあ。こんなしるしをお見せでなかったら、いくら拝見していてもどれがその御輿かわかりようがないからね」

と感心なさっていらっしゃいました。

選子様から大殿に申し上げた歌がございます。

ひかりいづる　あふひのかげを　見てしかば　年へにけるも　うれしかりけり

（これから光を発揮される葵の二葉を拝見し、年を経てしまったこの身でも嬉しく思われたことです）

御返事として、

もろかづら　二葉ながらも君にかく　あふひや神の　しるしなるらん

（幼い二人をお目にかけることができた　逢う日となった　のも賀茂の神様の霊験でございましょう）

※葵祭では、双葉の葵と桂の枝をあしらった髪飾りをつける。

大斎院様の周辺は何かにつけてご立派でしたから、上達部・殿上人などの訪れがたえることがありません。ですから、院はいつも心遣いを解くことはありませんでした。

「斎院ほどすばらしいところはありませんな」

と、人々は最大の賛美を惜しみなく語りながら参上するのでした。

ところが世も末になり、院のお年もたいそう老いてしまわれて、近頃は参上する人もなくなっておりました。そのため、院のご様子も、お心をゆるめることさえありました。かつて親しかった斎院勤めの人たちもみな老い、亡くなる方もおりましたものですから。

そんなある日でございます。後一条院様の御時代、雲林院不断念仏は九月になさっており、その十日のこと、殿上人四五人が、念仏の果てる日の夜、月が何とも言えず明るいときに、「念仏

を得に行こう」ということで雲林院に行ったのでございます。丑の刻ほどでした。

帰る段になって斎院の東の御門が細めに開いているのを見て、実はその頃の殿上人・蔵人なんていう人は、斎院の内部をしっかり見た人もなく、知らないのが普通のことでありましたから、「こんな機会に、院の中をこっそり拝見しようじゃないか」ということになって、入っていったのでございます。

夜が更けておりましたので人影もありません。東の塀の外から入って東の対の北面の軒に沿って行ってみると、御前の前栽は気ままに伸び放題、「世話する人もないのか」としみじみ感じられるほどでした。

夜露は月の光に照らされてきらめき、虫の声々も、さまざま聞こえ、それに遣り水の音が緩やかに加わっておりました。その間、まったく人の気配はしません。船岡颪の風は既に冷たく感じられる頃でした。御前の御簾がちょっと動くにつけて、薫き物の香がほのかに薫って参ります。そんな冷えた香をかいでいたところ、御格子はおろされているだろうのに、そのあたりから改めてかなり華やかな香りが漂って参ります。「何かあったんだろうか」と思って見やると、風に吹かれて御几帳が、かすかに揺れるのが見えたのでございます。御格子はまだおろされていなかったのです。「月をご覧になりたいとお思いで、ついそのままになったのかな」と思っていると、奥から箏の、平調に合わせた調べがほのかに聞こえ、「おや、こんなことも世にはあるのだなあ」と驚いたのでした。

そのいい調子が音もしなくなったので、「もう内裏へ帰ってしまおうか」と思いながらも、「こんなにすばらしい経験を『ちゃんと人が知っていたんだ』とお思い下さるように、私どもがここ

にいたことをお知らせしてしまおうか」などと一人が言った。「確かにそうだ」ということになり、寝殿の丑寅の隅の妻戸、ここは日頃人がやってきたおり女房が面会して、ものなど言うところなのですが、住吉の姫君の物語の障子などがしつらえられている、そのあたりに二人が歩み寄って、気持ちを整えて案内を請うと、実は前から女房が二人ほどで語り合っており、殿上人らは女房が起きているとも思っていなかったので、びっくりしました。

女房は夜より語り合い、月がきれいなので「明かしましょう」と思っていたところ、このように思いがけない人の訪れにあったのでした。

そのときふと奥から子笥に碁石を戻す音など聞こえました。御前様も昔のことが思い出されて、しみじみお感じの夜だったのでしょう。

昔の殿上人は、しょっちゅうやって参り、いろんな遊びをし、琴や琵琶も常に弾きましたのに、今はそんなことをする人もなく、たずねてくる人もおりません。

今宵ばかりは月が明るかったので、昔のことを思い出されて、しみじみ、お眺めになり、女房どもとお語り合いもなさり、床にもお就きにならず、夜は更けていたのでありました。

語り合っていた女房たちも御前だというのに、ちょっとうたた寝などしたりしていたものの、御前は目をおさましていらっしゃったので、お琴を手すさみに調べておられたのでした。このとき、こうして人が来たので、昔のことが思い出されて、しみじみとした思いになったのでございましょう。「この人たちは、このくらいの技も多少は……」とお聞きだったのでしょう。お琴や琵琶などお出しになって、自然な感じで互いに調べを合わせなどなさり、曲を一、二ほど弾いて夜明け方になったので、殿上人らは内裏へ帰ったのでした。そして、殿上で、なかなか面白い経

験をしたよ、と語ると、一緒でなかった者達は悔しがるのでした。

その年の冬、選子様は突然斎院をお降りになって、室町に住まわれ、三井寺で尼におなりになって、その後は、ひとえに勤行の日々を送りながら御立派な臨終を迎えられたのでした。

『この世はめでたく、気持ちよく過ごしました。後の世ではどうなりますのでしょう』とお思いで、ひたすら勤行の日々でしたので、現実に極楽往生は間違いなく、御立派な最期でした。『きっと、極楽でしょう』と入道の中将様は喜ばれなさった」と語り伝えられていますよ。

第二　公任大納言、屏風の歌を遅く進らるる事

これも、今は昔のこととなってしまいましたが、女院（上東門院・彰子）が内裏へ初めてお入りになった頃のことでございます、新しい御屏風を手配なさるおりなど、父道長様は名のある方々に歌を詠ませなさいました。四月のことでございます。

みごとな藤の花の屏風絵を飾るための歌については、四条大納言様（公任）にその部分を割りあてたのでございます。（藤の花は藤原氏の象徴）

大納言様はお詠みになったものの、その日になって、みながそれぞれ割り当ての歌を持ち寄りましたのに、なかなかやって参りません。道長様はお使いを何度も送ったのでした。

権大納言の行成様の方も御屏風を割り当てられて、こちらはそれを果たしておりましたので、道長様は落ち着きません。

公任様はしばらくしてやって参りました。まわりの誰もがしっかりした歌が詠めないでおりました。

「どうなったかな、所望してあった、例の歌は。遅いではないか」

とおっしゃられました。

「なかなかうまく出来ません。つまらないものを差し上げては、かえって意味のないこと。みんな名のある方ばかりなので、後世の恥になっては、と考えまして……」

といいわけがましく申し上げますと、殿は、

「そんなはずはないだろう。別の人間はさておいて、おまえのものがないというのでは色紙形を渡した意味もないではないか」

などと、責めた言い方をなさいますので、大納言様は、

「大変つらいことでございます。このたびは、誰もがうまく詠めないようでございますね。中で、永任だけはなんとかすると思っていましたのに、『岸のやなぎ……』などと詠み、ずいぶん変な作でした。この人さえそれほどでしたから、公任がうまく詠めないのも仕方がないと、どうぞお許し下さい」

と、さまざまに言い逃れしようとなさいました。でも、殿は、無理にと、さらにお責めになります。大納言様は、ひどく悩まれていたようですが、懐から陸奥紙を取り出して、ようやく書いて差し出しました。

道長様はその紙を御前で広げなさり、お置きなさいます。帥殿以下おおぜいの上達部、殿上人はやはり、と感じ入り、「それにしても、この大納言はそれなりの歌を詠まれたにちがいない」と期待いたします。

とうとう、帥殿が、広げられていた歌を読み上げなさったのでした。

むらさきの雲とぞみゆる　藤の花　いかなるやどの　しるしなるらん

（天上をかざる雲と見まがうこの藤の花は、どちらのお宅を飾るものなのでしょう）

その歌を聞いて道長様のお褒めの言葉はたいそうなものでした。大納言様も周囲がみな感心している様子を見せたので、「ようやく、落ち着くことが出来ました」などと、おっしゃっていたとのことでございます。

公任様が白川の家にお住まいでいらっしゃった頃のことでございます。それなりの位ある方々が四五人ほどで、「花が盛り、ということですので見たくて参上いたしました」と言ってやってきましたので、御酒などお出しになって、お互いに歌を詠み合ったことでした。

春来てぞ　人もとひける　山里は　花こそやどの　主（あるじ）なりけれ

（春が来て多くの人がこの山里を訪ねます。花こそこの屋のご主人様なのでしょう）

公任様のこの歌に人々は感動しながら後につづいたのでしたが、とうとう、これに勝るものは出来なかったのでございます。

第三　或人所々を歴覧する間に、尼の家に入り和歌を詠んだ事

これも、今は昔のことになってしまいました。高貴で、大変好感の持てるお方がございまして、あちらこちら心にとまるところを見て歩く日々を送っておられました。そんなある日、訪ねた一軒、小さいけれど、何か心惹かれる、内庭などもそれなりに手入れされている家がありました。特に、家事の支度の煙が立つというのでもなく、静かな様子はちょっと異様なものでございました。「住人はどんな人なのですか」と周辺の人に尋ねたのでしたが、「なんとかおっしゃる尼がいらっしゃいますが、食事をするという様子でもなく、細々と、ここ数年過ごしていらっしゃいます」とのことでした。

あさゆふに　煙も立たぬ　つぼやには　露のいのちも　何にかくらん

（生活の煙も立てない小さな家の住人は何を頼りとして生きておられるのだろう）

そう歌を詠んでわたすと、この尼は、

たまひかる　女籠（むすめ）めたる　壺屋には　露のいのちも　消えぬなりけり

（珠玉のような娘がおり、はかないこの命も、消えずに生活できるのでございます）

と答えたのでした。

不思議な答えだと感じて、改めて問うと、立派な、目も覚めるような娘を隠すように育てているのでした。男は、この娘を見いだしてのち、改めて、世に出させてやったので、以後、立派になったということでございます。

第四　匡衡（まさひら）の和歌の事

これも今は昔のことになりました。式部大輔匡衡（しきぶたいふまさひら）様は学業のすぐれた方で、宇治大納言のもとにいたのでした。学問の才はありましたけれど見目（みめ）はどうも、というお方でした。丈は高く、

指肩（怒り肩）で、見苦しかったので、女房どもは、「ちょっとからかって、笑ってあげましょうよ」ということになりました。倭琴を差し出して、「何事もお心得のお方とのことですが、これを弾いてくださいませんか。私ども、お聞きしたいんですの」と言ったので、

逢坂の　関のあなたも　まだ見ねば　あづまのことも　知られざりけり

（逢坂の関のその先を見知ってもいない身です。どうしてあづまのことなど知っておりましょうか）

と歌を詠んで答えたのでした。女房たちは、笑うことさえ出来ないまま、こそこそと引きあげた、ということでございます。

同じ匡衡様のことでございますが、任官からはずれて、たいそう嘆いていらっしゃる頃のことでございます。殿上人が大井（嵐山の堰がある）に行きまして、船遊びなどをなさいました。人々は歌など詠み合ったのでございます。匡衡様のお詠みになった歌はこんな歌でした。

河舟に　のりて心のゆくときは　しづめる身とも　おぼえざりけり

（川遊びの舟に乗って心のなごみゆくときは、沈んだ身であるなんて感じませんね）

この方は赤染衛門の夫となった人でしたよ。

第五　赤染衛門の事

これも今は昔のことになってしまいましたが、赤染衛門という歌で知られた方がいらっしゃいました。時望という方の女で、入道道長様にお仕えでございました。

気の進まないまま匡衡様を夫としておりましたが、それより以前、まだ若くして物知りと言われたほどのこのお方を嫌い、何かと避けていた頃のことでございます。でも、男の方がかえって、心を深くしていくようすでございました。

匡衡様が殿のお供として住吉参りをしたおり、衛門に宛てて歌を詠んだのでございます。

恋ひしきに　難波のこともおぼほえず　たれ住吉の　まつといひけん

（恋こがれていて、なーんのこともわかりません。どなたが住吉でまつとおっしゃったんでしょう）

返事として衛門はこんな歌を詠みました、

名を聞くに　ながゐしぬべき　住吉のまつとはまさる　人やいひけむ

（すみごこちのよいそこに長居なさったらよろしいわ。「まつ」なんて、心の勝ったそちらのお方が言ったんでしょう。どうぞ、そのお方にお負けになりませんように）

その後も、なかなか会う機会が出来ないままに、男の思いは募る一方でございました。気分を変えるために匡衡様は稲荷の神主の女のもとに通ったりしたのでした。けれど、その神主の女にはちっとも心が動かない匡衡様なのでした。

かつて、赤染衛門が匡衡様に当てた「杉むらならば……」の歌はきっとこの当時詠んだものだったのだと思われますよ。

※（「我が宿は　まつにしるしもなかりけり　杉むらならばたづねきなまし」の歌が衛門にある。

私、いくらまっても何の甲斐もありませんね。杉のいっぱい生えた家だったら訪ね来るのでしょうが）・杉は稲荷のしるしである。

匡衡様が尾張の守になり、かなりの羽振りとなりましたが、まだ「厭い」の思いは消えておりませんでした。ただ、幸いなことに赤染衛門様との間には挙周（たかわか）などというお子様もできた仲ともなりました。ですから幸運な人だなどと言われていました。

尾張へ家族を連れて下る途中のことでしたが、匡衡様は独り言のように、

とうかの国に　いたりてしがな（疾（と）く彼（か）の国へ入りたいものだ）

と下の句を詠んだのでした。それに対して赤染衛門は、

都出でて　今日ここぬかになりにけり（都を出てもう九日になっていますよ）

と上の句をつけたのでした。

挙周が、任官を、と望むことがあって、申し文の奥に書いて鷹司殿へ参上したおりのことでございます、赤染衛門は、

思へ君　かしらの雪を払ひつつ　消えぬさきにと　いそぐ心を

（どうか思いやってくださいませ。このかしらの雪を払いながら命が消えないさきになんとかしたいと思っておりますことを）

この歌をご覧になった入道道長様はずいぶん気の毒がりなさって、挙周が和泉守になることをいそがせなさったとのことでございます。ところが和泉へ下るとき、挙周は急に病となって、もう

いけないという状況になったのでございます。そのとき衛門は、

替はらんと　おもふいのちは惜しからで　さても別れむ　ほどぞ悲しき

（命を代ることなんてちっとも惜しくないの。私は先立たれてしまうことの方が悲しいことなのよ）

頼みては久しくなりぬ　住吉のまつこのたびの　しるしみせなむ

（住吉の神様にはこれまで長く信仰を捧げてまいりました。久しく待った験（しるし）をこんな時こそ示してくださいませ）

と書いて、住吉にお参り申し上げたその日に、挙周様は気分がさわやかになり、病気は治ったのでした。その後は、こんなめでたいことがあろうか、と世間の評判は大変なことでした、とかいうことでございます。

第六　帥宮、和泉式部に通ひたまう事

これも今は昔のことになりましたが、和泉式部のところに帥宮（そちのみや）がお通い遊ばされたことがありました。しばらく訪れることをなさらないでいたとき、宮に仕えていた童（わらわ）が式部のところにやってまいり、「御文はありません」と言って童が帰るとき、式部は、

待たましも　かばかりこそはあらましか　思ひもかけぬ　今日の夕暮れ

（お待ち申し上げましたのに、こんなことってあるのでしょうか。思いもかけずさびしい夕暮れでございます）

と詠んでこの手紙を宮に差し上げましたところ、帥宮は「まったく時をあけてしまったな」と、気の毒にお感じで、すぐに式部のところをお訪ねなさいました。女も月を眺めながら、縁先に座しておりました。庭の植え込みの露が、葉の上できらきらと光ります。「人は草葉の露なれや……」とつぶやかれるご様子は、誠に優雅なことでございました。

御扇子に御文を入れて、「使いの者が持たずにやって来たてしまったので、」と、お渡しになります。一方、式部も扇を指し出したのでした。

「今宵は帰ることにする。明日は物忌みなので、家をあけてしまうのも不都合だから……」とおっしゃられたのでした。そこで式部は、

こころみに雨も降らなん　宿すぎて　空ゆく月の　かげやとまると

（ためしに雨など降ってくれるといいですね。通り過ぎるはずの月の光が、私の宿のところでとどまってくれるかもしれませんから）

その歌が聞こえたので、「おお愛しいおまえよ」と言いながら、しばらくお上がりになって、しみじみとお語りになり、いよいよお帰りの時、

あぢきなく　雲居の月にさそはれて　かげこそ出づれ　心やはゆく

（心ならずも月に促されてゆくのだけれども、出てゆくのは月光だけさ。心が行ってしまうなんていうことはあるものか）

とお詠みになりました。

それからまた別の日でございます。「さっきの文を見たので」とおっしゃって、

われゆゑに　月をながむと告げつれば　まことかと見に　出でて来にけり

（私のために月を眺めている、とのことだったので、本当かなと、出てきましたよ）

とのことでした。何事につけても、すばらしくていらっしゃる帥宮ですのに、ただこの日にかぎって何か淡泊な感じにお見えでしたことが、つらい感じでした、と式部は日記にしたためたのでした。

はじめの頃は、このようにお心も薄そうに見えたのですが、その後は、本妻の済時様の女も捨て置かれて、ただひたすらこの式部ばかりを妻として愛されたとうかがっております。

式部は、その後保昌と一緒になり、丹後へ下ることがありました。その地で、「明日狩りをする」ということで、大勢の人が集まりました。その夜、鹿がいつも以上に鳴き騒ぎます。

「何でしょう、気になります。明日の命を感じて、あんなに鳴くのでしょう」

と気に病みますと、

「そんなふうに感じるなら、明日の狩りはやめよう。それなりの歌を詠んで私の決心を促してくれよ」

と言われて、

ことわりや　いかでか鹿の鳴かざらん　こよひばかりの命と思へば

（当たり前のことですわ。どうして鳴かずにいられましょう。鹿も、今宵だけの命と知っているんですから）

この歌で、その日の狩りは、中止となったのでございます。

保昌に忘れられておしまいの頃、式部は貴船にお出かけになって、御手洗河で蛍が飛ぶのを見て、

物思へば　沢の蛍も　わが身よりあくがれ出づる　魂かとぞ見る

（悩みの故ですね。沢の蛍の光が、我が身から迷い出てきた魂に見えるのも）

と詠みました。これに対して貴船明神は、

奥山に　たぎりて落つる瀧の瀬に　たま散るばかり　ものな思ひそ

（あの滝の瀬のように、自分を砕いてしまうほどに物思いをしてはいけません）

と答えたのでした。この歌は、なぜか男の声となって、式部の耳に届いた、ということでございました。

第七　和泉式部の歌の事

これも、今となっては昔の話となりましたが、和泉式部の女、小式部内侍が亡くなりました。そしてその形見の子供を見て、式部は、

とどめおきて　誰をあはれと思ふらん　子はまさりけり　子はまさるらん

（先に逝ってしまった内侍よ。つらいのは誰？　私側から見れば、おまえに先立たれてしまったこと。おまえの立場では子供より先立ってしまったこと、なのでしょう）

また、書写の聖のもとへ、

くらきより　冥き途にぞ入りぬべき　はるかに照らせ　山のはの月

（暗い世から、さらに冥い途に迷い込んでしまったようです。山の端の月よ、遠くから照らして見守ってください）

と詠んで奉納し申し上げた。すると、御返事として袈裟を下されたのでした。その後、式部は病を得て、もう亡くなろうとするときに、その袈裟を身につけたのでした。歌のもつ力で、あの世もこうして安泰であるというのは、本当にうらやましいことでございます。

第八　御荒宣旨の歌の事

これも、今となっては昔の話となりましたが、みあれの宣旨というお方は、上品で優しい方だったことを印象深く思い出すのでございます。

当然、容貌もご立派で、皇太后（三条天皇の后・妍子）宮の女房をされておりました。

ある時、中納言定頼様が文を出しました。

ひるは蝉　夜は蛍に身をなして　なきくらしては　燃えやあかさん

（私はあなたが恋しい。昼間は蝉、夜は蛍になって、鳴き、燃え、の日々なんです）

そんなことで、お通いなさっておりますうちに、定頼様に少し心変わりがあったのでございます。そのため間をあけるようになりがちでした。

はるばると　野中にみゆる忘れ水　たえまたえまを　嘆くころかな

（野中の忘れ水のようです。絶え間、絶え間、が悲しゅうございます）

中納言様は見栄えからはじめて、何事においてもご立派でいらっしゃいますから、すべてわかっている人は、みあれの宣旨の様子を見るにつけ同情するのでございました。

秋の夕暮れのことでした。きりぎりすが、たいそう繁く鳴いておりましたが、「待つ間は長し……

か」などと、思いに耽っていらっしゃる中納言様の様子について周囲の人は、忘れられない姿だ、などと言っておりました。

すっかりお通いが絶えてしまったあとのことでございます。宣旨が賀茂に参詣しまして、

よそにても　見るに心はなぐさまで　たちこそまされ　賀茂の川波

（遠くから拝しても慰めになりません。どうか賀茂の川浪はもっと波立ってほしい）

という歌を詠んだのでした。

その様子は、涙がひどくこぼれ、もう穏やかな状態ではないように感じられるほどでございました。

また、蝉の鳴くのを聞きながら、

恋しさを　しのびもあへぬ　うつせみの　うつし心も　なくなりにけり

（もう限界でございます。はかない身の心は、狂ってしまいました）

と詠むにつけ、周辺の人は、「自然に嘆きがはれるなんていうことはあるのだろうか」ということで、中納言様よりは多少見劣りはするけれども、それほど落ちるというでもない人をと、親しい人と示し合わせて、宣旨を連れ出したのであります。

身を捨てて　心はなきになりにしを　いかでとまれる　思ひなるらん

（もう心はずたずたで、どうにも、もうとまらなくなっています）

世をかへてこころみれども　山のはに　つきせぬものは　恋にぞありける

（相手を変えてみたところで、山の端の月、いえ、つきるなんてないのです）

といった具合に、ただただ中納言様のことのみを恋いしがり、嘆くのでございます。「なんと罪の深い情念」と思うにつけて、尊く立派な法師と相談して、比叡山に預けたりしたのでございます。ここまでしたので「罪は多少和らいだにちがいない」と感じられたのでありました。

第九　伊勢大輔の歌の事

これも、今となっては昔の話となりましたが、紫式部が上東門院で立派な歌詠みとして名をなしていらっしゃった頃、上東門院様は大斎院様から、春の頃、「退屈しています、こんな時にふさわしい物語ってありますかねエ」とお尋ねを受けました。

上東門院様はいろいろな御草子などをお取り出しになり、紫式部に、「どの草子を差し上げたらいいと思うこと?」とご相談なさったのでございます。そこで紫式部は、「どれも見慣れたものでございますね。新しく作ったのを差し上げるのがよろしいのではないでしょうか」と申し上げると、「それなら、あなたが作ってごらんなさい」とおっしゃられたので、式部が『源氏物語』を書いて差し上げたということでございます。

その後ますます心も立派で、受けもよくお仕えしている頃、伊勢大輔が上東門院に参上しました。こちらも歌詠みとしてよい筋の方でございます。道長様もたいそうお気に入りでした。

奈良から年に一度八重桜を折ってもって参るしきたりがありましたが、いつも紫式部が取り次ぎとして持って参り、歌を詠むことになっておりました。式部は、「今年は大輔にその役はお譲

りしとうございます」と譲ったのでございます。

大輔が取り次いで道長様へお届けいたしますと、「遅い、遅い」とおっしゃいますので、大輔はその声に続けるようにして、

いにしへの　奈良の都の八重桜　けふ九重に　にほひぬるかな

（古都の奈良の八重桜は、今日のこの日、宮中に豊かに匂っているのでございます）

と詠みました。「とりつぐ時間もなかったのに、どうしてこんな歌が詠めたのだろう」と周囲も感じ、殿もお思いになったのでした。

このように、評判もよく過ぎておりましたが、式部は致仕（ちし）の中納言様（高階成忠）の子で、越前守という優雅なお方の妻となったのでした。お二人がお会いになり始めの頃、石山寺に籠り、連絡もなかなかままならなくなっていました。そんなとき伊勢大輔はつぎのように歌を詠んだのでした。

みるめこそ　あふみの海にかたからめ　吹きだに通へ　滋賀の浦風

（見るめ〔海草〕、逢う身〔淡海〕、何と難しいのでしょう。せめて風だけでもわたしのもとにとおしてください。滋賀の浦風さん）

こうした歌を贈って以来、伊勢大輔の歌の評判は、さらにさらに、増したのでありました。

子孫は栄えて、六条の第弐、堀河の第弐などと言われた人々は、この大輔の孫に当たる人たちであります。

白川院には曾孫もいらっしゃいました。一の宮と申された時、参上して、お会い申し上げなさった、そのおりに、一の宮が、「鏡を見なさい」と鏡を下賜され、それを伊勢大輔に下さいましたので頂き、

君みれば　ちりも曇らで　萬代（よろづよ）の齢（よはひ）をのみも　ますかがみかな

（御主君はまさに曇ることもない永遠の命を映す延命の真澄鏡（ますかがみ）でございます）

これに対して宮の祖父に当たられる大夫殿（能信）が、

曇りなきかがみの光　ますますも　照らさむかげに　かくれざらめや

（曇りのない鏡の光が時を重ねて増し、照らす光が隠れてしまうなどということはございません）

第十　堤中納言の事

これも、今となっては昔の話となりましたが、堤中納言様が、お使いとして宇多院の大内山へ参上したことがございました。ここにみかどはお住まいでいらっしゃって、ひっそりとした様子でございました。

高いところに位置しておりまして、雲なども下からわき上がるように見えましたので、

白雲のここのへに立つ　峯なれば　大内山と　いふにぞありける

（白雲が九重にも立ち上がる峯だからこそ、ここは大内山とお呼びするのでありましょう）

※『古本説話集』について

「説話」とは広い意味で神話や民話・昔話など、語って聞かせることを目的とした「物語」のことであり、日本のみならず諸外国にある。一方、「説話文学」というと、日本の古典文学における一ジャンルの名である。

「説話文学」

①仏教説話　仏教的な因果応報を説くことが目的でさまざまな話を集めた『日本現報善悪霊異記（日本霊異記）』（七五八～八二二頃の成立）が最も古い。題材は主に奈良時代後半期頃の庶人、役人から貴族・皇族に及び、僧も貧しい乞食僧から著名な高僧まで登場する。それらさまざまな人の日常の生活を語りつつ、その所行、行動にどんな報いが及ぶか、など仏教的な教えを説くものである。これらは『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などにつながっていく。

②歌物語　『万葉集』などの和歌につけられた詞書（ことばがき）に始まって、詞書が長文化しつつ発展したものが「歌物語」である。その始まりは『伊勢物語』であり、『平中物語』『大和物語』などがその流れである。

『古本説話集』は平安時代末期か、おそくとも鎌倉時代初期には成立していたと考えられる「説話文学」である。構成は巻上（第一～第四十六）・巻下（第四十七～第七十）であって、特に巻上は形式的に和歌を介在させる②の「歌物語」の姿を取り、巻下のほうは①の形式に近い。ただし、巻下に取られている話は時代に先行した仏教説話全般だけでなく寺社の縁起や『元亨釈書』、あるいは歴史書としての『扶桑略記』などからも題材を取るなど幅は広い。

ここに収めた抄訳は『古本説話』巻一、冒頭部分の十話である。

なお、この『古本説話集』のあることが世に知られたのは、昭和十七年のことで、私の誕生した年のことであった。

聖徳銀行秘書室

鯨游海（くじらゆうかい）

第五話　頭取の炯眼（けいがん）

二〇〇八年九月のある日、澄みきった蒼天が広がる東京大手町の聖徳銀行頭取室は、静寂に包まれていた。突如、聖徳太平頭取のだみ声が響いた。

「ピン太郎秘書役」

「ハイハイ。只今」

秘書役の泉ピン太郎は、弾かれたように席を立ち、あたふたと頭取の前に駆けつけた。

「何かご用で……」

「うむ。用があるから呼んだのじゃ。実はきのう銀行クラブで、足下（そっか）もよく知っている湘南銀行の元会長の蜂矢左馬衛さんにお逢いしたよ。もう直ぐ八十歳になられるらしい。いや驚いたよ。今もなお矍鑠（かくしゃく）としておられた。

あの方には現役でいらした頃には、公私共に随分とお世話になった。

そこでじゃ。何かお祝いを差し上げようと思う。お酒がお好きじゃったから地酒の詰め合せが

よかろうと思うのじゃが何か見繕ってお贈りしてくれないか」
「かしこまりました。あの方ももうそんなお齢になられましたか。ご壮健で何よりと存じます。早速見繕って参りましょう。
しかし頭取も負けず劣らず矍鑠としておられます」
「下手なお世辞は云わなくて宜しい。何しろ私は未だ還暦を過ぎたばかりじゃ。
そもそも矍鑠とは、八十歳前後を過ぎた老人、それも男性に限って使ってよい言葉なのじゃ」
「ウグッ。これは大変ご無礼を申し上げました」
「うむ。ついでに云えば足下と較べるのも何じゃが、あの江戸中期の大学者、荻生徂徠でさえこの語を間違えて使っている」
「はあ……。さようで」
「徂徠はある書物で、局住まいの八十に垂とする老女のことを『年齢八十、なお矍鑠』と書いている。これは徂徠先生ともあろう碩学にしては全く誤った使い方と云わざるを得んのじゃ」
「ははあ、なる程。頭取のように幾らお元気でも還暦を過ぎたばかりの方やご婦人には使ってはいけない言葉でしたか。これからは私も十分に気を付けるように致します」
「うむ。尤も言葉というものは『情は人の為ならず』のように、時代と共に意味も変ってくる。孔子が『不惑』と動詞で使った語がその後『四十歳や四十歳代』を指す名詞『不惑』に転じた例もある。じゃが大切なことは、典故本来の正確な意味とか用例を承知しておくことじゃ」
「難かしいもので……」
「うむ。じゃがのう支那の文人は訓詁の学とか云って故事の本来の使われ方に忠実で固執する。

漢字の意味を正確に踏襲しようとする意識では流石『文の国』じゃ。
日本の方が、よく云うと柔軟、悪く云うとかなりいい加減で、本来の解釈から外れた使い方をする」
「流石頭取！　また一つ勉強させて戴きました」
「お世辞はほどほどで宜しい。『巧言令色鮮なし仁』というものじゃ」
「ウグッ。恐れ入りました。なにぶん浅学ひ才の凡夫でございますので……」
「足下にしては難かしいことを云う。所で今足下は『浅学ひ才』と申したが、ひの字をどう書くか知っているかね」
「ひの字は非でございましょう」
やにわに太平は呵呵大笑して云った。
「ワッハッハ。じゃから足下ら若い者は字を知らぬと申すのじゃ。ひの字は艸をつけて菲と書く。これは非ではなく、厚い薄いの薄いの意味じゃ」
「非ではなく菲でございますか」
「そうじゃ。『浅い学問と菲い才能』とでバランスがとれるじゃろう。漢文はこうした整然とした対句を多用する。
昔、漢代に起こり六朝から唐代にかけて流行した『四六駢儷文』というのがあった。
これは四字と六字の句を並べて対句とし、而も二字毎に平仄を逆にした美文じゃ。漢文はこのように上下、左右に対句を配して調子を整え、意味を判り易くし、同時に格調の高い文章を作った。明、清代には『八股文』というのもあった。

古来わが国の文人もこれを真似し、且つ七五調として名文を残したのじゃ。

『祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響き有り
沙羅双樹の花の色　盛者必衰の理を表す』

とか

『天は人の上に人を造らず　人の下に人を造らず』『花は桜木　人は武士』『紅　萌ゆる　丘の花　さ緑匂ふ　岸の色』……」

「……」

「ついでじゃが、浅学菲才は謙遜した云いまわしであることを察しなければならん。つまり『多少は学問も才能も有る』と公言したことになるのじゃ。

喩えて云えば、少々法律を噛った学生が指導教授や准教授の前で、謙遜した積りで云うのは厳に慎まねばならん。ある道を相当程度究めた人が、その先達の前で使用するなら正しい。准教授が教授の前で、また教授が名誉教授の前で云うのなら許されよう」

「つまり私ごとき凡夫は『無学無才』と云うべきで……」

「そうじゃ。『浅学菲才の凡夫』では自己撞着も甚だしい」

ピン太郎は冷や汗をかきながら、ほうほうの態で退散した。

こんなことがあって間もないある日、ピン太郎と同期入行で小田原支店長の中山喬夫から珍しく電話があった。

用件とは、古くから同店と取引している米山内科医院の米山盛雄院長から「ある漢詩について頭取さんにご教示戴けないか」との依頼だという。

近年太平は「声に出して活かしたい論語70」を上梓し、ちょっとしたロングセラーとなっていた。出版社からの要請でその続篇も出したし、各所での講演の依頼も増えていた。

つまり漢籍に関する太平の令名が、財界や金融界で徐々に広がっていた。つい先週には新聞の文化欄で取り上げられたこともあって、今回の依頼となったのであろう。

さて米山盛雄院長は太平と同年輩である。院長の亡父忠道は山形県鶴岡市出身の元海軍々医で、山本五十六が艦長として座乗していた「赤城」に、軍医長として乗り合せたこともあった。

戦後、当然のこと乍らGHQ（連合国軍総司令部）の命により公職追放に遭い、それを機に夫人の実家がある小田原で開業した。

聖徳銀行とは、その時に開業資金の融資を受けて以来の親しい取引が続いていた。

最近院長が書庫を整理していた所、能筆家で知られる山本五十六大将が亡父忠道に宛てた書簡を始め、文人墨客らの書や色紙が数点出て来た。

その中に新聞紙大の和紙に書かれた一篇の漢詩があり、竹雨の署名と落款が捺されていた。若し本物なら貴重な発見である。

太平の了解を得たピン太郎が小田原支店長に応諾の旨を伝えた数日後、次のコピーが院長の手紙と共に郵送されてきた《読み下し文は後刻太平が記したものである》。

原爆行　竹雨

怪光一綫下蒼旻
忽然地震天日昏
一刹那間陵谷變
城市臺榭歸灰塵
此日死者三十萬
生者被創悲且呻
死生茫茫不可識
妻求其夫兒覓親
阿鼻叫喚動天地
陌頭血流屍横陳
殉難殞命非戰士
被害聰是無辜民
廣陵慘禍未曾有
胡軍更襲崎陽津
二都荒涼雞犬盡
壞牆墜瓦不見人
如是殘虐天所怒
驕暴更過狼虎秦
君不聞啾啾鬼哭夜達旦　君聞かずや啾々と鬼哭し夜旦に達するを
殘郭雨暗飛青燐　殘郭（廃虚）雨暗く青燐飛ぶを

原爆の行　土屋竹雨

怪光一綫蒼旻より下り
忽然地震いて天日昏し
一刹那の間陵谷変じ
城市台榭（高楼）灰塵に帰す
此の日死する者三十万
生くる者創を被り悲しみ且つ呻く
死生茫々識る可からず
妻はその夫を求め児は親を覓む
阿鼻叫喚天地を動もす
陌頭血流れ屍横陳す
殉難命を殞すは戦士に非ず
害被るは総て是れ無辜の民
広陵（広島）の惨禍未だ曽って有らず
胡軍（米軍）更に襲う崎陽（長崎）の津
二都荒涼として鶏犬尽き
墻を壊し瓦堕ちて人を見ず
かくの如き殘虐は天の怒る所
驕暴は更に過ぐ狼虎の秦

何故この字だけ韻が合ってないのか？
↓
〔昏〕kwon
↑
〔？〕（旻）（塵）（呻）（親）（陳）（民）（津）（人）（秦）

全て（…in）で終る（上平声十一眞）のグループの字

（燐）

熟読した太平は席を立ち、顎をしゃくって頭取室にピン太郎を誘った。

「もし急ぎの用がなければ一服どうじゃな。美味しいお茶でも淹れてくれないか」

秘書役となって三年になるが、こんなことは初めてであった。ピン太郎は緊張し乍らも豪華な部屋に入り、太平と対面して座った。

秘書嬢の宮崎眞弓が、優雅な仕草で茶碗を置いて立ち去った。たちまちいい香りが室内に充満した。

「早速この漢詩を拝見したが、これは大変な芸術作品じゃ。真に迫る臨場感があり想像力を無限に掻きたててくれる。叙事詩の範と云うのじゃろう。流石は竹雨先生じゃ。原子爆弾の惨状を唯の一四三字で見事に再現している。

これが本物ならば大変な新発見じゃ。足下はそうは思わないかね」

「ハイ。ごもっともで……」

「若しこれを英語等、他の表音文字で現わすとすれば、この何倍もの字数となる。わが『漢字かな混り文』でも凡そ倍の字数が必要じゃ。少ない字数で意味をたっぷり含ませるには表意文字、即ち漢字が一番ということじゃ」

眞弓嬢が淹れてくれた濃緑の渋いお茶を美味そうに啜り乍ら、太平は熱っぽく語った。

「戦争も原爆も知らぬ足下ら戦後生まれの者に、原爆投下直後の街の様子を伝えるのには漢詩が

最適の手段と思わないかね。
写真や絵もいいが、迫力と深みの点では漢詩に及ぶまい。映画もいいが所詮は後から演出、再現したもので、而も莫大な費用と人手が必要となる。小説も作家の創作が大なり小なり入って了う。その点詩は直観の芸術じゃからストレートに読み手の感性に訴えて来る。
何時じゃったか、私は埼玉の東松山市に在る丸木美術館を訪ねたことがあった。ここには原爆の惨禍を畢生の仕事として描かれた丸木ご夫妻の絵が展示されているが、あれを観ると戦争は絶対に阻止せねばという強い念いに駆られる。
足下も一度観ておくがよかろう。
じゃがこの漢詩の迫力は、それにも増して素晴らしい。一字一句が私の魂を揺るがすのじゃ」
「なる程……」
「この詩を詠んだ竹雨と云えば、知る人ぞ知る昭和を代表する漢詩人じゃ。
確か明治中頃の生まれで、法科の出身じゃが、幾つかの詩社に属し、生涯数千首に登る漢詩を創られた。
若い頃は東洋文庫に関わり、晩年は漢学の伝統ある大東文化大学の学長を務められた。
学者であり乍ら専門の漢詩人としても大成なさった方じゃが、惜しいことに昭和三十三年に七十歳で亡くなられた。
そもそも学者の作る詩は今一つじゃ。韓愈や朱熹の詩より李白、杜甫、李賀、杜牧の詩の方が勝れているじゃろう。
わが江戸時代で云えば、林羅山、伊藤仁斎、荻生徂徠、新井白石、頼山陽、広瀬淡窓らは夫々

立派な学者ではあるが、詠んだ詩は面白味に欠ける。
一方、広瀬旭荘や柏木如亭、石川丈山、良寛和尚らのように、正規の学問を学ばなかった人の方が、感性豊かな奔放な詩を詠む。学者はどうしても一定の枠に嵌められて了うようじゃ。
然し竹雨は、学者であり乍ら優れた感性の詩も作った数少ない才人じゃった」
「ははあ、さようなものでございますか。所で、何故そんな大先生の詩が米山家に在ったのでしょうか」
「うむ。察するに竹雨は鶴岡の人じゃ。先代の米山忠道軍医も鶴岡のご出身と聞く。同郷の宜で親交があったのかも知れない。
お齢から察すれば、或は旧制中学校の同級生か同窓生かも知れん。
あの頃の軍人は乃木希典に限らず皆優れた漢詩を詠んだものじゃ。或はこの両人は漢詩の師弟といった所かも知れぬ。
所でじゃ。院長さんの手紙には『解読して戴けないか』としか書かれていないが、この方は相当漢詩に詳しいとお見受けする。何故ならこの詩は平易な詩じゃ。じゃが、この二行目の末尾の字『昏』が、異質なのに気づかれたらしい（一四六頁参照）。
つまり他の押韻が全て『上平声十一眞』の字なのに昏だけが『上平声十三元』の字じゃ。これが判るのは漢詩に通じておられる何よりの証拠じゃ。ここだけ破格の押韻としたのは何故かと」
「頭取にも難問で？」
「いや。私は一見して読み取ったがね」
「流石頭取！　もうお判りで」

「漢詩のルールは世界一厳しい。これを作るには相当の修練が必要じゃ。これを克服した者だけが科挙に合格出来たという歴史がある。

足下は判らんじゃろうが、この詩の詩形は古詩＝古体詩の歌行という。唐代に成立した近体詩とは区別される。近体詩と較べればルールや禁忌も少なく比較的作り易い詩じゃ。

じゃが古詩といえども押韻は厳格に定められている」

「ははあ。さようなもので」

「折角のいい機会じゃから、少し漢詩のルールを教えて進ぜよう。

先ずは韻を踏むこと、押韻についてじゃ。日本の詩歌にはないが、英独仏等ラテン語系の詩歌、インドのサンスクリット語の詩歌等に共通して存在する。つまり各句末の字の響きを規則的に並べることじゃ。

支那の詩では既に詩経に表われている。規則的に並べるのじゃが、それも徐々に変化し、やがては各偶数句末に踏むようになった。また起句末は踏んでも踏まなくてもいいとなった。

この詩でいえば、起句の晏、四句目の塵、六句目の呻、八句目の親、以下偶数句末に陳、民、津、人、秦、燐と踏んでいる。全て（…in）と響くじゃろう。これらの字は全て『上平声十一眞』のグループに属する。

所が二句目の『昏』（kwon）は『上平声十三元』のグループじゃ。いわば所属が違う。（…in）と（…on）とでは口の開け方から異なる。当然声調、響きも違ってくる。

尤も日本語は母韻がアイウエオの五韻しかなく簡単じゃが、中国語の発音は複雑で百六も有る。

『上平声十三元』に属する字には、元、原、園、婚、村、屯、煩、藩、繁、噴等々があり一様

ではない。つまりエン、オン、アン、ウン等の複合した韻だと思えばいいじゃろう。今これを（…won）と表記しておこう」

「なる程。少し判りました」

「私の詠んだ詩で説明しようか。

実はこの詩は去年全日本漢詩コンクールに入賞した作じゃが……。あの金メダル荒川静香嬢を讃えた七言絶句じゃ。

讃荒川静香嬢五環金杯

白鳥仰天冰上奔　白鳥天を仰いで氷上を奔り
婉然微笑羽衣翻　婉然微笑　羽衣翻える
萬人豈但醉仙舞　万人豈に但だ仙舞に酔うのみならんや
忍雪堪傷不屈魂　雪を忍び傷に堪えし不屈の魂に於いてをや

この◎を付けた所に韻を踏んでいる。奔、翻、魂は『上平声十三元』の字じゃ。起句はどらでもいいのじゃが、ここでは踏んでいる。七言の場合は踏む例が多いからじゃ」

「奇数句はどうなるので？」

「うむ。いい質問じゃ。押韻しない句末は全て仄字を用いる。仄声は●で現わす習慣じゃから●を付けておいた。○は平声じゃ」

「平声とか仄声とは、そもそもどんな声なのですか」

「平声は、平に響く声調で、明るく伸びやかなトーンじゃ。平安、陽春、清明などは全て平声の字の組み合せとなっている。

仄声とは仄なのじゃ。語尾が上がったり、下がったり、促音と云って詰まったりする。つまり暗く、切迫した、何か不安を予感させるトーンなのじゃ。絶滅、屈折、切迫などは全て仄声の字の組み合せじゃ」

「……」

「漢字には平、上、去、入の四声がある。これは漢字を発音する時の声調、つまり高低、長短、アクセント、韻などで四種に分けた。更に平声は、上平声十五、下平声十五の計三十グループに、上声、去声、入声をまとめて仄声と呼び七十六グループに、合計百六のグループに分類したのじゃ」

「誰がそんな決まりを定めたので……」

「千年以上も前に、支那各地の主な学者が平水という所に集まり、全ての漢字一字宛の所属を決めていった。これは科挙の試験を公平に実施する為にどうしても避けられない作業じゃった。いわば国際会議の嚆矢と云っていいかも知れぬ。これを『平水百六韻』という。

やはり文の国の歴史は凄い」

「そんな歴史があったとは知りませんでした。でも詩文を作るのにどうしてそんな複雑なややこしいルールを決めたのでしょう」

「好い詩文を作る為じゃ。この作法に従って然るべき場所に平字や仄字を嵌め込んでいけば、自ずから好いリズムの詩文が出来上る。朗詠した際、調子良く聞こえるのじゃ。日本語で云うなら、七五調とか五七調と同じようなものと思えばいい。

元来はインドで発達した音韻学の影響を受け、これを詩文に応用したと云われている」

「昔も国際間の文化交流が活発だったのですね。押韻のルールは大体判りましたが、それ以外に

も厳しいルールがあるやに伺っていますが」

「うむ。古詩の場合は主に押韻のルールさえ守ればいいのじゃが、近体詩となると更に厳しい決まりや禁忌がある」

「……」

《以下の一節は、漢詩の作法をご存知の方、興味の無い方は飛ばして戴いて結構です。本小説の筋書きとは直接関係ありません＝筆者》

「作詩に関する平仄の配置のルールには、主に次の五つがある。

一、二四不同、二六対（七言）
　※二字目と四字目の平仄は逆にすること。対とは同じにすること
　二四不同、二九対（五言）
二、下三連同韻禁（共通）
　※下三字全てを同韻としないこと。
三、四孤平禁（七言）
　※四字目の平字を仄字で挟まないこと。
　二孤平禁（五言）
　※二字目の　〃　　。
四、冒韻禁（共通）
　※句の始めの字に押韻した字のグループを使わないこと。
五、頷聯（三・四句）、頸聯（五・六句）は必ず対句とする（律詩、排律・共通）

杜甫の五言律詩「春望」で見てみよう。

春望

國破●山河○在●　国破れて山河在り
城春○草木●深○　城春にして草木深し

感時　花濺●　涙●　時に感じては花にも涙を濺ぎ
恨別●　鳥驚○　心○　別を恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火●　連三○　月●　烽火（戦乱）三月に連なり
家書○　抵萬●　金○　家書（妻の便り）万金に抵す
白頭○　掻更●　短●　白頭掻けば更に短かく
渾欲●　不勝○　簪○　渾らく簪（かんざし）に勝え不らんと欲す

（●仄声、○平声、◎平声の韻字）

右の●○を見ると、前に述べた五つのルールを全て満たしつつ一定の規則で配置されているのが判るじゃろう。この詩は杜甫の不朽の名作と云われている五言律詩（八行句）じゃ」

「この他にも同じ字を無意識に二度使わない、とか細かい作法や禁忌はあるが、何れにしろ漢詩一首を作るのは大変な知的営為ということが判るじゃろう。尤も慣れれば誰でも詠めるものじゃが。じゃが不思議なことに、厳しいルールとなった唐代以後、漢詩の花が豪華絢爛に開いたのも事実なのじゃ」

「それは亦たどうしてでしょうか。ルールは易しい方が作り易いと思いますが」

「うむ。じゃが厳しい故に推敲を強制される一面があろう。何度も何度も推敲を重ねるうちに詩はより洗練されてくるのじゃ。唐の賈島は『二句三年にして得、一吟双涙流る』と詠んだ程じゃ。たかが二句作るのに三年も苦吟推敲したのじゃ」

太平の熱の籠った講釈を聞いているうちに、ピン太郎は漢詩の持つ奥深さ、神秘さに感嘆し、畏敬すら覚えていた。

「さて、私はちょっと出掛けねばならん。そうじゃ。この竹雨の漢詩と院長先生の手紙を沼田君の所に回付しておいてくれないか。

彼女がこの昏をどう説明するか、卓見を聴きたいものじゃ」

こう云い残して太平は、そそくさと外出して了った。ピン太郎は慌てて後を追いエレベータの前で追いつくと最敬礼で太平を見送った。

沼田美紀は外為資金室長で、北京支店長を二年余勤め、最近帰国したばかりの才媛であった。黒木瞳に似た美貌に加え大阪外語大の中国文学科を出ただけあって漢籍に詳しい。行内に人材は多いが、漢籍に関しては太平に次ぐ学識の持ち主で、太平にとっても漢詩漢文の話しが通じる手応えある相手で、日頃から何かと目を掛けている人材の一人であった。

沼田美紀は、ここ数日頭取から回付された例の漢詩の昏の字が頭から離れず、考えあぐねていた。

（最も単純に考えれば竹雨の思い違いである。大学者でも思い違いはある。あの荻生徂徠でさえ、うっかり矍鑠の語を誤って使ったではないか。しかし……）

（次に考えられるのは、竹雨が破格を承知の上で、敢えて用いたケースである。李白でさえ時に破格を犯すことがある。

否、承知の上で敢えて使う。但しこの場合は強い動機がある。良寛の詩も破格が多い。然し良寛の場合は、自から「我が詩は、是れ詩に非ず」と公言している。

また李白の破格といっても句中の平仄の配置に関する破格で、押韻に限っては破格は皆無で

ある。それ程、押韻は神聖で絶対的な基準なのだ。これは詩経以来の伝統だ）と考えを巡らせた。

美紀は途方に暮れた。

（漢詩人は一字の重さを知っている。一字も疎かにしないものだ。竹雨ほどの人が単純ミスを犯すとは考えられない。敢えて破格の字を用いたのには、それなりの強固な動機、万人が納得し得る理由がある筈だ。

それは一体何だろう？）

美紀は休日を待ち兼ねて図書館に行き、土屋竹雨に関する解説書や作品集を読み漁った。

笠井南村注釈の「猗盧詩稿」も全篇に目を通したが、ヒントになるような昏の使用例を見出せなかった。

僅かな収穫と云えば、竹雨が傾倒していたのは蘇東坡と黄三谷、及び李杜であったことぐらいだった。

失意のうちに図書館を後にした。秋の日は短かい。夕陽が沈みゆく西の空はうす暗い茜色に染まっていた。徒労だった。

疲れがどっと襲ってきた。

自宅に戻り夕食を終えた美紀は、改めて詩を眺めていて、ふとある部分に眼が止まった。詩の終りから二行目の末尾の旦の字である。

昏と旦。昏旦。夜と朝。これは対偶だ！

美紀の頭に稲妻が走った。

七言二十句の整然とした構成美を誇る歌行という漢字の羅列の中で、この十九句目だけが「君不聞」という三字分が突出し、十言となっている。いわば破格の行である。その末尾が旦。

（そうだ。二句目の昏の破格と、この十九句目の破格とが、前後に対を為し、微妙なアクセントとなっている。

これは詩に変化をもたらし、却って単調さを免がれる効果となっている。

ビジュアル的にも左右の破格が絶妙のバランスを形成しているではないか！）

翌朝八時、夜が明けるのを待ち切れず出勤した美紀は、真っ先に頭取室に向かった。太平の朝が早いのを知っていたのだ。

「頭取！　判りました!!　謎が解けました!!!」

美紀の声はうわずっていた。頭取よりも早く出勤していた宮崎眞弓嬢が淹れてくれたコーヒーが、馥郁たる香りを漂よわせた。

「うむ。よく気が付いた。たいしたものじゃ。じゃがのう、その答えでは六十点という所じゃ。惜しいが満点とはいかぬ」

「……？」

自分の解答に自信のあった美紀は、息を呑んで太平を凝視した。知的で真黒な瞳が、真っ直ぐに太平の眼を射て動かなかった。

「貴女の答えは正解で素晴らしい。じゃが、それにもう一つの理由をプラスしてみよう。

昏の字は、唐以前、即ち隋朝までは昏じゃった。隋が亡び唐が起こったが、その唐の創建者太宗の名を李世民と云う。

聡明な貴女のことじゃ。もう云わなくてもお判りじゃろう。民を諱として避け、形の似た氏を用いて昏という新らしい字を造ったのじゃ。

意味は勿論変わらない。『冥い＝昏い＝昏い』じゃ。昏の古字が昏で『上平声十一眞』のグループの字じゃった。貴女の答えにこれを補足すれば完璧となる。これでめでたく百点満点じゃ。ワッハッハ」

紅葉が一段と深まった箱根の花月苑ホテルの奥座敷で、名月を背に酒を酌み交している一座の客があった。

米山盛雄院長、智恵夫人、聖徳太平頭取、中山喬夫小田原支店長、黒木瞳いや沼田美紀外為資金室長、それに世話役の泉ピン太郎秘書役の六人であった。

和やかで満ち足りた時間がゆっくりと過ぎていった。満天の星が息づいていた。

太平のだみ声が響いた。

「流石は竹雨先生じゃ。芸が細かい。日本にこのような漢詩人は再び現われまい。日本最後の漢詩人じゃった」

米山盛雄院長がぽつりと呟いた。

「この漢詩を広島の原爆資料館に寄贈しようと思うのですが……」

一同はゆっくりと頷ずき合った。月と星が一瞬耀きを増した。蟲の声が啾々とオクターブを上げ、いつ迄も鳴き止まなかった。

天賦の報徳人　大原孫三郎の一日

堀内　永代

（一）

報徳思想を実践した著名な経済人は、枚挙にいとまがない。その中でも、特に名前を知られている人を、年代順に挙げれば次に通りであろう。

まず最初が、「金融王」といわれた安田財閥の創始者安田善次郎（一八三八―一九二一）である。安田は、「二宮尊徳の教えは、収入の五割をもって生活し、その残りを蓄えることであったが、自分は収入の八割を生活に費やした。しかし、分度を守っていたので、これだけの財ができた」と周囲に話したと伝えられている。

次が「日本近代化の父」と謳われた子爵渋沢栄一（一八四〇―一九三一）である。渋沢が、西郷隆盛に二宮尊徳の興国安民法を講義した逸話は、知る人ぞ知るである。また、仁義道徳・生産利殖（経済）の合致論を説いた渋沢の著書『論語と算盤』は、現在も広く愛読されている。

三番目は、静岡県森町出身で、刻苦勉励して「砂糖王」の名をほしいままにした鈴木藤三郎（一八五五―一九一三）であろう。鈴木は、二宮尊徳の遺著九千十四巻を筆写し、二千五百冊に

編綴して日光市の今市報徳二宮神社に寄進している。

四番目は、「世界の真珠王」と呼ばれた御木本幸吉（一八五八―一九五四）である。尊徳の生家を買い取り、尊徳の生地・小田原市栢山に移築して生家保存に尽力した。

五番目は「織機の発明王」豊田佐吉（一八六七―一九三〇）である。豊田はトヨタ自動車の基礎を創った人で、報徳の精神を企業経営に反映させようと努力した。

六番目は松下電器産業の創立者で「経営の神様」と尊敬された松下幸之助（一八九四―一九八九）である。松下の一生は尊徳の生涯と似ている。

最後は「行財政改革の鬼」（臨時行政調査会会長）と恐れられ、「メザシの土光」と呼ばれて親しまれた土光敏夫（一八九六―一九八八）であろう。

これらの人たちは、いずれも報徳人として素晴らしい実績を残しているが、もう一人忘れてはならない報徳人がいる。岡山県倉敷市の大富豪、実業家、「大原美術館」創立者大原孫三郎（一八八〇―一九四三）である。

経済界における報徳人の多くは、二宮尊徳同様、その才覚と努力で財をなし、しかる後に財の一部を推譲して社会福祉事業や公益事業に尽くした人たちである。しかし、大原孫三郎は違う。生まれながらにして巨大な財力を持ち、それを惜しみなく社会事業に注ぎ込む、常識では考えられない偉大なる散財家、まさに「天賦の報徳人」と尊称するに相応しい。

昨年の秋、筆者と妻は娘夫妻と共に、岡山県の倉敷を旅行した。倉敷は二度目である。

倉敷といえば大原美術館、そして大原孫三郎、さらに大原孫三郎がこよなく愛した観光のメッカ倉敷の美観地区が思い浮かぶ。

私たちは、JR倉敷駅前からタクシーに乗車した。美観地区までは僅かな距離であったが、タクシーの窓から見た街並みは、人口四十八万人の都市には珍しく、狭い道路の両側に、古い家が肩を寄せ合うように建っていた。筆者は、

「運転手さん、倉敷は街並みが古く道路も意外に狭いですね。第二次世界戦争で空襲を受けなかったんですか……」

と質問した。すると、五〇年配の運転手は、

「倉敷には大原美術館があったから、爆撃されなかったんですよ。それに倉敷は軍隊のない平和都市でしたからね。直ぐ近くの水島には三菱重工の軍需工場もありましたが、倉敷だけは爆撃の洗礼を受けなかったんです。みんな大原孫三郎さまのお陰です」

やや自慢気に、そう教えてくれた。

「運転手さん、その辺りのことは大原美術館へ行けば判りますか……」

筆者が重ねて質問すると、

「さあ、どうでしょうか。美術館に行っても解らないと思いますよ。先の戦争で、アメリカ空軍が倉敷を爆撃しなかった理由は公表されていませんからね。あっ、お客さん済みません。もう美観地区に着きました。十分な説明ができなくて申し訳ありません。ハイ、料金は七一〇円です」

運転手の説明が終わる前に、タクシーは目的地の美観地区に着いてしまった。

話は七〇数年前の昭和七年（1932）のことである。満州事変の調査のため、英国のリットン卿を団長とする国連調査団が来日した。その時、一部の団員が大原美術館に名画のあることを

知って倉敷を訪れた。団員たちは、エル・グレコの「受胎告知」を始め、印象派の巨匠たちの名画を目の当たりにして、

「オー、ワンダフル！　ワンダフル！」

を連発して敬嘆した。このリットン調査団の訪問により大原美術館の名は一躍世界に知られるようになり、第二次世界大戦の時も、連合国軍の間から「オオハラ」を救えという声が高まり、大原美術館のある倉敷は、アメリカ空軍B29爆撃機の攻撃目標から外されたのだった。

さらに、倉敷が戦災に遭わなかった理由がもう一つあった。それは倉敷が軍隊のない平和都市であったからである。

リットン調査団の来日よりさらにさかのぼった明治四〇年（1907）、岡山に陸軍師団が設置され、それに伴い倉敷にも一個連隊が配置されることになった。軍隊が来れば地元は潤い、古い天領の町倉敷が活性化すると軍隊誘致派はこれを歓迎した。しかし、軍隊が来れば、風紀が乱れるおそれがあった。

倉敷には、大原孫三郎が社長をしている倉敷紡績のほかにも、いくつもの紡績工場があって、多くの若者が働いている。孫三郎は、これら若者、特に女子従業員を守る責任がある。孫三郎は、連隊誘致を推進する町の有力者を相手に、猛烈な反対運動を起こした。すると軍隊誘致派から、

「反対運動を止めなければ、自宅に火を付けるぞ……」

「お前のような非国民は死んでしまえ、殺してやる……」

等々脅迫の電話や投書が、大原家に毎日のようにあった。孫三郎は迫害されながらも孤軍奮闘、遂に世論の支持を得て、陸軍省に連隊配置を撤回させたのだった。

この時、孫三郎は弱冠二八歳。一見向こう見ずのような孫三郎の軍隊反対運動のお蔭で、倉敷は軍隊のない町となり、戦災から免れることができたのである。

「美観地区があるのは大原孫三郎のおかげ」

と倉敷市民が自慢するゆえんである。大原孫三郎には、どうしてそのようなバイタリティーがあったのか、筆者ならずとも興味の湧くところである。

（二）

いったい大原孫三郎とは、どんな人であったのだろうか。

大原家はもともと倉敷の庄屋で、米穀と綿の取引で財をなし、所有田畑八百町歩（800ヘクタール）の大地主となった。おそらく二十五万石の大名並みの財力があったではないかと思われる。

二十五万石の大名といえば、天下の副将軍徳川光圀公（水戸黄門様）と同じくらいの財力ということになる（水戸藩は、後に三十五万石に加増）。どうして八百町歩の地主と、二十五万石の大名と同じ財力なのだろうか。孫三郎が生まれた頃の大原家には、八百町歩の田畑を耕作する小作人が二千五百人いたといわれている。

江戸時代の大名は、一旦緩急ある時に備えて、一万石当たり百人位の家臣を召抱えていた。だから、二十五万石だと二千五百人の家臣がいたことになる。そして家臣には、その家族や家臣の家臣がいた。大名はこれら大勢の家臣団を養っていかなければならなかったので、巨額の経費が

必要であった。

当時の武士は、学問を学び、武術を磨いているだけで、稼ぐということはしない完全な消費者である。だからいくら大名が威張っていても、家臣に扶持米を与えなければならないから、いつもお城のご金蔵は空っぽで、江戸時代の中期からは、ほとんどの大名が商人から多額の借金をして、やり繰りしていた。

それに対して大原家の小作人二千五百人は、一所懸命働いて年貢米を納める生産者である。大名の家来のように、ただ給料を貰っているばかりではない。さらに大原家では、約二万俵の年貢米を自由に換金できたし、家業は呉服問屋だからその儲けもある。したがって大原家の経済力は、家臣という名の消費者を召抱えて、年がら年中ピーピーしている大名とは格段の差があった。また、大原家にも大勢の使用人がいたが、その使用人は、すべて稼ぐ人であるから、大原家の可処分所得は、大名と比べれば無尽蔵といってもよかった。

ところが、どんなに金があってもどうにもならないことがある。大原家には、代々男子が誕生しなかった。孫三郎の父孝四郎も、祖父の壮平もそれぞれ、藤田家と原家から婿養子に入った人だった。この婿養子の二人はともに立派な人で、祖父の壮平は、政治がらみの争いで、反対派から闇討ちに遭い、右耳を切り落とされたことがあったが、

「わしにはまだ左耳がある」

と豪語したほどの人物であった。

父の孝四郎は、岡山藩の儒家の出で学者肌、大金持ちには珍しくリサイクル（廃物利用）などを積極的に推進する革新派であった。

大原孫三郎は、戸籍上は孝四郎の次男であったが兄が二人いた。二人とも夭折したので、大事な跡取り息子として育てられた。そのうえ子供の頃は体が弱かったので、乳母日傘で育てられ、小遣いは無尽蔵、自分のしたいことは何でもできた。我が侭という名の路線に乗って、自由奔放な生活をまっしぐらという日常生活であった。

小学校尋常科を修了すると、孫三郎は高等科（今の中学校）へ進級したが、恐いもの知らずの学校生活に、両親も教師も手に負えなくなり、

「このままでは駄目だ、もっと厳しい躾をする学校に入れなければ……」

ということで、元岡山藩の学校であった閑谷学校に転校させられた。しかしここも永く続かず、遂に数え年で十八歳の明治三十年（1897）に上京し、東京専門学校（今の早稲田大学）に入学した。

ところが、孫三郎は大金持ちの一人息子ということで、悪友が取り巻き、うぶな孫三郎を誘って吉原へ繰り込んでの放蕩三昧、親からの仕送りだけでは足りず、高利貸から借金して遊興に金を注ぎ込んでしまった。その結果、借りも借りたり、貸しも貸したり、遂に一万五千円（今の金で一億円くらい）の借金ができてしまった。当時の新任地方公務員の一二〇年分くらいの給料に匹敵する巨額な借金だ。さすがに寛容な父孝四郎も激怒し、

「もう駄目だ、今度はわしが監督する」

という訳で、倉敷へ連れ戻されてしまった。

一方、孫三郎の作った巨額な借金の整理のために、姉卯野の夫原邦三郎が上京して、高利貸と折衝した。その時邦三郎は三十二歳、有能な青年実業家として将来を嘱望されていたが、老獪な

高利貸しとの連日連夜の折衝で心労が重なり、不幸にも脳溢血で急死してしまった。さしもの強欲な高利貸も、邦三郎の急死に同情し、金利など一部の債権を放棄したので、孫三郎の借金騒動も決着することができたのだった。

日頃尊敬している十二歳年上の義兄邦三郎の急死は、ドライな青年孫三郎に大きなショックを与えた。

「姉さん、済まなかった、本当に申し訳ない。義兄さんの死は、俺のせいだ。すまない、すまない、この通りだ……」

泣き崩れる卯野の前に両手を突き、額を畳に付けたまま孫三郎は、大きな身体を震わせ、大粒の涙を流して卯野に詫びるのだった。

姉の卯野は、二人目の夫・邦三郎に死なれ、重なる不運に放心状態であったが、悲しんでばかりはいられない。流れる涙をこらえて、

「孫三郎、主人の死を無駄にしないで……あなたはもう子供ではありません。性根を入れ替えて、大原家を盛り立てて下さい」

とけなげに孫三郎を諭した。ドライな青年孫三郎も、義兄の死という大きな犠牲があっては、改心せざるを得なかった。もともと英邁な孫三郎は、

「姉の悲しみを無駄にしてはいけない。俺の生活を改めることが義兄への供養なのだ」

そう固く心に誓い、これを境にして生活は一変した。この時孫三郎は十九歳であった。

孫三郎は、放蕩生活を続けたあげくに大借金を作ったが、極道になった訳ではなかった。自分の非を悟ってからが孫三郎の真骨頂というか、孫三郎の非凡なところである。孫三郎は天性の経

営者であり、習わずして帝王学を身に付けていた。

（三）

孫三郎が最初にやった仕事は、義兄原邦三郎が経営していた神戸のマッチ工場の整理であった。今まで会社の経営など無縁であった孫三郎には、経理事務の仕事が判る筈もなかった。

そこで孫三郎は、毎日マッチ工場に行き、古手の支配人たちの仕事ぶりを辛抱強く観察した。会社組織の外から、冷静な目で見ていると、不都合なところが次第に判ってきた。

すぐに支配人たちを呼んで、赤字の原因を一つひとつ証拠を挙げて問い質し、その責任が幹部社員の職務怠慢にあることを彼らに認めさせた。その結果、新たな出費をすることもなく、無事にマッチ工場の整理を終了させることができた。

当然のことであるが、マッチ工場の整理で、孫三郎の評価は一変した。

孫三郎の次の仕事は、八百町歩の所有田畑の実態調査と、二千五百人に及ぶ小作人の耕作状況を知ることだった。この辺りが孫三郎の習わずして会得した帝王学である。恐いものなしに育ったお陰で、知らず知らずのうちに身に付いた経営哲学である。自分が為すべきことをきちっと承知していた。

孫三郎の小作地の視察は、大地主の坊ちゃんの、大名旅行みたいなものであるから、大原家の番頭や手代は、あらかじめ小作地の世話役である差配に手配して、下にも置かない歓待をするべ

く孫三郎の到着を待っていた。

孫三郎は、差配たちの過剰とも思われる接待を断り、無作為に選んだ農家を順番に視察した。小作地を廻村した孫三郎は、あまりにも貧しい小作人たちの生活に、一瞬絶句するほど驚いた。

小作人たちの家は、どの家も同じくらいの大きさで、四間（8ｍ）四方、二〇坪（70㎡）前後の藁葺き平家建、荒壁は崩れて外の冷たい風が容赦なく家の中に吹き込んでいた。床には畳はなく、すり減った粗莚（あらむしろ）が敷いてあるだけである。土間に立って、たった一つのランプの明かりを通して奥を見ると、破れ障子の向こうの納戸には、五、六人の子供たちが粗末な煎餅蒲団の中で抱き合って、お互いに暖を取りあうようにして寝ていた。

米の飯は、正月とお盆以外は食べたことがなく、不作の年は、芋粥か雑炊のようなものをすすって飢えを凌ぐ有様だった。まさに想像に絶する貧しさである。

孫三郎は、番頭たちから不作の年は小作人たちの年貢米を減免しているから、

「大原家ほど寛容な地主はない」

「大原家の小作人ほど恵まれた小作人はない」

という評判であると聞かされていたし、寛容な地主なるがゆえに、大原家の米蔵は、年貢米でいっぱいになったことは一度もないという説明であった。

しかし、小作人から直に話を聞いてみると、相当過酷な年貢を取り立てられているように察せられる。孫三郎が目にした小作人は、貧しさに苦しんでいる。

「これはおかしい……」

孫三郎は、なにか嫌な予感がした。その後の廻村は、心利いたる若者を一人連れただけで、番頭や手代には内密で行った。

不意の廻村に驚く小作人たちと、一対一で膝を交えて話し合った。孫三郎は農民に尋ねた。

「毎日耕作に精を出して下さってありがとう。お礼を申します。ところで、今年の稲の出来具合はどんなでしたか……」

「若旦那様、こんなむさくるしいところに、よくぞお越し下さいました。こうして若旦那さまと直にお話できるなんてことは、生まれて初めてです。ありがたいことでございます。ところで、今年の夏は日照りが続いて水不足でした。そのために平年並みの収穫は望めませんでしたが、地主様のきついお達しとかで、例年並みの年貢を納めさせていただきました。へい……」

小作人は、おどおどしながら、恨めしげに孫三郎にそう答えた。

「えっ！　去年と同じように年貢を納めたというんですか。すると自分たちの食い扶持は幾らも残らなかったということでしたか……うーん」

孫三郎は、一瞬言葉を失った。数日前に番頭たちから、

「今年は不作だから年貢米は少ない」

と聞かされていた。小作人たちは、

「例年並みに納めた」

という。番頭たちの話と、小作人の言うことと食い違いがある。これはおかしい。孫三郎は、さらに隣村の小作人のところを廻った。小作人の話はだいたい同じであった。

番頭や差配たちの報告は事実と違っているのだ。岡山県下の小作地を回った結果、年貢米の取り立ては厳しく、小作人の不満が鬱積していることが解った。

番頭たちが、年貢米を横流ししている疑いが濃厚である。しかし孫三郎は、このことをすぐに公表するような愚はしなかった。番頭たちの反応を注意深く見守っていた。番頭たちは孫三郎の廻村で自分たちの不正がばれて、いつ主人から叱責されるのかと、日々生きた心地がしなかった。そうなれば、年貢米のピンハネや横流しなど続ける者はいない。自然のうちに今までのような厳しい取り立てや不正行為はなくなり、大原家は、名実ともに寛容な地主となったのである。

「孫三郎って偉いな、どうしてそのような知恵がついたのか……」

倉敷の人たちは、孫三郎の、並外れた度量に驚いた。

いやいや、孫三郎はもっと素晴らしい、画期的な小作施策を行った。

当時の地主は、毎年の年貢高を、稲作の豊凶を見て決めていた。このような決め方を毛見法（検見法）といい、当時はこれが一般的であった。稲の出来が良ければ多く年貢を納めさせ、不作の時は年貢を少なくするやり方である。一見公平な決め方と思うが、実はそうではなかった。

江戸時代には、領主や地主に代って年貢を取り立てる代官や差配が、豊凶に関らず厳しく年貢を取り立てていた。特に身分の差別が厳しい藩政時代には、苦境の藩財政を賄うために、年貢の減免をしなかった。この武士優先の官尊民卑の思想が、明治時代になってもなかなか改まらず、なかには、ずる賢い番頭や差配が、年貢米を横流しするので、しわ寄せは全部小作人のところにきていた。小作人の貧しい生活を知った孫三郎は、

（これではいけない、米を作るのは小作人で、番頭や差配が米を作るのではない。小作人にやる気を起こさせなければ、増産は期待できない。そして小作人も生活が楽になれない。今までのやり方を改め、小作人にも利得のあるやり方でなければ、米作りする人がいなくなる。延いては国

家の損失だ）

早速孫三郎は、二宮尊徳の分度の決め方にならって、過去十年から二十年間くらいの収穫高を調べ、その平均収穫高を基準として年貢高を決める定免法を採用した。さらに、地主と小作人との取り分を、双方半々から、地主四分、小作人六分と、小作人に有利になるように決めた。

年貢高が固定すれば、不作の時は苦しいが、豊作の時は小作人の手に残る米が多くなるし、不作の時に備えて蓄えることもできる。収穫が増えれば、それに応じて小作人の収入も増えて、生活も安定する。そうなれば働く張り合いが出てくる。現在の業績主義、成果主義と同じである。

「大原様の若旦那様は、仏さまのように慈悲深いお方だ……」

小作人たちは感激した。大原家の財政は、年貢米が安定して納められるようになって以前にも増して豊かになった。これにより、孫三郎の評価はさらに高まった。

「大原家の若旦那は、放蕩息子だと思っていたが、その見方は大変な誤りだ。思いやりのある立派な人物だ。凄い人物が倉敷に生まれたものだ」

孫三郎の評判は、倉敷の町だけではなく、岡山県内にいっきに広まった。評判だけではなく、年貢の定免法も中国地方に広まって、小作人は喜んだ。しかし、岡山県下の地主たちから猛反発が起こった。

「大原さんのところは、手広く商いをしているから、年貢米など当てにしなくてもよいが、我々のところは年貢米が唯一の収入だ。小作人が喜んだ分だけ地主の実入りが減る。ぜひ定免法とやらを撤回してほしい」

と岡山県下の地主の代表が、孫三郎のところに談判に来た。孫三郎は、

「私は特別なことをしたわけではない。二宮尊徳の『報徳記』に書いてあることを、普通に実行したまでのこと」

と言ってこれを一蹴した。

（四）

大原孫三郎は、東京専門学校在学中に、遊んでばかりいた訳ではなかった。幸い同じ下宿に二宮尊徳の教えをしっかり学んでいる静岡県周智郡森町出身の学生・森三郎がいた。

森三郎は、農村の貧困問題に取組み、地道な活動をしていたが、ある時、栃木県の足尾銅山に孫三郎を連れっていった。古河財閥の経営するこの銅山の煙突から流出する亜硫酸ガスが大気を汚染して、周辺山野の草木が枯れてはげ山となり、農作物は育たず、死の山野となった。また、鉱毒に汚染された渡良瀬川は、魚の住めない死の川となり、大きな社会問題になっていた。

足尾銅山の鉱毒を目の当たりにした孫三郎は、

「これはひどい、あまりにもむごい。たとえ銅の生産は国策といえども、地域住民に死の恐怖を与え、その幸せを奪うとは……このようなことがあってよいものか……」

正義感の強い孫三郎は、経済的弱者の幸福を犠牲にして、自己の利益を追求する資本家のやり方に大いに憤慨した。

孫三郎が足尾を訪れたのは、足尾銅山の鉱毒廃絶運動に生涯を捧げた栃木県選出の衆議院議員田中正造が、鉱毒排除を明治天皇に直訴した時より三年前の明治三一年夏のことであった。

さらに森三郎は、倉敷に連れ戻された孫三郎の許へ、二宮尊徳の伝記『報徳記』を送り、

「道徳なき経済は、いたずらに社会秩序を乱すばかりである。また、道徳だけを説いても、経済が伴わなければ人々は付いてこない。道徳と経済は一体になることにより、人は幸せになれる」

と教えた。孫三郎は、森三郎より贈られた報徳記を、背文字が擦れて読めなくなり、綴じ糸が切れて落丁するほど、繰り返し、繰り返し読み続けた。そして、

「心田の開発と熱烈なヒューマニズム、儲けの何割かを社会に還す」

という二宮尊徳の生き様に感動した。

「よし、自分も一人でも多くの人が幸せになれるように尽くそう。それが自分に課された使命である」

と固く心に誓ったのであった。

孫三郎が倉敷に腰を据え、報徳記や福沢諭吉著の『学問のすすめ』を人に説くようになると、父孝四郎は、敬虔なクリスチャンである薬種問屋の林源十郎を、孫三郎のコーチ役に付けた。

二宮尊徳の教えに次いで孫三郎に大きな影響を与えたのが、「社会福祉の父」といわれたクリスチャン石井十次の凄まじい生き様であった。石井十次を孫三郎に引き合わせたのが、コーチ役林源十郎である。石井は日向高鍋藩（宮崎県）の藩士の出で、

「病人を救うことは他の人でもできるが、孤児を救い教育できるのは自分しかいない」

と決意して、卒倒するほど驚く妻品子を説得して岡山医学校を四年で退学し、岡山孤児院を創った人物である。石井の決断は、二宮尊徳の高弟福住正兄が、

「本当に世のために尽そうとするならば、人の病気を治す医者でなく、国の病気（貧困）を治す医者になろう」

と決心して、尊徳の元で修業した故事に通ずるところがある。

石井十次は、孫三郎より十九歳年上であったが、二人は意気投合し、二人三脚で金と根気のいる孤児救済事業を、共に命の尽きるまで続けるのである。

石井は、孫三郎と出会う頃には、すでに孤児を三〇〇人引き取っていた。この孤児の中には、七千二百余人の死者が出た明治二四年（１８９１）の濃尾地震の被災孤児も多数含まれていた。

明治三一年（１８９８）の冬、一九歳の孫三郎が林源十郎に案内されて訪問した石井の孤児院は、人の住居とは思われないほど粗末な掘建て小屋であった。壁は崩れ、障子は破れて寒い北風が音を立てて家の中を吹き抜けている。

台所には、ろくな炊事道具もない。食べるものといえば芋粥や雑穀の雑炊だけである。それでも三〇〇人の孤児たちは、笑顔で元気に走り回っている。

石井十次は当てつぎだらけのパンツ姿で、上半身はシャツも着ていない。裸の上に毛布を捲き（あら）つけて、辛うじて暖をとっているのみ。妻の品子は痩せ衰えた赤子の孤児を両手に抱いて、粗莚（むしろ）の上に敷いた煎餅蒲団にくるまり、自分の体温で赤子を暖めている有り様であった。

孫三郎は、思わず孤児たちに声を掛けた。

「君たち、晩ご飯は食べたのか……」

「うん、食べたよ。お昼ご飯抜きだったから、お腹が空いていておいしかったよ……」

孤児たちは、ニコニコ笑って答えた。孫三郎は重ねて質問した。

「昼めし抜きでも、我慢できるのか……」

「お昼ご飯ぐらい食べなくたって平気だよ……だって、お父さんは、朝ご飯も、お昼ご飯も抜きだよ。お母さんなんか昨日一日中、なにも食べなかったよ。だから、僕たちお昼ご飯を抜いたって平気だよ……」

孤児たちは、屈託なく答えた。孤児たちは、石井夫妻を、

（お父さん、お母さん）

と親愛の情をこめてそう呼んでいた。孫三郎は、石井夫妻が極貧の中にも懸命に孤児を育てる姿をつぶさに見て、その人間愛に打たれ、激しい感動に包まれた。そして孫三郎に隠されていた博愛と慈善（社会奉仕）の心が頭をもたげたのである。

「今までおれのやってきたことはなんだ。あの無様な放蕩は恥ずかしい。エイクソ、孫三郎の馬鹿野郎！　孫三郎なんか死んでしまえ！」

石井夫妻の崇高な姿に接し、激しく心打たれた弱冠十九歳の孫三郎は、わが身の不甲斐なさを恥じるのだった。そして、

「俺は、倉敷を東洋の聖地エルサレムにするんだ」

と固く心に誓い、全面的に孤児院の経営を支援することになった。その時、石井十次は、

「今後、国内外の孤児三万人を育てたい」

と、まなじりを決して、孤児救済を孫三郎に訴えた。

さらに石井は、明治三九年（１９０６）の東北地方の大飢饉によって、住む家や親を失った孤児たち千二百人を引き取ったが、岡山孤児院だけでは収容しきれず、郷里の宮崎県茶臼原（現西

都市）に三万坪の土地を購入して、本当に三万人収容の孤児院を建設したのであった。
孤児院の運営は、すべて有志からの支援金で賄ったが、善意の寄付金だけでは足りず、毎月大赤字。孫三郎は、石井からの要請に、いやな顔一つ見せず、
「金は使うためにある。私は人のためになることには金を惜しまない」
「私の資産は、私個人が使うために授かったのではない。世界のために使うのが神の御心に沿うものである」
と言って、惜しげもなく孤児院の赤字を補てんした。石井はその時の状況を、
「頼む方も頼む方だが、出す方も出す方だ……」
と、林源十郎に手紙で報告したほど、全面的に支援したのであった。
石井は大正三年（１９１４）、四九歳で死去し、多額の借金が残ったが、孫三郎は、
「石井先生の名誉を傷つけてはならない」
と言って、元利合計を全額一人で返済した。孫三郎三五歳の時であった。
大正五年十一月、孫三郎は石井十次を記念して、大阪の貧民街の子弟を救済するための財団法人石井記念愛染園を創設した。
孫三郎がこの愛染園に出した私財の総額は、一八五万円といわれている。この金額は、現在の価値に換算して二百億円位か、従業員一〇〇人の中小企業の人件費五〇年分に相当するほどの金額で、これを文句一つ言わずに出したのである。
さらに、大正八年二月（１９１９）、
「貧困は金を注ぎ込むだけではなくならない。貧困の原因を科学的に究明しなければ駄目だ」

孫三郎はそう判断し、石井記念愛染園を発展させて、科学的な貧困救済方法を研究する機関として、大原社会問題研究所（現法政大学大原社会問題研究所）を創設した。この時に孫三郎が出した私財は、約三五万円（当時大卒初任給五〇円の、実に六〇〇年間分に相当する金額）である。
この他にも大原孫三郎は、働きながら学ぶ人のために倉敷職業補修学校（現岡山県立倉敷商業高等学校）、医者にかかれない人のための倉紡中央病院（現倉敷中央病院）、宅地四千坪と田畑二百町歩を寄付して、農村と農民の生活改善を目的とした大原奨農会農業研究所（現在の岡山大学資源生物科学研究所、岡山名産のブドウのマスカットや白桃などはこの研究所から作られた）、労働環境改善の研究機関として倉敷労働科学研究所（現在の労働科学研究所）、などを設立、さらに巻頭に述べた大原美術館も設立している。
「私は勉強しなかったが、勉強する人には援助を惜しまない」
といって設立した大原奨学会からは、大原美術館の設立に尽くした児島虎次郎画伯を始め、多くの逸材を輩出している。
一方、孫三郎は、相続した財産を、唯、気前よく使っただけの人ではない。現在の中国銀行、中国電力、クラレなど、多くの優良企業を設立して、関西経済界に名を成したのである。
大原孫三郎が設立した社会事業や私企業は、いずれも現在立派に運営されている。
これら社会福祉事業に拠出した大原孫三郎の私財の総額は、現在のお金にして五千億円といっても過言ではあるまい。もう日本には、このように偉大な報徳人は、二度と現れないだろう。

森田萬右衛門物語

幸山　周平

萬右衛門を偲んで

冨貴の教福寺にたくさんの人々が集まっていた。森田萬右衛門の五十回忌（昭和五十九年）が本堂で開かれたからである。一人の老人が進み出ると

「みなさん、私は知多市の久野庄太郎でございます。」

と、名乗りでた。会場にどよめきの波が広がった。そして、人々は、口々に愛知用水を作った久野さんがなんで萬右衛門さんの五十回忌にこられたのかと囁きあった。久野さんは、穏やかな口ぶりで

「萬右衛門さんにはずいぶんお世話になったのです。」

と語り始めた。

森田萬右衛門と久野庄太郎の出会いは、六十年以上も昔（大正六年）のことになる。当時、萬右衛門は六十六歳で郡農会の会長、庄太郎は十七歳の青年だった。庄太郎は、青年会の精神修養

の会で萬右衛門の講演を聴いた。講演は、明治用水のようなものを知多にも造ろうという「夢の用水」の話だった。水不足に苦しみ、毎年の米作りに困っていた庄太郎は、すぐさま質問した。

「知多半島でも用水は造れるのですか。どこから水がきますか。それはいつ頃できますか。教えてください。」

矢継ぎ早の質問にうなずいていた萬右衛門は、

「用水の水は、木曽川からもってくればよい。しかし、そんなものはいつくるかわからん。ただ待っていたのでは、水はこない。みんなが協力して、努力すれば用水ができる。」

と、信念を語り始めた。庄太郎は、まだ信じられず質問を続けた。

「知多半島の土地には高いところや低い所があります。そこをどうやって水を通すのですか。」

すると、萬右衛門は、「ほうっ。」といった顔をして、

「今は、科学が進歩している。サイホンの原理というものがある。これを使えばできる。」

彼は、庄太郎の真剣な顔を見つめながら答えたのだった。萬右衛門は、また庄太郎に自分の信念を語りかけるように、

「夢の用水には、金も日数もかかる。知多半島に水をもってくるには、知多の人々が必死になって、死ぬような気持ちになって、努力しなければできない。自分のことだけを考えていてはできない。」と話をしめくくった。

萬右衛門は、海岸に堤防を造成し、その中を干拓して森万新田を造ったり、冨貴各地の道路の改修を行ったりしていた。それらの工事は、自分の財産を投げうって完成に力を尽くしていた。

そんな萬右衛門の話だけに、庄太郎は強い感銘を受けた。どんな難儀をしてでも水を引いてきて用水を造りたい。どんな年でも米が取れる農業をしてみたいと青年の庄太郎は決心するのだった。十七歳の庄太郎の心に、大きな灯をともした出会いの瞬間だった。

五十回忌に参加した人たちからの「萬右衛門さんって、いやあすごい人だったんだねえ。」「愛知用水のアイディアをもっていたとはねえ。」と言った声が、そこかしこでもれ聞こえてきた。

久野庄太郎さんと話し込んでいた古老が突然、「今日は、久野さんもおいでだし、萬右衛門さんの昔の偉業をみなさんに聞いてもらいたい。」と言って語り始めた。

寺子屋時代

萬右衛門は、一八五二年（嘉永五年）四月十一日、冨貴の森田浦蔵の子として生まれた。幼名を亀太郎といい、円観寺で開かれていた寺子屋で、辞書を食べるくらい勉強をしたという井田与次右衛門先生から、和漢の書・二宮金次郎の教えなどを学んだ。亀太郎は、向学心に燃え、寺子屋にあった和漢の書はすべて読破してしまった。そして、地域社会のために自分を犠牲にしてでも奉仕しよう、という使命感のある若者へと成長していったのだった。萬右衛門は、ふだんは穏やかで思慮深く、力も強く仲間思いだった。しかし、悪事には毅然と立ち向かう正義感も併せ持ち、村の青年たちのよきリーダーでもあった。

二宮金次郎から学ぶ

亀太郎は、今日円観寺で聞いた井田与次右衛門先生の話を思い出していた。先生の話はいつも真剣で心に残る話が多いのだが、二宮金次郎の話はひとしおだった。帰り道、畑のそばを通った萬右衛門は、何を思ったのか急いで家に帰るとかまを取り出し、畑へと向かったのだった。畑の周りの草をざくざくと刈り始めた。日は西に沈み、星が瞬き初めても、今日の亀太郎はやめようとしない。先生から聞いた話はこうだった。

「二宮金次郎さんは、子どもの頃、家が貧しくってな。毎日毎日、朝は、早起きして草を刈り、夜は夜で遅くまでわらじを作ったものじゃ。そうした努力のおかげで家はだんだん豊かになっていったのじゃ。村の人々も、みんな金次郎さんを見習ってな、そして、村全体が幸せになることができたのじゃ。」

亀太郎は、心に決めたのだ。

「そうだ。金次郎さんにできたことが私にできないことはない。自分のことばかり考えていてはいけない。みんなのために力一杯働こう。」

あれた村から模範村へ

明治二十年頃は、知多の醸造業が栄えて、伊勢湾に千石船が盛んに行き交う時代であった。冨

貴の市場だけで二十二軒の船主がいた。千石船で働く船乗りの仕事は厳しいものであったが、その働きに応じて収入もたくさんあった。また、となりの布土では、みがき砂の採掘でたくさんの現金収入を得た人たちもいた。こうした人たちの中には、お酒や博打にうつつをぬかし、もめ事を起こす人も多く、村の人々の心はすさんでいた。この頃、亀太郎も一人前の青年となり、名も萬右衛門と変えていた。何事もやり通す熱心さと考え深い人柄であることが村人にも知れわたり、二十八歳という若さで三芳村（冨貴村になる前の村の名前）の戸長（今の村長）に選ばれた。萬右衛門は村の家々の主を一堂に集め、村で博打をやめるように発表した。みんなは、「待ってました。」と大喜びで賛成した。彼は一同に約束の証として誓約書に印を押すよう求め、破った場合には、賭博をした者から金十円の罰金をとるといったことを申し出た。「異議なし。」の返答が村人から返ってきた。

こうして、あれた村から模範村への改革が始まったのだ。

現在、円観寺に千石船の守り神である琴平さん（金比羅宮）の社があるが、ここには盃に鍵をした絵馬や花札に鍵をした絵馬が飾られている。これは村人が必死で約束を守ろうとした証であると思われる。しかし、中には約束の守れぬ者もいて、警察に捕まったりもした。そのことを聞きつけると萬右衛門は警察に出向き、警察を説得し、その人を連れて帰った。そして、一年間寺に住まわせ、寺の掃除をさせた。一年たってよい人間になっていたら家に帰し、罰金としてあずかっていた十円を本人に返すこともした。

市原の牛車引き

萬右衛門は、家族の悩み相談も気軽に受けた。

市原の牛車引きの一人に酒癖の悪い者がいた。牛車を引いて武豊・河和・小鈴谷方面まで仕事に行って、夕方には必ず居酒屋や料理屋に立ち寄っては、したたか酒を飲み、グータラベーに酔って、稼いだ金を使い果たしてしまう。みかねた親類も時には、家に金を入れるよう意見を言ってみたが、埒があかない。牛車引きは家に帰ってくると家の中で暴れ、妻子に手を挙げ暴力をふるった。近所の人も見るに見かねて、間に入ったりもした。

この話を聞いた萬右衛門は、頼まれもしないのに、その牛車引きの家に出向き、まずその酔っぱらいを大声で一喝した。

「貴様は『おれが銭をもうけて、それをおれがどのように使おうと文句があるか。』といって、女房・子どもに威張っているそうだが、何が一人で銭がもうかるか。一人でもうかるなら見事も女房・子どもに威張っているそうだが、何が一人で銭がもうかるか。一人でもうかるなら見事うけてみよ。今から牛車を引いて相手なしにお金がもらえるか、さあやってみよ。表で土を一杯牛車に入れて村中を引き回して誰か銭をくれるか、やってみよ。」と、牛車引きにつめよった。牛車引きは戸長にしかられるという、あまりの出来事にうなだれてしまった。その後、その牛車引きを萬右衛門は言葉おだやかになぐさめ、女房を呼んで「こうして私に叱られた上、あなたが『それ見くされ』などといってはいけませんぞ。今度からはいっそう下手に出て、夫を救ってやってくだされ。」と、言い残して帰った。その後、この酔っぱらいは、いい夫、いい父親になったという。

萬右衛門は、このように夫婦問題・親子不和・親族間の確執まで調停にのり出したという。そして、必ず双方が納得する名案を出してくれた。また、うまくいきそうにない夫婦の縁組みについては、双方を諭して中止させるなどの努力もして、地域の立て直しに骨を折った。

また、三十一歳になった萬右衛門は、学校教育にも目を向け、小学校の校舎を建て直すことにも随分力を注いだり、有望な若い人を、先生を養成する師範学校へ進学させたりした。それらの人の中には冨貴へ戻ってきて小学校の先生をした人もいた。尋常小学冨貴学校（現在の冨貴小学校）では八学級に九名の先生、四四二名の子どもたちが学んでいた。

時代にあった政策を

萬右衛門は、冨貴村全体の「お父さん」のような存在でもあった。その一方では、時代の流れに敏感な事業家でもあった。

萬右衛門は、若い頃から日本が豊かになることを考えていた。そのためには、まず自分の住む冨貴がよくならねばならないと考え、経済の発展と人づくりに尽くした。その考えたこと、活動の場は、冨貴村から武豊そして、知多半島へと広がっていった。

十八歳の時、冨貴村のため池の経費を少なくするために多勢の人を説得し、改修経費の削減を成功させた。

二十三歳の時には、新しい冨貴のため池を造るために奔走し、りっぱなため池を造ることに成功した。

二十八歳で三芳村（冨貴村になる前の村）の戸長（村長のようなもの）になった時、絹織物の生産が日本各地で行われるようになったことをいち早く知り、蚕のえさとなる桑園をつくり、冨貴に初めて養蚕業を興した。萬右衛門の心の中には、時代にあった政策をしていかねば冨貴の発展は望めないという信念があった。

三十七歳になると、冨貴村村会議員として、現在の知多カントリー方面の山野の開墾に取り組んだ。二千余町歩（約二千ヘクタール）のミカン畑、梅畑、桑畑を開墾していった。このことは、人々に働く場所を与えることになり、また暮らしも豊かになって、喜ばれた。萬右衛門には常々、知多半島は田として使える土地が狭いという思いがあった。そこで、海の浅いところをしめきって田に変えることを考え、早くから村会議員をしている人を訪ね、海の干拓をしたいと説得した。はじめは、海を田に変えるなど無謀だと相手にしてなかった人も、あまりの熱心さと優れた調査に基づいた計画に心を打たれ、賛成をしてくれた。やがて、この干拓計画は実行されることになり、萬右衛門は、村の予算の足りない分を自分で出したりもした。今では、そこはたくさんの住宅が立ち並ぶ住宅地となり、萬右衛門の名前は、森万新田という地名となって残っている。

その後、五十三歳のとき、新しい農業のやり方を教える係（農事奨励員）になった。当時は、

苗代一面に籾をまく「べたまき」というやり方だったが、風通しが悪かったり、害虫がとりにくかったりして苗の育ちが悪かった。そこで、苗代をみぞで長四角にしきる「短冊形苗代」という方法が考えられ、萬右衛門はこの進んだ方法を取り入れるように、熱心に人々に勧めて回った。しかし、いくら話しても、今までの古いやり方を変えようとしない人が多かった。ある日、萬右衛門は、なかなか言うことを聞かない村人の田の形を長四角に変えてしまった。田の持ち主たちは怒ったが、萬右衛門はびくともせずに「短冊形苗代」の良さを説いた。一年二年すると、このやり方の良さがわかり、よく実った苗代を見ながら、「萬右衛門さんのおかげだ。」という声が聞こえるようになった。こうして、冨貴村は、だんだん、明るく、暮らしよい村に変わっていった。

これらの業績が認められ、萬右衛門は冨貴村の村長をしたり、知多郡の養蚕・養鶏・畜産・郡農会の会長や顧問などの要職に着いたりした。冨貴村の人々からは「お父さん」、年をとってからは、「おじいさん」と呼ばれて親しまれていた。萬右衛門は、冨貴村の予算が足りない時があると、自分のお金を出して事業が完成するようにしていたので、晩年は、お金が無くなってしまった。そのため、冨貴村の人々が、萬右衛門が七十歳の時、お祝いとお礼の気持ちを込めて、萬右衛門が寝泊まりできる森田翁頌徳記念図書館を建てた。

七十六歳になると、冨貴村や知多郡のためによく尽くしたということで国や県から農事功労賞を贈られ、昭和天皇に拝謁もした。

社会は有縁なり

野荒らしや博打、酒の流行などで荒れた村と呼ばれた冨貴村を平和な村に変えた萬右衛門は、人材育成に心血を注ぎ、青年団（青年男子の会）や処女会（青年女子の会）を創設して教養指導にあたった。当時、百十名の青年団員（青年男子の会員）、八十名の処女会員（青年女子の会員）がいた。

その後、七十七歳の時、萬右衛門は、冨貴村の人々全員を対象とした全村学校を唱えた。自分の能力をわきまえた生活を全村民が行うことを目指した分度教育（二宮金次郎の教えから学ぶ）を柱として、「共存共栄の思想を持ち、実学を学び、贅沢をせず、健康的な生活をして、人まねでない自分らしい生き方をするように。」と人々に説いたのだった。ある時、村人の一人が萬右衛門に「なぜ、このように冨貴のためにがんばるのですか。」と問うと、萬右衛門の口からは、「社会は有縁なり。」という言葉が返ってきた。問いかけた人が考えあぐねていると、「たとえ悪人でも、人間はみな兄弟なのだ。だから、わたしは、何とか助けたいと思って生きてきたのだ。」との返事が返ってきた。全財産をなげうって尽くしてきた萬右衛門の話だけに胸を、打たれるものがある。

村葬された萬右衛門

明治から昭和まで五十年以上にわたって、冨貴をおだやかで暮らしよい豊かな村にしようと活躍した萬右衛門は、昭和九年、八十三歳の生涯を閉じた。その偉業をたたえ、冨貴小学校の校庭で村をあげての葬儀が行われた。村人に「おじいさん」と慕われた萬右衛門の葬式にはたくさんの村人が参列したとのことでした。

五十回忌

蝉時雨が再び鳴き始めた。一同を見回した古老は、「これでわたしの知っている森田萬右衛門の話は終わりです。」と言った。一同は、しばらく静まりかえり、自分の一生に思いを巡らしていた。その時、萬右衛門がしたことを思い起こすと、自分にも何かやらねばならぬことが残っていることに気づくのであった。さわやかな風が庭をすぎていった。教福寺を出て行く人々の横顔が、西日に照らされ輝いていたのだった。

森田萬右衛門年表

暦	森田萬右衛門	冨貴村年表
嘉永5年	誕生（ねずみ年）	尾張藩
明治2年	18歳 冨貴本郷若連中代表（冨貴ため池経費割賦法説得）	
7年	23歳 冨貴ため池新設	冨貴村・市原村・東太高村
12年	28歳 三芳村戸長、桑園建設、青年を師範学校に送る	
15年	31歳 小学校舎増改築（学務委員）	三芳村
21年	37歳 冨貴村村会議員、山野開墾、森万新田堤完成（干拓）	冨貴村
26年	42歳 風俗の矯正と賭博禁止	東大高村
31年	47歳 知多郡立農学校設立	
33年	49歳 久野庄太郎誕生	
37年	53歳 知多郡農事奨励員	
39年	55歳 冨貴村養蚕組合長	
40年	56歳 知多郡農会より農業改良表彰、冨貴村長	
43年	59歳 冨貴村農会長	
44年	60歳 知多郡農会評議員、冨貴村産米改良	
大正1年	61歳 知多郡蚕種同業組合長、冨貴村青年の教養指導	
2年	62歳 知多郡養蚕組合連合会長、知多郡農会副会長	
4年	64歳 愛知県より地方改良の表彰、知多郡農事実行組合長	
6年	66歳 久野庄太郎17歳夢の用水の話を聞く	
8年	68歳 知多郡畜牛・畜産組合評議員	
10年	70歳 森田翁頌徳記念図書館（小学校敷地）知多郡農会特別表彰	
11年	71歳 知多郡養鶏組合長	
12年	72歳 知多郡畜牛・畜産組合副組合長	
13年	73歳 知多郡農会顧問	
昭和1年	75歳 愛知県農会より名誉表彰	
2年	76歳 知多郡養蚕組合顧問天皇陛下に拝閲	
3年	77歳 冨貴村全村学校分度教育を提唱	
7年	81歳 新宿御苑観菊会で天皇陛下に拝閲	
9年	88歳 死去（4月5日冨貴小学校校庭で村葬）	

桐の花影

――吉良側の忠臣蔵――

忠内　正之

はじめに

大衆演劇の中で一番人気の高いのが「忠臣蔵」である。今年も年末になるとまたぞろ色々な扱われかたでもてはやされる。識者の言によれば忠臣蔵を生活の糧にしている人々がかなり居るらしい。

読者や視聴者に面白おかしく受けてもらうため、作意をもって史実がかなり歪められて語られており、一方的でもある。

そこで生粋の吉良出身者である筆者としては非力乍ら一文を掲げて吉良側の実際に迫って見たい。

世に日本の三大仇討ちという。即ち鎌倉時代の曽我兄弟の仇討ち。江戸初期の荒木又右衛門が主役となった伊賀越の仇討ち、そして元禄忠臣蔵である。ここで忠臣蔵の概要をおさらいして見

よう。

元禄忠臣蔵

一七〇一年（元禄十四年）赤穂藩主浅野内匠頭長矩は勅使の饗応役を命ぜられた。その指導を吉良上野介義央に依頼した。伝聞によれば上野介の意地悪さに我慢出来ず、ついに四日目江戸城内（松の廊下）で義央に切りかかった。

幸い致命傷にはならなかったが、規則に従って内匠頭は即日切腹、義央は無罪、そして赤穂藩は取り潰しとなった。「あまりに不公平」と人々の人気は赤穂に同情的であった。

赤穂側は大石内蔵助を中心に赤穂浪士四十七人が苦労の末、一七〇二年（元禄十五年）十二月十四日本所松坂町吉良邸を夜襲、吉良の首を取るという大事件を引き起した。

これが元禄事件のあらましである。平和で文化的であった元禄時代では大事件であった。のちに虚実とりまぜた忠臣蔵という芝居になって大ヒットするに至った。

曽我兄弟の仇討ち、荒木又右衛門の仇討ちでは仇（かたき）がはっきりと明確である。特に荒木の場合は公認の仇討ちであった。尤も仇討ちの勝者となっても荒木の場合、政略の余波を受けて結末は不幸だった様である。

忠臣蔵の場合では味方があっても仇の存在が明白ではない。吉良側に「仇になった」という自覚が全く無かったからである。

刃傷の原因は殆んど明確にされていない。幕府の処断があまりに早急で、内匠頭からの事情聴取が疎（おろそ）かにされたのも一因である。

上野介にして見れば松の廊下で大奥留守居役梶川与惣兵衛と打合せていたところ後から「この間の遺恨覚えたりしか？」と呼びかけられ振り向いたところを突如切り付けられたのだから心当りが無いだけに唯驚くだけであった。殿中のこととて義央は応戦はしなかった。否泰平の世に生きる文官としては機に応じ対抗する力は無かったのが本音であろう。

ここで問題となるのは内匠頭が乱心の上での刃傷か正気の沙汰かの違いである。幕府の目付は助け舟のつもりで何度も問い糺したが、正気の私恨だと言い張った。傷付けただけだから乱心と認めてもらえば一名は助かり、多少の減封はあっても家名は残ったのではないか？正気だと私恨の刃傷であり、殿中で、しかも勅使下向のさ中であり将軍綱吉も激怒せざるを得なかったのである。

殊に綱吉は生類憐みの令に見られる様なエキセントリックな性格である。親思いの孝養心が厚く、出自の芳しくない母桂昌院を従一位に叙せられるべく朝廷に働きかけている最中でもあった。即日切腹となった点は気の毒ではあるが、幕府としては已むを得ない措置であった。

従って長矩対上野介がここで直ちに味方と仇の構図に考えられないのであって、前の二件とは異なって、スタートは仇討ちのケースでなかったと考えられる。赤穂方も仇討ちの官許を得たわけでもなかった。

幕府の融通性に乏しい官僚政治の欠陥が事件を複雑にした。当然問題を起した両者共に咎められるべきは仕方がないがもう少し弾力的な扱いが出来たのではないかと悔やまれる。

役職遂行の上で当事者となり、心ならずも仇と狙われることとなった吉良家は災難というより他はなかった。

ここで刃傷の経緯について採って見よう。

殿中刃傷

元禄十四年（一七〇一）還暦を迎えた義央は正月十一日に江戸を発った。毎年、年頭には幕府から朝廷へ高家衆が挨拶に参上し、対する答礼として伝奏の勅使が江戸へ下るのが恒例となっていた。

義央の朝廷への年賀使はこれで十五回目となる。年賀使以外の御使いまで入れると二十数回も将軍の名代として宮中に参内した。時として幕府と朝廷間の取次役として幕府の重大使命をおびた使いであったが、今回も桂昌院昇位の根回しをかねた年頭の挨拶とあって義央は張り切っていた。

従来の慣例では従三位止まりの将軍生母の位階を一気に従一位に昇らせるというのだから前例のない昇位である。桂昌院は元禄十五年に従一位に昇進しているので、昇位運動の功労者は朝廷や公家とのつながりの深い義央であった。

当時、朝廷の御料は政策的に僅かに二万二千石でしかなく窮乏していた。加増を行えば成功するものと考えられたが、駆引きにたけた公卿を相手に交渉を進めるのは容易なことではなかった。その根回しのため、義央が江戸に戻る予定は大幅に遅れることとなったのである。

その間に東山天皇の勅使には柳原前大納言と、高野前中納言が、霊元上皇の院使に清閑寺前大納言が決定した。

二月四日には、勅使の御馳走役に赤穂藩五万三千石浅野内匠頭長矩、院使の御馳走役には伊予吉田藩三万石の伊達左京亮宗春が任ぜられた。高家衆の吉良上野介義央、畠山民部大輔基玄、大友近江守義孝、品川豊前守伊氏等が接伴役を仰せつかった。

御馳走役は三万石から十万石までの柳の間詰の大名に命ぜられることになっていたが、この二人の人選に義央は関与していない。

大名にとってこの役は気の重い役目であり経済負担も嵩むので歓迎されなかった。内匠頭は既に十八年前十七才で同じ役目を命じられた実績があるのだから、事前に動いていれば逃れられたかも知れない。赤穂側の江戸詰の家臣にあまり有能な人物が居なかったのは不運であった。

勅使一行が到着するのが三月十一日、何を準備すれば良いのか、高家の指導なしには如何ともし難い。他の高家衆は、筆頭の義央をさしおいてことをすすめるのに遠慮があった。いつ迄も京から帰らない義央に、長矩はじりじりとあせりをつのらせていた。

院使の御馳走役を仰せつかった伊達宗春はまだ十九才で今回が初めてであった。頼りにされる立場の長矩としてはいっこくも早く義央と打合せがしたかった。

十八年前に義央の指導で御役をつとめたとはいえ、その頃のことは殆んど覚えていなかった。当時は名江戸家老大名頼母（内蔵助の叔父）が難なく仕切ったらしい。

そこで元禄九年に御馳走役をつとめた長矩の妻「阿久里（あくり）」の実家である、備後三次（みよし）藩五万石の浅野長澄のところへ格式を問い合せ、極秘の内証帳まで借りて内容を調べた。格式とは経費のこ

とであり、内証帳とは支出の内訳を記した帳簿である。

指南役である義央に、どれだけの謝礼を包み、何を贈ればいいのか内証帳を見れば、おおよその見当はついた。進物が少ないのに立腹した義央が長矩に意地悪をして、勅使饗応の作法を教えなかったから、長矩も堪忍袋の緒が切れて刃傷におよんだというのは俗説にすぎない。

殿中における儀礼の服装をわざと間違えて教えたというのもおかしな話で、以前にも御馳走役を経験した長矩はその点熟知していた筈である。さらに寛永寺と増上寺参詣のときの休憩所の畳替えも、御馳走役の任務ではなかった。

よくよく調べてみれば、みなつくり話の様である。第一長矩を窮地に追いこんで、もし失態などしでかされたら、それこそ指南役である義央の責任が問われることになる。封建時代、管理責任は現代以上に厳しいものがあった。

更に刃傷の原因が賄賂をめぐるトラブルとする説があるが、知識を伝授した見返りに謝礼を受けとることが当時の感覚で賄賂にあたるとは思われない。長矩が謝礼をしなかったとしたら、それこそよほど当時の常識から外れている。

浅野家は元来金銭にこまかくケチだったといわれる。長矩の祖父長直の時代に赤穂城を築いた り、山鹿素行を招いて軍備に力を入れて来たため内実は苦しかったのである。しかし問題は謝礼の倹約よりもむしろ饗応費の倹約にあった。

長矩は役命を受けた時、目付より「あまり華美にならぬ様に」と言い渡された。十八年前の天和三年に御馳走役をつとめた時に四百両の饗応費がかかっている。元禄十年につとめた日向飫肥藩主伊東出雲守（曽我兄弟に討たれた工藤祐経の子孫）の費用を聞き合わせてみると千二百両使っている。そこでじぶんはその中間の七百両くらいに見積もればいいだろうと考えた。

これが大きな誤算であった。江戸は元禄八年の貨幣改鋳によって貨幣価値が下がり物価は高騰しつつあった。

七百両の見積りを提示された高家の月番にあたる畠山基玄はいくらなんでも少なすぎると思ったがあからさまにそれを口にするのははばかられた。

桂昌院昇位の根回しのため義央が遅れて江戸へ着いたのは二月二十九日であった。京都での交渉は成功したものの予定外の時日を要した。

京都から戻った翌日から早速勅使饗応の対応に大童であった。浅野・伊達家の家臣達が何度も義央不在の間に足を運んだという。

六十をすぎた義央が疲れのとれないまま饗応役の指南をつとめるのは難儀なことだった。おたがいに余裕のない中でトラブルが起きる心配があった。加えて饗応費の過少さが隘路となった。

義央は普段妻女に仕事のことは口に出さないのに、愚痴をこぼした。

「畠山民部殿から浅野家が出して来た饗応費の見積もりを見せられたときには、あきれてものも言えなくなった。ここ数年、勅使の饗応がだんだん華美になってきているので抑え目にというのはわからぬではないが、それにしても七百両とは……」

世間知らずでわがままな人名を指導するのは容易ではなく骨が折れる。大名にとっても高家の指図を受けて慣れない典礼をこなすのは気苦労が多かったと察せられる。加うるにこの物価高のご時世に例年より五百両も少ない予算とあっては義央が考える充分なもてなしが出来るとは思え

ない。義央は朝廷と幕府の間の調整を図るため手抜きのない完璧さを指導したのである。文人育ちの洗練された官僚と、武断派の融通の利かない三世大名との間に確執が生ずるのは当然の成り行きであった。

なお継嗣を求めるためとはいえ、女漁りが激しく、また衆道にも血道を上げたという、内匠頭に対し義央はかねて侮蔑の目を向けていたといわれる。

かくして勅使一行は予定通り三月十一日江戸に到着し、辰の口の伝奏屋敷に入った。十二日には勅使・院使が登城してそれぞれ天皇と上皇の詔を将軍に伝え、十三日には城内で能楽の催しがあり城中の饗応はスムーズに終わった。十四日には将軍から返答の儀式があり、お返しものや桂昌院からのお礼があることになっていた。

冒頭の刃傷事件は十四日の午前中に惹起した。大老堀田正俊が若年寄稲葉正休に刺殺されて以来、殿中で刀の鯉口をきることはきつい法度となっていた。

内匠頭の一方的な狼藉と看做され、一方の義央は手向いしなかったことで神妙至極とされお構いなしとなった。あまつさえ「ゆっくり養生する様に」とのねぎらいがあった。

大切な儀式を台なしにされた将軍綱吉の激しい怒りが事後の劇的展開を大きくした。

勅答の儀式は辛うじて終えたが綱吉の怒りはおさまらなかった。さらに「私の遺恨で刃傷に及んだ」という目付衆の報告がその怒りに油を注ぐ結果となった。

綱吉は事件の裁決を老中たちの評定に任せず、ただちに即日切腹を申しつけた。綱吉の独裁ぶりは批判されなければならないが、いかなる理由があろうとも殿中で刃傷におよべば、加害者は切腹、被害者はお構いなしであるのがこれまでの先例であり、長矩の裁決だけが苛酷であった訳ではない。

長矩の性格

喧嘩なら武家社会の慣習にしたがって両成敗となるが、義央が刀を抜き合わせなかったことが証明され、喧嘩と見なされなかった。しかしお家が断絶し失業してしまった赤穂藩の家臣たちには簡単な取り調べだけで即日切腹させられた長矩にひきかえ、場所柄をわきまえ手向いをしなかったのは神妙であると義央になんのお咎めもなかったことがひどく偏った処断と思われた。

しかし武士の面目が立たぬと激昂しているのは浅野家の一部の家臣たちであり地元赤穂の領民たちの反応は極めて冷淡であったらしい。苛酷な搾取を受けていたらしく断絶の報せが伝えられたとき、赤穂の領民たちは新領主に期待して大喜びで、餅などついて祝ったという。

長矩は生真面目で一本気の性格であったが、更に短慮な性格と疝(せん)の持病があり、役目にあたる数日前より気分が秀れず、医師から投薬を受けていたという神経性の病が背景にあって乱心に及んだのではないかとの説がある。俗に「増上寺刃傷」といわれる事件がある。松の廊下の刃傷事件に先立つこと二十二年前の延宝八年（一六八〇年）六月に起きた。

徳川四代将軍家綱の法要という大切な儀式の最中に、時の永井家当主永井信濃守尚長が、内藤和泉守忠勝に大刀で斬り殺された。原因はこの時もはっきりしなかった。尚長は即死、永井家の

家禄は減封となった。内藤忠勝は切腹、家は断絶となった。この内藤忠勝は、長矩の母方の叔父にあたる人物である。長矩は殿中で刃傷に及べばどうなるかこの叔父の例で充分学習をしていたはずであり、「キレ」易い神経病のＤＮＡを持っていたことから極度の緊張感の場面で乱心したものと思われる。

怪我を受けた義央は出血がなかなか止まらずかなり重傷であったが、名外科医栗崎道有の治療を受けて回復しつつあった。刃傷の場面について道有に次の様に語ったという話が伝わっている。

「おもてなしに粗相があってはならぬと、役目柄いろいろと指図をし、浅野の行き届かぬところはこちらで手配した。それが積にさわったのかも知れぬが、刃傷におよぶ程の恨みを買うとは信じられぬ。ふり向いた瞬間、浅野の形相は狂気をおびていた。あれはどう見ても乱心したとしか思えない。乱心であれば罪に問われることはなかったのだ」

殿中刃傷事件の噂は、たちまち江戸中に知れ渡った。綱吉の圧政にやり切れない憤懣をつのらせていた人びとは、判官びいきから即日切腹させられた長矩に同情し、やがて赤穂の浪人たちが仇討をするのではないかとひそかに期待した。

義央の御役御免申出

義央は三月二十六日に自ら高家筆頭職の御役御免を願い出て許され、代って養子義周が非役の表高家に登用された。

八月十九日呉服橋の邸を返上して本所へ替地を命ぜられ移住した。赤穂浪士達が吉良邸を襲撃するという噂は益々高まり、隣接する蜂須賀家の難を懼れての運動が功を奏したのと江戸城近くでの不祥事発生を避ける様に考えた幕府の方針だったといわれている。

政治の裏も表も見つくして来た義央にはこの度の屋敷替が何を意味するのかおおよその見当はついた。厄介な荷物は出来るだけ遠ざけたいのだ。三年前に上杉家の援助を受けて火災後新築した家をとりあげられ不便な本所の古屋敷へ移されるのだから富子夫人は大いに不満だった。妻に優しかった義央は「上杉の白金屋敷に暮すが良い」と以後、富子と七姫（島津家へ嫁入後戻って来た長女）は上杉邸で富子の生母生善院と暮らすこととなる。ここではっきり言えることは義央と富子は不仲になったのではない。この後義央はしばしば上杉邸を訪ね宿泊したりしている。

妻富子を深く愛していた義央は子孫になかなか恵まれなかったにも拘らず生涯側室をもたなかった。また富子は義央の死後義央の遺髪の髷を大切に守った。近年富子の墓所を改葬した時本人の遺骸と共に白髪の髷が完全な形で出土したそうである。

討ち入りと吉良家断絶

本所への屋敷替えは、浅野家への同情の世論が高まり批判をかわす意味合いからも幕府としても吉良家に対し、何等かの減点措置を取らねばならなかったのである。

郊外への屋敷替えによって結果的に浅野浪士の討入りを容易にした点は事実である。しかし幕府が双方のバックである浅野総本家、上杉家両藩の勢力を削ぐため紛争をより助長しようとした意図があったか、真意の程は不明である。だが将軍専制の政治体制を敷くことを意図した綱吉の

恐怖政治は不気味なものがあった。

刃傷事件のあった翌年即ち元禄十五年十二月十四日、吉良邸で年納めの茶会が催された。義央は千宗旦に師事して茶道の奥義を極めており、自ら「卜一」と名乗る茶人であった。（上野介の上の字を分解して「卜一」とした）

千宗旦の高弟で、宗偏流茶道を興した山田宗偏とは同門である。宗偏は吉田（今の豊橋）藩主であった小笠原家の茶道師範として江戸で名声があり、多くの弟子を擁していた。屋敷も本所にあり移転後の吉良家と近かった。吉良家は小笠原家とも昵懇の間柄にあり、そのお茶頭である宗偏とは親交を重ねていたのである。この納め茶会に宗偏も招かれていた。

その夜半、突然襲われた。赤穂浪士の討入りである。吉良邸では茶会の片付けも終わり、疲れて床につき、安らかな眠りについた。

宗偏が赤穂浪士の討入りを容易にするため茶会の予定を意図して洩らしたという説もあるがこれは絶対に誤まりである。「羽倉斎」や「中島五郎作」を通じて、不用意に知られてしまったものであり宗偏はその後この件について質されると、悔悟の念をもって一切沈黙し語らなかったという。茶友の精神の繋りは、「利休」と「三斉」、「織部」に見られる通り尊厳限りないものである。

大石内蔵助以下の浪士は水も洩らさぬ布陣。吉良邸の人々は手も足も出ぬ状態であった。元来吉良家は刀や槍で奉公する家ではない。いわば幕府における公家的な存在である。仕える家臣たちは、武士としての一応の剣術の心得はあったとしても、平和な世に義央の護衛のため腕の立つ武士を多くは必要としなかった。

上杉家から大勢の付人が派遣されていたようにいわれているが俗説にすぎない。剣客だった新貝弥七郎や山吉新八郎にしても義周の付人であり、義央を防衛するための付人ではなかった。義央は討たれ、家臣十七名も討死し、重傷を負って後日死んだ者が九人、重傷者十五人を出したのである。

後に吉良の家臣は腰抜け武士ばかりで、まともに刀を合わせることも出来ず討ちとられと酷評されたが、彼等も主家を思う忠節心をもって全力で応戦したのである。

吉良屋敷の面積は二千五百五十坪、本屋の建坪は三百八十八坪、長屋の建坪は四百二十六坪である。長屋には百人あまりの侍、中間、足軽などがいたが、入口をふさがれたため手も足も出なかった。各長屋から本屋までは数十歩の距離があり、はだしで雪をけってかけつけるあいだにも立ちはだかる浪士どもを斬り払って進むしかない。下に胴着をつけて、臑当、籠手にも鎖を入れ、頭巾にも網鎖をかけた完全武装の浪人が三、四人がかりで斬りかかってくるのだから、寝巻きのまま飛び出した吉良家の侍たちはひとたまりもなかった。

本屋に寝ていたのは十五人ほどの当番の侍と、お茶坊主数人、それに表座敷の居間に寝ていた当主の義周、奥の隠居部屋に寝ていた義央だけである。これだけの人数でともかくも義央と義周をまもり、みな必死に応戦した。富子夫人や姫たちは前述の通り上杉の下屋敷に難を避けていた。もし彼女等が吉良屋敷に居住し実害を受けていたとしたら、その後の幕府の対応はまた変ってい

たかも知れないと察せられる。

浪士の襲撃に備えて、吉良邸には落とし穴や抜け道などの仕掛けがあり、上杉家から大勢の付人が派遣されていたかのようにいわれているのは俗説にすぎずまったくの無防備だったのである。

上野介は用人の須藤専右衛門と鳥居理右衛門にまもられて台所口にある物置に身を潜めていた。居所がわからず、あせった浪士どもの必死の家捜しでついに発見され、須藤も鳥居も刀がささらのようになるまで奮戦したが相手は多勢、鳥居は首を二つに割られ、須藤も斬り伏せられた。上野介は槍で突かれながらも脇差しをふるって戦い台所で討ちとられた。

当主義周も逃げる途中で浪士と出合い、小長刀（なぎなた）をふるって戦ったものの、顔や背中に深手を負って人事不省となった。

義周が戦った相手は、不破数右衛門とも武林唯七ともいわれている。両者とも浪士のなかでは屈指の武芸者だから十八才の吉良家当主としては、けなげによく戦った。義周の小長刀には刃にも柄にも太刀あとがあり、切っ先が折れていたという。

かくして上野介の首は取られ、当主義周は重傷を負った。吉良家の惨状は目を覆う程であった。赤穂浪士が勝ったのは武力による討入りだけではなかった。戦略でも勝っていたのである。現場に浪士たちはおびただしい武器を捨てていった他に「浅野内匠頭家来口上」を置いていった。幕府検使目付衆が之を受け取った。

家来口上には時節・場所をわきまえず不調法を働いたために切腹仰せつけられ、領地・城の召上の処断にたいして、まったく異存はなく全面承服していることを強調したうえで「右喧嘩の節」

上野介を討ちとめ得なかった主君の末期心底忍びがたく「君父の讐は共に天を戴くべからず」の名分に従って「ひとえに亡主の意趣を継ぎ候志までに御座候」とありあくまでも討入りを正当化しようとしていた。周到な用意がなされていたのである。

幕府への反抗という根元にひそむ真意を隠して「君父の讐」とすり替えた内蔵助の戦略の勝利であった。内蔵助の意図はあくまで主家の再興にあり、お家再興が認められていれば、討入りもなかったのだ。この内容に見る限り、主君の恩に報いるために命まで捨てようとした崇高な義士の印象だけが強くのこり、平時に徒党を組んで私邸に乱入し殺人を恣（ほしいまま）にした犯罪者一味が義人視され、刃傷事件が浅野と吉良の喧嘩に修正されつつあった。

情報の操作があった訳ではないであろうが、赤穂方の世論の傾きが激しくなり幕府も世論に同調せざるを得なくなった。

桐の花影

当主義周は、傷を負ったものの危うく難は免れたが、義央は浪士に首級を上げられ、泉岳寺の浅野長矩の墓前に供えられた。

後に泉岳寺の寺僧がこれを吉良邸に持参したが、その首級を引き取ったのは左石田孫兵衛と斉藤宮内の二人である。泉岳寺にその首級の受け取り証文が残されているという。

義央の遺骸と首は名外科医栗崎道有によって縫合され、その他の傷も丁寧に手当された上、牛込にある江戸表の菩提寺万昌院に手厚く葬られた。

法名を「霊性院殿実山相公大居士」という。

その万昌院も大正七年、中野区上高田の功運寺に合併され、万昌院功運寺になった。合併により吉良家の墓地も移転、現在の功運寺の墓域に改葬された。移転の時、義央の遺骸を納めた瓶棺も無傷のまま発掘され、これに立合われた当時の功運寺住職が棺の蓋を開けたところ、首も縫合されたままきちんとしていたという。

この首を縫合した栗崎道有は義周のかなりの深傷をも治療しているが道有の墓と吉良家の墓は二百歩と離れぬ墓域にある。栗崎家の墓は初めから功運寺にあり、両寺の合併で二百年後同じ墓地に葬られることになったのである。また内匠頭長矩の母方の叔父内藤忠勝により増上寺法要の際斬殺された永井尚長の墓も功運寺墓地に現存する。誠に奇しき因縁である。

蛇足ながら筆者は中野に住んでいたので功運寺の吉良家墓所を度々拝観する機会があった。旗本奴「水野十郎左」や作家「林芙美子」の墓も同寺にある。

元禄十六年二月四日幕府の裁定が下った。四大名家にお預かりとなっていた四十六士には死罪切腹が申し渡された。忠臣義士の志は善しとするも天下騒擾の罪は免れないとした妥当な決断であった。

それと同時に吉良左兵衛義周も評定所によび出され判決が下された。

「浅野内匠頭家来どもが上野介を討候節、その方の仕方は不届きである。よって領地召し上げられ、諏訪安芸守忠虎へお預け仰せつける。」

被害者である義周にはいったいなにが不届きで島流しの様な処分を受けねばならないのか理解に苦しんだが従わざるを得ない。ここに鎌倉時代からの名門吉良家は完全に滅亡するのである。

傷が完全に治癒しないまま、義周は左右田孫兵衛、山吉新八郎の二人が付き添い、二月十一日江戸を発ち、十六日諏訪高島に着いた。山吉は事件で受けた傷を道有の手当で治療途中であったが、たって願い出て義周に同行したという。

高島での義周の蟄居生活は厳しいもので、自殺の道具になるような剃刀などは与えられず、火鉢もなく着のみ着のままで寝間着もなかったといわれる。

宝永元年（一七〇四年）六月、義周の実父上杉綱憲が亡くなり、続いて八月養母で実祖母の富子が亡くなった。

他国でのいわれなき幽閉生活、身内の重なる訃報で絶望的な日々を送らざるを得なかった義周は宝永三年一月二十日、春を待たずに二十二才の生涯を閉じたのである。

法名を「室灯院殿岱厳徹宗大居士」といい、上諏訪の法華寺に葬られた。付人の左右田孫兵衛と山吉新八郎が懐金三両を工面して葬ったという。

誠に哀れな生涯といえよう。後年領地吉良の華蔵寺にも墓が建てられたが、この墓は祖父であり、養父でもある義央の墓石と同じ石を二つに割って造られ、胴の中央部分のほぼ同じ位置に斜めにひび割れが走っている。

歴代の墓石が立派な宝篋印塔であるのに、この二つの墓は板碑で極めて質素なもの、吉良家の栄枯を無言のうちに語りかけているようである。そして二つの墓石のほぼ同じ位置に走るひび

割れの線が二人の悲劇と無念さを象徴しているかに見える。

館山市に住む女医さんは、上州吉良家の家来筋の子孫で、義周の厳しい哀れな最期に涙し、諏訪法華寺の墓所に慰霊碑を地元の有志の協力を得て昭和四十四年に建立した。その碑には、

「公よ忍べ　ただひたすらに忍べよかし
公の陰忍は知る人のみの知る　眞の
強さなればなり」

と記されている。

結び

殿中で刃傷に及べば、身は切腹、家は断絶、領地と居城は没収、家中は離散が常道であった時代に浅野内匠頭は何故に敢えて刀を抜いたのであろうか。

その理由は、今もって明白では無いし、多分今後も判明しないであろう。このことで多くの俗説が面白、おかしく伝えられる要因となった。

この事件から約五十年後の寛延元年（一七四八年）に竹田出雲が浄瑠璃に作った「仮名手本忠臣蔵」では、殿中で刀を抜く程の恨みを持つに至った理由を色々と創作した結果、いまだに絶大な人気をもつ物語りとなった。

この物語りがそのまま事実とは言えないので作者も実名を避けてフィクションとして書いたのである。

しかし明治時代になって忠臣蔵の物語りは実名になり、この物語りが事実であると思われてしまった。

更に戦時に至る軍国主義の増幅期では忠君愛国のモデルの一つとして大いに喧伝された。

明治元年、明治天皇は勅使を泉岳寺墓前に差向け、大石良雄らに嘉賞の宣旨を下したといわれる。

これらのことから吉良上野介は悪者の代表にされてしまったのである。

刃傷の原因がはっきりしていないのであるから上野介を極悪人と定めつけるのは理不尽に違いないが流れとしては抗い難いものがある。

筆者を含めて旧吉良領の人々は長年肩身の狭い思いをして来た。

戦後から近年に至って歴史が見直され、吉良領に関連ある偉人、「足利尊氏」、「徳川家康」、と共に「吉良上野介」もまた公平な評価を受ける機運に恵まれて来た。

吉良家の家臣たちの忠節ぶりも浅野家浪士の死者ゼロに対し、吉良家の死者二十六名重傷者十五名を出したことにより、充分認められるべきである。

近年元禄事件の普遍的な評価、検証がなされつつあり、前述の東京中野にある万昌院功運寺、吉良にある華蔵寺の上野介の墓を参詣する人達の数が徐々にふえているという。

また諏訪高島にある吉良義周の見すぼらしい墓の傍らに立派な慰霊碑が建てられ人々の同情を更に集めているという。

前述の万昌院功運寺の住職佐々氏は次ぎの様に言っている。

〃お釈迦様の最後の説法をまとめた「遺教経」というお経の中に「瞋意（しんい）は猛火よりも甚だし常にまさに防護して入ることを得せしむこと勿るべし」と示されている。

これは瞋心つまり怒りの心は燃え盛る炎よりも恐ろしいものだから、怒りの心を起こさぬ様、十分に気をつけるべきことを諭された言葉である。

近頃怒りを爆発させて「キレる」ことによって引き起される事件が多発している。怒りの心は、命に関わる恐ろしいものだ。内匠頭がなぜ刃傷に及んだか、謎は深まるばかりだ。しかしどの様な理由があったにせよ、怒りの心を起こして「キレた」ために、結果として、一体何人の人が命を落とし、また辛い目に逢わなければならなかったか。この物語りを通じて怒りの心が暴走する恐ろしさをよくよく肝に銘じたいものである。〃

吉良家の「五三の桐」の家紋は高家となってより朝廷から授かったものである。従前は足利一族系の「丸に二引き」を使用していた。

昭和五十一年吉良町の有志により吉良公家臣供養塔が華蔵寺吉良家墓所の一角に建てられた。これには兵庫県赤穂市民の有志達の賛助もあった由である。三世紀を経て、吉良町民と赤穂市民はやっと和解出来たのである。

供養塔の建立と共に「吉良公家臣　桐の花影」なる追悼誌が刊行された。その中に次の一節がある。

「この事変で吉良公家臣の多数が斃れ傷つき、生き残った者も赤穂浪士の名声の陰に世間から冷眼視され淋しく死んでいった。主君を守って奮戦して忠死し、負傷した吉良忠臣は、赤穂義士に劣らぬ忠臣義士である。」

この文章の表題「桐の花影」は右の追悼誌から引用させてもらった。

長々と述べて来たが最後に次の事項を付記して筆を擱きたい。

幕府は浅野・吉良両家の名跡を惜しんでか後に形ばかりの復活を許している。

宝永七年　幕府　浅野大学に禄五百石を賜い、寄合旗本を命ずる。（元禄義挙年譜）

宝永七年　高家蒔田（まいた）左兵衛義俊「本氏吉良」に復せんことを請うままに許さる。（徳川実記）

いずれも宝永七年（一七一〇年）将軍綱吉から家宜に変ってからの措置である。

但し両家が明治維新迄無事存続出来たかどうか、未調査である。

海舟座談余話（明治二十八年七月）

松下　壽男

一

勝麟太郎海舟は、記者の巌本善治に「まだ二人ほどあるつもりだ。もしかして……」という取って置きの話を聞かせて帰したあと、さらに想像をたくましくしてみるのであった。

「ひょっとして、龍馬のやつ、会っていたんじゃねえかねエ」

海舟は、腕組をしながら、庭を眺め、ひとしきり頷いた。

海舟は、前年正月、齢七十余歳で丹毒を患い病臥して以来、自分が渦中から見てきた激動の歴史について（ひょっとして）と考えるようになっていた。生死の境をさまよって以来、世の中には人知を超えた大きな力が働いていることを、より一層感じられるようになったからなのかもしれない。

海舟はよく「ナアニ維新の事は、自分と南洲とでやったのサ」と語ってきた。事実歴史は、いかにも偶然の積み重ねのようにして彼らの筋書き通りに推移してきたのである。

しかし、だからこそ、その筋書きを書いたのは自分らではないような気がしてならないのであっ

海舟座談余話（明治二十八年七月）

松下　壽男

一

勝麟太郎海舟は、記者の巌本善治に「まだ二人ほどあるつもりだ。もしかして……」という取って置きの話を聞かせて帰したあと、さらに想像をたくましくしてみるのであった。

「ひょっとして、龍馬のやつ、会っていたんじゃねえかねエ」

海舟は、腕組をしながら、庭を眺め、ひとしきり頷いた。

海舟は、前年正月、齢七十余歳で丹毒を患い病臥して以来、自分が渦中から見てきた激動の歴史について（ひょっとして）と考えるようになっていた。生死の境をさまよって以来、世の中には人知を超えた大きな力が働いていることを、より一層感じられるようになったからなのかもしれない。

海舟はよく「ナアニ維新の事は、自分と南洲とでやったのサ」と語ってきた。事実歴史は、いかにも偶然の積み重ねのようにして彼らの筋書き通りに推移してきたのである。

しかし、だからこそ、その筋書きを書いたのは自分らではないような気がしてならないのであっ

た。もっと大きな存在が自分や西郷南洲に力を及ぼしていたのではなかろうかと。

海舟は、その含みを持たせながら、淡々と厳本に語ったのであった。「主義だの、道だのといって、ただこればかりだと、きめることは、私は極く嫌いです。道といっても大道もあり、小道もあり、上に上があります。その一つを取って、他を排斥するということは、普段から決してしません」と。

しかしながら海舟に心酔する人々は、彼の言葉を文字通りに受け取って、海舟でなければ維新は語れないと思うのだ。本人は、苦笑をするほかはなかったのである。

「マア、おいらなどズルイやつというのだろうヨ。でも草葉の陰の志士たちは、決して怒りはしないだろうサ。甲東も、小楠も、孝允も。なぜならおいらと同様、自分が筋書きを書いたのだと考えているだろうからサ。だから恨みもしまい。そうヨ、お互いが出会う度に、みなもっと大きな、大きな力をそこに感じて生きていたのさ。あの頃は」

庭の筧から滴る水に目をやりながら、海舟の胸中には数々の出会いが浮かんでは消えていった。常に危うさを孕んだそれらの出会いは、鹿威しの水のように、唐突に永訣を迎え記憶の底へと沈んでいったのであった。

海舟は、簾の下がった廊下の、籐椅子の肘掛けを握ると、まだ癒え切っていない体をかばいながら、静かに腰を下ろすのだった。

二

海舟が幕臣として一番心を砕いてきたことは、経済だった。ある出会いが彼の関心を経済に向かわせたのだ。

それは、海舟が初めて江戸城に登城して間もない頃のことであった。

当時小普請組の旗本だった海舟は、上司にまみえようとして、一室で長々と待たされる羽目になったのだ。

しかし、海舟は退屈することはなかった。部屋には風変わりな先客がいたからである。

足を崩すことなく、一点を見つめ、時々懐中から帳面と矢立を取り出しては、何やら書きつけるその男。やがて算盤まで持ち出して、ぶつぶつと計算を始めるのだ。

その野人の風貌と、律義な振る舞いに、およそ武士とは異質なものを感じ、観察をしていた海舟だった。話好きな彼であったし、話してみたい相手であった。

「にらめこでもあるメェし、暇つぶしに、世間話でもしませんか」

とうとう切り出した若い海舟に、年老いたその男は、

「それも、よかんべェ」

と、相好を崩し、わざとおどけて見せたのだった。

その男は、普請役格の二宮金次郎尊徳であった。

そのころ、幕府は、財政的に逼迫していた。何とかして天領からの年貢を増やさなければなら

ない。歴代将軍の墓所のある日光の神領でさえ、もはや聖域ではなくなっていた。そこへ役人として派遣されていたのが尊徳であった。

すでに老大木のような徳川幕府だったが、荒れ地の開墾と農民の保護によって、立派に再生が可能だと尊徳は考えるに至った。そして幕臣には、一層の倹約を求めようとしていたのであった。

一方海舟は、幕臣に倹約を求めるなんて到底無理だと思っていた。徳川家という老大木は、細胞の一つ一つが最早再生能力を失っていたのだ。

しかし尊徳の考えの通り、農民や町人の生み出す土壌は十分に肥えていたし、若木のように茂っている雄藩もある。

ならば、幕府は、もはや徳川家のことだけを考えず、諸藩や農民町人を含めた日本国の幕府として生まれ変わらなければならないだろう。

実学者横井小楠を師とした海舟にとっては、滅私奉公の相手は、もはや徳川家ではなかったのである。

「はるばる異国から交易に来るからには、何か不足するものがあるのじゃろう。広い世界を相手に満足させることは今の日本にはできん話だが、日本中の荒地を開墾し終えた上で、余剰を異国に譲ってやれば、必ず満足するじゃろう。それまで暫く待てと言って、帰したらよかろう」

正直を通り越してお人好しとさえ感じる尊徳の外交談義には、武士には決して真似のできない大らかさがあった。しかも家や藩のことではなく日本の国土を憂えていたのである。

「おいら、黒船を一隻手に入れて、海を渡ってメリケンまで乗り込んで、毛唐等の魂胆を探ってみようと思うのサ」

と、海舟は語った。

尊徳は、

「それはよろしい」

と、笑って頷くのだった。

会話が弾み、二人は、いつになく爽やかな気分になっていた。

そこへ、茶坊主と揶揄される茶職がやってきた。

「二宮殿、こちらへ」

「さらば、行ってくんべェ」

と、おどけて見せて、会釈をする尊徳に、

「存分におやんなセェ、爺さん」

と、深々うなずく海舟。二人は、古い扉をこじ開けようという、共通の志を確かめ合うのだった。

扉の向こうの、新しい経世済民をめざして。

三

「ハハア、尭舜の政治ですナ」

庭の奥のクスノキの繁みから、まばゆい光と共に懐かしい声が聞こえてきたような気がした。

「おいらが咸臨丸の艦長としてアメリカに渡って帰って来た時、色々向こうのことを話すと、一

を聞いて十を悟るという塩梅で、横井小楠はそう言ったのサ」

国のまつりごとは、人民の入れ札で決めた大統領や代議員が執り行う。軍隊も、人民で組織する。人民の年貢は、ステイツに集められて、再び人民のために使われる。

「だからおいらは、尊徳にも向こうのことを話して聞かせてやりたかったサ。爺さんが生きていれば何て言ったかネ」

アメリカのデモクラシイとインダストリイを目の当たりにするにつけ、海舟は報徳訓のことを思い出したのであった。それは、かつて江戸城の一室で、尊徳翁が差し出してきた野帳の一葉に記された長歌のような漢文であった。

「おいら、心配になって尋ねてみたっケ。公や士の字が一字も無くて大丈夫ですかいってネ。すると爺さん、こう言ったね。『田畑山林、これは一字で言えば村のことじゃが、田畑山林は人民の勤耕にあり、これが全てジャ』」

海舟には、その声色さえも真似することができた。半世紀も昔に一度会っただけなのに、時勢と逆境が至誠の人物を作り上げるという事実を確かに見た驚きは、いまだに鮮烈なものであった。

「デもってアメリカに行ってみると、ユナイテッドステイツは人民の勤労にありってわけだったからネ。爺さんの外交策も、アメリカの流儀を知ってからは、王道のように感じたネ。経済で付け入る隙を与えずに世界の舞台に立つことが何より大切なことなのサ」

「もし、殿様」

振り向くと次の間の襖がわずかに開いて、女中が怪訝そうに顔を覗かせている。

「どなたかお客様でございましょうか」

「ハハハ、お糸、済まねえナ。ナアニ、ワシは、いつの間にか問わず語りをしているのサ。きっと年のせいだろうねェ」

襖は、何事もなかったように閉じられた。

「そうそう、龍馬サ。龍馬のやつ、やっぱり会っていたんじゃねえかネ」

四

アメリカから帰って二年後、海軍創設に尽力していたある秋の昼下がり、開国派と目されていた海舟を斬りに坂本龍馬がやってきた。

黒い羽織を着、大柄な体を猫背に曲げて鴨居をくぐってきたその顔は、憂いに包まれていた。しかしその眼光に利発さを感じ取った海舟であった。話せば分かる若者だ。

対座するなり龍馬は、日本の自立と主体性を叫んだ。その間左手は、脇に置いた太刀を放そうとはしなかった。

龍馬は自ら土佐の郷士だと言っていたが、頭の中は商人だった。藩だ、幕府だ、朝廷だというしがらみに縛られてはいなかったのである。しかも龍馬は自ら、いつも金儲けを考えていると語った。

「儲けた金を、一体何につかうんだィ」

と、海舟は尋ねてみた。

龍馬は、一言、

「日本の国の大掃除」

と答えた。龍馬のねらいも経世済民にあったのだ。

「デ、どうやって金を儲けるんだィ」

「小さくていいから黒船が一隻ありゃあ」

海舟は、背中を大きな力が押してくるような気がした。実に同感であったのだ。彼は、目を一層大きく輝かせて、海軍創設と対外貿易の構想を語った。そして経済的な自主自立のためには開国に備えなくてはならないことを熱心に諭した。

龍馬は手を太刀から離して、腕組みをしながら海舟の話に相づちを打ちだした。そして自らの考えを語り始めた。生来の多弁のようであった。

「海には、国境はないきに……」

だから全ての船が自己責任の下に自由に進路を定めることができる公海だ。値の安い土地から高い土地へ、港から港へ品物を運べば、誰から絞り取ることもなく利益が得られ、喜ばれる。そうして儲けた金で、もっと自由に活動できる世の中になるよう、政治を変えていくのだと。

海舟は、龍馬の言葉を聞いて、頭の中に見渡す限り大海原が広がっていく思いがした。でも感心ばかりしていられない。龍馬は彼を斬りに来ているのだ。海舟はこう切り出した。

「でもネ、日本の国は箱入り娘同然サ」

日本の鎖国は、外国船の寄港をばかりでなく、日本船の航海をも制限していることを龍馬に教えた。さらに同じ公海を航行できるようにするならば、日本船の入港は認めるが外国船の入港は認めないということができるだろうかと問い掛けた。

龍馬は暫く考えていたが、

「交易は平等でなければ成り立たんきに。開国するしかありません」

と納得した。こうして、帰りには爽やかな顔をして海舟の弟子になっていたのである。

やがて龍馬は、尊王攘夷と佐幕開国の間で迷いながらも、日本が自立する中道を模索していった。それは折中ではなく、広々とした公を切り開く中道でなければならない。

その道は、その時その時、大海原に航跡を残すようにして新しく創り出していかなければならない道であった。大義や志だけでは語れない、自立のためには手段を選ぶことのできない道でもあった。

あとから見れば、歴史の必然のように思われる薩長連合や大政奉還という出来事も、龍馬が洋上薄氷を踏む思いで切り開いてきた中道なのであった。

五

「さっきも厳本に話して聞かせたサ。『家内だって、娘だって、みンな不平サ。誰でも、私に賛成の人はなかった。しかし、この上に道があると思い出しては、いかにも面白かったよ』ッテ」

中道を生み出すことがどんなに難事業であるかは、自分が江戸城明け渡しを仕切って以来、骨身に染みている海舟であった。

とはいえ、あらためて振り返ってみると、確かにその中道が、支那のように西洋の植民地になる道から日本を救ったのであった。

「テことは、中道こそが真の大和魂かも知れねぇナ」

海舟の頭の中に「和をもって尊しとなす」という言葉が浮かんできた。

「聖徳太子の時代から道を説くのは大変な仕事だったって訳サ。道は万人を通さなければならねえからネ。テことは、道とは経世済民に違いないのサ。ワシも、大政を奉還した限り、慶喜公を大坂城の秀頼の様にしちゃあなるめぇとしきりに考えて、まず手を打ったのが経済サ」

慶喜公を神君家康ゆかりの駿府静岡に隠居させ、徳川家の財産を海舟が管理しながら、華族に恥じない暮らしを保障し続けた。その一方で、旗本士族を、その隣国の牧之原の開拓に従事させ、経済的自立を促したのである。

彼らの誇り高い、血気盛んな荒れた心は、荒れた台地と格闘をし、やがて鍬の刃先が丸くなるようにして、文明開化の世の中に順応していったのである。多くの士族は明治政府の官吏警吏や教員になって、台地を下っていったのであった。

「維新の後も関ヶ原の合戦やアメリカの南北戦争のように、国を二分する戦が起こらないとも限らなかったサ。そうなれば、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアが後ろ盾に付いてきて、どちらが勝っても日本は植民地サ。とはいえ、内戦のことも、西郷が起した西南の役から後、心配はなくなった。西郷は一切の士族の不満を引き受けて、自害して果てたのサ。それでも、東京で大久保甲東が刺されるような事件が起きたから、江戸城明け渡しのころからの伝手で火消しや幇間を手懐けて、噂の度にこの屋敷に走らせたサ。世間では、御一新後は、勝は隠居の身だと思ったようだが、隠居してからの働きの方が大したもんだと自分で思うヨ」

「その通りですとも、殿様」

と、お糸の声が聞こえたような気がした。お糸は、大抵次の間に控えて、気配を消しながら、たえず海舟を気づかっているのであった。

六

相変わらずの独り言ではあったが、襖の向こうに何よりの聞き手を意識した海舟の問わず語りは、さらに熱がこもっていくのだった。

「御一新の後は、ワシは、これといった公職にはつかなんだ。海軍卿参議や枢密顧問官などは、まあ、隠居の証しのような役職ヨ。でもワシは、公職に就かずとも公のために骨身を削っているという矜持は、片時も忘れたことはなかったネ。公とは経世済民サ。でもそのことを悟るまでには色々と研究したのさ。なにせ、公とは公方様のことだと疑わずに生まれ育ってきたからネ。それが水戸派等が朝廷こそが公の元祖だと叫び出して、二つの公の間で悩んだヨ。すると、横井小楠が現われて、天皇家や徳川家が公だと考えるのは間違いだと諭すから、やっと、さあ日本の国をどうするかという考えを持ち始めたのサ」

座敷の文机の上では、漆塗りのからくり仕掛けの蝿取器がギイギイと音を立てて回っていた。砂糖水を舐めにとまった銀蝿が箱の奥へと運ばれて行く。

「目につくのは俗吏ばかりサ。多くの俗吏は、表面は清廉潔白を装ってはいるが、裏では袖の下を受け取って私腹を肥やしていたヨ。また別の俗吏は感心なことに袖の下を受け取りはしなかったが、大抵ためにならないお役目にひたすら落ちの無いように振る舞って、保身に余念が無かっ

たヨ。それもまた利己のためさネ。おいらハ、士たる者、経世済民に尽くすべし、それが公の道だと考えて、モウ悟った気で居たネ。でも上には上があるもんだ」

海舟は照れ臭い時にいつもそうするように、薄くなった白髪頭を掻き上げた。

「あの時は、尊徳にも持論を語ったサ。すると、爺さん、こう言ったのサ。『お侍さんよ、百姓の年貢を経世済民に使うのは当たり前だべ』悟りを当たり前と言われちゃァむっと来るわサ。でも、爺さんの話を聞くうちに、それが至って正直な考えだと判ったネ。目から鱗とはこのことサ。早い話が旗本の扶持米は百姓の年貢なのサ。お百姓さんのお役に立って初めて胸を張っていただけるというもんサ。その時、爺さんは、日光の御神領の建て直しのための仕法とやらを作っていたそうだが、公金は使わず、私財をなげうっていたそうだ。その私財というのも、元は、無利子で金を貸した礼金だというのだから驚いたネ。人民の勤耕の喜びが爺さんの所に集まって、その私財で経世済民をしているのだからネ。爺さんはこう言うのサ。『田畑山林も元は荒れ地。でも荒れ地の力を引き出してやれば、それは荒れ地を耕す力になる。田畑山林は人民の勤耕にあり、ただそのようにしてやることが経世済民だ』とネ。おいら、この爺さんは真っ正直な公人だと思ったネ。朝廷だ幕府だっていうしがらみを知らずに天地の徳に報いて生きるという野人の生き方が、おのずと人徳を育てるのかネ」

彫りの深い相貌を皺だらけにして、にっこりと笑う二宮尊徳の、底抜けに誠実な笑顔を、海舟は懐かしく思い出すのだった。

「尊徳が野人なら龍馬は洋人サ。尊徳にとって公そのものの田畑山林でさえ、龍馬にはしがらみでしかなかったネ。龍馬には、誰もが航行自由な大海原が公だったのサ。もし龍馬が長生きしていれバ、世界の海を駆け回って交易で大儲けをしただろうサ。そうして稼いだ資金を惜しげもなく日本の経世済民のためにつかったはずサ。ひょっとすると、一人で外国と渡り合って、不平等条約改正の下ごしらえくらいやってのけたかも知れねえナ。近頃は、経世済民を短くして、経済、経済と叫ぶやからが増えているが、金もうけのことしか頭にない連中だから経世済民という言葉を口にするのが憚れるんだろうネ。全く龍馬の爪の垢でも飲ませてやりたいヨ」

海舟は、座敷の方に向かって声を掛けた。

「ところで龍馬のやつ、尊徳の爺さんとどっかで会っていたんじゃないのかネ、お糸もそう思わないかェ」

襖の向こうに控えているはずのお糸は返事をしなかった。

お糸は、口が堅くて聡明で度胸のある娘をと注文を付けて、やはり女中をしていた森田米子の父親に探させたのであった。

十四歳で勤めを始めたお糸は、政財官の要人が訪れる海舟の書斎に侍る女中として、注文通りの性格で、しかも色好みの海舟の眼鏡に適った器量よしであった。

お糸は、決して出しゃばることはなかったが、海舟が問えば、目をくりくりさせながら、誠実に、一生懸命に、自分の考えを述べるのだった。そうしようと思えば、女子だから、若輩だからと質問をはぐらかすこともたやすかったであろう。実際、先の米子は、そのようにして海舟に媚びてきたのである。しかしお糸は、けなげに答えを返してきた。しかもその誠実無垢な答えには、いつも海舟の心を安らぎで満たすものがあったのである。

家中誰彼構わず小言を言って回って、それから部屋でふさぎ込んでいた、ひどい癇癪持ちの海

舟の日常が、お糸が来たころから少しずつ穏やかなものになっていった。それは、彼が迎えた老境の所為だけとは思えなかった。

純白の手ぬぐいで頬を被り、茜のたすきをかけてふき掃除をしているお糸を見て、海舟は、米子にしたように後ろから犯しにかかろうとしたことがあった。しかし米子のように媚を返してくることもなく、お糸は、それも勤めの一つとして懸命に事態に耐えようとするのであった。その仕草の奥に、師に対するような尊敬心を感じ取った海舟は、年甲斐もない自らの行いを恥じたのであった。そしてお糸の精一杯の公徳に報いていかねばと思った。

結局、米子との間には第五女をもうけた海舟も、お糸には手を付けることもなく、身の回りの世話と来客の接待を委ねながら、無聊の時の格好の話し相手として、思索の産婆役として、数十年間、行住坐臥の傍らに侍らせてきた。

そうして、巌本善治が訪れる以前から、海舟は、お糸の存在によって、問わず語りの名手に育てられていたのであった。

「呼んでも返事をしねエとこをみると、侍り疲れてうたた寝でも始めたかネ。近頃はリウマチで胸が痛むって言っていたからネ。ワシもいささかしゃべりすぎて眠くなってきたわい。一寝入りするとしようかネ」

海舟は、お糸に再び声を掛けることもなく、腰掛けたまま後ろ手に桟を外して背もたれを倒すと、籐椅子の上に横になった。庭からは湿っぽい風が流れてきた。（夕立が来そうだネ）と、海舟はまどろみながら考えた。やがて彼は、夢を見始めた。

七

そこは日光の、御神領の峠の茶屋であった。松林の間に粗末な板葺き小屋があって、軒先の木陰の縁台に奇妙な一群が腰掛けていた。

仕草や立ち居振る舞いは如何にも侍のようであったし、大刀を下げている者もいた。しかし身なりは、質素を通り越してみすぼらしくさえ感じられた。そのうえ筋骨たくましい若者たちが心底礼を尽くしている老人は、脇差こそ差してはいるが、木綿の野良着を着、草鞋も脚半も泥にまみれているのである。

若者たちは、老人の発する一言一句を聞き漏らさないように耳を傾けていた。中には、矢立と帳面を手にして書き留める者もいた。老人が立ち上がると、一群もまた、間合いを保って後方を取り囲みながら移動する。

彼らは心掛けて穏やかに話す者たちであった。辺りは静寂に包まれ、時折谷からの風に松の枝が揺れて、涼しげに鳴るばかりである。

老人は、先ほどから、茶屋の軒に吊るされている草鞋に興味を持っているらしい。

草鞋は、編み方は伝統で定まっているものの、実際に編んでみると、千差万別である。しかも藁の育ち方によって強さや履き心地が違ってくる。草鞋一足にも天道人道と地の力を読み取ることができると老人は語るのである。そして物思いに浸るような沈黙が続く。

すると老人と草鞋の間に大きな黒い人影が立ちはだかった。

「無礼者」
と、若者たちが詰め寄ったが、
その男は、
「すまんきに」
と、聞きなれない訛りで非礼を詫びると、そそくさと懐から帳面とちびた筆を取り出して、穂先を舐め舐め、草鞋の値を書き留める。
老人がのぞき込むと、帳面には、びっしりと茶屋ごとの草鞋の出来と値が記されているのである。
しかし、その男は商人ではない。埃にまみれてはいたが、羽織袴を着て、腰に大小を差した若侍であった。
「お侍さんは、草鞋にご執心のようですな」
と老人が声を掛けた。
「わしゃ、江戸を発って暫くすると草鞋が壊れて、難儀をしちょったら、近くの茶屋で三文で売っていたけん買ったきに。ああ助かったと歩いちょると、次に見つけた茶屋の軒先にゃ一足二文で吊る下がっておった。じゃけん悔しゅうて悔しゅうて、草鞋を見るたびに、こうして帳面に書いているきに」
取り巻きの若者たちは、何とも物好きなことよと、顔を見合わせて呆れているが、ただ一人老人だけは、身を乗り出すのである。
「で、お侍さん、何か面白いことでも見つかりましたかな」

日焼けした皺だらけの顔の奥で柔和な目がきらりと光った。
若者たちはそれを見逃さない。「千住宿入口、上品、大、三文」といった文言が三十も並んだ帳面から何か智恵が得られるとしたら、それはもはや物好きではない。積小為大が生み出す徳なのである。
「それが、今ここに来て、大きな不思議に出くわしたんじゃ。峠に差しかかる前の茶店に、『このさきなんしょ。ころばぬさきのつえ、きれぬさきのわらじ』と引き札があって草鞋が一足二文じゃった。しかし草鞋は埃を被っていて、売れていないようじゃった。じゃが、ここの草鞋は、五文でも、毎日売れているようじゃ。二文では売れないものが五文でよく売れるというのが、まっこと不思議じゃきに」
周囲の若者の中には思わず吹き出すものもいた。峠で草鞋を切らした者が、藁をも掴む思いで草鞋を求めるのは、道理なのである。しかし老人は、一層目を輝かせて「ほほう、それで」と話の続きを待ちわびる。
「この店で草鞋を求めるものは、下では、二文じゃったことを知ってるから値切るはずじゃ。暴利だと言って怒るはずじゃ。それでも五文で納得するとなると、三文分のご利益があるはずじゃあなかろうか」
取り巻きたちは、はっとした。この青年は、自分たちが気持ちで片づけていた事柄の、真の道理を究めようとしているのだ。
「わしゃ、三文分のご利益の種は、下の店の引き札じゃと思う。転ばぬ先の杖と教えられていたからじゃ。なのに気にも留めなんだ報いが降りかかってきたからじゃ。これからは備えあれば憂

い無しじゃと教えられたきに、有難く月謝を払うたつもりの三文じゃろう」
確かにこの青年の言う通りである。「ううむ」と頷く者もいた。日光街道の茶店それぞれの儲けの道が、備えあれば憂い無しという自譲の心田を開発するのである。しかし全ての旅人がそれで納得するのであろうか。
「先生、それでは恨みをもつ者も出てきはしませんか」
「村内と違って、旅人相手の商いであるから、恨みを溜めるということはなかろう。だが、恨みをもった旅人は、帰りには必ず峠の下で草鞋を購い、この茶屋で白湯一杯、饅頭一つ求めようはしないであろう」
「ならば、やはり二文で売りますか」
「同じ草鞋が同じ二文というのは確かに天道に適っておる。しかしそれでは人の心田を開発することはできはしない。この茶屋の歩むべき人道を考えるべきであろう」
老人は、懐中から帳面を取り出し腰から矢立を抜き取ると、「おこまりの方、おとり下さい」と書きつけて、その一葉を丁寧に引き抜いて、亭主を呼んだ。
「今日から、五文の値札の代りにこの札を貼りなさい。そして持ち去られた草鞋の数を覚えておきなさい。わしらは、月末にまた立ち寄るから、その時までに店の稼ぎが増えていなければ、草鞋の代金を一足五文で払うことにいたそう」
青年は、顔の前で手を幾度も打ち鳴らすと、諸手を上げて、「そうじゃきに、そうじゃきに」と嬉しそうに叫ぶのであった。そして「直きをもってうらみに報い、徳をもって徳に報いる」という論語の一節を唱え出すのであった。

「わしゃあ、足りない頭で、経世済民のことを考ちょるが、今、経世済民のために何をしたらいいかが分かったような気がしちょる。爺さん、おおきに」
青年は、深々と頭を下げた。
老人も、礼儀知らずで正直で底知れぬ発想力を持つこの若侍のことが気に入っていた。
「ところで、お侍さんは、どちらまで」
「わしゃあ、日光の方に、無利子で金を貸す御大尽がおると聞いて、金を借りに行こうと思うちょる」
「それは奇遇だ……」と、取り巻きの一人が切り出そうとするのを制して、老人が青年に話しかけた。
「その金で何をするおつもりで」
「わしゃあ、黒船を一隻手に入れたいと思っちょる」
思いがけない答えに、若者たちがどよめいた。しかしそれが決して口から出任せでないことは、これまでの青年の言動からも明らかである。
「それで、お侍さんは、黒船を手に入れることが、経世済民につながるとお考えかな」
「今の爺さんのやり方を見て、ますますそう思っちょる」
「ならば、一度、旗本の勝麟太郎という御仁を訪ねて御覧なさい」
「先生、もうそろそろ。日暮れには、陣屋に着かねばなりますまい」
奇妙な一群と珍妙な若侍は、あらためて深々と礼を交わすと、右左に別れて、峠の坂を下って行く。いつの間にか雨が降りしきり、雨音と共に涼やかなにおいが立ちこめてきた。

八

小半月もして、氷川の海舟のもとに巌本善治から月刊誌「日本宗教」の校正刷りが届いた。読み終えた海舟はこう呟いた。

「巌本もなかなかのジャーナリストに育ってきたわィ。魚のアラでも突く時のように、よくもマァ、ワシの話からもっともらしいところだけを載せたものサ。でも実は、捨てたところが肝心なんデェ。もしかしてというところや、ひょっとしてと感じたところが、実は、ワシら維新を生きた志士の骨、志だったのサ」

やはり、これからも自分が歴史の筋書きを書いてきたように振る舞うほかはないだろう。いずれにせよ公器を気取ったジャーナリズムは、自分の言動を、つまみ食いして報道するだけなのだから。

写しを渡した「先哲の書を見る詞」という自作の文章もまた、

「……皆不撓の精神をもって、その道を自得し、有為の学者たるに恥じず、我が殊に賞らいする数輩、今にしてその人見るべからず……」

と、一字一句、末尾に記載されてはいた。

「……嶽山、南洲、甲東、象山、孝允、小楠、山陽、斉彬」そして口頭で（まだ二人ほどあるつもりだ……）と伝えた思いもまた、言葉の通り記載されていたのであった。

「まだ二人ほどあるつもりだ」と。

東洋のマタ・ハリ　偶感

――男装の麗人、川島芳子の虚と実――

曽根　竣作

(一)

一九四八年（昭和二十三年）三月二十五日、中国は北京郊外のまだ肌寒い早暁、第一監獄の刑場で、一発の銃声が鳴った。

〝東洋のマタ・ハリ〟として一世を風靡（？）した川島芳子が、漢奸罪（国に叛いた売国奴）として当時の中国国民党により銃殺刑に処せられた一瞬である。享年四十歳。

川島芳子は日本名であり、正確には愛新覚羅顕玗、またの名を金璧輝と言い清朝末期の粛親王の第十四王女である。

一九一一年（明治四十四年）孫文らによる辛亥革命が起こり、二九六年続いた清王朝は滅亡の途を辿ることになる。そして王朝の宣統帝（のちの満州国皇帝の溥儀）は当然退位を余儀なくされた。

粛親王は、廃位された宣統帝の父醇親王の従弟に当たるが、清朝滅亡と共に北京より旅順に

一家を連れて亡命する。その後、粛親王の第十四王女である顯玕は、実父と義兄弟の契りを結んだといわれる日本の川島浪速(1)のもとへ養女として送られ、育てられた。

川島芳子と名づけられた顯玕は、日本の学校に通いながら、浪速の下で成長して行くが、一九二二年（大正十一年）に実父の粛親王が没すると、亡父の念願であった清朝復辟を志すようになる。辟は天子を意味し、復辟とは退位した君主が再び位につくことを指す。

粛親王は孫文らの辛亥革命によって滅びた清朝を再興することを切に望んでいたというが、ここに、満蒙に独立国を作って、日本の最前線の保護国としようとする帝国主義ニッポンの満蒙開拓運動が微妙に絡んで来る。

この運動の陰の指導者またはボスであった川島浪速と共に、中国と日本を行き来するうち、川島芳子は日本軍部、特に関東軍との関係を深め、時にその活動に暗躍されたといわれている。ただし、その実際の間諜としての活動がどの程度であったのか、今にしても謎めいた点が多く、マスコミによる可成りの誇張があったことは否めない。その虚実について若干の推測を加えてみたい。

なお、マタ・ハリというのは第一次世界大戦のころ、ドイツの間諜としてその妖艶な姿態と美貌を武器に、フランスやイギリスの政府高官を誘惑し可成りの情報を聞き出したとされている。もともとはジャワの踊り子で、本名はMargarete Gertrud Zelle, 国籍不明、フランスで捕えられ処刑された。享年四十一歳、川島芳子とほぼ同年齢の死亡である。マタ・ハリはジャワ語で「暁の星」の意。

(二)

川島芳子は、一九〇七年（明治四十年）北京の東交民巷で生れ船板胡同で育っている。一九一五年（大正四年）四歳の時川島浪速の養女として来日し、豊島師範附属小学校に入学する。その後、跡見高等女学校を経て川島浪速の転居に伴い、松本高等女学校へ聴講生として転校するが、その成長期の評判は必ずしも芳しくない。



自分の軍服姿によくサインした

ひと言で言えば、才能溢れ血すじも良く美貌であったが、お転婆にして目立ちたがり屋であったという。松本高女時代は、派手ないでたちで馬に乗って通学したりしたようだ。

養父の川島浪速という人は、いわゆる大陸浪人の親玉のような人物で、第一次、第二次満蒙開拓の運動を企図しいずれも頓挫するが、懲りないで国粋主義を貫いた根っからの右翼である。赤羽にあった

私邸にはよく陸軍士官学校の生徒が集まったらしく、また義兄弟であった粛親王の遺児の何人かを預かって、士官学校や早稲田大学に学ばせている。

養父の教育は、相当に厳しかったようだが、川島芳子の持って生れた血統についてのプライドは覆いようも無く、一般の日本人とはかけはなれた奇矯の振る舞いが多かったという。

一九二五年（大正十四年）の秋頃、松本歩兵連隊の山家亨中尉と恋愛騒動を起こすが、山家中尉の「自分には全くその気はない」のひと言で終幕、その後断髪し男装へと走る。

芳子の断髪、男装への移行には一つに失恋、二つ目に無駄な恋愛騒動の回避、三つ目に自らの理想遂行（清朝復辟）のための方策という理由があったということである。

ただ、いま一つの理由として川島浪速による近親相姦の可能性を上げる風聞もあるが、この点は芳子の名誉のため伏せておきたい。

兎に角、彼女が二十歳までの成長期の環境は、いわゆる大陸浪人の壮士風の男たちの出入りが多く、時には陸軍士官学校の予科生徒らのアジトであったりして、相当に索漠としたものであったようである。

(三)

「昭和史の根底には〝赤い夕陽の満州〟があった」とは、昭和史研究家の半藤一利氏が「昭和史」の序章でいみじくも喝破したことばである。また更に「昭和がダメになったスタートの満州事変」とも決めつけている。

明治維新以降四十数年に亘る国民の努力により、日本もようやく近代国家の体(てい)をなして来たが、内部的にはまだまだ脆弱な面が多く、欧米列強に伍するにはなお隔たりがあった。

その間、一八九四、九五年（明治二十七年、二十八年）アジアの〝眠れる獅子〟といわれた清国との戦争（日清戦争）に勝ち、さらに一九〇四、〇五年（明治三十七年、三十八年）、当時世界の五大強国の一つといわれていた帝政ロシアと戦争（日露戦争）をして局地戦ながらかろうじて勝つことができた。そして世界の国々から、アジアに日本という立派な国があることを認めてもらえたのである。

しかしながら、この辺りから日本の歴史は微妙な屈曲を始めてゆく。

その原因は、旅順、大連等を主都市とする関東州(かんとうしゅう)、つまり遼東半島の諸権益を自由にすることができたため、これを足がかりに「満州」への侵攻とその一方的な経論に乗り出すことになったからである。

ところで「関東州」の関東とは正式には、中国の山海関から東の地方を指し、奉天・吉林・黒龍江三省の総称である。すなわち「満州」全体の別称で、のちに「泣く子も黙る」と言われた日本陸軍の関東軍は戦闘集団としてこの地に蟠踞することになる(2)。当初は、鉄道守備兵を口実に一万五千名程度であったが、第二次世界大戦の末期には何と七十五万名にまで膨張したという。

(四)

帝政ロシアの南下を抑える防波堤として、関東軍は満州を国防の第一線に位置づけ、ここに傀

儡政権を樹立せんとあらゆる方策を試みる。

一九三一年（昭和六年）の満州事変、そして翌年一月の上海事変、同年三月の満州国建国宣言と続いてゆく。

川島芳子が、マス・メディアに華々しく（？）登場しはじめるのはこの頃である。もっとも大正の後半から昭和の初めにかけて、芳子は養父の川島浪速に随伴して中国と日本を往来し、その名声は清朝の王女というパスポートも手伝って、巷間をさわがしていたという。

更に、この傾向に拍車をかけたのが一九三二年（昭和七年）、村松梢風の『婦人公論』に連載された「男装の麗人」である。

「男装の麗人」を執筆するに当たって、梢風は上海公使館付武官補佐官の陸軍少佐田中隆吉（後述）のすすめにより、川島芳子の上海の私邸に二年余り滞在して取材したという。

昭和八年、「男装の麗人」は単行本としてベストセラーになるが、梢風はこの小説はあくまでフィクションであるとはっきり告白している。小説の中に登場するヒロインの満里子は、当然芳子がモデルであり、女スパイとして様々の活動をするシーンが描写されている。ただ梢風は、満里子の行動は、「国民党と戦うための日本への協力」、または「私が日本のために働く時は、日本と利害が一致する時です、満里子はいつでも日本のスパイだと思われちゃ困りますよ」と云わせているが、案外この辺りが川島芳子の本音であったかも知れない。

ひるがえって、当時の日本の国情を見ると、第一次世界大戦時の好景気も束の間にして過ぎ、関東大震災、一九二八年（昭和三年）のウォール街の株価大暴落と相次ぎ、国内の一般大衆の間では大正ロマンを引きずりながらも大きな閉塞感があったことは否めない。

こういう時には、大衆は日常の話題の俎上にのせる〝華〟を慾しがるものである。そこにマス・メディアに登場して来た川島芳子の存在が、大きく喧伝されたのではなかろうか。

(五)

川島芳子は、一九二七年（昭和二年）十一月旅順の「ヤマトホテル」で、養父浪速のすすめにより蒙古王族のカンジュルジャップ(3)と結婚する。数年はモンゴルや大連で主婦として生活し、メディアを騒がせる事も殆んどなかった。一九三〇年（昭和五年）、芳子は義姉との不仲を一つの理由としてカンジュルジャップのもとを離れることになる。

そして、川島芳子が本格的に女スパイとして暗躍させられる動機となった、或る人物との出会いが待っていたのである。

前述の田中隆吉少佐である。一九三〇年（昭和五年）の秋、芳子は上海公使館付武官補佐官として赴任したばかりの田中隆吉と出会う。戦後三十年も過ぎた昭和五十四年に自費出版された「波乱多き上海時代と川島芳子女史」『田中隆吉著作集』によると、上海での田中の職務は諜報活動であり、満州事変直後、欧米列強の目が中国に注がれているということもあって「極めて重要なもの」だったという。

芳子と田中は、後々男女関係にまで発展したようだが、特に田中の方はずっと芳子に愛憎半ばする感情を抱くことになる。

田中によれば、芳子の清朝王女としての自負の強さを見込んで、彼がスパイとして「仕立てあ

げ」、一九三二年（昭和七年）一月の上海事変の引き金も二人共謀して引いたということになっている。

満州事変後二ヶ月ほどして先の宣統帝溥儀は、天津を脱出して満州へ向かうが(4)、関東軍の高級参謀板垣征四郎（当時大佐）らによって天津に残っている皇后婉容の脱出が計画された。板垣は満州事変後さまざまな謀略に携わったとして、戦後A級戦犯となり絞首刑に処せられた人物だが、芳子が後に関わったとされる上海事変のきっかけ作りを田中隆吉に示唆、命令したのも板垣であった。

婉容の脱出については、同じ満州族（女真族ともいう）の王族女性であったことから、軍にとっては適任と映ったのであろう。ここに芳子が配されることになった。芳子の運転による皇后の脱出劇は、前述の「男装の麗人」でれいれいしく採り上げられているが、芳子は大勢の随員の中の一人に過ぎず、車も芳子の運転ではなかったという説もある。

(六)

一九三二年（昭和七年）一月の上海事変は、欧米列強の視線を満州国から逸らすための謀略であったことはまちがいない。

川島芳子は、前年十一月の皇后婉容の天津脱出に関わったあと、すぐに大連から上海に戻ったはずである。上海事変の勃発に、田中隆吉と共に関与したと思われるからである。

ただし現在のところ、芳子が上海事変に関与した証拠となるものは、田中の証言のみである。

田中は一九二二年（大正十一年）に陸軍大学校卒業後、東京は三宅坂の参謀本部に所属し、一九三〇年（昭和五年）三十七歳のときに上海公使館付武官補佐官として着任して二十三歳の芳子と出会うこととなる。

また田中隆吉は、太平洋戦争後の東京裁判では、身内であったはずの関東軍の上官たちを検察側の証人として糾弾して注目された人物でもある。

田中の証言によれば、芳子を通じて抗日運動の拠点であった三友実業公司の労働者に日蓮宗の僧侶を襲わせるように働きかけ、今度はそのあと、芳子に再び上海在住日本人の支那義勇軍に三友実業公司を襲わせるよう指示もしている。

ともあれ、何か騒動を起こして、出兵の口実を捏造したかったのであろう。田中によると、芳子は「一人前のスパイに仕立てあげることに全力をそそいだ結果、この計画は見事に成功し（中略）第一次上海事件を中心として男まさりの活躍を行った」と証言しているが、そのスパイ活動が実質的にどの程度のものであったかは今も多くの謎を秘めている。

当時上海で田中、芳子と接触のあった前述の村松梢風は、芳子のとってくる「川島情報」は三宅坂の参謀本部に飛び込む花形電報とされていたが、実際は「眉唾もの」が多く「単純な軍人達がだまされた」とも指摘している。田中が芳子に「だまされた」のか、田中が戦後の回想録をいくらか脚色したのか、そのどちらにせよ可能性は充分考えられる。

こうして上海事変は起こされ、列強の目が上海に釘付けになっている内に、一九三二年（昭和七年）三月満州国は曲りなりにも建国されるが、これこそが関東軍の狙いであった。

(七)

川島芳子が、このあと関東軍へ協力したといわれるのが「熱河作戦」である。

熱河省は、奉天省（遼寧省）と華北省との中間に位置し、満蒙の蒙の側に属する地域であった。が、政治的には満州国東三省に加えて東四省に数えられる重要な地域である。

関東軍としては、一九三三年（昭和八年）の二月十七日に、「熱河省をして名実共に満州国の領域たらしめ……建国の基礎を確立する」として熱河作戦を開始した。

迎え撃つ熱河省では、省長の湯玉麟が張学良と結んで反満抗日を鮮明にしていた。満州族出身の川島芳子の参戦は、具体的にどの程度の成果があったか分からないが、関東軍にとって格好のプロパガンダの材料となったことは容易に想像できる。

同年二月十八日の日本内地でのラジオ放送では、陸軍大佐佐藤庸也が芳子を「討伐軍に輝くジャンヌ・ダルク」と激賞し、「しはしば男装して兵火のちまたに出没し、或はホロンバイルの蘇炳文説得のため[5]、飛行機に乗って北満の天地に飛躍した等真に身命を賭して満州国のために活躍」しているとした。

芳子の参戦のため、定国軍（安国軍ともいう）の「血盟式」が同年二月に奉天のヤマトホテルで開かれた。芳子を女総司令とする約三千名の満人の部隊である。

先の北洋軍閥、張作霖爆殺事件の主謀者であった関東軍の河本大作大佐の義弟にあたる平野零児は、『文芸春秋』の記者として、この血盟式に参加している。平野零児は、その時の様子を文芸春秋社の月刊誌『話』の同年四月号に次の様に寄稿している。

「女総司令川島芳子は、カーキ色の、例の軍服まがひの、小柄で綺麗な、まるで歌劇の兵隊さんのやうな格好をして全軍の先頭に、厳然と立つている」と。

もともと軍装を好んだ川島芳子であるが、この寄稿文を話し半分としても、小柄な身体にフィットした軍装が目に浮かぶ様である。

この定国軍の活動について芳子は、「二回まで弾丸飛雨の戦場に立ちました」と語っているが、実際にどの程度の数の兵を指揮下においたのか、どうやってその指揮をとったのか、ほとんど判っておらず、芳子も「熱河省の隅々を駆け廻った」と言いながら、「僕が働いたより以上の宣伝が行われているので、全く面はゆい次第です」とも述べている。

ただ、芳子が熱河作戦において、定国軍を組織したこと、そして幾度びか戦場に立ったことは確かな事実であろう。

(八)

定国軍を組織した当時、川島芳子と密接な関係を持っていたのが、満州国軍政部最高顧問を勤めていた多田駿（はやお）少将である。前述の平野零児の筆によれば、「彼女の監督者であり、指導者であり、好き小父（よ）さんである多田少将の居室は、彼女にとっては女総司令の公室であり、私室でもあった」ということになる。

多田少将は、統治は「威服でなく悦服」をもってするべきと日頃から説くような、関東軍の中

でも異色の人材であった。多田はその後も重要なポストを歴任してゆくが、芳子にとっては単なる理解者である以上に、慕わしい小父さんとして、一時的にしろ、よき庇護者であったのではなかろうか。

また、よき庇護者は当然、潤沢な資金や小遣いを与えてくれる金づるでもあった。多田だけでなく芳子は田中隆吉、河本大作、はたまた土肥原賢二[6]など関東軍軍人から、「特務費用」として金を引き出していたことは事実のようだ。芳子はダンスホール通いも多く、生活も派手であったため、その「特務費用」でこれを補わざるを得なかったのであろう。

ただし、一部の噂さのように芳子の男性遍歴が、「お小遣い」をもらっていた「小父さん達」とことごとく男女関係があったと思うのも疑問である。ともかく芳子は、清朝復辟がすでに遥かなまぼろしとなりつつあったとき、それまでの関東軍との行きがかりもあり、処世術として軍人や資金を持った男達を利用するという手段を選んだにほかならない。

スパイというものは、いつでも利用価値が無くなって来たときは、情容赦なく使い捨てにされるものである。関東軍においても、そろそろ川島芳子をもて余し気味となり、のちに多田よる芳子暗殺の指令もひそかに出されていたようである。（未実現）

(九)

お隣りの中国においては、昔も今も金壁輝（川島芳子の中国名）というと、語るのも汚らわしい存在である。日本のマス・メディアにあっては何故あそこまでクローズ・アップされたのであろうか。

先ずはじめに、当時日本の大国策であった満蒙開拓、満州国建設のうねりの中で、芳子が軍に躍らされつつも暗躍したという事実、第二に清朝末期の王女として、小柄ながら才気と美貌を兼ね具えていたこと、そして第三には滅亡した国の王女は祖国を持たず、デラシネ（根なし草）的悲劇を背負っていたということであろう。

前述したように、国内は丁度大正ロマンからまだ覚めやらず、庶民はうっ屈感のなかに暮らしており、悲劇のヒロインの登場を何故か待ち望んでいたとも思われる。

筆者がまだ中学校の下学年のころ（昭和十四年辺り）、六歳年上の姉から、「東洋のマタ・ハリを知っているか」と尋ねられ、返事に窮していると、「随分遅れているね」と軽蔑のまなこを注がれた思い出がある。

川島芳子を描いた小説は、一九二九年（昭和四年）に『講談倶楽部』に掲載された朝名輝「男装の王女」と一九三二年（昭和七年）九月から翌年の六月まで九ヶ月に亘って『婦人公論』に連載された前述の村松梢風「男装の麗人」の二つがある。

決定的なヒットとなり、ベスト・セラーにまでなったのは後者であり、先述の平野零児により主題歌さえ作られている。

（一）横ちよ冠りのハンティング
　　乗馬ズボンがよく似合う
　　しやれた姿も伊達じゃない

見せてやらうか胸の傷
乳房の下の弾の痕
（繰り返し）僕にや言はれぬ事がある
満里子は一遍死んで来た

（二）大和魂身に受けて
愛親覚羅の血に燃ゆる
夢を破つて奥深く
蒙古王者の御后
なってもみたがそれも仇

（三）女心を戎衣にかくし
十九路軍の陣営に
忍び姿も伊達じやない
十字砲火を受け抜けて
帰りやダンスのジヤズの中

満里子というのは小説の中のヒロインで、当然川島芳子がモデルである。決して上手な歌詞ではないが、七五調でその頃の芳子ブームを想像させるには充分な主題歌である。

なお映画では、やはり川島芳子をモデルにして入江たか子主演、溝口健二監督の『満蒙建国の黎明』が作られた。しかしプロット（筋立て）の欠陥に致命的なものがあるということで不評であった。フィルムも現存しない。

舞台の方では、第二次芸術座の水谷八重子が主演して、「男装の麗人」が公演され、水谷は川島芳子に扮して可成りの当たりを取ったといわれている。

(十)

一九三七年（昭和十二年）七月七日に始まった日中戦争は、年を追うごとに泥沼化してゆく。この当時、国際諜報団として東京を根城に活躍したのが、リヒャルト・ゾルゲと尾崎秀実であった。そして上海でこの二人を結びつけたのがアメリカの女ジャーナリストのアグネス・スメドレーである。

ゾルゲと尾崎は、一九四一年（昭和十六年）に逮捕され、終戦の前年の十一月に処刑、スメドレーもまた戦後間もなくアメリカで客死している。

一説によると、スパイは人類の歴史で二番目に古い職業だといわれるが、情報収集こそ人間の性であり、それには常にスリルとリスクが伴う。そして最後は、諜報活動に生きる者の常とはいえ、加担した味方（国家と言ってもよい）から捨て去られて行く虚しさが残るだけである。

川島芳子と、ゾルゲや尾崎、はたまたスメドレーを比較することは、その持つイデオロギーの確かさという点で大きな懸隔があるが、その夢と限界への挑戦、そして挫折という図式は、かの

ドン・キホーテの運命を想起させる点で相似ていると言えよう。

川島芳子の虚と実については、いくつかの文献をたどった結果、「虚」六に対し「実」四ぐらいが妥当な線であろうかと愚考している。

この春（平成二十年三月）、『文春新書』で出版されたシンガーソングライターの寺尾紗穂著「評伝　川島芳子」の〝あとがき〟に寺尾は次のように述べている。

「彼女は思想家でも作家でもない。その上その活動はスパイというにはあまりに中途半端で一時的であって、彼女の一生は無意味な暴走に終っていると評する人もいる。しかし、日本がアジアに触手をのばし、禍根を残した歴史の中で、彼女が抱えこんだ中国と日本の問題や、それに苦悩した軌跡は決して無意味なものでない。『東アジア共同体』なるものが何気なく語られ始めた今日、『大東亜共栄圏』の時代を生きた芳子の複雑な生と彼女が残した声とが示唆するものは依然として多い。」

寺尾紗穂は、約十年に亘って川島芳子の文献や書翰を渉猟した挙句、本書を上梓されたようで、この稿を書くに当たって大いに参考にさせて貰ったが、この〝あとがき〟には全く同感である。

「王道楽土」「五族協和」、はたまた「八紘一宇」などのスローガンは何であったのか。

現代に生きる歴史家たちは、そのすべてに完全否定の立場をとっているが、筆者は必ずしもそうは思わない。

たとえかの太平洋戦争を触発し、屍山血河の果てに敗戦となったことには、当時の施政者や軍部指導者に釈明のできない責任があることは当然である。しかしながら、南下してくるロシアの脅威、狭い島国日本における人口飽和、農村の疲弊、世界的経済不況などなど考えると、満州に

国防の第一線としての橋頭堡を作らんとした国策は、あながち否定ばかりされるものではない。

結果によってのみ歴史は判断してはならない。その時にはその時の必然があったと解釈したい。

川島芳子は、日中のはざまにあってその必然に埋没されつつも、ひとりの人間の矜持を維持せんとして、懸命に駆け抜けた生涯であったのであろう。

今日（こんにち）でも松本市に「川島芳子記念室設立実行委員会」があり、芳子の命日前後にはシンポジウムが開催されていると聞く。

最後に、常々和歌に親しんでいたという芳子の獄中詠を記して結びとしたい。

○ほゝゑみて去らんとすれど哀れ哉たゞ我が民の後がみひく

○いさかひは浮世の常ぞ正しくばほゝゑみて行け我は父の児

注(1)　川島浪速は明治三十四年、警察官教育のための北京警務学堂の総監についており後に清朝の政治顧問として雇用される。肅親王とのつながりはその頃深まったと見てよい。

注(2)　関東軍は、独立の戦闘集団として急速に勢力を拡大してゆくが、中央の参謀本部の言うことを聞かず絶えず暴走し、統帥権干犯（とうすいけんかんぱん）とまで言われたが処分されたものは居ない。特に昭和十四年の「ノモンハン事件」の折には、敵であるソ蒙兵力を過少評価して大敗を喫した。当時の参謀が悪名高い服部卓四郎と辻政信である。

注(3)　カンジュルジャップは、蒙古王パブジャップの次男で日本の陸軍士官学校を卒業している。

注(4)　溥儀の天津からの脱出に当たっては、甘粕正彦がその誘導を手伝ったという。甘粕は、関東大震災直後無政府主義者の大杉栄や伊藤野枝を憲兵大尉として虐殺した。刑期三年を終えて満州に雄飛、その裏面史で活躍し「満映」の理事長もつとめた。

注(5) ホロンバイル事件は、蘇炳文が自らの邸宅を日本軍に強制接収されかけたのをきっかけに一九三二年（昭和七年）九月、反満抗日の立場からホロンバイルで邦人を監禁しホロンバイル独立を宣言した事件。

注(6) 土肥原賢二は陸軍大将（当時少将）、一九三六年華北の独立を画策するなど満州・中国作戦に活躍したが、太平洋戦争終結後東京裁判で絞首刑となる（一八八三～一九四八）。現在、女流歌人として活躍している佐伯裕子はその孫に当たる。

参考文献

上坂冬子著『男装の麗人・川島芳子伝』（文芸春秋）
寺尾紗穂著『評伝　川島芳子―男装のエトランゼ』（文春新書）
太田尚樹著「赤い諜報員」（講談社）
半藤一利著「ノモンハンの夏」（文春文庫）
太田尚樹著「満州裏史―甘粕正彦と岸信介」（講談社）
保阪正康著「あの戦争は何だったのか」（新潮新書）
太平洋戦争研究会著「図説満州帝国」（河出書房新社）

掌編小説

小さなスポットライト

亜木　陽一

ノリノリ・グラジ

わしの好きな花はグラジオラスだ。
まず色が綺麗、赤・白・紫・黄・ピンク。
それぞれが、下から順に次々咲いて行くので、無駄がない。
庭の隅の畑に植えてある。
わしは、市のカルチャーセンターで、ハーモニカを習い始めた。
音譜の読めないわしでも、数字の音譜と聞いて、習うことにした。
1・2・3（ド・レ・ミ）から始めて、『故郷（ふるさと）』という懐かしい曲に入った。
孫達が聴いている今の音楽には、どうも異質なものを感じる。
小さい頃、兄貴が吹いていたハーモニカの曲を、思い出す。
畑でハーモニカを練習している時は、

咲いているグラジオラスが、
お客さんだ。
わしの下手なハーモニカの音に、大きな口を開けて笑っている。
このステージに見える畑は、わしが以前からさまざまな野菜や花を育てて来たので、自分の子供みたいな、愛着がある。
婆さんは元気だが、華やかなグラジオラスは恋人だ。
いつものように、譜面台と椅子を持ち出して、グラジオラスにハーモニカを聴かせてやる、それがわしの唯一の楽しみだ。
今日の練習は、とても調子がいい。
間違いなく吹けた。
いつの間にか、暗譜ができた。
やれやれ。
夕日が落ちて薄暗くなって来たが、気分が乗ってもう一度繰り返し吹いてみた。
「ヨウ、十八番！」
声がかかった。
周りには誰もいない。
グラジオラスの花が微笑んでいるばかり。

「わし」と「わたし」

向日葵の咲く夏、「わたし」はドッグショップから「わし」の家に来た。
それから一年、すっかり慣れた。
血統書付きアメリカン・コッカー・スパニエル、一年六カ月メス。優雅な長い耳は唯一の自慢だが、夏は暑い。
主人は、自分のことを「わし」と呼んでいる老人。
食事の世話をしてくれるのは、大きい向日葵のポケットが付いたエプロンが、よく似合うお婆さん（「わし」の奥さん）。
時々そのポケットから、「わたし」の大好きなチョコレートが出て来る。「わし」はテラスでハーモニカを吹き始めた。今、ハーモニカの初級に挑戦している。
それは単音で吹くところと、三度奏法といって三つの音を1（ド）2（レ）3（ミ）と吹いたり、2（レ）3（ミ）4（ファ）と吸ったりする。二つの音が平均に出ないといけないので、大変だ。
歌うのが好きな「わたし」は、ハーモニカの音がすると、
「ワォン、ワォン」
今日も飛んで行く。

「わし」が吹く、「わたし」が歌う。
共演だ。
「わたし」は二本の前足を揃えてきちんと坐り、首を伸ばし顎を上げ、お腹から思い切り声を出した。
「ワォーン、ワォーン、ワワ、ワワワワーン」
「わし」のハーモニカは、同じところを何回も何回も繰り返し繰り返し吹いて、ちっとも先へ進まない。
お婆さんが「わたし」を見て、
「お前の方がずーっと上手だね」
向日葵のように、明るく笑った。

餡パン

九月になっても暑さが続く。
近くに住んでいる次男がある日曜日、暑い暑いと言いながら、飛び込んで来た。
婆さんが、暑いからお前の家に沢山(たくさん)ある赤いカンナの花まだ咲いているかい、と聞いた。
ああ、今も盛りで燃えているようだ。
わしと婆さんは小柄だが、次男は百八十三センチの大男。
持って来た赤とブルーの大きな花柄の水着に着替えた。
わしと婆さんは、派手だねェと驚嘆。
次男は、暑いから犬も一緒に川へ連れて行ってやろう。
犬のイアちゃんは、長い耳からそう名付けられたアメリカン・コッカー・スパニエル、メス犬。
日曜なので、川は人でいっぱい。
それでも水に入ってしばらく遊んだ。
帰り道、飲み物と子供の頃から大好きな大きな餡パンを五つ買う。
お腹の空いた次男は、ムシャムシャと二つ食べた。
二つはわし夫婦、一つは犬。
イアちゃんは餡パンをパクッと口に銜え、トコトコと歩いて行く。

しばらく歩くと、坐って餡パンを地面に置く。
息があがってハアハアハア。
少し休むと又、しっかり銜えて歩く。
四回程繰り返して、わしの家に着いた。
次男は、俺は餡パンをすぐ食っちゃったけど、イアちゃんは家までしっかり銜えて来たよ。
偉いなあ。
犬はパンを下に置いて、お坐りをしている。
わしが水をやりながらお上がりと言うと、おいしそうに食べ始めた。
お利口さんと頭を撫でてやると、耳の先の方がぐっしょり濡れていた。
お行儀の良さにすっかり感心した次男は、しばらくイアちゃん貸してよ、子供の躾にいいから。
婆さんが、カンナの咲いている家に行っておいで。
イアちゃんは、喜んで次男に付いて行った。
手を振ると、シッポフリフリ振り返りながら、小さい姿がだんだん見えなくなった。

Who is he?

郵便屋さんが通った。
わしが急いでポストを見に行き覗いてみると、婆さんへの手紙があった。
「手紙が来てるよ」
写真在中と書いてあるので、縁側に呼んだ。
婆さんが慎重に鋏で封を開けた。
この前の同窓会の写真！
どれどれ。
全員で写した写真、おや、お前は写っていないね。
女だけの写真、何人かのグループで写した写真、婆さんは見当らない。
もう一枚の写真。
二人の男の先生が写っている。
年取った男の先生と、小柄なおじいさん先生、紺のパンツに短かめの髪にして眉毛を少し濃く描いている。
髪は染めていない。
婆さんがちっともいないので、この小柄な方の先生はだれ？

聞いてみた。
「いやねェー、おじいさん先生じゃないわよ、私よ。この前デパートに一緒に行って買ったパンツスーツ着てるでしょ」
そう言えば、男にしては……。
眼鏡を掛け直してよくよく見る、小さい方のおじいさん先生は、なあんだ、うちの婆さんだった。
風が吹いて庭の柿の花がホロホロ散った。

ポルトガル語

ある日、いつも聴いている『誰でもわかるラジオの英会話』の前の番組は、一体何を放送しているのかな、少し早めにスイッチを入れてみた。聞いたことのないような、美しい言葉が流れて来た。
耳ざとい婆さんがいち早く、
「随分綺麗な英語だねェ」
「英語？ちょっと違うよ。あまり聞いたことがないから、もしかしたらポルトガル語じゃないかな」
「へェー、ポルトガル語！　あれ？　今、トゥモーローって言ったよ。私の好きな曲と同じだねェ」
続いてアナウンサーが、
「『楽しいみんなの英語のニュース』を終わります」
やれやれ、
「あんまり頼りにならないねェ、おじいさんの英語」
婆さんはつまらなさそうに出て行った。

いい湯だな

何時も恐怖の坂は御免だわ、坂上にある次男の家にはめったに行かない婆さんが、胸にスイートピーの花のTシャツを着て、次男の所に見せに行った。

長男の嫁さんがピンクのスイートピーの大きな花束を作り、緑のリボンで結び、長男が写真に写した。

出来上りが思いがけなくうまくいったので、長男の嫁さんがこの花の写真をプリントにしたTシャツを二枚作って、婆さんがスイートピーの花が大好きなので、是非着て見てくださいと東京から送って来た。

久し振りに坂道を登り、婆さんが玄関でハアハア言っていると、次男の嫁さんとイアちゃんが飛び出して来た。

Tシャツを指さして、

「お婆ちゃん素敵！」

「そうだ、イアちゃんの写真もあったらTシャツにするといいわ」

「アラ、お婆ちゃん、この間パパが写したイアちゃんの傑作中の傑作がありますわ」

次男の嫁さんが奥から写真を持って来た。

「これこれ、見てください。風呂好きのイアちゃんを写した傑作。皆がお休みで家に居る時、

『お風呂が湧きましたよッ』と私が声を掛けると、イアちゃんが一番先にお風呂場に飛び込んで湯舟に入るので、待ち構えていたパパが『パチリ』」

犬が浴槽の縁に前足を掛けて立ち、次男がおしぼりタオルを畳んで頭に乗せてやると、いい気持ちでうっとりしているユーモラスな写真だ。

婆さんが、

「Tシャツにしたら私も欲しいな」

次男の嫁さんは、

「お婆ちゃん、我が家のユニホームにしましょうよ。子どものTシャツも作って」

「大賛成！」

技

わしは今、小中学生の孫達と一緒に英語や社会科を一からやり直し、勉強している。
わしの好きなもの、それはちびた鉛筆や消しゴム。
大好きというより宝物と言える。
物のない時代に育ったせいか、短かくなった鉛筆や丸く小さくなった消しゴムは愛着があって仲々捨てられない。
最近ではカドだけで作った消しゴムを売っているというので、そのうち買って使ってみたい。

こうして自宅の大きな机で勉強している時、わしはよく消しゴムを床に落とす。
しかし、その落下して行く消しゴムが床につく前に素早くつかむことができる。

消しゴムが床に落ちた場合でも、ワンバウンドした時に必ずつかむ。

消しゴムや鉛筆は勿論、机や食卓のテーブルから箸・匙・電気・ガス・水道御使用量のお知らせ用紙・時にはミニトマトや芋の煮転がし等々、床に落とさない事がわしの得意とする所。
これは近くに住んでいる孫達の間でも評判で、わしのことをみんなで〝サーカスじいさん〟と

呼んだりしている。

落ちて行く消しゴムをつかむことに全勝街道を突走っているわしが、丸く小さくなった消しゴムを落としそうになった。
大きな机の上をコロコロころがって行く。
御茶の子さいさい、甘くみていた。
わしのうしろの書棚にめずらしく何かの本を捜しに来ていた婆さんが、いきなりわしの坐っている左側にガバッと倒れ込んだ。

びっくりしていると、
「おじいさん、これ」
左手をついて倒れていた婆さんが、右手を高く上げてわしの前でパッと開いた。

ワンバウンドした可愛い消しゴムを見事にキャッチ。
〝サーカス婆さんよ〟
事もなげに言った。
その間わずかに五・六秒。

権兵衛の恋

瀧澤　中

1

昭和十三年。東亜国民新聞記者・田所耕平は、「明治御維新七〇年」という特集記事を書くにあたり、九〇歳になる一人の古老から明治初期の話を聞くことになった。

さて、この東助（とうすけ）めにどんなお話ができるのか、ちょっと不安ではございますが、知っていることならば何でもお話し致しましょう。

明治の時分の話、でございますか。よろしゅうございます。では、少し毛色の変わった軍人さんのことをお話しいたしましょう。事の起こりからしまいまで、おおよそひと月半ほどの出来事でございます。

私はその頃、品川にあるいわゆる「遊廓」で、下男のような仕事をしておりました。ええ、遊びが過ぎて家を勘当され、仕方なしに方々をうろつきまして、ようやっとたどり着いたのが、「箸屋（はしや）」という遊女屋でございます。

品川はその時分、つまり明治の初めの頃でございますな、港町でございましたから、外国の方や政府の偉い方たちの別邸などがあり、吉原とはまた違った、そう、何と申しますか、少し高級感のある店が多うございました。中でもこの箸屋という遊女屋は、べっぴんを揃えていることで知られておりまして、お値段も少々、他の店よりも高いわけでございます。

主人は大志田六浪という、幕府の彰鋒隊の生き残りでしたが、なあに、元をただせば火消し上がりの博徒で、武家の出ではございません。だからでしょうか、武士だったような格好だけはつけたがるお方で、いつも黒羽二重の紋付きに仙台袴という、まるで婚礼の仲人のようないでたちでおられました。歳はたしか、五〇に近かったように思います。

なかなか商才があって、彰鋒隊時代のお知り合いという女衒に大層な代金をはずんでいたお蔭で、いつも連れてくる女子衆は、それはもうきれいどころでございました。

さて。あれは、明治の九年頃のことでございます。

女衒が五人ほど女子衆を連れてきた後、主人の大志田六浪が珍しく昂奮した様子で、「おい、東助。あの女は別にしておけ」と申しました。ああ、なるほど、と合点がいきました。細面で色白の、うつむいた顔がまた憂いを含んで、他の女子とは違う雰囲気でございます。六浪がこのように言うのは、よほど上等のお客にあてがう時です。私は娘を店の中庭に面した仕度部屋に連れて行きました。ここで店のしきたりなど教えるわけですが、飲込みが早く、これはたいそう頭のよい娘だな、とすぐにわかりました。

名前は、そう、トキ、と申しました。越中富山の漁師の娘だそうで。母親はおらず、八人兄弟姉妹の上から三番目で、年は十七歳。父親は病で臥せっておりまして、薬代もままならず、身売

りをしたということでございます。

箸屋に来た翌日のこと。六浪はトキさんにこんな話を致しました。

「お前さん、トキ、というのか」「……」トキさんは黙ってうなずきました。

「ここでは本名は使わねえ。客に本名で呼ばれると情が移る。女郎屋というのは、いっときの愉しみ、戯事を楽しむ場所だ。もしここで働いて父親に金を送り続けたかったら、まず客に情を移さないことを肝に銘じろ」

六浪はさらに、「これは、言うまでもないが」、トキさんを品定めをするように下から上に見上げて、「逃げるなよ」と、凄んだのでございます。トキさんは哀しいような辛いような、そんな顔をしておりました。

2

トキさんは物覚えはよいのですが、貞操観念が強いのか、男女の情交についてはまったくと言ってよいほど拒絶をしておりました。私もだいぶ説得をしたのですが、二〇日ほど経ってついに主人の六浪がしびれをきらし、「帰りたいのなら、金を返せ。なんなら、妹に代わりを務めてもらおうか」とまで言われ、観念したようでございました。

いやでございますねえ、本当に。こういう物言いというのは、六浪が武家の出ではない何よりの証拠でございましょう。

とにかくその日、トキさんは仕度部屋で着替えをして、店に出ることになりました。が、実は

六浪は、そのまま客に出してトキが客を拒んでは元も子もないと、自らの手で最初の引導を渡そうとしたのでございます。

「東助、二階の菊の間に褥を用意しておけ」

六浪は、好色そうな笑みを浮かべておりました。思い出すと、ぞっと致します。

トキさんは中庭に面した仕度部屋で、着替えを致します。私はその折、庭の水やりをしておりましたが、トキさんは庭の椿がとても気に入っていたらしく、あれだけ羞恥心の強い娘が、着替えるその時も椿を眺めていることをよく承知しておりましたものですから、せめてもの心遣いと、トキさんの仕度部屋の方に背を向けたまま手水をまいておりました。

と、なにやら視線を感じたのでございます。はて、何だろうかと辺りを見回しても誰もいない。ふと、見るでもなく顔を上げたところ、斜向かいの二階の窓から、数人の若い男がこちらを眺めているではありませんか。

「あっ」、と目が合った瞬間、ほとんどの男どもは視線を逸らして何事もなかったかのようにしておりましたが、一人だけ、じっと、こちらを見続けている者がおりました。もちろんトキさんが着替えをしている様子を見ていたのでございます。私はすぐにトキさんの支度部屋の障子を締めて差し上げました。

細い路地を隔てて斜向かいにあるのは「村田屋」という宿でございます。当時はよく、海軍さんが仮の宿舎代わりに使っていたようです。

少し経って、表の方で何やら騒いでいる様子。そのうちにドカドカと足音が箸屋の廊下に響き渡り、一人の男がトキさんの仕度部屋に入って参りました。

「君、こっちへ来い」

と、トキさんを手招きしました。先程、最後まで視線をはずさなかった男です。海軍の制服を着ておいでした。その海軍さんがお金を六浪に渡すと、トキさんは諦めたように海軍さんのあとをついていきました。私は六浪に言われて海軍さんを箸屋の二階に案内致しました。そう、六浪がトキさんの操を奪うために用意していた「菊の間」です。

海軍さんは襖を締める際に、ギロリ、と私を見据えました。何かされるのかなと思っていたら、黙って小銭をくれました。その渡し方がやけに丁寧だったのを覚えています。

海軍さんが店をお出になったのは、明け方近くでした。

あとでトキさんに聞きましたところ、こんな様子だったようです。

二階に行った海軍さんとトキさんは、最初何も喋らず、トキさんは下を向いたままで、海軍さんは何か怒ったような顔をしていたそうです。

夕闇がやがて皓々とした月夜に代わり始めた頃、ようやく海軍さんが口を開いて、トキさんの名を尋ねました。いかつい雰囲気のわりに、優しい声だったので、トキさんは少しほっとして、

「かつ丸です」、と名乗ると、「いや、本名が知りたい」と言ったそうです。トキさんは仕方なしに本名を名乗りました。すると、海軍さんは、

「おいは、山本権兵衛ともうす」

と、薩摩弁丸出しで言ったそうです。私に小銭をくれた様子から、遊廓での遊びには慣れていらっしゃると思ったのですが、遊女の実名を聞くというのは随分不粋なことです。金を払い、一夜の快楽を共にする。そして、明け方と共に縁は消えてなくなる。それが遊廓というもので、客

も遊女もその一線を踏み越えることは望んでいないのが普通です。
そのあと、山本さまはトキさんの身の上話を聞き、そして山本さまはアメリカから先日お帰りになったという話しをしたそうです。
そう、山本さまはトキさんと寝ていないのです。
その日からほぼ毎日山本さまがおいでになり、山本さまがいらっしゃらない時には、明らかに海軍関係と思われる方たちがおいでになって、トキさんを指名致します。みなさん山本さまのお知り合いで、トキさんを抱くような者はおらず、たいがいはそこで酒を呑んで寝ているか、トキさんを相手にお喋りをしているか、ということであったようです。

3

さて、そうこうしているうちに、六浪は警戒をし出しました。
「東助、なんであの客はトキに手を出さねえんだ?」
どうやら、トキさんが客と一緒にいても、誰とも寝ていないことがバレておりました。
六浪は、海軍の知り合いに山本さまのことを聞いて歩いたそうです。
山本権兵衛。薩摩の方で、階級こそ「少尉補」と低いのですが、当時日本にはまだ生え抜きの海軍将校というものがほとんどおりませんでしたから、貴重な人材でございましょう。年は二十五歳。西郷南洲や大久保甲東がお生まれになった鹿児島の同じ町内で生まれ、かの大南洲と親しい間柄ということがわかりました。

相手が薩摩の、それも大南洲の知り合いと知って、かつて幕府軍で戦った六浪は、妙な競争心を持ったようです。山本さまよりも先にトキさんを自分のものにするのだと、画策をはじめました。それはもう、ひどいものでした。
トキさんを土蔵に監禁しておいて、打って変わってトキさんに優しく接し、父親に送るよう薬草などを買ってきたりしました。かと思えば、ささいなことで足をひどく叩いたり針を刺します。遊女は身体に傷をつけてはいけないので、顔はもちろんのこと、上半身には絶対に傷付けるような仕打ちは致しません。主に足、それも、足の裏に針を刺したりするのです。そして、刺したあとには、「叮哀相に。痛いか。大丈夫か」といたわるのです。
ある時は優しく、ある時は鬼のように。女たらしの極意を知り尽くした六浪のやり口です。普通はこれで心身ともに疲れ果て、男の言いなりになっていくのですが、トキさんは尋常ではない精神力で、この拷問の時間を耐えました。
六浪は力づくでトキさんを我が物に出来たはずなのに? そこが、素人さんの甘いところです。女は身体と心が別物で、無理やり操を奪っても、トキさんのような聡明な娘はむしろ反発をするものです。さすがに六浪はそのことを知っていて、無理強いをしなかったわけです。と言っても、監禁して飴と鞭をやられる方がよほど辛いかもしれませんが。
トキさんが土蔵に監禁されて六日目のこと。用事で出掛けた帰りがけ、私はいきなり襟首をつかまれて裏路地に引きずり込まれました。山本さまでした。
「トキはどこに行った?」
私は山本さまに子細を申しました。「……で、いまは土蔵の中に」。私が一通りご説明申し上げ

ると、山本さまは、「東助、と言ったな」「へい」「どうすればトキを助けられるのだ」真剣そのものでいらっしゃいました。

私は、落籍せるのが一番確実だけれども、どうせ六浪は吹っ掛けてくるに決まっている、元々幕府軍で戦った男だから、薩摩ご出身の山本さまには、おそらく絶対に譲らないだろう、と、正直に申し上げました。

「だが、このままでは、トキは死んでしまうのではないか」

たしかに、山本さまのおっしゃる通りでした。トキさんは頑なに六浪を拒んでいましたが、私が食事などを運んだ折の様子から、限界に近づいていると感じたのでございます。

「わかった。毎日様子を教えてはもらえまいか。どんなことでもよい。おいも務めがございますから、できれば夜がよい」「では、夕刻の仕事初めを終えましたら、お稲荷様のところで」

「ふむ。たのむ」。

翌日の夕刻、歩いて五分ほどのお稲荷様でさっそく密会を致しました。諸々お話しをして帰り際、山本さまはトキさん宛の手紙を私に預けられました。「もちろんお渡ししますが、しかし、トキさんは字が読めないかと」「うむ、すべて平仮名で書いてある」。

なるほどと受け取って、それをさっそく、食事を運ぶ折にトキさんに渡しました。

「山本さまが？」

トキさんは、目を丸くしておりました。自分のことを抱かず、しかも連日、本人やその知人たちがやって来ては励ましてくれた。その山本さまが手紙を寄越してくれたのです。トキさんの目から大粒の涙がホロリ、ホロリと落ちてくるのを見て、私は慌てて土蔵を後にしました。どうも

女の涙というのは苦手でございます。それからさて、時間にすれば二時間ほど後でしょうか、食事を下げに参りますと、なんと、月明かりしかない土蔵の中で、トキさんは山本さまからの手紙をまだ読んでいるではありませんか。

おそらくは何度も何度も、繰り返し読まれたのでしょう。もちろんそこに何が書かれていたのかは、私は存じあげません。しかし、短い手紙には、山本さまのトキさんを想う気持ちがそのまま綴られていたことでしょう。

4

その翌朝のことでございます。

トキさんは私に、六浪を呼んでくれと頼んできました。六浪はすぐに参りました。

「わたくしは、売られた身です。だから、お客に抱かれるのは仕方がありません。でも、あなたに抱かれるのは絶対に嫌です」

六浪は最初憤然としていましたが、そこは遊女屋の主人です。「ならば今日から客をとれ。ただし海軍はだめだ」そう言い渡すと、私にトキの支度を命じて土蔵を出て行きました。

いいのかい、あんなこと言っちまって、と尋ねると、「ええ、いいんです」とトキさんは言いました。諦めたのかな、と最初は思いましたが、どうも違うのです。どうやら山本さまからの手紙に何か書いてあったらしいのです。私の想像ですが、それはトキさんを助けるための作戦か何かではなかったかと。

とにかくトキさんは湯につかって、真新しい襦袢を着て、まるで何か新しい再出発のような、どこか落ち着いて堂々としたものを感じました。

その夜、トキさんは客をとりました。品川の別邸にお越しになった太政官のお付きの方のような、背広を着た若い男でした。私は六浪に言われて、トキさんがちゃんとお客と寝ているのか確認することになりました。静まり返った部屋の壁越しに耳を充てると、「うっ、ふうっ」という トキさんの声が聞こえます。

ああ、あの子もついにこんな世界に堕ちてしまったのか、と暗然と致しました。

次の日、私は山本さまと例のお稲荷様で密会を致しましたが、昨夜の件は黙っていました。

「きょうはお手紙は」と申しますと、山本さまは私の方を見まして、「東助、お前を信じる」という きなり申されます。

「今夜、トキを救い出す。トキに客が付いたら、海の方の縁側のある座敷に案内してやってくれやんせ」「え、そりゃあ、そのくらいのことはできますが、山本さま。トキのお客様はおそらく黙っておられないと思いますが」「その点は抜かりない。大丈夫じゃ」。

私は江戸っ子の血が騒ぎまして、こいつは面白い、と、協力することになりました。

箸屋の建物は海に面しております。で、その下に通路がありまして、部屋から直接水辺に下り て歩けば大分先に出ることができます。山本さまは、海岸づたいに歩いてトキさんを救い出し、一緒に歩いて逃げるということだろうと思いました。それが一番安全です。ただ、縁側のある部屋では、真下が海でございますのでこれはいけません。私は、お客が来たら縁側の無い、砂地に下りられるお部屋に通そうと考えました。

夕刻になり、店を開く前にいつものように掃除をしておりますと、六浪が顔見知りの邏卒と立ち話をしているのが耳に入りました。

「昨日、『雪見屋』から足抜けがあって、どうやら海岸沿いを歩いて逃げたらしい」「え、そうですかい。旦那、あっちの方は巡回はなさるんで？」「ま、時間があればのう」。

すると、六浪は懐から紙包みのようなものを出して、サッと邏卒の手の中に忍び込ませました。賂です。邏卒は受取りながら、しっかり見張っておく、と申しておりました。

六浪は、獣のような男でございます。妙に勘の鋭いところがあって、この日も邏卒の話に何かを感じたのでしょう、いつも出入りしている用心棒も三人ほど集めてきました。

さあ大変です。このままでは、海岸沿いに邏卒や用心棒が張っていて、わざわざ網の中に入っていくようなものです。私はすぐに山本さまに知らせようとしたのですが、店の仕事を遊女頭のお仙と一緒にやらされまして、まったく出掛けるスキがございません。そうこうしている内に、トキさんにお客が付きました。昨日と同じ、背広を着た若い男でした。

私は打合せ通り海側の部屋に通そうかどうしようか悩みました。もし通せば、そのまま計画が実行されて山本さまもトキさんも捕まってしまう。今日は別の部屋に案内して、このまま何事もなく済ませるべきではないか。

「では、こちらへ」私はお客を二階の菊の間に案内しようと、階段を上がり掛けました。すると、「おい、おぬし」とお客が私を呼び止めます。へい、何か、と申しましたら、

「きょうは、一階の海側、それも縁側のついた部屋がよい。潮風に当たりながらというのもオツではないか」

と仰せられる。困ったなあと思っていたところに六浪が現れました。
「どうした、東助」「へい、こちらのお客様が、二階ではなく一階の海側をご所望で」「なぜそうしない？」「へい、きょうは風も強いし、二階の菊の間でしたら広くて宜しいかと」
すると、お客の若い男が、「たってとは申さぬが、できればそうしてもらいたい」。
六浪は私の方を見て、「お客様がこう申しておいでなんだ。一階の『潮騒の間』にしてさしあげなさい」。
金払いの良さそうな客である。六浪がその意向を無視するわけがない。万事休す。海に一番近い、しかも縁側の付いた部屋である。陸地ではなくそのまま海に突き出ているから、脱出するには海に「どぼん」と入らなければいけない。いくら鈍な邏卒や用心棒でも、人一人が海に落ちる音は、そりゃよく聞こえるものでございます。
私は腹を括りました。もうこうなれば、修羅場になるかもしれない。私は懐にドスを呑んでその時を待ちました。何かあれば、つまり山本さまとトキさんが捕まりそうになったら、その中に躍り出てひと暴れしようと。
義侠心？　いいえ、そんな高級なもんじゃございませんよ。まあ、自棄なのかそれとも、山本さまとトキさんのことを、関わるうちに真剣に考えちまったせいかもしれませんねぇ。
とにかく私はジリジリと時が経つのを待っていたのでございます。
ほんの一時間も経たないうちに、お部屋に酒を運んで行った女中が、「お客様が東助さんを呼んでいる」と申しまして、私はすぐに一階の潮騒の間に参りました。
「失礼致します。東助でございます」「おお、入ってくれ」。

見ると、お客もトキさんも二人とも、障子を開けて夜の海を眺めています。と、いきなり若い男の客が、
「東助どん、おいは、山本盛実と申す」
と言うじゃありませんか。あっ、と思いました。
「てぇことは、もしかしてお客様、山本さまの」
「弟でごあす。兄から話は聞いちょります。いろいろとあいがとごあした」
「それじゃあ、昨日、トキさんと寝たのは？」
「ああ、あれは、按摩でごあす。トキさんも気持ちよかこつごあしたな」
盛実さまは、聞き耳を立てられているかもしれないと、トキさんの背中や肩を揉みほぐしていたのだというのです。ああ、なんという勘違い。喘ぎ声ではなかったのです。
そんなどうでもよい話はそこそこに、私は、すぐに脱出の危険を知らせました。
「ここは危のうございます。海岸に通じる道は、邏卒や用心棒たちが固めています。ですからお兄様にお知らせして、すぐにでも企てを止めてください」
盛実さまは少し考えてから、「いや、やりもうそ」と言って聞きません。そして、手元に用意してあった提灯を持って、海に向けて上下に何度も振っておられます。もう何を言っても薩摩っポというのは頑固だからだめなのか、と思っておりますと、そのうちに、ギー、シュー、ギー、シュー、という音が近づいて参りました。
私も思わず海べりの方に頭を出しますと、なんと、山本さまと数人の方が、小さな船を漕いで近づいてくるではありませんか！　あれは、何と言うのでしょう。軍艦の脇腹などについている、

え、カッター？　ああ、それです。たしか八人ほどの若い方たちが漕いでおいでだったと思います。山本さまは最初から、陸づたいで逃げる気はなく、海から舟でお逃げになる積もりだったのです。舟が縁側の真下に着きますと、ちょうど山本さまが我々を見上げるような格好になりました。

山本さまは最初に盛実さまに向かって軽く頷くと、次に私に向かって、直立不動でお辞儀をなさいました。もう、びっくり致しました。軍人さんからお辞儀をされるなんて、後にも先にもあの時だけでございます。

そしていよいよ、山本さまは両の腕をトキさんに向かって思い切り差し出しました。トキさんは、舟に乗り込もうとしましたが、くるり、と身体の向きを変えると、

「東助さん、本当に、本当にありがとう。どうか、ご無事で」

と言ってくれたんですよ。私はうれしくてうれしくて、涙が止まりませんでした。

トキさんは、山本さまの両腕にしっかり抱き抱えられて、そのまま顔をわずかに、山本さまの胸の方に甘えるように傾けられました。トキさんの涙が、月夜にきらり、と光っていたのをいまでもはっきりと覚えております。

盛実さまも乗り込んで、舟は静かに箸屋を離れて参りました。

さあ、ここからがこの東助の腕の見せ所でございます。まず、舟が完全に見えなくなるまでおさ見送りして、それから、座敷に置いてあった火鉢を抱き抱え、障子の淵まで持っていき、そこで私は大声を張り上げました。

「あっ、お待ちくださいッ！　大変だっ、お客様っ、お待ちくださいッ、誰かーッ！」

そして次の瞬間、どっこらしょ、と、火鉢を海中に落しました。「どっぽーん」と意外に小さな音でしたが、私の叫び声が効いたのか、すぐに邏卒たちが海べりをが駆けてきて、

「どうした！　何があった！」

「お客様が、女と一緒に海に飛び込みましたっ！」

「なにい」。

あとは考えた通りに進みました。連中は盛実さまとトキさんが海に落ちて、そこから海岸に上がって陸路逃走を図るだろうと見て、すぐに人をかき集め探しました。が、もちろん、今頃お二人はまったく見当違いの場所でゆっくりされている頃です。

六浪は、私しか居ない潮騒の間に入ってきて、最初は呆然としていましたが、すぐに、「お前も探しに行け！」と言い放ち、自分も探しに出掛けて行きました。

ああ良かった、これで一件落着だ、と、その時は思ったものです。

5

つくづく、六浪という男は凄い男です。六浪は翌朝早々海軍省に出向いて事の次第を報告し、その足で警察に行き、さらに、東京府にまで足を運んで、話をしたそうです。

法的に言えば非は山本さまの方にあります。しかし、人の幸せというものを考えた時に、山本さまのとった行動は、褒められないけれども否定できない何かがある。

山本さまは、最後は海軍を辞めるご決意までなされたそうです。事実、六浪が騒いだお蔭で事

は表沙汰になろうとしていたのですから。しかし、軍としては大騒ぎしてくれるな、というのが本音でございましょう。第一、山本さまがトキさんを足抜けさせた証拠は何も無いのですから、警察も海軍省も手が出せません。

それからどれくらい経ったでしょうか。ひと月とは経たない内だったと思います。山本さまがお一人で突然、箸屋においでになりました。山本さまは軍服ではなく、紋付き羽織袴姿で、「申し訳、ごあはん」と、六浪に謝ったのでございます。六浪はしばらく山本さまを睨み付けておりましたが、途中で、ふふっ、と、笑ったのでございます。

「あんた、薩摩の人間にしちゃあ素直だな」

六浪は、こういう男が嫌いではありませんでした。時代の風雲を駆け抜けてきた者として、山本さまにはじめて好意を持ったのではないでしょうか。

「ただし、金は払ってもらうよ」

六浪は、分割でトキさんを落籍せる代金を山本さまに払わせ続けました。山本さまも当然のことだと、頑張ったようです。いずれにしても、トキさんは操を守ることができ、お二人は幸せにお暮らしになりました。

その後お二人はどうなったか？　そうですねえ、これじゃ、話が尻切れ蜻蛉だ。お話しを致しますか。とは言っても、私は山本家の家宰じゃありませんから、詳しくは存じあげませんよ。知ってる範囲のことを申しましょう。

その前に私の方ですが、山本さまのお口聞きがあって勘当を解かれ、家業の下駄屋に精を出しました。山本さまにはよくご贔屓にして戴きました。

さて。山本さまとトキさんが結婚されたのは、あの騒ぎから二年後の明治十一年十二月。まあ、騒ぎのあと、山本さまが海外に一年半もおられましたから、二年後の結婚というのは早い方ではございませんか。

当時のお二人ですか？　こんな話を、ご同僚の方から伺ったことがあります。

山本さまの乗る軍艦をトキさんが見学に訪れたそうです。昭和の御代にはどうだか知りませんが、明治の頃に、ご夫人をご自分の乗っている軍艦に呼んでご自分で案内をされた軍人さんなんて、聞いたことがありません。しかもトキさんが軍艦を降りる際には、山本さまは桟橋までトキさんの履物を持っておあげになり、桟橋を降りてからトキさんの前に履物を揃えて置かれたそうです。このことは海軍中で噂になったそうですが、それこそ心の芯からトキさんを愛していらした山本さまにとっては、何でもないことのようでした。

え、山本権兵衛って。ええそうですよ。大正の御代に総理大臣をやった権兵衛さんです。ええ、昭和八年、つまり今から五年前に、たしか奥様と同じ年に亡くなられましたな。

いや、本当に惜しい方です。「日本海軍の父」と言われ、日露戦争勝利の一方の立役者ですものね。政治家としても軍人としても一流の方ですな。え、最近の軍人ですか？　はて、私はまったくお付き合いがないので何とも申せませんが、自分の栄達なんぞ考えずに行動できる、山本さまのようなお人が上におられれば、安泰でございましょう。

誓約書？　山本さまが結婚前に奥様に書かれていたのですか？　ほう、それは存じ上げませんだ。どれ、これが写しですか。どれどれ。ああ、結婚する寸前の日付ですな。

誓約書

一、礼儀を正ふし信義を重んじ質素を旨とすることを目的とすべき事
一、夫婦むつまじく生涯たがいにふわを生ぜざる事
一、夫婦たるの義務をやぶるにあらざればいかなる事実あるも決して離縁許すべからず
一、家事の整頓はすべて妻の責ににんず
一、一夫一婦は国法の定むる処なれば誓て之に背かざる事
一、家財は以て妻子を養育するの余沢なれば妻の外他より口を入るるを許さず
一、一家に属する事はすべて妻の責にんにまかす

右の段津沢敬蔵殿三女とき女と縁組いたし且は前顕堅く誓約聊かも違背あるべからず因て誓約悉く相認め如件

明治十一年八月十五日

鹿児島県士族　山本権兵衛

津沢敬蔵殿三女
津沢とき殿

あっはっはっ、これは山本さまらしいですな。

「家事の整頓はすべて妻の責」などとお書きになっておられるが、山本さまはご自身でボタンの縫いつけまで器用にやられる方でしたから、まあ、一応書いてみたのでしょう。

いやはや、こんな文章を読ませて戴くと、またあの、お二人が箸屋の真下からボートに乗り移られる時のご様子が、まざまざと浮んで参ります。そうです、トキさんが山本さまの胸に顔を埋めて泣いておられた、あの時のことを……。

幸せとは何でしょうなあ。

人を死ぬほど好きになって、お相手も自分のことを熱烈に愛して下さる。その二人が添い遂げる以上の幸せは、この世に無いんじゃございませんか。してみると、山本さまは総理大臣にならなくても、十分お幸せだったと言えましょう。

おお、少し時間を過ぎてしまった。孫が迎えに来ておりましてな。また、いつでもお呼びください。こんな年寄の話でよければ、いつでもしてさしあげますから。

今回の話の題名を付けるとすれば？

そうですなあ、山本さまは飾らぬお方で、ご同僚は親愛の情を込めて「ごんべぇ、ごんべぇ」とお呼びになっておられましたから、さて、「ごんべぇの恋」、とでも致しますか。

いや、これは少し無礼が過ぎますな。

私には、こういう才能はございませんので、どうぞお好きにお題をお付けください。

それでは今回はこのへんで。御免下さいませ。

おわり

俳句　鷹の呟き㈣

大澤（おおさわ）　鷹雪（ようせつ）

蛇穴を出づれば首魁捕はるる

風受けて富士乱れたる葦の角

童にはスタンプラリーの遍路かな

青柳や雨の銀座の修業僧

春愁やジャズの流るる手術室

釘打たぬ棺に白きフリージア

色艶で知れる名馬や競べ馬

二女ありて玩具の幟立てにけり

名人の居て食傷の香魚かな

アカシアの花の向ふを駆ける駒

窓際に寄りて読む字や五月闇

麦茶よりコーラを好む憂き世かな

朝焼に向ふ車中で読む資料

唄踊芸も盛んにキャンプの火

目を惹くは寿司の老舗の花氷

幸若を舞ひたる腰に秋扇

流星やかけし願ひは燃え尽きず

芭蕉葉の軒に流れて雨宿り

樟脳も吊されてゐる猪垣よ

路側線の途切れて怖き濃霧かな

手を抜きし朝のサラダや貝割菜

駅弁の人気順位や秋渇き

卒寿翁の球の飛距離や残る虫

晩秋や角の給油所閉鎖さる

スタインベルク・ピアノ、後日譚
――〝見えない糸〟に結ばれて――

伊治　哲

一、スタインベルクの独白

――A君……本当にお久しぶりです。今日は、わたしのところによく来てくれました。

「A君……」と呼んではいけないのね。昔のA少年とは違うんだもの……。「Aさん……？」いや、わたしにはやっぱり「A君」がいいわ。いつまで経ってもわたしはあなたより二歳年上の姉なんですもの。

あなたたちが、わたしのいる音楽室に入ってきた瞬間、すぐに「アッ、A君だ！」って気がついたのよ。多分今日あたりわたしに会いに来てくれるのでは……と、内心、心待ちにしていたの。だって、本当は今日、町の文化会館で、わたしと岡山の姉とのスタインベルク・デュオ・ピアノコンサートが開かれる予定だったのです。あなたはきっとコンサートを聴きに、いや、晴れ姿のわたしたち姉妹に会いにきてくれるに違いないと思っていたのです。

ところが、演奏者の突然の不幸でコンサートが急遽中止になったことは、あなたも聞いていた

でしょう。わたしはがっかりしたわ。わたしというピアノは、どうしてこうも悪いめぐり合わせに見舞われるのかしら、と。

しかし、コンサートは中止になっても、A君だけはきっとわたしを訪ねて来てくれるに違いないと信じていたのよ。まるで昔の恋人を待つ気持だったわ。

今日のお昼過ぎ、待ちに待ったその瞬間がきたの。本当に嬉しかったわ。

何十年振りになるのかしら。昭和十六年三月六日の地久節の日、当時の綾部高等女学校の全校音楽祭だったわね。小学校五年生のA君がヨセフロウの「庭の千草」とベートーヴェンの「メヌエット」を弾いてくれたのは。その後A君がわたしの前に姿を見せなくなってから、そう……六十六年にもなるのよ。

いったいあなたは、七十年近くもの間、どこで、なにをしていたの？

お互いに辛い思いをしたあの戦中、戦後の時代を、あなたはどうやって切り抜けてきたの？その後の平和で豊かな時代になっても、あなたは昔の苦難の時代と同じように遮二無二働いてきた、まるで企業戦士みたいだって……誰からともなく、風の便りに聞こえてきたわ。いかにもあなたらしいわね。

そのあなたが今ではいい歳になって、すべての仕事から解放されたのね。それを機に再びピアノの練習をはじめたのはいつ頃からですって？　六十の手習いだって聞きましたけど。

ピアノと向きあっているうちに、幼かった頃、女学校の磯部茂子先生（I先生）にピアノのレッスンを受けたこと、音楽祭でピアノを弾いたことなどを懐かしく思い出してくれたのね。

そのピアノが、わたし、スタインベルクだったのですよ。田辺美恵子さん（Tさん、今は新宮

さんですが）から聞いたでしょう。

あなたが抱いていたこのわたしへの想いは、みんな田辺さんから聞いていました。田辺さんは、当時女学校四年生、あなたが演奏した音楽祭で、この同じスタインベルクで「乙女の祈り」を弾いてくれて以来の友達なんです。

考えてみれば、わたしも生まれてから八十年近く経ってしまったわ。しかしその間に多くの方々にとても大切にしてもらい、七年前に大修理をしていただいて、こんなに立派に生まれ変わりました。あなたの目には、どのように映りましたか？　見違えるほどきれいになったでしょう？

田辺さんもお年を召されたけれど、ずっとピアノを続けておられるし、その上俳句の会を主宰して、この町では著名な活動家なの。だから、小柄だけど背筋がシャンと伸びて、若々しくきれいなおばあちゃんでしょう。

今日、あなたに会うまでは、あの可愛かった小学生のA少年がどんなに変わっているだろうか、すぐに分るだろうか、と実は心配だったの。ところが、あなたが姿を見せたとたん、すぐにA君だと分ったのよ。そりゃあ歳はとってはいるけど、顔かたちは昔とそっくり。こういってはなんだけど、どちらかといえば、四角張って生真面目な顔に変わりはないし……。それでも少しはにこやかになったかな？

なにはともあれ、とても元気な顔をみせてくれて、本当に嬉しかった。

こうしてみると、三人揃って同じくらいの年齢でありながら、七十年近い歳月を経て、こうして一堂に会することができたのは、いったい誰のおかげなのでしょう。わたしたちを温かく育ててくれた多くの方々と、〝見えない糸〟でわたしたちを結びつけてくれた神様に、心から感謝し

なければならないわね。

それはそれとして、その見えない手に導かれてわたしたちが再会できたその瞬間に話を戻しましょう。

あなたはこのわたしを見た途端、まるで初対面であるかのように驚きと嬉しさで思わず顔を紅潮させたわね。

そして大屋根や鍵盤をそっと手で触りながら、これがあの時のピアノだったのかと、いとおしむようにわたしをじっと見つめてくれましたね。

まぎれもない、このわたしですよ、あの折のスタインベルク・ピアノですよ。

いろいろ苦難の時代があったけど、今はこんなに立派に修復してもらって、こうして音楽室の真ん中に居場所を与えてもらっているの。今日のような日曜日でも、音楽担当の先生や、音楽好きの部活の生徒たちに囲まれて、一日中きれいな音色を響かせてもらっているわ。

時代が移ったのだから当然のことだけど、奏でる曲もリズムも、そしてメロディーやハーモニーもすっかり変ったわ。でも昔の女学校時代と同じように、若々しい生徒さんたちに囲まれていると、わたしまで青春にかえって再び夢が膨らんでいくの。

大勢の人に心配をかけたけど、今ではすっかり昔のわたしに戻ったから、どうか安心してください。

わたしのことはそのくらいにして、サア、A君、キーを叩いてわたしの音色を試してください、

というより早く、あなたはわたしの鍵盤に向き合いましたね。

昔、あなたが弾いてくれた「楽しき農夫」（シューマン）と「庭の千草」（ヨセフロウ）を一気に弾いてくれました。それから、ちょっとためらうようにしながらショパンの「ノクターン」と「別れの曲」を、そして「エリーゼのために」（ベートーヴェン）「乙女の祈り」（バダルゼフスカ）と、六曲も弾き終えました。

続いて田辺さんが遠慮がちに、「乙女の祈り」を原曲で弾きました。これはとても難しい曲です。しかし、さすがにピアノに入れ込んだだけあって、堂々として、しかも流麗な演奏でした。

それに比べるとあなたの弾いた曲は、それぞれやさしく編曲したものと分りましたが、それにしてもやっぱりちょっと練習不足のようですね。少年の頃の方がよほど上手で力強かったし、指の運びも音の強弱もうまかったと思いましたよ。

ま、いいでしょう。六十歳からの手習いで、間違いながらもここまで弾けたのだから。あなたの歳でこの程度弾けたら上々でしょう。それでも、昔にくらべれば、豊かな情感がこもっていたことだけは褒めてさしあげましょう。〝年の功〟といったら、あなたは怒りますか？

あなたが教わった磯部先生が今ここにいらっしゃったら、なんとおっしゃるでしょうね。「指が滑らかに動いていない。もう一度やり直し！」とお叱りになるでしょうか？　それとも「まだまだ未熟だけど、一生懸命やったことだけは認めてあげる」と慰められるでしょうか？

今となっては、磯部先生に聞いてもらえないことが残念です。わたしにはあなたたちの奏でる曲が先生への鎮魂歌に聞こえて、思わず目頭が熱くなりました。

ところで、わたしの音色はどうでしたか？　昔のわたしの音色と違いましたか？

最初にあなたが鍵盤に触れたとき、ちょっと驚いたような顔をしましたね。待ちに待ったA君の手で、わたしの音色を弾きだしてくれるのですから、わたしもお腹の底から精一杯の音色をふくらませました。きっと満足してもらったと思いますが……。

たった二時間足らずの短い時間でしたが、夢にも見た六十六年ぶりの再会を果たせたことは、なによりも懐かしく嬉しいことでした。

予想もしない出来事で、著名なピアニストによるスタインベルク・ピアノの音を奏でることができなかったことは残念でしたが、そのかわりA君、田辺さんとのこんな素晴らしい出会いに恵まれたことを、岡山と長野にいるスタインベルク姉妹にぜひ知らせてあげたいと思います。

機会を得て、あなたたちがまたわたしを訪ねてくれるよう、心待ちにしています。いつまでも元気でいてくださいね——

ピアノはなにも語らなかったが、鍵盤の上を走る指先に美しい響きで応えながら、こんな独白をAの耳に囁いた。

二、見えない糸

かつての「A少年」も今年七十七歳、喜寿を数えた。この年の六月二十四日、Aは新宮さんと梅原和夫さんに案内されて、京都府の綾部高等学校にスタインベルクを訪ねた。昭和十六年三月

以来、六十六年ぶりの再会である。

前の年の五月、Aが「まんじ」の百号記念誌に、「わたしたちはスタインベルク三姉妹——よみがえった七十年まえの音色——」という一文を草したのがきっかけになって、予想もしない夢のような〝人の縁（えにし）〟のおかげで、この日の出会いが実現したのだった。その〝不思議〟の世界に舞い戻ってみよう。

「まんじ」百号が同人の手に渡った平成十八年の五月、綾部の新宮美恵子さん（旧姓・田辺、本文では〝Tさん〟とした）から、手紙が届いた。

「思いがけない『まんじ』記念誌を送っていただいて、有難うございました。奇想天外というか、想像もできない発想で、スタインベルクをヒロインに見立てた物語りの進展は、真に迫って実に感動的な一文でした。心熱くなりながら、涙しながら、立て続けに三度拝読しました。スタインベルクを想われるお気持が十二分に伺われ、又もや宝物を頂いた感じで最高の気分でおります」

とあった。Aは、この物語りの緒（いとぐち）を開いていただいた新宮さんに、ほんの少しばかり恩返しができたのかもしれないと、スタインベルクへの想いを一層かきたてられた。

それと相前後して、「まんじ」同人の大先輩《松下魏三先生》からAに電話と手紙が届いた。「スタインベルクの話が印象に残った」という有り難いお話である。

〈先生は一貫して教育界の中枢に身を投じられ、現在社会教育の充実振興に資するため、「文化

勲章に輝く赤堀四郎博士の一生」と題する練達の文章を「まんじ」に連載されている。Aはかねてからその真摯な文意に深く敬服していただけに、飛び上がるほど嬉しかった。

しかも、戦争中旧陸士に学ばれたとの由。旧陸幼の末席を汚したAにとっては、近寄り難い上官であるとともに、同じ血肉を分けていただいたような親しみを抱いたものである〉

松下先輩のご書簡に続いて、同じ掛川市にお住まいの《水谷房江さま》という方から懇篤な手紙をいただいた。昭和二十七年当時、松下魏三先生の薫陶を受けたとあるから、先生の教え子に当たると推察した。

「松下先生から『まんじ』百号をいただき、素晴らしいお作の数々を楽しく読ませていただきました。その中の貴方の作品に出逢った時は、胸を打たれ涙が止まりませんでした」

とあり、稚拙な文章によくも目を通していただけたものと、汗顔の思いを禁じえなかった。

それよりもAの目を釘付けにしたのは、

「遠い親戚に綾部高女出身の者がいますので、コピーを送りました」

というひと言であった。

それだけではなかった。その後の長文のお手紙によれば、水谷さんのご主人の姪御さんが嫁がれた先のご主人、芦田亨さまのお母さまが、綾部高女を卒業された。しかも、そのお母さまのお姉さまが、《梅原清兵衛》という音楽の先生のもとに嫁がれたが、その昔、「A」という子供を教えたという先生の話を聞き覚えておられたというのである。

「スタインベルクの話に登場する『庭の千草』や『メヌエット』を弾いた『A君』は、もしかしたら貴方ではないか」

そして、

「I先生というのは、当時音楽担当のきれいな女の先生で磯部先生という方がおられたが、その先生のことではないでしょうか。私もその先生に習いました」

と、なつかしそうにおっしゃっておられた、と記されていた。

……こう話されたお姉さまは、残念なことにごく最近お亡くなりになったそうである。返すがえすも悔やまれてならない。

ああ、なんという奇縁、奇遇であろうか。まるで夢をみているような話に、Aは思わず驚きとも不思議ともいえぬ声を上げた。〝神のみぞ知る〟というのは、まさにこのためにある言葉なのであろうか。

Aは早速、水谷さんに返事を書いた。

「世の中にこんな不思議なご縁があるものなのだろうかと、飛び上がるほどびっくりしたり、喜んだりしています。

《梅原清兵衛先生》こそ、私の最も敬慕してやまない、最大の恩師です。

昭和十一年、小学校入学とともに、一、二年生の二年間を担任してもらいました。いつも明るくやさしく、先生の顔から笑みの絶えることはありませんでした。誰彼の区別なくすべての生徒が、勉強はもちろん日常生活に至るまで、丁寧でゆきとどいた教えを受けました。ずっと後の話になりますが、当時のクラス会で、一人残らず一様に『自分が一番可愛がってもらった』と自慢

するくらいみんなが先生を慕っていました。
私がピアノに親しむようになったのも、先生の手ほどきによるものです。小学校の音楽室で、ピアノが好きな数人の生徒を相手に、手取り足取りの指導を受けました。
四年生になって、バイエル八十番くらいまで進んだ頃、『そろそろ専門の先生について指導を受けなさい』と薦められ、綾部高女の磯部先生に教えを請うことになったのです。

しかし、梅原先生がなつかしく、中学校に進んでからも、しばしば山家（やまが）の先生のご自宅へ伺ったものです。今でも、帰郷の折、電車が山家の駅を過ぎると、窓から身を乗り出して先生の家を追い求めます。
先生のご恩に報いないままで先生が亡くなられてしまい、返すがえすも残念で申し訳ない気持でいっぱいです。
それにしても、七十年も昔の古い話を、しかも先生からの伝え聞きで、よくも覚えていてくださったものと、感激しました。
昔の古き良き時代とは申せ、師が教え子に注がれた温情に深く感謝するとともに、見えない糸で結ばれた人と人との深い縁（えにし）の不思議に、改めて強い感銘をうけました。
この不思議な縁の緒（いとぐち）を開いてくださった水谷さんに、心から感謝申し上げます」
そして、
「梅原清兵衛先生の面影を残した『小学校入学記念』『浦島太郎を演じた学芸会』と『先生とピアノの前で』の写真三葉を添えてお送りします。どうぞご覧になってください」

と書き添えた。
追いかけるように、水谷さんから
「梅原清兵衛先生のご長男《梅原和夫さま》が、京都にお住いなので、『まんじ』に添えて、あなたの手紙と写真を送り届けました。きっと喜ばれましょう」
と返事が届いた。昨、平成十八年九月のことである。

〈因みに、水谷房江さんは、掛川の小学校や中学校、さらには女性の会や老人会で、静岡の伝説や民話を〝読み語り〟され、地元の子供たちや多くの人々に素朴で豊かな夢を育む奉仕活動を続けられているということである。
未だ直接お目にかかったことはないが、電話を通じて聞こえるお声は、せせらぎの流れのように美しく爽やかである。〝読み語り〟の声とピアノの音色が共鳴したら、どんなにか素晴らしい二重奏になるのではないかとさえ思われる。〉

時を移さず九月の末に、梅原清兵衛先生のご長男《梅原和夫さま》から電話と長文の手紙がAの元に届いた。
「掛川の水谷さんから従兄弟の芦田を通して、『まんじ』に添えて貴方の丁重な手紙や写真を受け取りました。本当に驚きました。まるで幼い頃に帰ったような気がします。
父は昭和五十三年、七十歳で世を去りました。それから三十年も経って、ピアノにまつわる話から、昔の父の教え子の貴方と言葉が交わせるなんて、夢でも見ているような気がします。亡く

なった父がこの世に戻ってきたように思えてなりません。

実は十月十五日が父の二十八回目の命日に当りますので、このことはきっときっと父の墓前に報告をします。

本当に永いあいだ父を慕っていただいて、ありがとうございます。父にかわって厚くお礼を申し上げます。

私も、子どもの頃からあなたの小学校やピアノの話を、父からよく聞いていました。今でもはっきりと覚えています。

父は戦後中学の音楽教諭の資格をとり、教師のかたわら、中学生や地域の青年団の音楽サークル活動に夢中になっていました。東京、大阪などへコーラスのコンテストにも参加していました。あの頃が〝水を得た魚〟のように、人生の喜びを最も満喫した時代だったと思います。

中学教師を定年退職後は、自宅の離れにグランドピアノを購入し、田畑仕事の合間に近所の子供たちにピアノを教えたり、孫たちと遊んだりして余生を楽しんでいました。しかしその頃から、ピアノを弾く指がかつてのように滑らかに動かなくなったことをそれとなく気に病んでいました。

京都の私の家にも時々来てくれて、人生論や音楽のことなどを、夜を徹して話し込んだこともありましたが、話はやっぱり貴方の小学校時代の思い出に戻ってしまうのです。よほど懐かしく心に残っていたのでしょう。

七十歳で突然に他界してしまいましたが、生来の音楽教師として身を奉じたことに、心底満足していたと思います。

昭和四十年頃の父と母のスナップ写真を同封しますので、面影を偲んでやってください」

とあった。写真には、昔のままの懐かしい先生のこぼれるような温顔が写っていた。

このようなご子息の回想を読みながら、その頃A自身は一体なにを考えていたのだろうと、今さらのように臍をかむ思いに駆られた。いかに仕事が忙しく、毎日の勤務に埋没していたとはいえ、先生を訪ねる機会はどのようにでも作れたはずである。忘恩の誇りは決して免れうるものではない。時、既に遅いが、ここに改めてお詫びを請いたいと思った。

そして、食い入るように写真を見つめ、先生に向かって、「先生、お世話になりました。ご恩返しもできなくて、申しわけありません。本当にありがとうございました。ありがとうございました……」と何度もなんども話しかけた。

同時に、先生にかわって、ご子息の梅原和夫さんと、いつかは先生を偲ぶ機会を得たいと願っていた。

三、再会

その矢先、Aに思わぬ吉報が届いた。

あくる平成十九年六月二十四日、市の文化協会創立六十周年記念行事として、綾部高校と岡山・政田小学校のスタインベルク・ピアノ両姉妹が綾部の文化会館で対面し、ピアノ・デュオ・コンサートを開くというのである。

奏者は、ピアニストの羽田健太郎氏と高橋多佳子女史の二人という。

この報せは、新宮美恵子さんと、梅原和夫さんから、同時に届いた。

Aは、神が与えてくれた千載一遇の好機とばかり大いに欣喜雀躍。綾部高校同窓会の幹部でもある梅原さんの好意に甘んじて、切符の手配など一切を依頼し、六月のその日を待つばかりであった。

ところが、あに図らんや、奏者の羽田氏が演奏会の直前に急逝し、コンサートはあえなく中止となってしまった。

なにが幸いするか分らない。

有名ピアニストの奏でる、スタインベルク・ピアノの華麗な音色を聴くことはかなわなかったが、奏者に代わってA本人がこの名器に触れ、鍵盤をたたく機会を与えられることになったのである。

本来ならコンサートが予定されていたその日、六月二十四日の昼前、梅原さん、新宮さんに、Aとその妻の四人が綾部駅で落ち合うこととなった。真新しく修復されて、綾部高校に収まっているスタインベルク・ピアノに会いにいこうというのである。

Aは、新宮さんには数年前に僅かな時間ではあったが初めて会ってからの再会である。しかし、梅原さんとは、文通や電話で親しく言葉を交わしてきたものの、全くの初対面である。

新宮さんは八十歳といわれるが、全く変わらずに若々しく、初対面のように慎ましい。梅原さんは、お父上より一回り大きくむしろ豪放磊落で、しかも気配りの行き届いた細やかな心遣いの持ち主であった。

お父上とのつながり、そしてスタインベルクを介する結びつきのおかげで、四人が顔を合わせるやいなや、あたかも百年の知己のように直ぐに打ち解け合うことができた。

日曜日で学校の玄関は閉められていたが、梅原さんが事前に手配されていたおかげで、すぐに音楽室に案内された。高校の音楽サークルの生徒たちであろうか、ピアノと吹奏楽の練習を、Aたち四人のためにすぐに中断して部屋を空けてくれた。

かなり広い音楽室に入ったとたん、中央に据え付けられたスタインベルクの華麗な姿に、Aは目を奪われ、一瞬棒立ちになってしまった。

これが少年の頃弾かせてもらったピアノなのだ。駆け寄って永年の労苦を癒してあげたい衝動を抑えながら、その姿をしげしげと見つめ、恐る恐るワインカラーのボディに触れた。

ピアノに触れながらAは思った。

あの幼い頃から五十年近く、ピアノに触れることもないまま年月が去った。時にピアノを目にする機会があって、昔習った「楽しき農夫」や「庭の千草」の曲を暗譜で試し弾きしてみると、意外にも体が本能的に覚えこんでいて、たどたどしくとも自然に指が動いていったことが嬉しかった。しかし、その頃はそれ以上にピアノへの執着を感じることはなかった。

いわんや、スタインベルクの存在はもちろん、昔そのような名器に接したことがあることなど、全く記憶の外にあった。

ところが、一切の仕事から離れて心に大きな空洞を感じたとき、真っ先に思い立ったのがピアノの再開だった。そして、バイエルの一番からの手習いを始めたのだ。ただ、如何せん、音に対

する感覚も、滑らかな指の動きも、もはやとり戻すことはできない。遅々として進歩の跡がみえないまま、ただひたすらにレッスンを重ねてきたのが、この十余年間であった。

そんな折も折、地元新聞にAが寄せた「ピアノに辿る思い出」の一文を、たまたま新宮さんが見つけ出してくれたのが、そもそもの始まりであった。まぎれもない昭和十六年、当時の女学校の音楽祭でAがピアノ独奏をしたこと、そのピアノが日本に三台しかないスタインベルクの一つであること、期せずして三台ともに廃棄寸前で修復され見事に復活したことなどなどを、事細かにAに教えてくれたのだった。

それが端緒となって、見えない糸が紡がれ、結ばれ、手繰り寄せられて、今日のこの一期一会を迎えることができたのだ。

栄光に輝いた時代もあった。悲哀に沈んだ時期もあった。そんな古い歴史に彩られたこのスタインベルク・ピアノに、今この手で触れているのだという実感が、Aの胸に沸々と湧いてきた。この名器で演奏するには、あまりにも貧しい自らの手を省みたが、Aは最早躊躇はしなかった。

そして、ピアノの前に向き合った。

鍵盤の象牙板は黄色く変色したままであった。修復に際してできるだけ往時の痕跡を後世に遺しておきたいという配慮で、爪の反りを平らに直すにとどめたのであろうか。このピアノを弾いた多くの先人たちの指紋がそのまま刻み込まれているようで、ひときわ懐かしい体温が指に伝わってきた。

しかし、鍵盤をたたくと、びっくりするほど重厚な音が跳ね返ってきた。その音量に圧倒されて、ところどころ間違えたり弾き直したりしながらも、一気に六曲を弾き続けていった。

傍らで聞き耳を立てていた新宮さんや梅原さん、そこに居合わせた音楽の先生たちが、曲の終るごとに小さな拍手を送ってくれた。それは恐らく演奏の巧拙よりも、したたる汗も拭わず、思い出深いピアノに向かって懸命に指を運ぶ老書生の、一途な気迫に応えてくれたものと感謝した。それにしてもスタインベルク自身は、余りの未熟さに正直仰天したのではないだろうか、Aははにかみながら流れる汗を拭った。

とはいえ、Aは、気恥ずかしさよりも、六十六年ぶりに憧れのスタインベルク・ピアノの音色を奏でることができただけで、充分満足した。そしてそれ以上に、今は亡き梅原、磯部両先生とスタインベルク・ピアノを通して久しぶりに語り合えたことがなによりも嬉しかった。

満足感と幸福感に浸って、やっとAの顔に笑みがこぼれた。そんな折、冒頭に述べたスタインベルクのモノローグが、耳に聞こえてきたのである。それは、Aにとって、恩師への忘恩の痛みと、スタインベルクへの思い出の空白を埋め尽くし、人と人との絆を讃える珠玉の言葉に聞こえた。

ピアノとの出会いを終えてから四人で昔話に興じたあと、Aは時間に追われるように帰途についたが、その途中、車窓を過ぎ行く梅原清兵衛先生のご自宅に向かって、改めて感謝の手を合わせたことはいうまでもない。

四、人の世の縁（えにし）

Aは振り返る。

〝世の中は狭い〟といわれる。しかし、Aが感動したのは、この一年ばかりの間の出来事がたまたま降って湧いたような偶然の賜（たまもの）ではなく、人は、もっと深遠な輪廻転生の世界に生かされているのではないか、という思いであった。

世の中には、未だ見知らぬ人、謦咳にも接しえぬ人、すれ違っただけで名前も顔も知らぬ人……そのような人たちが数え切れないほどたくさんいる。しかし、ひょっとしてその中の誰かと、なにかの縁で結ばれていたかもしれないし、いつか結ばれるかもしれないのだ。血縁、師弟、同郷、同窓、同僚などだけではない。友の友、さらにその友の友、さらに……と考えると、人間の誰もが、〝見えない糸〟で結ばれていると思われてくる。その意味では、すべての人が〝はらから〟であるといっていいのかもしれない。

しかも、その縁を辿っていけば、過去、現在、未来を通して永遠に繋がっていく。人はその縁をいつかは忘れ去るかもしれない。しかし、たとえ人は忘れても、縁（えにし）は縁として永遠に消え去ることはない。

そんな不思議な世界に人は生きている、そしてその絆こそが、夢を生み、育て、いつかは現実のものへと導いてくれるのだ……と、Aは思った。

スタインベルクという一台のピアノが主役になって、一年余の間にこんなに古くてしかも新しい人の輪を育て、実を結ばせてくれるとは、夢想だにしなかった。多くの新しい知己とともに、七十年まえの古い昔に一挙に遡り、七十年後の現在に再び駈け戻ってきた、そんな思いに駆られて、〝人の世の縁〟の不思議を改めて噛みしめた。

そして

「昨日は、思い出のために、
明日は、夢みるために、
今日は、今ここにあるその時を楽しむために……」

どこかで耳にした詩の一節がよみがえってきた。

謹謝　文中、松下魏三先生、水谷房江様、新宮美恵子様、梅原和夫様の数々のお手紙から引用させていただいたことを感謝申し上げます。

（二〇〇七年八月十一日記）

後日譚　三題

石黒　修身

「後日譚」、と呼ぶのは必ずしも相応しくないかも知れないが、筆者が「まんじ」各号に載せた小論のうち、その後の推移が聊かなりともドラマらしき展開になっていると自負する三つのテーマにつき〝その後〟を記したい。

(一)　荘内藩と「海坂藩」　まんじ92号所収

この小論は、筆者が短歌を通して知遇を得た、鶴岡市在住の荘内藩十七代の当主酒井忠明氏と、作家藤沢周平の小説の舞台が、「海坂藩」としてこの地に重なっている事などをとり交ぜて、エッセイ風に記述したものである。

(1)　酒井忠久氏との出会い

本論を収録した拙作の歌集「行雲流水」を、今は亡き忠明氏の長男である忠久氏に送ったとこ

ろ、丁重なお礼の書簡を貰った。そして是非一度鶴岡に来られ度しとのお誘いがあった。

忠久氏は、十八代目の当主となるが、致道博物館々長他荘内藩と酒井家ゆかりの史蹟等の管理を掌って居られる。

平成二十年四月、新潟と山形を結ぶ旅の途上に鶴岡市を訪ねることになった。

前日、新潟村上、瀬波温泉の宿から忠久氏にアポイントをとった。当日、既にローカル化している羽越本線で鶴岡に向かったが、強風のため一時間程遅延し鶴岡駅に着き、タクシーで指定された致道博物館に赴いた。

忠久氏とは初対面であったが、大幅な遅刻にも拘らず丁寧に接して呉れた。

温厚で誠実な印象の紳士で、亡き父君の当地に於ける文化的活動のこと、父君がかつて所属していた歌誌「泉会」（筆者も一時加入していた）メンバーの消息等の会話が弾んだ。

そして、博物館の案内と、現在は鶴岡公園となっている鶴ヶ岡城趾にある史蹟と、城外にある旧藩校致道館について説明をして呉れた。

また、公園内に藤沢周平の記念館建設の準備が進められている旨語り、昨今の周平ブームに話題が及んだ。

(2) 史蹟等

忠久氏の主管している致道博物館は、旧城の二の丸にあたる荘内藩の御用屋敷のあったところで、同藩にあった建物、武具、民具、美術品、絵巻等の収蔵展示品が、明治期に建てられた洋風

建築（文化財として移築）の中に収められている。

同氏の執務室、応接室のある建物は旧鶴岡警察署庁舎（県文化財）で典型的な明治の擬洋風建築として、時代を偲ばせるハイカラな風格を備えていた。

同じ三の丸にある致道館は、言うまでもなく藩校建物の一部が国の史蹟として修理保存され一般に公開されているもの。往時を偲ばせる佇まいで、藤沢周平の描く「蝉しぐれ」の中で、若い武士達の出入りした藩校「三省館」と思いが重なるのも一興であった。

鶴ヶ岡城趾は、現在鶴岡公園となっているが、目下桜が満開で、明日は桜まつりとのことで準備中であった。

天守はなく堀と石垣だけ残っているが、流石に譜代雄藩の城だけあって確かりと広い。

その一隅に、本論の主旨となった先代忠明氏の「今もなお殿と呼ばるることありてこの城下町にわれ老いにけり」の歌碑が緑の中に鎮まっていた。

(3) 余聞

当日筆者は、近郊の温海温泉「萬国屋」に一泊した。館内には、酒井忠明氏揮毫の扁額「今もなお殿と……」が掲げてあった他、食膳のコップ敷に源忠明書「楽山楽水」が写されていた。

部屋付きの仲居を通して館主に確かめたところ、酒井の「殿様」は萬国屋を贔屓にし、足しげく出入りしていたとのことである。

また前日に村上瀬波の宿から酒井氏へのアポイントを取り次いで呉れたのは、氏の令嬢酒井賀

世さんであった。

彼女は、東京の大学で学芸員の資格をとり、致道博物館で活躍している。インターネットに写された彼女は聡明な美人と拝察したが、当日会えなかったのは残念であった。

(二)　望郷のバラード　　まんじ97号所収

このエッセイは、第二次大戦直後にソ連軍に連行され、シベリアのラーゲリに収容された日本人捕虜の極限の生活と、その中の特異な人間関係を描いたＮＨＫのドキュメンタリーがベースである。

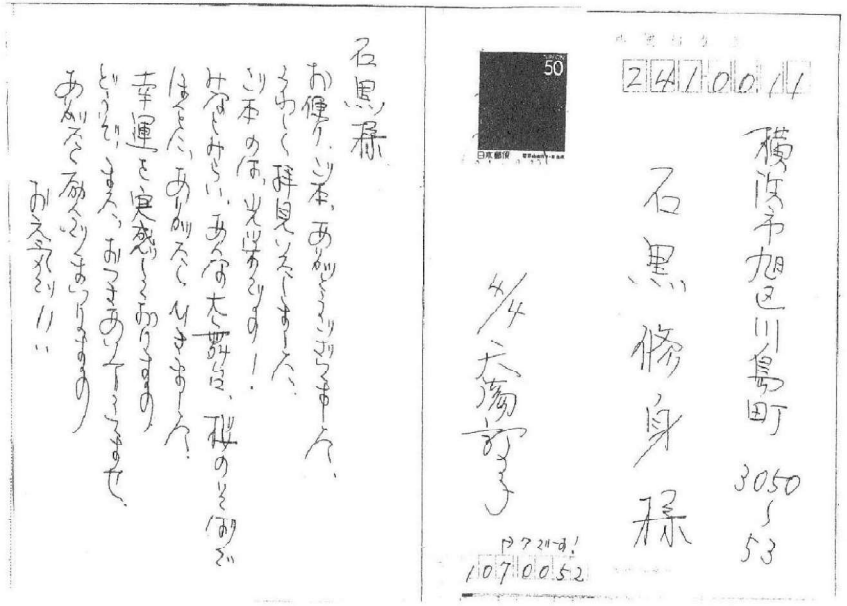
そこに取材された日本人医師が帰国後に出版した懐古録等に出てくるバイオリン曲を演奏する、女流バイオリニスト天満敦子を中心とした記述である。

(1)　天満敦子への手紙

筆者は、音楽には疎い方であるが、天満の演奏会は極力追いかけて聴いてきた。

直近では、三月二十日の横浜のみなとみらいホールでの独演に新鮮な感興を得た。

これを契機として、天満にこの文章が掲載されている、自著「行雲流水」を一連の感想を綴った手紙を付して送った。



それは、どう見ても老人のファンレターの域を出ないものであったろうが、筆者としてはそれなりの思いを込めて書いたものである。

手紙には自作の短歌二首を添えた。

○望郷のバラードを弾く「天満」居て春分の午後横浜は雨

○その風姿素にして清し「ストラド」を夫と尊ぶ「天満敦子」の

(2)　天満敦子からの返信

この一連の行動を見ていた家人は、筆者の熱意を認め乍らも、「天満さんは売れっ子で忙しいので、ファンの手紙にいちいち返事は書かないだろうから期待しない方が良い」と笑っていた。

然し、筆者としては単なるファンレターとは見て欲しくない自負から、天満からの返事を期待する気持は失せなかった。

某日、一片の葉書ではあるが、天満からの返信があった。それは単なるサイン入りのファン向けのものではないと自惚れ、そのコピーを載せる。

今後は、天満の静かなファンとして時折は演奏会に赴きたいが、このような手紙を出すことはもうないであろう。

文中敬称略

(三) マリコ・テラサキ・ミラーを称える　まんじ101号所収

この小論の背景を略記すると、二〇〇六年の叙勲でマリコ・テラサキ・ミラー女史が在外邦人として旭日中授章を受章し来日した。

五月十六日に関係者が催した歓迎祝賀会に縁あって参加し、その際の感懐を十首の短歌に詠み、まんじ101号に掲載した。

当該101号を、この祝賀会の発起人の一人であり、会の運営を担当した北出明氏に送ったものを氏が他の関係者に転送したところ、いろいろな反響があったと言う。

その中で、渡辺幸雄氏（元国際観光振興会事業部長）がこの短歌十首を英文に訳して提供して呉れた。

後日、この小論と英訳された短歌を収録した、筆者の歌集「行雲流水」を祝賀会に関係した人々に送った。

これに対しては著名な人を含む多くの人々から感想を込めた書簡を貰っている。

前述の渡辺幸雄氏が、この歌集をマリコ女史に送ったところ、先頃あった返信の中で、英文に訳した十首につき女史の感想が縷々綴られていると知らされた。

渡辺氏のお許しを得て、十首の英文対訳と女史からの書簡（原文、渡辺氏によるタイプ清書とその訳文）を掲載する。

筆者の詠んだ短歌十首が、マリコ女史の関連の人々のみならず女史本人からこの様な感想となって伝えられたことは、筆者にとり大変光栄で嬉しいことである。

対訳

暗号の「マリコ」は受章す日米のかけ橋の功褒めらるるべし
Code-named “Mariko” is now honored, with an Imperial decoration.
Her merit, bridging between Japan and America, is highly appreciated.

亡き父の志つぎ日米のかけ橋たりし「マリコ」を称う
In line with her late Father's will.
She has been a new Bridge across Japan and America.
“Mariko” we adore and appreciate.

数奇なる運命乗り越え日米のかけ橋たりし「マリコ」はここに
Tiding over fathomless waves of fortune,
“Mariko” has formed the Bridge between Japan and America.
And this “Mariko” is here now with us.

凛として平和を諭す「マリコ」には童女の頃の面影潜む
While preaching world peace resolutely,
“Mariko” still retains her comely juvenile image.

日本語を噛みしめるごと会話する混血の女史老いて美し
She speaks Japanese as if clear cutting each word.
This is a lady of combined parentage, elderly and elegant.

時折に童謡の片句混えつつ日本語で語る稚気愛らしく
Fragments of nursery rhymes oft mingle in her Japanese talks;
Enhancing her charms, girlish and pure-hearted.

亡き父の思い出語る「マリコ」には美丈夫なりし「英成」が映る
In "Mariko" reminiscing about her late father.
We see the image of her gallant father, "Hidenari."

開戦の綾なす秘話を想わする幼き頃の「マリコ」の写真は
Myriad hidden stories about the war breakout are recalled.
As we see the photos of the then little girl,"Mariko"

受章せし「マリコ」は語る厳かな宮中の儀に感激せしを
Decorated "Mariko" recalls the soul-moving excitement she had.
As she attended the solemn ceremony at the Imperiai Palace.

［マリコ］との所縁の人ら集い来て懐旧の談尽くることなし
People related to "Mariko" have gethered for a happy reunion.
Their reminiscing talks come and go one after another endlessly.

マリコ女子からの書簡の原文

Dear Jack-Yukio San,

My abject apologies for the long delayed letter of appreciation to you for sending me the book of Tanka poetry by Mr Ishiguro, Osami.

Being recognized and honored by a distinguished poet is an honor indeed for which I am both grateful and astonished. I am enamored by the title "Sailing Clouds and Flowing Water" and wish that I could read the book in a language that I love.

It was a misfortune that on this extraordinarily wonderful trip that I was feeling unwell, and that it was quite difficult for me. On the 23rd of February of last year I had open heart surgery and have spent a year in recovery, reflection, and triumph over pain. The warmth that I was surrounded with in Yokohama has bolstered my good spirits.

Season's Greetings

I shall always be indebted to you, my dear friend.

Mariko

Ishiguro, Osami has praised me far too much.

渡辺幸雄氏による訳文

３月１５日、２００８年
ワイオウミンにて

ジャック　ユキオさん

石黒修身様による短歌の本をお送りくださいましたのにあなたへの、お礼の手紙が長く遅れまして、ほんとに心から御免なさい。

著名な詩人の方に認められ、名誉を与えられましたことは誠に名誉のことであり、そして感謝なことでありますが、また同時に驚愕すべきことであります。　わたしは「行雲流水」という名前に、心を吸われ、出来ますならば、わたしの愛する言葉で、その本を読むことができたらなあ、と望んでいます。

今回の正に素晴らしい旅行のときに、わたしは実は体の具合がよくなく、事をするのが、ほんとに困難でありましたのは、残念でありました。　昨年の２月２３日に、わたしは胸部の切開手術を受けました、そして快復に一年を費やし、その間、病床で苦痛に勝とうと心しました。　その間、横浜で皆様から受けた温かい心が、わたしの元気な心を増し加えてくださったのです。

わたしの親愛なる友達によって、これからも常に励ましを与えられることでしょう。

マリコ

追伸:：　石黒さんはあまりにも、わたしを褒めすぎていますね。

原文をタイプで清書したもの

March 15th, 2008
Wyoming

Dear Jack Yukio-san,

My abject apologies for the long delayed letter of appreciation to you for sending me the book of Tanka poetry by Mr. Ishiguro Osami..

In being recognized and honored by a distinguished poet is an honor indeed for which I am both grateful and astonished.　I am enamored by the title "Sailing Clouds and Flowing Water." and wish that I could read the book in a language that I love.

It was a misfortune that on this extraordinarily wonderful trip that I was feeling unwell and that it was quite difficult for me. On the 23rd of February of last year I had open heart surgery and have spent a year in recovery, reflecting in bed triumph over pain. The warmth that I was surrounded with in Yokohama has bolstered my good spirits.

I shall always be indebted to you, my dear friends.

Mariko

P. S. Ishiguro-san has praised me far too much.

誘惑のアルゼンチン・タンゴ

森　実与子

子供の頃から運動神経はそんなにいい方ではないのだが、何故か、ダンスに惹かれてしまう。思い返せば、幼稚園や小学校時代にはクラシックバレエを習っていた。私はずっと続けたかったが、受験勉強をするためにやめたわけだから、元来、体を動かすのが嫌いではなかったのかもしれない。

太りたくない一心から、二十代中頃からエアロビクスに通い、いまだに続いている。音楽に合わせて体を動かしているうちに汗がたくさん出てくるので、体内の毒素が出ていくような感じがして、その爽快感がなんともいえないのだ。しかし、エアロビクスは体操の一種にすぎない。どうせ体を動かすのなら、もう少し創造的なというか、アーティスティックな、何かダンスをやってみたいと、三十代に入って思いはじめた。ところが、ダンスの種類はたくさんある。何をやっていいのかわからなくて、カルチャーセンターに足を運んでは、いろいろなダンスのクラスを見学した。しかし、難しい顔をして踊るフラメンコは少しも楽しそうでないし、フラダンスはちょっとおばさん臭いかなとか、どれもピンとこない。

ある時、ゲテモノ好きの友人とエジプト料理を食べに行った。そこで余興で見せられたベリーダンスに、私は魅力を感じてしまった。健康的なお色気というか、ブラジャーとスカートに分かれた派手なドレスを着て、おへそを見せながら楽しそうに体をくねくねさせているダンサーの姿が、面白かったのだ。ベリーダンスは、直訳すれば〝腹踊り〟。お腹や胸をくねくねさせるアラブの踊りで、女一人か、もしくは何人で踊る見せるダンスである。

「私もいつか、場末でいいからアラブ料理のお店にデビューするわ」

と小さな目標を抱いて、週に一〜二回、レッスンに通い始めたのだった。

先生は、ニューヨークからエジプトに渡って、本場仕込みのベリーダンスを教えている日本人女性で、迫力あるボディが売りである。スタジオの大きな鏡の前で、腰にショールを巻き、腰を動かすと、ショールにつけられたコインが動いて、シャカシャカと音がする。その音と体の動きが異国情緒たっぷりで、なんとなくうきうきとしてくる。

基礎的な体の動きはもちろんのこと、曲に合わせた振り付けを覚えるなど、私なりに頑張った。年に一度はエジプトに出向く先生に引率されて、エジプトまでも足を伸ばした。エジプトでは、現地人から直接ベリーダンスのレッスンを受けたり、貫禄あるダンサーが楽団（男たち）を従えて踊る本場のショウを見学したり、市に出かけて衣裳を買ったり、私はやる気充分だった。ところがある日、自分の肉体とダンスとの余りのミスマッチに、愕然としたのだった。

というのも、ベリーダンスは豊満な体ほど美しい。腰や胸を動かして見せるのだから当然だが、私の貧弱な体では、自分では動かしているつもりでも、少しも動きになっていないのだ。同じ頃始めた友人が、早くもお店デビューを飾ったのに、私はいつまでたっても出してもらえなかった。

挙句の果てに、肥満した先生から「あんたたちブスね」と言われ、あっけなく夢は散ったのだった。それまでそういう環境になかったが、すぐに陰口を叩いたり競争心丸出しの女だけの世界が陰湿なことも痛感し、三年余りで挫折したのだった。

こうして、たいして器用でもないし、もうダンスはやるまいと心に誓った。ところが、その後、サルサにはまってしまった。

イギリスに行った時、夜、流行りのサルサクラブに遊びに行き、老若男女がインストラクターから簡単なレッスンを受け、楽しそうに踊っているのをみて「これだ！」と感じたのだった。

サルサはキューバのダンスで、男女ペアでもいいし、一人でも踊れる。とにかく、リズミカルでさわやかなラテン音楽が心地よいのだ。

日本に帰ると早速、レッスンに通い始めた。開店前のキューバ料理のレストランや本格的なダンススタジオやら、何人かの先生について習ったおかげで、二〜三年たって、なんとか楽しく踊ることができるようになった。そして、たまにはサルサクラブへ出かけるようになったのだが、なんとなく居心地が悪い。というのも、六本木あたりのサルサクラブに踊りに来るのは、ほとんどが若い子たちで、踊ることよりもナンパ目的なのだ。

ジーパンのようなラフな恰好で気軽に踊れるのはいいのだが、週末ともなると満員電車並みの混雑で、お客はペルーやコロンビア、ベネズエラあたりの南米人も多い。狭くて空気の悪い空間で、若い子たちに混じって、夜を徹して飲んだり踊ったりするのは、結構疲れる。外国と違って、日本では若い子向きのお遊び空間しかないのだ。とりあえずサルサが踊れるようになったものの、心のどこかで居心地の悪さを感じ、足は遠のいていた。

そんな時、年上の女の友人に誘われのが、アルゼンチン・タンゴだった。

アルゼンチン・タンゴの音楽もダンスも前から好きで、特にピアソラは大好きだ。アルゼンチンからパリに渡って、タンゴにクラシックを取り入れたピアソラの曲は、タンゴに革命をもたらしたといわれる。バンドネオンやヴァイオリン、ピアノの官能的な旋律が、琴線にキューンと染み渡る。

そのピアソラが作曲したオペレッタ『ブエノス・アイレスのマリア』を見た時には、感激のあまり、数日間、心の高揚が続いた。ステージ上で、男女一組のダンスが影絵のように動き、その横で、詩を語るように歌う歌手の歌声に魅せられ、心が揺さぶられた。だが、自分がアルゼンチン・タンゴを踊るなんて夢にも思わなかった。足さばきのステップが難しそうで、とても歯がたたないと感じていたのだ。それに、パートナーとの体の密着度はかなりのものだし、ベリーダンスやサルサのように、音楽に身をゆだねればいいという、いい加減さはない。

ところが、友人のマダムはもう一〇年以上もアルゼンチン・タンゴを習っていて、週に一回、黙々と個人レッスンに通っている。彼女は、麻布十番で一人で喫茶店をやっている。お店をやりながらその片隅で、トンボ玉や琥珀、パール、水晶……など、世界各国の珍しい石を使ってアクセサリーを作っている。そのアクセサリーが縁で、私はマダムと知り合った。

お店の中は、壁には、彼女自ら描いた猫の絵が飾られ、ピアノが一台鎮座し、石やアクセサリーがさりげなく飾ってあったりして、センスがいい。そして、BGMはすべてアルゼンチン・タンゴと徹底している。

「私、アルゼンチン・タンゴの音楽、好きなんです」

BGMの話をしたのがきっかけだったと思う。

彼女にダンスをやらないかと勧められ、最初は断わっていたのだが、再三の勧めで、結局、彼女が習っている教室を見学に行くことになった。

アルゼンチン人たち数人がやっているその教室で、はじめてグループレッスンを体験してみたが、なんと、歩くことさえままならない。ところが、レッスンを受けている人たちは、若い女性や年配の男性など年代はさまざまだが、みなそれなりに上手く踊っているのだ。みなが様になっている中、新参者は私一人で、アルゼンチン人の先生に英語で説明されても、言っている意味がまったくわからない。頭の中が真っ白になってしまい、とても無理だと感じた。

「歩くのも難しくて、ダンスには程遠いわ」

私が嘆くと、

「初めから踊れるわけがないわ。ハードルは高い方が、やりがいがあるものよ。社交ダンスのタンゴよりも、アルゼンチン・タンゴの方が動きは自然なの。動きが激しくないサロン・ダンスといって、年がいってからも長く続けられるわよ」

マダムの言葉に押されて、グループレッスンは断念し、個人レッスンを始めることにした。マダムがついている、アルゼンチン人の男の先生を紹介された。三〇歳になるかならないかの、色白で、ちょっとぽっちゃりしたきれいな男の子である。アルゼンチン人は、スペインやイタリア系の移民なので、世界で一番美しいと聞いたことがある。なるほど、なかなかいい。子供っぽいと感じる時もあるし、妙に大人びていたりもする。彼を前に、私は緊張の連続だ。姿勢が悪い、歩き方がなっていない、体重移動ができていないとか、甘いマスクのわりに、敵はなかなか手厳

しい。

「果たして、踊れるようになるのかしら」

レッスンの帰り道、一人でため息をつきながら歩いた。

ところが不思議なことに、数回過ぎたあたりから、ほんのわずかだが、少しだけ体が覚えたような気持ちになっているのだ。帰り道に一人でほくそえんだりして、ちょっとうきうきしている自分がいる。

レッスン中の音楽は、先生が選択するのだが、ある日、私の大好きなピアソラのタンゴが流れていた。この官能的で、隠微な情熱を秘めた旋律……。まさか自分が、ピアソラの音楽に合わせて踊るとは思ってもみなかっただけに、感激もひとしおだった。

それにしても、アルゼンチン人たちは何を思ってはるばる南半球から日本へやって来たのだろうと、私はかねがね不思議に思っていた。

ある日、テレビで偶然、アルゼンチン・タンゴに関するドキュメンタリー番組をやっていた。アルゼンチン・タンゴのダンサーや歌手が数人登場し、彼らの生活や仕事ぶりを追ったものだった。経済が悪化したアルゼンチンでは、銀行は封鎖されてしまったという。つまり、貯金を持っていてもお金が引き出せなくなり、銀行預金はみなゼロになってしまったのだ。

或る一人の老いたタンゴ・ダンサーは、若かりし頃、アルゼンチンはもとよりヨーロッパ中の舞台で華々しく活躍していた、スターダンサーだった。お金もかなり貯えて国に帰ったが、銀行封鎖によって、財産は、今住んでいる家だけになってしまったという。家族もいない、孤独な老人である。

「なぜ結婚しなかったのか?」の問いに、

「可能性は無限にあった。でもこうなるのが自然だった。……お金がなくなったら、この家を売るしかない。それでなんとか生きていけるさ。今までもそうやって生きてきたんだ」

と屈託なく笑った。

この言葉に、じいんときてしまった。まさに大人のセリフである。八〇歳は過ぎているだろう。顔の皺一本一本が、年輪そのものだ。そして、彼がブエノス・アイレスの街中でさりげなく見せてくれたタンゴのステップは、実にしなやかだった。味わい深い人生が、その軽快なステップに凝縮されていた。

この国の人たちはもはや食う手段がなくなってしまい、番組に登場したダンサーや歌手たちは、仕事を求めて外国に出て行っている。それが現実なのだ。

私は、自分の先生であるアルゼンチン人たちを思い浮かべた。そうか、彼らは家族を養うため、自分たちが生きていくために、好き嫌いでなく、流れ流れて何かの縁で、地球の反対側から遠く離れた日本にやって来て、力を合わせて頑張っているのだ。そう思うと、ちょっと優しい気持ちになれるような気がしてきた。

ステップはたくさんあるみたいだし、相手との阿吽の呼吸もとらえなくてはならないし、アルゼンチン・タンゴの奥は深そうだ。おっちょこちょいの私は、家の中で階段から落ちて足を捻挫し、早くも一ヶ月余りレッスンを休んだりしている。亀のように歩みは遅いが、少しずつマスターしながら、レッスンの帰り道、ささやか幸福感に浸っている今日この頃である。

姉と慕われて

勝山　道子

今までの人生で筆まめな私は、それに相当しての手紙を受信している。その中でも、実に誠意ある一韓国人の朴容鍋の手紙丈は残しておきたい。そしてそれが私の側面からの姿と思ひ、亡くなって三回忌も済み、私を姉と慕うその気持、外国人であるはずが、日本の教育を受けている事もあり、自分を振りかえりながら、朴容鍋との奇遇を記す。

一九二三年生れの私は、両親の仕事の関係で十七才まで朝鮮で過した。父は珍らしく棉作の技師と云う事で、道庁へ勤めていた。所謂官吏、転勤が多く、子供四人の姉弟は、単身赴任しない為、家族六人が、南朝鮮、大邱から北の竜川まで小学校三回、女学校三回、弟達も転校している。

当時植民地の朝鮮でも、教育のことは、帝国憲法に基き、全条を通じ教育の文字はなく、教育のことは教育勅語にすべての方針が納められ、朝鮮での日本人小学校も又、中学校、女学校に於ても、奉安殿と云うものがあって、教育勅語はそこに納められてあった。学校行事のある時は、校長が、奉安殿から出して、奉げて読み上げられた。平素は奉安殿に納められていた。そしてその傍に大抵二宮金次郎の、薪を背負った銅像があった。

明治初年に行われた教育改革が、明治維新を経て、近代国家としての出発であったが、敗戦により一九四六年、天皇の人間宣言によって主権在民の憲法が作られ、ここに教育基本法が成立し六一年になる。学校教育中心に理解するのではなく、国民の教育権つまり、生れてから死ぬまでの学習権を行使することにあると思っていた。その中で社会教育を学び、教育は国民の権利であるとともに、教育のもっている公共性に、一人一人の問題が、どう云う風につながっているか、教育基本法と地方自治の問題を国際社会を含めて教えている。

昭和二十三年、文部省はアメリカの施策に従がって陸海軍省管轄の、国防婦人会、愛国婦人会は解体させられ、婦人会として民主主義に添った婦人教育は社会教育の中で、実践学習と云う方法を取り入れた。これが婦人学級と云う形で、特に農村を中心とした、当時人口二万人足らずの稲城町は昭和三十三年には、三七学級、千人近くが参加し、子供の教育の問題、栄養指導を私も学級生として学び、又世話人も引受けた。そして私も少しずつ変っていった。

社会教育の学者によって、軍国主義に教育されていた私も、婦人会の会員となって、婦人会手帳に先ず、日本国憲法の抜粋、美しい詞の婦人会歌、外国の牧歌、童謡、軍歌ばかり唱っていたのが、婦人会長の、指導で変って行った。又女性の地位向上のため小さな事から実践活動を取り入れ、家計簿の事や、相続と法律を徐々に理解させられ、社会教育関係の講師、助言者の熱心な指導、殊に早稲田大学客員教授　横山宏、立教大学教授　室俊司には薫陶を受けた。

私の人間形成、実生活に於ても変って来た。人権の問題についても、平成十二年度から、教育改革国民会議の最終報告が出されて新たな社会教育法が施行された。

戦前の教育が戦争の道具に使われた事から、戦後は教育委員会は、教育は個人の内面にかかわる大事な学問で、思想の自由等を確保するものとして一般行政と分れた独立行政委員会として出発した。

特に私が重視している社会教育法と云うのは憲法の社会教育法第三条に改正後、社会教育に必要な施設及運営、集合の開催、資料の作成等を含み、これについて学習し最も考えが変ったのは、つまり自己変容したのは、東京都第十回のリーダー管外研修であった。

昭和四十四年、子育ての最中であったが、社会教育委員も勤めていたので、愛知県へ二十名の仲間と共に、一週間の日程で、職員の外、助言者、大学の研究者が附添って行った。研修は最も私が理解しにくい事に焦点をあてた。自治・行政、民主主義、私とどう云う関係なのか。憲法で云われる、

第二十五条　すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国はすべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

……ということの実行である。

つまり皆が困っている事は公民館がない。目的は公民館を建てることにした。助言者である都の職員から、公民館条例を学び、名古屋市周辺の公民館を視察し、青年館、教育会館との違ひもわかった。そして社会教育法を勉強し始めて一週間の研修を終えた。

早速稲城市に於ては地域毎に七館建てる事にした。同時に神戸市等を研修した方々と一緒に、公民館設立の準備を始めた。

昭和四十五年、社会教育委員会が、教育委員会に答申を提出。

昭和四十六年、公民館設置促進会発足。十団体参加。一三九二名の署名。稲城市議会へ提出。
住民にとっては、自由・公開・無料に基いて設置されることになった。
昭和四十七年　設計業者が決り八月工事着工
昭和四十八年　中央公民館
昭和五十年　第二公民館
昭和五十四年　第三公民館
昭和五十八年　第四公民館
平成四年　城山公民館
平成二十一年　iプラザ（十月設立）
この様に当初の構想通り設立している。

一九九〇年、中国瀋陽に於て「成人教育シンポジウム」が一週間の日程で行われる。社会教育関係者、日本、アメリカ、ヨーロッパ、中国から六百人の参加者を募集している事を聞きぜひ参加したいと思った。

日本では既に、横山宏氏を団長とし九州、近畿、関東、東北の学者教授研究生が参加を予定していたが、私は参加出来るか伺った処、社会教育実践家としてぜひ参加する様にと逆にすゝめられた。

参加申込みをし、成田から大連空港に着き列車で瀋陽へ向う。私にとっては六十年ぶりに大地をふむ。列車の外の景色は昔変らぬ広い〳〵広野、農家のたゝずまい、懐しく思わず窓に顔をすりつける。停車駅、記録もつけずひたすら景色を眺める。停車駅の近くは近代的な建物があるが、

過ぎるとポツン〳〵と農夫の姿が見えるだけ、純朴の姿は昔と変らぬ様。

瀋陽駅に着く。広場に立てば、かつての満人服ぞろりとした長い衣裳は一人もいない。こざっぱりした背広、ブレザー、日本人と変らぬ。

高層ビルが立ちならび、又足場を組んで建築中の建物もある街、さすが五百万人からの工業中心の活気ある都市、翌日シンポジウムの開会式場は広大なホールで行われた。入口には〝熱烈歓迎〟と漢文と英語で書かれた横断幕。式は児童の歓迎の可愛いダンスから始まった。ヨーロッパ一ヶ国、アメリカからは、社会教育の最も進んでいると云う、ノースカロライナ州、中国は各省からの代表、三百人以上であった。

代表教授は日本は上原教授が、戦後からの社会教育の経緯を丁寧に話され、私には自分が学んだ道のあたかも復習の様で、貴重な発表であった。

アメリカよりは社会教育の施設、教材、講師陣、受講者の数が克明に報告され、カリキュラムは確実に実践されている点、大いに参考になった。

中国の発表は人数は多いが、社会教育と云うよりは職業教育の方法手段としての製縫（ミシン）、工具機械の操作の実習講義、つまり職業訓練で、経済優先の国情を思う。二日間の後、分科会の話しあいになった。これ等の通訳は英語は瀋陽市長、中国語・日本語は瀋陽教育委員会職員、朴容鍋の二人が実に精力的に活躍し、殊に日本語に関しては適確で、私の様なものも充分満足した。

そして最後に観光と云う事で朴氏が担当し、日本のわれ〳〵を満州事変勃発地柳条湖、又戦前の慰安婦の宿舎へと案内した。宿舎の窓の格子のサビが物悲しく思へた。朴氏の説明は淡々としていた。愈々挨拶して別れる時、私に朴氏が近づき、「私は韓国人で幸い、英語、日本語、韓国

語、中国語が出来、瀋陽市の教育委員会に長く勤めております。母が勉強するなら日本の学校がよいとすすめ京城にあった、昭和工業学校へ留学しました。三浦校長は日本にある全財産を投入し校庭に小型飛行機まで設置、教育に捧げた方で多摩墓地にお墓があり、おまいりしたいので世話して下さい」と申し出た。私は突然な事で団長横山氏に相談した。

「やめとけ、年よりを日本に連れて行くのは難しい」と反対された。ところが帰国の準備をしている処に再び来て「母の努力で昭和工業学校に行く事が出来、父が早く亡くなったので母から創氏改名はしない様にと云われていた。

或る時学校に憲兵が来て、十一人の学生を創氏改名しない丈でなく抗日の態度があると連行し様とした。その時校長が「この子丈は連れて行かないで呉れ」と朴の手を引っぱった。

憲兵も校長と面識があったので朴一人を置いて十名は連行された。ですから校長の墓前にまいりたいのです」と話しました。あまりの熱意に帰国後手続しましょうと約した。外務省に相談に行ったが十五項目、これは資産、確定申告等がいろいろあるが外務省と貴殿（つまり私）の事と云われ早速取り掛かった。併し朴氏の交通事故等があり、三年近く文通と電話をした。彼との交かん文書は袋を決め、朴さんバックはいっぱいとなった。実現出来た恩師の墓まいり。旧友と共に校歌合唱、三浦校長未亡人の厚遇、すべて彼の長い手紙に書かれ私は幸せだと思っている。

勝山道子姉上様

拝啓

姉上様のやさしく御いつくしみの溢れた誠意のお心が滲み出る荷物は、昨日（五月一八日）

瀋陽の駅の国際郵便に行って受け取って参りました。丁度日本から帰って来て一ヶ月目でございます。帰って来てすぐ感謝のお手紙を差し出す積りでしたが、京都での登山で無理をしたのがたたったのか、腰の痛みが再発し（日本では夜うずく程度でしたが）手までしびれる様になりもう一回薬物治療と気功療法をし一寸辺鄙（へんぴ）なところに行って来たからお手紙を出すことができず「恩知らず」と御立腹のこと、思ひましたがやむ得ず、今日やっとペンを執れるようになって何とも申し訳ございません。

思いかえせば、五十三年ぶり、日本に行って恩師の墓まいりが出来たのは、ひとえに道子姉さまの深い慈しみのお蔭だと私ばかりでなく全家族が思っていますが、何しろ日本語が話せる娘は浜松に行っているし、こちらには誰もいないので只あせるばかりでやっとペンを手にしたのが先回の手紙でした。そればかりでなく三浦浜江恩師奥様の御配慮で、箱根や、あしの湖に行ってみたし、五十三年ぶりに皇居前や丸の内へ行って見たし、京都や奈良、大阪への旅も出来ました。

しかし帰って来る時は、まるで夜逃でもする様に東京にまで戻っていながら、稲城には帰って行かず無礼千万にも電話でお別れを告げたのでした。勿論云ひわけや弁解のようですが成田空港でお電話を差し上げるとき、私の腰の痛みと背中の疼きはクライマックスに達していました。しかし娘に知られたら心配するだろうし、やさしい姉上様や、三浦浜江御母様に知られても良くないので、ひたすら神にすがり、歯を喰いしばって痛みと疼（うず）きをずっと堪えていました。

瀋陽に着いてからは家族にはかくし切れず、止むを得ず病院へ行って、レントゲン写真を

撮ったりCTをしたら、こんな状態で日本にまで旅行に出かけ一ヶ月も居たばかりか山登までしたなど話したら「信じられない！　行けた筈がない！」と云うので航空券を見せたりお土産の煙草のプレゼントをしましたら「奇蹟だ、奇蹟だ」と驚いている程でした。

勿論家には帰ってから家族にはこんなひどい程度は内緒です。何故なら私の病気の程度を知ったなら、私に対する制限が多くなるばかりか、心配もするし、家庭の平和的ムードが破壊されると思ったからです。しかし神様の御加護があったのか、薬が効いたのか、仏様の慈しみか？　約一週間前から先ず手のしびれがなはり、腰の痛みや膝の関節の痛みや「うずき」も少しずつよくなったので家に帰ってきたら、郵便局からの通知があったので早速郵便局へ行って小包を受取って来ました。そしてそのダンボールの中の一つ一つの想ひ出のあかしを手にしたら、もう一度日本に行ってからの幸福な一齣一齣のフィルムが私の頭の映写機によみがえりまして、自分も知らぬ間に目頭がまぶたが熱くなりました。約二週間稲城に於ての御姉様との生活は幸福感に満ちたりたパラダイスの日々でした。

威光寺に於ての雅（みやび）な民族楽器の演奏を聞くときのその瞬間、寛ぎの夕食や食後のデザート、本当にその一つ一つが想ひ出です。それから京都や奈良での日々は楽しく意義のある、一生涯忘れることの出来ない日々の連続でした。それも勝山御姉様のお蔭さまで人生のエンジョイをすることができたのです。中国の昔話にたった一晩の人生のエンジョイをした夫が思ひ切れず「中略」朴容鍋が一生七一才を生きていましたが、その間で寛ぐことの出来た人生としてのエンジョイをすることの出来た時間の総和は、稲城に於て勝山お姉様と過したその日日に如かないと思っています。

手紙が冗長になりましたが、本当に稲城の生活に於てまた私が深い感銘を受けたのは先生を通じて付き合った婦人会の方々です。

富永ヨシ子先生をはじめとする皆様は、心の奥行が深く人間として最高の心を持っていらっしゃる方々でした。見も知らぬ中国の私に対して少しの違和感も持たずに接して下さったばかりか、カンパまでして下さって、だから私はこの方々と話す時は感激で、声までふるえたのです。もうちょっと長く座れることが出来、手の痺（しびれ）がよくなったら必ず感謝のお手紙を差し上げます。この方々の眼差（まなざし）し、同情心に溢れ暖かさ和やかさに満ちたそのまなざしは、全身に暖流がめぐる思ひが当時もしましたが、今もその眼差しを思ひかえすだけで全身のすみずみにその暖流が流れる気がします。特に、富永先生のその暖かい眼差しは永遠に忘れられません。だから私はこの方々が永らく生きて日本人の幸福のため、世界の人々のまことの幸福のため盡して下さいと、毎日祈りつゞけています（後略）。

最近はまだ腰が不自由な為、出歩きはちょっと不便ですが、六月三日頃からよくなると思ひます。それから原先生にも三年にわたって私の赴日のために奔走して下さった上、私にカンパして下さった恩は忘れられないと伝へと下さい。私の方からも後日手紙を差しあげると申して下さい。娘さまお孫さまにも稲城の宅で御世話になったこと等、書いても書いても書きつくすことは出来ない思ひをあずけて、今日はここでペンを置かせて頂きます。全家の幸福を祈りながら……

一九九六年五月一八日

愚弟朴容鍋敬上

墓参

新井宏

韓国国立慶尚大学のある晋州市は、釜山の西に百キロ、今は人口三十万人の学術都市に過ぎないが、かっては朝鮮南部の政治、経済、文化の中心地であった。明峰智異山に源を持つ南江が中心街をうねり、壬辰倭乱（文禄の役）の時に、近隣の住民達が六万名、立てこもり全滅した悲劇の晋州城はその北側の畔にある。

姜東湖先生の墓地は、その晋州城の北十キロほどの山間の地にある。集賢面と鳴石面の境界に位置する峠の斜面に百坪以上はあろうか、立派な石組みの上段には姜先生の御尊父と御母堂の円墳墓がふたつ並び、右端に御尊父の事績碑が建っている。末広がりになっている中段も石組みで支えられていて、第二世代の墓所に当てられ、その左端に長男である姜東湖先生の墓銘碑と円墳墓がある。下段はまだ整地されていないが第三世代の墓所予定地である。南面した墓所からは、姜先生が生まれ育った鳴石面の旺旨里が一望できる。

姜家はこの地域の名家だった。墓所を含む一帯の姜家の山林からは良質な砂利が採れて、大い

に潤ったと聞いたことがある。鳴石面のいわれも豊富な石材によるのかも知れない。

もう十回以上は通ったであろうか。姜東湖先生が亡くなられてから四年、晋州市滞在中の休日と言えば、自然と足が向う。バスも時折通うが、大学宿舎のゲストハウスから往復二十五キロ位を歩くのが真の墓参のように感じている。

いくつもあるルートの内で、最も気に入っているのは、新しくできた山間の自動車道である。日本よりも更に道路建設狂の韓国では、めったに車が通らぬ立派な道路が次々にできている。姜先生を想いながらの散策には好適である。

散策を兼ねての墓参は、今度で終りになるかも知れない。最初、妻から二年間の許可を貰って始めた韓国通いも既に八年目。妻に言われるまでもなく、七十歳は引き際である。大学側では、大学院コースでの外国人教授を必要としているとかで、残ってほしいと言ってくれるが、引き止められる内が華である。

そうは言っても、あまり身勝手もできず、大学側の事情も考慮して、名目だけはあと半年ほど任期を延長したが、もう長く滞在することはあるまい。

思えば、私の韓国生活はまったく姜東湖先生のお陰であった。『まぼろしの古代尺』と言う本を書いて、朝鮮半島に起源を持つ「古韓尺」を世に初めて紹介したのが十六年前。この本が韓国で翻訳されていたこともあり、慶尚大学で講演をする機会があり、日本文化研究所長をされていた姜先生から経歴を知らせるようにとの連絡が入ったのが平成十二年の夏。

ここで事前にハングルで準備していた自己PRの履歴書が役に立った。定年後、韓国で歴史や考古学の研究をしたいとの希望を持っていること、その代わりに、金属工学ではちょっとした勲章を持ち民間企業で技術系役員として働いた経験もあるので、大学院生や企業人にユニークな教育ができることなどを、少し大げさに書いておいた。韓国語を学んでいることももちろん強調しておいた。

ここが姜先生の素晴らしいところであった。早速、金属工学科の主任教授の許甫寧先生と相談し、どんな形式であれ、「新井先生を招聘すること」を直ちに決めてしまわれたのである。

晋州の春は遅い。まだ緑が潅木や枯れ草に埋まったままで、まったくの冬景色である。しかし、墓地に向う道筋の陽だまりにはひっそりと緑が芽生えていて、まもなく一斉に芽吹く時の美しさを予感させてくれる。

姜先生が生まれ育った故郷の旺旨里から市内の晋州中学校に通ったのは、この自動車道に平行して走る旧道沿いである。自転車も使ったように聞いているが、登り降りの多い坂道であり、片道一時間はかかったのではなかろうか。

歩きながら想い起こすのは、姜先生の、ちょっとはにかみを浮かべた凛々しい写真姿である。実に写真映り良い方であった。おそらく、少年時代も紅顔の美少年で、息を弾ませて通った道筋が似合っていたであろう。

姜東湖先生は一九三一年十二月三十日生まれである。太平洋戦争が終わったのが中学一年生の夏であり、授業よりも晋州市に隣接する泗川飛行場の建設に動員される日々であった。当時、晋州市には日本人が多く住んでおり、晋州中学校は主として日本人のための進学校であったが、現地育ちでも成績優良者は入学を許されていた。後に、日韓親善に大きな役割を果たす晋州会の中心メンバーは、この晋州中学校の同窓生たちである。

戦後六年制となった晋州中学校を卒業した姜先生は、一九五一年の秋にソウル大学の法科大学に進む。その前年の六月二十五日に始まった朝鮮戦争は、国連軍が釜山まで追い詰められた後に、米軍の仁川逆上陸と北進で、今度は中国が参戦、戦局は膠着状態になっていた。ソウル大学も釜山に避難している最中であったが、休戦協定の成立を経て、大学もソウルに戻り一九五六年には卒業して法学士となる。

韓国には戦前ソウル大学しかなかった。太平洋戦争後の米軍の軍政下で急遽いくつかの大学が認可されたが、質的にはソウル大学に比すべくもなく、独立後を支えるべき知識人層は極めて手薄であった。

姜先生が、新設なった国立慶尚大学教授に迎えられたのは卒業後間もなくの一九五九年である。一九八一年から十年間、法経大学学長、法科大学学長などの要職を歴任されたが、脳出血とその後遺症のためいったんは第一線を退かれた。しかし、歩行障害などは残ったものの順調に回復、その後も大学校付設の日本文化研究所の設立に参画され、所長を兼務される等の活動を続けられた。

したがって、姜先生が晋州市の名士であることは言を待たないが、驚愕したのは八百組の結婚式の主禮を勤められたことである。韓国の主禮は、日本の媒酌人、欧米の神父、さらには来賓代表を兼ねたような役割であるが、八百組と言うのは想像を絶する。韓国でも結婚式は土日に集中するので、時には一日に三組も駆け巡ることがあったと言う。だから、晋州市内を先生と一緒に歩くと、実に多くの方が先生に挨拶をして行く。

結婚式と言えば、ある時、姜先生が主禮をつとめるので、結婚式に参席しないかとのお誘いがあった。無関係な者が出ても良いのか、ちょっとためらったが出席して驚いた。会場は市内でも有名な韓式レストランの式場。末席にでも、座らせてもらう心積もりであったが、雰囲気がどうも異なる。当地の結婚式は、結婚式に結婚披露宴のイントロ部分をくっつけたようなものであるが、着席は自由で、しかも全くしまりがないのである。

「いいからここに座りなさい」と姜先生が案内して下さったのは、最前列の左側。どう見ても主賓格の席である。

新郎の友人が司会をするあたりは、日本と同じであるが、とにかくびっくりしたのは、結婚の誓いや主禮の祝辞の最中でさえ、私語が絶えず、ざわめいていることであった。式場と外部のロビーの扉は開いたままで、ロビーでの歓談が聞こえてくる。厳粛さなどとは全くほど遠い。

結婚式が終わると食事になるが、これがもっと戸惑う。主禮ともなれば、両家から丁重にもてなしを受けるのかと思いきや、勝手に「披露宴会場」まで行って、勝手に食事をして帰るのであ

る。たしかにこの方式なら八百組も可能だと納得したが、テレビで見たソウルの結婚披露宴は日本と同じようだったので、地方色なのかも知れない。それにしても姜先生の名士ぶりは大変なものであるが、尊大なところが全く見られないのが心地よい。

姜先生の参画された慶尚大学の日本文化研究所は、今も韓国における日本語教育のメッカである。日本の士官学校に学んだ朴大統領は、産業近代化や教育制度の充実、山野の緑化に多大な業績を残したが、反日風土の最中に、慶尚大学に日本語学科を初めて設置した。初代の日本語教授は、朴大統領自ら指名した外交官出身の李相濮名誉教授で、私も大変親しくさせていただいている。韓国の全ての学会がソウル所在の大学に本部を置く中で、日本語教育学会だけが慶尚大学にあるのもその歴史ゆえである。

初代の李相濮先生は、大学における日本語教育の基盤を支えるために、基金を有する日本文化研究所の設立を望んでいたが、全くの四面楚歌であった。日本語に近づくことさえも忌避されるのが一般の雰囲気の中で、姜東湖先生だけが、毅然としてその推進役を引き受け、在日韓国企業人などを訪ね、財政基盤の確立のため奔走された。法科大学学長等の要職にあったことも学内の雰囲気を変える大きな力となった。

姜先生は、真に日本ひいきの硬骨漢で、しかも日本語が完璧であった。小学生の頃から、真田幸村や猿飛佐助、霧隠才蔵を耽読し、後年になってからも、美空ひばりや都はるみの演歌を口ずさむなど、意外な面を持っておられた。もちろん、日本の書物も多読されており、日本語でお書

きになったご自身の論文をチェックしてほしいと言われた時など、古風な表現があっても、格調高いものであり、とても修正する気持ちにはなれなかったほどである。

その姜先生は、韓国の非差別民「白丁」の開放運動、すなわち晋州市で起った衡平運動についても強い関心を持っておられた。

五年ほど前のことであるが、姜先生の友人、金仲燮教授の著書『朝鮮の被差別民・白丁その歴史とたたかい』の日本語版が企画された時、在日の方が翻訳を担当したが、原稿をご覧になった姜先生が大幅に手を入れられた。拝見すると姜先生の修正の方が内容的にも、言葉としても圧倒的に優れているのである。ぜひ監修者としてお名前を載せられるようにお薦めした結果、やっと了承して下さった。姜先生の日本語の書物はこの一冊なので、私としても良かったと思っている。

ところで、この衡平運動は、日本における非差別民解放運動と対比すべきものなので、そこから姜先生に左翼的な思想を汲み取るとしたら大間違いである。むしろ、姜先生が敬愛していた叔父が北朝鮮ゲリラにより処刑されたことで、徹底した北朝鮮嫌いであった。要は、反日や反共などに囚われず自由人であったということである。

それは、非差別民問題に関連して行われていた大阪の和泉市と晋州市の間の交流にも見られる。姜先生は、両市の交流を単なる社会、文化、学術的なものに留めず、日韓の小学生のサッカー交流として定例化し、交流を一般市民レベルまで拡げられた。姜先生が亡くなられた時に、和泉市でわざわざ追悼集会が行われたほどである。

姜先生には五歳年下の弟、姜東鈺さんがいる。晋州市内の有名な女子高校の校長先生をつとめられた方で、姜先生とは別の意味で好男子なのであるが、顔は全く似ていない。失礼ながら、母親が違うのかと思ったことさえあるが、実に兄想いの方である。

この東鈺さんもまた日本語が上手なのである。日本語の教育を受けた世代ではなく、日本で生活したこともないのに、日韓の学校間の交流などを機会に独習したという。ＮＨＫテレビを見ていて、判らないことがあると直ぐに姜先生に電話して確かめるほどの熱心さなので不思議ではないが、足掛け八年も韓国に通っていて、東鈺さんと話す時は日本語になってしまうのだから、ちょっと恥ずかしい。

その姜先生兄弟が日本に見えた時、北海道を旅行された。日本語に不自由のないおふた方なので、東京発の格安四日間のツアーを紹介したところ、大変によろこんで頂けた。誰でもそうであろうが、正規の航空運賃にも満たない割安な費用で、しかも収穫の多い旅行であったならば満足感がある。

それと共に、私達夫婦でお二人を鎌倉などにご案内したことも大変に喜んで頂けた。よほど鎌倉がお気にめしたようで、その後、お会いする度に鎌倉の話題になった。

そのこともあってか、姜先生はしきりに韓国の済州島に行こうと私達夫婦を誘って下さった。おそらく、鎌倉の返礼の意味であろうと、何かと理由をつけて、延ばすようにしていたが、これ以上に遠慮していてはかえって失礼になるかと、ご一緒することにしたのが、平成十五年の十月である。

済州島はもちろん韓国最大の観光地。今でも、教え子達が新婚旅行地として出かけて行く。死火山である標高一九五〇メートルの漢拏山ひとつでできあがっている島には、日本や中国からの直行便もあり、高級ホテルも多く国際会議などの誘致も盛んである。

私達夫婦はいったん晋州市に入り、姜先生兄弟と合流して、近くの泗川空港から済州島に向った。この泗川空港は、中学生になったばかりの姜先生が建設に動員された飛行場の後身で、今でも軍用機の発着が優先している。

済州島は人口五十五万の小さな島でありながら、大型機の発着がひきりなしである。年間五百万人を越える観光客のほとんどが、航空機を利用するので、関西空港にも匹敵する規模なのである。姜先生は、この歴史もあり温暖で近代化された済州がとても気に入っておられ、三日間の日程で宿泊ホテルから観光案内のタクシーまで全て準備して私達を招待して下さったのである。

漢拏山を中心とした三百六十にもおよぶ群小火山群は、韓国で初めてのユネスコ世界自然遺産であり、その中でも、島の東端にある城山日出峰は奇景である。直径六百メートルの火口が百メートルほどの高さの断崖で取り囲まれており、城塞のような様相を呈していて、おそらく世界中でも類する所がないのではなかろうか。

三日間で島の観光地を一巡した。司馬遼太郎がわざわざ『街道をゆく・耽羅紀行』を書いた地である。徐福伝承の地でもあり、かっては耽羅国として独立していた土地柄。モンゴルが十三世紀に高麗朝を屈服させた時、この済州だけを直轄領として、モンゴル騎馬軍の保駐屯地としたの

も、草原の地だからだった。李朝時代は政治犯の流刑地でもある。
印象に残ったのは、オランダ人ヘンドリック・ハメルが漂着した西帰浦で、それはちょうど三百五十年前の出来事であった。徳川家康がウイリアム・アダムスやヤン・オーステインを活用したのに較べ、李朝はハメルを囚人扱いして、近代化に乗り遅れる流れを作ってしまった。一度は、文化比較として書いてみたいテーマである。

それより何より、びっくりする事があった。
たまたま泊ったホテルで、そのホテルのカジノのレストラン責任者をしている岩永さん夫婦に再会したのである。岩永さん夫婦には、前に慶州の朝鮮ホテルに泊った時も会った。妻が、変体仮名の仲間たちと利用していた寿司屋の二代目で、韓国人の奥さんと共に、ホテルの日本食店を任されていたのである。その後、済州島に場所を変えたことだけは知っていたが、泊ったホテルでの偶然の出会いであった。
「顔の広い」ことを韓国では「脚がひろい」と言うが、姜先生兄弟の前で、ちょっと誇らしい気持ちになって、楽しいお酒と食事となった。

その済州旅行が、姜先生との楽しい思い出の最後となった。その後まもなく、体調を崩され、入退院を繰り返す日々となってしまった。
発病される直前、ちょっとした事件があった。済州で撮った写真を、とりあえず普通の用紙に大きく印刷してお持ちした。満足そうに写真をご覧になった後で、「実はちょっと親族の事で困ったことが起っていて……」と話されたのである。内容は伺わなかったが、「前の大病の時に死んでいれば良かった」と奥様に言って、「死んでしまっていたら新井先生と旅行もできなかったでしょう」と叱られたとも言われた。
親族のことにしては大袈裟なと思っていたが、実はご子息がキリスト教に入信した「事件」が起ったのである。それは、幼い頃から、儒教の祭祀に際しては、祖父の代理まで勤め、守り続けてきた名門儒家の伝統が、足元から崩れて行くような、耐え難い想いだったのであろう。
最後の旅行を共にし、しかも身内でもない私に「事件」について話されたのも不思議なご縁であった。

姜先生の墓地には、墓銘碑が建ち、前面にはハングルで追悼詩が刻まれている。

嗚呼　姜東湖学長
姜東湖学長　あなたは二十世紀、この国の法学者、
社会指導者
法が花のようにぱっと咲く温かい社会
その社会を築くため庭を拡げ
その社会を築くため早馬のごとく
地域や機関を問わず年中無休で奔走した
あなたは　あなたはこの社会を築くために生れた人

ひとを愛し分かち施し
この地を愛して信頼の香りを醸成し
文化を愛し　韓日親善に火を灯し　志高く歩んだ
あなたのこの力は　孝心の花びらから出て
雪のように美しい奥様の支えから生れた
嗚呼　姜東湖学長
誰も行くことのできない道　その道を行ったひと
あなたは　あなたは二十世紀　この国の法学者
社会指導者

詩　カン・ヒグン

おそらく、散策を兼ねての墓参は、これが最後になるだろう。こんど来る日は、タクシーでの墓参になるかも知れないが、この小文をそっとお供えしたい。

『まんじ』は姜東湖先生の愛読書であった。

ジョン・グレン、向井千秋さんなど七名の宇宙飛行士搭乗のスペースシャトル・ディスカバリー号打ち上げ見学記

吉田豊　吉田崇　吉田忠雄

1　はじめに

機会に恵まれ、私たち三名はジョン・グレン、向井千秋両宇宙飛行士の二回目の宇宙飛行となるスペースシャトル・ディスカバリー号の打ち上げを見学する事が出来た。一九九八年十月二十九日十四時十九分（現地時間）に打ち上げられた今回のスペースシャトル・ミッションは世界で大きな話題となった。一九六二年に米国人として初めて地球を回ったジョン・グレン宇宙飛行士が再び宇宙に行くからである。彼はその後オハイオ州選出の上院議員となり、現在七十七歳の高齢である。クリントン・アメリカ大統領もヒラリー夫人を伴って打ち上げの見学に来られ、米国のこの打ち上げに対する関心の深さを示した。

私たちの見学は、ココビーチにあるダブルツリー・ホテルを基地としてバスツアーで行われた。恐らくクリントン大統領をはじめとする要人が集まるので、ココビーチのホテルは予約が取れず、私たちはオーランドのホテルから一時間をかけてダブルツリー・ホテルまでタクシーで通った。

そのために十月二十七日に行われた宇宙開発事業団（ＮＡＳＤＡ）主催の謝恩パーティには出席できなかった。

見学は二日にわたって行われた。十月二十八日はケネデー宇宙センター（ＫＳＣ）の見学及び今回のミッションの日本人見学者のためのブリーフィング（説明会）である。二十九日は世界から集まった人々に対するブリーフィングと打ち上げの見学である。

今回の見学は後述するように幾つかの幸運に恵まれた。又、快晴の下に打ち上げが行われ、宇宙実験は順調に終了し、オービター（軌道船）は無事着陸し、乗組員は全員健康で地上に帰還した。

2　十月二十八日：打ち上げ前日

朝五時四十五分にオーランドのホリデーイン・エクスプレスをタクシーで出発し、夜明けの道をほぼ一時間かけてダブルツリー・ホテルに着いた。直ちにＮＡＳＤＡの受付で参加登録を済ませた。持参の朝食ホットドッグを食べ、ホテルの裏の海岸を散歩した。フロリダの大西洋の海岸は美しい朝景色であった。ハリケーンが中米にきているためかかなり高い波が海岸に打ち寄せていた。

七時四十五分にＮＡＳＤＡバスの一号車でダブルツリー・ホテルを出発した。このバスには、内田勇夫ＮＡＳＤＡ理事長、大沢弘之元ＮＡＳＤＡ理事長夫妻、小宮山洋子参議院議員などの要人が乗っておられた。その他宇宙開発委員会の専門委員である山中龍夫横浜国立大学教授や向井千秋さんの出身研究室の河田慶応義塾大学教授も乗車しておられた。

ＫＳＣにむかう途中に車の渋滞があり、私たちの車が停車中に隣にジョン・グレンさんとカーチス・ブラウン船長の乗った車が停まった。バスの中は一瞬どよめいた。私たちは現在アメリカ中の話題を攫っているジョン・グレンさんを五メートルの近くに目の当たりにしたのである。その後すぐに、その後の車に向井千秋さんが乗っていることを誰かが告げた。幸いに向井さんの乗った車もバスのとなりに停まった。向井さんも隣のバスに内田理事長、河田教授その他知り合いの方々が乗っているのに気がついて手を振った。同乗のペデロ・デューク及びスコット・パラジンスキー両飛行士も奇遇に驚いているようであった。写真を撮ることが出来た。ビデオも撮ることが出来た。私たちは大きな幸運に恵まれた。

私たちはまずＫＳＣのビジターセンターに行き、そこで時間調整をした。ついでＮＡＳＡのバスに乗り換えてＫＳＣに行く。世界第二（正確には世界第三）の容積を持つスペースシャトル組み立て棟の側を通り、クローラ・トランスポータ（シャトル運搬車）の通行道路（クローラウェイ）に沿ってシャトル発射台（ランチパッド）三九Ｂに向かう。クローラウェイには砂利がしかれており、シャトルと運搬車の重量約五千トンを支えると言う。途中運搬車が停まっており、そこで降りて写真を撮る。

再びバスに乗ってランチパッド三九Ｂに向かう。途中道路の右側の建物の陰に宇宙飛行士たちが居た。都合よく近くに検問所がありバスはそこに止まった。はじめ向井さんは建物の陰に隠れて見えなかったが、向井さんは理事長はじめ関係者の乗っているバスに気が付いて、私たちの見えるところに出てきて手を振った。更に責任者の粋な計らいによって、向井さんはグループから

離れて少しバスに近づいた。そして慶応大学の河田先生と大きな声を交わした。

バスは三九Bランチパッドの近くの駐車場まで行き、各人はそこで下車して写真撮影やビデオ撮影をした。三九Bには、十二月に宇宙ステーション組み立てのために打ち上げられる予定のスペースシャトルが装着されていた。向井さん等が明日搭乗予定のディスカバリー号は三九Aに装着されている。発射台に装着されたスペースシャトルのオービターには箱がかぶされている。これはオービターを雨や塵などから守るためだそうである。

再びバスに乗り三九Bランチパッドを後にする。先ほど向井さんたちが居た所を通ると、反対側の二条のクローラウェイの間の芝生の上に七名の宇宙飛行士とカメラマンが居た。バスは徐行した。向井さんがバスに向かって手を振り、他の宇宙飛行士も手を振った。グレンさんも手を振ってくれた。宇宙飛行士は打ち上げ前は普通の人から隔離されている。打ち上げ前日に私たちが宇宙飛行士を比較的近くで見られる事は予期されない事であった。

それからアポロ記念館に行き、そこで打ち上げ関連の映画及び模擬打ち上げ管制室での打ち上げシミュレーションを見学した。次いで、月旅行に使う予定であったが実際には使われなかったサターン五型ロケット、宇宙船、月着陸船などを見学した。ここにはその他月の石も展示されており、これは手で触れる事も出来る。又実際に月旅行に使われた底が焼け爛れた宇宙船も展示されている。

次いで宇宙ステーション関連施設の見学をした。ここでの最大の見物は組み立て中の米国の宇宙実験棟であった。この大きな円筒形の実験棟がスペースシャトルに積まれて十二月に打ち上げられ、十一月にロシアから打ち上げられた動力棟とドッキングするのかと思うと感無量であった。

十三時三十分からは、ビジターセンターの宇宙劇場ＩＭＡＸ２において今回のミッションのブリーフィング（説明）が行われた。まず、現在のシャトルの準備状況は順調であり、天候は問題ない事が報告された。次いで各宇宙飛行士の紹介、ミッションの目的と内容などが説明された。特に、米国人として初めて地球の軌道周回飛行をし　現在オハイオ州選出上院議員であり、七十七歳の高齢であるジョン・グレン宇宙飛行士についてのエピソードが紹介された。グレンさんは一九六二年最初の宇宙飛行でゴッドスピードとゆう名を与えられたが、ここでも用いられた。ブリーフィングの後私たちはココビーチ経由でオーランドのホールに帰った。

3　十月二十九日：打ち上げ当日

朝六時十五分にオーランドのホテルをタクシーで出発し、七時二十分頃ココビーチのダブルツリー・ホテルに到着した。今日は雲一つない快晴である。受付を済ませ、ホテルのレストランで朝食を摂り、応接室でバスを待った。ＮＡＳＡから女性の広報部長と男性の参事官が案内役として来られた。

ＮＡＳＡのバスは予定より遅れてホテルを出発した。まずＫＳＣビジターセンターに行き、時間調整の後、十一時十五分からＩＭＡＸ２においてＮＡＳＡ副長官等のブリーフィングを聞いた。予定ではゴールディングＮＡＳＡ長官が自らブリーフィングを行う予定で有ったが、クリントン大統領がシャトル打ち上げを視察される事になったので、長官は大統領の付き添いをする事になった。

ＩＭＡＸ２は世界各国からの招待者によって満員になった。ブリーフィングの前半で、今回の打ち上げに関係した国から参加した要人が紹介された。日本代表は内田勇夫宇宙開発事業団理事長である。ＩＭＡＸ２の最前列に着席していた氏は、名前を呼ばれ紹介され、後ろを振り返って満員の聴衆に会釈した。

私たちを乗せたバスは十三時頃ビジターセンターを出発し、バナナクリークの打ち上げ観覧席に向かった。私たちは観覧席の最上段に陣取り、シャトルの打ち上げを待った。各国の人々が続々と集まってくる。若田さんや土井さんが観覧席の前で色々な人と話をしたり、記念撮影をしている。人々がその周りを取り巻いているのは、ボクシングのヘビー級世界チャンピオン・ホリフィールドである。

Ｔ－二十分のホールドが始まる。予定通りこのホールドは打ち上げ三十分前に終了し、カウントダウンが再開された。次に九分前のホールドに入った。しかし、予定の十分が過ぎてもこのホールドは解除されない。心配したが、このホールドは二十九分後に解除された。拍手が沸いた。この遅れは、識別できない飛行機が警戒区域内に入ったためといわれる。

米国国歌が吹奏される。見学者は全員起立し、帽子をとって、国旗に向かい、国歌を斉唱する。前二回の打ち上げ見学では国歌斉唱はなかった。今回は、米国大統領が現地で打ち上げ視察を行う米国民期待の壮挙だからであろうか。

いよいよ打ち上げ十秒前の秒読みに入った。見学者も声を出して秒読みに合わせる。六・六秒前にメインエンジンに点火される。メインエンジンの燃料は水素と酸素である。そのままでは殆ど煙を出さないが、スペースシャトル打ち上げの場合は大量の冷却水が噴射されるので、発射台

の右側に大量の白煙が出る。Ｔ－0秒でと二本の固体ロケットブースターに点火される。発射台の左側に噴煙が広がる。

ディスカバリー号はゆっくりと上昇を始める。観覧席から拍手が起こる。すぐに方向をやや斜めに変える。更に軸のまわりに九十度回転する。ぐんぐんと上昇を続ける。打ち上げ十数秒後にメインエンジンの噴射音が発射台と観覧席の間の五kmの距離を通って聞こえてくる。更に約七秒後には固体ロケットブースターの大きな噴射音がバリバリと響いてくる。観覧席から大きな拍手が起こる。

シャトルは順調に上昇を続け、更に方向を東に向ける。打ち上げ二分後に固体ロケットブースターが切り離されるのが感じでわかった。再度拍手が起こる。その後白煙は急速になくなりオービターのメインエンジンの光が点となって進んでいくのが見えた。その光も数十秒後には見えなくなった。打ち上げ時のＫＳＣ上空は雲一つない快晴であった。

向井さん、グレンさん等の乗ったスペースシャトルの打ち上げ成功に酔い、ＮＡＳＡバスに戻る。付き添いのＮＡＳＡ職員が「コングラチュレーション」と言って握手を求めてくる。私たちの一人は内田理事長に「打ち上げ成功おめでとうございます」と申し上げお祝いの握手をさせていただいた。ここで私たちのスペースシャトル打ち上げ見学は終わった。

4　帰還

オービター並びに宇宙飛行士たちの帰還は、日本時間十一月八日午前一時半からのＮＨＫ衛星

放送ＢＳ７に生中継されたＮＡＳＡテレビで見た。米国東部時間十一月七日午前十一時五十分頃、向井さん等を乗せたスペースシャトルのオービターはテレビ画面にそのかすかな姿をあらわした。ＫＳＣの西方二〇〇㎞以上のメキシコ湾上空である。速度はマッハ五と報じられた。機影はだんだん大きく鮮明になりその全容をあらわしてきた。空中を滑空するオービターの下にケープカナベラルの地上が映し出される。滑走路に近づくとオービターはその前方から写され、車輪が出される。すぐにオービターは後ろから写される。タイヤが着地する。タイヤの摩擦煙が出る。ドラッグシュートは開かないが、タイヤのブレーキと垂直尾翼の後部を両側に開くことによる空気抵抗で着実に減速する。ついに停止する。現地時間十二時四分である。

九十回以上の安全着陸経験を持つスペースシャトル・オービターの着陸であるが、やはり無事着陸するとほっとする。ドラッグシュートのハッチがうまく閉まらない事はわかっていた。しかしこれは飛行及び着陸の安全には影響しないということで打ち上げは実施された。打ち上げの時にこのハッチは脱落したが問題は起こらなかった。以前にもドラッグシュート無しの着陸の経験があったそうである。

乗組員は機体に直角に近づいた車に移動した。ＮＡＳＡの職員がこの車に入る。ゴールディングＮＡＳＡ長官も二回にわたって出入りする。宇宙飛行士たちの健康状態がチェックされたものと思われる。宇宙飛行士たちが車から出てくるまでの約二時間の間に、テレビは内田ＮＡＳＤＡ理事長を通訳とともに映し出した。カメラに向かって手を振っておられる。

待ちにまった七名の宇宙飛行士が車から降りてきた。車の中の時間が通常より長かったのは恐らくグレンさんが疲れていたので少し休息をとったのであろう。出迎えは、ゴールディングＮＡＳＡ長官、ＫＳＣ所長及び内田ＮＡＳＤＡ理事長である。七名の宇宙飛行士と次々に握手し、ミッションの成功と無事帰還を祝った。グレンさんは足が少し弱った印象を受けた。しかし、七十七歳の高齢者が九日間無重力の宇宙にいて、１Ｇの地球に帰ってくれば、このような現象は当然の事であろう。

5　おわりに

一九九九年一月に開かれるであろう向井さんの帰国報告会が楽しみである。シャトルの経験、エピソード、研究の成果などの話が期待される。スペースシャトルによる科学ミッションは終わりに近づいた。我が毛利宇宙飛行士がこの終わりを飾る科学ミッションに参加すると伝えられている。これから宇宙ステーションの建設が始まる。十一月にはロシアから、十二月にはアメリカから宇宙ステーションの組み立て器材が打ち上げられる。若田宇宙飛行士は一九九九年六月以降にこの宇宙ステーション建設プロジェクトに参加する。

日本の宇宙開発はＨⅡＡによる人工衛星の打ち上げとスペースシャトルを使わせてもらう宇宙実験室ＪＥＭの建設の時代に入る。これらの新しいプロジェクトが大きな事故なしに成功する事を願っている。

（初出、火薬と保安、三十一巻、一号、二十二頁（一九九九））

ヨーベルの響き

鍋屋　次郎

旧約聖書に記載されている、今からおよそ三二五〇年前（ＢＣ一二五〇年頃）のイスラエル民族の生活、規則について、現代の我々の生活を念頭に置きながら垣間見ることも、人類の歴史への一考察としてそれなりの意義があるものと考える。

旧約聖書に基づくイスラエル民族の歴史は、

ＢＣ一二九〇年頃、エジプトで虐げられていたイスラエルの民が、モーセに導かれてエジプトから脱出。

ＢＣ一二九〇年頃～ＢＣ一二五〇年頃まで約四十年間荒野を放浪する。その時、モーセはシナイ山で神から律法を授かる。

ＢＣ一二五〇年頃、期待していた乳と蜜の流れる地、ヨルダン川に添ったカナンの地に定着した。

それからＢＣ九三一年頃まで、イスラエル統一王国――サウル、ダビデ、ソロモンの統治――

の繁栄が続いた。

その後、何人かの王が統治したが、BC五五〇年頃、ペルシャに攻められて、イスラエルの首都エルサレムが陥落し、イスラエル民族はバビロニアへ捕囚として連行された。エルサレムはペルシャに支配され、やがてローマの支配へと移って、キリストの誕生により旧約の時代は終りを告げた。

（一）海の奇跡

モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民は、紅海（葦の海）を前にして、後ろから追ってくるエジプト軍を見て万事窮す、と思ったが、モーセが海に向かって手を差し伸べると、海は海底から真っ二つに割れ、割れた両側は海水が高い壁のようにそそり立ち、海底に一筋の道が現れた。モーセ達イスラエルの民はその道を進みシナイ半島に上陸、追ってくるエジプト軍がその道に入ると、両側にそそり立っていた壁のような海水が一気に崩れ、エジプト軍は全て海中に没した。

（二）神から与えられた律法

神は、イスラエル民族の唯一の神として、イスラエルの民を導き、何度も民の背信があったが、約四十年間に亘って民族の放浪を支え、神は民が守るべきことを告げ民と契約を交わした。この

契約がイスラエル民族の律法である。

基本的律法は十戒である。モーセがイスラエルの民を率いてエジプトを脱出、シナイ半島の荒れ野を経て、シナイ山（ホレブ山）に登った時に神から与えられた、とされている。

この十戒は、人の神への服従の規範として神が最初に与えた道徳律法である。

十戒の型式は、BC二千年期の中東地域での国際協定である宋主協定の型式を取っていると言われる。宋主協定とは宋主となる国の王が、隷属する国の王との間に締結する協定である。

十戒は、前段四項目は、神とイスラエル民族との基本的契約を示し、後段の六項目は契約の民が守るべき戒めを示している。

内容的に要約すれば、イスラエル民族に対して、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主（注①）なる神を愛すること、また、親を尊び、隣人に対して自分を愛するように愛すること、を要求している。

十戒は次の通り。

一、あなたはわたしのほかに、なにものも神としてはならない。

二、あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛

し、わたしの戒めを守るものには、めぐみを施して、千代に至るであろう。
三、あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。
四、安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目には休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。
五、あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜る地で、あなたが長く生きるためである。
六、あなたは殺してはならない。
七、あなたは姦淫してはならない。
八、あなたは盗んではならない。
九、あなたは隣人について、偽証してはならない。
十、あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。

（注①）主とは神の別称

旧約聖書は、神がモーセにこの十戒を与えたときの状況を次のように記している。

『主はシナイ山の頂に降り、モーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登っていった。民全員は、雷鳴がとどろき、稲妻がひかり、角笛の音が鳴り響いて、山が煙に包まれる有様をみた。民は見て恐れ、遠く離れて立っていた』（注②）

神は、この後、民が守るべき様々な戒めを与えている。

日本の法制史の始まりが、六～七世紀の律令時代に唐の法律を基にして、初めて日本に法律が制定されたことを考えると、神が与えたとはいえ今から三千二百年以上前に、唯一神への礼拝、儀式などの方法が極めて細部に渡って制定されると共に、民が守るべき諸規定が「神の律法」として存在したことは驚異である。

以下、信仰上の律法は除外して、民の間で守るべき律法を中心に紹介する。

（注②）以降の文中、『　』内は聖書から引用

（三）神の絶対性

神の御名を冒涜する罪は、誰でも死罪としている。

『神の名を冒涜した男を宿営（放浪中の宿営）の外に連れだし、冒涜の言葉を聞いた者全員が手を男の頭に置いてから、共同体全員が石で打ち殺す。神を冒涜する者は誰でも、その罪を負う。主の御名を呪う者は死刑に処せられる』

（四）弱者保護についての規定

当時の社会の弱者、貧しい者や畑を持っていない寄留者に対して、持てる者の配慮義務を規定している。また、身体に障害を持つ者へのいたわりや老人に対する敬意も明記している。

私たちは、非文明社会、まして今から三〇〇〇年以上も前の社会は、それこそ「弱肉強食」そのものの世界であったのではないかと想像するが、現代にそのまま適用出来る教えがあったことに驚きを感ずる。

『穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかなければならない。

あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない。耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。

寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい』

また、高齢者に対する姿勢として、

『白髪の人の前では起立し、長老を尊び、あなたの神を恐れなさい』

とあり、高齢者・障害者に対する配慮は、むしろ現代の福祉思想そのものが述べられている。

（五）一族の連帯と相互援助

一族の連帯は、イスラエル民族内と一族内の相互援助を規定し、外国人には一線を画している。

『同胞の一人が貧しくなったため、自分の所有地の一部を売ったならば、それを買い戻す義務を負う親戚が来て、売った土地を買い戻さなければならない。売った人が買い戻す力がないならば、それはヨベルの年まで買った人の手にあるが、ヨベルの年には手放されるので、その人は自分の所有地の返却を受けることが出来る。

もし、同胞が貧しく、自分で生計を立てることが出来ないときは、寄留者ないし滞在者を助けるようにその人を助け、共に生活できるようにしなさい。その人に食糧やお金を貸す場合、あなたはその人から利子も利息も取ってはならない。

ただし、外国人には利子を付けて貸しても良いが、同胞には利子を付けて貸してはならない。

もし、同胞が貧しく、あなたに身売りしたならば、その人をあなたの奴隷として働かせてはならない（注③）。雇い人か滞在者として共に住ませ、ヨベルの年まであなたのもとで働かせよ。その時が来れば、その人もその子どもも、あなたのもとを離れて、家族のもとに帰り、先祖伝来の所有地の返却を受けることが出来る』

（注③）同胞内で奴隷として働かせてはならない理由として、『エジプトの国からわたしが導き出した者は皆、わたしの奴隷である。彼らは奴隷として売られてはならない。あなたたちの同胞

であるイスラエルの人々を、互いに過酷に踏みにじってはならない』と命じている。

（六）裁判制度

神から部族（十二部族）毎に与えられたすべての町に、裁判制度を次のように定めている。

裁判制度

『裁判人と役人を置き、正しい裁きをもって民を裁かなければならない。裁きを曲げず、偏り見ず、賄賂を受け取ってはならない。賄賂は賢い者の目をくらませ、正しい者の言い分をゆがめるからである』

裁判の証人

『いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人によって、そのことは立証されなければならない』

偽証した場合

『裁判人が詳しく調査して、もしその証人が偽証人であり、同胞に対して偽証したということに彼が同胞に対してたくらんだことを彼自身に報い（後述九参照）あなたの中から悪を取なれば、り除かなければならない。他の者達が聞いて、恐れを抱き、このような悪事をあなたの中で二度と繰り返すことはないであろう』

（七）土地は神の所有物

土地の私有制は認めていない。聖書は所有地と記載しているが、現代でいうと土地の使用権のようなもので、売買と記載しているのは、使用権の売買のことと考える。

『土地を売らねばならないときにも、土地を買い戻す権利を放棄してはならない。土地はわたしのものであり、あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者に過ぎない。あなたたちの所有地においてはどこでも、売った人が土地を買い戻す権利を認めなければならない』

この買い戻し権については、ヨベルの年（後述十六参照）には元の所有者に返還されることから、買い戻しの権利を放棄してはならない、としている。

その理由は、カナンの約束の土地は、神がそれぞれの部族、家族に与えられたものだからである。土地の本来の所有者は神であり。イスラエル民族は「借地人」にすぎない。

（八）ふさわしくない服装

なぜこのようなことまで制定したのか、理由は分からないが、後述する「性風俗の極端な乱れ」が時代的背景にあったのではないかと考える。

『女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を身に着けてはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる』

（九）殺人と傷害

これは、相手の損害に対し、対等の償いを命じている。

『人を打ち殺した者は誰であっても、必ず死刑に処せられる。（人の命は償うことが出来ないから）

他人の家畜を撃ち殺す者は、その償いをする。命には命をもって償う。

人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けなければならない。骨折には骨折を、目には目を、歯には歯をもって人に与えたと同じ傷害を受けねばならない』

（十）結婚

結婚する娘に対して、絶対的に処女を要求している。これも時代的背景として周辺他民族の乱れた性風俗に同化しないための警鐘と考えるが、当時は女性の結婚年齢が若く、初潮後あまり年月をおかないで結婚していたのではないかと考える。

『人が妻をめとり、彼女のところに入ったあとにこれを嫌い、虚偽の非難をして、彼女の悪口を流し、「わたしはこの女をめとって近づいたが、処女の証拠がなかった」というならば、その娘

の両親は娘の処女の証拠を携えて、町の門にいる長老達に差し出し、娘の父は長老達に「わたしは娘をこの男と結婚させましたが、彼は娘を嫌い、娘に処女の証拠がなかったと言って、虚偽の非難をしました。しかし、これが娘の処女の証拠です」と証言し、布を町の長老達の前に広げねばならない。町の長老達は、男を捕まえて鞭で打ち、イスラエルの乙女について悪口を流したのであるから、彼に銀百シケル（注④）の罰金を科し、それを娘の父親に渡さねばならない。彼女は彼の妻としてとどまり、彼は生涯、彼女を離縁することは出来ない。

しかし、もしその娘に処女の証拠がなかったと言う非難が確かであるならば、娘を父親の家の戸口に引き出し、町の人たちは彼女を石で打ち殺さねばならない。彼女は父の家で姦淫を行って、イスラエルの中で愚かなことをしたからである』

（注④）シケルは重さの単位で、一シケルは　銀十一、四グラム

（十一）新婚への配慮

驚くべき配慮である。羨ましい限り、と思う方が多いだろう。どうしてこのような律法が出されたのか分からない。少子化対策ではないだろう。

『人が新妻をめとったならば、兵役に服さず、いかなる公務も課せられず、一年間は自分の家のためにすべてを免除される。彼は、めとった妻を喜ばせなければならない』

（十二）姦淫罪

姦淫罪は男女双方に課しているが、女性が助けを求めても不可能な状態のときは、その女性には罪はない、としている。

姦淫の定義と罰

『男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。

ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。その娘は町の中で助けを求めず、男は隣人の妻を辱めたからである。（当時の社会は、婚約は結婚と同等の意味を持っていた）

ある男がまだ婚約していない処女の娘に出会い、これを捕らえて共に寝たところを見つけられたならば、共に寝た男は娘の父親に銀五十シケルを支払って、彼女を妻としなければならない』

姦淫罰則の例外規定

『ある男が別の男と婚約している娘と野で出会い、これを力ずくで犯し共に寝た場合は、共に寝た男だけを殺さねばならない。その娘には何もしてはならない。娘には死刑に当たる罪はない。婚約している娘は助けを求めたが、助ける者がいなかったからである』

（十三）死刑に関する規定

この項目は、最初の父母を呪うもの以外は、全て性の戒めである。

時代的背景として、特にイスラエル民族以外の異教社会に性風俗の乱れが激しかったこと、農業と牧畜が主たる生業であったことから、大家族制の中での戒めでもあったのではなかろうかと考える。

『自分の父母を呪う者は、必ず死刑に処せられる。

人の妻と姦淫する者、すなわち、隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる。

父の妻と寝る者は、父を辱める者であるから、両者共に必ず死刑に処せられる。

嫁と寝る者は両者共に必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる。

女と寝るように男と寝る者は、両者共にいとうべきことをしたのであり、必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる。

一人の女とその母とを共にめとる者は、恥ずべきことをしたのであり、三者共に焼き殺される。あなたたちの中に恥ずべきことがあってはならない。

自分の姉妹、すなわち父または母の娘をめとり、その姉妹の裸を見、女はその兄弟の裸を見るならば、これは恥ずべき行為であり、彼らは民の目の前で断たれる。彼は自分の姉妹を犯した罪を負わなければならない。

おばを犯してはならない。彼らは、肉親を辱める行為の罪を負わねばならない。
生理期間中の女と寝て、これを犯した者は、女の血の源をあらわにし、女は自分の血の源をあらわにしたのであって、両者共に民の中から断たれる』

（十四）安息の年

これを定めた理由は、十戒四の安息日との関係が深い。これは七年目に畑を休耕地とする規定である。そして、七年目にその畑で実ったものは、社会的弱者や野生の動物に与えなければならない、としている。

『主は、シナイ山でモーセに仰せになった。
あなたたちがわたしの与える土地に入ったならば、主のための安息をその土地にも与えなさい。六年の間は畑に種を蒔き、ぶどう畑の手入れをし、収穫することが出来るが、七年目は全き安息を土地に与えなければならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない。休閑中の畑に生じた穀物を収穫したり、手入れをせずにおいたぶどう畑の実を集めてはならない。土地に全き安息を与えねばならない。安息の年に畑に生じたものはあなたたちの食物となる。あなたをはじめ、あなたの男女の奴隷、雇い人やあなたのもとに宿っている滞在者、さらにはあなたの家畜や野生の動物のために、地の産物はすべて食物となる。
「七年目に種を蒔いてもならない、収穫もしてはならないとすれば、どうして食べて行けるだろ

うか」とあなたたちは言うか。わたしは六年目にあなたたちのために三年分の収穫を与える。あなたたちは八年目になお古い収穫の中から種を蒔き、食べつなぎ、九年目に新しい収穫を得るまでそれに頼ることが出来る』

（十五）負債の免除

『七年目ごとに負債を免除しなさい。負債免除の仕方は次の通りである。
誰でも隣人に貸した者は皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告をされたからである。外国人からは取り立てても良いが、同胞である場合は負債を免除しなければならない』

この規定は、神の次のような指示から発している。

『あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心を頑なにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とする物を十分に貸し与えなさい。七年目の債務免除の年が近づいたと、よこしまな考えをもって同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。彼に必ず与えなさい。また、与えるとき、心に未練があってはならない』

（十六）ヨベルの年

この規定は、奴隷の状態からの解放と、土地の解放を命令する規定である。

『あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それがヨベルの年である。あなたたちは、各々その先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。ヨベルの年には、おのおのその所有地の返却を受ける。あなたたちが人と土地を売却するときは、互いに損害を与えてはならない。あなたはヨベル以来の年数を数えて人から買う。すなわち、その人は残る収穫年数に従ってあなたに売る。その年数が多ければそれだけ価格は高くなり、少なければそれだけ安くなる。

相手に損害を与えてはならない。あなたの神を畏れなさい。あなたたちは、わたしの掟を行い、わたしの法を忠実に守りなさい。そうすれば、この国で平穏に暮らすことが出来る』

（十七）石に律法を刻む

『モーセは、自己の後継者にヨシュアを任命すると、石に律法を刻み、祭司達に渡した。そして負債免除の年の七年ごとに神の前に全イスラエルが集まるとき、この律法を全イスラエルの前で読み聞かせなければならない、と定めた』

（十八）終わりに

イスラエルでは、七年を七回繰り返した翌年、つまり五十年ごとの一年をヨベルの年として祝った。ヨベルの年には引き続いて農耕を休むと共に、人手に渡っていた父祖伝来の土地（嗣業）が元の所有者に無償で返還され、同胞で買取られた者は全て解放された。

この喜ばしい年の始まりは「雄羊の角」（ヨーベル）を吹いて告知されたのでこの呼び名がついたものと思われる。この制度は、極めて高い理想を制度化している。この制度がどの程度行われたかは記録がないので分からないが、同じ神を絶対的神として受け入れ、イスラエル民族間の同胞としての信頼関係を基礎に行われていたものと考える。

ヨーベルが鳴り響くとき、解放された人々、土地が戻ってきた人々の喜びが想像にあまりある。七年目ごとの債務免除と合わせ、神は『隣人愛』の理想的実現を、三千二百年前に人類に示したのであろうか。

完

筆者注記

旧約聖書の記載事項は、キリスト教界では、神の絶対的な書として、誰も加筆することも、除くことも許されていない。科学書ではなく宗教書だからである。

天地創造物語は別として、登場人物アブラハムの頃、BC一九〇〇年頃のことからキリスト誕生まで、旧約聖書の記録は、宗教的には一貫した同じ思想で書かれている。ただし、学問的究明とは別世界である。

参考文献

聖書（新旧約）　新共同訳　日本聖書協会
実用聖書注解　宇田進　他　いのちのことば社出版部
ユダヤ教の本　編集　堀田秀光　㈱学習研究社
ウエストミンスター小教理問答書　榊原康夫訳　聖恵授産所出版部

「司馬雑感」あれこれ

山田　嘉久

（第一話）郵便箱のことなど

「郵政民営化」が実施されて久しいが、そもそも「郵便」なる日本語は明治になってから生まれたものらしい。

司馬遼太郎は「歴史を紀行する」（昭和四十三年刊）でその経緯を書いている。

「郵便」の名付け親はのちに「郵便の父」といわれた前島 蜜。彼はMAIL（メール）という外来語を最初は古来からの日本語である「飛脚」と訳したが、どうも古臭い。そこで「郵便」という新しい日本語を作った。

「郵」とは古代中国では駅舎を意味する。

しかし当時の一般大衆にとっては「郵便」の意味もわからないし第一、読み方も知らなかった。

前島によって辻つじに設けられた「郵便箱」を見て、人々は「タレベン箱」と読んだ。そして「ああ、位置が高くては便も垂れられません」との苦情が殺到したという。

この文章を読んで私は数年前に訪れたベルリンの街を思い出した。

ベルリンの繁華街には、いたるところに郵便箱によく似た鉄製の筒状の箱が置かれている。日本の郵便箱と比べて高さはやや低いが、差し入れ口は広い。背の高いドイツ人にとっては少し不便ではないかと思いながら私はその箱を撫でたり、差し入れ口を覗いたりしたが、それが、後から散歩中の犬の糞入れと判った。いかにも清潔好きのドイツらしいと感心したものだ。

前記「歴史を紀行する」では、前島は「大阪編」に登場している。彼が大阪生まれであったわけではなく（彼は越後高田生まれ）、明治維新の後、九十九%決まりかかっていた大阪遷都を阻止した張本人が前島だったと司馬は説明している。「遷都の地は、浪華に如くべからず」。維新後、大久保利通は大阪遷都を確信し、天皇の大阪行幸まで計画していた。が、一夜にして大久保の気持ちが変わった。

それが大久保宅に投ぜられた一通の無記名の投書だった。

披いてみると経済都市大阪と政治都市江戸を比較した実に理路整然とした遷都論を展開している。要は遷都は江戸に如くはなしというのである。

大久保の考えは一変して結局、帝都は東京（当初はトウケイとも呼ばれた）に決まった。

しかしこの投書の主は長い間、分からなかった。

後年参議となった大久保がある夕、若者たちと歓談している最中に、気にかけているこのことを話題にすると「じつは、私でございました」と名乗り出たのが前島蜜だったというのである。

このことは司馬は「江戸遷都秘話」と題して雑誌「歴史読本」（昭和三十八年）にも書いている。

日本の「郵便の父」が前島蜜としたら「警察の父」は川路利良である。

単に「大警視」といえば川路のことを指すほど、彼は日本の警察制度を一人で作り上げた。

その川路が明治五年、西郷の命を受けてフランスの交番制度を視察する旅に出発するところから司馬の長編小説「翔ぶが如く」は始まっている。

マルセーュに上陸した彼は列車でパリに向かう。ところが車中で猛烈な便意に襲われる。我慢の極に達した彼は通路に日本から持参した新聞紙を敷いてしゃがみ込み、毛布を肩までかぶり毛布の中でズボンをぬぎ、用を足した。

そのあと川路はそれを新聞紙に包んで、そ知らぬ風で窓の外に投げた。車内の誰もが川路の行為には気がつかない。

すべては終わったと思ったが、実は終わらなかった。

翌日の新聞にそのことが出てしまったのである。列車の窓から投げた大便は生憎、保線夫に命中してしまい、怒った保線夫は警察に届けたため、証拠品の日本語の新聞紙から日本人の仕業とわかってしまう。

当然、この挿話は司馬の創作であろうが、これから展開するであろう明治初期の壮大な歴史ドラマの導入部としては見事な伏線となっている。

車中にトイレのあることも知らない東洋の野蛮人が短期間で西欧文明を吸収して、ついには列強の一角に押し上げてゆく「明治の群像たち」なら、あるいは「史実」（ファクト）かもしれないと思わせてしまうのが司馬文学の魅力でもあろう。

しかしこの後、帰朝した川路が横浜で路上放尿を見て、「征韓論さわぎ」と同じくらいの衝撃を受け、「立小便の悪弊を根絶する」と「文明への使命感をふるいたたせた」と書いてあるのを見ると、あるいはパリでの件は史実かもしれない。

（第二話）「千葉県なまりの東京弁」

司馬遼太郎に「花の館」という戯曲がある。

生涯、膨大な数の小説を書いた司馬だが、意外にも戯曲は数編しかない。その数少ない戯曲の一つである。

司馬がこの戯曲を書いた経緯については「花の館あとがき」に詳しいが、それによると戦争末期、満州の四平戦車学校にいた司馬が隣のベット同士で文字通り寝食を共にしたのが、早稲田仏文科出身で戦後、劇作家として名をなす山田隆之だった。

「私は学生の頃から文学好きの人達を避けてきたが、この山田からは宝石のような才能を感じることがしばしばあった。」

そんな山田から執拗に勧められて書いたのが、この「花の館」だという。

司馬がこの戯曲を書いた昭和四十年代は政治家は政争に明け暮れた国民不在の時代であり、経済界は利益追求に奔走した結果、自然界までも破壊され、丁度「応仁の乱」の時代に似ていると司馬は考えた。そこで彼がこの戯曲の主人公として選んだのが日本歴史上有数の悪女、烈女と言われた日野富子だった。

この戯曲は文学座（富子役は杉村春子）によって昭和四十五年に初演されたが、第一幕の冒頭に、この戯曲の舞台回しの役となる三名の現代若者が登場する。

「女は大阪弁、一人の男も大阪弁、他の一人の男はやや千葉県なまりの東京弁」とある。千葉生まれで、今も千葉に住んでいる私にとっては、肝心の戯曲の内容よりも、まずこの事が気になった。

千葉を全く訪ねたことのない司馬（尤も一度だけ戦争中に九十九里浜に来たことがあるが）が云う「千葉県なまりの東京弁」とはどういう言葉だろうか。

生粋の千葉県人を自負する私でも説明に窮するが、まず私が現在住んでいる千葉市から東京寄りの人々には「千葉県なまり」はないと考えられる。この地区の住人の多くは生粋の千葉生まれではなく、東京に通勤するために全国各地から集まった所謂「千葉都民」であるからである。

それでは千葉市より以南（上総地方）ではどうだろうか。

例えば私の生まれ故郷茂原付近では、話言葉の語尾に微妙な抑揚（イントネーション）の違いがある。中学の同窓会などでよく感じるが、耳で聞き分けることが出来ても、いざ喋れといわれても出来ないほどの微妙の差である。従ってこれを「千葉県なまり」とは云わないだろう。

更にずっと南下して房州地区に入ると、逆に「なまり」ではなく完全な方言となる。

所謂「房州言葉」である。有名な漁港勝浦の朝市で飛び交う会話を想像してみれば、一番分かりやすい。早口で歯切れがよいが、何よりの特徴は「K音（カ、キ、ク、ケ、コ）の脱落」である。

「一匹がいっぴ」「袋がふーろ」「畑がはたえ」の類である。

この特徴はこの地区独特の方言で、全国どこにも見られない。房州が半島のため、この地区で

話す方言がどこにも伝わらなかった言語学上、珍しい現象だという。
従って、この房州弁と東京弁を組み合わせることはまずできない。
あと残った千葉県北東部（銚子付近）の言葉はどうだろう。
同じ千葉県でも南北に長いため、房州言葉とは全く違った特徴を持っている。
房州言葉がこの地区独特の方言に対して、銚子が古くから全国有数の交易港だったため、東北弁、関西弁それに東京弁のミックスした方言が発達した。
「一匹がいっぴき」「袋がふぐろ」「畑がはだけ」と濁音になってしまうのは、東北弁の影響である。この地区は東北弁の南限と云われる。
また「担って―になって」「煮る―たく」は明らかに関西弁の影響。この地区は古くから関西人が住み着いたことを物語っている。（代表的な銚子の醤油会社ヤマサ、ヒゲタはいずれも関西人によって作られた。）
更に一番の特徴は江戸下町言葉の影響で、「百円をしゃくえん」など。これはこの地区が古くから利根川を通じて江戸と直結していたためである。
こう考えてくると、司馬のいう「千葉県なまりの東京弁」とはどうも県北東部の銚子付近の「なまり」を云うようだ。
ここまで考えて、「花の館」を読み続けたら、次のような言葉で出てきて拍子抜けした。
「三人の会話、きわめて軽薄、モダン、そのくせ野暮ったし。たとえば近郊農村あたりから出てきて、新宿でよたっている若者たちの調子か」
結局、何のことはない。この軽薄で野暮ったいお上りさんの若者の表現言葉として「千葉県な

まりの東京弁」が使われたに過ぎない。
また「東京弁」を「標準語」といわないのが如何にも司馬らしい。司馬によると東京弁は標準語ではなく、あくまで東京地区の方言だという考え方である。

（第三話）「司馬さんの形見」

このところ、午後のひとときは「司馬もの」を読むことが日課になってしまったが、最近、読んだなかでは、「九八年ベストエッセイ集」（文芸春秋社）に載った「司馬さんの形見」が印象に残った。
筆者は旧三井銀行ＯＢで初出はさくら銀行会報らしい。約三〇年前、筆者が三井銀行東大阪支店の「班長」だった頃、部下の若い外回りと司馬宅の勝手口を出入りした思い出を綴ったエッセイだった。
司馬が大阪の西長堀のアパートから布施（今の東大阪市）に引っ越してきたばかりの頃で、「流行りかけて来たけどおとなしくてエエひと」という近所の評判を聞いて、司馬宅に飛び込んだのがきっかけとなった。
それから直ぐに司馬は「竜馬がゆく」を上梓して「国盗り物語」を書きはじめ、文春、新潮社、サンケイ、朝日などからまとまった金が銀行に振込となってきた。
一方では社旗をつけた車やオートバイが必ず二台や三台、司馬宅の門の前に止まりだしたようだ。

瞬く間に流行作家となっていく過程がよく分かる。

若い外回り君はみどりさん（司馬の奥さん）から司馬の原稿を伊丹まで届けるよう（多分、東京の出版社に送るためだろう）頼まれ、スバルを飛ばしたことが再三あったという。

また筆者もある時、奥さんから「司馬さん（奥さんは主人を常にこう呼んでいた）が財布を忘れて、東京に発ってしまったので、羽田までお金を届けて頂戴」の電話を受ける。

すでに夕方の五時前、引き受けたもののどうしたものか思案に暮れる。取り敢えず、本部支店課に連絡する。

その時のやり取りが面白い。

「すんまへん。しかじかですので羽田へ持って行ってくれませんやろか」

「司馬りょうたろうて、あの司馬遼太郎か」

「当たり前でんか。司馬さんは後にも先にも一人だけでっせ」

圧巻は東京神田界隈の書店から司馬宛の本の請求書が束のように、若い外回り君気付で来るようになったことだった。奥さんからは請求書は全部開けて払っといてと云われていた。

銀行員がそこまでとなど野暮なことは云うまい。私の経験からも「古きよき時代の」銀行員にはこんなことはよくあった。読んでいて思わず「同業者、よくやる！」と叫びたくなった。

このように司馬家（とくに奥さん）の信頼を一身に受けた二人だが、若い外回り君の結婚に際しては司馬は色紙を送った。筆者も転勤の時、色紙を書いて貰った。色紙の内容は一緒だった。

「物は陽の下で想え」

モノを想う時は陽が落ちてからは止めなさい。どうしても悲観的、消極的になってしまうから。いかにも司馬らしい色紙だと思った。二人とも今では「司馬さんの形見」として大切に保管しているという。家宝ものだろう。

司馬が亡くなって間もなく、二人して司馬家に線香を上げに行った折、遺影を見ていると、あの当時「今日は家内が留守やよって何もわからへんで。まアそのへんでサボって行き」と眼鏡の奥でやわらかい目をしてよく云われた頃の司馬とそっくりだったと結んでいる。

久しぶり心の洗われるエッセイを読んだ気持ちになった。

このエッセイを読み終えた時、なぜか次のような司馬の逸話を思い出した。

司馬自身が書いた随筆だったか、あるいは司馬番の記者が書いたものか、またどこに載ったかも記憶が定かでないが、司馬が新幹線で東京に向かう車中での話。

名古屋を出てほどなくトイレに立った司馬は自席に帰ってくると、目の前に弁当が置いてあるのに気がついた。気の利いた記者が差し入れたものだろうと思って、食べはじめると、横に怪訝そうな顔の紳士が立っている。

ようやく司馬は自分が席を間違えて、他人の弁当を食べてしまったことに気がついた。平謝りに謝って次の駅で必ず弁当を買って返すことを約したが、次の駅は終点の東京駅だった。

高名な作家の日常はこういったものかも知れない。

（第四話）司馬遼太郎と運転手

司馬遼太郎に「新東宝人物銘々記」というエッセイがある。

最初、このエッセイにお目に掛かったとき、司馬と新東宝がどんな関係にあるのだろうと訝ったが、読み出してすぐに「新東宝」というのは、あの映画制作会社ではないことが判った。

エッセイに書かれた「新東宝」とは司馬の住む近くのタクシー会社のことだった。自家用車を持たない司馬は日頃、頻繁にこの会社のタクシーを使うらしく、そこのタクシー運転手達の「人物評」がこのエッセイである。

運転手個人個人の人となり、性格や前歴を克明に記している。タクシーを利用する毎に運転手に話かけ、聞き出したものばかりである。気さくで話好きな司馬ならではの文章となっている。

その中に書かれた運転手の一人「前田君」は「街道をゆく三」（河内みち）の中の「若江村付近」にM君として登場している

「いっぺん夏祭りに来とくなはれ」と、この村の住人であるM君からさそわれたことがある。M君は私の近所のタクシー会社の模範運転手である。（中略）「えらい醜（しこ）っとりまっしゃろ」と、群衆の中でM君が私にいった。河内の国の古い村ではそういう古語がいまなお日常語として生きているのである。」

この「河内みち」は昭和四十七年の作品だが、M君はそれから三十五年以上も経った平成十八年に司馬邸を訪れていることを司馬夫人の福田みどりさんはその著「司馬さんは夢の中」で書い

ている。

M君は司馬亡き後も司馬一家と家族ぐるみの付き合いをしていることがわかる。

（なお、前記「醜る」という大阪郊外の古語については、司馬が亡くなる直前に書いたエッセイ「風塵抄」（若さと老いと）にも載っている。「醜る」とは若者が岸和田のダンジリ曳きのように、その若さを神に見せるために危険を冒して振舞うことをいうのだそうだ。序でに相撲の四股を踏むという言葉も、四股は当て字で本来は醜が正しい。勝負を前にし、神に対して醜ぶって見せる儀式とも書いている。）

司馬が運転手に接する態度は「街道をゆく」にもいろいろな場面に出てくる。

目的地の最寄り駅に到着する。駅前に並ぶタクシーのボンネットに大きな地図を広げて目的地を告げる。タクシーに乗り込むと、例のごとく運転手に気安く話しかけ、人相骨相や方言からこの地方の特徴を掴みだす。時には姓名から出身地を推定したり、軍隊経験があれば共通の話題とするといった具合である。

「街道をゆく」を読む度に、司馬は郷土歴史家の話などよりも、運転手の話の方を信じているのではないかとも思ったりもしたが、果して同じ思いの文章に出くわした。

「運転手における人間性の研究」と題したなんとも肩苦しい題名の一文だが、内容はそうではない。筆者は文芸評論家の向井敏。彼は司馬遼太郎全集第三期分十八冊（平成十二年刊）の解説を担当したが、晩年の司馬は小説よりも評論に重点を置いたため、この第三期分では小説は少なく（最後の小説といわれる「韃靼疾風録」ほか二作にすぎない）「街道をゆく」「この国のかたち」

などが主体を占めている。

したがって向井の解説も「街道をゆく」が殆どであり、そのなかの一文である。

筆者は「街道をゆく」の中から特に⑫「十津川街道」（一九八〇年刊）と⑬「壱岐対馬の道」（八一年刊）から司馬の運転手に対する態度を取り上げている。

「十津川街道」では、大阪から五条（奈良県）に出る近道を知っている同行の建築家が、運転手にその近道を指示すると、予想に反してその運転手は「その道は遠回りです」と断定する。丁度「役所の窓口で書類の不備を理由に突き返している役人のような傲然とした」態度に後ろの席で聞いていた司馬は興味を持つ。

そこで司馬は、例のとおり運転手の生まれや育ちを話題にして、車内の気まずくなった空気をなだめるにかかる。運転手の話ぶりからすると別に性格が頑固ということではなさそうである。ひょっとすると五条への道に自信がないから依怙地になっているのではないか。彼は出発のときに営業所で一種類だけの道筋をきいてきたためにお客から違う案を出されたので混乱してしまい、その道をとる自信がなく、つい居丈高な拒絶反応が出てしまったのではないか。

べつに彼が悪いのではないと司馬は考える。

専門家というのはほぼそういうもの、戦時中の日本の高級軍人なども教科書で覚え込んだ知識と思想を軍隊が負けようが国が亡びようが、お構いなしに守ろうとした態度と同じではないか。

この運転手の態度はいかにも戦時中の陸軍大学校卒の秀才参謀たちのような感じで「人間の風景としては、愉しいかぎりだった」と司馬は書いている。

この人間観察の懐の深さ、ものごとのとらえ方の大きさは、すぐに頭に血ののぼる筆者（向井）

には到底、真似のできないことだと筆者は記す。

「壱岐対馬の道」では対馬で暴走タクシーに出くわす。

乗ってから行く先を告げても運転手は返事もしなかった。そしてすぐに暴走を続け、下りる時にチップを渡しても一言も発しなかった。翌日、同じことを他の車でも経験する。

これに反して壱岐のタクシーはよかった。「壱岐はいかがですか」と自分の家に客を案内する主人のようで、どの運転手も物柔らかで旅人にとって床しげに思われた。

そこで司馬は考える。壱岐対馬と二つの島で一つの世界を作っているにもかかわらず、この違いはなんだろうと。

壱岐が広い平野をもつ豊かな農業国に対して、対馬は山ばかりの漁業国で、もともと文化様式が違うのではないか。壱岐のタクシーの運転手の態度の良さは「豊醇な農業社会の文化」にほかならず、一方、対馬の運転手の無愛想で乱暴な運転を習慣づけたのは「漁業文化の悪しき影響」のせいかもしれないと見る。

「そういう風に理解して対馬の印象を悪いものにすまい」とする司馬の人間を見る眼の広さに筆者は改めて感じ入っている。

没後十年以上を経った現在でも司馬人気が衰えないのは、司馬小説の面白さ、文明論の柔軟さのほかに彼の持つ人間性の優しさに由来するものではなかろうかと、私は考えている。

（第五話）吉川武蔵と司馬武蔵

剣豪宮本武蔵といえば戦前のベストセラーである吉川英治作「宮本武蔵」に尽きるが、司馬遼太郎にも、短編「真説宮本武蔵」と長編「宮本武蔵」がある。

また短編「京の剣客」では、若き日の武蔵と吉岡憲法の対決を描いている。

吉川英治と司馬遼太郎はそれぞれ昭和を代表する戦前と戦後の国民作家だが、両者には浅からぬ因縁がある。

司馬は「梟の城」で昭和三十四年下半期の直木賞を受賞したが、この年の選考委員の一人が吉川英治だった。

しかし吉川は司馬作品を推奨しなかった。そこで、その席で司馬を強力に推した海音寺潮五郎は吉川に質した。

「君（吉川）の若い頃とそっくりじゃないか」

それに答えて、吉川は「あまりにも似ているから恐ろしいんだ」と。そして「この新人（司馬）はまだ時代小説家としての勉強不足」とも付け加えた。

これを伝え聞いた司馬は神田の古本屋にある時代小説の資料を全て買い取ったという逸話がある。当時の金で一千万円だったという。

また吉川はその後、別の会で同席した司馬だけに囁いた。「（私の若い頃のように）読者におもねった駄作を書くな」と。この事を司馬は忠実に守った。そして時代小説家から歴史小説家へ。

さらに吉川も達しえなかった文明批評家へと脱皮して行くのである。

司馬の「宮本武蔵」は当然、吉川を意識して書かれている。

吉川の武蔵は時代の要請か、武蔵をあくまで武術の求道者として描いた。司馬は吉川を評して「宮本武蔵」という日本人の好む求道的な人間の一典型を作り上げた不出世の作家だという。シェクスピアがハムレットを作り、セルバンテスがドン・キホーテを作ったように、吉川は武蔵型を作ったと。

しかし一方で司馬は武蔵に関する多くの資料を吟味、分析して吉川武蔵とは全く異なる独自の宮本武蔵像（「司馬武蔵」ともいうべき）を造形している。

そして吉川の死後二ヵ月経って発表したのが「真説宮本武蔵」である。

司馬によれば「武蔵は天才だが、天才が往々にもっているいやらしさがある」として、権力指向型の武蔵を強調した。

武蔵十七歳の時、関が原の戦いに参加して立身出世を夢見るが足軽の身分では到底、名を成すことは出来ない。

これが身に沁みた武蔵は以後、兵法者として身を立てるべく研鑽を重ねる。世に知られる一乗寺の決闘や巌流島の試合はいずれも彼の二十代の出来事である。

（なお武蔵と吉岡一門とは「一乗寺の決闘」など三回対決したことになっているが、前記「京の剣客」によればこれは武蔵側の言い分で吉岡側から書かれたものは一回だけの対決で、しかも

引き分けだそうだ。）

これらの決闘によって武蔵の名は世に知られるようになったが、以後、彼の後半生は専ら知名度による漁官運動に始終する。

先ず、こともあろうに将軍の兵法指南役を狙う。しかしこの役には有名な大名格の柳生但馬守がいる。当然、成功せず、次に尾張徳川藩の仕官にも失敗する。

いまや世は戦国の時代ではない。一介の牢人が武芸をもって地位をのぞむなど考えられぬほど幕府の体制は固まっていた。

これに気が付かない武蔵はなお、自負と屈託を重ねる。

この辺に天才の持つ嫌らしさが見え隠れする。武蔵の偏執者に近い狷介孤高な性格が災いしたと司馬は書く。

「武蔵はついに生涯、何流をも学ばず何者をも師としなかった。」「武蔵の兵法は、武蔵一人に通用するものだった。（中略）武蔵を学ぼうとすれば武蔵になる以外に手がなかったからである。」

大阪冬の陣でも一旗挙げるべく豊臣方に組するが、どの記録にも武蔵の名は載っていないという。つまり一介の牢人として参加したことになる。

晩年になってようやく肥後細川家に召し抱えられるが、身分は「客分」に過ぎない。

そしてこの地で六十二歳で没するが、遺言は死骸に甲冑を着せよだったという。「真説宮本武蔵」ではこう結んでいる。

「武蔵は死骸になってからはじめて侍大将の扮装をして地下に埋まったのである。」

なお「吉川武蔵」では武蔵は禅を沢庵和尚に習ったことになっているが、司馬によれば沢庵に参禅したのは、前記の柳生但馬守であり、武蔵は生涯一度も沢庵には面識がないという。

「生涯に試合うこと六十余度、勝利を得ざることなし」の自伝に首を傾げる司馬だが、一方で武蔵の画家、彫刻家としては日本美術史上に欠くことのできない人物と最大限の賛辞を送る。

武蔵は雅号を二天という。あの二刀流の刀技からとった。

「宮本武蔵」の冒頭もその二天の筆になる「枯木鳴鵙図」に著者（司馬）が感動するシーンから始まっている。

またその著「五輪書」は「敦異抄」に匹敵する名文としている。

化粧雑記

鈴木　守

一　化粧と化粧品

『化粧のルーツを訪ねて』を本誌に連載中である。この連載記事を補完する目的で、化粧品、医薬部外品および化粧とは何かについて説明しておきたい。

1　化粧品とは

化粧品を辞書でみると、「クリーム・白粉・紅・香水などのように化粧に使う物品」と書いてある。

ところで、わが国では、化粧品の製造は薬事法の規制対象となっており、この法でわが国の化粧品を定義しているので、法でいう化粧品について述べておく。

法の定める化粧品とは、「①人の身体に使用するものであり、②身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、または皮膚もしくは毛髪を健やかに保つために、③身体に塗擦、散布その他、これらに類する方法で使用され、④人体に対する作用が緩和なもの」であり、①使用対象、

②使用目的、③使用方法ならびに④安全性の面で規定しているのである。

一般の人たちが化粧品と思っている付け黒子や付け睫毛は、身体に貼付して使用するため、使用方法の点で化粧品ではなく雑貨品とみなされ、法の規制外にある。室内用の芳香剤やトイレ消臭剤は人体に直接使用しないので、使用対象の面で化粧品の範囲に属していない。

2 医薬部外品とは

わが家の洗面台の上に化粧品が並んでいる。そのうち、ヘアトニック、乳液、歯磨に医薬部外品（部外品）と表示されている。だが別の乳液には部外品の表示がない。そのほかにも、キンチョールと殊用のベビーパウダーにも部外品と記されている。

では、部外品とは何かである。以前、部外品についてアンケート調査したことがある。だが、部外品という名称は知っていても内容に関しては、ほとんどの人が理解していなかった。

部外品は法で定められたものであり、法の定義を端的に表わせば、「特定の使用目的を持ち、作用が緩和で、器具・器械でないもの」である。

この特定の使用目的というのは、

① 吐き気その他の不快感、口臭や体臭の防止（口中清涼剤、防臭剤）
② あせも、ただれの防止（てんか粉類）
③ 脱毛の防止、育毛、養毛、除毛（養毛・育毛剤、脱毛剤）
④ 人や動物の保健のためにする風、蠅、蚊、蚤などの駆除、防止（殺そ剤、殺虫剤）

⑤ 衛生上の用に供されることを目的とする紙綿類（衛生綿類）
⑥ 染毛剤
⑦ パーマネントウェーブ用剤
⑧ 化粧品の使用目的に加えて、にきび、肌荒れ、かぶれ、しもやけなどの防止、または口腔の殺菌・消毒に使用されるもの（薬用化粧品、薬用石鹸、薬用歯磨）
⑨ 浴用剤

である。

わが家にあった化粧品では、ヘアトニックが③の育毛剤、歯磨は⑧の薬用歯磨であり、乳液の場合、表示してないのは化粧品で、表示がある方は⑧の薬用化粧品である。キンチョールは④の殺虫剤、ベビーパウダーは②のてんか粉に該当している。

このように、部外品は法的な特殊用語であり、幾つかの使用目的を有しているので、総括的に理解することは難しい。世間一般の人たちに理解できないのも無理からぬことである。

前出のアンケート調査の結果では、口臭防止用の仁丹、殺虫剤、殺鼠剤ならびに衛生綿を除くと、部外品を化粧品として認識している人が多い。

3 化粧とは

辞書でみる化粧は、「紅、白粉などを使って顔を美くしく飾ること」である。この説明では、抜歯を初め、洗顔、クリーム塗布、香水使用などは化粧行為の範囲に入らなくなってしまう。

このことはさておいて、百科事典には、「化粧は彩色したり、整髪したりすることによって、

人類特有の肉体表相を後天的、人為的に変改する風習の一つであり、普通は自分をより美しく他の人に認めさせるための美の演出に行われる風習であると思われているが、それは必ずしも化粧の目的を総括しているものであるとはいえない」とし、広義の化粧と狭義の化粧があると述べている。

狭義の化粧は、薬事法でいう化粧品を使うような行為ということであろうが、広義の化粧について、二・三の文献をみると、「信仰、本能、表示、実用ならびに美の演出を目的として、身体に塗布したり、身体の一部を変更する行為」も化粧とされ、例えば、抜歯や散髪など肉体の一部を除去したり、纏足（てんそく）やパーマネントウエーブのような肉体の形を変えたり、入墨のように刺入によって表面の色調を変えることも化粧の中に入っている。このような見方からすると、

① 抜毛や抜歯、爪切りのように肉体の一部を除去する行為
② エチオピア南部に住むスルマ族の下唇伸長や中国の纏足のように、肉体の形態を変工する風習
③ 入墨のように色調を皮膚に付ける行為
④ 美容整形技術

なども広義の化粧に入ることになる。

4 身体の一部を変更する化粧

身体の一部を変更する下唇伸長や纏足も広義の化粧である。これらの化粧について述べる。

スルマ族の下唇伸長は下唇の内側に鋳型を嵌（は）め、除々にサイズを大きくして下唇を突出させるのである。このような化粧が何故始められたか、真相は不明だが、一説によると、アメリカへ送る奴隷狩りで若い女性が少なくなり、部族滅亡を避けるために編み出した化粧法だそうである。下唇が突出していては商品価値がなくなるので、さすがに、土人狩りの対象から外されたという。

中国四大奇書の水滸伝と金瓶梅には、纏足（てんそく）の女性が登場する。金瓶梅のヒロイン・潘金蓮は水滸伝にも現れる。彼女の名前・金蓮は纏足の異称である。

日下翠（金瓶梅、中公新書、一九九六）は纏足について記しているので、その要点を示す。

「少女が五、六歳になると、足の親指以外の指を折り曲げ、布をきつくまき、糸で細かく縛りつける。耐えがたい痛みが一段落すると、指の付け根まで裏側へ折り曲げる。やがて骨が固まって形が落ち着くと、小さな筍のような足になる。纏足は形が整い、厚さが薄いほどよいとされている。足が小さく、運動もままならないので、ふくらはぎや大腿部も筋肉はつかず、自然な成長も妨げられ、細い棒のような足になる。それが当時の美であった。纏足をすると、それに付随して起こる他のさまざまな行動、歩き方、身のこなし、声の出し方などに影響し、女性の立ち居振る舞いが洗練され、盆栽のような人工美を作り出す。とりわけ、性的な快楽に都合がよいとの説もあり、男性にとって、よほどのメリットがあったことは疑いない」といい、さらに「纏足は、不健康な人工美、人工的な性器をもった女性を生み出す化粧風習」と述べている。

纏足発祥については、一説によると、五代南唐（10世紀）の李公主のころとされている。金蓮の別称は、南朝（12～13世紀）の斉主が寵妃・潘氏の歩く道に金製の蓮の花を置いて歩かせ、「歩々蓮華を生ず」と言った故事から、美人の歩みを金蓮歩といい、潘氏が纏足なため、纏足を金蓮と雅称するようになったという。

二　原始社会の化粧

化粧のルーツ探索には、原始社会の化粧が参考になるであろう。文明社会でも、非日常的なハレの日の化粧や地方的な風習に古い伝統的化粧が残されている。このような伝統的化粧風俗は、現代でも熱帯や亜熱帯地域の原始社会に多くみられる。

和田は「一般に暑い地方では、衣服の実用価値は低いので、宗教、識別、保護などの目的から瘢痕、入墨、塗飾などの装身が衣服着用より古い時代から施され、後に装飾的な装身法となり、ほとんど全裸の生活をしている部族民でも、身体のどこかに彩りを与えるのが通例である。彼等にとって裸体とは衣服着用の有無ではなく、瘢痕などの皮膚装飾が何一つなされていない身体のことを指す」という。

ここでは、近世から現代に至る原始社会における瘢痕、入墨、ならびに塗布化粧について示す。瘢痕化粧はサハラ砂漠以南のアフリカに多く、入墨はあらゆる文化圏にもみられるが、オセアニアの島嶼に多い印象である。

1　瘢痕装飾

皮膚に傷をつけてケロイドにする化粧風習である。

瘢痕による皮膚装飾の多くは部族や氏族の表示ならびに性的な目的のものが多い。まれに呪術的に施されるものもある。

部族あるいは種族表示の瘢痕の中には、顔面の傷痕は同士討ちを避けるための敵味方の識別であり、上腕の瘢痕は勇者の象徴で戦士として尊敬・畏怖の対象となる。

顔面を除く身体各部位の傷痕は、どの地方でも男性よりも女性の間で発達し、これは女性の性的魅力を高め、男性に性的興奮を与えることを目的とするといわれ、口辺や股間に傷痕を施す部族もあり、これらの瘢痕は口づけや性行為を意味するとされる。このような種属維持の本能に基づく瘢痕化粧は成女を表示し、男性の関心を誘い、出産を祈願するものである。

2　入墨（刺青・文身・黥面）

入墨は一般的ではないにしても、あらゆる文化圏にも見られ、決して珍しいものではない。これは身体装飾の中では最も芸術的と見られ、入墨が心理的に衣服着用と同じ働きをするとも考えられている。

クック船長旅行記にはオセアニアの入墨風習が記され、彫物の様式には男女差が見られることが多い。タヒチ人の男性は人間や動物を象った彫物、女性は指の付け根か爪先にZ型の入墨をする。

マオリ族の入墨は有名である。この部族の男性は顔、戦いなどの時には他の部位に黒い入墨をしたが、女性は一般的に唇に黒い入墨を施した。フレンドリー諸島やイースター島の原住民にも、入墨風習が見られ、女性よりも男性の方が身体の広範囲に入墨装飾を施していた。

アフリカにおいても、ベニンのフルベ族女性やボロロ族も入墨風習をもち、ナイジェリア・ティブ族はインディゴや木炭を傷痕に擦込んで刺青を作る。

3　塗布化粧

塗布・塗擦、及至は散布による化粧行為は、現代文明社会の化粧法の中心をなしているが、原始社会でも彩色化粧が広範囲に施されているので、使用目的別に記す。

① 美意識に基づく化粧

美意識に基づく彩色化粧としては、アフリカの黒人たちは、瞼、鼻孔、眉毛、唇を黒く彩るかと思うと、ブッシュマンは唇を白く塗っている。西アフリカから中東にかけては、ヘンナ（指甲花）は手掌や指頭、足底、爪を染めるだけでなく、染毛剤としても使用される。

アボリジニは、各人各様に身体と顔を白く塗り、オセアニア島嶼の住民は、男女とも赤と白の化粧を施したり、肌色を強調する目的で、顔、肩、胸に黒鉛、赤や茶系の色も用いている。ペルーアマゾン地帯の原住民男性は、日常的に木の実で、頬、鼻、目にかけて赤く塗り、細く黒い線を書き入れている。

艶化粧も美意識に基づくものである。光と乾燥が強い地域で衣服を着用しない部族では、皮膚に光沢を与えるために、日常的に油あるいは粘土、砂、土あるいは赤、白、黒の顔料を油に混ぜたペーストを塗布することが知られているが、これは光沢だけでなく、保湿や光防御などの目的もある。

② 信仰に基づく化粧

日常的には、質素な化粧を行っている部族でも、祭事や儀式に際しては華やかな化粧を施すことが多く、アフリカ黒人社会における祭礼では、女性より若い男性の化粧が際立っている。例示すると、身体を清めてから体毛を剃り、身体や顔面に油を塗り、黒や黄土色を塗る部族や耳元から額の生え際わに沿って顔面装飾を施し、額を青く縁取る部族、あるいは顔面を赤く塗り、目や口は黒く隈取りし、顎には白い太い線の上に黒く細い線を描き、頬、目の下や唇の両端などに白い点を並べてアクセントにする部族もみられる。割礼を受ける少年は、煤や泥で身体に模様をつけるケースもある。

アフリカの成女式の例を示すと、身体に白い土を下地として厚塗りして表面を削り、美しい木目模様を作る。顔には、白、赤、青、茶などの顔料で模様を描き入れる。目周囲を白く塗り、青でアイラインを施し、眉付近に赤い横線を入れる。額には白を挟んで赤と青の縞模様を入れる。髪は中央で分け、右を白く左を赤く彩色する。

その他の地方については、ニューギニアでは、日常的には顔に白い斑点を施すだけだが、祭りのときは身体にも白い斑点状の化粧をする。他の部族は祭事には顔全体を地色として黄色を施し、その上にチョコレート色、紫、赤、白、青、黒などの色を塗る。オーストラリア原住民は日常的に体と顔を白く塗るが、祭礼時には、レッドオーカーの塊を擦りながら水に溶き顔や髪を赤く彩り、アマゾン地方では、収穫祭のとき、男達が身体を木の実で赤く、炭で黒く塗ってマークを描き、顔も黒や赤で各々好みに染める部族もある。

呪術的な化粧は地方色が強く、アフリカでは、死者の霊と語るときは、瞼の上に水平に白い顔料を塗って呪いにしたり、赤は力と生命力の象徴として重視され、祭礼、病気回復祈願、服喪に際して使用されている。中東の人々はヘンナには一種の聖なる力が宿り、赤い色には魔除けの効果があると信じているため、悪霊や妬みから身を守るためにヘンナを用い、女性は結婚式や出産などの儀式の際に使用する。

身体表面の穴である耳、鼻、口は内外が交流する大切な場として、特殊な装飾をする部族が世界的に多く、ニューギニアでは鼻を飾り、呪術師は顔と身体に、服喪中の女性は頭部に白泥を塗る。

③　表示目的の化粧

身分や階層を識別する化粧例を挙げると、アフリカでは、戦士階級の青年は伸ばした頭髪を編んで動物油とオーカーのペーストで髪を整え、次にこのペーストを体全体に塗り、顔料が乾かないうちに、指先で模様を描き出す。祭事では、身分の高い戦士は黒、一般人は黄土色に体を彩る。カナダ・インディアンでは、抗争に際して茶色の雲母片をちりばめて皮膚を光らせる部族もおり、敵・味方の識別が目的のようである。

原始社会における化粧様式の性別表示例を示すと、戦士競技会では、男性は豪華な化粧を施すが、女性は顔や身体に赤や黒く着色した油を塗り、儀礼の際も、男性は耳元から額の生え際わに沿って顔面装飾を施すのに対して、女性は頬に青い円を描き、その周りを赤で囲む程度である。これらの例では、女性よりも男性の方が派手な化粧を施している。

④　実用目的の化粧

実用目的の化粧例を挙げると、タスマニアの未開人は、森林に入って狩猟するとき、黄色と黒のダンダラ模様を全身に塗る。迷彩色の服装のようにカムフラージュするのである。また、ソェゴ島や北極圏の寒冷地に居住する民族は、防寒を目的に鯨油などを塗布している。

ヘンナには収斂性があり、発汗抑制や皮膚の強化などの働きがあるとされているため、砂漠を裸足で歩くベドウィンは足底に、ペルシャ湾岸の真珠採りは掌にヘンナを塗っている。

三　犯罪と化粧

化粧でカムフラージュして犯罪を犯す。これはよくある話であるが、それとは別に、筆者は長い間、化粧品会社の研究所に勤めていたので、化粧品が犯罪事件に関わった事実にも遭遇した。ここでは、事件に関連した化粧品の話を披露する。

1　塩酸入り乳液

入社して間もないころ、警察から持ち込まれた自社の乳液を分析したことがある。「肉親関係のもつれから起こった犯罪で、被害者の鏡台の前に分離した乳液が置いてあったので、念の為、犯行と関係するかどうかの判断材料にしたい」という。

当時の乳液はアルカリを使って乳化したので、酸を加えれば分離してしまう。早速、pHを測定すると弱アルカリ性であるべき乳液が強い酸性を示した。したがって、乳液に酸を加えたことは確実である。pHの程度からみて、酢酸などの有機酸ではなさそうである。普通の人たちが簡単に入手できる強酸性のものは、塩酸である。そこで、塩素イオンの検出実験を行うと、塩素が高濃度に混ざっていた。

この結果を警察に報告すると、「犯人は塩酸を混ぜたのですか？。被害者は乳液が分離していたので使わずに済んだが、犯罪要件を充たす証拠になりそうです」と言っていた。

2　犯人がヘアトニックを飲んだ

中国地方のある検事局から電話がかかってきた。「暴行傷害で現行犯逮捕した犯人が犯行直前に貴社のヘアトニックを飲用したと供述している。ついては、そのヘアトニックに精神錯乱や心理的に影響する成分が入っていないだろうか」という問い合わせであった。

しかし、そのような事態を想定して開発研究を行っていないので、電話ではその旨を伝え、調べたうえで報告することで了解をとった。

検事局へは、「ヘアトニックの主原料エタノールについては、広く知られているように、大量に飲用すれば、いわゆる酩酊状態になる。この場合は、精神錯乱や昏睡状態も誘起し得るであろう。しかし、このような状態を惹起するに必要な用量は個人差が大であるから、犯人で実験するしかないが、体調によっても変動するので、その点にも配慮する必要があろう」と付記した調書を提出した記憶がある。

3　放棄死体のマニュキュア

品質研究部長のとき、静岡県警から依頼があった。富士山麓で女性の死体が発見された。殺害後、ガソリンをかけて焼いてあつた。皮膚全面が焼けただれ、被害者の身元を割り出すことができなかった。ところが一部の爪が残っていた。その爪にはマニュキュアが塗ってあった。県警からの依頼はマニキュアがどこのメーカーの製品か特定できないかというのである。

分析研究室では、他社品分析も行っていたので、既存の試験資料リストに該当品が入っているかどうかが鍵である。そのような条件つきで依頼を受けた。

分析結果から、そのマニキュアは自社製品であることが判明したので、工場技術課で製品ロット毎の検査資料を照合して該当ロットを割り出し、どの方面に出荷したかも調べて被害者の居住地域を特定できた。警察では、その居住地の当社販売員の聞き込み調査を行い被害者を割り出し、犯人検挙の緒となった。後に、県警から感謝状が届いた。

その後、県警では、化粧品分析の必要性を認め、たまたま県警の科学研究所の研究室長が高校の後輩であり、「化粧品分析法を研究員に教えて欲しい」と依頼されたので、県警の研究員を受入れ、警察でも化粧品分析をするようになった。

4　パーマが犯人を確定

警察庁科学警察室長だった須藤博士から聞いた話である。この話は東北の地方都市で起きた三角関係のもつれによる殺人事件であった。氏は毛一筋に研究し理学博士を得た毛髪監査の達人であり、氏の話を聞いていると、『事実は小説よりも奇なり』を実感させる。

氏の話によると、「被害者の女性の股間に精液が付着していたので、被害者の彼氏が被疑者とされていた。ところが、被害者の掌に髪の毛が握られていたので、その毛を分析し、被害者、被疑者の毛とは別人の毛であり、しかも、ほぼ1ヶ月前にパーマをかけた女性の毛であると鑑定した。早速、美容院の聞き込みが行われ、三角関係の女が捜査線上に浮かび上がった。彼女の自白によると、「凶行前夜、彼と関係をもち、彼の精液を採取した。被害者を殺した後、その精液を股間に塗っておいた」という。この話は、パーマの毛が真犯人検挙の鍵となったのである。

5　ヒ素入り死の化粧水

17世紀イタリアの文献上の話である。

トファナ嬢は、ヒ素を含んだ無色の化粧水を製造販売していた。イタリアの貴婦人たちは、それをトファナ水とか、ナポリの雨、パリの聖ニコラスの甘露などと呼んで愛用していた。彼女は使用説明書の代わりに、使い方を口頭でこっそりと伝授していた。しかし、ヒ素中毒で多くの女性が死亡し、世紀の毒殺者としてトファナは逮捕され、死刑に処せられるまでに、死者の数は六百人以上にも及んだという。

四　セックスと化粧

片仮名のセックスには、英語のSEXにない意味が混入して言葉の範囲が広がっている。ここでは、日本語のセックスに関係した話をする。

1　空振りに終わった性と化粧の話

前出の瘢痕化粧には、性の表示もあった。したがって、文献的に知られている性器強調の化粧に注意を払っていた。もう、10年くらい前のことだったが、フジテレビの『人類みな兄弟』の番組で、全裸のアマゾン・マチブ族の取材記録が放映された。彼らは腰紐だけで陰部は露出したままであった。陰部に化粧の痕跡でもないかと画面に集中したが、発見できなかった。早速、テレビ局に電話すると、幸いにも、その取材担当者が電話の脇にいて、聞き込みに答えてくれた。彼

の答えは「取材期間中に、性器彩色を見ることができなかった」であった。

2　これが本当のシモヤケの話

陰部に直接使用することを目的に造られる化粧品は日本にはない。浴用剤と洗浄剤はメーカーの意向とは別にユーザーが作為することなく、入浴などで陰部と接触させてしまう製品である。医薬部外品の腋臭防止剤を陰部に使っている人もいるであろう。

研究室では週1回、抄読会を行っていた。その際、イギリスの医学雑誌にフェミニン・デオトラント・スプレーによる皮膚障害の論文が掲載されていたので、この論文を選んだ。この製品は腋窩や陰部の消臭用剤である。　この患者は、あまりにも近付けてスプレーしたため、寒冷刺激によって局部に皮膚炎を起こしてしまったのである。したがって、カブレというよりは冷却による凍傷である。場所が場所だけに、「これこそ、本当のシモヤケである」とオチをつけたら、皆、大笑いした。

3　乳液の意外な使い方

某皮膚科医と飲んでいた。突然、「お宅の会社では、粘膜試験をやってるかね」と尋ねられた。「えー、兎の眼粘膜試験をやっていますが…」と答えたら、「では、お宅の商品を推めることにしよう」という。

「それ、一体何ですか」と聞き返した。すると、彼は「男性の患者だが、ムスコを腫れさせてきたのだが、聞くと『夜のお勤めで家内が使っている乳液を塗ったのです。初めのころは具合が

よかったんですが、続けているうちに、こんなに腫れあがってしまいました』とのことなんだ」と答えた。

当時、会社では安全性研究の責任者だった立場から、「患者の話からすると、アレルギー反応のように思えますが、われわれがやっているのは、刺激試験です。推めて頂くのは有り難いのですが、パッチテストで確認したうえにして下さい」というと、「ムスコにパッチなんかできっこないよ」と笑いながらいった。「せめて、問題の乳液をコントロール試料にして、当社品と比較して下さいよ。背中で…」とたたみかけると、「君の立場もあるからなー、旦那ご愛用の乳液で陽性、検査品陰性を確認したうえで推挙することにするよ」ということで、検査試料に当社乳液を提供した。後日、「お宅の会社の乳液は陰性だったから、患者に残った乳液を渡しておいたよ」と電話連絡があった。

4　石部金吉の上司

かって、上司の研究室長は石部金吉だった。彼の話題を2題紹介する。

① ボディローションを何故舐めたか

ボディローションの返品があった。返品理由は「主人が苦いといった」というのである。それもそのはず、センブリの成分を配合した製品である。石部金吉氏は「この御主人は何故舐めたのだろうか」と聞いたので、「ボディローションをわざわざ舐める人はいませんよ。このローションをつけた奥さんの体を舐めたに決まっているのに…」と答えておいた。

② 右脇腹のカブレ

抄読会で、接触皮膚炎、いわゆるカブレに関する論文を選んだ。その中に、カブレの原因がなかなか把握できなかった事例として、新婚旅行を中断せざるを得なかった夫婦の話が記されていた。

訳文を読んでいくと、石部氏から質問があった。「ドクターは、この患者のカブレの原因が分からなかったのは何故か」というのである。「室長、夜寝るとき奥さんは右に寝ますか、それとも左ですか」と聞いた。左側だというので、「室長は右利きですよね。このドクターも右利きで、この旦那は左利きだったはずです。ドクターは左利きのことを忘れていたんでしょう。だから、奥さんのつけていたローションで右がカブレたんで、原因を気付くのに遅れたのですよ」と答えると、意味を悟った研究員たちは笑い出してまった。

石部氏のために一言つけ加えておく。彼は極めて真面目な上司で信頼できたが、時折、〃クソ冠〃がつくことがあり、辟易することがあったということである。

参考文献
深作光貞、化粧、化粧文化、一号、一九七九
和田正平、黒いアフリカ―瘢痕、刺青、ボディペインティング、同誌、六号、一九八二
松島もとこ、ヘンナとその世界、同誌、一一号、一九八五
石川梵、野生の儀式、週刊朝日、一九九六年五月三日
フランデンブルグ、菊谷匡祐訳、大地が語る地球夢物語、週刊朝日、一九九三年一一月三一日版
永武ひかる、アマゾンの漢方、NTT出版、一九九六
吉田集而、呪術の実相、民俗学、四二号、一九八七
吉川幸次郎、清水茂訳、水滸伝、岩波文庫、一九八八
村上知行訳、金瓶梅、ちくま文庫、二〇〇〇

日本列島にも青銅器時代はあった

中山　喬央（たかひろ）

まえおき

筆者の考古学は、六〇からの手習いであるから、始めてから十四年ということになる。勉強しはじめてまもなく、「三時代法」というのにぶつかった。これはデンマークの王立博物館に勤務していたトムセンが、収蔵資料を整理する際に、その主要利器の材質の違いによって古い方から石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三時代に区分したことによるものである。石器に続く銅を利用する文化は、メソポタミアの肥沃な三日月地帯周辺地域で起こり、西は北欧、東は日本列島まで連続して伝播したのであるが、何故か日本列島だけが、その後の文化である鉄の方が、鉱石よりの製錬が早いと教えられ、永年にわたって疑問を感じていた。

最近鉛同位体比法を勉強する機会を与えられたので、その最終判定に、理論よりも測定数値の結果を重視する独自の考え方を導入して、かねてよりの疑問の解決に取り組んだ結果、従来の学会の定説より一〇〇〇年以上も古く、日本列島産の銅鉱石を利用した銅の製錬が行われており、日本列島にも今を去る二四〇〇年前頃から一五五〇年前頃迄の約八五〇年間、青銅器文化時代ということの出来る時期が存在したとの考えに達した。

以下、その理由に付き述べる。

青銅器文化についての考え方

青銅器文化の特徴を示すものとしては、手工業の発達、特に青銅器製造工業の存在と、自給自足の経済を越えた外部との流通を明らかにする交易の発達があり、一方では財力・権力の集中、ないしは階級分化を示すとみられる貴金属製品、精鋭な武器、建築遺構、彫像などの存在もある。言葉を変えれば、鉱石の採掘、冶金術の発達による職業分業化の高度化、農業や交易の発達による定着生活の確立と部族間勢力圏の境界明確化、その一方で青銅工人の前述の境界を越えて、各地での開発を可能にする社会の成立等である。それは進んだ金属製品の応用による資源の開発や農業生産の増大に繋がり、交易の発達と相まって人口の増加、都市生活の開始へと結びついていくものである。

鉛同位体比法

鉛同位体比分析法とは、鉛にある質量数の異なる四種類の安定同位体の比率によって、出土鉛鉱石の鉱山を特定すると共に、青銅製品がどの鉱山の鉛を使用したのか判断しようとするものである。

すなわち２０４Ｐｂは地球が四十六億年前に出来た時から変わらないが、他の三種類の同位体は、これらを生む親の放射性核種が天然にあり変化する。

放射性核種にはウラン同位体とトリウムの同位体がある。そして次の様に変化する。

２３８Ｕは半減期４５億年で２０６Ｐｂに、２３５Ｕは7億年の半減期で２０７Ｐｂに、２３２Ｔｈは１４０億年の半減期で２０８Ｐｂとなる。

一方地球ができた時の鉛同位体を隕石を使用して測定すると、２０４Ｐｂ一に対し、２０６Ｐｂ九・三〇七、２０７Ｐｂ一〇・二九四、２０８Ｐｂ二九・四七六であり、その後、鉱山が形成されるまで、重い方の三種類の鉛が前述の法則に従って増え続ける。

鉱山が形成され鉛鉱石が固定される時期はばらばらであるから、鉱山ごとに鉛鉱石の鉛同位体組成に違いが出る。しかし鉛はいったん鉛鉱石になると、その後製品になっても同位体は変らないので、それを測定する事によって出土鉱山を見つけ出す事ができるというものである。

それを図示するＡ式図は、２０６Ｐｂで、２０８Ｐｂと２０７Ｐｂを除したそれぞれの指数が交差した点をプロットしたもので、鉛鉱石の性質を最もよくあらわす表として同位体分析の基本となっているものであり、Ｂ式図は全く変化しない２０４Ｐｂで２０６Ｐｂと２０７Ｐｂを除した指数の交差したところをプロットした表で、鉛鉱石の生成年代を表す表であるとされている。ただこの表のウイークポイントは２０４Ｐｂの量が少ないので、若干の誤差でも指数の違いが大きくなることである。

次にどうして鉛の同位体を測定して銅鉱石の使用鉱山が分るのかということについて説明する。

銅鉱石には元々一定量の鉛が含まれているが、青銅は、銅と錫と鉛を主要原料として製作されている。

そして青銅製品の鉛同位体比を測定の結果、数値にばらつきがないので、銅鉱石と鉛鉱石は同

一鉱山のものを使用していると判断し、鉛同位体比による銅鉱山測定方法を有効なものであると認めている。

朝鮮半島出土の青銅製品

日本列島の青銅製品を論じるには、先ず日本列島よりも早く中国大陸青銅器文化の影響を受けた、朝鮮半島の実情を調べなければならない。

全羅北道・完州・上林里出土中国式銅剣

『韓国考古学事典』に次の様に掲載されている。

全羅北道・完州郡・伊西面・上林里で現地住民が墓の近くにある木を伐採する際、偶然に発見した。

遺跡現場は全州から金堤に行く一般道路沿いで、南側の約二〇m下がった低い丘陵上に位置し、海抜七九〇mの母岳山山頂を真南に展望できる場所である。

遺物は全部で中国式銅剣二六点が、地表下六十cmの場所に、鋒部(きっさき)を東側に向け、縛られた状態で水平に並んで配置されていた。

銅剣は周礼考工記に、桃氏為剣という掲載があるのにちなんで「桃氏剣」とも呼んでいる形式で、剣身と剣把を一緒に鎔范して鋳造した点が、韓国琵琶形銅剣や細形銅剣とは異なる。

剣身はおおよそ横断面が平らな菱形で、剣先は蝶形で、柄は円筒形だが中間に二つの節がある。

出土銅剣の大部分は完形を維持していたが、全体の長さは44.4～47.2cmである。

これらの銅剣は春秋時代後期、BC6世紀頃、呉・越・楚が存在した揚子江流域で定型化され、山東半島経由で伝来したものである。朝鮮半島では、黄海道・載寧郡・孤山里、全羅南道・咸平郡・草浦里等の墓地遺跡で、細形銅剣と共伴で一～二点が出土することがあったけれど、この遺跡のように二十点を越す多数のものが発見された例は無い。

このような出土状況と、墓地遺跡と違って共伴遺物も全く検出されていないので、報告者は一種の埋納遺構と判断している。

春秋末、戦国初期に、早くも揚子江流域を含む中国大陸・中原地帯と朝鮮半島南部が、どのような形の交流があったのかを考えさせてくれる貴重な事例である（筆者訳）。

この銅剣の鉛同位体比が『考古学雑誌』七五―四「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」第4表韓国出土銅剣の鉛同位体比に、伝慶尚道出土細形銅剣二点と共に、中国式銅剣、完州郡上林里NO.3及びNO.14として発表されている。

ここで重要なことは、中国産鉛鉱石にはこの中国式銅剣の鉛同位体比が示す、207/206の指数が0.7900～0.8299と208/206の指数が2.0200～2.0799の間に来るものが無く、一方朝鮮半島産の鉛鉱石には多数見られるということである。

次表にはNO.3（163）中国式銅剣と相似する指数を持つ416慶尚北道・第一蓮花鉱山の指数を掲載したが、その他、NO.14（164）中国式銅剣は、418慶尚北道・第一蓮花鉱山の指数、206/204 18.981、207/206 0.8295 208/206 2.0627と相似し、この二点の中国式銅剣は、何れも朝鮮半島産の鉛鉱石を使用していた事が分る。

NO・資料名	出土地	206／204	207／206	208／206
161・細形銅剣	伝慶尚道	19.272	0.8181	2.0697
162・細形銅剣	伝慶尚道	17.836	0.8711	2.1537
163・中国式銅剣	完州郡上林里 N03	20.032	0.7930	2.0278
164・中国式銅剣	完州郡上林里 N014	19.053	0.8273	2.0761
416・	第一蓮花 慶尚北道	20.046	0.7931	1.9613

又、細形銅剣の方も、161 細形銅剣の数値が、414 慶尚北道・第一蓮花鉱山の 206/204 19.324、207/206 0.8172、208/206 2.0271 と、162 細形銅剣の方は、410 京畿道・三宝鉱山の 206/204 17.796、207/206 0.8794、208/206 2.2272 とそれぞれ相似して、何れも朝鮮半島産の鉛鉱石を使用しているものと認められる。

これは後で述べる日本列島出土の前漢鏡が、日本列島産の銅を使用していたと考えられることとあわせて、朝鮮半島産の銅が中国大陸に輸出されて中国式銅剣が作られ、それが又朝鮮半島に入ってきたと考えるよりは、中国大陸の動乱を逃れて朝鮮半島に渡来した青銅工人が作成したと考える方が整合性がある。

中国北方系青銅器（前漢時代）の鉛同位体比

今度はスミソニアン研究所サックラー美術館が所蔵している四点の中国大陸出土の前漢時代資料が、どの地域の鉱山の銅鉱石を使用したのかについて検討する。N2094 の帯飾板は、209 陝西省・丹鳳鉱山及び 216

資料名	206／204	207／204	208／204	207／206	208／206
V7015 Sackler N 2094	17.565	15.494	38.220	0.8821	2.1778
V7107 Sackler N 2150	18.477	15.661	38.806	0.8476	2.1004
V7155 Sackler N 2151	18.038	15.626	38.468	0.8663	2.1326
FGAV 53.92c N 2152	17.603	15.547	38.304	0.8832	2.1760
426・将軍	18.485	15.666	38.855	0.8475	2.1020

安徽省・銅官山鉱山のものと相似する。特に銅官山の 206/204 17.579、207/204 15.492、208/204 38.428、207/206 0.8813、208/206 2.1860 と近い。

ところが次の帯飾板 N2150 は、最下行に掲載した 426 朝鮮半島・慶尚北道・将軍鉱山のものと数値が極めて接近しており、これは朝鮮半島産の鉛鉱石を使用したことが明らかである。中国大陸では王朝が変る度に、鉛鉱石の同位体比が変化しており、これは青銅製品の旺盛な需要に対し、銅素材の供給が不十分であった事を物語っていると思われるが、前述の帯飾板 N2150 の例はそれを裏付け、前漢時代、朝鮮半島産の銅素材が中国大陸に輸出されていた事を物語るものである。

次の S 字飾 N2151 は、210 甘粛省・鄧家山鉱山の 206/204 18.053、207/204 15.630、208/204 38.216、207/206 0.8658、208/206 2.1169 と指数が近接しており、飾り板 N2152

は209陝西省・丹鳳鉱山の206/204　17.622、207/204　15.513、208/204　38.432、207/206　0.8803、208/206　2.1809と指数が相似していて、共に中国大陸産の鉱石を使用したものと思われる。

日本列島出土前漢鏡と弥生仿製鏡の鉱石原産地

須玖岡本遺跡甕棺墓出土の前漢鏡四面と、岡山県山陽町・用木2号墳と便木山8号土壙墓付近出土の弥生式小形仿製鏡について検討した結果を述べる。両者共に207/206が0.87台、208/206の指数が2.16台で、日本列島・朝鮮半島・中国大陸何れにも該当する鉱山がない。

ところがこの前漢鏡と弥生小形仿製鏡は鉛同位体比の数値が近接し、同一地域における鉱山の銅素材が使用されたと考えられるのに加え、次表に記したGJ—6秋田県太良鉱山と、53岐阜県神岡・茂住鉱山の数値の中間点に入るものが多く、同地方の鉱山の鉛同位体比未測定のものが数多あることを考えると、日本列島産の鉛鉱石を使用した可能性が大である。

一方表最下段の209中国大陸・陝西省・丹鳳鉱山は、肝腎のA式図関連の数値が離れているのに加え、当時の中国大陸青銅器製作において、一部ではあろうが朝鮮半島産の銅素材を輸入しているような事実を考えれば、青銅品の素材が中国大陸から、日本列島に運ばれてきたとは考え難い。

日本列島と中国大陸の海上交通は、それから八〇〇～八五〇年後となる、鑑真が来日した際でも、五回も海難事故・海賊の襲来により失敗し、七五三年六回目で漸く薩摩の坊津港に到着しているほど困難なのである。

『前漢書』地理志には、楽浪郡の海中に倭人があって一〇〇余国に分かれており毎年来献していると記されているが、楽浪郡の設置はBC一〇八年のことであり、漸くこの時期に半島北部との交易ルートが開設されたと考える。

中国唐時代の金属統制に関し、ライシャワーの『円仁・唐代中国への旅』（八三八～八四七年）には次の様に記されている。

第一章円仁の日記2頁～3頁

「銅の使用を禁ずる勅令が下り、国内の銅の売買は禁じられた。原則として六年に一度ずつそのような禁令が発布される慣習であったという。禁令の理由は国中の人々が絶えず銅製品を作ると、貨幣を作る銅が不足する恐れがあるから、というのである。」

第七章佛教弾圧・官の記録208頁

「それらは例えば、～仏像や釣鐘から得られた銅を国家の鋳造所に割り当てることや、鉄を農具に振り向けたり、金銀翡翠を国庫に収めたことについて告げている。」

州庁の迫害246頁

「最近勅命の文書が届き、それによると国中の青銅と鉄の仏像はすべて壊され、目方を計られて塩と鉄の役所

		206／204	207／204	208／204	207／206	208／206
前漢鏡	星雲文鏡	17.728	15.540	38.372	0.8766	2.1645
	重圏文鏡	17.819	15.577	38.537	0.8742	2.1267
	草葉文鏡	17.620	15.467	38.114	0.8778	2.1631
	連孤文鏡	17.763	15.539	38.388	0.8748	2.1611
仿製鏡	36	17.781	15.560	38.459	0.8751	2.1629
	37	17.795	15.574	38.507	0.8752	2.1639
太良	GJ—6	17.711	15.687	38.629	0.8857	2.1811
茂住	53	18.012	15.591	38.600	0.8656	2.1430
丹鳳	209	17.622	15.513	38.432	0.8803	2.1809

（塩鉄司）へ手渡された。」

247頁

「さらに別の勅令があり、国中の諸寺院の僧尼が使った銅の道具類、鐘、釣鐘、大釜、鍋などは各州の塩と鉄の政府管理人によって政府の倉庫に集められ、記録されて王座に報告されねばならない。」

このような記載事項は、唐の時代、中国で銅は貴重品で、流通を含め、すべて中央政府の管理下にあったことを示すものであり、銅素材を朝鮮半島から輸入した前述の事柄を裏書するものと思う。

加えて紀元前後頃の日本列島における集団が、当時の中国中原と直接交易をする力を有していたとも考え難い。

その一方では、それに先駆けて朝鮮半島で中国式銅剣が朝鮮半島産の鉱石を使用して作られていた事実があり、朝鮮半島に中国大陸より渡来した青銅工人の関与を考えることができる。

これらの事から、日本列島出土の前漢鏡は、日本列島産の鉱石を使用して、渡来していた中国の工人が作成したと考えるのが妥当である。

これについては前漢鏡や弥生仿製鏡よりも古く、日本列島の青銅器文化形成の要となった銅剣・銅鐸の鉛同位体比を検討する事により検証していきたい。

日本列島出土銅剣の鉛同位体比

日本列島出土銅剣の鉛同位体比はA式図関連の207/206が、0.7600～0.8999、208/206が1.9800～2.1899となるが、集中する指数は207/206が0.8700～0.8899、208/206が2.1600～2.1799と、前に述べた前漢鏡、弥生小形仿製鏡の鉛同位体比指数とほぼ同じである。

一方B式図関連の指数も206/204は17.300～20.899、207/204は15.440～16.099で、集中する指数は206/204が17.600～17.799、207/204が15.530～15.549と、丁度前漢鏡、弥生小形仿製鏡とほぼ同じ所に入る。

従って集中している箇所の指数を示す銅剣は日本列島産の鉱石を使用していると考えることが出来るが。それ以外のものを個別にチェックしてみると、日本列島産の鉛同位体比と指数が一致したものや、朝鮮半島で朝鮮半島産の銅鉱石で作られ、日本列島に製品として搬入されたと考えた方がよいものがある。

以下明細を述べる。

完全に五つの指標が一致しているケースとしては、108平形銅剣・善通寺市出土と58岐阜県神岡・茂住鉱山がある。

香川県善通寺市善通寺町瓦谷出土の108平形銅剣は206/204　18.096、207/204　15.579、208/204　38.592、207/206　0.8609、208/206　2.1326に対し、54岐阜県神岡・茂住鉱山のそれは、206/204　18.082、207/204　15.572、208/204　38.544、207/206　0.8612、208/206　2.1316とその差は、それぞれ0.014、0.007、0.048、▲0.0003、0.0010で誤差の範囲に収まり全く同一の鉱石を使ったものと認められる。又87細形銅剣、岡山市飽浦通称山本ノ辻のものは206/204　18.147、207/204　15.596、208/204　38.468、207/206　0.8594、208/206　2.1198であるが、

GJ—13 岐阜県神岡・栃洞鉱山のそれは、206/204　18.161、207/204　15.562、208/204　38.445、207/206　0.8569、208/206　2.1169 と、その差は▲0.014、0.034、0.023、0.0025、0.0029 で同様に五つの指標すべてが相似している。ただしこちらの方は、朝鮮半島慶尚北道・漆谷鉱山の425 とも同様に五つの数値がかなり近接している。従って鉛同位体比から見た場合は、日本列島と朝鮮半島のどちらで製作されたのか判別ができない。

その他五つの指標が全て似ているものとしては、愛媛県川之江市柴生町垣添出土の 126 平形銅剣と、岐阜県神岡・茂住鉱山の 53 が、福岡県糸島郡二丈町吉井出土の 95 細形銅剣が、長崎県対馬・対州鉱山の 72 と、香川県善通寺市善通寺町瓦谷出土の 107 平形銅剣が、秋田県・太良鉱山 GJ—6 鉱石と、それぞれ五つの数値が接近して、何れも日本列島で製作されたものと考えられるのに対し、高知県須崎市下分甲出土の 102 中細形銅剣は、五つの数値全てが朝鮮半島慶尚北道・第一蓮花鉱山の 418 と近く、これは朝鮮半島で製作され、日本列島に搬入された青銅製品であることを、鉛同位体比の指数から云う事ができる。

銅鐸の素材原産地

銅鐸の鉛同位体比指数は、A式図関連の 207/206 が 0.8100～0.8999、208/206 が 2.0600～2.1899、B式図関連の 206/204 が 17.200～19.399、207/204 が 15.430～15.799 と、銅剣と比べると狭い範囲に集中している。

更にA式図関係では、前漢鏡・弥生小形仿製鏡・銅剣でも見られた 0.87・2.16 台への集中度が一段と高まっている。その一方でB式図関係の指数は 17.700 と 15.530 を中心にして拡散傾向

が見られる。

ここで製品の鉛同位体比と鉱山の鉛同位体比指数をそれぞれ個別に突合してみると、40ST 鳥取泊銅鐸の小舌の指数が、206/204　18.457、207/204　15.613、208/204　38.904、207/206　0.8459、208/206　2.1078 であるのに対し、42 石川県・倉谷鉱山のそれが、206/204　18.456　207/204　15.621、208/204　38.885、207/206　0.8464、208/206　2.1069 とその差は、0.001、▲0.008、0.019、▲0.0005、0.0009 と誤差の範囲で完全に一致し、同鉱山の鉱石を使用した事が裏付けられる。

その他、D42 島根県・城山 2 銅鐸の鉛同位体比指数が 206/204　17.945、207/204　15.558、208/204　38.542、207/206　0.8670、208/206　2.1473 で 53 岐阜県神岡・茂住鉱山のそれぞれの指数、18.012、15.591、38.600、0.8656、2.1430 と差額が、▲0.067、▲0.033、▲0.058、0.0014、0.0048 と五つの指数全てが相似しているので、これも同鉱山の鉱石を使用している可能性が大である。

その一方で、D40A 鳥取県・泊銅鐸は五つの指数がそれぞれ 18.558、15.650、39.055、0.8433、2.1045 であるのに対し、72 長崎県対馬・対州鉱山の指数 18.476、15.666、38.983、0.8479、2.1099 と、426 朝鮮半島慶尚北道・将軍鉱山の指数、18.485、15.666、38.855、0.8475、2.1020 が共に同じ程度の違いで、この銅鐸の銅素材が朝鮮半島から輸入された事も考えられる。

更に D53 出土地不明銅鐸の鉛同位体比指数は 19.174、15.767、39.521、0.8223、2.0612 と現在の所、周辺に日本列島産鉛鉱石の鉛同位体比が存在せず、むしろ朝鮮半島慶尚北道・第一蓮花鉱山グループの指数の方が相似点があるので、これも朝鮮半島産の銅素材を使用した可能性を考

えている。

ところで、この鉛同位体比指数は、同じ坩堝で作成されたといわれてきた同笵・同型青銅製品を否定する結果を示している。

一九八二年六月の銅鐸論文の59頁9)同笵銅鐸には次の様に記載されており、それを図示したのが上段の表である。

本研究で測定した五三鐸の中には一組の同笵銅鐸がある。D—12（三重神戸）、D—19（大阪恩智）、D—27（兵庫倭文）である。～鳥取泊鐸三点の分析値が全く一致したことを勘案すると、一個体内での材質ムラとか測定誤差の為の変動とかではなく、原料が少しずつ異なると考えた方がよさそうである。

NO	銅鐸名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
D—12	三重・神戸	17.602	15.527	38.232	0.8821	2.1720
D—19	大阪・恩智	17.663	15.519	38.255	0.8786	2.1658
D—27	兵庫・倭文	17.670	15.511	38.277	0.8778	2.1662
D—40A	鳥取泊	18.558	15.650	39.055	0.8433	2.1045
D—40B	鳥取泊	18.567	15.652	39.087	0.8430	2.1052
D—40C	鳥取泊	18.564	15.657	39.081	0.8434	2.1052

又これらの銅鐸を同笵と認めた三木文雄は、一九七四年吉川弘文館から刊行された『流水文銅鐸の研究』二七五頁の同笵（A）9のなかで次の様に述べている。

大阪府八尾市恩智と三重県津市神戸および兵庫県三原郡緑町倭文出土の三銅鐸と、奈良県戸尾氏蔵の出土地不詳の4銅鐸。ともに不均衡な厚づくりである性質を共有し、裾の横帯は両面とも三条の平行線を伴った左上がりの斜線を持つ鋸歯文であり、片面の中横帯と他面の中および肩帯は重ね方形区画ないし重ね菱形つなぎ文という特殊な帯であり、他面の肩帯が斜格子文である。横帯文間の上下両区にm型流水文をかざり、鰭に3対、鈕に2個の双耳をもち（倭文にはない）、鈕の施文にいたるまでの細部の一致がみられる。かつこの銅鐸には裾の一面に左向きに並ぶ魚の列、他の面の裾に同様左に向かう鹿の列が線鋳出しであらわされた絵画を持つことについて早くから関心がいだかれ、かつ同笵を認識させるきっかけとなった。いずれもともに鰭が、身の裾より引き上がった形にできて（但し神戸出土は鰭裾と身裾が等しいが）気比出土3号銅鐸を除く他、何れの流水文銅鐸にも見かけない性質を持っている同笵4個の銅鐸で～

このように研究者が克明に調査した上で同笵と認定した銅鐸で、それぞれの鉛同位体比が違うということは、おなじ坩堝からの銅溶液で作成したのでは無いということになり、異なる場所と時期、或いは違う鋳型で製作した可能性も生じる。

それは当時の青銅工人が、同笵と間違えるほど相似する青銅製品を製作する技術を保有していた事にもなり、朝鮮半島での中国式銅剣、日本列島での前漢鏡作成が行われていたことの裏書にもなる。

まとめ

長年の筆者の疑問を解決するきっかけとなったのは先学が鉛同位体比研究成果を発表していただいたお陰である。今を去ること二四〇〇年前頃の銅鐸の舌と、それにやゝ遅れる平形銅剣で、日本列島産鉛鉱石と一致するものが見つかり、それにヒントを得て、自分自身の勉強に基づく考えを述べた。

参考文献
井上洋一他「東京国立博物館所蔵弥生時代青銅器の鉛同位体比」『ＭＵＳＥＵＭ』577　東京国立博物館、二〇〇二年。
小葉田淳『神岡鉱山史』三井金属鉱業㈱、一九七〇年。
中口裕『改訂銅の考古学』雄山閣、一九八七年。
平尾良光『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、二〇〇一年。
馬淵久夫「鉛同位体比による青銅原料産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、一九九五年。
馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『ＭＵＳＥＵＭ』370　東京国立博物館、一九八二年一月。
馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68―1　日本考古学会、一九八二年六月。
馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2　日本考古学会、一九八七年。
馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75―4　日本考古学会、一九九〇年。
三木文雄『流水文銅鐸の研究』吉川弘文館、一九七四年。
전영래「完州　上林里　銅剣遺物」『韓国考古学事典』国立文化財研究所、二〇〇一年。
Ｅ・Ｏ・ライシャワー『円仁―唐代中国への旅』原書房、一九八四年。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の試練期

松下　魏三

一、給仕をしながら夜間中学へ

四郎は大正二年（一九一三年）千濱尋常高等小学校を卒業したが、当時、長兄と次兄が進学していたので自分も兄たちと同じように進学したいという思いが日増しに強くなっていた。父秀雄は四郎が向学心に燃えている様子をみて、四郎の希望をかなえてあげたいと日夜思索していた。

当時、父秀雄の妹しゆんの夫である沖卯太郎が大蔵省長崎専売局から東京専売局に転勤していたので、秀雄は四郎の進路について沖卯太郎に懇願したところ快く了承し、翌年の大正三年（一九一四年）三月小学校高等科一年を修了した四郎を千濱まで迎えに来て、四郎は生れて初めての東京の地を踏むことになった。

当時は現代のように交通機関が発達していなかった時代であったので、千濱から隣村の南山村まで歩き、南山から軌道の上を馬に客車を引かせて走る〝馬車鉄道〟で堀之内駅まで行き、東海道線（現在のJR東海）に乗り換え、堀之内駅（現在のJR菊川駅）から東京駅へ向ったのである。

初めて見る東京はただ珍らしく、毎日戸惑うばかりであった。

叔父の沖卯太郎の家で旅装を解いた翌日、叔父は勤め先から帰宅すると、「お前を大蔵省の給仕に採用してもらったから明日から勤めなさい」と言われた。

当時の大蔵省は大手町にあったから神田美土代町の叔父の家からは歩いて十五分くらいのところを毎日通勤した。勤務場所は大蔵省主税局関税課で筒袖の着物に袴をはいて靴履という当時の給仕の標準的な服装で通勤し、早く給仕の仕事に慣れたいと一所懸命に努力した。

同僚の給仕の多くは東京の下町育ちの江戸っ子で、遠州の片田舎で育って東京にはじめて出て来た四郎は東京弁は不慣れでよく聞き取れず、また気転を利かすような事務的な才能も思うように発揮できず、大変困惑した。

特に電話の取り次ぎは電話のない田舎で育ち、しかも無口で温厚な四郎には大変苦手で満足に出来ないので、上司から「お前は言葉遣いが悪いぞ」と叱られ、悔しさと情けない思いをする毎日であった。

このようなつらい勤めを我慢して一年続けたが、ある日叔父に職場の勤務の実情などを話したところ大変よく理解して、間もなく同じ専売局であるが、煙草・塩・樟脳などの製品の品質管理をする化学分析室の給仕に転勤させて下さった。

その頃になると東京弁にも慣れ、職場の上司で農芸化学や薬学を学んだ役人が親切で温厚な方々であったので今までの関税課とは違い毎日楽しい勤務であった。

四郎は化学分析室で働く化学者の真摯な姿勢や態度に感心し、化学や化学者に対し一層親しみを覚えるようになった。

昼間はこのような給仕として働き、夜間は叔父が薦めて下さった神田錦町にある錦城中学校の夜学に通った。

当時の夜間中学はすべて私立で公立はなかった。そして有名な中学の夜間部はいくつかあったが、なかでも錦城中学は名門であった。現在の定時制の高校とは異なり昼間の中学校が五年制であるのに夜間の中学校は四年制で昼間の五年間分の授業を終了しなければならなかった。そしてここで学ぶ生徒はいずれも昼間は働いて疲れているので夜間の授業では眠くなり、毎日の授業は睡魔との闘いであった。

四郎は何時も教室の前の席に座り、眠気を醒ますのに苦心した生々しい思い出が後年になっても残っていた。

昼間の勤めを終り夜学に行くために大急ぎで帰宅すると叔母が優しく出迎え、おにぎりをつくってくれていたので、玄関先で靴を履いたまま食べ、そのまま学校へ出掛ける毎日であった。夜学が終り、夜更けの帰り道で友人と一緒に買って食べた柔かいあんパンの美味しさは忘れられず、晩年まで何よりの好物となっていた。と多くの人々に語っている。

また休日などの暇な時には叔父が四郎を実の子のように可愛がって囲碁の手ほどきをしてくれたので、後年四郎は囲碁を通じて多くの人々と親しい交際ができたのはこの叔父のお陰であると、述懐している。

そして夜間中学の二年の暮れになった頃、叔父が「来春昼間の中学校四年の編入試験を受けてみないか。合格すれば昼間の中学校の学費はみてやる」と言った。四郎にとって昼間の中学校に通って学業に専念できることは願ってもないことで飛び上がるほど嬉しかった。

しかし、昼間の中学校の編入試験は翌年の三月であるから、僅か三か月間で中学校三年の全課程を独学で勉強し、試験に合格しなければならないと考えると余りにも大きな試練であることがわかった。

それから三か月後に迫った編入試験に向って毎日徹夜するくらいの猛勉強を続け勉学に専念した。その努力が実り、三月下旬には編入試験に合格し、正規の中学四年生になることが出来た。

四郎はこの合格の喜びを噛みしめるとともに叔父と叔母の深い恩情と大きな期待に応えることを誓い一心不乱に勉学に励んだのである。

叔父は日夜真剣に学習する四郎の姿勢態度と才能を見込んで「お前をさらに上級の学校に進学させてやろう」と言ってくれたので、四郎は天にも昇る嬉しさであった。

当時の錦城中学校は私立であったが、アルバイトで教師をしていた東京帝国大学・大学院の学生が多く、なかでも後に高名な学者や作家となった野上豊一郎や久米正雄がいた。

この二人は英語を教えていたが、野上豊一郎は夏目漱石の愛弟子で、当時最も簡潔で短い論文といわれた「能楽源流考」という優れた研究で文学博士の学位を取得し、後に法政大学の学長になった美学と芸能史の大家である。四郎は野上豊一郎先生の英語の授業でボーイを「子供」と訳したところ、先生から「男の子」と訂正されたと懐しく回想している。

また野上豊一郎の夫人は女流作家として高名な野上弥生子で若い時の名作「真知子」や「秀吉と利休」などの大作を書き続けた文学者であった。そして久米正雄も小説家であり劇作家としても活躍した文士で、東京帝国大学を卒業し、菊池寛や芥川龍之介などと大正時代の新思潮文学運動の先駆者であった。

そしてまた、化学の先生は後に四郎が化学者として大成する基盤を育ててくれた四人の恩人の一人である高山義太郎がいた。

当時はまだ東京帝国大学理学部化学科の大学院生で後に味の素株式会社の研究課長となり、アミノ酸研究の大家となった人である。

もう一人の化学の先生は、後に東北帝国大学教授となり、四郎の結婚の時には媒酌人となった富永斉という先生であった。

このように当時の錦城中学には後世に名を成すような大学者や作家をはじめ若い大学院生の気鋭の研究者が苦学生を指導していた稀にみる豪華な教師陣の学校であった。

この頃四郎が寄寓していた神田美土代町の叔父の家の近くの猿楽町には隣の土方村出身の松本亀次郎が東亜高等予備学校を開校し、中学入留学生の教育に全身全霊を打ち込んでいた。また同じ神田の飯田町には土方村出身の吉岡弥生が医院を開業し、間もなく東京女医学校（現在の東京女子医科大学）を開校していた。当時は亀次郎も弥生もともに四十代の働き盛りで高い理想に燃え苦闘する毎日であった。

四郎はこの二人がともに同郷の大先輩であり、幼い時から折に触れ父秀雄から聞いていた亀次郎と弥生であり、奇しくも同じ東京の神田で活躍しており、また自分の住んでいる所も神田であることなど、不思議な縁に驚くとともに同郷の大先輩の頼母しい活躍を見て力強く思い、向学心はますます高まるばかりであった。

二、千葉医学専門学校薬学科へ

錦城中学校で夜間と昼間の苦学を続けてきた四郎は、卒業する日を間近に控え、将来の進路について真剣に考えていた。

当時次兄が京都の市立医学専門学校（現在の京都府立医科大学）に在学中であったので医学に興味をもつようになり、兄と同じように医学専門学校に進学したいと叔父に相談した。叔父は「医者になるには修学年限が長くしかも学費が多額になるので負担が大変であるから医学と関係の深い薬学を学び、薬剤師になったらどうか」と言った。

当時の千濱村では小学校を卒業して中学校に進学する者はほとんどいなかったので中学校より更に上の専門学校に進学できることは素晴しいことであった。

そして大蔵省専売局の化学分析室に勤めていた時化学者の方々から親切に教えていただいた化学は大変興味深く、実験室で煙草や樟脳などの化学分析に取り組む真剣な態度に魅力を感じ、薬学の分野にも興味や関心をもつようになっていたので、叔父が勧めるように年限も短く学費も安い薬学の専門学校に進み、薬剤師になることが最善の道であると考えるようになった。

錦城中学を卒業した大正七年（一九一八年）の春、千葉医学専門学校薬学科（現在の千葉大学薬学部）を受験し、見事に合格し、以後三年間薬学について勉強した。

この学校で学んだ三年間は第一次世界大戦が終った時で戦後の恐慌が始まり物価は高くなり、米騒動が起り、その鎮圧のために軍隊が出動するという激動の時代であったが、千葉は静かであったので、平穏で充実した学生生活を送ることができた。

四郎は叔父と叔母の温かい援助と配慮により静岡県人会が経営していた静修寮に入寮することが出来、その後育英会から資金の給付を受けて平穏な学生生活を送り学業に専念した。

当時の千葉は現在とは違い豊かな自然に囲まれていて新鮮な空気と澄んだ水と青い海があり、休日には海に出てボートを漕いだり、暑い日には海水浴を楽しんだりし、幼少年時代に故郷の遠州灘で遊んだことを想い出し、恵まれた自然環境の中で充実した学生生活を送ることができた。

このような学生生活の中で忘れることの出来ない思い出のひとつに、同級生であった中国人の張徳周という親しい友人がいた。

卒業する時、彼は別れを惜しんで「雪埋梅花　不能埋香」（雪梅花を埋むるも、香を埋むる能わず）という句を色紙に書いて贈ってくれた。

この言葉は張さんの誠意を込めた言葉であり、四郎は長い人生のなかで自分では一所懸命つとめた積りでも相手はその努力を認めてくれないような時に、この張さんの言葉を思い出すと自分の不満がたちまち解消してしまうので、常に座右の銘として肝に銘じていた。と言っている。

この学生生活では、そのほか多くの盟友と親しく交際し、充実したしかも意義深い毎日を送り、大正十年（一九二一年）の春、千葉医学専門学校薬学科を卒業した。

三、化学探究への道

千葉医学専門学校薬学科を卒業した四郎は大阪に本社のある製薬会社「桃谷順天館」に就職し

た。

会社での仕事は大阪ではなく東京で、当時東京帝国大学理学部化学科の講師で桃谷順天館の嘱託（のちの東大・工学部の助教授）をしていた西沢勇志智先生の研究助手をつとめることであり、四郎の仕事は東大理学部化学科の地下室で西沢先生のトリモチの研究の手助けをすることであった。

トリモチはモチノキの樹皮を水に漬けて腐らせてから臼に入れ搗いた後水でよく洗ってから何回かよく練るとできる粘着力の強い物質で当時の子供たちは竹の枝先につけて目白などの小鳥を捕ったものである。

四郎は西沢先生の研究の手助けをしている研究室が東京帝国大学というわが国最高の学問の場であるから何か将来有益な講義を聞きたいと思い、西沢先生にお願いしたところ、先生は快く承諾して、池田菊苗博士の「化学通論」を聴講できるようにして下さった。

池田菊苗博士は一九〇八年に昆布のうま味がグルタミン酸ナトリウムであることを発見し、その後鈴木三郎助という実業家と協力し大量生産に成功し、「味の素」という商品名で売り出したのである。この味の素は次第に普及し、大きな食品産業となり、海外にも輸出されるようになった。

このように池田菊苗先生の「化学通論」の講義は狭い意味の化学ではなく広く実業的な感覚をもつような講義であり、学問の深さをしみじみ感じ、化学について更に深く探究したい意欲と憧れを持つようになった。

また、この「化学通論」は千葉医学専門学校の薬学科では聞くことが出来なかった本格的な内

容で、物質の神秘を探る化学の本質を追求し、自然科学と哲学との関係について学ぶことができる魅力的な講義であった。

後に四郎が知ったことは、池田菊苗先生はヨーロッパに留学中ロンドンで夏目漱石と交流があり、漱石のほうが池田先生の人間性の豊かさや見識の深さを知り、その影響を受けたと言われている。

四郎はこのようなエピソードを聞き、池田先生の深い洞察力と人間味豊かな名講義に耳を傾けるチャンスに恵まれたことを終生忘れることが出来ず、池田先生の名講義とともに西沢先生の心づかいに感謝したのである。

またこの時代には日本の化学界では三つの大発見があった。一つは高峰譲吉博士のタカジアスターゼという消化酵素、もう一つは鈴木梅太郎博士のビタミンB_1を含む脚気の特効薬といわれたオリザニンである。他の一つは池田菊苗博士のグルタミン酸ナトリウムの発見である。これら三つの発見はその後大量生産に成功し、三人の発見者はともに象牙の塔にこもることなく発見したものを更に企業化し、広く社会に送り出し、産業経済の発展や国民生活の向上に貢献したのである。

当時東京帝国大学の理学部化学科は伝統的に物理化学が中核となっていたが、有機化学の分野では東北帝国大学の理学部化学科の真島利行教授の研究室がわが国の有機化学の原点といわれていた。

四郎が東京帝国大学の理学部化学科の地下室で西沢勇志智先生の研究を手伝っていた頃、トリモチの研究は真島利行教授の指導によるものであったから、その年の夏二か月西沢先生とともに

有機化学の研究方法について東北帝大理学部の真島研究室に内地留学することになり、これが真島利行先生との最初の出会いであった。

この時の真島研究室の雰囲気は化学を本格的に学びたいと思うような大変魅力的なところであった。

その後、真島利行先生を生涯の師として化学を学び、知遇を戴くようになったので、誰かが〝トリモチがトリモツ縁である〟とからかわれたことがあった。

大正十年（一九二一年）の夏東北帝国大学理学部の真島研究室での内地留学が終り、東京へ帰ってきたが、真島研究室の雰囲気の素晴らしさに大きな衝撃を受け、まるで恋のとりこになったようであった。

かねてから日本の有機化学のメッカと呼ばれていた東北帝大の真島研究室は真島利行教授が心血を注いで築いた城であったので、僅か二か月の内地留学にもかかわらず四郎の真島研究室に対するあこがれは日増しに強くなるばかりであった。

このような四郎の心情を察知した西沢勇志智先生は、「君、ここで今の仕事を続けても仕方がないだろう。東北帝大は専門学校の卒業生でも正規の入学ができるから、この大学に入学して化学を勉強したらどうか」と言った。

当時わが国の帝国大学は五校あったが、その中で理学部があるのは東京・京都・東北の三つの大学だけで、東京帝大と京都帝大は旧制高校の卒業生で定員が満員になるので、傍系の専門学校の出身者が入学できるのは東北帝大だけであった。

四、東北帝国大学理学部化学科へ

日頃から親切で義侠心のある西沢勇志智先生は機会あるごとに四郎に東北帝大の理学部化学科を受験することを勧めていたが、四郎が決断しかねていたのは大学三年間の学資のめどがつかなかったことである。

しかし憧れの東北帝大で化学を学びたい熱い思いはますます燃え上がるばかりで、多くの悩みを抱きながらも初一念を貫き通すことが自分を生かす道であると考え、奮起して受験勉強に専念することにした。

そこで四郎は、これまで千葉医専の薬学科では学ぶことができなかった物理学と物理を理解するために必要な微分学や積分学は牛込にある物理学校（現在の東京理科大学）の夜間部に通って勉強した。この学校は理数系ではわが国唯一の夜間部の専門学校で苦学生が多く、誰でも入学することができるが、授業は厳しく試験に合格しなければ進級することも卒業することも出来ない厳格な教育で有名であった。そして他の学校より学費が安いので、貧しいが真面目で優秀な学生が多かった。卒業生は旧制の中等学校の数学や物理の教師になる人が多かった。

四郎は大正十年の秋から翌年の始めまで、毎日、この学校の夜学に通い、すし詰めの狭い教室の堅い木の椅子に座り、薄暗い電灯の下で、眠気と闘いながら学んだのであるが、向学心に燃える四郎には苦にはならなかった。

この奮闘努力のかいがあって翌年の春東北帝国大学理学部化学科に入学許可の通知を受け取る

ことができた。

後に四郎は「わが青春（静岡新聞・一九九〇年一月六日～三月二〇日）」のなかで「入学許可の通知を受け取った時には、込み上げてくるうれしさで大声で叫びたいのを抑えるのがやっとだった。」と述べている。

さて、いよいよ憧れの大学へ入学となったが、会社は退職しなければならず、学費のめどを立てなければならなかった。

学費については都合がつかなければ大学には入学せず、独学で化学を勉強しようと考えたが、自然科学である化学は正規の学校で理論と実験技術などの正規の学習と訓練が必要であり、独学で学習しようと考えたのは余りにも浅はかであった。

また、理科系で特に化学を学ぶ者にとっては、徹夜で実験することは当然のことで、アルバイトなどをしている暇はなく、不況の時代であったから働くこともできなかった。

当初から学費の援助については父親を頼ることは考えていなかった。それは、父秀雄が小学校の校長を退職しており、定期の収入はなく、僅かな田畑の収穫では日常生活を維持する程度で、学費を親に負担させることは出来なかったからである。

その後しばらくの間、このことについて悩んだが、学費のめどは立たないので進学を断念し、西沢先生に事情を話し、再び助手として勤めさせていただきたいと懇願した。

そして郷里の父には「東北帝大の入学試験には合格したが、学費の算段がつかないので入学は断念する」と報告したところ、直ちに返事があって、「大学の入学試験に合格しながら入学をあきらめるなど、そんな意気地のないことでどうするか、学費は借金してでも工面してやるから、

取りあえず入学の手続きをしなさい」と、入学金と最初の授業料を送ってくれた。「赤堀四郎「わが青春」」

しかし、四郎にとって、父の温かい親心は涙が出るほどありがたかったが、母や四人の弟や妹の将来を考えると一家を犠牲にすることは出来ないので、進学をあきらめると再び父に断わりの手紙を書いた。

その後、学費について目当てのないまま困惑していたが、思わぬところから援助の手が差し伸べられた。それはかつて四郎が大蔵省で給仕をしながら錦城中学で学んでいた時、化学を教えてもらった高山義太郎という先生であった。この人は東京帝国大学理学部化学科の大学院生で池田菊苗博士の研究室でアミノ酸の研究をしていて、時々西沢先生の研究室にも顔を出し、四郎にも声をかけてくれた方であった。

高山義太郎先生は株式会社味の素本舗を創立した鈴木三郎助の親戚で、後に味の素会社の研究課長になった人であった。

西沢先生は四郎が東北帝大に入学する学費に困っていることを心配して、高山義太郎先生に事情を話し、味の素会社に四郎の学費を援助してほしいと懇願した。

当時味の素会社の専務であった鈴木忠治氏は平素から優秀な化学者の養成を心掛けていたので、四郎の大学在学中の学費を援助することを承諾して下さったのである。

当時は第一次大戦後の不況の中であったが、四郎の大学在学中の学費を承知して、学問の世界に送り出したのである。

そして大正十一年（一九二二年）四郎は、東北帝国大学理学部化学科に入学した。この時代の

東北帝国大学理学部は創立後十年で若い優秀な人材が集っていた。
特に教授陣には後に文化勲章を受章されたKS磁石鋼の本多光太郎博士やアインシュタインの相対性理論の紹介者である石原純博士という高名な物理学者もいた。
また学生には女性としてわが国で最初に帝国大学に入学した大正初年の化学科には、東京女子高等師範学校（現在の御茶の水女子大学）から黒田チカと丹下ムメの才媛が入学し、黒田博士は天然色素の研究、丹下博士は日本の古代染料のムラサキグサの成分であるシニコンの研究で有名である。
傍系の薬学科出身である四郎は、学閥臭の薄い森の都仙台にある東北帝大の自由な雰囲気と優れた教授陣の下で勉学に専念することができた。
東北帝大理学部化学科では、一年と二年では主として理論化学・無機化学・有機化学・分析化学等の基礎を学び、三年では真島利行教授の指導で有機化学の研究実験を行い、生物化学を学んだ。
卒業年度には憧れの真島研究室で生物化学を勉強したが、真島教授は実験を重視し、理論には慎重で冷淡に思えるほどで容易に結論的なことを言わない先生であった。
そして難しいことや創造的なことでなければ関心を示さないし、また人の真似（まね）であれば成功しても関心がなかった。
このような学風が四郎には染み込んでいて、後年の弟子たちにも伝わっていった。
四郎は余暇をみては仙台市の郊外にある高山樗牛の瞑想の松を友人とともに訪れ、樗牛が旧制第二高等学校の教師であった頃思索に耽（ふけ）った松の名所に出掛けて、小学校時代に清水の竜華寺に参詣した遠足を思い出し、感慨にふけっていた。

五、化学研究者としての初陣

いつもひたむきな向学心に燃えていた四郎は東北帝国大学理学部化学科の学生生活が夢のように過ぎ、大正十四年（一九二五年）の三月卒業した。
大学三年間の学費を援助してきた味の素本舗は四郎の能力と努力を高く評価し、さらに大学院五年間の学費を援助すると快諾したので、引き続き真島研究室で有機化学の研究をすることになった。
大学院では研究するテーマを自ら選ぶことになったが、研究生活を支援して下さっている味の素の会社のために少しでも役立つような研究をしたいと考え、アミノ酸に関する文献をいろいろ調べたが、すでに多くの学者が研究しており適当な研究テーマを見つけることができなかった。
その後いろいろと思索しているうちに二つばかりテーマを選んで真島先生の意見を伺った。
先生は渋い顔をして「こんな問題はわざわざ研究しなくても、大体の見当ついている。やってみなければわからない問題を解くのが本当の研究だ。」といわれた。その後あれこれと考えてみたが、駆け出しの研究者であるから思索にくれていると、先生に呼ばれ、「醤油の香気成分を研究しなさい。」といわれ、テーマは決まったのでほっとした。しかし、このテーマの内容をどのように分析し、どのような方法で研究していくべきかを考えると気が重くなるばかりであった。
その頃、日本の有機化学の研究は花の色素や生薬（漢方薬など）の有効成分の研究が中心で植物や動物から特殊な成分を純粋に取り出して、その化学構造を推定することと更にそれを化学的に合成して確かめるという研究が多かった。

草花や生薬の成分は分離することは比較的やさしいが、大変根気が必要であった。ところが醤油は発酵という複雑な作用で長い時間をかけて微生物がつくるので、発酵作用によって非常に多くの成分ができる。したがってできた微量の成分を一つ一つ調べて、香気のある物質を見分けるのは大変困難な仕事であった。「大変難しそうでありますから……」と尻込みしていると、真島先生は「難しいからこそ研究する価値があるのだ」と叱られた。

真島先生は明治四十二年（一九〇九年）から約八年間、難物といわれた東洋特産の〝うるし〟の研究をし、その構造式を確かめた国際的に有名な研究者であるから、その大先生に叱られては一言も返す言葉はなかった。

しかし四郎は少年時代大蔵省の専売局で給仕をしながら夜学に通い、化学分析室で実験をし、その後千葉医専の薬学科に学び、さらに西沢勇志智先生の指導によりトリモチの研究に明け暮れた経験があるので、旧制高校出身の大学院生の誰にも負けない自信があった。だから真島先生から叱られても先生の激励の言葉であると受け止め、直ちに実験に取りかかった。

醤油は原料である大豆と麦または米を蒸して麹（こうじ）を混ぜ、発酵させると、でんぷんがアミラーゼという酵素の働きでブドウ糖に変わり、大豆のタンパク質はプロテアーゼという酵素の働きでアミノ酸になる。そしてこのブドウ糖とアミノ酸がさらに反応して味とにおいが出てくる。これが醤油の色となり香りとなるのである。

このような色がついて香りができる反応を発見したフランスの女性化学者の名をつけて〝マイラルド反応〟といっている。

これはカステラなどの焼菓子の表面の焦げた茶色の色とにおいもこの反応で、卵や小麦粉のタ

ンパク質と砂糖を混ぜて高温で焼いた時に起こるのもマイラルド反応である。

カステラは高い温度でマイラルド反応を速く進めるが、醤油は低い温度で何か月もかけてゆっくり熟成することによってあのような褐色と香りとうま味が出るのである。

このような低い温度で長い時間をかけて醤油を熟成する醸造は日本の伝統的な産業である。

四郎は醸造についての知識や技術はもっていなかったが、醤油がマイラルド反応によって出来ることを見つけ、その正体を確かめてから、これを合成してみようと考え、研究をはじめた。

そこでまず、上等の醤油を二百リットル買ってきて、この醤油に水蒸気を通して蒸留し、留出した液をエーテルに混ぜて抽出し、抽出したものから有機酸を除き、さらに蒸留すると、残ったものは香気の強い油のようなものとなり、約十グラムとれた。

早速この十グラムの油を分析してみると、いくつかの有機化合物を見つけることが出来た。その中にはすでに先輩の研究者が発見して報告されているものが多かった。

その後これらの物質をいろいろ調合してみたが、醤油の香ばしい香りは出てこなかった。しかし、きっと残ったもののなかに未知の成分があるのではないかと考えて、いろいろな実験を繰り返してみたが見当がつかなかった。

ところが、ある時今までとは全く別の実験をしているとき、イオウと水素が化合して卵が腐ったようなにおいがする硫化水素を使ってみると、偶然にも残った溶液が醤油に似たようなにおいがした。

この時四郎は、もしかすると醤油の香気成分にイオウが含まれているのではないか。イオウであれば昇汞（しょうこう）（塩化第二水銀）という薬品を使えば捕えることが出来るのではないかというアイ

ディアがひらめいた。

昇汞は猛毒の水銀と塩素の化合物で、昔は消毒薬として使っていた。薬学出身の四郎は昇汞は水に溶けにくいがエーテルには溶けることを知っていた。

たまたま過日、亡くなった次兄の養子先である京都の薬局に遊びに行っていた時退屈しのぎに見た「日本薬局方」という書物の中に「昇汞は水に難溶性であるが、エーテルにはよく溶ける」と書いてあったことを思い出した。

そこで早速冷蔵庫にしまっておいた醤油から抽出したエーテル溶液を少し取り出して、昇汞のエーテル溶液を混ぜてみた。すると、たちまち白く濁って、よく見ると水滴のようなものがいくつかついている。これを冷やしたら結晶になるかもしれない。と考え、一晩冷蔵庫に入れておいたところ、水玉みたいだったものが綺麗な結晶になっていた。

結晶というものは、有機化学を研究する者にとって、ものが綺麗になった証拠であり、この結晶をさらに分析すれば何か手がかりが得られることになる成功への登竜門である。

四郎は、この研究によって誰も思いつかなかった昇汞という水銀化合物を使って醤油から抽出した物質の結晶化に成功したのである。

この研究成果は化学実験をする者にとって並並でない才能と独特のひらめきをもっていることがよくわかるのである。

この結晶は量は僅かであったが、水銀を含んでいるから目方は非常に重かった。構成している元素を分析するのは十分な量であったので、いろいろな分析操作を慎重に行い、これがイオウを含んでいるアルコールの一種であるメチオノールという物質であることがわかった。

このメチオノールが発酵の途中でメチオナールというアルデヒド[註1]に変わるのである。

このメチオナールが醤油の本当の香気成分であるとほぼ見当をつけて、醤油とは関係のない化合物から合成してみたところ、非常に強い醤油の香りがした。

この合成したメチオナールと醸造した醤油との比較によって確かめられた醤油の香気成分の発見は、今まで誰も研究していなかった分野であったが、四郎自らの発想と努力によって見つけたもので、今までの学説を改めるとか、将来企業として発展するようなものではないが、化学を研究する者としての自信をもつことができた初陣の大きな成果であった。

四郎は後に「この研究を非常に思い出深い研究であり、昨日のようにはっきりと記憶に残っている」と語っている。[註2]（〝わが青春〟による）

この研究が注目されるのは、第一に、誰も思いつかなかった水銀化合物を用いて結晶化に成功したこと。第二に、別の実験で硫化水素を用いた溶液のにおいをかいだところ、醤油のにおいに似ていた。これはひょっとすると醤油の香気成分の中にイオウが含まれているのではないか。それならば昇汞によって捕えることができるのではないか。という一種の〝ひらめき〟が働いて昇汞のエーテル溶液を醤油のエーテル抽出物に混ぜてみよう。と考えた四郎の頭の回転の素晴らしさである。

この直感の鋭さは凡庸な化学者ではないことを立証しているのである。

どのような学問でも理論だけでは進まない段階があり、一種のひらめきのような直感が必要になる。この研究は四郎の頭の回転と直感の鋭さとたゆまぬ努力によるものである。

特にこのような直感は湯川秀樹博士がベッドの中で中間子理論を考え出したことやペニシリン

の発見者のフレミングがバクテリアを培養したペトリ皿[註3]に不注意で落した鼻水のまわりのバクテリアが消えていたことからリゾチーム[註4]というバクテリア溶解酵素を発見した逸話は、優れた発明や発見には予想もしないひらめきや直感がきっかけとなっていることを物語っている。

四郎は後に〝わが青春〟のなかで、

「本物のしょうゆのにおいというのは非常に複雑で、合成したものはしょうゆに近い香りは得られても発酵という自然のプロセスが作り出す、あの芳醇な香気には今一歩不足していた。現在では百種類以上の香気成分がわかっているが、これらを合成して調合してもしょうゆの香りそのものにはならない。自然の働きは複雑微妙で今の化学ではこれを超えられない。」と述べているように、現象を常に冷静に見つめて、慎重にしかも謙虚に研究に取り組んでいく優れた化学者らしい姿勢がうかがわれる。

註1　アルデヒド
脱水素されたアルコール（広辞苑）アルコールと酸の中間のもの

註2　わが青春（赤堀四郎）
「静岡新聞・一九九〇年一月六日～三月一〇日」

註3　ペトリ皿
細菌や動植物の組織の培養などに用いる底の浅い蓋付きのガラス容器（広辞苑）

註4　リゾチーム
酵素の一つ。鼻汁。唾液・涙液・卵白や植物の一部に含まれ、細菌細胞を溶解する作用を持つ。（広辞苑）

源平交代思想

第一章

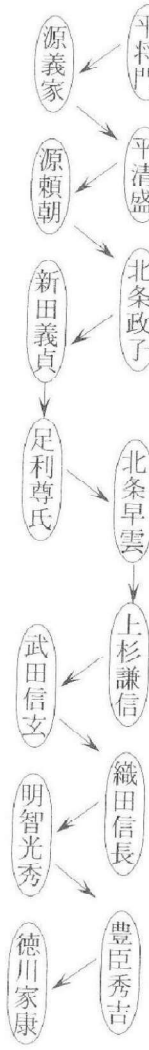
宅見　勝弘

源平交代思想とは、日本の武家政権において源氏と平氏の子孫が交互に権力を手にするという思想である。

源平合戦は壇ノ浦の戦いでは終わらない。源平を名乗ってから一千年間、明治維新まで源平の抗争は続くのである。

元々、源平交代思想は鎌倉時代の北条氏打倒の大義名分であった。また、戦国時代には武将達の間で源平交代思想が信じられていた。

代表人物で源平の覇権争いの流れを示すと、次の通りである。



第二章

① 平将門（九〇三―九四〇）

源平の誕生から約一世紀を経て初めて、源平の中で権力を握ろうとした人物が、平将門である。将門は武士団の反乱を起し、新しい天皇として『新皇』（平新皇）と称し、一時的とはいえ関東に独立国家を築いた。

平将門の祖父が高望王（平高望）である。高望王は平氏の祖の一人であり、高望王の祖父（曽祖父とも）が桓武天皇である。

② 源義家（一〇三九―一一〇六）

平将門の乱から約一世紀を経て初めて、武士の権力を貴族社会に築いた人物が、源義家である。源義家は前九年・後三年の役で東北地方を治めたが、この時期が貴族社会から武士社会への転換点になると思う。

源義家の祖父が源頼信であり、河内源氏の祖である。（頼信の長兄の頼光が摂津源氏、次兄の頼親が大和源氏の祖である）頼信の祖父が源経基であり、清和源氏の祖である。源経基の祖父が清和天皇である。

源義家は八幡太郎義家とも呼ばれ、源頼朝・新田義貞・足利尊氏の祖先に当たる。

③ 平清盛（一一一八―一一八一）

源義家の活躍から約一世紀を経て初めて、武士として権力を握った人物が、平清盛である。源平直接対決である平治の乱は、その名の通り平氏が治める乱となった。「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる平氏全盛の時代を築いた。

平清盛から五代遡ると、平維衡であり、伊勢平氏の祖である。平維衡から三代遡ると、高望王になる。

源氏による平氏打倒の兵が挙がる中で、清盛は病死した。『平家物語』の盛者必衰の理は、正に源平交代思想の表現である。

④ 源頼朝（一一四七―一一九九）

清盛の病死後、初めて武家政権を築いた人物が、源頼朝である。壇ノ浦の戦いで源義経ら源氏が平氏を滅ぼし、源頼朝は征夷大将軍として鎌倉幕府を開いた。

なお、武家政権は、建武の新政を除くと、大政奉還まで約六八〇年続くことになる。

源頼朝は源氏の嫡流であり、四代遡ると八幡太郎義家に繋がる。

頼朝は橋供養（政子の妹を供養する為に行った橋の開通式）の帰りに落馬したことが原因で死亡とされているが、初代将軍の死として不自然さを感じる。頼家・実朝と同様に、殺害されたのではないか、と個人的に疑いを持っている。

⑤ 北条政子（一一五七―一二二五）〈平氏〉

源氏将軍が滅びた後に鎌倉幕府を支配したのは、平氏の北条氏である。鎌倉時代に源氏が支配していたのは、頼朝が存命した十年にも満たないもので、百四十年間のほとんどは平氏の北条氏が支配していたのである。

北条は地名に由来する名字（苗字）であり、血縁に由来する姓は平である。鎌倉時代は夫婦別姓だったので、北条政子が源政子と呼ばれた事は無く、死ぬまで平政子であった。

北条氏の祖は平直方とも、その三代前の平貞盛とも言われる。伊豆国田方郡北条郷（静岡県伊豆の国市）の地名を名字とした。平貞盛の祖父は高望王である。

『吾妻鑑』の写本に『関東将軍次第』として歴代の将軍が記されているが、四代目将軍は平政子となっている。尼将軍というのは喩えでなく、正史に記された事実である。

長男の源頼家が政子の父・北条時政により暗殺されたことは史実として残っている。また、次男の源実朝が頼家の子・公暁に親の仇として暗殺されている。

政子個人が夫と二人の息子の殺害に直接に関与していなくても、鎌倉幕府の政権を源氏から平氏に奪い取るために、平氏である北条氏一族の大いなる陰謀があったのではないか、と思う。

余談① 権力の五重構造

鎌倉時代末期は権力が五重構造になっており、しかも実質的な権力関係が逆転している。

権力には本来は正統性（レジティマシー）が必要であり、上位権力者から権限を委譲されて正統性があるといえる。

ヨーロッパにおける教皇と皇帝、同様にイスラムにおけるカリフとスルタンの二重構造はあるが、五重構造は世界史的にも類を見ない。

権力の正統性の五重構造とは次の通りである。

①天皇→②将軍→③執権→④得宗→⑤内管領

鎌倉時代末期は、長崎高資ら長崎氏（平氏）が北条高時よりも幕府の権限を握っていた。長崎氏が権力を持つ根拠は、内管領という地位であるが、内管領とは得宗家の身内人首座つまり家臣の長である。

得宗は北条家当主（義時の法名に由来）を指し、公的な執権を多く輩出するから、家という私的な存在が権力を持つことになった。五代執権時頼が長時に譲ってから、執権を傀儡化して得宗専制を行った。

執権は将軍を補佐する役職として権力を握った。将軍は天皇から征夷という委任により権力を譲り受けたものである。

つまり、権力は、①内管領→②得宗→③執権→④将軍→⑤天皇まで遡って正統性を持ち、実際の権力関係は完全に逆転していたのである。

⑥ 新田義貞（一三〇一―一三三八）〈源氏〉

北条高時や長崎氏たち平氏一族を元弘の乱で滅ぼしたのが、新田義貞である。新田氏の祖は新田義重であり、上野国新田郡（群馬県太田市・旧新田町）の名前を名字とした。新田義重の祖父が八幡太郎義家である。（なお義重の弟の義康が足利氏の祖である。）

『太平記』には新田義貞の鎌倉攻めを『源平威を振い、互いに天下を争』う戦いと記述されており、鎌倉幕府を滅ぼす大義名分は、源平交代思想があったことが伺える。

太平記の義貞は『いにしえより源平両家朝家に仕えて、平氏世を乱る時は源家これを鎮め、源氏上を侵す日は平家これを治む。』と、自ら源氏の棟梁として平氏を滅ぼすと言っている。

⑦ 足利尊氏（一三〇五―一三五八）〈源氏〉

鎌倉幕府滅亡後、建武の新政を経て、足利尊氏が新田義貞も倒し、征夷大将軍として室町幕府を開いた。

前記の通り、足利氏の祖は足利義康（新田義重の弟）で、下野国足利郡（栃木県足利市）の名前を名字とした。

なお、尊氏に変名前の高氏は北条高時から名付けたもので、尊の字は、反逆した相手の後醍醐天皇の本名（諱）の尊治を採ったものである。

日明貿易（勘合貿易）においては、三代義満が明帝の国書で『日本国王源道義』となっており、足利将軍は外交上で源を使っている。

⑧ 北条早雲（一四三二（一四五六）―一五一九）〈平氏〉

足利将軍家の堀越公方を滅ぼしたのが、北条早雲である。早雲は後北条氏の祖であり、最初の戦国大名といえる。

伊勢宗瑞とも言われるように伊勢平氏である。早雲は身分の卑しい素浪人とされていたが、妹が駿河今川家当主の今川義忠の正室であるというので、平氏の血を継ぐ人物でも不思議は無い。

伊勢平氏の祖は平維衡であり、平清盛の祖先に合流する。

早雲が生まれたという備中国後月郡荏原郷（岡山県井原市）には、早雲が平盛時の署名を残したと言われている。

⑨ 上杉謙信（一五三〇―一五七八）〈平氏〉

上杉謙信は、北条早雲の孫・三代目氏康と同盟する（越相同盟）。

謙信が自らの名を与えた養子の上杉景虎は、北条氏康の実子・氏秀であるとも言われている。

謙信は上杉氏に養子となる前、長尾景虎を名乗っていた。長尾氏の祖は長尾景広で、相模国鎌倉郡長尾郷（横浜市栄区長尾台町）に住み、名字を名乗った。

長尾景弘の父親は鎌倉景明であり、鎌倉氏は相模国鎌倉郡を中心に勢力を伸ばした武士団である。

鎌倉景明の父親は村岡忠通で、村岡氏は平良文が相模国高座郡村岡郷（神奈川県藤沢市）を根拠とし、晩年に名乗ったものである（武蔵国大里郡村岡郷〔埼玉県熊谷市村岡〕とも伝えられる）。

平良文の父は、高望王つまり桓武平氏の祖である。

⑩ 武田信玄（一五二一―一五七三）〈源氏〉

上杉・北条の平氏連合軍と武田の源氏軍とが戦国時代に対峙していた。川中島の戦いは源平合戦である。

武田氏の祖は源義光（新羅三郎義光）で、八幡太郎義家の弟である。

武田氏は甲斐源氏であるが、甲斐源氏は河内源氏の支流であり、河内源氏は清和源氏の支流である。

川中島の戦いで信玄が勝ち天下統一していたら、（源氏は幕府を開くので）征夷大将軍として甲斐幕府を開いたかもしれない。

⑪ 織田信長（一五三四―一五八二）〈平氏〉

信玄亡き後の息子の勝頼が率いる武田軍を長篠の戦いで破ったのが、織田信長である。

織田氏の祖は織田（平）親真で、越前国丹生郡織田郷（福井県織田町）の地を名字とした。

織田親真をさらに三代遡ると、平清盛になる。

『公卿補任』という朝廷の歴代の人事録には、従三位権大納言兼近衛大将に任命されたときに、平信長と記されている。

越前白山別山権現に寄進した鰐口（神社・寺院の軒下に架ける鐘の様な物）の銘文に『信心大施主平信長』と刻まれている。

⑫ 明智光秀（一五二八―一五八二）〈源氏〉

織田信長を本能寺の変で殺したのが、明智光秀である。光秀は三日天下（実際は十一日）と言うが、日本史上四人しか存在しない天下人の一人である。

明智氏の祖は明智頼重であり、美濃国可児郡明智郷（岐阜県可児市）より発祥した。明智頼重の祖父が土岐頼貞である。土岐氏の祖は土岐光衡であり、美濃国土岐郡土岐郷（土岐市）に土着した。

土岐光衡を六代ほど遡ると、源頼光になる。源頼光は源満仲の長男で、摂津源氏の祖である。（次男の源頼親は大和源氏、三男の源頼信は河内源氏のそれぞれの祖となっている。）

本能寺の変の動機には多くの説が有るが、小和田哲男教授の源平交代思想説では、平氏の天下統一に反対する源氏によるクーデターであると考える。

⑬ 豊臣秀吉（一五三七―一五九八）〈平氏〉

明智光秀を山崎の戦いで破ったのが、豊臣秀吉である。

『公卿補任』では平信長と同じく平秀吉と記されている。『関白任官記』でも平秀吉となっている。

文禄・慶長の役（朝鮮出兵）で、明の皇帝が日本国王の任免状の名宛は、平秀吉となっている。文禄・慶長の役で朝鮮半島の記録では平秀吉（ピョンスギル）となっているようである。以前に平秀吉でインターネット検索したとき、一面全てがハングルと中国語であったことがある。

なお、秀吉は将軍・足利義昭と養子縁組し源氏を名乗ろうとしたが、叶わなかった。

⑭ 徳川家康（一五四三―一六一六）〈源氏〉

秀吉亡き後に豊臣家を大坂冬の陣・夏の陣で滅ぼしたのが、徳川家康である。家康は征夷大将軍として江戸幕府を開いた。

家康の旧姓は松平であるが、平の字が有っても平氏ではない。松平氏は三河国加茂郡松平郷（愛知県豊田市松平町）の豪族である。

家康から八代遡ると、松平親氏（ちかうじ）になる。親氏は松平家に婿養子に入ったもので、世良田有親（せらたありちか）の子である。

世良田氏の祖は世良田頼氏であり、上野国新田郡世良田郷（群馬県太田市世良田町）の豪族である。

世良田頼氏の父親は得川義季（よしすえ）であり、上野国新田郡得川郷（太田市徳川町）を統治し、得川を名乗った。得川は本来『とくがわ』でなく『えがわ』である。

得川義季の父が新田義重であり、新田義貞の項で述べたように、新田氏の祖である。

つまり、家康にとっては、松平→世良田→得川→新田→源と源氏に繋がるのである。得川の『え』を『とく』と読み替え、『とく』に『徳』の字に書き換え、復姓したことになる。

家康個人が松平から徳川に復姓したもので、松平一族が徳川に改姓したのではない。

なお、元康から家康に改名したのは、今川義元の元を捨て、八幡太郎義家の家を選んだとも言われる。

家康の外交上の称号は『日本国源家康』であり、歴代の将軍も外交文書では源を名乗っている。

余談② 戊辰戦争は第二次関ヶ原合戦

江戸幕府を倒した戊辰戦争は、江戸幕府成立を決めた関ヶ原合戦から二七〇年を経て再開された第二次関ヶ原合戦であると思う。江戸幕府が滅亡した最大の原因は、幕府の誕生にある。

薩摩藩と並び、長州藩が江戸幕府を倒す中心となる藩となった。長州は、平氏が滅びた壇ノ浦の地であり、源氏打倒の歴史の因縁を感じる。

関ヶ原合戦で、徳川家康の東軍に敗れた西軍の総大将は、石田三成でなく、毛利輝元である。また、西軍の主力は薩摩の島津家である。

毛利家は関ヶ原の戦いで敗れた後、二七〇年間毎年正月に、今年は徳川を討つか、藩主に質問することが新年の挨拶代りであったという。二七〇年間、徳川を討つのを保留し続けた後、今年こそはと決意し倒幕を図ったのであった。同じ西軍であった島津軍と共に戦い、戊辰戦争へと繋がっていったのである。

つまり、戊辰戦争は、毛利家と島津家たち関ヶ原西軍による東軍の徳川家に対する復讐戦争である。

第三章

源平交代思想をもたらす理由を、**A天文学・B生物学・C政治学・D心理学**の四つの観点から考察してみた。

A．天体説

原因を個々の人間に内在するのでなく、人間を超越したものに由来すると考える。天体が人間とその集団に与える影響は、甚大なものである。例えば、江戸時代の三大改革を挙げると、太陽黒点の増減が間接的にも三名の為政者へ影響を与えていると言える。正に天の配剤であるが、宗教的な表現をすれば、神の摂理・神の見えざる手・予定調和説である。人智を超えた至高な存在が関与して、二つの氏族の交代劇を演じたのかもしれない。

余談③　江戸の三大改革と太陽黒点

江戸の三大改革は、景気循環理論であるコンドラチェフの波（五十五年の長期波動）に対応していると思う。

景気循環理論は、太陽黒点の循環理論と周期が一致し、その影響を受けていると思われる。太陽黒点が増加すると、冷害が発生し、大飢饉が起きる。江戸時代には、享保・天明・天保の大飢饉が起こった。享保・寛政・天保の改革は、享保・天明・天保の大飢饉と同時進行あるいはその対策として行われた。（享保の大飢饉は、享保の改革の間に発生した）言い換えれば、太陽黒点の増加が徳川吉宗・松平定信・水野忠邦に改革を促したことになる。

B．遺伝子説

相手に対する好悪の感情も遺伝子レベルで規定されるという。

遺伝子の塩基配列が近いと相手に対する悪感情が発生するという科学的な実験も在るらしい。そうすると近親憎悪ともいうべき源平の戦いは、ＤＮＡの設計図の中にプログラムが埋め込まれている。

ＤＮＡが二重螺旋（らせん）構造で構成されているように、源氏の波と平氏の波との二重螺旋構造で日本史が構成されているのである。

C．政党説

源平の関係は、例えると、アメリカにおける共和党と民主党の関係に類似しているかもしれない。思想的には共和党と民主党とに大きな相違は無いが、アメリカ大統領になるためには、どちらかの政党に即さなければ現実的に不可能である。

政権を執るため、源平の血縁でなくても、源平を名乗る必要があった。現政権の反体制を標榜（ひょうぼう）するために、源平の逆を自称したのである。

D．幻想説

集団的な幻覚にかかったようなもので、共同幻想に過ぎない。後世の人が作り出した幻想である。（筆者個人の幻想かもしれない）

第四章

源氏も平氏も、天皇の子孫が臣下となる時に付ける姓である。天皇家には姓が無いため、皇族から離れるには新しく姓を付ける必要があった。

『源』は、天皇家と源を同じくする、という意味で名付けられた。

『平』は、平城京からではなく、平安京の平に因んでいる。

源氏が先祖とする天皇は二十一名いる。

（嵯峨・仁明・文徳・清和・陽成・光孝・宇多・醍醐・村上・冷泉・花山・三条・後三条・後白河・順徳・後嵯峨・後深草・亀山・後二条・後醍醐・正親町）

それに対して、平氏が先祖とする天皇は四名だけである。

（桓武・仁明・文徳・光孝）

しかも、四名の内の三名は、源氏の先祖でもあり、純粋に平氏だけの祖となる天皇は桓武一人である。

源平の両方の先祖となる天皇は、仁明・文徳・光孝である。なお、仁明（五四代）の二人の息子が文徳（五五代）・光孝（五八代）である。

仁明・文徳・光孝の場合、原則として、子と孫が源氏に、曾孫が平氏になっている。

同じ天皇の子孫で、平氏と源氏のどちらになるか、規則性がある。全ての天皇を考えると、天皇の息子で源氏はいるが、平氏はいない。つまり、天皇からの血縁で近い者は源氏、遠い者は平

氏になる。

最初に源の姓を与えられたのは八一五年で、五二代の嵯峨天皇の子である。

最初に平の姓を与えたのは十年後の八二五年で、五〇代の桓武天皇の孫である。

桓武天皇は嵯峨天皇の父親であるから、最初の源氏の祖父と、最初の平氏の祖父は、同一人物の桓武天皇である。

もともと先祖が源氏か平氏か完全に二分することは不可能なのである。

八幡太郎義家の母親は平直方の女である。平直方の子孫が鎌倉北条氏になる。

源頼家・源実朝は母が北条政子であるから、平氏とのハーフである。

足利二代目将軍・義詮の母親は、最後の執権・北条（赤橋）守時の妹、登子である。

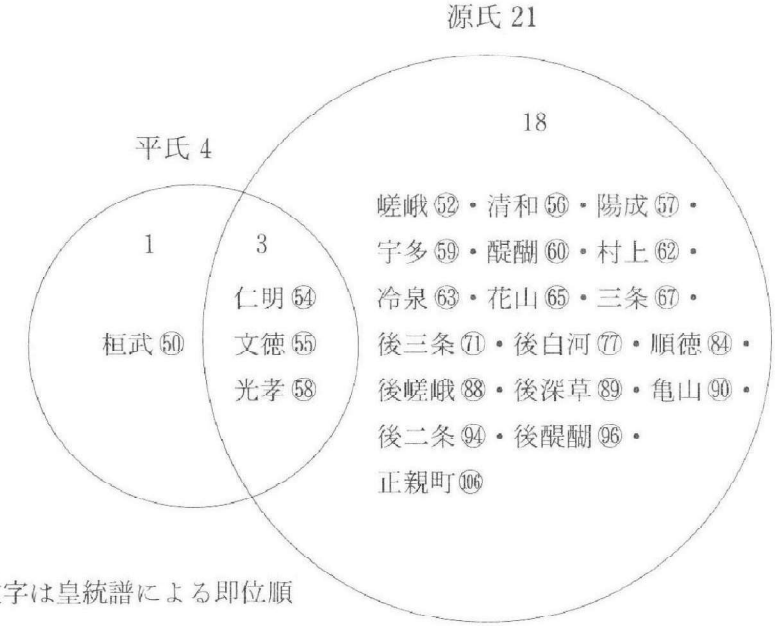
源平合戦において、源頼朝に従った、北条時政・熊谷直実・畠山重忠・梶原景時・三浦義澄・千葉常胤・上総広常は平氏である。

逆に源頼朝と戦った新田義重・志田義広・佐竹秀義・飯富季貞は源氏である。

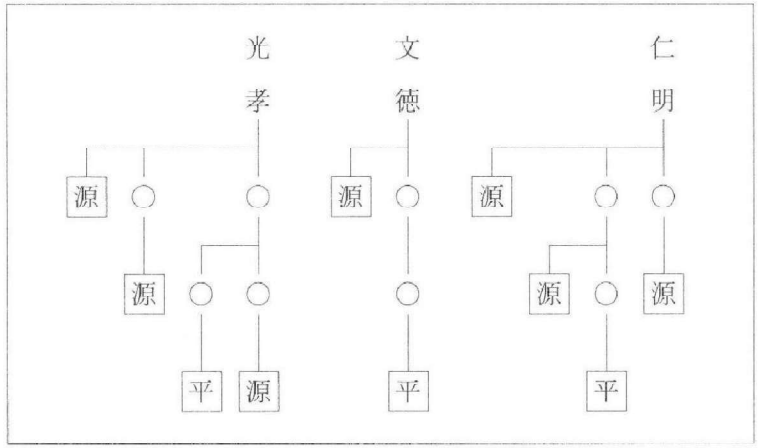
一の谷・屋島・壇ノ浦の戦いも源平合戦というのは正確でないということで、『治承・寿永の乱』と味気ないものに、最近の教科書では書き換えられている。

そもそも源平合戦は『平家物語』『源平盛衰記』による創作（フィクション）と言えるのであれば、幻想に過ぎない。

源平合戦そのものが幻想であれば、必然的に源平交代思想も幻想である。



○数字は皇統譜による即位順



消えた室

三戸岡道夫

(一)

おとぎ話かSF小説の中でもない限り、廊下を歩いている人間が突然消えてしまうというようなことは、まずない。ところがそれが実際あったのである。森山はその眼ではっきり見たのだから、まちがいない。

その日森山は二階からエレベーターに乗った。エレベーターの中は彼一人であった。エレベーターは上昇気流のように昇りはじめた。途中から誰も乗らない。だからエレベーターのかすかな震動に身を任せていると、まるで無人のビルの中を上昇しているようで、不安に感じた。広いビルの中でまったく人に出逢わなかったりすると、無人のビルにいるのではないかと錯覚することがあるが、いま森山がエレベーターの中で感じている気持がそれであった。

エレベーターは五階で止った。エレベーターを降りる。廊下は右と左に分かれている。森山は廊下を右に曲った。そしてしばらくすると、また右に曲った。

曲った瞬間、その男が、森山の少し前を歩いていたのである。だが、あまり突然にその男が眼

の前に現われたので、男があたかも廊下の壁の中から突然湧き出てきて、森山の前に立ちはだかったのではないかと思われた。だが、壁の中から人間が湧き出ることなんて、あろう筈がない。するとこの男はいったい何処から来たのであろう。

エレベーターは三台並んでいたから、森山が乗ったのとは別のエレベーターから降りたのかもしれない。森山が降りる少し前にエレベーターから降り、廊下を曲った時に森山が追いついたのにちがいない。だが考えてみれば、必ずしもエレベーターから降りたとも限らないのである。廊下の両側にはびっしりと事務室が並んでいるのだから、男はその事務室から出てきたとも考えられる。エレベーターに乗るときも一人、エレベーターの中でも一人、エレベーターを降りたときも一人、そして廊下を歩いている時も一人で、無人のビルを歩いているような錯覚に陥っているとき、突然男の姿が現われたので、男が壁の中から湧き出たような幻覚にとらわれたのだった。

しかしこの八階建てのビルは、無人ビルでもなんでもない。八階の各フロアーでは、刻々と流れこんでくる仕事の洪水を正確に処理している、大東銀行の本部であった。ドアの内側ではワイシャツ姿のおびただしい人間が、パソコンの画面に見入り、オペレーションに指先をせわしく動かし、電話をかけたりして働いており、ドアを開ければその仕事ぶりの熱気が、廊下にむかって乱気流のように溢れ出てくるのだった。それは森山がこれから書類を届けに行こうとしている外国部でも例外ではなかった。それなのにビルの廊下というものは、どうしてこうも静かなのであろうか。

森山はその男をまるで尾行するような恰好で、少し距離をおいて歩いていった。すると、廊下を三分の二ぐらいまで来たときだった。男は左手にある室へと入ってしまった。

（やっぱりあの部屋の男だった……）

黒い背広をいつも着て、痩せ型で、背が高いのでいくぶん猫背に見える、足早やに歩くその男を、森山は知っていた。調査部の次長だった。知っているといっても二人の所属する部は違っていたし、また次長の年令は森山より十歳以上も上であったから、個人的な面識があるわけではなく、たんに森山の方で知っているというにすぎなかった。

その調査次長がその部屋へ入るのを、森山はこれまでに数回見たことがある。調査部の部屋は六階なのに、何の用事でわざわざ五階のこの部屋へ来るのであろうか。もちろん調査部の次長が、調査部以外の室へ入ってはいけないということはない。用件によっては融資部へも経理部へも、また重役室へも行くだろう。本部の中ではいつも何処かで会議が開かれていたから、そこへ出席することもあるだろう。

だがいま調査部次長が入っていった室に、森山が特別関心を持っていたのは、それが森山にとって謎の室であったからである。その室のドアには表示が何もなかった。表示がないということは、空室を意味する。だが、実はその室は空室ではないのである。空室を装った室の中で、調査部次長を中心とした何人かの人間が、秘かに何事かをやっているのを森山は知っていた。

森山はドアの前まで歩いていった。だがどうしたことか、いつもはそこは『表示のないドア』なのに、今日は「融資部企画課」と書かれているではないか。

「おかしいな。ドアを一つ間違えたか？」

森山は自分のうかつさに焦立ちながら、その先のドアへと進んだ。しかし次に現われたのも『表示のないドア』ではなくて、「外国部総務課」と書いたドアだった。

（おかしいな……）

不意に混乱が森山を襲った。

『表示のない室』は、「融資部企画課」と「外国部総務課」の間にある筈だった。だからドアの表示は、

融資部企画課
表示なし
外国部総務課

という順序で並んでいなくてはならないのである。それが『表示なし』のドアがなくて、いきなり融資部企画課から外国部総務課のドアになってしまったのである。

森山はうろたえた。これでは室が一つ消えてしまったことになる。だが、部屋がなくなってしまうなんて馬鹿なことはありえない。すると自分の眼が突然狂ってしまったのだろうか。それともそのような室はもともと無いのに、森山が勝手に一人で在るのだと思いこんでいたのだろうか。だが森山はすぐ単純な思い違いであることに気がついた。『表示のない室』は、融資部企画課と外国部総務課の間ではなくて、実は外国部総務課の先にあったのだ。

そこで外国部総務課の次のドアを調べてみた。しかし期待に反して、次は外国部渉外課、外国部事務課とつづいて、ついに『表示のないドア』は見つからぬままに、壁に突き当ってしまったのである。

（おかしいな……、外国部総務課の先ではなくて、手前だったのか……）

森山は廊下を走るようにして融資部の方へと戻った。

しかし現れたドアは、融資部企画課、融資部第一課、融資部第二課、融資部第三課、融資部第四課とつづき、『表示のないドア』はついに現われなかった。

（やっぱり無い……）

森山は眼の前にまっすぐに伸びる廊下をぼんやりと眺めて呟いた。

（あの室が消えてしまった……）

しかしビルの中から突然室が消えてしまうなんてことは、ありえない。落着けと、森山は自分に言いきかせた。

考えられることは融資部と外国部とが最近、部屋の模様がえを行って、どちらかがあの『表示のない室』を使っているのではないか。そうだ、絶対そうに違いない。そうすると、さっき森山が一番最初に立ち止まった室のドアには融資部企画課と書いてあったが、実はそれが『表示のない室』だったのである。

（なんだ馬鹿馬鹿しい。俺はすこし頭がどうかしているぞ。こんな簡単なことに今まで気がつかなかったなんて……）

『表示のない室』が塞がったということは、代りにどこかの課が一つふえたことになる。それはどんな課なのか。森山はもう一度廊下を戻りながら、ドアの表示を再確認してみた。しかし融資部はこれまで通り五つの課、外国部は三つの課と従来のままで、新しい課など増えていなかった。ということは、やはり『表示のない室』が消えてしまったことになる。こうしてビルの中から部屋が一つ消えてしまうという、考えられないことが実際起きたのである。

森山は混乱というよりも、茫然となった。そして部屋を呑みこんでしまった長い廊下を、巨大な蛙を呑みこんだ蛇の腹のように眺めた。

さて、室が消えてしまったということになると、その中へ入っていったさっきの調査部次長はどうなったのであろうか。

調査部次長はいつまでたっても融資部企画課の室から出てこなかった。森山は思いきって融資部企画課のドアを押してみた。そして室の中を隅から隅までていねいに見渡した。しかし調査部次長は見えなかった。森山は入口近くに坐っている受付の女子行員に、

「調査部の次長さんがいま入ってこられたと思うのですが」

「いいえ、さっきから誰も来ません」

森山はあわてて廊下へ戻った。

やはり調査部次長もあの『表示のない室』に入り、室といっしょに消えてしまったのである。

(二)

昼食のあと、森山はきまってコーヒーを飲む。それが一番のたのしみである。そのため午前中はできるだけコーヒーを飲まないようにしている。昼食後のコーヒーをより美味にするためである。午前中我慢に我慢を重ねていた胃の中へ流し込むコーヒーの味は、胃の隅々にしみ通って甘くしびれ、森山の身体は光の海へ吸いこまれるように恍惚となった。

八階の行員食堂の隣は休憩室になっていて、その一隅にコーヒーショップが出店していた。値

段が安い上に、勤務時間中でも自由に飲みに来られたから、結構繁昌していた。

昼食後のコーヒーは、森山はだいたいこのコーヒーショップを利用していた。だが、最近とくにここを意識的に利用するようにしていたのは、あの『表示のない室』についての情報を、このコーヒーショップのボーイから探ろうとしていたからだった。

森山は昼食のオムライスを平らげると、コーヒーショップの方へ歩いていった。カウンターの中で白い帽子をかぶったボーイがコーヒーを注いでいるのが遠くから見えた。が、カウンターに近づいて、おやと思った。それは昨日までのボーイではなく、新しいボーイだったからである。

森山はコーヒーを飲み終ると、

「ボーイさんが変ったんだね」

「はあ……」

一瞬ボーイは戸まどったが、すぐ商売用の笑顔になって、

「引きつづきよろしくお願いします」

「前のボーイさん、どうしたの？」

「はあ、昨日で……」

と、あいまいな言葉になり、

「やめたの？」

「ええ、実は」

ボーイはちょっと声を落して、

「居なくなったのです。昨日、急に居なくなったのです。やめるともなんとも言ってなかったん

ですが、行方不明……、最近流行の蒸発かもしれないって、僕たちは言っているんですが……。それで僕に代ったのです」

「へーっ、蒸発ねぇ……」

居なくなったと聞いたとき、とっさに森山の頭に、消えた『表示のない室』のことが浮かんだ。ボーイは『表示のない室』といっしょに、消えてしまったのではないか。たしかにあのボーイは、あの室の秘密を知りすぎていた。

そう言えば森山が『表示のない室』に関心を持ちはじめたのは、あのボーイが勤めるようになった頃と一致していた。ここのコーヒーショップのボーイは、不思議とよく変った。給料が安いのか、それとも夕方になると集金に顔を見せるマスターの人使いが荒いためか、少し顔見知りになるとボーイは変ってしまった。だからあのボーイが来たときも、

「ああ、また変ったな」

という程度の関心しか森山にはなかったが、ただ凄いように蒼白な顔が印象に残った。

そして森山が『表示のない室』を気にし出したのも、その頃であった。だが、このビルの中に一時的に空室が出ることは始終あった。

だが何回その前を通っても、いつもそこが空室なのが、森山には次第に不自然に思われてきたのだった。ビルが狭くなった、室がないと言いながら、どうしてあの室だけがいつまでも空室なのだろう、そんな疑問が森山を捉えはじめた。

しかし、やがてあの室が、空室らしく見えながら、本当は空室でないことがわかってきた。室

の中では、何かがひそかに行われていた。そこで森山がある日、あの室の前をわざとゆっくり歩いて室の中を窺ってみると、たしかにくもりガラスの内側に黒い人影が二人ばかり坐っているのが見えた。そしてその後も気をつけていると、ときどき人影がすっと吸いこまれるようにその室へ入り、また出てきては足早に廊下の角を曲るのを見かけるのであった。

だが出入りする人間に注意していると、その顔ぶれの尋常でないのが問題だった。まず部長以上でなくては出入りしなかった。融資部長や経理部長ばかりでなく、人事部長までが顔を出すこともある。また常務取締役や専務取締役も出入りし、時には頭取や副頭取が現われることもあった。しかしどんな用件があるにしろ、頭取や副頭取がそんな一般の事務室へ出向くのは異例であった。用事があれば呼びつければよい。どう考えても只事ではない。

誰にも知られてはならないことが、そこでひそかに行われているにちがいない。銀行の秘密。経営の秘密。それはいったい何なのだろう。そしてもしその秘密が実現したとすれば、いったいこの銀行に何が起るのだろうか。銀行で働いている何万人という行員は、どうなるのだろう。森山は不安になった。

そんなある朝、森山は廊下で、盆にのせたコーヒーを運んでいる、顔が蒼白なボーイとすれ違ったのである。

（こんな朝早くからコーヒーを注文するのはどこの部だろう）

と、振返ってボーイの行先を見ていると、あの『表示のない室』へ入っていったのであった。

森山は一つの発見をした。誰もが近づけないあの室へ、近づける人間が一人いた。それはあのボーイである。

翌日から森山はボーイに意識的に接近した。昼休みのコーヒーは欠かさずコーヒーショップで飲むだけでなく、午後の四時前後になるとそっと洗面所に立つふりをして、コーヒーショップに上っていった。その時間帯になるとさすがに人影はまばらで、ボーイとゆっくり話すことができた。

ボーイもそれほど室の内部の様子をくわしく知っているわけではなかったが、それでも森山はボーイの口から室の様子をだいぶ知ることができた。室に入ると、すぐ三枚の衝立が眼隠しのために置かれているという。だから内部は見えない。もちろん衝立の中へ入ることはできない。ボーイがドアを開けると、それを合図のように、衝立の向うでの話し声はピタリと止まる。だから何が話されていたのかはわからない。一度ノックをせずにドアを開けて、ひどく叱られたことがあった。それ以来ボーイはドアを開けるとき、必ず、

「コーヒーをお持ちいたしました」

と声をかけることにしていた。すると中から出てきた一人が衝立の横から両手を差出し、ボーイはその手にお盆ごとコーヒーを渡すのであった。

そんな具合なので、室の中には果して何人いるのか見当がつかないのだったが、コーヒーの注文がいつも五つなので、常駐しているのは多分五人ではないか、そして五人のメンバーのリーダーが調査部次長であるらしい、というのがボーイの推測であった。

コーヒーの注文はいつも電話でかかってきた。するとある日、注文が五つなのか、七つなのか、数をわすれてしまったことがあった。いつも注文は五つなので、そのつもりでいたのだが、コーヒーを入れる段になって、どうも七つと言われたような気がしてならなかった。そこで電話で確

認してみようと、行内電話帳を調べたが、どこを探してもあの室の電話番号が見当らなかった。電話交換手を呼び出して聞いてみても、

「あの部屋には電話はありません」

という返事。おかしいな。銀行の本部の中で、電話のない室なんてありえないではないか。それとも用心して携帯電話でかけているのか。

そこである日、思いきって衝立と衝立の間のわずかな隙間から室の内部を覗いてみると、正面のスチールデスクの上には電話器がちゃんと載っているではないか。とすると、それは行内電話帳にものせていない、特定の人間だけが使う隠し電話にちがいない。

そんなことから次第にボーイもこの室の秘密めいた雰囲気に関心を深めていった。コーヒーを運ぶたびに少しずつ室の様子をさぐり、その断片的な知識をつなぎ合わせていくと、さして広くない室のことであるから、おおよその見当ついてきた。机は五つ並んでいた。毎回運ぶコーヒーの数と同じ数である。その横には会議用のテーブルがあり、衝立の裏側にあたる場所には紺色の応接セットが置かれていた。ボーイがコーヒーを運んでいくとき、彼等はだいたい応接セットに思い思いの姿勢で腰掛けて、タバコを吸っていた。机の上は時に書類が山積みになっていることもあったが、ほとんど何も載っていない場合が多かった。室の隅には鍵のかかる大きなロッカーが二つあり、その中に秘密の書類が入っているのかもしれなかった。

以上が森山がボーイを通して掴んだ概略であった。

さて、森山が最後にこのボーイと会ったのは、昨日の午後だった。その時ボーイは森山に変な

話をした。

その日もボーイはコーヒーを五つ持って行ったが、彼等はよほど興奮していたとみえ、ボーイが衝立の横からコーヒーを差し入れたときも、話をやめなかった。

「すると、このプロジェクトが終れば、我々は消されてしまうのか……」

そんなカン高い声が聞こえてきた。

「そうだ。よく昔の築城の秘話にあるじゃないか。殿様が城の中に秘密の仕掛けを作る。城が出来上る。秘密を守るために、大工たちはバッサリ打首。それと同じ……」

「よせよ、わるい冗談。そんなこと絶対あってたまるものか……」

するとボーイが居るのに気がついて、

「おい、話をやめて、コーヒーだ、コーヒー……」

話声はおびえたように、ぴたりと止った。

ボーイは『聞いてはならないことを聞いてしまった』と森山に語ると、コーヒーの皿を両手でくるくる廻しながら拭いた。それは見えない恐怖を一生懸命に振りはらっているかのように見えた。

そのボーイが突然いなくなったのである。たしかにボーイは秘密を知りすぎたきらいがある。こうして大東銀行の本部から『表示のない室』と調査部次長が消え、コーヒーショップのボーイも消えてしまったのだった。

(三)

消えた室のことが、森山の中で病後の微熱のように尾を引いていた。ときどき五階へ行ってたしかめてみるのだが、いったん消えた室はそこには無かった。

とすると、調査部次長はどこへ行ってしまったのだろうか。案外、森山の知らないうちに調査部の室に戻っているのかもしれない。

そう思った森山は、ある日六階の調査部の室までたしかめに行った。調査部長の室に、部長と次長は机を並べているはずだった。だが、その室へどうやって入ったらいいのだろう。森山は調査部長とはまったく面識がないし、また特別の用事もない。調査部長が留守であってくれればいいと思った。だが、もし調査部長が室に居て、視線が合ったらどうしよう。しかし、それはその時のこと、「すみません、室をまちがえました」とか何とかいって、ごまかしてしまえばいい。

森山は覚悟を決めてドアを押した。幸い調査部長は居なかった。その横には次長の机が並んでいた。しかしその机も空席で、期待していた調査部次長は坐っていなかった。机の上には電話器がポツンと載っているだけで、他には何も載っていない。それはすでに長い間机が仕事に使われていないことを物語っていた。

森山はそろそろとドアを閉めた。

やはり調査部次長も消えてしまった。だが本当に消えてしまったのなら、蒸発とか何とか騒ぐはずである。しかしそんなニュースは聞かない。ということは、やはりどこかに居るということ

になる。『天国への階段』という言葉を森山は思い出した。天国への階段。そうだ、天国への階段。五階の廊下のあの場所から、きっと『表示のない室』への階段があるのにちがいない。その見えない階段を登っていくと、そこにきっとあの『表示のない室』があるのだ。そこに調査部次長は仲間といっしょに居る。そうにちがいないと森山は思った。

しかし、それにしても調査部次長が消えたということを、もっと確実に知る方法はないものか。自宅へ電話で探りを入れてみたらどうだろう。これはうまい考えだと森山は思った。電話口へはまず奥さんが出るだろうから、こちらはデタラメの名前を言い、調査部次長が家に帰っていなければ、「後ほどまたお電話します」と言って切ってしまえばいい。またもし帰宅していれば、奥さんが次長を呼びに行っている間に、電話を切ってしまえばいい。いずれにしても家に帰っているか、どうかは、確認できるわけである。

森山は行員名簿をめくって、調査部次長の自宅の電話番号をすばやくメモした。そして夕方、帰宅時間を見はからって電話をかけた。

「はい、若松でございます」

次長の奥さんの声にちがいない。

「夜ぶんにお電話して申しわけありませんが、次長さんはもうお帰りでしょうか」

「はい、帰っておりますが……、どちら様でしょうか」

「杉野と申します」

偽の名前を言う心の抵抗を押し切って、森山は一気に言った。

「いつも主人がお世話になっておりまして……、ちょっとお待ちくださいませ」

奥さんが電話口を離れると、受話器の奥は急に音がなくなり、真空状態のようになった。

(あなた、お電話……)

(どこから)

(杉野さんといっておりますが……)

(杉野？　どこの人？　銀行の人かな)

(あら、銀行の方ではないのですか。わたし、てっきり銀行の方だと思って……、とにかくお電話口に出てくださいな)

次長は首をかしげる。立上って居間を出る。電話口へ歩いてくる。やがてその近づく気配のあわただしさが、受話器ごしに森山に伝わってくる。森山は急に息苦しくなって、電話を切ってしまおうと思った。次長は家に帰っている。それがわかったから、もうこれでいい。早くしないと次長が電話口に出てしまう。ついに次長は受話器を手に取った。

「もしもし、もしもし……」

電話の声は意外に明瞭で、まるで受話器の奥から森山は見られているような気がした。

「もしもし、もしもし……」

引きつづき次長の声。もう逃げ出すよりほかに手がなかった。森山は抛り出すように電話を切った。『おかしな電話だな』と不機嫌な顔で電話口に立っている調査部次長の姿が、森山の瞼の裏にあざやかに浮かび上った。

(四)

ある日森山は不思議なことを発見した。

昼休み。日光浴でもしようかと戸外に出た。ビルから一歩外に出ると空気の匂いが嵐のように襲い、日光がビルの壁面を駆け下りて、ビル群の谷間できらめき泡だっていた。赤と黄色の花が歩道に植えられ、そこだけが春のスポットライトを浴びたように、華やかに光っていた。

広場とは名ばかりの広場の一角にくると、三色菫が植えこまれた花壇の横に立って、ビルの洪水に眼を向けると、まっ正面に森山の銀行が横たわっていた。森山は毎日あのビルの中で働いているのだから、階段の隅々、食堂、トイレ、非常口、一階から二階へ、二階から三階への迷路のような近道など、ビルの内部のことなら知らないことはないと思っていた。それはまるで自分の内臓のことなら自分が一番よく知っていると思いこんでいるのと同じだった。

森山はしばらく自分のビルの南側面を観察するように眺めていたが、

(おや……?)

五階のある一つの室が、ほかの室とちがって、深々とカーテンを下ろしているのに気づいたのである。だが窓にカーテンが引いてあることは、別に不思議なことではない。しかしどの室も全部カーテンを開け放ち、窓いっぱい春の光を受け入れているのに、その窓だけが厚手のカーテンを深々と下しているのはちょっと異例だった。

森山はもう一度ビル全体を見直してみた。カーテンを下した室は二つあり、日光に輝いたビル

の壁面の中で、二つの部屋だけが黒く凹んだ眼窩のように見えた。一つの窓は三階の東南の角。それは頭取室である。年老いた頭取の身体は、この春の陽ざしさえも強すぎるのであろうか。秘書役が厚いカーテンを下して、南側からの直射日光を遮っているのにちがいない。東側の窓だけから入る明るみの中で、昼食後の一刻、白髪の頭取が静かに茶を飲んでいる姿を森山は想像した。

もう一つが五階の室だった。五階は融資部と外国部のフロアーであり、直射日光は避けなくてはならないような室は、ないはずだった。あれはいったいどの室だろう。その室は左の端から四つ目の室である。とすると、と森山は小声で、

(外国部事務課、外国部渉外課、外国部総務課、融資部企画課……)

と、課の名前を順番に言ってみた。するとそれは融資部企画課になるのだった。

(なぜ融資部企画課が黒いカーテンを?)

そこで今度は右の端から室の名前を言ってみた。

(融資部第四課、融資部第三課、融資部第二課、融資部第一課、融資部企画課、外国部総務課……)

カーテンの室は外国部総務課となるのだった。

すなわち、左から数えると融資部企画課の室になるのに、右から数えると外国部総務課になるのである。森山はもう一度、右と左から言い直してみた。しかし間違いない。一つだけ喰い違うのである。喰い違うということは、森山が唱えている室の名前(八室)よりも、眼の前のビルの窓(九室)の方が、一つ多いということである。

瞬間、森山の頭に『表示のない室』のことがひらめいた。一つ多いのは、あの『表示のない室』がそこにあるからだ。森山は『表示のない室』を、融資部企画課と外国部総務課の間に入れてみ

た。すると室の数は九つと、ぴったり合うのであった。

消えてしまった『表示のない室』が、深々と黒いカーテンを下ろし、春の光を避けるようにそこに立っていたのである。

融資部第四課
融資部第三課
融資部第二課
融資部第一課
融資部企画課
黒いカーテン（表示のない室）
外国部総務課
外国部渉外課
外国部事務課

ビルの内部から調べたときは、『表示のない室』は消えてしまっていた。しかしビルの外側から見ると、カーテンを顔に垂らして眼の前に立っていた。やはりあの室はあったのだ。

森山は『表示のない室』と、かくれんぼをしているような気がした。森山が五階に行くと『表示のない室』は隠れてしまい、森山がビルの外に出ると、姿を現わす。それが本当かどうかをたしかめるには、森山の身体が二つに割れて、この広場と五階の廊下の両方を同時にたしかめるより外に方法がないが、そんなことが出来ない以上、そのかくれんぼを認める外はなかった。

ひょっとするとビルの五階の廊下は、アコーデオンのように伸びたり縮んだりするのかもしれ

なかった。森山が五階に足をふみ入れると、スーッと縮まって、『表示のない室』を壁の中に畳みこんでしまい、森山がビルの外に出るやいなや、ビルの蛇腹が伸びて『表示のない室』は廊下に復元するのである。

森山は眼の前のビルが、急に巨大な軟体動物のように見えてきた。伸縮自在なその軟体動物は春の陽ざしを浴びながら、ものうげに巨体を伸ばしたり縮めたりしており、その緩慢なリズムにあわせて『表示のない室』が、体内で現われたり消えたりしているのだ。

そのとき森山の頭上を黒い影がよ切った。それは地上を流れる鳥の影のようだった。しかしそれは影ではなくて、黒い背広の男だった。

顔を上ると、そこには調査部次長が立っていた。森山はビルを眺めていた眼で急に眼の前の人間を見上げたので、瞬間焦点がぼけて、調査部次長は空気中から湧き出た黒い影のように思えた。次長は無表情な顔で視線を森山の顔に落して、

（先日の電話は何の用事だったのかね……）

（……）

森山は絶句して、ただ魔法使いでも眺めるように、調査部次長を眺めていた。

どうしてあの電話をかけたのが森山だということを、知っているのだろう……。

だが、知っているのは当然のようにも思えた。あの夜、きっと調査部次長は受話器の奥から森山を眺めていたのにちがいない。いまじっと森山を見下しているこの眼つきで、電話の奥から森山を見ていたのであろう。

調査部次長はそのまま、近くのレストランへ飛鳥のように入っていった。

あとがき

まんじは、その源流に昭和二十七年創刊の「作家群」という文芸同人誌があり、休刊となっていたものを継承して昭和五十六年創刊され、年四回規則正しく発行されながら、純文芸誌から現在は綜合誌的な様相を示している。

今回特別号として一一〇号を発行するに際し、田寺怜葦さんから「無尽蔵」という題名の表紙絵と、絵のテーマとして「創造力は一羽の鳥　自由に世界を飛び　ありふれた草むらの中にも黄金の実を見いだす」という詩をお寄せいただいた。喜びに堪えない。

最近経済学や社会学でソーシャルキャピタル（社会関係資本）と言う考えを耳にする。これは社会的な交流、人と人との信頼関係、社会参加の度合いなどを数値化し、絆の価値をはかるものであるが、ソーシャルキャピタル極めて豊富な、わがまんじ集団は、会運営の経済負担面平等もあり、それが個人間の信頼関係を育み、協調した文筆活動を促進している。

言葉を変えれば様々な環境で育った人達が、それぞれの長所を発揮しながら相互に磨き合っていく、答えは何時も一つで、その答え或いは答えを苦労せずに導き出す方法のみを追い求めて行くような人とは無縁である集団であり続けている。

我々をこのような集団に育んでくださった作家群以来の数多の先輩同人各位と、維持会員の方々に深甚なる謝意を表し、三戸岡さんが一〇〇号記念あとがきで述べられた「持続は力なり」を基として、これからも挑戦を続けることといたしたい。

平成二十年十一月一日

中山喬央

まんじ110号記念

平成二十年十一月一日（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　中山　喬央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）
（事務局）郵便番号二二三―〇〇五六
横浜市港北区新吉田町東五丁目七六―三五
太田善朗方
電話・ＦＡＸ　〇四五（五四四）五九四七
（郵便振替口座）No.〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

（印刷製本）株式会社　栄光出版社
郵便番号　一四〇―〇〇〇二
東京都品川区東品川一―三七―五
電　話　（〇三）三四七一―一二三五
ＦＡＸ　（〇三）三四七一―一二三七

表紙の絵について
題名「無尽蔵」　田寺怜葦（たでられい）画